
I'll have Sherbet!

九曜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I'll have Sherbet!

【Nコード】

N0860U

【作者名】

九曜

【あらすじ】

春からひとり暮らしをするはずだった高校2年生の僕は、何の冗談か、なりゆきによりひとつ年下の女の子と同居することになってしまった。今年ももっと静かに学校生活を送りたかったのだが……。家でドタドタ、学校（あっち）でバタバタ。常に冷静な弓月くんと、とびきりの美少女なのにちょっとHな佐伯さんが繰り広げる、同棲&学園ラブコメディ。

1・「おもしろくなってきたわ」と彼女は言った

春の足音が聞こえてきた3月の下旬。

新年度から高校2年生になる僕は、本日よりひとり暮らしをはじめめることになっていた。

受験勉強を勝ち抜き、今通っている有名私立校である水の森高校に合格したが、通学は県をまたいで電車で2時間弱。さすがにこれでは時間がかかりすぎて、生活をいろいろと圧迫してしまう。なので、学校の近くでひとり暮らしをしたいと、両親を説得した。

時間はかかったものの何とか親を説き伏せ、今日のこの記念すべき日を迎えたわけである。

学園都市。

それがこの街の名前だ。

同じ名前の駅を中心にかなりの数の中学と高校、大学が存在している。また、街自体も景観を重視してデザインされているらしく、幅の広い道路と余裕のある歩道、それを彩る街路樹など、小奇麗な街だ。まあ、少々田舎で、むりやり拓いた感もないではないけど。

この街に僕はスクーターでやってきた。

勿論、遠くて時間もかかった。が、実家で愛車に埃をかぶせておくよりは、手元において足として使ったほうがいいだろう。

今日から僕の住まいとなるマンションが見えてきた。白壁の洒落た建物。2階建て。この2階が僕の部屋だ。

すでに引越しのトラックが着いていた。

よく見ると、それとは別の業者のトラックもあった。奇しくも同じ日に誰かが、このマンションに入るようだ。

「今日はよろしくお願いします」

僕はスクーターを止め、ヘルメットを脱いで、業者に挨拶をした。

……が。

「あ、いや、それはいいんだけど……」

引越し屋の責任者らしきおじさんが歯切れ悪く応じた。

「先客がいるんだよ、これが」

「そのようですね」

僕は別の業者のトラックに視線をやった。

「そうじゃなくて、兄ちゃんの部屋なんだ、その先客っていうのが」
「は？」

僕は改めてマンションを見た。もうひとつの引越し屋は、僕が入る予定の部屋にせつせと荷物を運んでいるらしい。

「ちょ、ちよつとすみませんっ」

僕はすぐさま走り出していた。

マンションの階段を駆け上がる。途中、業者のロゴ入りの作業服を着た男の人とすれ違った。

2階に上がるとふたつあるドアのうち開け放たれたままになっている方に入った。そこが今まさに荷物の搬入が行われている部屋であり、今日から僕の住まいになるはずの部屋だ。

「すみませーん」

声をかけながら玄関を上がる。

と、そこにははつとするような見目麗しい女の子がいた。美少女と言っても差し支えないだろう。

歳は僕と同じくらいか。春らしい明るい色のワンピースに身を包んでいる。長い髪は明るい茶髪。でも、ブラウン一色ではなく、よく見れば絶妙な濃淡がつけられていた。

彼女はリビングに立って運ばれてくる荷物の置き場所を業者に指示していたが、僕に気づき、こちらを向いた。

ぱっちり大きな目に、黒目がちな瞳。

「はい？」

そして、澄んだ声音。

彼女は首を傾げながら、短く返した。

「えっと、ごめん。君は？」

僕は彼女の容姿に目を奪われながら、問いを投げかけた。

「わたしは佐伯貴理華。今日ここに越してきたの。あなたは近所の人？」

「いや、僕もここに引っ越してきたんです」

「ここ？」

「そう。ここ。この部屋です」

どうにも頭の痛くなる事態に発展しそうな予感を感じる。

僕らはしばらく黙って互いの顔を見て、

そうしてから先に口を開いたのは彼女、佐伯さんのほうだった。

「そんなはずないわ。ちゃんと下見までして決めたのよ」

「僕も同じです」

下見にきたのは確かにこの部屋だった。

「わかりました。不動産屋に確認してみましょう」

僕は携帯電話をポケットから取り出した。

10分後、僕らはリビングで頭を抱えていた。

不動産屋に問い合わせたところ、どうやら何かの手違いで僕と佐伯さんの両方と契約してしまったらしい。

「いったいどんな手違いだ？」

「……聞いても無駄だろうけど。」

そんなわけで今、僕らはリビングで話し合いをしていた。手には近くの自動販売機で買ってきた缶コーヒー。ちょっと気持ちが落ち着いてきた。

ふたつの引越し屋には、一旦外で待つてもらっている。

リビングにはほとんど何もなかった。ダイニングキッチンの側には冷蔵庫や電子レンジといったものがいくつか運び込まれているが、今はストップ。何もないリビングで、僕はベランダに続く全面窓にもたれ、佐伯さんは段ボール箱のひとつに腰をかけていた。

「ねえ、名前は？」

佐伯さんが訊いてきた。そう言えばまだ名乗っていなかったな。

「僕は弓月恭嗣です」

「『ゆ』と『き』がふたつづつ。それに『つ』と『づ』。面白い名前」

「そう言う君は『き』が連なってますね」

佐伯さんは自己紹介によると、この春から高校1年生なのだという。僕のほうが年上だ。

「さて、どうするか……」

当面の問題として、この部屋にどちらが入居するかを話し合わなくてはいけない。不動産屋が当事者同士で決めてくれと言ったのだ。勿論こちらの手違いだから、弾き出されたほうのために責任を持って別の部屋を探すとも言っていたが……。

「佐伯さん。ひとまず実家に戻ることは？」

「それはちょっと無理だと思うな」

と、身の上を話しはじめる。

曰く、彼女は少し前までアメリカに住んでいた帰国子女なのだそう。このたび父親のアメリカ勤務も終わり、日本へ帰ってくるようになったのだが、でも、それは今年の夏の話。彼女は両親よりもひと足早く帰国したのだ。確かに中途半端な時期に帰国するよりは、今が区切りとしては丁度いいだろう。

というわけで、戻るも何も彼女にはそもそも戻るところがない。

「弓月くんは？」

「僕は……」

正直、せっかく掴みかけたひとり暮らしの機会を逃したくない。それに加えて実は、他の部屋を探すという不動産屋の言葉はまったく期待していなかった。ここは学園都市。この春からひとり暮らしをはじめめる学生も多いだろう時期に、未だ良い物件が残っているとは思えないのだ。僕だってかなり前から部屋探しをはじめたのだから。

「あ、いいこと思いついた！」

不意に彼女は大きな瞳を輝かせて叫んだ。

「フラットシェア！」

「は？」

「日本じゃルームシェアって言ったほうがいいのかな？」

「ようやく彼女の言わんとしていることがわかってきた。」

「ちよっと待ってください」

「うづん、待たない。だってそうじゃない。わたしも弓月くんもここを譲りたくない。だったら結論はひとつよね」

佐伯さんはぴよんと飛び跳ねるようにして立ち上がった。

「部屋もふたつあるわ。それをそれぞれひと部屋ずつ使って、このリビングとキッチンを共用スペースにするの。ね、いいアイデアだと思わない？」

「……」

確かにいろんな問題を一挙に解決する案ではあると思う。ただし、そこにはおおいに道徳的な問題がある。

が、しかし。

「おもしろくなってきたわ」

おそらく彼女は僕の問題提議に耳を貸すことはないだろう。

おおらかだ。

あまりにもおおらか過ぎる。アメリカみたいな国土の広いところに住んでいると、心もおおらかになるのだろうか。

その後は佐伯さんの独壇場だった。

やけにいきいきとしはじめた彼女は、自分と僕の荷物を見比べ、次々と共用スペースに置くものを決めていったのだ。

それぞれが用意してきたものには、重複するものがけっこうある。テレビや冷蔵庫からテーブルのようなものまで。それらを見比べていいほうを使うようにした。尤も、僕が持ってきたものは安ものばかりで、概ね彼女が用意したもののほうが立派だった。僕の側から採用されたものといえば、拘って選んだコーヒーマーカーくらいなものか。後はぜんぶ実家に送り返した。

こうしてなし崩し的に僕らのルームシェアが決まったのだった。

2・「お先にどうぞ」と僕は言った

共用スペースであるキッチンとリビングを整えるのに、結局、夕方までかかった。佐伯さんが「角度がダメ」とか「間隔が気に喰わない」とか、神経質なほど配置に拘ったからだ。僕ひとりならもっと早くすんだに違いない。

しかし、そのせいかとても落ち着いた雰囲気仕上がっていた。女の子だな。僕がぜんぶやっていたら、雑然とした空間になっていただろう。

僕は自室に入り、
そして、愕然とした。

部屋にはまったく荷解きされていない段ボール箱がいくつもあつたからだ。リビングのほうにかかりつきりで、私物には一切手をつけていなかったのだ。

「第2ラウンドだな……」
ぜんぶとは言わないまでも、せめて今日中に寝られるくらいにまでにはしないと。

……でも。

「一旦休憩だ」

僕は床に座り、段ボール箱にもたれた。足を伸ばし、深いため息を吐く。天井を仰ぎ見て、今日のことを振り返った。

新生活がはじまる記念すべき日。

でも、不動産屋は契約のダブルブッキング。

そこに降って湧いたルームシェアの話。

しかも、相手はとびきりの美少女ときた。

「美少女、ね……」

悪い冗談だ。

僕は再び暗澹たるため息を吐きそうになる。

と、そのとき、ドアがノックされた。

「はい」

答えておいて床から腰を上げる。

開いたドアからひよっこり姿を現したのは勿論、佐伯貴理華だ。

「弓月くん、休憩中？」

「さすがに疲れましたよ」

「じゃあさ、休憩がてら外に出ない？」

佐伯さんは期待に目を輝かせながら提案した。

「あと、何か食べないと」

「ああ、そう言えばお昼抜きでしたね」

午前中から食事もせずに、片づけにかかりつきりだった。それを改めて認識した途端、急にお腹が減ってくるのだから、人体とは不思議なものだ。

「じゃあ、行きますか」

「やったあ。案内よろしくっ」

彼女は飛び跳ねんばかりに喜んだ。

僕は倉庫のような部屋を出て、綺麗なリビングを抜けて玄関を出た。ふたりでマンションの階段を下っていく。

ひとまず学園都市の駅に向かうことにした。佐伯さんの見たいもののほとんどが駅前のショッピングセンターにあるからだ。電気屋も見たいと言っていたが、この辺の電気屋といえば郊外型の家電量販店しかなく、そこは駅とはまったく別方向なので、また日を改めることにした。

なお、その際の会話は以下の通り。

「弓月くんスクーターあるんでしょ？ それでふたり乗りしていけばいいじゃない。あっちもこっちも、ぱーっ」と

「スクーターのふたり乗りは法律で禁止されていますよ」

アメリカに住んでいたから日本の法律を知らないってわけではないだろうに。

僕たちは、まずはレストランに入った。

午後5時。

夕食には早いけど、昼食抜きだった僕らには丁度いい。

それぞれ注文をすませ、交替でドリンクバーに飲みものを取りに行く。僕はアイスコーヒーを、佐伯さんはメロンソーダを。

彼女がグラスを高く掲げた。

「では、今日はお疲れ様でしたー」

「お疲れ様です」

グラスを合わせて乾杯。

僕は喉を潤してから口を開いた。

「それにしてもいきなりルームシェアする羽目になるとは思いませんでしたよ」

「あ」

佐伯さんが驚いたように自分の口を掌で覆った。

「ごめん。嫌だった？　そう言えばちゃんと相談しなかったかも」

「……」

今さら何を。

「ここまでやっていて白紙に戻すわけにもいかないでしょう。僕はもう諦めてますよ」

それに彼女の話だと、夏には両親が帰国するわけだから、それまでの期間限定同居になる可能性だっておおいにある。

「それよりも問題は君のほうでしょう。いいんですか、今日会ったばかりの男とルームシェアなんて」

「んー。なんとなく弓月くんなら大丈夫かなって思った」

「根拠は？」

「直感」

「……信用されていると喜ぶべきか、舐められてると怒るべきか……」

苦笑いしか出てこない。

「佐伯さん、春休みの間の予定は？」

「特になし。4月2日の入学式が最初のイベントかな？」

普通にそんなところか。この辺の学校の入学式はたいてい4月2日だというのは、学園都市に関わる人間の基本的な知識だ。

ふと僕は目の前の女の子が、4月からどこの高校に通うのか知らないことに気づいた。

マンションを中心に徒歩の通学圏を想定してもいくつかの学校が候補に挙がるし、学園都市駅に出てそこからバスというアクセスまで含むと、ほぼすべての学校に可能性がある。

お嬢様学校として有名な茜台高校かもしれないし、看護の専門学校かもしれない。

「あ、そうだ」

僕の思考を遮って、佐伯さんが何かを思い出したように声を上げた。

「できたら弓月くんがこの辺りを案内してくれたら嬉しいかも」

「……」

「ダメ？」

彼女は小首を傾げながら尋ねる。キュートな仕草だ。

「ま、それくらいならいいでしょう」

僕とてここが地元というわけではないが、それでも高校に一年通い続けている分、佐伯さんよりは学園都市に詳しい。案内してあげるのが務めかもしれない。それに僕だって行っていないところがある。この休み中に見て回っておくのもいいだろう。

そこで注文したものが運ばれてきて、僕は半日ぶりにまっとうな食事を口にした。

食事を終わると、ショッピングモールを少し見て回り、それからスーパーに寄ってから帰路に着いた。

帰宅後は手つかずのままになっている第2ラウンドだ。

持ってくるものをかなり厳選したつもりだったけど、それでも荷解きにはけっこう時間がかかるものだ。

夜も更けてきた頃、夕方と同じようにドアがノックされた。
「どうぞ」

手が離せない状況だったので、作業をしながら返事をした。
ドアの開く音。

「弓月くん、お風呂沸いたよ」

背中では佐伯さんの声を聞く。

「お先にどうぞ。僕はもう少し片づけておきたいので」

「じゃあ、そうする。……覗くなよお？」

「覗きませんよ」

「む。素っ気ない反応。面白くないの」

「これくらいで動揺してたら、この先身が保たないでしょうからね」
特に佐伯貴理華という女の子は、どうもひと癖あるように思える。
そのまま作業を続けていたが、背後の人の気配が消えることはな
かった。

「どうかしましたか？」

まだ部屋の入り口に立っているらしい佐伯さんに問いかける。

「一緒に入る？」

「ぶっ」

さすがにこれには平常心を保てなかった。危つくつんのめって、
段ボール箱に頭から飛び込みそうになる。

振り返ると彼女は、してやったりとばかりに笑っていた。

「莫迦なこと言っていないで、早く入ってきなさい」

「はい」

逃げるようにして出ていった。まったく、何を考えているのやら。
いつか僕が変な気を起こしても知りませんよと。

今のやりとりは努めて頭から排除し、作業を続ける。

さて、かれこれ1時間ほどした頃だろうか、部屋を出てみるとリ
ビングに佐伯さんの姿はなかった。彼女の部屋のドアに目をやる。

たぶん部屋は無人。ということは、まだお風呂か。長風呂だな。女
の子ならこんなものなのだろうか。

リビングにはテレビとテーブル、それに座椅子がふたつある。僕のはリクライニングがついただけの単純なもの。佐伯さんのは肘掛けや回転機能までついた立派なものだ。

僕は自分の座椅子に腰を下ろした。

足を伸ばし、手を腹の上で組む。テレビは点けない。静寂の中で大きく息を吐いた。

コーヒーが飲みたいと思った。だけど時間が中途半端だ。たぶん今日中に飲み切れない。コーヒーを美味しく淹れるにはある程度まとまった量を作らないといけないし、余って翌日まで置いたものは味が落ちる。今日のところは我慢しておこう。

背後でリビングのドアの開く音がした。

「あ、ごめん。弓月くん、もしかして待ってた？」

「いえ、そういうわけではないですよ。ついさっきまで部屋で片づけをやっていましたから」

僕はそのままの姿勢で答えた。

「そう。よかった」

佐伯さんの声に軽い足音が重なる。部屋に入るようだ。その姿が僕の視界の隅に映ったとき。

「な……っ」

危うく僕は座椅子ごと後ろにひっくり返りそうになった。

彼女は体にバスタオルを巻いただけの姿だったのだ。

「なんて格好をしてるんですかっ」

「ご、ごめん」

佐伯さんは自室のドアに身を隠し、顔だけを覗かせながら謝った。濡れた髪と、わずかに見える肩と鎖骨が艶めかしい。

「家族と一緒に住んでたときの癖で。明日からちゃんと着替え持つてくから」

そう言つとドアはパタンと閉まった。

「……」

僕はけっこう動じない性格なんだけど、彼女という間は心の強度

を上げる必要があるそうだ。

3・「あ……」と僕は言った

4月2日の朝だった。

「弓月くん、モーニンッ」

未だベッドの中の僕を起こすのは、佐伯貴理華の元気な声。ここのところこうして佐伯さんが僕を起こしにくるのが日課になりつつあった。

時間をかけて瞼を開けると、彼女の顔が目の前にあった。僕の頭の左右に手を置き、覗き込むようにして見下ろしている。これもいつものこと。その顔は、笑顔のときもあれば、真剣な表情をしているときもある。日によって違う。

そして、今日はというと、とびきりの笑顔だった。

その笑顔のわけも気になるが、今はもっと気になることがあった。「佐伯さん、今何時ですか？」

僕の時間感覚が正しければ、いつも起こしにくる時間よりもかなり早いはずだ。

「8時前？」

やっぱり。

「早いです。なんでそんなに早いんですか？」

「だって今日は入学式だもん」

あ、そうか。そういえば4月2日だったな。

……が。

「どうぞ気をつけて行ってきてください。僕はもう少し寝てますから」

そんなこと僕には関係ない。僕は寝返りを打ち、彼女に背を向けることでそれを態度で示した。

「わたしの制服姿、見たくないの？」

「そんなもの学校が本格的にはじまれば、いくらでも見れますよ」
対する朝寝は、今この休み中にしかできない。

「むー。もういい。弓月くんに最初に見せようと思ったのにつ」
そう叩きつけるように言うと、佐伯さんはぱたぱたと部屋を出ていった。

僕は再び閉じていた目をぱちりと開けた。上体を起こして入り口を見る。閉じたドアは佐伯さんが去っていったことを示していた。見るくらい見てやればよかったかな……？

遠くに玄関の閉まる音をかすかに聞きながら、僕は少し反省した。

自責の念もあつてか、二度寝することができず、僕はすぐに起床した。

朝食は佐伯さんが準備してくれていた。後はトーストを焼いて、コーヒーを入れるだけだった。用意のいいことだ。

昼食は僕が作って、帰りを待っていてやろう。

そう思いながら淹れ立てのコーヒーを啜った。

昼前、自室で1年生のときに使った教科書を整理していると、佐伯さんが帰ってきた。

「たっだいまー」

「おかえりなさい」

部屋の中から声をかけてやる。

広げていた教科書を簡単に片づけてリビング出ると、丁度、彼女の部屋のドアが閉まるところだった。

結局、彼女の制服姿は見れなかった。

僕に見せたいんじゃないかなかったのだろうか。それとも朝の僕の態度にまだ腹を立てているのか。

しかし、しばらくして部屋から出てきた彼女は、

「あー、疲れたあ」

と、あっけらかんと言って、少なくとも怒っている様子は微塵も見せなかった。

僕は座椅子に座って、彼女を見上げる。

もう私服に着替えていた。ショートパンツにフード付きのパーカーだ。こうして改めて見ると、意外にスラリと長い脚をしているのがよくわかる。

「疲れたって言っても、入学式なんてただ座って聞いていればいいだけでしょくに」

「まあ、普通はそうなんだけどねー」

普通は？ 彼女の学校の場合は違うのだろうか。少なくとも僕の通う水の森高校では、座って聞いているだけの退屈な入学式でしかなかった。

ふと彼女の髪に白いものが乗っているのに気がついた。

「佐伯さん、頭に何かついてますよ」

「ん？ どれ？」

佐伯さんは頭のとっぺんに掌を乗せた。

「もつと左です。そっちじゃなくて反対」

僕が口で指示をし、それに従って彼女が髪を引っ張ったりしているのだが、なかなか上手く取れない。

「弓月くん、取って」

結局、佐伯さんは床にぺたりと座り込み、頭を僕のほうにずいと突き出してきた。髪が揺れて、甘い香りが漂ってきた。

ついていた白いものを取ってやる。

「桜の花びらです」

「あ、ほんとだ。服着替えたりしたのに、それでも取れなかったんだ」

「ずいぶん好かれましたね」

薄いピンク色の花びら。

学園都市には桜が多い。入学式のシーズンにはいつせいに花を咲かせ、街全体が祝福ムードになる。僕も去年の今頃、満開の桜の下を通過して入学式に臨んだものだ。

取った花びらを佐伯さんの掌に乗せてやる。

「佐伯さんは髪が綺麗だから」

「うん。よく言われる」

ブリーチなのかヘアマニキュアなのかは知らないが、佐伯さんの髪は綺麗な茶色。しかも、そこには絶妙な濃淡がついていて、それが光の加減で見せ方を変えるものだから見ていて飽きない。

「実はこの茶つちやい頭、天然なの」

「へえ……」

これはまた神秘的な。

「綺麗？」

佐伯さんが訊いてくる。

「綺麗です」

「そっか」

彼女は照れたように笑った。

「よし。これは取っところ」

我が家にやってきた桜の花びらを握り締め、立ち上がる。

「そんなもの取っておいてどうするんです？」

「いーのっ」

「君、小さい頃、まつぼっくりとかどんぐりを集めたりしてたでしょっ？」

絶対によくわからないものを収集していたタイプだな。

「い・い・のっ」

しかし、彼女は逆ギレ気味に言い捨てて、自分の部屋に消えていった。

本当にあんなものを取っておいてどうするつもりなのだろう……。

さらに一週間近くが過ぎ、ついに始業式の日がやってきた。

新年度のスタートが楽しみな気もするし、もう少し休みの中で怠惰な生活を享受していたい気もする。複雑な気持ちだ。

何はともあれ今日から高校2年生。

休みの間にクリーニングに出した制服に身を包み、リビングへ出る。

やや遅れて佐伯さんも自室から姿を現し、
そして、

「「あ………」」

僕らはふたり同時に短い声を上げた。

彼女はブレザーに赤いチエックのミニスカート。その下に伸びる
脚は黒いストッキングに包まれている。

僕はその制服に見覚えがあった。

毎日見てきた。

これからも毎日見るだろう。

それはまぎれもなく私立水の森高校の女子の制服だった。

「あ、弓月くんと同じ学校だったんだ」

「そのようですね………」

僕の口からもれるのは苦笑い。

残りの高校生活、絶対に大変なものになる　そんな予感があっ
た。

1・「僕は優しい人間ではありません」

1学期の最初、始業式の日。

僕と佐伯さんが実は同じ学校だったことが発覚した。

ひとまずふたり一緒に家を出る。玄関の施錠は僕がしたが、鍵はそれぞれひとつずつ持っている。

マンションの階段を下りる。僕は佐伯さんの後に続き、彼女の背中を見下ろしながら歩いた。マンションの階段は確かに広いとは言えないが、ふたり並べないほどではない。それでも僕が後ろを歩いているのは、単に足取りが重かったただけだろう。反対に佐伯さんは軽やかに跳ねるように下りていく。

表に出たところで、僕の足はぴたりと止まった。佐伯さんが振り返る。

「弓月くん、行かないの？」

「佐伯さん、やっぱり一緒に行くつもりですか？」

僕は問う。

「うん。ていうか、行き先が一緒なんだから、わざわざ別々に行くほうがおかしくない？」

尤もだ。

でも。

「悪いのですが、ここからはひとりで行ってください。僕もひとりでいきますので」

「えー、何それー。あ、もしかして、弓月くん、女の子と一緒に登校するのが恥ずかしかったりして」

「ご想像にお任せします」

にやにやと笑う佐伯さんの横をすり抜けて、僕はひとり先を急いだ。

「え、ちょっと、それって冷たくない？」

彼女が慌てて後をついてくる。僕は追いつかれまいと早足で歩い

た。

「もとより僕は優しい人間ではありません」

「そんなことない」

「僕はどういうわけか佐伯さんと違う学校だと思いついていました。でも、同じ学校に通うなら話は別です。あまり一緒にいないほうがいいでしょう」

「ねえ、理由は？」

「なおも食い下がる佐伯さん。」

「そのほうがいいからです」

「意味わかんない」

不貞腐れるように言った佐伯さんの声は、最初よりも少し離れていた。

僕は足を止め、振り返った。彼女も、一瞬びくつと体を振るわせながら、立ち止まった。案の定、少し距離が離れかけていた。

「もう一度言います。あまり僕に近づかないようにしてください」
そう言って僕は、佐伯さんの返事も聞かず、その反応も見ず、踵を返した。

私立水の森高校。

全国的にも有名な私立高校で、誰もが知っている国立や私立の大学にも毎年数名の生徒が合格している。

去年、僕はここに入学した。学業に関してはきちんとしていている。が、もっと別の方面で苦労した。主に通学と、他一点。通学に関してはこの春から解決している。

以上が僕と水の森の概略だ。

校門が見えてくると、中の騒がしさが僕のところまで伝わってきた。校門を入ったすぐのところでもクラス分けの紙が配られていて、皆それを見て誰と一緒にになった誰と別々になったと一喜一憂しているのだ。

僕もその紙を一枚貰った。

水の森は2年生で文系理系に分かれる。僕は理系を希望した。理系クラスは少なく、全8クラス中3クラスしかない。どうやら僕は2年1組らしい。

「さて、同じクラスなのは……」

「弓月君」

クラス表を眺めていると、名を呼ばれた。

顔を上げると気弱そうな眼鏡の男子生徒が立っていた。

「矢神」

やがみ・ひろ
矢神比呂。

去年のクラスメイトであり、そして、

「今年も同じクラスだね」

「そのようですね」

その関係は今年も続くらしい。

「俺もいるよ」

続けて寄ってきたのは滝沢だった。端正な顔に嫌味のないニヒルな笑みを浮かべている。

「前のクラスから一緒になったのは、男子では俺たちだけらしいな。ただでさえ少ない理系クラス希望者がみっつに分かれればそんなものか。」

「女子は雀さんに」

「矢神」

言いかけた矢神の言葉を、滝沢が遮った。

「あ、ご、ごめん……」

謝る矢神は誤魔化すように眼鏡を外して拭いた。

「滝沢、気を遣わなくていいですよ。矢神も。もう前のことですか」

矢神が言いかけ、滝沢が止めた名前。

それは、宝龍美ゆき（ほつりゆう・みゆき）。

誰もが目を奪われるような美貌の女子生徒の名前であり、去年の僕にとって特別な響きを持つ名前だった。

「さて、さつさと教室に入りましょうか」
僕はふたりを促し、昇降口へと入った。

新学期の初日は、始業式とロングホームルームだけだった。
それらも特にトラブルもなく順調に消化され、僕が帰宅したのは
正午前だった。佐伯さんはまだ帰ってきていない。

僕はひとまず自室で着替えをすませ、それからキッチンでコーヒ
ーメーカーをセットした。できるまで10分弱。僕はリビングの座
椅子に腰を下ろした。

と、丁度そこで佐伯さんが帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

彼女はリビングを横切り、自室のドアの前に来たところで、僕を
じとつと睨んだ。そうしてから部屋の中へと消えた。

「……………」
「やれやれ……………」

やがて再び姿を現した佐伯さんは、ミニスカートの私服に着替え
ていた。自分の座椅子に、ボスン、と乱暴に座った。

しばし停滞。

その顔は心なしか頬を膨らませて怒っているようにも見える。い
や、明らかに怒っているのだろう。そんなにぶすつとしているとせ
つかくの顔が台無しだ。まあ、見ようによっては、これも可愛らし
くはあるかもしれない。

すると今度は、両の膝を抱え、座椅子の回転機能を使ってくるく
ると回りはじめた。子どもが拗ねているかのようだ。

「佐伯さん」

「……………」

「短いスカートでそんな座り方をすると見えますよ」

「見せてるの」

「……………」

「……冗談よ」

それから再び足を下ろして僕を見据えた。

「何か学校で面白くないことでもありましたか？」

「ない。学校では。でも、学校に行く前にあった」

「……」

「ねえ、理由……あるんでしょう？」

テーブルに身を乗り出すようにして訊いてくる。

「理由？」

「朝のこと。弓月くん、すごく冷たかった」

問われて僕は一度ため息を吐いた。

「勿論ありますよ」

でも、そう言っただけで、次の言葉は継がなかった。

そして、再度の沈黙。

「教えてくれないの？」

「言いたくありません、今は」

「今は？」

「今は」

僕は復唱する。

次第に空気が柔らかいものになっていくのを感じた。

「心の中で整理がついていないんですよ。つけるのを後回しにして、

今は目を瞑っている状態です」

「辛かったの？」

「さあ？」

僕は苦笑とともに肩をすくめた。

「兎に角、今の僕は学校や人前で女の子に優しくすることのできな

い人間なんです」

「わたしにも？」

「君にも、です」

「そっか」

佐伯さんは納得したように頷いた。でも、実際はそうではないだ

ろつ。僕も納得させられるだけの説明ができているとは思っていない。

彼女は体を座椅子の背もたれに預けた。が、すぐにバウンドするようにして戻ってきた。

「じゃあ、今、この家の中ならいいでしょ？」

「何がですか？」

「優しくして」

「……」

いきなりそんなことを言われても困るのだが。

「佐伯さん、コーヒーでも飲みますか？」

そろそろできてきている頃だ。

「苦いのは嫌」

「では、カフェオレにしましょう」

彼女の子どもっぽい注文に思わず頬が緩んでしまつた。

僕はこの同居人のためにコーヒーを用意すべく立ち上がった。

2・「僕が彼女を振ったんです」

朝だった。

「モーニンツ、弓月くん！」

朝はいつも、同居人である佐伯貴理華が起こしにくる。

これを爽やかな朝だと思わなにかは個人差があるだろう。どうやら僕は意外に気に入っているらしい。

重い瞼を開けると、いつものように佐伯さんの顔があった。僕を見下ろしている。ひと声かけた後、僕が目を覚ますのを待っていたようだ。

「……おはようございます、佐伯さん」

「うん、おはよう」

彼女は笑顔を見せて言った。

「朝ごはんできてるよ。すぐにきて」

そう言うのとベッドから離れ、ご機嫌な様子で部屋を出ていった。僕の返事を聞いただけで安心していているようだ。しかし、残念ながら今日の僕は意識が完全に覚醒しきるまでに、いつもより時間を要した。ざつと10分くらい。

それから着替えてリビングへ出ると、ショートパンツのラフな部屋着の上からエプロンをつけた佐伯さんが、目を三角にして仁王立ちしていた。

「トウ・レイツ！（遅いつー！）」

そんな彼女の声から逃げるように洗面所に行き、顔を洗った。

鏡を覗くと眠そうな僕の顔があった。眠そうな半眼はデフォルトで、普段ならもう少し鋭い目つきをしているのだが、今はその欠片もない。

もう一度顔を洗ってリビングに戻った。

「遅い。何やってたのっ」

そこに飛んでくる追撃。

「昨日は少し遅くまで勉強してたんですよ。その反動です」

言い訳を口にしながらテーブルにつく。朝食は和風だ。名づけるなら焼き魚定食といったところだろう。

「まっじめー」

「僕はそんなに頭がいいほうではありませんから。佐伯さんは？」

「わたし？ わたしの学力、知らない？」

佐伯さんは逆に訊き返してきた。

「知りませんよ。知るわけないでしょう」

「あ、そうなんだ。ま、そういうこともあるか」

僕の返事も当然のものだと思うのだが、なぜか彼女は虚を突かれたような反応だった。しかし、その後、自らを納得させ、何ごともなかったように朝食を食べはじめた。

「じゃあ、先に出るね」

きつちりと水の森の制服に身を包んだ佐伯さんは、そう断ってからリビングを出ていった。

が、すぐにまたひよっこりと顔を出す。

「あ、そうだ。もし学校で弓月さんと会ったらどうしたらいい？」

「無視してください、僕のこと」

それが僕の回答。

僕は女の子に優しくできない人間だ。ならば近づかないほうがいい。僕と知り合いであることに何のメリットもないのだから。

問題は果たして佐伯さんがそれで納得するかどうかだ。

「ふうん……」

案の定、彼女は不満を隠さない様子で、曖昧に返事をしてリビングを出ていった。

初日以降、僕らは時間をずらして家を出るようになっていた。僕の一方的な希望だ。たいていは佐伯さんが先で、僕が後。

ひとり残された僕は、コーヒーマーカーの保温ポットから、コーヒーをマグカップに注ぎ、立ったままそれを口に運んだ。

「……」

佐伯さんには悪いことをしている　そう思った。

昼休み、

教室で矢神と一緒に弁当（佐伯さん作）を食べ、それからひとり学生食堂に向かった。目的は自販機コーナーだ。

その自販機の前で滝沢と会った。

「滝沢、そっちももう食べ終わっただんですか？」

「まあな」

二枚目な友人は短く答える。

滝沢は僕と違って昼食は学食派だ。彼も食べ終わって、飲みものを買いにここに来たのだろう。

「僕はいつも通りミルクティを買いにきました」

家ではコーヒー党の僕だが外、特に自販機で買うときは紅茶を選ぶ。どうも市販のコーヒーは口に合わないようなのだ。

さっそく滝沢に背を向け、機械に硬貨を放り込んだ。

「最近楽しそうだな」

不意に滝沢が投げかけてきた。

「そうですか？　自覚はありませんが」

「少なくとも俺にはそう見えるよ」

彼の声を背中で聞きながら、僕は取り出し口からミルクティの缶を取り出した。

「宝龍との一件以来、お前はかなり塞ぎ込んでいたし、口数も少なかった」

「滝沢」

彼の言葉の終わりど僕が発音が重なった。僕は滝沢へと振り返る。「僕が彼女を振ったんです。その僕が塞ぎ込む必要はないでしょう。

振られた彼女なら兎も角」

「女を振ったことで自分も傷つく種類の男もいる」

そう言った滝沢は、僕と入れ違いに自販機の前に立った。買うの

はいつも同じ銘柄の缶コーヒー。僕はその動作を黙って見ていた。彼が買い終わるのを待ってから僕は口を開く。

「僕はそんな人間じゃありませんよ」

「どうだろうな」

「……」

どうも旗色が悪い。

僕は缶のプルタブを開け、喉を潤した。

「滝沢とこの手の議論をしても敵わないので、昔のことは忘れたことにしておきます」

「俺はそのひと言で、お前には敵わないと思うよ」

滝沢は苦笑交じりにそう言っつて、コーヒーを口に運んだ。

「そうだ、弓月。噂の新生生の話はもう聞いたか？」

それからふと思いついたように新たな話題を切り出してきた。

「新生生？ いいえ、僕は何も。面白い生徒でも入ってきたんですか？」

「ああ。入試のときの成績がずば抜けてよかったらしい。入学式には新生生の総代として挨拶の言葉も読んで。女子だ。しかも、かなりの美人ときた」

「それはそれは」

世の中不思議なもので、僕のように凡庸なやつも多いが、人より長けた部分をいくつも持ち合わせている人間も、探せばけっこういるのである。

「まるで宝龍さんのようだ」

「そうだな」

宝龍美ゆきもまた成績優秀で、新生生の総代を務めたと聞いている。容姿は言わずもがな、だ。

しかし、宝龍さんを褒めるような僕のこの受け答えを滝沢はあまりお気に召さなかつたらしく、短い言葉で流した。

「加えて、帰国子女らしい」

「……」

さて、帰国子女というのは一学年に何人くらいいるものなのだろうか。

「どうした？」

「滝沢はそういう話題だ好きだなと思ひまして」

僕は誤魔化すように言ったが、しかし、それもまたひとつの事実ではある。滝沢は端正な顔をしていて、女の子から好意を寄せられることが多いが、彼自身はあまりそういう方面に興味がないようなのだ。そのくせその手の話だけは好きなのだから始末が悪い。

「ひとつはお前の気晴らしになればと思つてな」

「気を遣わなくてもいいのに。それで他には？」

「その噂の新生がそこにいるんだ」

「……」

さすがにこれは予想外だった。このタイミングでミルクティを飲んでいたら吐き出していたかもしれない。

僕は学食を見回し、そして、その姿を見つけた。

そこにいたのはまぎれもなく佐伯貴理華だった。

友達と向かい合ってテーブルについている。手には自販機で買ったのである缶ジュース。それを飲みながら楽しげに談笑している。しかし、その様子は僕が知っているのと少し違っていた。

今の佐伯さんは、華やかだけど一歩引いたような、ひかえめでおしとやかな美少女といったふうだ。少女らしい隠しきれない快活さも垣間見えるが、同時に子どもっぽさなどすでに卒業したような落ち着きも、その所作と居住まいから窺うことができた。

僕はしばらくの間、その美少女に目を奪われていたらしい。

「……」

なるほど。これでいくつかの疑問が氷解した。彼女が入学式で妙に消耗して帰ってきたわけとか、僕が彼女の学力を知っていると思つた理由とか。

それにしてもそこにいる少女は、本当に僕の知っている佐伯貴理華なのだろうか。彼女は友達の話の穏やかな笑みで聞き、そして、

自分が話すときは冗談でも交えているのだろうか、相手の笑顔を誘っていた。家で見える佐伯さんとはずいぶんと違っている。

やがて彼女も僕に気がついた。やわらかく微笑み、胸に前で小さく手を振ってくる。

「……」

僕はそれを他人事のように見ていた。

「知り合いか？」

滝沢の声でようやく我に返った。

「まさか。滝沢に手を振ったんじゃないですか」

「相手の視線が自分に向けられてるかそうでないくらい、すぐにわかる。彼女はお前を見ていた」

「気のせいですよ」

そう言っ僕は佐伯さんに背を向け、滝沢を誘導するようにして学食を後にした。

このとき、僕は遅まきながら内心で頭を抱え、苦悩していた。あれほど僕のことには無視するようにと言っておいたのに。彼女はいったい何を考えているのだろうか……。

3(1) ・「内緒の話ですが」

「クラブ勧誘会？」

同居人である佐伯貴理華がフレンチトーストを焼いている横で、僕は皿を用意しながら訊き返した。

朝の風景。

その中で佐伯さんが口にした「今日は午後からクラブ勧誘会があるの」という台詞に端を発した会話だ。

「ああ、そう言えばそうでしたね」

僕は佐伯さんの言葉でようやく今日がその日であることを思い出した。

要するに2、3年生でクラブ、同好会に所属しているものは新生を勧誘し、新入生は自分に合った、入りたいクラブを探す。そういうイベントだ。

クラブ勧誘会は午後に行われる。僕は午後の授業がカットになったという事実とそれによる恩恵だけを頭にインプットして、イベント自体はすっかり忘れていたのだ。

「弓月くん、クラブは？」

はい　と、かけ声を問いの最後につけて、佐伯さんはフレンチトーストをフライパンから皿へと移した。これは僕の分のようだ。

「前にも言いましたが、僕は家から2時間近くかけて学校に通っていましたからね。そんな余裕ありませんでした。無所属ですよ」

「なあんだ」

つまらなさそうに言いながらも、佐伯さんは自分の分となる次のトーストを焼きはじめた。慣れた手つきだ。

「弓月くんと同じクラブに入ろうと思ったのに」

「まったく君は……」

何を言い出すのだろうか。学食で手を振ってきた先日の一件といい、佐伯さんはどうも僕の欲しない行動を取ることがあるようだ。

注意しないと。

「だいたい主体性というものがありませんか。クラブは自分が何をやりたいかで決めるものですよ」

「やりたいものかあ。……チアリーダーとか水泳とか新体操とか？」

「やればいいじゃないですか。確か全部クラブがありますよ」

「弓月くんはどのわたしが見たい？」

その問いはこちらに背を向けた構造のまま発信されたものだが、彼女の顔を見なくても笑っているであろうことがよくわかった。ユニフォームに特徴のあるものばかり選んだのはそういうわけか。

「選ぶのは君です。僕がどうこうじゃなくてね」

「……面白くない弓月くん」

不貞腐れたように佐伯さんは言う。

もとより楽しませるつもりなど毛頭ない。こういうのは反応したら負けだ。

「はい、できたつと」

言っているうちに次のフレンチトーストが焼き上がった。佐伯さんはそれを自分の皿へ乗せた。

「あれ、弓月くん、待っていてくれたんだ。先に食べてくれてもよかったのに」

「作ってもらってる身で、そんな偉そうなことできませんよ」

「弓月くんのそういう律儀なところ、わたし好きだな」

邪気のない笑顔を見せながら、佐伯さんはテーブルに着いた。立っていた僕もそれに合わせて腰を下ろす。

「では、いただきますよう」

「いったただきまーす」

ふたり分の食事がそろったところで、僕らの朝食がはじまった。

部屋でネクタイを締め、制鞆の中身を確認する。そうしてから僕はブレザーと鞆を持ってリビングへと出た。

キッチンでは佐伯さんが弁当を詰めていた。ただし、今日はひと

り分。本日午後のクラブ勧誘会とは無縁の僕には弁当は必要ない。

佐伯さんはかすれたような甘い声で、楽しそうに歌いながら作業をしていた。彼女なら軽音楽部に入ってボーカルを担当するのもいいかもしれない。

「佐伯さん、今日は先に行かせてもらいます」

「もう少しで終わるから一緒に行こう……っと言っていても無駄だよな？」

「無駄ですね」

僕は即答。

「ふうんだ。さっさと行っちゃえっ」

取りつく島もない僕に、最近では佐伯さんも諦めたらしく、彼女はふざけるように言った。

僕はブレザーの袖に腕を通した。

「じゃあ、先に行きます。ひと通りの戸締りはしますので、後は自分の部屋と玄関だけ忘れなないようにしてください」

そうして後のことを佐伯さんに任せて、先に家を出た。

いつもより早く出たので、ずいぶんと早く学校に着いてしまった。ほとんど無人の廊下を歩き、辿り着いた教室にはひとりしかいなかった。

宝龍美ゆき（ほうりゅう・みゆき）だ。

ひとりだけの教室で席に着き、耳にイヤフォンを入れて、デジタルオーディオプレイヤーを聴いていた。耳を澄ますようにして閉じられた瞳。曲にあわせて首を軽く上下させ、指はリズムカルに机を叩いている。

宝龍美ゆきは、異端である。

通った鼻筋に、繊細な顔の輪郭。丁寧な筆遣いで描かれたような眉と目のライン。毛先の少しカールしたセミロングの髪は、艶やかに黒く輝いている。誰もが目を奪われるような美少女は、それだけである種の異端だ。

そして、何よりも彼女は留年していた。僕らよりも一年早く入学し、2年に上がれず二度目の1年生を経験した。入学試験を最優秀の成績で通過し、新入生総代まで務めた彼女に何があったのかは、僕も聞いていない。

ほんのわずかな逡巡の後、僕は教室に踏み込んだ。黙って真っ直ぐ自分の席へ向かう。

「無視はないんじゃないかしら」

そう声をかけられたのは、僕が机の上に鞆を置くのと同時だった。「邪魔したら悪いと思っただんですよ」

僕は振り返った。

宝龍さんは丁度イヤフォンを外すところだった。両の耳からイヤフォンを抜き、首を振って髪を揺らす。そうしてから彼女は怒ったような顔で僕を見つめた。が、本当に怒っているわけではない。もとからこういう顔の作りなのだ。おかげでこの学校でクールビューティと言えば、即ち宝龍美ゆきを指す代名詞となっている。

僕は彼女から少し離れた座標の机に、軽く体重を預けるようにして立った。

「何を聴いてたんですか？」

「昨日買ったばかりの新譜。いい曲よ」

「さては宝龍さんが好きなあのグループですね」

僕は前に彼女が好きだと言っていたアーティストのことをすぐに思い出した。

「今度貸そうか？」

「ぜひ。僕も嫌いじゃないです」

これまでも何度かCDを貸してもらったことがあった。

「恭嗣、最近楽しそうね」

宝龍さんは不意にそんなことを言った。

「2年になってからずっと見てたけど、そんなふうに見えるわ」

「実は滝沢にも同じことを言われました」

滝沢にも言われ、宝龍さんにも言われ。どうやら僕は本当に楽し

そうに見えるらしい。

「私と別れたからかしら？」

「それは関係ないですね。宝龍さんとつき合い出したことも、別れたことも、僕にとっては何のターニングポイントにもならなかった」

「あいかわらずね、恭嗣は」

彼女は苦笑した。

「じゃあ、春からひとり暮らしをするって言っていたから、そのせい？」

「ああ、それなら半分ほど予定が狂いました」

「半分？」

「内緒の話ですが、実は急に同居人ができたんです。宝龍さんの耳にも入っているかもしれませんが、相手は1年の佐伯貴理華さんです。今、彼女と同居しています」

「それ、本当なの？」

宝龍さんはじろりと僕を睨んだ。いや、これだって彼女としては睨むつもりはないのだろうが、冷たい美貌ゆえにどうしてそう見えしてしまう。しかし、その鋭い視線の中には、かすかに驚きの色が混ざっているのが僕にはわかった。

「本当です。今のところ周りにはまだ伏せてますので、有事の際は協力してください」

「それはいいけど……それって同棲って言わないかしら？」

「同棲？ それは少しニュアンスが……」

僕としては彼女が口にした“同棲”という単語を否定したかったのだが、それを上手く説明できないでいると、宝龍さんは「ふうん」と納得したように頷いた。

「じゃあ、きつとそのせいね」

「何がですか？」

「かわいい女の子とひとつ屋根の下にいるから、毎日楽しいんじゃないかしら？」

「それは……」

僕はまたしても言い淀んだ。

と、そのとき、

「ちよつと弓月君！ あなた何やってるのよ!？」

誰かが教室に入ってくるなり叫んだ。

振り返ればつかつかとこちらに歩み寄ってくる女の子がひとり。

1年のときも同じクラスだった雀さんだ。校則違反とは無縁のシヨ

ートの髪を揺らし、利発そうな顔には怒りの表情。

「何って、僕は宝龍さんと話を……」

「それがおかしいのっ」

雀さんは僕と宝龍さんの間に割って入り、僕と向かい合った。

「あなたに宝龍さんと話す資格なんてありません。それとも何？

よりを戻したいとも言うの？ あなたが宝龍さんを振ったのに？」

「……」

これまたずいぶんと嫌われたものだ。まあ、仕方ないのかもしれない。クールビューティ宝龍美ゆきの恋人になるという栄誉を授かりながら、後に僕は彼女を振ったのだ。同性なら彼女に味方するだろう。

見れば雀さんの後ろで宝龍さんが笑いながら肩をすくめていた。

「わかりました。僕は退散することにしましょう」

「ええ。そして、二度と宝龍さんに近づかないで」

僕と宝龍さんが別れたのは冬のことなのだが、雀さんの怒りは未だ冷めていないらしい。当ても散々罵られたが、その勢いは衰えていない。

踵を返す僕。

宝龍さんが口だけを動かして「またね」と言っていた。

3(2) ・「確かに僕はその名前ですよ」

休み時間のことだった。

次の授業の準備をする僕のところに、矢神比呂が寄ってきた。

「ごめん、弓月君、少し頼みたいことがあるんだけど……」

気弱な眼鏡の友人は、そう言って話を切り出した。

「今日、クラブ勧誘会があるよね」

「ありますね」

「それを手伝って欲しいんだ」

僕はひとまず返答を保留し、頭の中の情報を整理した。

「矢神は確か文芸部でしたね」

「うん」

矢神は頭の回転が速い。僕が訊きたかったことを、先回りして説明してくれた。

「文芸部はもとから部員は多いほうじゃない上に、前の3年の卒業で半減してね。残ってるのもほとんどが幽霊部員なんだ。今日だって実際に何人が集まるか……」

「なるほど。くるかどうかも怪しい部員を当てにするより、先に助っ人を集めておこうというわけですね」

慎重な矢神らしい事前準備だ。

「大変ですね。じゃあ、今の文芸部は矢神先生がひとりで支えているわけだ」

「やめてよ、その言い方」

矢神は照れたように言った。

僕が矢神を指して「先生」と呼ぶには理由がある。彼は実はプロの小説家なのだ。とは言っても、文芸雑誌に時々短編を掲載している程度なのだが。それでも十分に誇れることだろう。

ただし、矢神が公にすることを避けているので、そのことを知っているのはごく少数だ。

「それで、手伝いのことなんだけど……」

「ええ、いいですよ。矢神の頼みですから。でも、僕でいいんですか？」

「うん。あまり張り切って人を集めるつもりもないから」

矢神はなぜか申し訳なさそうに告げた。

何となくわかるような気がする。これは矢神の性格というよりは、文芸部の性質だろう。勧誘に力を入れたところで、文芸に興味のないものは鼻にもかけないだろうし、反対に興味のあるものは放っておいても足を運んで覗いていつてくれるだろう。矢神はただ網を張って待っているつもりなのだ。

「了解です。助っ人は僕ひとりで大丈夫でしょうか？」

「あ、うん。たいしたことはしないし」

矢神は力なく笑った。

残念ながら、こちらは矢神の性格によるものが大きい。彼はあまり交友関係が広いとは言えない。僕以外でこういうことを頼めそうなのは、後は滝沢と雀さんくらいだろう。しかし、そのふたりは生憎とそろってクラス委員なので（委員長が雀さん、副委員長が滝沢だ）、今日のイベントでは運営側としていろいろと仕事があるようだ。

「では、午後に文芸部の部室に行けばいいですか？」

「そうだね。ごめん、弓月君、助かるよ」

矢神はしきりに僕に感謝していた。

（ああ、そういえば……）

矢神が去ってから僕は思い出した。

確か宝龍さんも文芸部だったはずだ。ただし、僕が彼女を知った頃にはもう立派な幽霊部員だったが。

僕は首を巡らせ、宝龍美ゆきに目をやった。彼女は今日のイベントなど他人事のようにクラスメイトと話していた。

4時間目が終わると、僕は学食で手早く昼食をすませ、文芸部の

部室へ行つた。

準備は実に簡単なものだった。運営側が用意した中庭のブースに、去年文芸部が発行した会誌を置いておくだけ。閲覧自由。希望者には進呈。部についての質問があれば、答えるのは矢神の仕事だ。

グラウンドでは運動部がそれぞれパフォーマンスをやっているようだ。主に文化部が集まるこちらでも、吹奏楽部などは実際に新入生に楽器を触らせてあげたりもしている。喧騒の中に時折調子外れな楽器の音が響き渡って、思わず笑ってしまう。

なかなか賑やかなイベントだ。新入生としてはお祭りで屋台を巡っているような気分ではないだろうか。

僕はというと、矢神の“待ち”の方針もあって、彼の横に並んで座っているだけ。実にのんびりしていた。

と、そこに滝沢がやってきた。二の腕にはアバウトに「運営委員」と書かれた腕章をつけている。

「どうだ？」

「ま、そこそこに覗きにきてくれますよ。滝沢のほうはどうですか？」

「いちおう迷った新入生の案内や強引な勧誘の取り締まりが仕事なんだが、今のところ特に大きなトラブルはないな。優秀だよ、今年の一年は」

自嘲気味に浮かべられた笑みは、仕事のない自分に対してだろうか。

「それで暇を持て余して、遊びにきたんですか？」

「まあ、それもあるな」

滝沢は否定もせず、且つ、答えを曖昧にした。

そして。

「……きたぞ、弓月」

「はい？」

いったい何がきたのかと前方を見してみる。そこにはたくさんの新入生たちが、思い思いに各クラブのブースを見て回っていた。

その中で僕はすぐに見つけてしまった。

ふたり組の女の子。ひとりはまだ幼い感じの、元気そうな子。そして、もうひとりは特徴的なブラウンの髪をなびかせた見目麗しい少女。佐伯さんだった。

彼女たちは、というよりは主に佐伯さんだが 数歩歩くことに勧誘の声をかけられていた。成績優秀で新入生の総代まで務めた、校内でも有名な美少女。どの部も彼女を獲得したいに違いない。しかし、佐伯さんはそのことごとくを軽やかにかわしているようだった。

「滝沢……」

「うん？ どうした？」

僕の言外の非難に、滝沢はとぼけるような返事を返してきた。

どうやら滝沢は先日の学食の一件以来、僕と噂の新入生の間にかあると疑っているようだ。それで佐伯さんがこちらに来るのを見て、先回りして僕のところに来たのだろう。

まあ、いい。佐伯さんがこのブースにこなければ何も問題はないのだから。

が、しかし。

彼女は僕の姿を認めると、ぱあっと笑顔を見せ、一直線にこちらに向かってきた。

「……」

……頭痛がしてきた。

あれほど僕に関わるなと言っておいたのに。

「えっと、ここは文芸部、ですか？」

「うん。これがうちの会誌。よかったら見てみて」

問う佐伯さんに、矢神は立ち上がって対応する。

幸いにしてブースの前まで来たからは、佐伯さんは僕のほうを見ようとしなかった。ギリギリのラインで僕の頼みに応えてくれているようだ。僕は安心して矢神と彼女たちのやり取りを、隣で眺めていた。

「わ。皆さん、小説を書かれるんですか？」

会誌の中身を見てびっくりしている佐伯さん。

「うん。強制ではないけどね」

「これは最新号ですよ。他にもあるんですか？」

「あるよ。3ヶ月に1回のペースで発行してるから季刊ってことになるね。……ごめん。古いのひと通り取っってくれるかな？」

矢神の台詞の後半は僕に向けられたものだ。僕は後ろの箱から既刊を一式取り出した。

佐伯さんがこういうものに興味があるとは意外だ。それとも社交辞令的に話を合わせているのだろうか。

それにしても　と、僕は思う。

学校での佐伯貴理華というのは、ひかえめな女子生徒であるらしい。華やかさとおしとやかさをあわせ持った少女。しかも、優等生。上級生との対話もそつがない。校内で噂になるのも当然だろう。

僕は感心するとともに、少しだけ見惚れていた。

「そちらの運営委員の先輩も文芸部なんですか？」

これは佐伯さんと一緒にきた女の子だ。脇にいた整った顔の上級生が気になったのだろう。

「いや、俺はただ運営側として立ち寄っただけだよ」

「そうなんですか」

残念そうだ。これで滝沢が部員だったら勢いで入部していたかもしれない。まあ、それはそれで微笑ましくていいだろう。

と、そのとき。

それは不意を打つようにして、佐伯さんの口から発せられた。

「弓月くんも文芸部？」

「ッ!？」

完全に油断していた僕は、イスごとひっくり返りそうになったが、何とか持ちこたえた。ついでにバカとか何とか汚い単語が口をついて出そうになったが、それも危ういところで飲み込んだ。

佐伯さんの言葉で静まり返る一同。

そして、ワントンポ遅れて彼女が、「あ」という小さな声とともに口を掌で覆った。

「そちらの先輩がそう呼んでいたから、てっきりそれがお名前だと……もしかして違ってました？」
いや。

僕の記憶によれば、彼女たちが訪れて以降、矢神は一度たりとも僕を名前で呼んでいないはずだ。

「……………」
しかし、人間の記憶など曖昧なもので、誰も佐伯さんの主張に対して積極的な否定も肯定もできなかった。矢神なんかは次第に「言ったかも……………」と思いはじめているのが、その顔を見ればすぐにはわかった。

そして、僕としては、彼女がすっかり僕の名前を口にしてしまったのであれ他の意図を持っていたのであれ、話を合わせるより術はなかった。

「……………確かに僕はその名前ですよ」

「よかったですあ。変なことを言ったらどうしようかと思いましたが……………」

どうも僕の目に妙なフィルターがかかっていたのか、佐伯さんの言葉が白々しく聞こえて仕方がなかった。

「それじゃあ、わたしたち、他も回ってこようと思います」

「お邪魔しましたー」

彼女たちは気持ちのよい挨拶とともに文芸部のブースを後にした。その去り際、佐伯さんは僕にだけ見えるように、小さく手を振った。顔にはいたずらっぽい笑みに、「んべっ」と出した小さなかわいらしい舌。

勿論、それを見た僕の胸には、確信めいたものが生まれていた。

「弓月」

しばらくして滝沢が口を開いた。

「もう一度訊くが、本当に知り合いじゃないんだな？」

「……違いますよ」

さて、僕の言葉は滝沢の疑念を少しは晴らしただろうか。正直、難しいだろうとは思っ

その日の朝はいつもと違っていた。

佐伯さんがドアを蹴破らん勢いで部屋に飛び込んできたのを、僕はまどろみの中で知覚した。

「弓月くん、起きて起きてっ」

彼女は乱暴に僕の体を揺さぶった。

「……………何ですか、騒々しい」

「えっとね、時間がすごいことになってるのっ」

「……………」

僕は佐伯さんをゆっくりと押しつけ、上体を起こした。ベッドの宮に置いた目覚まし時計を手に取る。

「……………ああ」

確かにいつもよりずいぶん遅い時間だった。

「ああ、じゃなくてッ。何でそんなに呑気なのっ」

「無駄に慌てても仕方ないと思ってるだけです。ちゃんと急ぎますよ」

体からむかけ布団を剥ぎ取り、足をベッドから下ろした。

「じゃあ、朝ごはんは簡単なものになるけど、ちゃんと作っておくから」

佐伯さんは小走りに部屋の出入り口へと駆けていったが。

その足がドアの前で止まる。そして、再び振り返った。

「ごめんね、弓月くん」

「何がですか？」

「その、寝坊しちゃったこと……………」

ああ、そのことか。

「僕もすっかり油断してましたから。佐伯さんだけが悪いわけじゃないです」

僕自身、昨夜遅くまで起きていたこともあるし、ここのところ佐伯さん任せになっていたことも原因だろう。新生活に慣れてきて、気が緩んでいるのかもしれない。

「それよりも朝食をお願いします。着替えたらすぐに行きますので」
「あ、うん。わかった」

佐伯さんは少し心を軽くした様子で、今度こそ部屋を出て行った。僕も手早く着替えをすませ、自室からリビングへと出た。キッチンでは佐伯さんが何やら作っているようだったが、僕は先に洗面所へ向かった。

目覚めてからあまり時間をかけずに身体を動かしはじめたから、少し頭がふらふらしていた。その頭を冷たい水でむりやり稼動状態へと持っていく。

そうしてから僕はリビングへと戻った。

「ごめん、弓月くん。やっぱりたいしたものできなかった……」
ダイニングのテーブルに用意されていたものは、昨日たまたま買っていた調理パン数種類と、生ハムとレタスのサラダ。それにポタージュスープだった。ポタージュはお湯を注いで出来上がりというインスタントのものではなくて、鍋に入れて火をかけるレトルトタイプのものだ。

「充分ですよ。いただきますよ」

「あ、バタバタしてたから、まだ窓も開けてなかった」

さあ今から食べようかという段になって、佐伯さんがリビングの全面窓に向かって駆け出した。

確かに室内の空気が澱んでいるように感じる。カーテンを開けただけで、窓までは開けていなかったらしい。しかし、だからと言ってこんな逼迫した状況のときにやることはないだろうと思うのだが。

佐伯さんが窓を開けた。

途端に吹き込む朝の風。

「きやつ」

その風は彼女の短いスカートを巻き上げながら、室内へと流れた。

咄嗟に裾を押さえる佐伯さん。その動きは賞賛に値する速さだった。ばつ、と彼女は弾かれたようにこちらに振り返った。目が合う。

「……見た？」

「……」

「……」

僕は言葉を探した。

「すみません。少し……」

思えば問われてすぐに嘘で返せなかった時点で、僕には正直に答えて謝るといふ選択肢しか残されていなかったと言える。

なお、佐伯さんはまだいつもの黒いストッキングを穿いていない。

「……」

「……」

おもむろに佐伯さんが、がっくりと床に崩れ落ちた。どうやらかなりショックを受けているようだった。

「もう少し大人っぽい穿いとけばよかった……」

「……」

……そっちなのか。

だいたいそんなこと言ったら、嘆き崩れてるその座り方だって、大胆に太ももが露わになって十分に艶かしいのだが。

「あの、佐伯さん？　あまり悠長なことをやってる時間はないはずですが……」

「あ、そうだったッ」

はっと気づいて、飛び跳ねるようにして立ち上がる佐伯さん。再びダイニングにパタパタと戻ってきて、ようやくテーブルに着いた。いつもより遅い朝食。

急いでいることもあって、会話はなかった。が、不意に。

「あ」

何かを思い出したように、佐伯さんが声を上げた。

「お弁当どうしようっ？」

「さすがにむりでしょう」

改めて壁の掛け時計を見る。このまま朝食を終えてすぐに家を出れば、走らなくとも学校には間に合うだろうというような時間だ。彼女とは少し時間をずらして登校する僕は、多少走ることになりそうだが。

弁当を作っている時間などないのは一目瞭然だ。

「今日は学食ですね。たまにはいいでしょう」

「学食かぁ。わたし、学食はちよくちよく行ってるけど、まだお昼は食べたことないなぁ」

佐伯さんはポタージュの入ったマグカップを両手で包み込むようにして持ちながら、未知の領域に思いを馳せていた。

「そっか、学食かぁ」

そして、もう一度、何かに期待するような調子で繰り返した。

4(2) . 「確かに奇遇です」

朝は起床からバタバタしたものの、何とか遅刻にならずにすみ午前中の授業も滞りなく終了。

そして、昼休み。

「滝沢」

4時間目が終わると僕は真つ先に滝沢に声をかけた。

「今日も学食ですよね？ 一緒に行つていいですか？」

「もちろんだ。突っぱねる理由はないよ」

滝沢は笑みを見せながら同行を快諾してくれた。

さつそく彼と並んで教室を出た。いつも教室で一緒に弁当を食べている矢神には、前の休み時間に今日は学食に行く旨をすでに伝えられている。

「なんだ、今日は弁当を忘れたのか」

「朝、起きるのが遅くなりました。作っている時間がなかったんですよ」

嘘と本当が半分ずつ。弁当を作るのは僕の役目ではない。

「そう言えば今朝はギリギリの登校だったな」

「そういうことです」

「というか、ひとり暮らしなのに自分のために弁当を作るほうがどうかしてる。前にひとり暮らしが決まったとき、2年になったら学食通いだと言つてなかったか」

「気が変わったんですよ」

確かにそんなことを言っていた頃もあったし、当時はそのつもりだった。まさか同じ学校に通う女の子のお手製の弁当を食べることになるうとは思ひもよらなかつた。

「どんな気の変わり方だ」

「そうですね。自分で料理をするようになって、その楽しみに目覚めたと思つてください」

しかし、滝沢はそれを聞いて、鼻で笑っただけだった。料理に凝りだしたという僕が可笑しいのか、僕の言葉自体を信じていないのか、判じかねるところだ。

他愛もない話をしているうちに、学食へと辿り着いた。

我が校の学食は余裕のある空間が確保され、メニューも豊富にそろえてある。私立であるということを考慮しても、水の森高校の学食は豪華と言えるだろう。

毎日学食に通っている滝沢は、迷うことなくランチのコーナーへ足を向けた。あれこれ考えずに日替わりランチを決めているのだろう。僕もその後についていくことにした。

それぞれランチを注文し、トレイを持って戻ってきた。向かい合せてテーブルに着く。特に真剣に話すようなテーマもなく、もっぱら会話は世間話だった。

と、そこに。

「あ、滝沢さんだ」

聞き慣れた涼やかな声音。

見上げてみれば、そこにいたのは佐伯さんと、先日のクラブ勧誘会のときにも見た彼女の友人だった。ふたりともやはりトレイを持っている。

どうしてここに　　と言いかけて、その愚かしい問いを飲み込んだ。そして、こういう状況になることを朝のうちに気づかなかった自分を呪う。わかっていればもっと遅い時間にここにきたのに。

「先日はお世話になりました」

「と言われても、当の矢神がいらないんだがな」

滝沢は微笑する。

「お昼ご一緒してもいいですか？」

「うん？　それはかまわないが」

「よかったあ。じゃあ、お言葉に甘えて」

彼女たちは「よかったね」などと言い合って、さっそく席に着いた。滝沢の隣に佐伯さん、僕の隣には彼女の友人が座った。つまり、

僕の斜め前に佐伯さんがいるわけだ。……なぜわざわざ僕の視界に入るのか、佐伯さんは。

「あ、わたし、桜井京子と言います。キリカのことは有名だから知ってますよね？」

佐伯さんの友人が名乗った。五十音で並べたとき、佐伯さんと近い。おそらく出席番号も前後になっていて、高校入学後最初の友人になったのではないだろうか。

「お京って呼んであげてください」「もうっ」

横から飛んできた佐伯さんの茶々に、桜井さんが口を尖らせた。

「桜井くんか。覚えておこう」

滝沢は上級生らしい余裕のある笑みで応えた。

ところで、佐伯さんの前には当然のようにランチの乗ったトレイが置かれているが、桜井さんの前にあるのは見た目もサイズもかわいらしい弁当箱だった。

「見たところ、佐伯くんは学食派、桜井くんは弁当を持ってそのつき合い、といったところかな」

「いえ、わたしも普段はお弁当を持ってきてるんです」

佐伯さんが恥ずかしそうに返す。

「でも、今日はちよつと寝坊しちゃいまして」「なるほど」

滝沢は嫌味にならない程度に笑う。彼はこういうところがそつがないというか、上手いと思う。

「それは面白いな」

「わたしが遅刻しかけたからですか？」

佐伯さんは、ぶう、とわざとらしく頬を膨らませてみせる。

「そうではないよ。実はここにいる弓月も、今日は危うく遅刻というような時間に登校してきてね。普段は弁当なのに、こうして学食で食べているわけだ」

「そうなんですか？ わあ、奇遇ですね」

「……ええ、確かに奇遇です」
僕は曖昧に笑う。

なんと不毛な会話だろうか。確かに彼女に微笑みかけられたら、遅刻仲間という不名誉な共通項も名誉なことのように思えてくるが、僕らの間ではただただ白々しいだけだ。

「察するに、佐伯くんはひとり暮らしかな」

「鋭いですね。でも、実は男の人と同棲してたりして」

「ッ!？」

横で聞いていて卒倒しそうになった。何を言い出すんだ、佐伯さんは。

「うん？ それは聞き捨てならないな」

「不動産屋さんの手違いみたいです。二重契約で。入居する日になって初めてわかったんです。でも、相手の人がちよつと素敵な人でお互い事情もあつたし、そのままルームシェアすることに……」

「……」

……よりによって大部分で事実を語るか。

「どうした、弓月。まさかそんな冗談を真に受けたんじゃないだろうな」

「それこそまさかですよ」

そう言っている僕の斜め前では、佐伯さんが稚気たつぷりな笑みを浮かべているのだが。

「キリカってその話ばかり」

「いいじゃない」

他でも言っているのか。勘弁してくれ。

「佐伯さん、そういう冗談はあまり言わないほうがいいですね。変な噂が立つし、噂はすぐにひとり歩きをしますから」

「はあい……」

佐伯さんは舌を出し、肩をすくめた。少しは反省してくれたらいいが と、僕は心の中でため息を吐く。噂のひとり歩きはなかなか馬鹿にできないものだ。僕の気持ちは少しだけ過去を振り返って

いた。

と、そのときだった。

「弓月くん、そのおろしトンカツ、ひと切れちよーだい」

「何を甘えたことを。自分のがあるでしょう」

テーブルの対岸から伸びてきた佐伯さんの箸を、しかし、僕はすかさず皿を引くことでかわした。

「だって、美味しいんだもん」

「だからと言って、人を取るものじゃありません」

「むー」

トンカツの奪取に失敗した佐伯さんは、箸の先を下唇に当てながら不満げに唸った。

「……弓月」

と、横から滝沢。

「はい？」

「仲がいいな」

「……」

……やられた。

自分の迂闊さに自害しなくなった。これでは普段と同じ調子ではないか。だいたい滝沢が“さん”で、僕が“くん”の時点でおかしいだろうに。

しかし、このやり取りに最初に反応したのは、意外にも桜井さんだった。

「弓月さんっていつも黙ってるから、もっと怖い人かと思ってました。ほんとは面白い人だったんですねっ」

「……」

どうだろう。少なくとも自分で自分を面白いと評価したことはないのだが。

しかし、桜井さんはどうやら僕に興味を持ってしまったらしく、隣の席からぐつと体を寄せてくる。

「弓月さん、ひとり暮らしって本当なんですか？」

「ええ、まあ」

「いいなあ。弓月さんといい、キリカといい。わたしもひとり暮らししてみたいなあ」

桜井さんは元の位置に戻って、天井に目をやった。

「大変ですよ」

「そうなんですか？」

「……と思います」

考えてみれば、僕もその大変さを知らなかった。別の大変さは知っている。家族でもない同年代の女の子と一緒に生活する大変さとか。

「じゃあ、今度遊びに行ってもいいですかっ？」

「いや、それはやめたほうがいいです」

その危機感のなさに警鐘を鳴らしたいが、それ以上に佐伯さんと一緒に住んでいることを知られるわけにはいかない。

僕の目は自然と佐伯さんに向いていた。が、彼女の顔にいつもの笑顔はなく、ひどくつまらなさそうにこちらを見ていた。

「残念。じゃあ」

と、再び桜井さんは体を寄せてくる。話すときの距離が近いのは彼女の癖なのだろうか。うっかりすると抱きしめてしまいそうになるのだが。

「メールアドレス教えてください。交換しましょう」

「それは……」

あまりお勧めできない行為だ。僕がそれをどうかわそうか考えていると、そこに口を挟んできたのは、向かいからこちらの様子を見ていた佐伯さんだった。

「お京」

呼びかけると同時に、彼女は立ち上がった。

「食べ終わったんだったら帰る」

「あれ、早くない？ まだ時間あるよ？」

桜井さんは学食内の壁掛け時計を確認してから言い返す。

「次、英語でしょ？ わたし、たぶん当てられると思うし、和訳はちょっと自信がないから。予習しとかないと」

「あ、そうなんだ。じゃあ、キリ力先に帰ってて。わたしはせっかくだから、もう少し先輩たちと話しておくから」

「お京も帰るの」

「なんで？」

至極当然な疑問だ。

「なんでって……」

しかし、対する佐伯さんからは明確な理由の回答はなかった。代わりに一度だけちらと僕のほうを見た。

そして。

「もういい」

ぼすん、と再び腰を下ろした。

「あれ、帰らないの？」

「だから、もういい」

佐伯さんは不貞腐れるように、そっぽを向いてしまった。

「……」

やれやれ。こんな展開になるなんて思いもよらなかつた。想定外だ。何の冗談だろうか。勘弁してくれ。……まあ、ここいらが潮時かもしれない。

「滝沢、そろそろ教室に戻りましょう」

「うん？ そうか。お前がそう言うなら、そうしよう」

僕と滝沢は立ち上がった。

「ええー。もう帰るんですかあ」

嘆く桜井さん。その横では佐伯さんがじっとこちらを見上げていた。が、その顔が不意に何かを思いついたように輝いた。

「あ、そうだ、滝沢さん。今度教室に遊びに行ってもいいですか？」

これまた僕の欲しないところを……。

滝沢が僕を見る。意見を求めているようだ。が、訊かれているのは滝沢であって、僕ではない。よって、僕は「さあ？」の意味を込

めて、肩をすくめた。好きにすればいい。

「いいんじゃないかな。でも、いつもいるとは限らないよ。俺も、弓月も」

それが滝沢の返事だった。

そうして僕は佐伯さんたちと別れた。

十分距離が離れたのを確認してから、食器返却口の前で滝沢が口を開いた。

「本当はお前が目当てなんじゃないか、弓月君」

「……」

弓月君言つな。

「……気のせいでしょう」

そうあって欲しい。

それにしても着実に僕の学校生活が侵食されつつあるのではないだろうか。誰か僕に「気のせいです」と言ってくれないだろうか。

5・「そんなところに座らないでください」

日曜日の午後。

そのとき僕は、リビングでぼうつとしていた。座椅子の背もたれをいつもより2段階ほど倒し、腹の上で手を組んで、目を閉じている。

と、そこに。

「弓月くん、ひま？」

同居人である佐伯貴理華の明るく澄んだ声。昼食とその後片付けの後、自室に引っ込んでいたが、また出てきたようだ。

「見ての通り、ぼうつとしてます」

僕は目を閉じたまま答えた。

「じゃ、ひまなんだ」

「いえ」

「ぬ？」

疑問形の小さな発音。彼女はきつと首を傾げているに違いない。

「別に暇だからこうしてるんじゃないかって、わざわざ時間を割いてこうしてるんです。僕はね、意識的にこういう無駄な時間を作るようにしてるんですよ」

「わたし、時々弓月くんが哲学者か何かに見えるな」

「そんな偉いものじゃありませんよ」

僕はようやく閉じていた目を開けた。

正面に立つ佐伯さんは、最後に見た昼食のときとは装いを新たにしていた。

膝丈のスカートに、アームウォーマーとワンセットになった半袖カットソー。スカートは黒で、カットソーとアームウォーマーもやっぱり黒を基調にして、アクセントとして白が入っている程度。全体的にパンク系だ。

「それにしても真っ黒ですね」

「そ。黒でトータルコーディネート」

僕の見たままの感想に、佐伯さんは得意げに答えた。それから一転して意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「どこまで黒か知りたくない？」

「何か僕に用があつたんじゃないんですか？」

「……無視されるとつまらないんですけど」

ジト目で非難するようにそう言うと、今度は伸ばしていた僕の足をまたいで、向かい合うようなかたちで膝の上に腰を下ろした。

「そんなところに座らないでください」

「えろい？」

「重いです」

「もっつ」

佐伯さんは一度だけ体を揺すつた。本当は口で言うほど重くないので、これもさほど痛くはない。

「知ってる？ 女子高生の携帯電話普及率」

「確か9割は越えていたと思いますね」

それはいいとして、この構造のまままで会話を続けるつもりなのだろうか。案の定、僕の不満混じりの疑問をよそに、彼女は話を進めていく。

「そう。で、わたしはその持ってない1割なの」

「ああ、そう言えば君はそうでしたね」

彼女は日本に帰ってきて日が浅いので、そういうものは後回しになつていたようだ。因みに、この家には佐伯さん名義の固定電話があり、ご両親との連絡はそれを使っている。

「今から買いに行くから、弓月くん、ついてきて」

「またいきなりですね」

「だって、お京も持つてるんだよ？」

「桜井さんは関係ないでしょう」

とは言え、この辺りは持てるものにはわからない悩みなのだろう。周りがみんな持っていて自分だけ持っていないというのも、何か焦

るものがあるのかもしれない。

「だって、先越されたら立場ないじゃない。この前だって……」
佐伯さんの言葉は尻すぼみに消えていく。

「何の話ですか？」

「いいのっ。兎に角、今から行くから、弓月くんも一緒に行くのっ」
まるで決定事項のような言い方だ。しかし、ここで承諾しないと、
佐伯さんが膝から降りてくれないかもしれない。

「仕方ありませんね。一緒に行きましようか」

「ほんとっ！？　ありがとうー！」

無邪気に喜ぶ佐伯さん。悔しいがその姿を見ると、多少のわ
がままならつき合ってもいいかと思えてしまう。

学園都市の駅に向かうことにした。確か駅前のショッピングセン
ターには携帯電話のすべてのキャリアを扱ったショップがあったは
ずだ。

ふたりで歩道に行く。

大きな道路に沿って歩いているわりには車の交通量も少ないし、
人の姿もあまりない。休日はいつもこんな感じだ。学校を集め、街
も景観を重視して整えられているが、人口は意外に少ないのだろう。
僕の隣を佐伯さんが弾むような足取りで歩いている。足にはシヨ
ートブーツ。やっぱり黒だ。

「あ、そうだ、弓月くん。ケータイ持つてきた？」

「いちおう。家を出るときは持つようにしてますので」

「えらいえらい」

佐伯さんは笑顔で言う。楽しそうだ。

そんな他愛もない話をしてしていると、やがて駅とショッピングセン
ターが見えてきた。この辺りまでくると、人通りも交通量も増えて
くる。要するに、学園都市という街がこの駅を中心にデザインされ
ているということなのだろう。

携帯電話の店は、ショッピングセンターの中でも人が盛んに行き

交う場所にあつた。休日だけに商品を見ている人も多いし、通りすがりに目を向ける人もいる。

「佐伯さん、キャリアは決めてるんですか？」

「キャリア？」

彼女は首を傾げる。

「保菌者？」

「そのキャリアじゃありません」

経験経歴を意味するキャリアを持ち出さない辺り、意外に知識が豊富だ。

「携帯電話の会社です」

「あ、そのことか。……弓月くんは？」

「僕は」

最も有名であろう会社の名前を挙げた。僕が携帯電話を持つ際、選ぶ基準がいまいちわからなかつたので、単純にシエアの大きさで決めたのだ。

「じゃ、わたしもそれで」

「えっと、佐伯さん？　そういうの決めてこなかつたんですか？」

「だって、よくわからないんだもん。仕方ないじゃない」

確かに今まで携帯電話に触れたことのない人間には、どこに着目すればいいかさっぱりだろう。僕だって人のことを言えた義理ではないし。

佐伯さんはさっそく店舗の中に入り、僕が言ったキャリアの機種が陳列してある付近へ向かった。

「おー、いっぱいあるー。弓月くんのはどれ？」

「僕はこれですね。これの黒です」

買ったときは最新だったが、今ではもう新しいシリーズが出ているので、ひとつ前の型ということになる。とは言え、最新の機種も特に画期的な機能が付加されたわけではない。今使っているのがけっこう気に入っているの、しばらく買い換えることはないだろう。

「黒かぁ。……あ、さっき言い忘れたけど、ちゃんと黒だから」

「……」

また余計な情報を……。

「わたしもこれにしよう。すみませーん」

「ちよっと待ちましようか、佐伯さん」

僕は思わず彼女を制した。

「さすがにそれは自分の考えがなさすぎるでしょう」

「そう？　なんかどれでも同じみたいだし、けっこういい感じに安いから、これでいいかなって」

「まあ、ね」

型落ちだから。僕が買ったときと比べたら、嫌になるくらい安い。

「でも、せめて色くらいもう少し考えたらどうです？　女の子らしく赤とかピンクとかもありますよ」

「む。その考えは偏見だと思うな。女の子だからピンクとか、黒はダメとか」

「確かにそうではありませんが」

「そこはむしろ『毎日黒で』って言うくらいじゃないと」

「いったい何の話ですか。わかりました。もう僕は何も言いませんから、君の好きなようにしなさい」

「はい」

僕が諦めて口を挟むことを放棄すると、彼女は元気のいい返事をして、さっそく店員を呼びつけた。

結局。

佐伯さんはメーカーから色から、僕とまったく同じものを買った。自分が誰かの行動に影響を与えるというのはあまり好きではないのだが、彼女がそう決めたのだから仕方ないだろう。

なお、佐伯さんは未成年なので契約に際して保護者の同意書が必要だったが、そこは彼女の母親に直接確認することでクリアした。つまり国際電話だ。こんなことをさせられる店員も大変だが、夜に電話をかけてこられる彼女の母親も大変だと思った。

無事に契約を終え、きたとき以上に軽い足取りの佐伯さんと一緒に帰宅し、

さて、その夕方。

自室にいとドアがノックされた。僕の返事を待って佐伯さんが顔を覗かせる。

「弓月くん、ケータイ貸してー」

「その辺にありますよ。でも、何に使うんです？」

「ちょっとねー」

僕の携帯電話はベッド脇に置いてあった。佐伯さんはそれを手に取る。僕は彼女の座標が変わるのに合わせて座っている椅子を回転させ、その行動を追った。

「おー、これが弓月くんのケータイかぁ」

彼女とまったく同じ機種なので、この場合、その興味は外観ではなく中のデータに向けられているのだろう。

「勝手にメールなどを見ないように」

「わかってるって。電話帳登録するだけ」

そう言いながら佐伯さんはボタンを操作し、それぞれの端末を向かい合わせた。赤外線受信をしているようだ。買ってきたばかりなのに慣れている。

「はい、完了。電話帳登録第一号は弓月くんー」

「それは光栄ですね」

開いたケータイをこちらに見せる佐伯さん。その姿は新しく買ったもらった玩具を自慢する子どものように微笑ましい。

「番号知ってるのは弓月くんだけだし、今これが鳴ったら相手は弓月くんってことだよな」

「そういうことになりますね」

火事でそれぞれの部屋が分断されでもしない限り、僕がわざわざ電話をかけることはないだろうが。

「じゃ、何かあったら遠慮なくかけてね」

そうして彼女は嬉しそうに部屋を出ていった。

この日、佐伯さんは寝るまでネクストラップで首からケータイをぶら下げていた。誰からかかってくるわけでもないだろうに。

6・「君のためです」

昼休みのことだった。

いつものように矢神と一緒に弁当を食べ、自分の席に戻ってその弁当箱を片付けていると、トン、と机の上にペットボトルが置かれた。ミルクティ、内容量280ml。

顔を上げると滝沢の伶俐な顔があった。

「ありがとうございます」

学食で昼食を取る彼に、僕が頼んでいたものだ。お金は先に渡してある。

「なかなかどうして彼女は有名人だな」

滝沢はあいていた僕の前の席に座り、自分に買った缶コーヒーのプルタブを開けた。

僕はペットボトルのフタを回す。

「彼女？」

そして、ひと口飲んで喉を潤してから訊いた。

「佐伯貴理華」

「……」

どう対応していいかわからず、適切な対応を模索しているうちにそのタイミングを逃し、結果、ノリアクション無反応。

「学食で知り合いが話題にしていたよ。見ての通り美人で、成績も優秀。性格は少しひかえめながら、明るくて人当たりもよい」

「すみません、滝沢。誰の話ですか？」

「お前は今まで何を聞いていたんだ」

滝沢は呆れたようにため息を吐いた。

いえ、僕の知る佐伯貴理華とはだいぶ異なる気がしたもので。

ひかえめな性格？ どこがだ。家では賑やかだし、わがままだし。人当たりがいい？ けっこう人をからかうのが好きなのだな。でも。

「そういう話題に上ってもおかしくないとは思いますが」
知られざる性格は兎も角、万人が認める美少女ではある。

「ほう。認めるのか」

「認めますよ。素直にかわいいと思いますから」

「本人にも言つてやればどうだ？」

「機会があればね」

そう言つて僕は、さっき閉めたばかりのペットボトルのフタを開け、再び口をつけた。

滝沢もコーヒーをひと口飲む。

そして。

「その彼女がそこにいるんだが」

「……」

僕はゆっくりと教室の入り口に目をやった。

そこに佐伯さんと、そのクラスメイトである桜井さんの姿が。中に目当ての人がいるのにこっちに気づいてくれない。かと言って、大きな声で呼ぶ勇気もない。そんな感じで自信なさげに、少しそわそわした様子で中を覗き込んでいた。

そして、僕と滝沢がそろって彼女らを見ると、嬉しそうに、どこかほっとしたように手を振ってきた。

僕はその新入生らしい微笑ましい光景に頬が緩みかけ、彼女が見せた無防備な笑顔に不覚にもどきっとしてしまった。……勿論、顔には出さないが。

滝沢が軽く手を上げて応える。

言外に「入つてもいいよ」というメッセージ。それを受け取り、彼女たちは教室に入ってきた。

途端、周りが騒がしくなる。

「あ、あれ、噂の……」

「俺、実物は初めて見た」

「目当ては滝沢か？」

等々。

間には「そう言えば弓月って去年……」というの。

「こんにちは、滝沢さん。遊びにきちゃいました」

まずは佐伯さんが挨拶。

「おふたりで何の話ですか？」

そして、桜井さんが僕に。

「他愛もない無駄話です」

「君の友人、佐伯くんがかわいいという話だな」

僕は思わず滝沢のほうを見た。何を言い出すのか。

「なんだ？ 別に隠すこともないだろう。人のことを素直に褒めるのが、お前の美点のひとつだと思っていたが」

「そんなの意識したことありませんよ」

僕はむっとして答えた。

まったく、本人の前で言うこともないだろうに。家に帰った後でやりづらくなる。

「あ、やっぱり弓月さんもキリカのことかかわいいと思いますよね？」

桜井さんは弾んだ声で、誇らしげに言った。

彼女はその場に膝を曲げてしゃがみ、両手の指と顎を机の端に乗せている。ショートのカ髪はちょっと癖っ毛。僕を見上げる目は小動物系だ。

「まあ、そうですね」

特に否定する必要性も理由もなかったので、桜井さんの問いに僕はそう返答した。

立っている佐伯さんを見上げる。

目が合った。

すると、佐伯さんは「あ、う……」と小さくうめいてから、恥ずかしそうに顔を逸らした。

正直、意外な反応だった。彼女ならこれくらいのこととは言われ慣れているだろうし、微笑んで礼を言うくらいのこととしてはしてみせると思ったのだが。

「キリカって誰が見てもかわいいから」

「佐伯くんの噂はこちらまで届いているよ。しばらくは行く先々で注目されるだろうな」

桜井さんの言葉に、滝沢が嫌味のない苦笑とともに応じた。

「もう、滝沢さんまで。わたしなんか見ても面白くないですよ」

対する佐伯さんは口を尖らせ気味ながらも、けっこう楽しげだ。

そして、僕はというと。

「……」

それらの会話を、同じ輪の中にいるはずなのにまるで他人ごとのようにどこか遠くに聞いている。

僕はおもむろに立ち上がった。

「滝沢、後はお願いします」

直後、驚いた顔の佐伯さんが視界に映った。

「どこか行くのか？」

「特にあてはありませんが、テキトーにぶらついてきます」

滝沢にそう告げてから、僕は席を離れた。

「ちよっ、ちよっ」と弓月くんっ

後ろから聞こえてくるのは佐伯さんの声。しかし、僕は止まらず、出口へ向かう。

「ちよっと待ってつてば」

教室を出て、廊下を少し進んだところで、再度呼びかけられた。

追ってきているようだ。

僕はその声も無視して歩を進め、近くの階段を上がり　そこでようやく立ち止まった。

階段の踊り場。

人気はない。

昼休みを楽しむ生徒たちの喧騒が、遠く小さく聞こえる。

振り返ると、丁度佐伯さんが階段を上ってきたところだった。待っていた僕を見て驚いている。

「何か用ですか？　手短にお願いします」

素っ気ない口調で僕は要求する。いずれここを通る生徒も現れる

だろう。

「えっと、その……」

言葉を探す佐伯さん。追いかけてきたわりには言葉を用意していなかったらしい。

「もしかして迷惑だった？ 教室に遊びにきたの」

「滝沢を訪ねてくる分には大歓迎ですよ。彼は好人物ですから」

もともと先生受けのいい優等生タイプだし、2年に上がってから
はなかなかによい先輩ぶりを発揮している。

「弓月くんは？」

「お勧めしませんね」

「どうしてよっ」

佐伯さんの語気は荒かった。理解できない理不尽な言い分を目の
当たりにしているからだろう。気持ちはわかる。僕もその自覚があ
るからだ。

それでも。

「君のためです」

「そんなのわかんないっ」

「わかる必要はありません。そうであるとさえ知っておけば」

「……」

「……」

睨み合いのような沈黙。佐伯さんとしては一方的な僕の言い分に
文句のひとつも言いたいのだろう。

「前に一度言ったはずですよ。外にいる僕は優しくできない人間だし、
近づかないほうがいい、と」

「でも……」

佐伯さんは弱気になりながらも、反論を試みようとする。が、言
葉は続かなかった。

「そろそろ行ったほうがいいです。誰かに見られないうちにね」
「……」

佐伯さんはやっぱり押し黙ったままだ。ただ怒ったような、それ

でいて泣き出しそうな、どっちとも見える表情で、僕をじっと見つめるだけ。

「……」

「……」

やがて踵を返し、この場を後にした。

僕は階段を見下ろし、彼女の姿が見えなくなるまで見送った。

やれやれ。

そして、深いため息をひとつ吐く。

と。

「恭嗣」

僕が目を向けていたのとは逆、階段の上から声がした。この学校で僕を名前で呼ぶのはひとりだけだ。見上げるとそこには佐伯さんとはまた違った、大人っぽい落ち着いた感じの美貌があった。

宝龍美ゆき。

我が水の森高校が誇るクールビューティだ。

「もしかして見てましたか？」

「ええ」

彼女は隠しもせず正直に答えた。

僕は壁に背をつけ、もたれた。宝龍さんが階段を下りてくる。

「もうやめたほうがよくない？　彼女がかわいそうよ。……それに

恭嗣も」

彼女は僕の真正面に立って言う。

「やめるも何も、僕は何もしていませんよ」

「ええ、そうね。確かに恭嗣は何もしてないわね。それできっと最後まで何もしないつもりなんだわ」

宝龍さんは嘆息した。呆れているのか、もしかしたら怒っているのかもしれない。

「人の噂も75日と言いますから」

誰が振った誰が振られたなんて話題はいずれ消える。

「さて、僕は行きます。……あ、そうだ。今屋上の鍵、持ってます

か？」

「持つてるわよ」

宝龍さんはそう言っつて、スカートのポケットから鍵を取り出した。キイホルダも何もついていない鍵。

この学校の屋上は自由に出ることはできず、その鍵は嚴重に管理されている。スペアを含めて3つある鍵は、しかし、去年ひとつ紛失してしまった。とある女子生徒が借りている間に失くしてしまつたらしいのだ。

「借りていいですか？ 僕も久しぶりに屋上に出てきます」

「見つからないようにね」

「わかつてますよ」

なにせこの鍵は紛失したことになるのだから。

僕は宝龍さんから鍵を受け取り、屋上で時間をつぶすことにした。

放課後は寄り道したりする気にもなれず、真つ直ぐ帰宅した。さすがに佐伯さんはまだ帰っていない。

僕はひとまず自室で着替えをすませ、それからキッチンでコーヒーマーカーをセットした。丁度スイッチを入れたところで、玄関のドアが開く音。

彼女も今日は寄り道はなしらしい。

やがてリビングに姿を現した佐伯さんは少し元気がない様子だった。僕のせいだろうか。

「おかえりなさい、佐伯さん。コーヒー飲みますか？」

「ふえ？ コーヒー？」

何を言われたかわからないといった調子で訊き返してくる。

「ええ、コーヒーです。今はじめたばかりなので、後10分ほどかかるかと思いますが」

抽出がはじまったコーヒーマーカーを見ながら僕は言う。とは言え、外からでは中が見えない魔法瓶タイプの保温ポットにコーヒーが落ちるので、見ていてもあまり面白くない。今度コーヒーサイフ

オンを買ってみようか。

と、そのとき、何かが床に落ちる音がした。

見ればフローリングに佐伯さんの鞆が転がっていた。そして、僕がそれを認めたのとほぼ同時、佐伯さんがこちらに飛びついてきた。「うわっ、と……」

最初はいったい何の悪戯かと思った。

しかし、佐伯さんは両手を僕の体に回し、強く抱きしめてきた。

その額を僕の胸につけて、ぽつりとつぶやく。

「よかった。いつもの弓月くんだ……」

「……」

僕は、彼女がかわいそうだと言った宝龍さんの言葉を思い出していた。僕は僕がしていることで佐伯さんを不安にさせているのだろうか。

「すみません……」

とりあえず謝っておく。今は口だけでしかないけど。まだしばらくはこういうことが続くだろうから。

佐伯さんはうつむくようにして、僕の胸に自分の額をくっつけている。下を向けば彼女の、不思議な明暗を持つ綺麗なブラウンの髪があった。

一瞬、その髪に触れたい誘惑に駆られた。

が、勿論やらなかった。そんな凶々しいことできるはずもない。すると。

「……撫でれ」

「はい？」

「……頭、撫でれ」

「……」

なんとというか、こう、自分の中にあっただちよつとした邪な思いが、一気に冷めていくのがわかった。

「……お断りします」

「ちえっ」

舌打ちしやがるか。

「ほら、そろそろ離れてください」

「その前にもうひとつ」

「はいはい、何でしょう」

やや投げやりな僕の声。

「わたしのこと、かわいいって本当？」

「……」

そう言えば昼休み、滝沢がわざわざ言わなくていいことを言っていたな。

「ねえ」

催促するように言い、佐伯さんが顔を上げた。

下を向いていた僕の、文字通り目と鼻の先に彼女の顔が現れ、どきりとした。

「さて、どうだったでしょう……」

僕は、彼女の顔から距離を開けたかったのと彼女の視線から逃れたかったのと、二重の意図で顔を逸らせた。

「もうっ」

「そんなことよりも、いいかげん離れてください」

僕は腹を立てる佐伯さんの肩を掴んで、強引に引き剥がした。彼女に背を向けるため、意味もなくコーヒーマーカーに向き直る。

そんな僕に佐伯さんは言う。

「わたしは弓月くんってかわいいと思うなあ」

「……もういい。今日の僕への罰だと思おう。」

7. 「僕はそういう人間です」

3時間目の授業が終わった。

「次は物理か」

そうつぶやいてみて、その“物理”という単語に引っかかりを覚えた。何だっただろう。そして、黒板を見てようやくその正体に気がついた。

黒板の隅には、

『4時間目 物理 視聴覚室』

と書かれていた。やや角ばった几帳面な字はクラス委員長、雀さんのものだ。

次は教室移動らしい。視聴覚室。物理学実験のビデオでも見るのだろうか。

「行くか、弓月」

滝沢だ。僕が巡りの悪い頭でゆっくりと次の行動を確認している間に、さっさと用意をすませたらしい。教科書にノート、筆記用具など準備一式を手に持っていた。

「ちよつと待っててください」

僕は前の授業に使った教科書類を片づけ、次の物理の用意をしてそこで手を止めた。……気が変わった。

「すみません、滝沢。やっぱり先に行ってもらえますか」

「うん？ そうか、わかった」

僕の性質をわかっている滝沢は、ただそれだけを言って要望通り先に行ってくれた。

僕は取り出した教科書とノートを重ねてそろえ、それから深呼吸をひとつしてから教室を出た。滝沢に1分と遅れない出発だった。

僕は時々無性にひとりになりたくなる。

別に誰もいない空間にひとりである、という状況でなくてもいい。周りに人が大勢いいるのに、誰も話しかけてこない、見向きもしな

いい そういうのも十分だ。むしろそっちのほうが好みかもしれない。

今も、これから特別教室に行くのだと考えた瞬間、普段はあまり近寄ることのないその場所を独りで歩きたいという欲求に駆られたのだ。

前に一度、僕のこの性質を宝龍さんに話したことがある。

「また孤独病？」

廊下を歩く僕に、その宝龍さんが声をかけてきた。

そう。そのとき彼女は、それを“孤独病”と名づけたのだ。

「そのようです」

「変わらないのね、恭嗣は」

僕の横に並んだ宝龍さんは微かに笑った。

しかし、そうは言うが実は彼女も僕と同じく孤独病の持ち主である。僕らの間にいくつかある共通点のひとつだ。

宝龍さんは僕の横を黙って歩く。

このままずっと黙っているつもりなのだろうと思っていたら、程なく口を開いた。

「家では優しくしてあげてるの、彼女には」

「佐伯さんですか？」

「ええ」

「まあ、僕なりに」

しかし、僕がそう思ってやっている行動が、真に誰が見ても優しいかどうかは、また別の問題ではあるが。「君のため」、「これほどひとりよがりの台詞もないだろう。」

「そう」

対する宝龍さんの声はやや平坦。いちおうギリギリ平均値か。

「優しく抱きしめてあげたり？」

「………すると思いますか？」

「可能性はあるわ。だって、彼女は私じゃないもの」

「………」

そりゃあ可能性ならゼロじゃない。でも、なぜそんなことをする必要があるのかという点で考えれば、限りなくゼロだ。

「そこまでしろとは言わないけど、少しは気にかけてあげなさい」

「善処はしますよ」

「じゃあ、私は先に行くわ」

只今孤独病発症中の僕に気を遣ってくれたのだろうと思った。

「後ろで誰かさんが怖い顔してるから」

「後ろ？」

振り返ってみて、

(うわ……)

僕は思わず声を上げそうになった。

そこにいたのは雀さんだった。

僕らの少し後ろを歩き、今にも噛みつきそうな勢いでこちらを睨んでいる。正確には、僕を、だろっけど。雀さんは相変わらず僕が宝龍さんに近づくのを快く思っていないようだ。

「じゃあね、恭嗣」

苦笑しつつそう言うと、宝龍さんは早足で先に行ってしまった。

僕も雀さんから逃れるために、いつそ駆け出してしまいたかったが、宝龍さんに追いついてしまつては意味がない。それに僕が彼女を追いかけたりしたら、今度こそ間違いなく雀さんが噛みついてくることだろう。

仕方ないので雀さんは放っておくことにした。

渡り廊下を通つて特別教室の集まる校舎へと移ると、途端に人気がなくなった。ここにくるのは2年に上がつて初めてだ。1年のときでも数えるほどしか足を運んだことがない。

そんな馴染みの薄い場所を、僕はかすかな寂寥感とともに歩く。

すると、正面から4人ほどのグループがやってきた。

「……」

どうやら最近の僕は簡単にはひとりになれないらしい。現れたのは佐伯さんを含む1年生のグループだったのだ。

佐伯さんは僕に気がつくと、ひとり駆け出し、嬉しそうにこちらに向かってきた。

「やほ、弓月くん、偶然っ」

佐伯さんも懲りない性格だ。まあ、今日はたまたまなのでよしとしよう。

「わたしは音楽室の帰り。弓月くんは？」

「今から視聴覚室です」

多少なりとも穏やかに答えられたのは、これが偶然の遭遇であるのと、先ほど宝龍さんにあんなことを言われたせいだろう。換言すれば、気まぐれ。

「キリカ、先行ってるよー」

「うん。すぐに追いつくから」

佐伯さんのいたグループがすれ違いざまに声をかけていく。ついでにちらちらと僕の顔も見ていった。

「視聴覚室かあ。」

佐伯さんが改めて何か言いかけたときだった。

「あなた、1年の佐伯さんよね？」

割って入ってきたのは雀さんだ。

「ええ、そうですけど……」

「悪いことは言わないから、弓月君に近づくのはやめておきなさい」
雀さんの口調は、子どもに言い聞かせるよう落ち着いたものだった。

「あの、それはどういう……?」

言われたことの意味を飲み込めず、きよとんとする佐伯さん。

「あのね、たぶん知らないと思うけど、弓月君は去年すっごい美人とつき合ってたの」

「え……?」

「なのに、何が気に喰わなかったのか、3ヶ月ほどで彼女を振って別れちゃったのよ」

「……」

「いい？ 弓月君は簡単に女の子とつき合って、簡単に女の子を振るような冷たい人間だから、あなたも気をつけるのよ」

雀さんはそう締めくくった。

佐伯さんが驚いた表情で僕を見た。たぶん言い訳でも期待していたのだろう。だが、あいにくと言うべきことは何も無い。雀さんの言ったことは概ね事実だ。

それにしても、雀さんもいつまでもパワフルなことだ。世間ではだいぶ風化してきた話題だというのに。僕は思わずため息を吐いて彼女に目をやった。

「なに？ 文句あるの？」

睨む彼女に、僕は肩をすくめて応えた。

文句などない。そして、これが彼女の親切心の現れであることも否定するつもりはなかった。

僕は雀さんがここまで僕に噛みついてくる理由を知っている。生真面目な委員長タイプの（実際に委員長である）雀さんと、“元”と言われていたが未だになぜ留年したかわからないくらい成績優秀な優等生、宝龍さん。雀さんにとって宝龍さんは憧れなのだ。だから、その宝龍さんを振った僕を許せないでいる。

雀さんの名誉のために言うておくが、彼女は僕が宝龍さんとき合いはじめたことに怒ったりはしなかった。宝龍さんを泣かせるようなことをしたら承知しない、と笑って言うていたくらいだ。許せないのは僕が宝龍さんを振ったとされている事実のほうだ。

泣かせたら承知しない 要するにその言葉は本当だったわけだ。

「ふん」

雀さんは鼻を鳴らして去っていった。

後に残されたのは、僕と佐伯さん。

「あ、あの……」

佐伯さんが戸惑いの表情を見せつつ、口を開いた。

「わ、わたしちょっとびっくりしてて……か、帰ってからね」

早口で言い、ぱたぱたと駆けていった。

帰ってから、か。
特に話すことなんてないのだが。

その日の夕食、僕らの間に会話は無いに等しかった。

ゴールデンウィークを目の前にして、佐伯さんと一緒に暮らすようになって一ヶ月近くになるが、こういうのは初めてだった。

性格的に僕は自分で主導権を握って会話をリードするといった真似は得意ではない。尤も、幸いにして静寂を好む質なので、この沈黙は苦にならなかった。ただ、いつも賑やかな佐伯さんが黙っているのが気にならないと言えれば嘘になる。

これといった会話もなく夕食が終わった。

「ね、コーヒー入れてくれる？」

空になった皿を前に、佐伯さんが言った。

丁度僕も飲みたいと思っていたところだ。僕は食後のコーヒーの準備をすべく席を立った。彼女も立ち上がり、皿を片づけはじめ。僕がそれぞれのマグカップにコーヒーを用意すると、佐伯さんが食器を洗い終えるのがほぼ同時だった。僕らはリビングではなく、もう一度ダイニングのテーブルについた。

まずは一口飲んで喉を潤す。

僕から見て後方、リビングではとりあえずつけておいたニュース番組が明日の天気を告げていた。テレビ欄は把握していないが、もうすぐしたらニュースも終わり、面白くもないバラエティ番組かクイズ番組でもはじまるのだろう。

「ねえ、昼間の話って本当なの？」

先に口を開いたのは佐伯さんだった。

昼間の話。

雀さんが語って聞かせた例の話だ。

「本当です」

「カノジヨがいたの？」

「いましたね」

僕がそう答えると、佐伯さんは顔を伏せて黙り込んだ。視線の先には両手で包み持ったマグカップ。そこに注がれたコーヒーの表面を見つめている。

「意外でしたか？」

「意外……」

佐伯さんはその構造のままでもリピートした。

「意外っていうか……そういうこと考えもしなかった。言われてみて初めて、ああそういうこともあるだろうなって思った。……うん、弓月くんだもんね。カノジヨくらいいてもおかしくないよね」

因みに僕は、僕に恋人がいるなんてちゃんちゃらおかしいと思っている人間であるが。

「美人だっという話も本当？」

再び顔を上げて訊いてきた。

「本当です」

「すっごい？」

「そうですね、君が学校ではっと目を見張るくらい綺麗な人を見かけたら、まず間違いなくそれが彼女です」

「そうなんだ……」

佐伯さんは何か考え込むようにして、意識とは乖離した動作でコーヒーを口に運んだ。

「弓月くんが振ったの？」

「巷間、そう言われてます」

「他人ごとみたい」

「じゃあ、はつきりと 事実です」

「……」

再び佐伯さんは黙り込む。

「わたしね、弓月くんにかノジヨがいたって聞いて、ちょっと驚いたけど納得できた。わたしが知らない弓月くんって、きつといっぱいあるんだろうなって。でも、そのかノジヨを弓月くんから振ったっていうのが、どうしても納得できない……」

「でも、事実です」

僕は少し前に言ったばかりのフレーズを繰り返した。

「僕はつき合いはじめて3ヶ月と経たずに、彼女を振りました。佐伯さんが何をもって納得できないのか知りませんが、僕はそういう人間です」

「その自嘲的で自虐的な言い方っ」

佐伯さんが語気を荒らげた。

「そういう言い方、弓月くんらしくないし、女の子を振ったっていうのも今の弓月くんから想像できない。だから納得もできない！」

「じゃあ、現2年生をつかまえて聞いてみるといい。一時期けつこう話題になりましたからね、誰でも知ってますよ」

今日、雀さんの口から出なくても、遅かれ早かれ佐伯さんの耳に入っていたことだろう。

「理由っ。理由は！ 別れた理由をおしえて」

「そんなこと、君には関係ありません」

言っていて自己嫌悪に陥る。最低レベルの言い分だ。

「そんな言い方、ひどい。わたし、弓月くんがそんな軽くて冷たい人じゃないって信じたいのに。……もういいっ」

佐伯さんは椅子を蹴倒しそうな勢いで立ち上がった。そのまま高い位置から、怒っているような、今にも泣き出しそうな顔で、僕を睨む。

が、しかし次の言葉はなく、僕を残してリビングのほうへ去っていった。僕はそれを目で追うこともできず、背中越しに彼女が部屋に入っていく音を聞いた。

「……」

しばらくして僕は、まるで今まで呼吸まで硬直していたかのように、大きく息を吐いた。

改めてコーヒーを飲む。

苦い。

どうやら淹れ方が悪かったらしい。

8(1)・何をやっているんだ、僕は

表面上、

特に変わらない日常が続いていた。

起きるべき時間が近づき、浅くなった眠りの中で、僕は朝を感じる。

やがてノックの音が聞こえ。

「モーニンツ、弓月くん」

直後にドアの開く音と、佐伯さんの元気な声。

僕がゆっくりと目をあけると、彼女の顔があった。僕の頭の両サイドに手をつき、真上から見下ろしている。

真剣な表情。

僕を真剣に見つめているというよりは、僕を見ながら何か考え込んでいるといった顔だ。

瞼をあげた僕と目が合う。

と、佐伯さんは逃げるようにして笑顔を作った。

「おはよう、弓月くん。朝ごはんできてるよ」

「着替えたらすぐ行きます」

「うん、待ってる」

そう言うと彼女はすぐにベッドから離れ、背中を見せて部屋を出て行った。

残された僕の頭には、佐伯さんの逃げ遅れたみたいな真剣な表情が、いやに強くこびりついている。

目をあけるとそこに佐伯さんの真顔があったことなんて、今までだって何度もあった（尤も、その意図ははかりかねるが）。でも、僕の心の中を覗こうと試みるような眼差しは、ここ最近のものだ。

「……………」

やはりきっかけは先日の言い合いか。

しかし、彼女には悪いが、僕は去年の僕に何があったかなんて、佐伯さんに話す必要などないと考えている。

「今週末からゴールデンウィークですが、佐伯さん、連休中の予定は？」

朝食にホットケーキを食べながら僕は尋ねた。

そのとき、佐伯さんは丁度食べている最中だったらしく、僕を見ながら返事をする意思を示しつつ、まずは食べることを優先した。いつもなら慌てて飲み込んで、すぐにでも喋り出す場面だ。

「まだ決めてないけど、叔父さんのところに遊びに行こうかなって思ってる」

口の中のものを嚥下して、返事。

佐伯さんの叔父さんは、アメリカからひとり先に帰国した彼女がここに落ち着くまで、何かと世話を焼いてくれた人と聞いている。

まあ、その尽力も不動産屋の二重契約というオチなのだから、なんだか報われない。

「弓月くんは？」

「僕は佐伯さんの予定が決まってから考えようと思ってます」

僕の選択肢も家に帰るか否か程度のものだ。佐伯さんの場合、親戚の家が遠く、行くなら新幹線にも乗るようなちょっとした旅行だが、僕は所詮は電車で2時間ほど。その気になればいつでも帰ることがができる。

故に、佐伯さんが連休中は学園都市にいるというのなら、僕もそうしようと思っていた。

「別にいいよ。わたしのことは気にしなくても」

しかし、あっさりばっさり斬られてしまう。どこか素っ気なくも聞こえる。

「……まあ、そう急いで決めることもないでしょう。週末までに考えればいいことです」

「ん。そだね」

これつきりゴールデンウィークの話は終わり。この後もいくつかの話題について話をしたが、それは会話というよりはむしろ互いの予定の確認作業めいていた。

食後、リビングでコーヒーを飲む。

登校までにはまだまだ余裕がある。佐伯さんというと、今日は雨など降りそうもない天気なので、登校前に洗濯をすませるのだと行って、さっきから慌しく洗濯にいそしんでいる。

「佐伯さん、今日は、帰りは遅くなりそうですか？」

洗濯ものに入った籠を持って脱衣所から出てきた彼女をつかまえ、訊いてみる。

「さあ？ わかんない」

しかし、まるで断ち切るようにして短くそれだけを言い、僕の横を通り過ぎてベランダへと出て行ってしまった。

「……」

まあ、放課後の予定なんて流動的だから、今わかるはずもないか。僕だって矢神と大型書店に行くこともあれば、滝沢とゲームセンターに繰り出すこともある。宝龍さんに屋上に呼び出される可能性だってあるだろう。

バカなことを聞いた　そう思っていると、佐伯さんがベランダからひよっこり顔を出した。

「大丈夫。遅くなるようだったら連絡するから」

「わかりました」

取ってつけたような会話だ。

僕は残っていたコーヒーを一気に飲み干し、立ち上がった。

「じゃあ、僕は先に行きます。後はお願いします」

「はい。……あ、そうだ」

と、一度は引っ込んだ佐伯さんの顔が再び。

「もし遅くなったら、弓月くん、洗濯もの取り込んでいてくれる？」

「いいですよ、それくらい」

最初の役割分担により、洗濯に関しては僕は基本ノータッチとなっている。でも、必要ならいつでも交代もするしフォローする。そこに文句などひとつもない。

「女の子の下着を手取るチャンス」

「あのね……」

「きゃー、弓月くんが怒ったー」

ひと睨みすると佐伯さんはベランダに姿を消した。僕はため息をひとつ吐いてから、登校の用意をする。

表面的にはいつもと変わらない日常でも。

僕らの間には確実に溝ができていて、ことあるごとにそれを意識させられた。

マンションを出ると、まずは駅に向かって歩くかたちになる。

道路は片側二車線。中央分離帯があり、一車線辺りの間隔も路側帯も余裕を持って幅を取ってあるので、かなり大きな道路だ。

今、僕が歩いている歩道もタイル敷きで幅が広く、真ん中には等間隔に街路樹まで植えられている。

まるで何かのパンフレットに載っていきそうな小綺麗な街並みだが、人通りや交通量が妙に少ない。そういう点でもやっぱりパンフレットの写真的なものを感じる。

このままこの道を歩いて学園都市の駅に出るわけではなく、途中から水の森高校へと通じる道に入る。

駅と学校を結ぶ道には、まだ比較的早い時間であるにも拘らず、水の森の制服を着た生徒の姿がちらほらと見かけられた。僕はその中に見慣れた猫背を見つけた。

「おはようございます、矢神」

追いつき彼　矢神比呂に声をかける。

「あ、おはよう、弓月君」

眼鏡の友人からは、ぼそぼそとした気の弱そうな返事が返ってきて

た。普段から彼はそういう傾向にあるが、しかし、今日はその平均よりもいくぶんか下回っているように思えた。

「どうしたんですか、元気がないようですが」

「ちよつとね、実は朝方まで原稿を書いてて」

「ああ、なるほど」

合点がいった。

矢神はこう見えてもプロの小説家だ。またどこかの文芸雑誌から短編でも依頼されているのだろう。

「半分徹夜になったわりには、あまり書けなくて……」

それはまた報われない。

「スランプですか？」

「どうだろう。安易にそういう言葉に逃げたくはない、かな」

弱々しく笑うが、言葉とは裏腹に内面の強さを感じさせる言葉だ。

決定的に睡眠が不足している矢神が気だるそうなこともあって、僕らはしばし黙って歩を進めた。

と。

「弓月君のほうこそ浮かない顔をしてるみたいだけど、何かあったの？」

矢神が訊いてくるが、僕にはその自覚がなかった。

だが、あるいは、と思わなくもない。矢神は人を思いやれる人間であり、そういう方面での機微に鋭い。その彼が言うのだから、僕は本当に浮かない顔をしているのだろう。

「いったいなぜ、という自問は必要ないか。」

「ちよつと気になってることがあります。矢神が原稿の進み具合に悩んでるように、僕にも悩みごとがあるんです」

そう誤魔化したところで丁度学校に到着した。

矢神も今ここで僕の抱える悩みを詮索するつもりはないらしく、それ以上のことは訊いてこなかった。

下駄箱の林立する昇降口で、学校指定の革靴から上履きへと履き替える。

「あ、弓月さんだ。おーい」
不意の呼び声。

声のしたほうへ目をやれば佐伯さんのクラスメイト、桜井さんが癖っ毛のショートヘアを揺らし、小走りに駆け寄ってくるところだった。

「おはようございます。弓月さん、矢神さん」

桜井さんは僕らの前で足をそろえて止まり、お辞儀をした。

「おはようございます、桜井さん」

「おはよう」

「弓月さんって、いつもこの時間なんですか？」

登校が、という意味らしい。

「いや、テキストです。家が近いですからね。早いときもあれば、遅いときもあります」

唯一考えるべきフアクタは、佐伯さんと登校時間をずらすことだ。

「いいなあ、近いつて。しかも、ひとり暮らし。……今度遊びにいつていいですか？」

「まあ、そのうちにね」

どうも危機感の希薄な子だ。ある意味、佐伯さんと似たもの同士かもしれない。

「あ、そうだ、桜井さん。ちょっと聞きたいことがあるんですが、少しだけいいですか？」

「はい？ 何ですか？」

「弓月君、僕、先に行ってるから」
気を遣ってくれたらしい矢神はそう言い、ひと足先に教室に向かった。

僕は、目立つところでの立ち話も何だと思い、桜井さんを促して隅のほうに場所を移す。あまり人に見られたくない。早くすませよう。

「桜井さん」

と振り返って、僕は驚いた。彼女がやけに近い位置に立っていた

からだ。ほとんど僕が見下ろしているような構図。両腕を回せば抱きしめてしまえそうだ。

話すときの距離が妙に近いのは、桜井さんの癖みたいものらしい。

「えっと、最近の佐伯さんって、学校ではどんな様子ですか？」

僕は気を取り直して切り出した。

桜井さんは一瞬きよとした表情を見せた後、今度はじっと僕の顔を見つめてきた。

「もしかして弓月さんって、キリカのこと気になってるんですか？」

「少しね……って、いや、そういう意味じゃなくて」

なにやら誤解を与えてしまったようだ。

「ふうん」

まあ、いいですけどね　と、桜井さんは言う。

「それにしても変なことを聞くんですね」

それから彼女はくすりと笑い、すつと一歩後ろに下がった。会話をするのに適度な間隔があげられた。

「変ですか？」

「ごつい場合って、『カレシがいるかどうか知らない？』とか、

『俺のこと何か言っただけ？』とか

「……」

“俺”とか言っただけで喋っているのは、いったいどこの誰なのだろうか。というか、やっぱり大きな誤解があるようだ。少し、頭が痛い。

「それに関してはまた改めて訊かせてもらうことにして」

気にならなくもない事項ではある。特に、学校で余計なことを話していないか、とか。

「教室でのキリカ、ですか……？」

桜井さんはようやく答えてくれる気になったようだ。右手の小指を顎にあて、考える。

「わたしが見る限りじゃいつも通り、かな？　あいかわらずかわいけれど、ひかえめでおしとやかで……」

その時点で僕から見たら異常事態なのだが、今は置いておくことにしよう。

「先週だったかな、ケータイ買って　あ、これが黒なんですけどね。で、嬉しそうにニコニコしてたり。……ううん、それくらいかなあ」

「そうですか」

「あ」

と、桜井さんが声を上げた。

「そういえば、2、3日前くらいから時々浮かない顔してるんですがありますね」

「……」

浮かない顔、ね。

ついさっき僕が矢神に指摘されたのと同じというわけだ。

「ここで悩みを聞いてあげて、キリカポイントアップ！ ……なあなんて、ちよつと自分に不利になるようなことを助言してみたり？」

えへ、と笑う桜井さん。

佐伯さんが何を思い悩んでいるかなんて、聞かなくなっただけでわかるさ。

「ありがとうございます、桜井さん」

「え？ あ、ちよつと、弓月さん！？ ああん、もうっ」

僕は桜井さんに礼を言ってから、踵を返した。彼女の地団駄でも踏みそうな抗議の声を背中で聞きながら教室へと足を向ける。

「何をやっているんだ、僕は」

僕の態度が佐伯さんの傷つけてしまったことなんて、端からわかっていたことだ。要するに、それを確認しただけじゃないか。

自己嫌悪。

そして、袋小路。

話が僕だけのことなら、いくらで話してやれるのだが……。

8(2)。「君に理解できなくても」

昼休み。

教室で矢神と一緒に昼食を食べ終えた後、自分の席で弁当箱を片づける。

この弁当箱は佐伯さんが選んだものだ。それを包む小風呂敷も。そして、中身も当然今朝彼女が詰めたもの。ある意味でこの弁当箱というのは佐伯さんの趣味の塊と言える。

現状を何とかしないと。

弁当箱を見つめながら思う。

そして、僕の足は自然と宝龍さんの席に向かっていた。ただ何となく彼女と話がしたいと思った。

が、しかし、その足も宝龍さんの席に辿り着く前に止まってしまふことになる。そこに主がいなかったのだ。いるのは数人の女子生徒。さつきまで彼女たちに囲まれて、宝龍さんも一緒に弁当を食べていたと思ったのだが。

「なに、弓月くん。宝龍さんに何か用？」

そんな言葉を投げかけてきたのは、雀さんだ。彼女は半眼を釣り上げるといふ、実に器用な目つきで僕を睨んでいる。

他の女の子たちは苦笑気味。雀さんの弓月恭嗣嫌いは皆もよく知るところなのだ。少し前ならここにいる全員から冷たい目で見られていたが、今はそういうことはほとんどなくなった。

「彼女にちよつと用がありました。どこに行つたか知りませんか？」

「さあ？」

と、冷たい感じで雀さん。

「さつき黙つて教室から出て行つたわ」

でも、すぐに不承不承言葉を付け足した。

雀さんは根っからの委員長タイプで、相手が嫌いだからといって嘘を吐いたり、知っていることを隠したりといったことはしない。

少々融通のきかないところもあるが、それも含めて愛すべき人柄だろう。

雀さんの言葉を聞いた僕は、ああ、と納得した。

孤独病だ。

宝龍さんは急に独りになりたくなくて、ふらつと出て行ったのだろう。なら行き先はいくつもない。

「わかりました。こちらから行ってみます」

「ちょっと弓月くん、あなたねえ。少しは察しなさいよ」

「え？ ……ああ」

おそらく雀さんは、宝龍さんがトイレに行ったと思っているのだろう。僕だつてそこまで無神経ではないつもりだ。

「違いますよ。たぶん宝龍さんはそこじゃないです」

「……どこに行ったかわかっているような言い方」

「単に心当たりをいくつか知っているだけです」

上手くすれば最初の候補で当たりを引くかもしれない。

「さすがによく知ってるのね」

雀さんは忌々しげに言うと、ふん、と鼻を鳴らして、もう話すことはないとはかりにクラスメイトとおしゃべりに戻った。

僕は相変わらずな雀さんの態度に苦笑しつつ、その場を後にした。

「屋上かな、やっぱり」

教室を出て、最も確率の高そうな場所を目指す。

階段を上がって3階へ。1年生の教室が集まる場所だ。周りにこちらを注視している生徒がいないのを確認してから、さらに階段を上がった。

屋上へと出る鉄扉のノブを握ると。

「……当たり」

それはすんなりと回り、開いた。

鉄扉をくぐって青空の下に出、宝龍さんの姿を捜す。この学校では屋上に出るのは禁止されているし、開放もされていない。なのでグラウンドや他の校舎からここにいるのを見られるわけにはいかな

い。おのずと立てる場所は限られてくる。
いた。

彼女はグラウンドとは反対側のフェンスにもたれて立っていた。学校の敷地外からしか見つかることのないポイントだ。

宝龍さんはすでにこちらを認めていた。僕がこの屋上に出てきたときから気づいていたのだろう。

「珍しい。恭嗣がこんなところにくるなんて」

温度の低い声と、睨むような目つき。かと言って、別に怒っているわけではなく、これが宝龍美ゆきのデフォルトだ。

「迷惑でしたか？」

「今は大丈夫」

因みに、迷惑なときは本当に「迷惑。帰って」と言われるから恐ろしい。

僕は宝龍さんの横に並んで立った。ただし、彼女が内向きにフェンスにもたれて立っているのに対して、僕は外向き。街の風景を眺めている構図だ。

この方向だと学園都市の駅が見える。視界に横たわっているのは、線路を乗せた高架橋だ。学園都市を貫く路線は高速鉄道なので、高速道路の如くこの高架橋の上を走っている。おかげで街に踏み切りというものは無い。駅の周りはショッピングセンターと高層マンション。典型的な新興住宅地のデザインだ。

「こうしていると思いつくわ」

宝龍さんが懐かしそうに話を切り出した。

「何をですか？」

「ふたりで授業をサボって、人には言えないようなことを」

「すみません。思い出す以前に、そんな記憶がないのですが」

「……」

宝龍さんは黙り込む。

「……」

「……」
「冗談よ」

「……」

……嫌な冗談だ。ここにきたのは間違いだっただかもしれない。

「その冗談、他では言わないでくださいよ」

「そうね。彼女が聞いたら誤解しそう」

宝龍さんはくすりと笑った。

「佐伯さんは関係ないでしょう」

「ええ、関係ないわね。私も彼女の名前を出した覚えはないもの」

「……すごく帰りたくなりました」

「こここのところ急速にこの手の冗談が増えている気がする。いったい何なのだろう。からかわれているのか？」

「帰るのなら止めないけど、何か相談があっってきたんじゃないの？」

「相談……」

相談、か。何を相談すればよいのやら。

「違った？」

「いえ。でも、僕自身よくわかっていないので」

「じゃあ、今感じてる素直な気持ちは？」

「そう言われて僕はしばし考える。」

そして。

「……女の子は難しいですね」

つくづくそう思う。

僕に過去カノジヨがいたと知って動揺するし、僕からカノジヨを振って別れたと言ったら信じないし。拳句、その経緯に何か事情があると信じているふうで、別れた理由を知りたがる。

そういったことを僕は宝龍さんに吐露した。

「わりと簡単な話ね。恭嗣が前にどんな子とつき合っていたか、あの子が気にするのも当然じゃないかしら」

彼女はさらりと言ったのけた。

「そうですか？」

「わかってるんですけど」

じろりと睨まれた。

これに関してはノーコメント。

「そうね。あの子が昔、男の子とつき合っていたとして、それがどんな相手だったか恭嗣は気にならない？」

「……別に」

僕は努めて平坦な声で返した。

「僕がそんなことを気にすると思いますか？ あなたとつき合っていたときだって」

「私の一切に関心がないのは当然ね」

宝龍さんはぴしゃりと言って、僕の言葉を遮った。

「それでも私の場合とは少しくらい違うと思っただけけど？」

「……」

「パス2ね」

そう言っただけで僕の心を見透かしたように笑った。こういうときにやっぱり彼女は年上だと感じる。

「さて、そろそろ中に入るわ」

「もうですか？」

「私がここにきて13分から17分ほど経ったわ。もう十分。戻りながら話しましょ」

宝龍さんは言っただけで早く歩き出した。僕も遅れて足を踏み出し、唯一無二の出入り口である鉄扉へと向かう。

「それにしても、あの子は恭嗣のことをよく見てるわね」

「どうでしょうね」

「恭嗣の言ったことを信じなかったんでしょ？ それこそが証拠だわ。よくわかってる。勝手な憶測とイメージだけで噂を広めて鵜呑みにするような連中とは大違い」

言葉の後半には軽蔑の響きが含まれていた。

鉄扉は宝龍さんが開け、そのまま僕のために道をあけてくれた。

「ありがとうございます」

僕はひと言言ってから、先に階段部屋へと入った。

そこに。

思いがけない人物がいた。

「佐伯さん……」

3階へと下りる階段の踊り場に彼女は立っていた。その顔に浮かんでいるのは、申し訳なさそうな、戸惑いの表情。

「あ、あのね、お京が上に上がっていく弓月くんを見たって言うから
ら
」

「あら」

それを遮ったのは宝龍さんの声だった。彼女は遅れて僕の横に立った。

佐伯さんが驚いた顔で、僕と宝龍さんの顔を交互に見る。

そして。

「その人、なの？ 弓月くんが前につき合ってたっていう人」

「ええ、そうです」

さすがにひと目でわかったようだ。

僕は質問に答えながら階段を下りた。踊り場で佐伯さんと対峙する。宝龍さんは3段ほど上からそれを眺める構図だ。

「弓月くん、もう別れたって言ってなかった……？」

戸惑いの色を濃くしながら、ちらちらと宝龍さんのほつを窺い、僕に確かめる。

「言いましたね。実際、別れましたよ。去年の12月だったか」

「クリスマスの前ね」

宝龍さんが補足を加える。

佐伯さんがむっとしたような顔を見せた。

「それにしても仲がいい感じ。こんなところにふたりきりで」

「言わなかったかもしれませんが、彼女とはクラスメイトです。話
くらいはしますよ」

「だからって……」

佐伯さんの語調が少しずつ弱くなっていく。

「別れたらそれきり話もしてはいけなくてわけではないでしょう」
僕の言葉に佐伯さんは口をつぐむ。が、それでもどこか何か言い

ただ。

「君に理解できなくても、これが僕のスタイルです」と。

「恭嗣」

宝龍さんの声に、僕は彼女のほうに目を向ける。視界の隅では佐伯さんもはつとして顔を上げていた。僕を呼んだ宝龍さんはそれきり何も発音せず、視線だけで語りかけてきた。

言いたいことは何となくわかる。

彼女は前にも言っていた。もうやめたほうがいい、と。しかし、正直なところ、あんな莫迦な話を本当に語って聞かすべきなのか、僕は判断に迷っていた。

「弓月くんのこと、名前で呼んでるんですね」

僕が決心し切れずにいると、先に佐伯さんが口を開いた。彼女は挑むような意志の強い目つきで、宝龍さんを見上げている。

「気に障ったのなら謝るわ。前からの癖なの」

「……」

さすがというべきか、どう見ても謝りそうにない態度だった。しかも、ひとり高い場所にいるし。

「別に何とも思ってません。ただ……」

と、そこで佐伯さんは一拍おいた。

「わたし、弓月くんと同棲してます」

「は？」

間の抜けた声を上げたのは僕だ。何でこのタイミングで　と思ってしまうような、一見して唐突に見える発言だった。しかし、佐伯さんにとってはある種の切り札だったのかもしれない。

「恭嗣」

宝龍さんが再びこちらを見た。僕を咎めるような表情。それから佐伯さんに向き直り、小さなため息とともに言った。

「知ってるわ」

「……え？」

この返事は予想外だったらしい。虚を突かれたような顔をしている。

「前に恭嗣から聞いているの」

「そんな……」

佐伯さんがゆっくりと僕を見る。

「どうして……？ わたし、一緒に住んでるのって誰にも内緒だと思ってた」

「まあ、そうですね」

やむを得ないことで、一時的な措置ではあっても、あまりおっぴらにはできないことだ。

「だからこそ何かあったときのため、事情を知ってる人がいたほうがいいと思い、彼女には話しておきました」

「何よそれ。そんなの聞いてないっ。わたしは弓月さんとふたりだけの秘密だと思ってた。子どもみたいって言われるかもしれないけど、それが楽しかった。それなのに……っ」

佐伯さんは言葉を詰まらせた。

「それなのに弓月くん、とつくに喋っちゃってるし。相手は前のカノジョだって言うし。しかも、別れたわりには、まだ仲がいいみたいだし。わたしには昔のことはぜんぜん話してくれなくて」

「が、そこからは堰を切ったように溢れ出す。」

「もつわけがわかんない！」

そして、最後に叩きつけるようにそう言つと、駆け出し、階段を下りていった。

僕は追いかけることもできず、その後姿を見送る。

「……恭嗣」

「……」

「女の子の扱いが下手ね」

「否定はしませんよ。どこかの誰かさんとはそんなことを気にするようになつき合い方をしませんでしたからね」

宝龍さんに同居の件を話しておいたのが裏目に出たか。

いや。

原因はもっと別の場所か。

まったく。いつの間にかこんなことになったのだろうな。

8(3)。「僕のことを知っておいて欲しいと思ったから」

「どうするの？」

と、宝龍さんが訊いてきた。

僕らはいよいよ先ほど屋上へと続く階段の踊り場で佐伯さんと会い、その後、別れた。尤も、別れたというには少々剣呑な雰囲気ではあったが。今はふたりして教室に戻っている最中だった。並んで階段を下りる。

どうするの、と彼女は訊く。

「どうしましょうか」

と、僕は答える。

「佐伯さんが何を怒っているのかさっぱりで」

「嘘ね」

宝龍さんははつきりと断じた。

普段から温度の低い声が、今はさらに冷たく感じるのは、僕の精神的要因によるところが大きいのだろうか。

3階に下り立つ。丁度そこを通りかかった1年生がぎょっとしたのは、上から人が下りてきたのに驚いたことと、宝龍さんの美貌に目を見張ったのと、半々だろう。

「教室に行ってみる？」

「やめときましよう。今行っても話にならないと思います」

僕らはそのままさらに階段をゆっくりと下りる。

「わかってる？ あの子、恭嗣のこと」

「知ってますよ」

最後まで言われなくなかったので、僕は宝龍さんの発音を遮った。「知っている、というと語弊がありますね。僕は超能力者じゃありませんから。……何となく、そう感じてはいました」

「だったら」

「でも、それは未確定です」

例え僕がそう感じていても、佐伯さんが明言したり意思表示をしない限り、それは未確定情報でしかない。推測だ。

「私の目にもそう見えただわ」

「それでもです」

あくまでも観測による推測であって、評価は下せない。

「恭嗣はどうなの？」

宝龍さんは違うアプローチで再び僕に水を向けてきた。

「僕ですか？」

「まったく気にもとめてないってわけじゃないんでしょう？」

「……」

「……」

沈黙という名の空白^{ブランク}。

階段の踊り場に到達した。体の向きを180度向きを変え　そ

こで僕は口を開いた。

「佐伯さんと一緒に生活するようになって、もう一ヶ月になります」

「それが？」

「いえ、ただそれだけです。そう思っただけ」

「下手な誤魔化し方」

宝龍さんは呆れたようにため息を吐いた。

まあ、自分でもそう思うが。

「お互い好きでもないのにつき合ってみた男女を、僕は知っています」

「奇遇ね。私も知ってるわ」

「……茶番でしたね。あれと同じ轍は踏みたくないものです」

同意を求めるところに言ってみたが、しかし、宝龍さんからの反応はなかった。

道程は2階へと。僕ら2年生の教室が集まる階だ。

「その茶番の話、あの子にしてあげたら？　私のことはかまわないから」

「必要があれば、ね。でも、できることならしたくないです。あま

り面白い話ではありませんから」

「そう」

宝龍さんは感情を交えない平坦な声で言う。

「私はこの件に関して口を挟める立場じゃないから、恭嗣のやりた
いようにやればいいわ。……兎に角、私のことは気にしなくていい
から」

「わかりました」

「じゃあ、私は先に戻るわ」

そう言つと僕の返事を聞く前に、早足で先に行つてしまった。

僕は逆に心持ちゆっくり歩き、彼女とタイミングをずらして教室
に戻つた。

放課後。

僕は終礼が終わると素早く教室を出た。昇降口で上靴から学校指
定の革靴に履き替えるが、まだ帰るつもりはない。

昇降口を出たところで佐伯さんを待つ。

幸い放課後のここには他のクラスの友達を待つ生徒が多く集まる
ため、僕が人待ち顔で立つていても目立つことはない。午後に買つ
たお茶のペットボトルを鞆から取り出し、ひと口飲んで喉を潤した。
やがて下校のピークを迎え、昇降口から大量の生徒が吐き出され
はじめた。友達を待つ生徒も増え、彼らはそれぞれの待ち人と合流
して校門を出て行く。

しかし、そこに佐伯さんの姿はなく、さらに下校ラッシュが過ぎ、
生徒の流れが一旦途絶えても、やはり最後まで彼女を見つけ出すこ
とはできなかつた。

見逃したのだろうか。いや、それはないと思う。勿論、佐伯さん
が僕を避けているなら別だが。時折思い出したように生徒が出てく
る昇降口を見ながら考える。

結局、佐伯さんが出てきたのは、それから優に1時間は経つた後。
丁度、僕がペットボトルに口をつけようとしていたときだった。

都合のいいことにひとり。

「佐伯さん」

僕の声でようやくこちらに気がついたようだ。彼女は大きな目をさらに大きく見開き、驚きをあらわにした。

それから一瞬だけ、泣き出しそうな顔。

そして、胸に拳を当て、困ったように視線を地面に彷徨させた後顔を上げた。

佐伯さんがこちらに向かって歩いてくる。僕のほうからも寄っていった。

「ど、どうしたの？」

そう問う声には戸惑いの色。

「佐伯さんを待ってました」

「……」

「一緒に帰りませんか？」

押し黙る佐伯さんに、僕は続けた。

「行きましょう」

こうして立っただけでも仕方がないし、実際に歩き出したほうが口も滑らかになるかもしれない。逆にまったく何も話さなくても、それならそれでいいと思っている。

僕は足を踏み出した。

「待って」

が、直後、佐伯さんに呼び止められ、一歩足を出しただけに終わった。

「弓月くん、ずっとわたしを待ってたの？」

「ええ、まあ」

「たまたま何かの用でこの時間になっただけじゃなくて？」

「そうです。教室を一番に出て、ずっとここで待っていました」

「……」

「……」

短い沈黙を経てから。

「変なの。だったら電話でもメールでもしてくればいいのに」

「それも考えたんですが、そういうツールを使わずに会えたらいいなと思ったんです」

僕がそう言うと、佐伯さんはぷつと吹き出した。

「変なの」

もう一度言った。

「そんなに変ですか？」

「弓月くんって、もっと合理的で効率的にもの考える人だと思ってた」

「そういう部分があることも否定しませんよ。でも、基本的には無駄を愛する性格のつもりです」

「ふうん、そうなんだ」

佐伯さんは可笑しそうに僕を見上げてくる。心の奥を覗かれているような、落ち着かない気分させられる視線だ。

「兎に角、帰りましょう」

僕はその視線から逃げるようにして背を向け、歩き出した。すぐに佐伯さんも横に並び、ふたりそろって校門を出た。下校時間を完全に外れてしまったので、水の森の生徒の姿はなかった。

しばらくの間、さっきまでの饒舌さが嘘みたい黙って歩いた。やがて。

「弓月くんが言った通り、すごい美人……」

佐伯さんがぼつりとこぼした。

「宝龍さんですか？　そうですね。僕もそう思います。初めて見たときは驚きました」

去年の4月、1年生最初の授業の日。彼女を見たときの衝撃は今でも忘れられない。勿論、その彼女と後につき合うことになるのは、そのときは思いもしなかったわけだが。

「あんなきれいな人と、どうして別れたの？」

「……」

言葉はすぐには出てこなかった。

どう話したものが、どう切り出せばいいか、言葉を探す。

「僕と彼女は」

「話して、くれるんだ」

言いかけたところで佐伯さんが割って入った。

「そのつもりです」

「どうして？」

どうして？

どうしてだろう。

「そうですね。佐伯さんには僕についてのいろんなことを知っておいて欲しいと思ったからかもしれない。だから君が知りたいのなら、できるだけ話そうと」

同居人なのだからお互いのことは知っておくべきだ　そんな建前を言うのは簡単だが、そういう誤魔化しはよそう。

とは言え、今、彼女に面と向かって口にできるのは、これが精いっぱい。

「……」

なのだが、さすがに何か反応をくれないと、こちらも困る。

「話を戻しましょう。……僕と宝龍さんは」

「もういいよ」

再び佐伯さんが僕の発音を遮った。

「弓月くん、なんか言いにくそうだから　いい」

「……」

すっかりバレてるな。宝龍さんも言っていたか。佐伯さんは僕のことをよく見ている、と。

「でも、話してくれる気になったんだよね。じゃあ、今はそれだけでいい。それだけで嬉しいから。また今度話して」

「……わかりました」

少しほっとした部分もあった。

結局のところ、やはりあまり話したくない話題ではあったし、それを聞いた佐伯さんの反応が怖かったのだろう。

佐伯さんのほうはというと、ご機嫌が麗しく回復されたようで、足取りも軽やかなもの変わった。やはり彼女はこうあるべきだ。その姿を見て、改めて思った。

大きな交差点で、僕らは90度折れる。

信号は丁度、青。横断歩道を渡るとき、佐伯さんは白い部分だけを踏むようにして歩いていて。歩幅が合わなくて次第に大股になり、それでも間に合わなくなると、最後には跳ねるように渡った。

彼女のほうが僕より3歩ほど早く渡り切った。

その勢いで数歩進んでから、ぴょんと跳ねてこちらを振り返る。

後からくる僕を迎えるように立ち止まった。

「ゴールデンウィークはどうするの？」

佐伯さんは僕に訊く。

「僕はこの前言った通り、佐伯さんに合わせるつもりです。君は、親戚のところでしたっけ？」

「ううん、やめた。こっちにしようと思う」

「そうですね」

なら僕もそうしようか。

「ねえ」

佐伯さんはそう切り出してから、一拍おいて。

「デートしようか、ゴールデンウィーク」

「……」

さすがにちょっと面喰らう、唐突な提案だ。
でも。

「いいですよ」

まあ、それも佐伯さんらしいと言えば佐伯さんらしい。

「ほんと！？ やったあ」

彼女は嬉しそうに歓声を上げると、弾むような足取りで再び歩き出した。

僕も後を追う。

と、少ししてから佐伯さんはまたもこちらを振り返り、足を止め

た。

「喉渴いちゃった。そのお茶ちょーだい」

学校を出たときからずつと手に持っていたペットボトル。

僕は思わずそれを見た。

「飲みかけですよ？」

「いいよ。わたしは気にしないから」

佐伯さんは僕を試すような笑顔を向けてきた。

「そこまで言うならいいですよ。ぜんぶ飲み切ってくれたら、僕に被害はありません」

「被害ゆーなっ」

むっとして言いながらも、彼女は僕の差し出したペットボトルを受け取った。キャップを外し、特に躊躇うこともなく口をつけた。こくこく、と小さな音を立て、喉の奥に流し込む。

「はい」

そして、少し飲んでから、それを僕に突き出してきた。

「は？」

「もういい。返す」

「ぜんぶ飲んでください」

「いいの。もう十分飲んだから」

「……」

突きつけられているのは、キャップの開いたペットボトル。果たして僕は何を求められているのだろうか？ これは試練か何かだろうか。

佐伯さんを見ると、あの試すような笑顔があった。

「まったく……」

返されてきたそれを受け取り、彼女がしたように僕も口をつけた。中身は気持ち程度にしか残っていなかったので、飲んでしまうのはひと口だった。

それを待っていたかのように、佐伯さんが跳んで距離を詰めてきた。

僕の腕を取り、自分の両腕を絡めてくる。

「さ、帰ろっ」

僕がよるめくのもかまわず、腕を引つ張って歩き出す。

「ゴールデンウィーク、どこ行こっか？ 楽しみだね」

「そうですね」

どちらかというとまた何かトラブルがありそうな予感がしているけど、きっとそれも佐伯さんがいれば楽しいものになりそうな気がする。

そうか。もうゴールデンウィークは目の前なのか。

家にはテキストに理由をつけて帰れないと連絡しておかないとな。

/ # 1 了

サイドストーリー1-1 「風邪、ですか？」と僕は尋ねた

新学期がはじまって最初の金曜日の夜のことだった。

「この週末、僕は一度家に帰りますよ」

風呂から上がったばかりの僕は、寝間着代わりのスウェット姿。佐伯さんもすで風呂をすませているのでパジャマを着ていた。僕はリビングでそれぞれ自分の座椅子に腰を下ろし、テーブルを挟んで向かい合う。

「ほわ？」

「だから」

「ほわ」という驚き方は斬新だと思った。

「この土日、家に帰ります」

「なんで？」

「こちらにきてからまだ一度も家に帰っていませんからね。新学期もはじまりましたし、親に顔を見せて、こちらの生活に問題がないことを報告しておかないと」

問題がないわけではないが。

「ルームメイトがいることも、このまま黙っているわけにはいきません」

「わたし、挨拶にいったほうがいい？」

「やめてください」

僕は間髪入れずお断りする。

「じゃあ、黙ってるんだ、一緒にいるのが女の子だったこと」

そう、問題はそこなのだ。

「今はね。タイミングを見て言うか、すべてが終わってから明らかにするか」

今言えば確実に軽めのパニックが起こるだろう。母は大騒ぎ、父は押し黙って動転。妹は喜びそうだ、野次馬的に。

「兎に角、明日の午前中に帰って……戻ってくるのは日曜の夜でし

ようね」

「なんか寂しい……」

「子どもじゃあるまいし。昼間は誰かと遊びにいったらどうですか」「そりゃあ、お京とかいるけどさ……」

「どうやら彼女にはすでに休みの日に会うくらいの友達はあるようだ。人懐っこい彼女なら当然と言えば当然か。」

佐伯さんは黙っていた　　が、いきなり。

「はくちんっ」

くしゃみだった。

「いや、くしゃみらしいというほうが正確か。どうも妙に白々しくしゃみだったのだ。」

「佐伯さん、今のはくしゃみですか？」

「僕は思わず確認してしまった。」

「うん。くしゃみ。湯冷めしかけてるのかも。……わたし、もう寝るね」

佐伯さんは立ち上がった。

「おやすみ、弓月くん」

「あ、はい。おやすみなさい」

「なんだかよくわからないが、佐伯さんは逃げるようにして自室に引き上げていった。」

「……」

本当によくわからなかった。

翌日。

「毎朝僕を起こすのを趣味と日課にしている佐伯さんが、今日に限って起こしにこなかった。」

「かと言って彼女に起こされないと寝坊してしまうわけではない僕は、それならそれで単に自力で起床するだけなのだが。」

「リビングに出てみても佐伯さんの姿はなかった。」

「正直、珍しいと思った。彼女はアメリカからの帰国子女なのだが、」

未だに時差ボケ状態にあるのではないかと思えるほど、普段から朝が早く、そして、朝から元気なのだ。僕が先に起きたのは今日が初めてだろう。

とりあえずコーヒーマーカーをセットした。

それでも起きてくる気配がないので、僕は彼女の部屋のドアをノックしてみた。

「佐伯さん、朝ですよ」
すると、

「うゝ」
「……………」

なんだ、今のは。うめき声だろうか？

「入りますよ？」

すべてがいつもと違う。さすがに心配になって僕は彼女の部屋に踏み入った。

確かに佐伯さんはベッドに寝ていた。

「どうしたんですか？」

「か……………」

「か？」

「風邪ひいたみたい……………」

「……………」

これには返す言葉が見つからなかった。なぜなら僕が見たところ、いつもの彼女と変わりないように見えたからだ。つまり病人には見えなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「うゝ、うゝ……………」

居心地の悪い沈黙を埋めるように、再び佐伯さんがうめいた。

「風邪、ですか？」

「うん、風邪。やっぱり昨日、湯冷めしたみたい……………」

なるほど。昨日のあの奇妙なくしゃみは伏線だったわけだ。さて、どうしたものかな。

「とりあえず熱でも測ってみますか」

僕はひとまず部屋を出た。キッチンに行つて食器棚の上に置いてある救急箱を下ろし、そこからデジタルの体温計を取り出した。

再び佐伯さんの部屋に戻る。

「これで熱を測ってみてください」

体温計を差し出すと、彼女は布団から手を出し、恐々それを受け取った。

「頭痛はありますか？」

「うん、少し……」

「喉は？」

「痛いかも」

「鼻は？」

「ちよつとづばってる……」

急に濁点だらけの声になった。

「お腹は？」

「減ってる」

「……」

そうか。食欲があるのはいいことだ。

「僕は何か薬を取ってきますので、君は熱を測っていてください」
「う、うん……」

僕は再びキッチンへと戻ってきた。いちおう救急箱の中にはひと通りの薬をそろえているけど、さて、こんな症状盛りだくさんの人間に飲ませる薬なんてあるのだろうか？ いや、それ以前に飲ませているのだろうか。

風邪薬の中でいちばん軽いそんな総合感冒薬を持って佐伯さんの部屋へと向かう。が、その足が部屋の前で止まった。中で彼女がなにやらごそごそやっていたからだ。ドアが開いているのに気がついていないのだろうか。

佐伯さんはベッドから立ち上がり、勉強机の照明に体温計を近づけていた。さらに今度はパジャマの袖で「しごし」と擦っている。

「……」

果たしてそれはデジタルの体温計に効果があるのだろうか。

僕はそつと数歩後ろに下がった。

「佐伯さん、入りますよ」

改めて宣言する。

一瞬遅れて中でどたばたする音が聞こえてきた。それを確認してから部屋に入ると、彼女は先ほどと同じようにきっちりベッドに収まっていた。

「どうですか？」

「う、うん……」

佐伯さんは布団から手を出して、おずおずと体温計を差し出してきた。僕はそれを受け取り、液晶を見てみた。しかし、そこには何も表示されていなかった。

「佐伯さん、消えてますよ」

「え？ あれ、そ、そう？ もしかしたらリセット押しちゃったか

も……」

「……」

そつきたか。

「君が見たときは何度でしたか？」

「えつと、40度？」

「40度？」

「じゃなくて、38度だったかな？」

彼女は訂正してから、誤魔化すように乾いた笑いを漏らした。

「38度……。まあ、普通の風邪でしょうね。ここに薬を持ってきました」

「弓月くん、ありがとう」

「でも」

「でも？」

「今より症状が悪くなったら飲むようにしてください。今はダメです」

むしろ飲むだけ無駄だ。勿体ない。よく考えたら水も用意していないのだから、僕もたいがiiii加減だ。

「いいですね？」

「うん……」

佐伯さんは力なく頷いた。

「それでね、弓月くん」

そして、恐る恐る訊いてくる。

「弓月くん、今日はどうするの？」

僕は思わず大きなため息を吐いていた。結局このドタバタも、ここがスタートでゴールなのだ。ここまでつき合ったのだから、とことんまでつき合うべきか。

「そりゃあ、家に帰るのは中止でしょうね」

「ほんとっ?」

「風邪をひいてる君を置いていくわけにはいきませんから」

我ながら甘いことだ。

「ただし、昼までに起きてきたらもう治ったとみなして、僕は予定通り家に帰ります」

「えー」

「病人でしょう? それくらいは我慢して寝てなさい」

「……」

さすがに自ら招いたことなので、これには文句は言えないようだ。まあ、自業自得というものだろう。

「また後で様子を見にきてあげますよ」

「うん」

彼女に布団をかけ直してやり、僕は部屋を後にした。

佐伯さんが静かなうちに家に電話をしておくことにしよう。昼過ぎには彼女が全快になって起きてくるに違いないのだから。

サイドストーリー1-2 彼と彼女の10のエピソード

1. 役割分担

「じゃーん、けーん……」

佐伯さんが元気よく掛け声をかける。

「ぼんっ」

それに僕も合わせる。所謂じゃんけんというやつだ。

結果は。

「やったあ。わたしの勝ちー！」

この通りである。

「じゃあ、洗濯もわたしがやるね」

「ちよつと待つてください。さつき食事の当番も取ったばかりですよ」

「いいじゃない、やりたいんだから。その方が弓月くんだって楽ができるでしょ？」

これで万事解決とばかりに言うが、さすがにそうもいかない。僕はそんな偉そうな立場でふんぞり返っていられるほど凶太い性格ではない。

「だいたいなんで勝った方がどんどん当番を取っていくんだろっな。

「やっぱり役割分担は公平にすべきです。洗濯は僕がしますよ」

「ふーん」

しかし、途端、佐伯さんの目が挑戦的に光った。

「弓月くん、わたしに下着とか手に取る度胸あるんだあ」

「……」

「別にわたしはいいけど？ 弓月くんさえよければ」

「ここまで甘く見られては黙って引き下がるわけにはいかない。

「僕には妹がいます。だから、そういうものにまったく縁がないわけではありません」

抵抗がないわけでもないけど。

「あ、そうなんだ。でも、考えてみて。妹さんは結局のところ家族なわけでしょ？」

「まあ……」

「それにわたし、フェミニンなものも多いけど、ちょっと大人っぽいのも持ってたりするんだから。……それでもやる？」

佐伯さんは口の端を吊り上げながら、僕に問う。

「……」

「……」

僕はしばし考えて。

「すみません。洗濯はお願いします」

「はい。お願いされました」

彼女は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

2・朝の佐伯さん

まどろみの中でもの音を聞いたような気がした。

それをきっかけに意識が覚醒へと向かう。

朝か。

体内時計と時間感覚からそう判断した。

「……くん」

今度は声。

涼やかだけど、聞き慣れない声だ。誰だろう？ 妹のゆーみなら

もつと平坦な声をしている。

僕は重い瞼を開いた。

「あ、起きた。おはよう、弓月くん」

「ッ！？」

目に飛び込んできたのは、佐伯さんの笑顔だった。

不思議なブラウンの髪を持つ美少女は、僕の頭の左右に手を置き、

真上から僕を見下ろしていた。

「うわあっ」

一拍遅れて、僕の口から悲鳴が走った。

思わず上体を起こしたせいで佐伯さんとぶつかりそうになったが、彼女が咄嗟に飛び退いてくれたおかげで衝突は避けられた。

「そんなに驚かなくてもいいと思う」

佐伯さんは口を尖らせる。

「あ、いや、すみません。まさか起こしにくるとは思わなくて……」
思い出した。昨日から彼女と同居しているのだった。

「もしかして弓月くんって、寝顔を見られるのが嫌なタイプ？」

「そういうわけではありませんけどね」

ただ単にびつくりしただけです。起きたら目の前に女の子、それ
もとびきりの美少女がいたもので。

「そう。……あ、朝ごはんできてるよ。着替えたらすぐに来て」
「わかりました」

そう応えてから、部屋を出て行く佐伯さんを見送る。着替えてい
る間に気持ちもフラットに戻るだろう などと思っていると、そ
の佐伯さんが足を止めた。

「これから毎日起こしにきていい？」

「毎日、ですか？」

「ダメ？」

彼女は小首を傾げる。

「まあ、いいんじゃないですか」

それほど楽しい行動とは思えないけど。

僕としては、起きたときそこに佐伯さんがいるというのも悪くは
ない気がした。

3・買いもの

ふたたび学園都市の駅前にあるショッピングモールに、買いもの
に出かける

買いものももう何回目かになる。生活必需品の類はひと通り買い

そろえたので、そろそろ他のものを見たり考えたりする余裕も出てきた。

ショッピングセンターでは、まず上の階を回って、最後に1階に入っているスーパーに寄って帰るのが僕らのお決まりのコースだ。そして、それは上の階の雑貨コーナーの前を通りかかったときのことだった。

「あ、弓月くん、学校がはじまったらお昼どうするの?」
唐突に佐伯さんが聞いてきた。

「やっぱり学食、でしょうね」

「お弁当じゃないの?」

「今まではそうでしたけど。母が作ってくれましたから。でも、これからは学食です」

ひとり暮らしが決まってから、多少なりとも自炊できるくらいの料理は即席で習得したけど、さすがに毎日弁当を作るほどではない。

「わたしが作ってあげようか?」

「佐伯さんがですか?」

僕は思わず聞き返した。

「そう。わたしも最初は学食に行くつもりだったけど、ふたりいるんならお弁当を作るものもいいかなと思って。その方が安くつくんじゃないかな」

「かもしれないね」

我が家も経済的余裕が皆無というわけではない。僕を私立の高校に入れてくれたし、こうして家を出るのも許してくれた。だからこそ必要以上の負担はかけたくない。節約できるところは節約すべきだろう。

「決まりね。半分は前の日の残りとか冷凍食品とかになっちゃうけど、まあ見えて」

「期待してます」

「ここ何日かの食事で、佐伯さんの腕前は実証済みだ。」

「じゃあ、さっそくお弁当箱を買わないと」

言つが早く雑貨コーナーに入つていった。なるほど、こついう連想だつたわけだ。僕は納得しながら、彼女の後を追つた。

「弓月くん、これくらいの大きさでいい？」

「いや、それはちよつと大きすぎます」

運動部の友人がそんな弁当箱を持つてきているけど、僕には手に余る。

「じゃあ、これくらい？」

「そんなものでしょうね」

先ほどのものよりふた回りほど小さい弁当箱がピックアップされた。手ごろだ。そのサイズを参考に佐伯さんは選んでいく。

と、不意に彼女が僕の方に顔を向けた。

「こつして買ひものしてると思つただけどね」

「何ですか？」

「新婚さんみたいじゃない？」

「みたいじゃないです、絶対に」

間髪入れずきつぱりと、冷やかに否定しておいた。それは錯覚です。

「そつなるとお弁当はさしずめ愛妻弁当？」

「違つと言つてるのに、なぜ話を先に進めますか、君は。……もう好きにしてください」

そつ言えば、滝沢には4月から僕も学食組だと言つてしまったのを思い出した。ひとり暮らしになつても弁当を持つてくる僕に、彼は何を思つだろう。何かいい言い訳を考えておかないと。

「ね、弓月くん。これなんかどう？」

佐伯さんがひとつ差し出してきた。特にファンシイな柄がついているわけでもなく、シンプルなデザインだ。

「いいんじゃないでしょうか」

「でね、こつちがわたしの」

反対側の手にはもうひとつ回り小さい弁当箱が。それは僕と同じデザインで、ただサイズが違うだけの、所謂“おそろい”だった。

「……いいと思いますよ」

まあ、一緒に食べることはないのだから、特に問題はないだろう。

4・買い物ものの帰り その1

僕が水の森高校に通いはじめた去年辺りから、学園都市の駅前マンションの建設ラッシュだ。もうふたつが建ったし、今またひとつが建設中だ。

ショッピングモールでの買い物ものの帰り、佐伯さんが足を止めてその建設中のマンションを見上げた。

「すごいね。また建つんだ」

「そのようですね」

これが終わったらまた別の空いた土地を見つけて、次を建てるのだろう。

「憧れるなあ。高層だし。いつくらいに完成するのかな？」

「9月だと書いてあるのをどこかで見た気がします」

「そっか、9月か。……ね、2学期になったら引越そうか？」

佐伯さんは目を輝かせて言う。

「今のところに越してきて、まだ一週間も経ってないじゃないですか。莫迦なことを言っていないで帰りましょう」

僕はそんな佐伯さんの思いつきにつき合っていないと、家路に足を向けた。すぐに彼女も追いついてきて、横に並んだ。

と。

今の会話に何かおかしいところはなかっただろうか？ どうにもひっかかる。

『こんな高層マンションが賃貸なわけがないでしょう？』

確かにそうだけどポイントはそこではない気がする。

「……」

「……」

漠然と感じている違和感の正体が掴めないまま、僕は黙々と足を

前へと交互に運ぶ。なぜか佐伯さんも黙っていた。

あ。

わかった。

「何で僕まで引越しにつき合わされるんですか？」

「あ、それもそうか」

佐伯さんも気づいていなかったようだ。

僕らは応急処置的に一緒に住んでいるだけで、佐伯さんがそうしたいと言うのならそうすればいいのだ。僕まで一緒になる必要はない。

「そこは、ほら、何となく？」

「何となくで巻き込まれたらたまったものじゃないです」

「弓月くんだってふっつーに答えてたくせに」

「うるさいですよ」

子どもの喧嘩にまでレベルが下がったことを自覚しつつも、強引に佐伯さんの抗議を封殺した。

僕は彼女ではなく、自分に負けた気分だった。

5・買い物ものの帰り その2

建設中のマンションの前を通って、佐伯さんとふたり、帰路を行く。

「そう言えば、弓月くんって妹がいるんだよね」

隣で佐伯さんが訊いてくる。

「いますよ」

「かわいい？」

「かわいいですね。……と言っても、容姿云々ではなく、血を分けた妹だから、という意味ですが」

「ふーん。どんな子なんだろ？ ……ところで、わたしの武勇伝、聞きたくない？」

「武勇伝？ 何ですか？」

僕は聞き返す。

「うん。わたしが今みたいに歩道を歩いてたときなんだけどね」
佐伯さんは武勇伝の意味ではなく、いきなりその内容を語りはじめた。

「道路を走ってた車が少し先で止まったの。と思ったら今度はバツクしてきて。わたしの横まできてから、『君かわいいね。一緒にカラオケ行かない?』って」

「……」

武勇伝とは、佐伯さんのかわいさを語るエピソードのことだったようだ。

まあ、車道をバツクしてくるといふ行為に及ぶのは理解不能だが、彼女に声をかけたくなる気持ちはわからなくもない。

「そういう話を聞くと、男ってバカだなと思いますね」

「うん。あれは女の子に見とれて事故るタイプだと思う」

容易にそれが想像できて、笑ってしまった。

「うーん、弓月くんの妹か……」

佐伯さんはまた前に話題に戻ったようだ。

「弓月くんがお兄さんなのか……」

「自分で言うのもなんですが、僕はあまりよい兄ではありませんか」
ら

「そうなの?」

「だと思えますね」

どっちのベクトルにも僕は確証を持っていない。よい兄だとも思わないし、反対に悪い兄になった覚えもない。兄妹間の交流は、この年頃らしくほどほどだ。なので、自分をよくない兄と位置づけておくのが無難だろう。

「そうかなあ? わたしは弓月くんみたいなお兄さんがいたら」

と、そこまで言っつて佐伯さんが口を閉ざした。

そして。

「やっぱりちょっと困るかも……」

「でしょうね」

苦笑するしかない。

まあ、自分のことは自分がいちばんよくわかっているから、面と向かってそう言われてもショックはないけれど。

6・夜の佐伯さん

引越しの後片づけがひと通り終わって余裕が出てきたのか、僕は家から持ってきた読みかけの本を読みはじめた。

いざ読み出すと止まらなくなるもので、本を閉じたときには真夜中。間もなく日付が変わろうとしていた。まだ春休みだからできる夜更かしだ。

部屋からリビングに出る。

そこに佐伯さんの姿はなかった。確か夕食後しばらくして風呂に入るといつていたから、もう眠っているのかもしれない。僕もそうすることにしよう。

と、その前に喉が渴いた。先に何か飲んでからにした方がよさそうだ。コーヒーを飲んだら眠れなくなるほど繊細ではないが、あえて神経の立つようなものを飲むこともないだろう。僕は冷蔵庫からウーロン茶のペットボトルを取り出した。

グラスにそれを注いだとき、背後でドアが開く音がした。

「あ、弓月くんだあ……」

続いて、普段よりも間延びした声。

振り返ると佐伯さんが自室のドアの前に立っていた。のほろほろの音がする。

「ッ!？」

僕はぎょつとした。

問題はその格好だった。パジャマのボトムを穿いていない。上着だけ。上着の裾からは白い下着がちらちらと見えている。しかも、上着も上着でボタンが上からふたつほどが外されていた。

「なんて格好をしてるんですか!？」

確か何度か見た。パジャマ姿は、こん刺激的な格好ではなかったはずだ。

「ん-？」

佐伯さんは自分の姿を見た。

「ああ、わたし、寝るときにはよけいなものはつけない主義なの…」

しかし、僕の動揺をよそに、彼女はこともなげに言った。というか、声の調子からして頭が半分眠っているのだろう。

「それより、喉渴いた。わたしもお茶ちょうだい……」

「あ、はい……」

僕は呆気にと取られて、たった今自分で飲むつもりで入れたウーロン茶のグラスを佐伯さんに差し出した。

「ありがとう……」

彼女はそれをごくごくと喉を鳴らして飲み干すと、空になったグラスを僕の手に戻した。

「じゃ、おやすみ……」

「おやすみなさい……」

そして、佐伯さんは再び部屋に帰っていった。

キッチンに残されたのは呆然とする僕と、空のグラス。僕は夜の佐伯さんとは極力顔を合わせまいと思った。

7. 不意の襲撃

始業式の前日。

リビングに放り出した携帯電話が鳴ったとき、僕はキッチンでコーヒーを入れていた。

「出ていい？」

佐伯さんが、メロディを奏でるケータイを物珍しそうに見ながら、僕に訊く。

「勿論ダメです」

僕はきっぱり断ると、マグカップにコーヒーを注いでから、リビングの方に戻った。

端末のサブディスプレイを見ると、

宝龍美ゆき とあった。

佐伯さんはこれを見ただろうか。彼女が座っている位置から置き去りにした端末まで距離があるから、たぶん見えていないと思う。尤も、見られたとしても特に問題はないから、無意味な心配ではあるが。

「もしもし？」

通話ボタンを押して、電話に出る。

直後、じつとこちらを見ている佐伯さんに気づき、場所を変えることにした。右手にマグカップ。肩と頬で端末を挟み込み、空いた左手で自室のドアを開けた。

「恭嗣？ 久しぶりね」

回線の向こうから宝龍さんの温度の低い声が聞こえてきた。

「ええ、久しぶりです。珍しいですね、電話なんて」

今まで春休みだったということもあるが、それ以上に宝龍さんと別れて4ヶ月。いちおう人目を気にして、話をすることはひかえている。そもそもつき合っているときでさえ、こんなふうに電話をしたりしなかった。

「恭嗣の声が聞きたくなったの」

「冗談でしょう」

「冗談よ」

面白い冗談だ。手が滑って電話を切ってしまいそうなくらい面白い。

ひとまずマグカップを机の上に置き、椅子を引いて腰かけた。

「明日、始業式よね」

「そうですね」

「私、理系を希望したの。もしかしたら一緒にクラスになるかもね」

「……………」

反応に困って黙り込んでしまった。とりあえずコーヒーをひと口飲む。

『どじっ?』

どじっ?

「そうですね。正直、別のクラスになった方が面倒がなくていいとは思いますがね」

と答えたとき、部屋のドアがノックされた。僕が椅子を回転させてそちらに向き直ったところでドアが開き、佐伯さんがひよっこり顔を出した。

「お風呂、先に入るね」

ぶちっ。

僕は、後で思い返してみても感心するくらい、素早く電話を切った。ついでに軽くキレそうになった。

「佐伯さん。こっちは電話してるんですから、黙って行ってください」

「ご、ごめーんっ」

彼女は謝りながら、逃げるようにしてドアの向こうに消えた。

「まったく……………」

僕はメモリイを呼び出して、宝龍さんに電話をかけた。

『もしもし? どうしたの?』

「ちょっと手が滑りまして。切れてしまいました」

『そう。でも、切れる前に声が聞こえたみたい』

案の定、聞こえていたようだ。

「テレビですよ。それより何の話でしたっけ」

そうやって誤魔化しながら、もし本当にまた宝龍さんと同じクラスになったら、佐伯さんのことも話しておいた方がいいかもしれないと思った。彼女なら何か困ったときに助けてくれるだろう。

8・決定的瞬間

その日は午後から雨が降った。

僕は制鞆の中に入れていた折り畳み傘を差して家に帰った。小さな折り畳みではどうしてもスラックスの裾や鞆が濡れてしまうが、ないよりはマシというものだ。

家に着くとドアは施錠されていた。佐伯さんはまだ帰っていないようだ。僕はポケットからキィを取り出した。鍵を開けて中に這入る。と。

「うわあっ」

「きゃあ！」

そこにバスタオル一枚を体に巻いただけの佐伯さんがいた。互いに悲鳴を上げた後、佐伯さんは脱衣場に引っ込んだ。

「何をやっているんですか!？」

僕は背をドアに張りつけながら問い質した。

「や、実は傘を持っていつてなくて……」

佐伯さんが言い訳をしながら、そろりと脱衣場から出てきた。：

…いや、出てこられても目のやり場に困るのだが。濡れた髪とか、風呂上りの上気した肌とか。ぴったりと張りついたバスタオルは体の最低限の面積を覆う程度で、くつきりと体のラインを浮かび上がらせている。

「濡れて帰ってきたんですか？」

「うん。それでシャワーを浴びてたの」

それで脱衣場から出てきたところに、ちょうど僕が帰ってきたというわけか。状況は把握した。きちんと玄関の鍵を閉めていた辺り、呆れるほど無用心というわけではなさそうだ。

「急いで帰ってきたんだけど、濡れるわ透けるわで、大変だったんだから」

「いいですから、そんなこと詳しく説明しなくても」

「弓月くんにも見せたかったな、ブラまで完全に透けてたし」

「……………」

人の話も聞かず、なぜそんなに嬉しそうに語るのだろう。はしやぎながら水のかけ合いをする子どもと一緒に、人間ずぶ濡れになるとハイテンションになるのかもしれない。

僕は顔を掌で覆って、ため息を吐いた。

「ん？ 前から思ってたんだけど」

「何ですか？」

「弓月くんって、こういう場面だと『ラッキー！』って思うよりも、逆に焦っちゃうタイプ？」

「まあ、少なくともそういう凶太さはないですね」

「ふーん」

佐伯さんは納得した後。

「そっかあ」

なにやら思いついたよう、にんまりと笑った。

……………嫌な予感がする。

と、思った次の瞬間、佐伯さんが一歩こちらに寄ってきた。僕はその分だけ後ろに下がろうと試みたが、すぐ後ろがドアだった。

「佐伯さん？ 君の部屋はあっちですよ」

「うん、知ってる」

ただそれだった。

止まる様子のない、バスタオル一枚の佐伯さん。

そして、手を伸ばせば届きそうな距離まで来たとき。

「あっ」

佐伯さんが突然大きな声を上げた。

「ど、どうしたんですか……………」

「タオル落ちそう」

「ちょ……………」

それは過去のどんなアクシデントよりもシャレになっていない。

「嘘だけど」

「……………」

硬直する僕の前で、彼女はいたずらっぽく舌を出す。

「……佐伯さん」

「なに？」

「回れ右。とつと部屋に戻りなさい」

「はあ〜い」

まるで遊び足りない子どものように不満げな返事をしながらも、佐伯さんは素直に帰っていった。

まったく。こんなことをふざけ半分でやられたら、こっちの身がもたない。

9. 部屋においでよ

僕が机に向かって勉強をしている横で、佐伯さんが床に寝転がってマンガ雑誌を読んでいた。

学校の帰りに買ってきたそれは少年向けの雑誌なのだが、なにせこの家は娯楽が少ないので、そんなものでも彼女は楽しげに見ていた。

「そう言えばさ、弓月くんってわたしの部屋にこないよね」

僕はシャープペンシルを持つ手を止めると、椅子を回転させて佐伯さんの方に向き直った。彼女も体を起こし、ぺたりと座り込むようなスタイルへと変わった。

「行く必要がありますからね」

「わたしに用事とかは？」

「あつても急ぎの用じゃない限りは、君が出てくるのを待てばいいだけです」

佐伯さんへの急ぎの用というのも、想像がつかないが。

「くればいいのに」

「男をほいほい部屋に入れるものじゃありませんよ」

尤も、僕に対してそんな警戒心があるのなら、最初からルームシェアをしたりはしないだろう。

「や、弓月くんがドアを開けたら、わたしが着替え中でドッキリ、みたいなイベントは必要かなと思って……」

「そんなもの必要じゃありません」

あと、女の子の部屋のドアをノックもせずに関けるほど、僕は常識ではない。

「わたしのそーゆー姿を見たくないと言っか」

佐伯さんはむっとした様子で、ジト目で僕を睨み上げる。……なんで睨まれなくてはいけないのだろう。

「見たいか見たくないかで言えば、見たくないです。心臓に悪い。この前で懲りましたよ」

「……へ？ この前？」

「なにそれ？」みたいな佐伯さんの顔。もしかしたら彼女はあのときのことをまったく、欠片も覚えていないのかもしれない。

「えっと、ですね。前に夜中、たまたま佐伯さんと遭遇したんですよ。いつも寝ているときの格好でしたね、君は」

「い、いつの話!？」

「僕らがここにきて、4、5日したくらいでしょうか」

「……」

「……」

黙り込む佐伯さんと、次の言葉が見つからない僕。

結果、沈黙。

やがて佐伯さんが、ぼったり、と床に崩れ落ちた。

「……ぜんぜん覚えてない」

やっぱりか。しまったな。この話は墓まで持っていくべきだったか。

「弓月くんがどんな顔したか見たかった……」

「……」

この間から佐伯さんが変な方向に向かっているように思っなのは、僕の気のせいだろうか。

10・明日からゴールデンウィーク

ゴールデンウィーク前日。

学校から帰宅した僕は、リビングでくつろいでいた。親もとを離れた新生活と高校2年生の最初の一ヶ月が無事終わったのだ。ここがひとつの区切りと言えるだろう。

TVから流れてくる夕方のニュースを耳で聞きながら、新聞の夕刊を読む。

僕のひとり暮らしが決まったとき、新聞なんかいらなと言ったのだが、「高校生なら新聞くらい読んでおけ」と父に言われ、こうして購読している。なければないでどうでもなるが、あったらあったで読むようになるのが新聞というものだ。

「たっだいまー！」

玄関から聞こえてくる元気な声。佐伯さんが帰ってきたようだ。

「おかえりなさい」

僕は彼女がリビングに現れるまで待つてから、声をかけた。

「えらくご機嫌ですね」

「わかる？ だって明日からゴールデンウィークだもんね、ゴールデンウィーク」

佐伯さんにはっこり笑って、楽しそうに答えた。

なるほど。その気持ちもわからなくはない。僕も少なからず心踊るものを感じている。

「とりあえず一段落と言ったところですね。疲れてるんじゃないですか？」

「え、どうして？」

佐伯さんは持っていた制靴をフローリングの床に放り出し、僕の横にぺたりと座り込んでから、不思議そうに訊き返してきた。

「ひとり先に帰国しての高校生活ですから」

「でも、弓月くんがいるし」

「ルームメイトが男だと面倒でしょう？」

「弓月くんだし」

立て続けに返ってくる暖簾に腕押し of 返事。なんともおおらかな性格だ。これならストレスも少ないかもしれない。

「弓月くんは？」

「僕ですか？ 僕は正直、時々気が休まらないことがあります」

「どうして？」

佐伯さんはぐっと身を乗り出すようにして、僕の顔を覗き込む。

「どうしてって……」

佐伯さんはよく僕をからかうし、時々きわどい格好で現れるし。

何より男というのはかわいい女の子と四六時中一緒にいると、けっこう落ち着かないものなのだ。

「口ごもる僕を見て、佐伯さんは笑う。

そして。

「……」

「こつこついうことするから？」

と言った後の動きは素早かった。

佐伯さんはやにわに腰を浮かせると、座椅子に座る僕の足をまた

いで、太ももの辺りに腰を下ろした。僕らは向き合っかたちになる。

「またこんなことを」

「こつこついうことするから？」

僕が呆れているのなんて気にも留めず、佐伯さんはさっきと同じ

質問を繰り返した。

「……ま、それもひとつの理由ですね」

僕がしぶしぶ答えると、彼女は嬉しそうに笑みを浮かべた。こつこ

つときに優越感を感じるらしい。

「ね、覚えてる？ デートの約束」

「覚えてますよ」

「ゴールデンウィーク中にふたりで遊びに行くという約束。」

「でも、その言い方、やめませんか？」

「いいじゃない。言い方を変えても、やることは一緒なんだから。

それにデートって言う方が、わたしは好きだな」

ね、と佐伯さんは微笑む。

「まあ、君がそう言うなら、別にいいですけどね」
諦めた。それにそれこそ言い方だけ変えても、中身は同じなのだから。

「それよりそろそろ下りてくれませんか」

「あ、そだね。晚ごはんの用意もしくちゃいけないしね」

そう言うってからようやく彼女は僕の上からどいてくれた。

佐伯さんは先ほど床に放り出した制靴を拾い上げ、ひとまず自室に向かった。帰ってきたばかりで、まだ制服のままだ。

ふと、佐伯さんがドアノブに手をかけたところで動きを止めた。そして、再びこちらに振り返り、問いかけてくる。

「ね、弓月くんもゴールデンウィーク楽しみ？」

「楽しみにしてますよ、いちおうね」

この辺は正直に言ってもかまわないだろう。何がどうと具体的に
は言いたくないが。

「そっか。わたしもすごく楽しみ」

幸いにして佐伯さんは深く追求してくることもなく、それだけを
言っただけで部屋へと消えた。

明日からゴールデンウィークか。

こここのところ何かとバタバタしていたからな。少しは穏やかに過
ごしたいものだ。

1(1)。「聞こえなかったことにしておいてください」

ゴールデンウィーク2日目。

1日目は妹のゆーみが予告もなくやってきて、その対応に追われて一日が終わってしまった。

今日の予定は佐伯さんと一ノ宮の方へ出かけることになっている。じゃあ10時くらいに出ましよう、と決めたのが朝食のとき。すでに時計の針はその10時を過ぎているが、未だ彼女が部屋から出てくる気配はない。まあ、女の子は支度に時間がかかるものと相場が決まっているので、気長に待つとしよう。

僕はリビングの座椅子に腰を下ろした。TVは点いていない。手を伸ばせば届くテーブルの上にリモコンがあるが、あえて点けなかった。

そうして無音の部屋で待つこと数分、

「ごめーん、弓月くん。待った？」

ようやく姿を現した。

佐伯さんの今日のスタイルは、赤いチェックのスカート姿だった。待ったかと問われると、待ったと答えるより他はないのだが、正直にそう言ってしまうのも心が狭い気もする。かと言って、今のリラックスした体勢では、待っていないと返すには無理がある。

結局、僕は回答を避けた。

「今日はまた初めて見る服ですね。佐伯さん、出かけるたびに違う服を着てませんか？」

勿論、実際にはそうでもない。2週間ほど前に携帯電話を買いに行ったときと、昨日は同じスタイルだった。それでも服を着回している印象がない。

「わたし、けっこう着道楽だから。いっぱい持ってきてるんだ」

「そうでしたか。僕なんか数えるほどしか持ってきてませんよ」

尤も、それも家が近いからなのだろうが。

「じゃあさ、今日、何か買ったら？」

「安くていいのがあればね。……部屋の窓は閉めてきましたか？」

僕は座椅子から立ち上がりながら尋ねた。

「おっけー」

「こつちも戸締りはオツケーです。じゃあ、行きますか」

リビングの照明を消して、廊下に出る。

玄関では僕が先にスニーカーに足を突っ込みつつ、外に出た。ドアが閉まらないように押さえながら、床を蹴って靴を履く。

振り返ると佐伯さんは、座ってショートブーツを履こうとしている最中だった。……それはいいのだが、どうにもスカートの奥が見えそう。というか、たぶん見えている。

僕は気づかぬ振りをして玄関から離れた。

「おっ待ちー」

僕が手を離れたドアがあと少しで閉まり切ろうかというところで、それを押して佐伯さんが出てきた。出発準備完了だ。

さして広くないマンションの階段を下りる。

その最中、佐伯さんの涼やかな声が頭上から降ってきた。

「見えた？」

思わず階段を踏み外しそうになった。

「……何がでしょう？」

「わかってるくせに」

「……」

沈黙は金、なり。

「弓月くんその無関心さは、男の子としてどうかと思うな」

「佐伯さんのその無防備さも、女の子としてどうかと思いますけどね」

階段を一階分下りて、マンションの表に出る。佐伯さんが僕の横に並んだ。

「いいこと思いついた」

「君がそう言うときは、僕にとってはたいていいいことではありません

せん」

彼女の“いいこと”は、ほとんどの場合、悪巧みに類似することと等号で結ばれるのだ。

「ランジェリーショップ行こっか？」

「……行けばいいのでは？ 僕は本屋で哲学書でも探してますからなぜに哲学書なのかは、言ってる自分でも謎だが。」

「弓月くんに選ばせてあげるって言っても？」

「尚のこと嫌ですよ」

「いったい何を考えているのだろうか。」

「男の子の好みに合わせようという、女の子の気合いをなんとか」

「もっと別のところで気合い入れてください」

「うー」

佐伯さんが不満そうにうなっているが 無視。そして、僕は精いっぱい、この話はこれで終わり、のシグナルを出す。そうでもないとなら彼女はまだまだ続けそうなのだ。

程なく住宅街から大きな通りへと出る。幅の広い道路に、タイルと街路樹で飾られた歩道 と、街並みはきれいなのだが、相変わらず交通量が少ない。

少しの間、無言で歩く。

すると、いきなり佐伯さんが僕の前に回り込んで立ち止まった。

何かと思い、僕も足を止める。

「ね、手つながない？」

右手を差し出してくる。

しなやかな長い指と、艶のあるきれいな爪。誰しみが 僕とて例外ではなく、触れたくなるような魅力的な手だ。

「昨日もやっただじゃない」

「昨日はゆーみを騙すためです。理由もなくそんなことできませんよ」

「理由は、わたしがそうしたいから……じゃ、ダメ？」

佐伯さんは、照れと自信のなさが同居したような上目づかいの表情で、弱々しい笑みを見せながら聞いてきた。

「ま、まあ、それなら理由として充分かもしれないですね」

さすがにそんなふうに言われたら、そう答えるしかない。僕は棒読みに言つて、手を差し出す。

「それでは、どうぞ。お嬢様」

「う、うん……」

佐伯さんは戸惑いがちに僕の手を取った。

「そっちの手じゃないです。フォークダンスでもするつもりですか、君は」

「あ、そ、そだね」

彼女は慌てて反対の手を出す。

そうしてようやく僕らは手をつないで歩き出した。……昨日もそうだったが、今日もやっぱりふたりとも駅まで無言だった。

学園都市の駅前までくると、一気に人が多くなる。ショッピングセンターがあるせいだろう。親子連れの買い物もの客が多いのだ。大きな繁華街である一ノ宮に行くにしても電車が手っ取り早いので、駅に流れていく人の数も多い。

そろそろ人目が増えてきて、手をつないでいるのが少々恥ずかしくなってきた頃（実際には誰も僕らのことなんか気にしてないのだから）、ついに顔見知りと会ってしまった。

宝龍美ゆきだった。

誰もが振り返りそうな美貌の持ち主は、きれいな黒髪を揺らしながら、改札口から出てくるところだった。これから学校に行くようで、水の森高校の制服を着ていた。

さすがはクールビューティと言すべきか、彼女は僕たちを見ても特に表情を変えなかった。

僕はつないだ手を離そうとしたが、しかし、それよりも早く佐伯さんが強く握り、そこから抜け出せなかった。

「あら、恭嗣」

「おはようございます、宝龍さん」

そして、そのまま接近。

「ふたりでお出かけ？」

「ええ、まあ、ちよつと」

「デートです」

当り障りのない言葉を選ぼうとした僕の横で、佐伯さんがきつぱりと言い切った。思わずぎよつとする。

「そうなの。ゆっくり楽しんできて」

しかし、宝龍さんというとおかしそうに笑っていた。彼女は大人だから、佐伯さんの態度が微笑ましかったのだろう。

「ええ、楽しんできます。下着も水着もゼーんぶ弓月くんを選んでもらいますから」

「いや、ちよつと、佐伯さん……」

佐伯さんはさらにヒートアップしていく。

「えっと、これはですね……」

「大丈夫よ、恭嗣。それくらいわかってるから」

こっちはますます楽しそうだった。ふん、と鼻を鳴らしてそつぽを向いてしまった佐伯さんは放っておいて、また僕の方に話を戻す。

「そう言えば、恭嗣の家、この近くのよね？」

「近いですね。今も徒歩できましたから」

「そう。じゃあ、一度学校の帰りにでも寄ってみようかしら？」

「宝龍さんがいいのなら」

彼女なら万が一にも間違いは起こらないだろう。

「お話し中のところ悪いんですけど」

と、再び割って入ってくる佐伯さん。

「わたしにも聞いてくれます？ いちおうわたしの家でもあるんですから」

「たしかにそうね。じゃあ、今度お邪魔してもいい？」

佐伯さんなら訊かせておいて嫌と答えるくらい平気でやるかと思

つたが、そうでもなかった。

「いいですよ。ただし、わたしがいるときにしてください」

「そういうことね。わかったわ。それにその方が面白そうだわ」

「……」

面白そう？ 何やらひどいことになりそうな気がして、僕はそこにいたくないのだが。

「さあ、あまり足止めしても悪いわね。そろそろ行くわ」

「そこまで言うてから、宝龍さんは改めて僕に向き直る。」

「恭嗣、最近のあなた、とても面白いわ。少し興味が出てきたかも
しれない。……それじゃあ、また休み明け、学校でね」

そうして僕らの横をするりとすり抜け、長い髪をなびかせて去っていった。

僕らは切符を買ってから、ホームへと上がった。

「ねえ、弓月くん」

並んで立って電車を待っていると、宝龍さんと別れて以降ずっと黙っていた佐伯さんが口を開いた。

「あの人もよくデートしたの？」

「いえ、一度も」

僕は正直に答える。

それに類すること、例えば学校から一緒に帰ったり、そのまま寄り道したりといったことはあったが、休みの日にわざわざ会ったことはない。

「プラトニックな関係？」

「そんなにいいものではありませんよ」

口調がやや投げやりになっている自分の自分に気づいた。

「知ってますか？ 恋愛において最初の段階としてまず肉体的なつながりがあつて、プラトニックというのはそれを越えたところにある、精神的人格的なつながりのことを差すんです。愛情のレベルとしてはより高次のものとして定義されています」

当然のことながら、僕と宝龍さんではその前段階にも到達していない。

「因みに、そう説いたのは哲学者プラトンです」

「あ、それでプラトニック？」

「そのようです」

佐伯さんは、ふうん、と関心したような声をもらす。

「ね、わたしたちもまずは最初の段階からだよね？」

「……」

「……」

「……」

「……今、けっこう大事なこと言ったんですけど」

彼女のむっとした声。そちらを見なくても半眼で睨んでいるのが、容易にわかった。

「知りませんよ。聞こえなかったことにしておいてください。ほら、電車がきましたから」

ちょうどタイミングよく僕らが待っていたホームに、電車が滑り込んでくるところだった。

1(2) . 「人として当然の欲求と行為だと言えます」

僕はプラットホームに滑り込んできた電車に乗り込んだ。

休日の電車はほどほどに混雑していて、ふたり並んで座るほどの余裕はなさそうだった。若ものは立っているということなのだろう。僕はそのまま真っ直ぐ反対側のドアまで進んだ。

ドアに背中をつけて立った佐伯さんが両手を広げる。

「なんですか、その動作は」

「日本じゃこういいうとき、向かい合ってくっつくんじゃないの？」

「違いますよ」

時々そういうのを見かけるのは確かだが。

「というか、こんなときだけ日本のことをあまり知らない帰国子女の振りをしないでください。そんなに長く日本を離れていたわけじゃないでしょうに」

「うん。2年」

彼女は悪戯を見つけた子どものように笑った。

それからしばらくはふたりとも黙って電車に揺られていた。佐伯さんは左肩をドアにつけるようにしてもたれ、僕は吊り革を持って立ったまま、外の景色を見ていた。

学園都市を貫く路線は高架の上を走っているので、外を眺めていると眼下に街並みが広がり、遠くまでよく見える。

「前も思っただけだ」

少ししてから佐伯さんが口を開いた。目はまだ外を流れる風景に向けられている。

「あの人、弓月くんのこと名前と呼んでるんだね」

「……そうですね」

事実そうなので、そうとしか答えられない。

「でも、僕は宝龍さんのことを名前では呼んでませんけどね」

「あ、そう言えばそうだね。……どうして？」

佐伯さんがこちらを向いた。僕らは向かい合うかたちになった。

「抵抗があります。なにせ彼女は年上ですから」

「年上？ 弓月くんより少し早く生まれたってこと？」

「ではなくて、まぎれもなく年上なんです。確か佐伯さんには言っていますんでしたね。宝龍さんは一年留年してるんです」

「え、そうなんだ。留年って、成績が悪かったってこと？」

「まあ、結論から言えば、そうなりますね」

水の森高校において留年に至る理由は、成績か出席日数くらいしかない。

入学試験を最優秀で通過し、新入生総代まで務めた宝龍さんが成績で留年というのも考えにくい話だが、しかし、彼女が一年生最後の定期考査をすっぱかしたのだから仕方がない。再試験の機会も与えられたが、宝龍美ゆきはそれすらも無視し、先生方は苦渋の決断の末、規定に従って彼女を留年させたのだ。

宝龍さんがなぜそんなことをしたのかは、今もって不明である。彼女なりの理由があったのだとは思うが、ただし、宝龍美ゆきは天才型の人間ゆえ、その理由が万人に理解できるものかどうかは定かでない。進級したくないわけがあったのかもしれないし、何かの実験だった可能性もある。

「というわけで、本来ならば彼女は3年に上がっているはずの人なんです。だから、名前で呼ぶような偉そうな真似はできません」

「ふうん」

佐伯さんは納得したような、そうでないような複雑な返事をした。

「わたしも弓月くんのこと、名前で呼んでみようかな」

「ああ、それはやめた方がいいです」

「どうして？」

「試しに口に出してみるとわかりますよ」

「こういうのは実際にやってみるのが早い。」

「えっと、恭嗣くん……うわ、言いにくい」

「そういうことです」

「ゆきつぐ」プラス「くん」だと、“く”の音がふたつ連なるせいで、非常に発音しにくいのだ。

「む」。弓月さんと名前で呼び合ったら、一步リードかと思ったのに」

「君はいつたい何と戦ってるんですか……」

考えたくもないし考える気もないが。

「ね、弓月くん。この電車、なんかすごいところ走ってるんですけど」

再びドアの方に体を向けた佐伯さんが、外に広がる光景を見て驚嘆の声を上げた。

眼下は谷だった。

学園都市はどうやら山を拓いてつくられたようで、途中一箇所、妙な絶景が広がっている場所があるのだ。遙か下には山間を縫うようにして道路が一本走っている。そして、ここを境にして、学園都市らしい風景は姿を消すことになる。

「佐伯さんは見たことなかったですか？」

「うん。まだ電車で遊びに行ったことないしね。試験とか引越しかで何度か通ってるはずだけど、そんな余裕もなかったから」

彼女は外に目をやったまま続ける。

「ついでに言うと、一ノ宮も初めて。ほら、少し先に新幹線に連絡してる駅があるでしょ？ あそこからきて、いつも一ノ宮は素通りだったし」

「なるほど」

逆に僕は去年一年、一ノ宮で別の路線に乗り換えていたので馴染みが深い。

「だからね、すごく楽しみ」

佐伯さんは再度こちらに向き直り、僕を見上げて無邪気に笑った。

一ノ宮は2本の有名私鉄とJRが連絡するターミナル駅だ。周辺には多数の専門店が入ったショッピングセンターや百貨店が複数林

立している。さぞかし競争も激しいことだろう。

僕らが乗ってきたローカル線の駅は地下にあり、電車を下りると、さっそく地上へと上がった。

「さて、まずはどこに行きますか？」

大きなスクランブル交差点を前にして、僕は佐伯さんに尋ねた。

前も横も、対角線にも、どちらに渡っても何かしらあるので、買いたいものには困らないだろう。おそらく一ノ宮で最も人通りの多い場所がこのはずだ。

「とりあえず目の前にあるデパートに入ってみようかな。弓月くんはいいの？」

「僕は今のところ、特に行きたい場所はありませんから。今日は君につき合いますよ」

通りがかりに何か目を惹くものがあれば、程度には思っているが。

「ふうん。女の子の買いものにつき合うのって、けっこうエネルギーがいるよあ？」

「覚悟してますよ」

まさかTVやマンガのように、両手いっぱい紙袋や山積み箱を持たされたりはしないだろう。それにそれこそ多少の荷物持ちくらは覚悟している。

「じゃ、行くっか」

ちょうど歩行者用の信号がいつせいに青になり、僕らは横断歩道を真っ直ぐ前へと渡った。

自動ドアをくぐり、百貨店へと足を踏み入れる。

佐伯さんはエレベータの脇にある各フロアの案内を見て、

「いちばん上の催事コーナー、かな」

と、さっそく指標を明確にした。

「何があるんですか？」

「さあ？」

短い答えだった。

とりあえず行ってみるつもりなのか。それとも最上階から順に見

ながら下りてくるつもりなのか。

僕はエレベータへと乗り込んだ。

他にも大勢の人が乗っているため、一時会話は中断。黙って階数表示に目をやる。

エレベータ内で皆一様に階数表示を凝視するという行動は、心理学的に説明できる。

即ち、この狭い空間では互いにパーソナルスペースを侵し合った状態にあり、その息苦しさから早く解放されたいという気持ちが階数表示に目をやったり、増える（あるいは減じていく）数字を見て目的地に近づいている安心を得るといった行動を取らせるのだ。

さて、各駅停車ならぬ、各階停車になったエレベータがようやく最上階に着くと、

「……」

そこは非常に華やかなフロアだった。

なるほど。こういうのは佐伯さんの言う通り、ひとつくらい季節を先取りしているらしい。夏のは春のうちから。ここだけひと足先に夏色一色。

ようは、特設の水着売り場だった。

「あれ、どうしたの、弓月くん」

佐伯さんが固まる僕の顔を覗き込みながら、おかしそうに尋ねてくる。ああ、この顔はここで何をやっているか知っていたな。

「本当に行くんですか？」

「行く」

きっぱり言ってくれた。

「昨日も言ったじゃない」

「確かに言っていましたけどね」

本当だとは思わなかった。

颯爽と売り場に向かっていく佐伯さんに、僕は渋々後を追う。彼女はまず、ディスプレイされたマネキンの前に立ち、それを仔細に観察した。

「今年はこういうのが流行りなんだって。弓月くん、どうっ？」

「なぜ僕に訊きますか」

「や、弓月くんの好みかなと思って」

「この際、僕の好みはいつさい無視してください。僕は自分の好みを他人に押しつける気はさらさらありませんので」

どうせなら僕の意見など聞かず、いつそのこと存在そのものも無視してくれるとありがたい。

「こういうのって、えらいと思うっ？」

「なんて質問ですか……」

思わず顔に手を当て、嘆息してしまった。あまりにもストレートすぎて呆れる。

「まあ、真面目に答えると、所詮はマネキンですからね、無機質すぎていやらしさは感じません」

「じゃ、わたしが着たら？」

「それはノーコメントです」

僕は誤魔化すように、さらに言葉を継いだ。

「ついでに言うと、僕としてはマネキンよりもむしろ、売りものとしてハンガーに吊るされているもののほうが目のやり場に困りますね。新発見です」

「ふうん。そっか」

納得したように相づちを打つ佐伯さん。こんなことに納得されても、それはそれで複雑なのだが。

そうしてから彼女は、さらに売り場の奥に進んでいく。すでに逃げるタイミングを逸してしまっている僕は、後についていかざるを得なかった。どこを見ても水着ばかりなので、どこか一点を見ないようにつつ、且つ、きよろきよろしないように　という、その辺りの加減が難しい。

そんな僕の心中などおかまいなしで、佐伯さんはアイテムを物色している。そして、何度かとっかえひっかえして手に取ったそれを、
「はい」

と、僕に渡した。

「ッ!？」

思わず受け取って、声にならない悲鳴を上げる僕。
さらに、

「はい。これとこれと、これも」

彼女は次々と僕に押しつけてくる。

「ちょ、なんで僕に持たせるんですか!？」

「候補」

「だからなぜ僕に持たせるのかと」

「あ、弓月くんの意見も聞いた方がよかった？」

そして、無視。

明らかにわざとやっている。そろそろやり返した方がいいのかもしれない。

「ほう。僕の意見、言っていないんですか？」

「え、えっと……あくまでも参考で、あまり過激なのは……。わたしも頑張るけど」

何を言ってるのだろうか。

「大丈夫です。……そうですね。君は学校で扱ってる一般的なアイテムスーツで十分だと思います」

「む」

途端、佐伯さんは半眼で睨んできた。これにはご不満だった様子。尤も、狙いはそこなので、そうでなくてはこちらも困るのだが。

「色気も何もあつたもんじゃないですけど」

「いいじゃないですか。背伸びはいけません」

「最近の高校生を舐めるんじゃないと言いたい。……ん？でも、スクール水着って、それはそれで……。弓月くんって意外とマニアック？」

「……」

どうやら生半可な反撃を試みた僕が間違っていたらしい。

昼食どきになり、僕らはショッピングセンターの地下にある Pasta の店へと入った。

「弓月くんがこんなお店を知ってるなんて意外。美味しいし、ちょっと暗めの照明もいい雰囲気」

佐伯さんがパスタの最初のひと口を食べてから、感想を述べた。

僕と彼女の前にはそれぞれカルボナーラとシーフードパスタが、そしてテーブル中央にはシーザーサラダの皿が置かれていた。因みに、時々店員が持つてくる焼き立てのパンは取り放題となっている。「喜んでもらえて何よりです」

当然といえば当然だが、この店を選んだのは僕だ。

「あの人ときた？」

「……君は嫌なところで鋭くなりますね」

確かにそうだ。前にここに来たときは、僕の前に宝龍さんが座っていた。11月の土曜日、学校の帰りだったか。何を話したかは覚えていないが。

話があまり面白くない方向に向かいつつあるな。話題を変えよう。

「結局、どんなのを買ったんですか？」

「気になる？」

「あれだけ騒いでおきながら、最後には僕が見てない隙に買ったみたいですからね。そういう意味では気になります」

そうなのだ。さんざん引つ張りまわされた後で、いきなり解放されたと思ったら、僕が売り場を離れて待っている間にとつと買ってしまっていた。結局、僕は佐伯さんがどういうものをチョイスしたか知らないままだ。

「それは夏になってからの楽しみ」

「……」

果たしてそんな機会はあるのだろうか。海かプールか知らないが、行くなら友達同士で行ってもらいたいものだ。

「実はもう一着欲しかったりする」

佐伯さんは言いながら、手ではスプーンを上手に使って、パスタ

をフォークに巻き取っていた。

「もう一着？　ひと夏に二着も買うものなんですか？」

「ちよつと外では着れないような、過激なのが欲しいかなって」

「……」

何かまた妙なことを言い出している気がするな。

「外で着れなかったら意味がないでしょう」

「外で着れなかったら、家で着ればいいじゃない」

なんだその「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」と言った、マリー・アントワネットみたいなノリは。尤も、あれが本当に言った言葉かどうかは怪しいようだが。

僕は木製の大きなスプーンとフォークでシーザーサラダを取りながら問う。

「家で着ても仕方ないでしょうが」

「えつと……、水着プレイ用？」

「ぶっ」

さすがにこれには吹いた。食べている途中じゃなくて本当によかつたと思う。

「……僕には君が何を考えているか、さっぱりわかりませんよ」

まったく、隣のテーブルに聞こえたらどうするんだ。そもそもそんなことを疑問形で言われても困る。

「そんなに変なこと考えてるつもりないけどなあ」

佐伯さんはスプーンの先を下唇に当てながら天井を見て、さも不思議そうに言った。

「たぶん、弓月くんと一緒」

「僕はそんな特殊なことは考えてませんよ」

「そう？　スキンシップとか触れ合うことで心も満たされたいとか、そういうのってそんなに特別なことじゃないんじゃない？」

そう言った佐伯さんはふざけているような様子なく、真面目に語っているように見えた。

「……まあ、その点に関しては僕も否定はしませんよ。人として当

然の欲求と行為だと言えます。だからと言って、今の僕がそこまで考えているかは、また別問題ですが」

「じゃ、夏までに」

「……」

夏までに何をどうしろと？

佐伯さんが言うと、どうにも不純なものを感じずにはいられないな。

やはり後で書店に行つて、プラトンの本でも買って来るとしよう。一足飛びにプラトニックな段階まで行ければいいが。

食後にミルクティを飲んだ後、買いものは午後の部へと突入した。

「次はどこに行くんですか？」

今、僕らは再び百貨店に入り、エスカレーターで上へと向かっていた。他愛もない話をしながら佐伯さんに合わせてここまで来たが、果たして目的地は決まっているのだろうか。

「ん。ここ」

そう言った佐伯さんはエスカレータを上がり切ったところで次には乗り継がず、少し進んで立ち止まった。

と、そこで彼女は腕を組んできた。

「何ですか、これ」

僕は絡み合つた腕を見ながら尋ねる。

「腕を組んでみました」

「それは見ればわかります」

なぜこのタイミングで、と思う。まあ、こんなことをしたまま買えるものができるわけでもなし、すぐに外れるだろう。

そう思つて顔を上げて、ようやく自分がどこにいるか把握した。レディースのフロアにいるとは思つたが、ここは婦人服でもかなりベーシックなものを扱うフロアらしい。……要するに下着売り場、である。

「本当に行くんですか？」

「行く」

きつぱり言ってくれた。

このやり取りは午前中にもやった気がする。

「くるとき言っただじゃない」

「確かに言いましたけどね。というか、無理です」

僕はこの場から逃げようとしたが、あいにくと今は腕を組んでいる状態だった。しかも、佐伯さんは僕を逃がすまいと、さらにがっしりホールドしてきた。遅まきながらこのタイミングで腕を組んできた彼女の意図を理解した。

「離してください。僕は本屋でも行ってますから」

プラトン先生が僕を呼んでいる気がする。

「ダメ。ちゃんと弓月くんの希望も聞いてあげるから。どんなの
がいい？ ソングビキニ？ ストリング？」

「そんな固有名詞を出されてもわかりませんよっ」

「えっと、ソングビキニっていうのはヒップの方の面積が小さいやつで」

「説明しないでいいですっ！」

こんな感じでやいのやいのと大騒ぎして、むりやり引っ張っていかれた売り場でもうひと騒ぎ。それを見ていた女性の店員さんが、必死で笑いを堪えていた。

確かに女の子の買いものにつき合うのはエネルギーがいるらしい。特に精神面の。

もしかしたら佐伯さん相手だからかもしれないが。

2・「冗談じゃない。勘弁してください」

朝。

部屋のドアがノックされた。

「モーニンツ」

と同時に佐伯さんが飛び込んでくる。元気があり余っているのがありありとわかる声だ。

「朝だよ、起きて」

ギシ、とベッドのスプリングが軋む。佐伯さんがベッドの上に手をついたのだ。きつと僕の顔を覗き込んでいるのだろう。

そこで僕は返事ができないことに気がついた。どうやら眠りが深いらしい。意識で外部からの刺激を認識しているわりには、体が自由に動かないから反応ができない。

「むー？」

佐伯さんがうなった。普段ならこの辺りで返事のひとつも返している僕が、何の反応も示さないからだろう。

「せつかくこの前買った水着、着てるのに」

「ッ！？」

起きた。

それはもう一瞬で起きた。

起きて、そして、逃げた。上半身を起こし、ベッドの端、壁際まで後退した。

可能な限りの距離を置いて佐伯さんを見つめる。

と、彼女はいつも通りのスタイルだった。制服の赤いチェックのスカートに、ブラウスをラフに着ている。リボンタイはなし。

「あ、やっと起きた」

何ごともなかったかのようににっこり笑う佐伯さん。

「朝ごはんできてるから、できるだけ早くきてね」

そして、そう言い残して部屋を出ていった。

しばし呆然としてから、僕は再びベッドの上に倒れ込んだ。

「気分悪い……」

眠りの深いところから一気に目が覚めたのだ。体だってこんな酷な労働を強いられたら、不機嫌にもなるだろう。

そこで再びドアが開き、佐伯さんが顔を出した。

「期待した？」

「……」

勿論、言い返す気力はなかった。

朝食。

「今日はサンドウィッチにしてみました」

得意げに胸を張る佐伯さん。

確かに二人用のダイニングテーブルの中央には、大皿の上に山積み
みのサンドウィッチが乗っていた。

「実はお昼もサンドウィッチなの」

「別にかまいませんよ」

作ってもらっている身で注文をつけるつもりはない。

さっそく淹れたばかりのコーヒートともに食べはじめ。サンド
ウィッチの中身は、ツナマヨネーズ、ハムレタス、タマゴなどなど。
これはこれで手間がかかっている。

「ゴールデンウィークの合間の平日って、嫌になるよね」

佐伯さんが最初のひと口を食べ、その出来栄えに自ら納得した後
で、そう切り出した。

彼女の言う通り、今日はゴールデンウィーク真っ只中の平日。連
休中にぼっかりと一日だけあいた谷間だった。佐伯さんが弁当に手
を抜きたくなるのも無理はない。

「そう言ってるわりには、朝から元気ですよね」

「わたし、朝は強い方だから」

とは言うが、あれは強いなんてものを超えた元気に見える。むしろ
ハイテンションだ。

「嫌なら休めばいいじゃないですか」

少し突き放したような言い方になってしまった気がする。

「僕たちはお金を払って通ってるんですから」

「休むのも権利？」

「というよりは、自己責任でしょうね。勝手に休んだ日の授業はフォローしてくれませんか。……因みに、僕は休みたいからという理由で休んだことがあります」

「うわ。ツワモノ」

佐伯さんがおかしそうに笑顔を見せる。

「でも、まあ、やっぱり行く。なんだかんだ言って、学校は好きだから」

「それはいいことです」

僕なんか学校に対しては、特に好きだとか嫌いだといった気持ちはない。きつとそれだからこそ、休みたいからという理由だけで休んでしまえるのだろう。

「変な上級生もいるしね」

「それは初耳です」

「なに言ってるんだか。弓月くんに決まってるじゃない」

……まあ、たぶんそうだろうとは思ったが。

学校へと向かう。

学園都市の駅と水の森高校を結ぶルートに合流すると、同じ制服の生徒の流れの中に見知った猫背を見つけた。矢神だ。

「おはようございます、矢神」

「え、あ、弓月君！？ ……お、おはよう」

後ろから追いつき声をかけると、彼は気を抜いていたのだろうか、非常に驚いた様子だった。ひとまず挨拶を返してくるが、なぜか気まずそうに目を逸らしながらだった。

その後も言葉を発さず、ちらちらと眼鏡越しに僕の顔を窺っているようだった。

「どうかしましたか？」

「え？ い、いや、何でもなし。あの、僕、先に行ってるから」

慌てて誤魔化しつつ、矢神は早足で逃げるように先に行ってしまった。

後に残された僕は、さっぱりわけがわからなかった。顔に何かついているのだろうか。周りを見回しても、僕のことなど誰も気にした様子はない。ますますわからなくなった。

程なく学校に着き、昇降口では滝沢と会った。

「おはようございます、滝沢。矢神、通っていききましたか？」

「うん？ ああ、何か急いでるみたいだったな」

すでに靴を履き替えている滝沢は、横で僕を待っていてくれた。

「逃げてるみたいですよ」

「お前か。何をやっただ？」

「何もやってませんよ。僕の方が聞きたいくらいです」

僕も靴を履き替え、滝沢と並んで教室に向かいながら続きを話す。ふと比較的重要なことを思い出した。

「休み中、妹がそっちに行っただんじやないですか？」

「ああ、きたな。いきなり呼び出されて、喫茶店で奢られたよ」

「すみません。もの静かなわりには、強引な性格をしているもので、きつと僕のことを、あることないこといろいろしゃべっただんじやないでしょうか」

僕は探りを入れてみる。

連休の初日、いきなり訪れた妹のゆーみに佐伯さんを見られてしまった。うちに来た後に滝沢のほうにも行ったはずなのだが、佐伯さんのことを彼に話したかが問題だ。もし話しているとしたら、どのように伝わっているのだろうか。

「お前にカノジョができたらしいな」

「……」

話したらしい。

「具体的には何と？」

「1年の佐伯くんか」

「そんなことまで言ったんですか!？」
最悪だ。

「いや、言っていない。俺が少しカマをかけてみただけだ」

「……」

……最悪だ。

「何かあるとは思っていたが、やっぱりそうだったか」
ふむ、とひとり納得してる。

「滝沢……」

「安心しろ。誰かに言うつもりはないよ。これ以上お前の信頼を損ねたくないからな」

「いや、そうじゃなくて、たぶん大きな誤解があるような気が……」
だいたいにして前提条件からして間違っているのだ。僕たちは彼氏彼女といった関係ではない。

「でも、まあ、いいです。誰にも言わないのなら」
必死になって否定しても泥沼だろう。

諦め気味の僕の前に教室が見えてきた。滝沢とともにドアをくぐる。

朝のショートホームルームまでにはまだ時間があった。登校するには早くもなく遅くもない。故に教室にいる生徒は全体の半数以下。特筆すべき光景としては、宝龍さんの席に彼女と雀さんともうひとりクラスメイトが、集まってしゃべっていることくらいだろうか。

僕はそれを見て、おや と思った。

宝龍さんが教室に入ってきた僕に気づき、ちらとこちらを見たが、すぐにまた視線をもとに戻した。

僕は滝沢と別れ、自分の席についた。制靴を机の横の床の上に置く。

と、

「おはよう、恭嗣」

宝龍美ゆきだった。

「ああ、おはようございます」

さつきまで席でしゃべっていた宝龍さんが、それを切り上げて僕のところにくるとは思っていなくて。不意を突かれた。

「どうだった？」

あいていた前の席のイスをこちらに向け、腰を下ろしながら問う。

「何がですか？」

「彼女とのデート」

「別に。いたって普通でしたよ。それと、あれはデートなんてものではありませんから」

「ふうん。そう」

彼女は笑みを含ませて相づちを打った。

「あの子が言ってたあれ、選んであげたの？」

「まさか。そんなわけないでしょう」

嘆息ひとつ。

確か彼女だって本気にしていないと言っていなかっただろうか。

「そう、残念。恭嗣ってそういうとき、きちんと選んであげるのかそれとも慌てるのか、それを想像したら少し楽しかったわ」

「楽しまないでください、そんなことで」

因みに後者だったが。

「ところで、何か気がつかない？」

そう言って宝龍さんは、机に両肘を突き、組んだ指の上に顎を乗せた構造で、僕を正面から見据えた。

「髪型を変えたことですか？」

ポリウレームをつけたハーファップの髪。まるでファッション雑誌から抜け出てきたみたいだ。ここまで様になる高校生もそうはいないだろう。

「気づいていたのなら何か言ってくれてもよかつたんじゃない？」

……それで感想は？」

「よく似合ってますよ」

「嬉しいわ。でも、ありきたりね」

宝龍さんは僕を睨んだ。たぶんそのつもりはないのだろう、目つきがきついので自然とそう見えてしまう。

「それとね、少しずつ部活にも出るつもり」

「部活？ 文芸部ですか？」

そう言えば彼女は文芸部員の名簿に名を連ねているが、まったくと言っていいほど何もしていないことを思い出した。

「それはいいことだと思います」

「そういう女って、どう？」

「どう、とは？」

質問の意味するところが理解できず、僕は思わず聞き返してしまっただ。

「見た目も悪くない、自分をコーディネートすることも怠らない、成績もそこそこいい、加えて高校生らしくクラブにも出る。そういう女を恭嗣はどう思うのかしら、という意味よ」

「……」

ずいぶんと控えめな表現を選んだものだ。水の森で知らないものはないというクールビューティは誰であろう目の前の彼女だし、成績は常にトップ。滝沢が万年二位だと嘆いていた。

それは兎も角。

「……普通、でしょうか」

僕の口から出る感想はそれしかなかった。

「普通？ そう、これでやっと普通なのね。いったい何が足りないのかしら？ 一緒にいる時間？ 同じクラスなんだから、同棲してるあの子と違ってそう変わらないはず」

「ちょっと待ってください」

かたちのよい顎を指でつまみ、視線を落として何やら考えはじめた宝龍さん。それがどうにも望まない方向に向かっている気がして、僕はそれを遮った。

「ひとつ確認させてください。……あなたは僕に興味などない」

そして、僕も彼女の興味を持ったことなど一度もない。

「そうね。でも、それも過去形かもしれないわ」

「冗談を言っているふうではない　が、彼女の場合、目つきのせいで冗談を言っても、そう聞こえないことが多々ある。　そう言い聞かせて、今は判断を保留にしておこう。」

「いつそのこと、私も恭嗣に下着でも選んでもらおうかしら?」
「ッ!？」

これにはぎょっとした。

「冗談じゃない。勘弁してください」

この前の佐伯さんのときに酷い目に遭ったばかりだというのに、また同じような目に遭わされてはたまったものではない。しかも宝龍さんだつて?　確実に僕は死ぬ。

悲鳴にも似た嘆願。

すると、宝龍さんは突然くすくすと笑い出した。

「今わかった気がするわ。私が恭嗣を揺らすのに足りないのは、きつとこういふ部分ね」

そう言っつてまたおかしそうに笑う。

対する僕は、不貞腐れたように頬杖をつき、投げやりな気持ちで彼女を見ていた。

3・「昔の話をしましょうか」

ゴールデンウィーク最終日、

最後の休みである今日は、妹の襲撃を受けたり佐伯さんと遊びにいたりしたこれまでとは違い、非常にゆったりしたものだ。夕方になって初めて駅前のスーパーに出かけるために外出し、今はその帰り。

「それにしてもずいぶんと買いましたね」

シヨップینگセンターを出たところで、僕は改めて自分の手の中にある荷物を見た。

大量の食料品。

レジ袋はひとつだが、目いっぱい詰め込んである。大雑把なことをしてしまったものだ。これならふたつに分けた方がよかつたかもしれない。数は増えても持ち運びやすかつただろう。

「明日から学校だから、お弁当のおかずとかもいろいろ買い込んどかないと。学校の帰りに寄ってもいいけど、遠回りになるしね」

「何が必要かおしえてくれたら、僕が行きますよ？」

僕はこの街を気に入っているので、多少の遠回りも平気だ。

「や、そこは、ほら、買いものはわたしの担当だから」

「そのわりには今、僕もつき合わされてるわけですが」

僕は荷物持ちなのだろうか。

しかし、佐伯さんは誤魔化すように白々しい笑いをもらすだけだった。

と、そこで僕の携帯電話がポケットの中で着信メロディを奏でた。あいている手でそれを取り出して見てみると、液晶には相手が宝龍さんであることが示されていた。

片手で端末を開き、電話に出る。

「はい」

『恭嗣？』

聞こえてきたのは温度の低い声。気の弱い人間なら思わず謝ってしまいそうだが、これが彼女のデフォルトだ。

『今から会えない？』

『今から、ですか？』

何とも唐突な。

かつて携帯電話が出回りはじめた頃、これが普及すると人は外へ出て人と会うことが少なくなると懸念されたが、蓋を開けてみれば携帯電話の最も多い使用目的は、人と会う約束をすることだったという。

『その言い方だと学園都市にいるわけですね？』

僕はひとまず返事を保留にした。

『ええ、学校にきてたの。今は学校を出て7分から9分というところね』

『そうでしたか』

『後ろで聞こえる騒音の感じだと、恭嗣は外かしら？』

『当たり前です』

『私の予想だと、かわいい彼女と買い物ものね』
なかなか鋭い。

『そして、今ちょうどふたりそろってショッピングセンターから出てきたところ。大きな買い物袋をひとつ、恭嗣が持つてる。今の服装は』

これにはぎょっとした。

さすがのホームズ先生もそこまで推理できるとは思えない。ということは、結論はひとつだ。

僕は辺りを見回し 見つけた。

少し離れたところで制服姿の宝籠さんが、携帯電話を耳に当てて立っていた。僕が気づいたのを見て、小さく手を振ってくる。

『趣味が悪いですね』

『私だもの』

お互いの顔をその目で見ながら、端末を通して話す。そのやり取

りを最後に僕らは通話を切った。歩み寄る。僕の横には佐伯さんがいた。

「こんにちは、佐伯さん」

「こんにちは」

宝龍さんは余裕のある微妙に挑発的な笑みを浮かべて、対する佐伯さんは不躰なやぶ睨みで、挨拶を交わした。

「今日はまたどうして学校に？」

問うたのは僕だ。放っておいたら佐伯さんがずっとガンを飛ばしたままになりそうなので。

「この前言ったでしょ。部活に出てたの」

「なるほど。それで、どうでしたか？」

「矢神君にお薦めの本を聞いて、少し読んでみたわ。なかなか面白かったわね」

と、彼女は淡々と述べる。

この様子だと面白くても表情ひとつ変えずに読んでいたのだろう。本を薦めた矢神としては、気が気でなかったに違いない。

「それと文芸部員らしく、自分でも何か書いてみようと思うの」

「書くつて、小説をですか？」

少し意外な気がして、僕は問い返していた。

「そうよ。書き方の本も借りてきたわ。恭嗣、どう思う？」

「率直な感想を言おうと」

と、前置きする。

「あなたは何でもできる人だから、良くも悪くも教本通りに書いて、面白くないものができ上がりそうな気がします」

途端、宝龍さんはおかしそうに笑い出した。

「鋭いわ。実は私もそうなるだろうと思ってるの。これは恭嗣を驚かすためにも頑張らないといけないわね」

そうして最後に微笑を僕に投げかけて、この話題を締め括った。

「ところで、見たところあなたたちは買いものようね」

「そうです」

横で黙って威嚇の眼差しを放っていた佐伯さんが応じた。

「弓月さんと一緒に買い物に行くのは、わたしの楽しみのひとつですから」

「そう。羨ましいわ」

「羨ましい？」

一転、不思議そうに問う。

「私は恭嗣と一緒にどこかに行くといったことを、あまりしなかったから」

同意を求めるように、宝龍さんは僕を見た。

「ですね」

「そうなの？」

「そうですよ」

一時期つき合っていたわりには、僕らは休日に会うようなことをしなかった。たまに土曜の帰りに一ノ宮に寄ったりしたくらいか。

「まあ、お互いそういう気持ちは欠片もありませんでしたから」

「そうね」

今度は宝龍さんが僕の言葉に同意を示したが。

「でも、今の恭嗣なら違うわね。前よりはいろんなところに一緒に行ってみたいと思うわ」

彼女は誘うような、挑発するような目で僕を見た。その視線は攻撃的でありながら、吸い込まれそうな魅力があった。

「恭嗣だって、今の私ならと思うでしょう？」

「まあ、そうですね」

それが彼女の迫力に圧倒されて出たものなのか、本当にそう思っ
て言ったものなのか、自分でも判断がつかなかった。

「あ痛っ」

すると突然、脇腹をペンチのようなもので捻り上げられた。勿論、それは佐伯さんの指だ。

「帰ろ、弓月くん」

佐伯さんは僕の手首を掴み、ずんずんと歩き出す。

「怒らせたみたいね」

苦笑する宝龍さんに、僕は肩をすくめて応えた。

佐伯さんにも聞こえているだろうが、彼女は無言。

そのまま僕は、微笑みながら手を振る宝龍さんに見送られ、連行されていった。

次に佐伯さんが口を開いたのは、駅前の大きなスクランブル交差点で信号待ちをしているときだった。

「わたし、あの人きらい」

まるで拗ねた子どもだ。

「あれでも性格が丸くなった方ですよ」

「そうなの？」

「まあ」

僕が出会った頃の宝龍美ゆきというのは、美しくて聡明だが、常に一步引いて、世のすべてを見下しているようなところがあった。きつと優秀すぎるのだろう。それが少しずつやわらいできたのは、ここ数ヶ月のこと。僕と別れたくらいからだ。

「……今でも性格悪いと思う」

佐伯さんは口を尖らせた。

「それにまだ弓月くんのが好きみたいな態度。もう終わったことのはずなのに」

「終わったこと、ね」

少し笑ってしまった。

それは端からは自嘲的な笑いに聞こえたかもしれない。そして、佐伯さんはそれを耳ざとく拾っていた。

「なに？」

「いえ、まあ」

そこでちょうど信号が変わった。歩行者用の信号機がいつせいに青になり、待っていた人が縦、横、斜めに横断歩道を渡り出す。

僕は向こう側へ渡り切ってから続けた。

「終わったことどころか、はじまってもいなかったんじゃないかな、と」

「どういうこと？」

佐伯さんが首を傾げた。

「どういうこと？　と彼女は問う。当然だ。こんな説明でわかるはずがない。」

僕はため息をひとつ。

「昔の話をしましょうか」

「え？」

「君が知りたがっていた話ですよ」

「あ、うん……」

力なく返事をした後、佐伯さんはおとなしくなった。

さて、話そうか。

「まず最初に言っておくと、僕と宝龍さんはお互いのことを何とも思っていないませんでした。好きだとも嫌いだとも、ね」

「……それ、本当なの？」

佐伯さんは横を向き、僕を見上げてくる。

「本当です」

僕は彼女の問いにきっぱりと答えた。

「それがどうやったたらつき合うことになるの？」

「簡単ですよ。彼女がそう言い出したからです」

あれは確か去年の夏休み明け。滝沢が、宝龍美ゆきについてどう思うか、などという下世話な話を振ってきたときのことだ。その問いに僕が興味はないとはつきり答えたそのとき、彼女がそばを通りかかったのだ。しかし、彼女は僕を一瞥しただけで通り過ぎていった。だから、僕の発言は聞こえなかったのだと思っていた。

その日の放課後だった。

一度は下校した僕が忘れものに気づいて取りに戻ると、教室には宝龍美ゆきが待ち伏せしていた。そして、言ったのだ。

「私とつき合つて」と。

「僕はあなたに興味はありませんが？」

「知ってるわ。それに私だってあなたに興味はない。でも、だからいいのよ」

「変な理屈」

「そうですか。僕は面白い思考だと思いましたよ」

「天才と世捨て人の哲学者……」

「ぼそつと佐伯さん。」

「何か言いたいことでも？」

「別に。……それでつき合うことにしたの？」

「しました」

そうしたのに大きな理由はなかった。お互いがお互いに興味がないのなら、それはゼロだ。もしどちらか一方でもプラスなりマイナスなりの感情を持っていたなら、僕はきっぱりと断つただろう。

「ただ、ゼロ。」

差し引きした解がゼロだったわけではなく、原点から微動だにしない、まごごことなきゼロ。それならば僕にさしたる影響はないだろう。そう思つて僕はそれを受け入れた。

そうしてはじまった交際は自分たちのためというよりは、むしろまるで対外的に何かをアピールするかのようなものだった。

後に僕はその理由を知ることになる。

「宝龍美ゆきには彼氏のひとりやふたり、いるべきだと思つたの」
ある日、彼女はつまらなさそうに述べた。

つまりはそういうことだったのだ。

「当然、そんな歪な関係が長く続くはずもなく、3ヶ月足らず、ク

リスマスを前に終わりを迎えました。切り出したのは彼女の方でしたね」

「前は弓月くんが振ったって言ってなかった？」

「それは噂です。勝手に広まって事実として定着した、ね」

当時流れた噂はふたつあった。

宝龍美ゆきが弓月恭嗣を振ったという説と、その逆。

前者はその頃の宝龍さんの性格を考えると、非常に“らしい”真実味を帯びていた。反対に後者だと、あの宝龍美ゆきが捨てられたということと悲劇性があり、同情が集まった。

結果とした定着したのは後者の方だった。

そして、その後しばらく僕は、宝龍さんとき合つ幸運に恵まれながら、3ヶ月で彼女を振った悪ものとして指弾されるようになる。

「さすがに少々消耗しましたね」

「否定しなかったの？」

「しませんでした。面倒だったので」

というのは嘘だが。

噂を否定するには、本当のことを語らなくてはならない。

この場合、本当のこととは、思いつきでつき合いはじめたら、案の定、長続きしませんでした。ということだ。僕たちのことは学校中に知れ渡っていたので、そんなことを言えたはずもない。

加えて、どちらの噂が事実にすりかわっても、宝龍さんのプライドは守られるはずなので、僕は黙っていることにしたのだ。

まあ、そんなことまで佐伯さんに打ち明けるつもりはないが。

「滝沢にも言っていない話です。君も黙っていてください」

「どうも納得いかないんですけど。弓月くんだけが悪ものみたいで」

「それも僕が決めたことですから」

僕がそう言い切ってしまうと、佐伯さんは納得しかねる様子ながらも、口をつぐんだ。

「以上が去年のことの顛末です。要するにね、宝龍さんから言い出した彼氏彼女ごっこだったわけです」

だから、終わったことどころか、はじまりもしなかった話。

「そっか。ちょっと安心した、かな」

「何がですか？」

「弓月くん、自分で自分のこと悪く言ってたけど、やっぱり弓月くんは弓月くんなんだと思った」

確かに僕は無責任な噂にわざわざ自分を合わせてきたが、佐伯さんが僕のことをどう見ているかわからない以上、彼女の言葉には何とも答えようがない。

「あ。でも、あの人、またってというか、今度こそ本気なんだよね？」

「さあ、どうでしょう」

単にからかっているだけの可能性もある。どういう心境の変化か、ここのところ愉快な性格に変貌しつつあるようなので。

「もしそうだったら？」

「大変ですね」

「困る？」

「困ります」

「じゃあさ」

と、佐伯さんは僕の前に回り込んだ。

「わたしのことが好きだって言っちゃえばいいじゃない」

「え？」

思わず僕の足が止まる。

「ね」

そして、彼女はくるりと身を翻し、先へ行ってしまった。

果たして、今のはどういう意味なのだろう。おそらくは宝龍さんにそう言って牽制しろということなのだろう。

でも、今の僕には、

いいかげん白状しろ

そう言われた気がした。

僕は少しの間立ち尽くし、佐伯さんを追えなかった。

/

2
了

サイドストーリー2・」

「と彼は言ってしまった!?(前編)

ゴールデンウィーク初日の朝。

休日なのでいつもより遅い起床。時計の針はもう8時を回っている。

わたしはさっそくベッドから抜け出し、パジャマから部屋着に着替えた。上はTシャツに薄手のフード付きパーカー。下はショートパンツ。ナマ足が健康的、且つ、色っぽい。

色っぽい?

「……」

うーん、果たして彼がそんなことを思ってくれるだろうか。思ってくれないんだろうなあ。

気を取り直して部屋からリビングに出る。無人。彼はまだ寝ているようだ。

彼は起こすまで起きない。起こしたら起きるけど、起こすまで起きない。でも、起こさなかったら、勝手に起きてくる。……わたしはあまり関係ないのかもしれない。

ひとまずリビングの全面窓を開けて換気。こもって淀んだ空気を新鮮なものと入れ換える。それから洗面所に行って顔を洗い、不思議な光彩を持つ(彼も綺麗だと言ってくれた!)自慢の髪にブラシを通した。

それからキッチンに戻って朝食の用意。

今日は起きたときからホットケーキと決めてある。どこかのファーストフード店の朝メニューみたいだとか、何日か前もそうだったとかは気にしない。

ホットケーキは面倒だ。ホットケーキのもとをつくって、その間にフライパンを暖めて、と思ったら今度は濡れ布巾で一度温度を下げて。結局は最後は弱火で焼くことになるから、けっこう時間もかかる。

こんなに面倒でもやれてしまうのは、ひとりじゃないからだ。一緒に食べてくれる人がいるから、少しくらい手間でもやろうと思える。

さて、サイドメニューであるソーセージとカリカリベーコンもできたので、そろそろ彼を起こしに行こう。

わたしはコンロの火をギリギリまで弱めてから、その場を離れた。彼の部屋をノックする。

と、同時に突入。

「モーニンツ」

その部屋のベッドに眠っているのは、弓月くん。この家での同居人だ。

同居人……。

うん、同居人。

何となく再確認。

弓月くんは、わたしの声と入ってきた音で起きはじめ。

「う、ん……」

ベッドの上で身をよじった。

わたしはそんな弓月くんを見下ろし、

「む……」

思わず小さな声が口から漏れる。

最近はずっとこんな調子だ。何となく弓月くんの顔に見入ってしまい、落ち着かない気持ちになって、変な声を出してしまう。落ち着かない気持ちはくすぐったい感じに似ているけど、それとは少し違っている。

そうこうしているうちに弓月くんが目を覚ました。

彼は普段から眠そうな目をしている。でも、その目は時々わたしを不安にさせる。奥にある深い色の瞳に目の前にあるものを映しながら、本当はもっと別のものを見ているのではないか、わたしなど見えていないのではないか。そんな思いに駆られるのだ。

その目も今は眠気で光が弱い。

「おはようございます、佐伯さん」

そう挨拶をされて、わたしは慌てて笑顔を用意する。

「おはよう。朝ごはんできてるよ」

「わかりました。着替えてから行きます」

弓月くんは気がついていないかもしれないけれど、こう答えるときの彼は頭の回転が本調子でないせいか、時々無防備に笑顔を見せてくることがある。ちょっとかわいい。

「うん。待ってるから」

そして、そんな普段では絶対見ることのない表情にドキッとしたわたしは、逃げるようにして部屋を出て行くのだった。

ダイニングキッチンのテーブルで、向かい合って朝食を食べる。

「ねえ、今日は一ノ宮の方に遊びに行ってみない？」

ここにきて初めての大型連休。わたしは提案してみる。

一ノ宮は、学園都市の駅から電車で20分ほど行ったところにある、同じ名前のターミナル駅を中心にした繁華街のこと。学校帰りの遊び場としては定番の場所だ。でも、残念ながら電車通学をしていないわたしとは縁が薄い。

「いいですね。じゃあ、午後からでも行きますか」

弓月くんは誰にでも、年下のわたしにも敬語で話す。敬語・礼儀作法は外交では武器だったと聞いたことがある。交渉の席で本心を明かさないと、真意を悟られないための武器。弓月くんはまさにそれ。けっこう“読めない”人だ。

おかげで一部ではクールだと評判だけど、わたしはそうは思わない。攻め方を間違えなければ、案外脆い。

「夏に向けて水着を見たいなあ」

「……早くないですか？」

ほら、返事がワンテンポ遅れた。一瞬目が泳いだのも、わたしは見逃さなかった。

「早くないよ。ゴールデンウィークが終わったら、もう夏は目の前

だしね。デパートのファッションフロアに行ったら、今年の水着が並んでるはずだよ」

「そうだとしても、それなら女の子同士で行ったときに見ればいいじゃないですか」

「そうなんだけどそこは、ほら、男の子の目線での意見も欲しいかなって」

我ながら苦しい言い訳。でも、大丈夫。弓月くんはすでにいっぱいいっぱいのはずだから。

「コーコーサーなんだから大胆めにビキニとかどうかな？」

「……さあ、僕には何とも」

コメントを極力避けつつ、黙々と朝食を進める彼。

「ねえ、弓月くん」

わざわざ名前を呼んで、こつちを向かせる。

「わたし着やせするタイプだから目立たないけど、けっこう胸あるんだよ」

「……」

弓月くんの目だけが動いて、視線がわずかに下がった。

「ウエストも細いし」

「僕にそんなことを言われてもね」

「触って確かめてみる？ 胸はダメだけど、ウエストならいいよ」
直後、弓月くんの動きが止まった。

そして。

「バカなこと言ってるんで、さっさと食べなさい」

「はい」

わたしは心の中で舌を出す。

この辺りがキレルラインだと思っていたけど、予想通りだった。
うん、かわいい。

と、そのとき、インターフォンが鳴った。

わたしたちは無言で顔を見合わせた。誰だろう？ さあ？

時間は9時を少し過ぎたところ。わたしも弓月くんも友達に家を

教えていないので、誰かが遊びにくることはまずない。あと思い当たるといえば働きものの運送屋さんくらいか。

弓月くんは、腰を浮かしかけたわたしを手で制し、先に立ち上がった。

ドアフォンに出る。

「はい？」

で。

「は!？」

弓月くんらしからぬ大きな声。

「い、いや……ちょっと待ってください」

やけに慌てている。相手はいつたい誰で、どんな用件なのだろう。彼は一旦ドアフォンを置いた。

「弓月くん？」

しかし、わたしの声も耳に入らない様子で、リビングを抜けて玄関の方へと消えていった。

それから。

「なんで、君が」

「……。」

かすかに言い争いのような声。ここまで聞こえてくるのは弓月くんの、しかも、断片的な声だけだけど、ただならぬ様子であることはわかる。

気になったわたしはリビングから玄関を覗いてみた。

手前に弓月くんの背中。

その向こうに お人形のような女の子が立っていた。

年はわたしと同じくらい。モノトーンの所謂ゴシッククロリータと呼ばれる衣装に、足元は編み上げブーツ。セミロングの髪も艶やかな黒なので、彼女だけ神様が色をつけ忘れたかのようだ。そんな別世界の住人のように思えたのは、彼女自身表情の変化に乏しくて、人形めいていたからかもしれない。

傍らにはアンティークな旅行鞆トラバグが置いてあった。

「……お客さん？」

わたしは少々現状把握に手間取ったものの、ようやくとてつもなく基本的な問いを口にした。

「ああ、佐伯さん」

弓月くんはそこで初めてわたしが奥から出てきていたことに気がついたようだ。

「僕の妹です。ゆーみ。連絡もなく遊びにきたようなんです」

「あ、そうなんだ」

妹がいるとは聞いていたけど、顔を見るのはこれが初めてだ。

確かに似ているかも。弓月くんは眠そうな顔のわりには目つきが鋭いけど、彼女は目が切れ長で顔も全体的にシャープだ。根本のところによく似ている。

弓月くんの妹さん　ゆーみさんはその切れ長の目でわたしを見て、

次に弓月くんに目をやり。

「……誰？」

と、口を動かした。

弓月くんがわたしを見た。わたしも弓月くんを見た。

「……」

「……」

わたしが彼女を見て誰だと思ったように、彼女の疑問も至極当然のものだ。

困った。

この様子だと弓月くんは家族にルームシェアのことを話していないのだろう。正直に言っていないものか、それとも何か嘘で誤魔化すべきなのか。

「……」

「……」

弓月くんは妹さんに向き直り、コホン、と咳払いをして。そして。

「僕のカノジヨです」

と、言ってしまった。

「……え？」

「えっ!？」

ゆーみさんの声にわたしの声がかぶった。勿論、それでは不審がられるので、すぐに平静を装った。

が、心中は。

(えええええ~~~~っ!!!!)

かなりパニック。

カいつぱいコンフュージョン。

カノジヨ? カノジヨって言った?

それはいい。いいんだけど。

こんな時間に一緒に朝ごはんを食べてるカノジヨって、つまりもうお泊りコースもしちゃうカノジヨってことに、ならない……? ?

サイドストーリー2・」

「と彼は言ってしまった!?(前編)(後書き

次回予告

わたしをカノジョって言っちゃった、軽くテンパッてる弓月くん。

そして、彼女にされたわたし。

どーするのよ、これ……。

「瑞穂に美ゆきに……とっかえひっかえね、兄さん」

「そこにその名前を入れないでください」

って、ちよ、なに？ また過去のオンナの名前が出るわけ!?

ゴールデンウィーク初日の穏やかな朝の食事風景は、モノトーンの来訪者によって、一転して落ち着かないものに変わった。

理由はふたつ。

ひとつは、この家に初めてわたしと弓月くん以外の人が足を踏み入れたこと。

もうひとつは、弓月くんが妹さんに、わたしをカノジョだと言っ
てしまったこと。こっちはわたしの個人的な理由だ。

さて、その妹さん　ゆうみさんは今、リビングを見ている。テレビや座椅子などをひとつひとつ表情に乏しい顔で見ている。うん、と何やらうなずいている。あちこちチェックされているみたいだ。

そして、朝食を急いでもませた弓月くんは、彼女が変なことをしないように……かどろかは知らないけど、ずっと妹さんの動きを目で追っている。

「……ここは兄さんの部屋？」

リビングにあるドアのひとつを見ながら、ゆうみさんが尋ねた。

彼女の声は透明感があるけど、冷たいガラスのような印象を受ける。

「そうです」

「見ていい？」

「どうぞ」

さっそくゆうみさんはドアを開けた。中には這入らず、入り口から室内を見回すだけ。

「相変わらず几帳面な部屋」

彼女は少しだけ表情を崩して笑った。

「家ほどのものがないし、まだここにきて一ヶ月ですからね。よけいそう見えるんですよ」

弓月くんは言い訳のように言うけど、実家の部屋がきれいに整理されていることには違いないらしい。わかる気がする。

「あ、パソコン。……ハードディスクの中、漁っていい？」

「なんかそこはかたなく悪意を感じる。……実はクラツカ？」

「絶対ダメです」

対する弓月くんはきっぱりと断った。今度こっそりと見てみよう。今後のため、傾向と対策がわかるかもしれない。

それは兎も角。

わたしは朝食を食べながら考える。

弓月くんは、わたしのことをカノジヨだとゆーみさんに紹介してしまった。やっぱりそれらしい振る舞いをした方がいいのだろうか。でも、具体的にどんなふうに？ ……胸？ ウエストじゃなくて胸を触らせたらいいいのっ！？

「……」

弓月くんとスキンシップを想像したらちよつとドキドキしたけど、それは何かおかしいような気がする。

「兄さん、こっちは？」

ゆーみさんのガラスの声で現実を引き戻された。彼女が見ているのは私の部屋のドアだ。

「そっちは倉庫状態ですから、中は見ないでください」

弓月くんは柔らかくもはつきりと禁止の意思を告げた。

確かにそこを開けられたら困る。部屋が汚いとかそういう意味ではなくて、ベッドの上にパジャマがまだ脱ぎっぱなしになってるかもしれないけど、そこがわたしの部屋だということがわかったら、自然、一緒に暮らしていることがばれてしまう。

「……ふうん」

ゆーみさんは気のなさそうな返事をしながらも、それから少しの間その切れ長の目で訝しむようにドアを見つめていた。

そうしてから今度はわたしを見た。部屋からわたしという流れが意味ありげで気になる。

わたしはほとんど朝食を食べ終えていたけど、その手を止めて彼女の視線を受け止めた。

「……今、朝ごはん？」

「うん、そうよ」

「つまり、泊まった？」

「やっぱり、というか、当然のように気がついたらしい。こんな時間に朝食を食べている以上、その連想はごく自然だ。」

わたしは弓月くんを見た。
すると。

(うわ……)

弓月くんはゆーみさんからは見えない死角で、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。今にも頭を抱えそう。心の声を代弁するなら「しまった……」だろうか。

もしかして、気づいてなかった……？

わたしをカノジョだと紹介した時点でこうなることは予想がつきそうなものだけど、どうやら弓月くんはそこまで考えが到達しなかったらしい。どんだけテンパっていたのだろう。

でも、この瞬間、わたしの方針は決まった。

「そうよ。昨日、学校が終わってからここにきて、朝まで弓月くんと一緒」

わたしがわざと嬉しそうにそう言っても、ゆーみさんは特に表情を変えなかった。弓月くんはすごく何か言いたげだったが、言葉は出なかったよう。

さて、次はどうしよう？　これが初めてのお泊りか、そうじゃないか。どっちが面白いだろう。わたしは少し考えて　決めた。

「別にこれが初めてってわけじゃないから、今日はちゃんと朝ごはんの用意もしてきて、わたしが作ったの」

「……」

特に反応なし。

「ね、弓月くん？」

なので、弓月くんに振ってみる。

「え？　ええ、そうです。佐伯さんの作った朝食、美味しかったで

すよ。またお願いします」

「うん、こんなのでよかったら、いつでも。また今度お泊りにきたときにね。いつにする？ 今日さっそく？ わたしはそれでもかまわないけど」

またお願いしますだなんて、弓月くんってば情熱的。

「佐伯さんって」

ゆーみさんが口を開いた。あ、向こうで弓月くんが首を吊りそうな顔してる。

「兄さんと同じ学校？」

「そう。学年はひとつ下だけど」

「ふうん……」

今日何度目かの「ふうん」。

「わたしと同じ年」

ぼつりとこぼしてから、モノトーンのコシツクロリータの衣装と黒髪を揺らして今度は弓月くんへと向き直った。

「……兄さん？」

「何ですか」

投げやりに聞こえなくもない弓月くんの声。

「学校がはじまって一ヶ月も経たないのに、もう新入生をつかまえるなんて、早くない？」

「……まあ、こういうことに時間は関係ありませんから」

心にもないことを言っているのがありありとわかる返事だ。弓月くんをいじめているみたいで、ちよつと楽しいかもしれない。

「瑞穂に美ゆきに、とつかえひつかえね。兄さん」

「そこにその名前を入れないでください」

え？

今、ゆーみさんの口から聞き捨てならない言葉が出たような気がする。

美ゆき、は知っている。宝龍美ゆき 弓月くんが前につき合っていたという元カノジヨ。驚くほどきれいな人だ。

じゃあ、瑞穂って、誰？ その人も元カノジヨ？

わたしは説明を求めるように弓月くんを見たけど、こっちの不安など気がつかない様子で、向こうでは兄妹のやりとりが続いていた。「ところで、ゆーみ。ここに何しにきたんですか？」

「別に。ただ兄さんの新しい生活がどんなのが見にきただけ。一度も帰ってこないし。……こういう理由だったわけね」

「それについてはもう何も言いたくありません」

疲れ切ったように弓月くんは嘆息した。

「まさか泊まる気じゃ……」

「安心して、そのつもりはないから。でも、遠路はるばるやってきたかわいい妹に、兄としてサービスはして欲しい」

「はいはい。いいですよ。それくらい」

弓月くんは渋々、というわけではなく、まんざらでもなさそうに承知した。何となく普段の関係が窺える。

「というわけです。いいですか、佐伯さん」

「え？ あ、うん。わたしもいいよ」

これで一ノ宮の方に遊びに行くのは中止かな。

大変な一日になりそうだ。弓月くんのカノジヨを演じて、一緒に暮らしていることは隠して。それから 瑞穂って誰なのか聞き出さない。

朝食の後片づけは弓月くんがやっている。いつもならわたしの役目だけど「ここは僕の家で、君はお客さんってことになってますから」とのこと。少し意地悪く「お泊りの？」と聞き返したら、無言で頭をこつんとやられてしまった。

そんなわけで、今、わたしはリビングにいる。そばにはゆーみさんがフローリングの床にぺたりと座って、ゴスロリのスカートを大輪の花のように広げていた。

「もしかしてゆーみさんも学校は学園都市？」

とりあえず当たり障りのない話題から。ゆーみさんは首を横に振った。艶やかな黒髪が揺れる。

「違う。家から遠いけど、もっと別の場所」

「じゃあ、私立？」

「そう。制服はなくて、私服登校」

「へえ……って、もしかしてそれで学校行ってるの!？」

それとはゴスロリの服のこと。

わたしが尋ねると、ゆーみさんは当然だとばかりにうなずいた。行ってるらしい。なかなかの猛者だ。

「ゆーみは私服で行けるから、今の学校を選んだんですね」

そう口を挟んだのは弓月くんだ。洗いものを終えてこちらへとやってきた。

「私はただ担任の先生のやり方が気に喰わなかっただけ。君がいける学校は公立ならこの辺り、私立ならこことこって、まるで他に選択肢がないかのように言うから」

「確かに成績で区切って振り分けるようなやり方ですが、たいていはそんなものですよ。僕のとくもそうでした」

「だから私は意地でも他の学校に行こうと思った」

ゆーみさんが少しだけむっとしたような表情を見せた。当時のこ

とを思い出したのだろうか。よほど担任の先生のやり方が不満だったらしい。

「そのわりには今の学校に決めた決定的な理由が、制服がないからですよ」

「それは否定しない」

「とは言え、そのために努力したゆーみは、僕はえらいと思いますよ」

「……」

ゆーみさんは黙った。口を尖らせ気味で、居心地悪そうに目を逸らしたりしている。わたしにはそれが、褒められて照れているように見えた。これで意外にお兄ちゃんっ子なのかもしれない。

「ところでふたりとも、コーヒー飲みますか？」

「はい、もらいまーす」

わたしは真つ先に意志を表明した。

「ゆーみは？」

「……いる」

簡潔な返事。

それぞれの返事を聞いた弓月くんが再びキッチンに戻っていく。

「弓月くんって家でも優しい？」

家族と一緒にいるときの弓月くんに興味があったので、わたしは尋ねてみた。すると、ゆーみさんは人形めいた動きでうなずいた。

言葉は添えられなかった。

「そっか。弓月くんのコーヒーって美味しいよね」

「私は人が淹れてくれたものなら、何でも美味しく感じる」

「……」

弓月くん特製のコーヒーも、このへそ曲がりにかかったら形無しだよつだ。

「兄さんがひとり暮らしをはじめたせいで、それも飲めなくなっただけ」

そして、拗ねたように言い加えた。

やっぱり素直じゃない。

「はい、どうぞ」

弓月くんが戻ってきた。

右手にはわたしのマグカップ、左手には来客があったときのための予備のマグカップがあった。弓月くんはわたしがカップ一杯に対してどれだけの砂糖とミルクを入れるか知っているので、ミルクも砂糖もすでに投入済みだ。たぶんゆーみさんに対してもそうだろう。弓月くんはわたしたちの前にそれぞれのマグカップを置いてから、再びキッチンに自分のを取りにいった。

「で、ゆーみ。これから何をするか、希望はありますか？」

立ったままコーヒーをひと口飲み、訊く。弓月くん行儀悪い。

「別に。私は兄さんの様子を見にきただけだし、このまま家でのんびりしても」

「それは却下させてください」

弓月くんはゆーみさんの言葉が終わらないうちに言い切った。そう言ったのはずっと家にいるとボロが出そうだからだからだろう。

ゆーみさんが不思議そうに首を傾げた。

「せっかくわざわざきてくれたのに、ただ家にいるだけじゃ勿体ないという意味です」

「理解」

それを受けてゆーみさんがうなずいた。

「じゃあ、兄さんが気に入ってるという学園都市の駅の周りを案内して」

「いいですよ。もう少ししてから昼食に合わせて出かけましょうか」
弓月くんが兄の顔で笑った。

「じゃあ、そろそろ着替えてこようかな」

食後のコーヒーで少しの間ゆっくりしてから、わたしは出かける準備をすべく立ち上がった。

時刻はもう10時を過ぎていた。今から駅の方へ行って、駅前で

ふらふらしていたら、すぐにお昼どきになるだろう。

わたしは自分の部屋のドアノブに手をかけ　そこで動きを止めた。

振り返ると案の定、ゆーみさんがこちらを見ていた。

「えっとね、ここにわたしの荷物が置いてあるの」

少し前に弓月くんが倉庫状態だと説明した部屋に、勝手知ったる他人の家とばかりに入っていくのも変だろうと思って言ったのだけど、どうにも取ってつけたような説明になってしまった。

ゆーみさんが無言でうなずくのを見てから、わたしは部屋に入っ

た。

「さて、どんなのによっかな……」

別に何を着てもいいのだけど、ゆーみさんがゴスロリなだけに、何となくこちらでも対抗したくなる。

決めた。

いつぞやのパンククロリタにする。カットソーとアームウォーマーに、膝丈のスカート。ほとんど黒だ。ついでに髪もパンク系ポニーテールにまとめてみた。

「おまたせー」

手早く着替えて部屋を出る。弓月くんの反応も気になるけど一度見せているので、先にゆーみさんの様子を窺った。

「む……」

と、小さく不機嫌そうなゆーみさんの発音。わたしのスタイルは何か刺激するものがあつたらしい。

「……」

「……」

思わず睨み合ってしまった。

3人で駅へと向かう。

弓月くんとゆーみさんは、並んで歩きながらお互いの近況報告を交わしている。ゆーみさんのアンティークな旅行鞆トラベリングは弓月くんが持

っていた。

そのふたりの後ろを、わたしが少し離れて歩く。

兄妹や家族の話に遠慮したというのもあるけど、このときのわたしは考えごとをしていた。

(瑞穂、かぁ……)

瑞穂。

ゆーみさんが口にした名前。弓月くんとの関係は不明。宝龍さんの名前に並んで出てきたのだから、やっぱり前につき合っていた人なのだろうか。いったどんな人だろうか。宝龍さんみたいに美人？それとも真反対にかわいい系？

「……」

聞いてみたいけど、あれっきり話題に上らないし。タイミングがつかめない。

そのとき、ゆーみさんが足を止め、振り返った。

「え？ なに？」

わたしも立ち止まった。

「兄さんと並んで歩いたりしないの？」

「あ、うん。でも、今はゆーみさんがいるから」

「気にしなくてもいいのに」

ゆーみさんは笑うでもなく、透明なガラスの声で言うと、さっと弓月くんの隣をあけた。

「えっと、じゃあ……」

わたしはおずおずとその位置に進んだ。弓月くんの隣。こうやって改めてそこに立てと言われると、何となく気恥ずかしいものがある。

すると。

「手はつながないの？」

「は？」

わたしは間の抜けた声を出して、ゆーみさんの方を見た。彼女は表情も変えず続ける。試すような口調だ。

「つき合ってるんだから、いつもそうしてるのかと」
「……」

わたしは、今度は弓月くんに目をやった。

いつもは眠そうな彼の目が少しだけ大きく見開かれ、戸惑いの色を見せていた。わたしだって戸惑っている。だって、手なんかつないだことないし。

目が合った。

「……」

「……」

でも、無言。

弓月くんの視線が、目を逸らすようにして少し下がったけど、それはわたしの手を見たのだとわかった。

「それじゃあ……」

「う、うん……」

弓月くんは誘うように手を浮かし、わたしも同じようにしてそれに応えた。それでも手を握ることに躊躇っていると、弓月くんから手を取ってきた。

初めてつないだ手は、優しい感触だった。

心臓がどきどきしている。

「ゆ、弓月くんの手、冷たくない？」

「そうですね？」

努めて感情を殺した弓月くんの声。

「君の体温が高いだけじゃないですか？」

「そ、そうかも……」

確かにそうかもしれない。少なくとも今のわたしの顔が熱いのは確かだ。

結局、わたしたちは手をつないでいる間中、ひと言も話さないままだった。

駅とショッピングモールの上に広場がある。地面が綺麗なタイル

敷きになっていて、端の方には段々になった、イベント時には客席代わりになるような場所もある。

駅にやってきたわたしたちは、シヨッピングモールでふらふらしてから、昼食を食べ、今は広場のその客席部分に腰を下ろしている。上から数えた方が早いような高い位置に、わたしとゆーみさんが体を内側に向けるようにして並んで座り、その一段上に弓月くんがいた。三角形の位置関係。

客席の正面では若い夫婦がよちよち歩きの赤ん坊とボール遊びをされていて、見ていただけで頬が緩んでくる。

「兄さん」

「ん？」

不意の呼びかけに応えた弓月くんもその親子を見ていたのか、返事には微笑むような響きが含まれていた。

「因みに、子どもは何人くらいの予定？」

「ぶっ」

噴いた。

「いったい何を言い出すんですか!？」

「ただ兄さんの将来のビジョンが知りたかっただけ。……で、どうなの？」

「どうと言われてもね……」

弓月くんは助けを求めるように、わたしを見た。ていうか、こっちを見られても困る。そもそも弓月くんがはじめた嘘なんだし。それに今顔を見たら照れるから。

「そんなこと考えてるわけないでしょうが」

「つまり何も考えず刹那的な快楽を求めていると」

「そういう意味ではありません」

たぶん弓月くんは、将来を誓い合った仲じゃないんだから、そんなことを考えているわけがないと言いたいのだろう。それをゆーみさんが見事に曲解したわけだ。

「そういうのイクナイ。若ものの性の乱れを肌で感じた。お兄様、

あなたは墮落しました」

「あのですねえ……」

弓月くんが呆れている。いったいどういうネタなのだろう。

「美ゆきさんのときは、もう少し誠実につき合っていたように見えただけ」

「そうですね？」

弓月くんはなぜか自嘲気味に苦笑した。

最近わかったことだけど、もともと自分のことを他人ごとのように語って煙に巻くところのある弓月くんは、宝籠さんのことになると途端に拒絶するような態度になる。たぶんわたしにはその理由を聞く権利を与えられているのだろうけど、未だに聞くことができている。その勇気がないのかもしれない。

「じゃあ、瑞穂」

ゆーみさんの口からその名前が出ると、わたしははっとした。弓月くんはどういう反応をするのだろう。

が。

「だから、何でその名前を出すんですか」

弓月くんはびしゃりと言って、ゆーみさんの言葉を遮った。あまり話題にしたくないのだろうか。

「……冗談」

対するゆーみさんも短い言葉でそれに応じた。

そして。

なぜかわたしを見た。

意図は不明。

「そろそろ帰る」

再び弓月くんの方を見上げ、ゆーみさんが告げた。

「早いですね」

「家まで2時間あるし、目的は果たしたから。それに瑞穂にも会っていくつもり」

「そうですね？」

心中複雑そうな弓月くんの声。ゆーみさんと瑞穂さんなる人は友達同士らしい。

「ところで兄さん。何か飲みものを買ってきて。すぐ近くに自動販売機があるけどそこじゃなく、はるか遠くに見えるコンビニまで」
わたしと弓月くんは顔を見合わせた。ゆーみさんが何を意図しているは考えなくてもわかる。本人も隠すつもりはないよう。

「いいですよ。……じゃあ、ちょっと行ってきますので、佐伯さん、しばらくお願いします」

「あ、うん……」

弓月くんは立ち上がり、段々を跳ねるようにして駆け下りた後、落ち着いた歩調でコンビニへと歩いていった。いつもよりゆっくりかもしれない。

わたしとゆーみさん、ふたりきりになった。

「……」

「……」

小さくなっていく弓月くんの背中を黙って見つめる。
と。

「兄さんと同棲してるの？」

不意打ち。

でも、本当はどこかでそれがくるのをわかっていたようにも思う。

「知ってたの？」

「わからないはずがないわ。あの家、兄さんの趣味じゃないもの。いっぱいあったもの。兄さんの部屋はやっぱり兄さんの部屋だったけど、リビングやキッチンには違う色が混ざってた。それに私は兄さんのことをよく知ってる。仲良くなった女の子を、すぐに部屋に呼ぶほど器用じゃないわ」

「あはは……」

なんとなく乾いた笑いが漏れてしまう。

「言い換えれば、いいかげんじゃないってこと」

「うん、そうだね」

「その兄さんが同棲してる。ちょっと驚いた」

ゆうみさんがわたしを見た。あんまり驚いている顔には見えなかったけど。

「えっとね、同棲じゃなくて、ルームシェアなんだけどね。ちょっと事情があつて。だから、別に好きだから一緒に暮らしてるってわけじゃないの」

「ふうん」

ゆうみさんのガラスを響かせたような相づちは、まるでわたしの言葉に含まれた嘘を見透かしているようだった。

「誤解しないでね」

わたしは念を押した。

誤解とはどの部分を指しているのだろう。同棲という部分か。それとも……。

「瑞穂」

「……」

「気になる？」

「……」

なんか嫌な話の飛び方したっ。

「少し……」

それが正直な気持ちだ。いったい弓月さんとどんな関係で、どんな人のだろう。知りたいけど、それを訊くタイミングをずっと逸している。

「兄さんに聞いてみれば？」

「でも、それは……」

「大丈夫よ」

ゆうみさんはきつぱりと言い切った。

「きつとあっさりおしえてくれるわ。帰ってからでも聞いてみたらいい」

「う、うん……」

そうは言われても、わたしはあまり乗り気ではなかった。

「私、けっこう意地悪な女の子だから」
謎めいた笑み。

そして。

「兄さんのこと、よろしくお願いします」

そう言っつて話を締めくくった。

ちょうど弓月くんが戻ってくるころだった。

電車に乗って帰っていくゆーみさんを見送った後、わたしたちは
帰路についた。

「まさかゆーみがいきなり訪ねてくるとは思いませんでした」

一段落ついてほっとしたのが、弓月くんが今日を振り返って言った。尤も、まだ夕方なので一日を振り返るには少し早い時間だけど。

「まあ、何とか誤魔化せたからいいようなものですが」

「……」

弓月くん、妹さんを舐めると、いつか痛い目を見えると思うな。

「とは言え、いずれはタイミングを見て、ちゃんと言わないといけませんね」

「同棲してること？」

「ルームシェアです」

すかさず訂正された。

しばらくは無言のまま並んで歩いた。

駅を離れ、家が近づいてくるにつれて、車も人も交通量が減ってきた。街はさながら綺麗なゴーストタウンだ。

わたしは瑞穂について考えていた。結局、ここまで聞けずに来た。それを弓月くんに聞いたら、果たしてどんな返事が返ってくるのだろうか。

「ねえ、弓月くん」

ようやくわたしは決心した。背中を押したのはゆーみさんの言葉。きつとあっさりおしえてくれるわ

「ゆーみさんが言っつた瑞穂って、どんな人？」

「ああ、あれですか？」

確かに弓月くんは特に何かを気にしたふうもなく、受け答えをした。

「あれはゆーみの冗談ですよ」

「だから、どんな人かなって」

「佐伯さんも会ったことのある人です」

「え？」

思いがけないリプライ。

誰だろう？ 宝龍さんは確か美ゆきだし。あとわたしも会ったことがあるといえば、弓月くんの悪口を言ってよけいな忠告をしてくれた人だろうか。でも、あの人と弓月くんはお世辞にも仲がいいとは言えなさそうだし。

そういろいろ考えを巡らせていると。

「滝沢ですよ」

「ふえ？」

なんですと？

「滝沢瑞穂。彼の名前です」

「え、いや、だって、瑞穂って……」

「言いたいことはわかります。でも、瑞穂って名前は女性に多いですが、男性にもつけられます。少ないですが」

「……」

そのときのわたしは、酸欠の金魚みたいに口をパクパクさせていたかもしれない。

「これが真相？」

ああ、本当に、ゆーみさんは意地悪だ。

まるで静かな台風。

ゴールデンウィーク第一日目は、台風一過でよつやく幕を下ろそうとしていた。

1(1)。「どっぴなっても知りませんよ」

ゴールデンウィーク明けの朝、

「しばらく天気が悪いのが続くんだった」

いつものように佐伯さんに起こされ、顔を洗ってから朝食のテーブルにつくと、そう彼女が切り出した。

体をひねってリビングの方に目をやる。ベランダへ出る全面窓からは、昨日までの五月晴れはどこへやら、確かにはつきりしない色の空が見えていた。

「洗濯ものは中に干しておくからいいとして、あまり雨がずっと乾かないものも出てくるかも」

「そうですね」

とは言え、毎日洗うものといえば下着類やTシャツ、各種タオルくらいのもので、その辺りは持っている数も多いから、そうそう尽きるとは思えない。

「いざとなればわたしは、下着にエプロンで対処しようと思います」
「思わないでいいです」

佐伯さんのふざけた案を、間髪入れず叩き潰す。

「新婚さんはそんならしいよ？」

「たぶん違うと思います。……まったく、どこからそんな突拍子もない考えが出てくるのやら」

それは問いではなく、単なる独り言、もしくは愚痴だったのだが、佐伯さんはすすっていた味噌汁のお椀を置いてから答えた。

「最近ね、うちのクラスの女の子の間で流行ってて、その手の本がよく回ってくるの」

「……」

なんてものが流行しているのだろうか。

「おかげでレパートリーが増えて、わたしの将来のダンナ様はきっと飽きないと思うな」

「……僕は呆れてますけどね」
レパートリーって、カラオケで歌う話をしてるんじゃないんだから。

「弓月くん、どう？」

「何がですか？」

「こんな将来有望なわたし、今から押さえておく気ない？」

「……ないです、今のところ」

「というか、そんなところを決め手にするって、男として最低ではないだろうか。」

「なんとも朝食が微妙な味になる話だな。」

「佐伯さんにはもつと憤みある性格になってほしいものだ。」

「そんなことを思った朝の風景。」

部屋で登校の用意を整えて、ブレザーと鞆を持ってリビングへ出ると、そこでは佐伯さんが洗濯ものを部屋干ししている真っ最中だった。洗ったハンカチが窓にびったりと貼りつけられているのは彼女のアイデアだ。晴れた日だと、家に帰る頃にはこれがきれいに乾いて床に落ちてている。後は畳むだけだ。

干してあるものの中には、見てはいけないようなものもあるのだが、そこには触れないでおこう。以前、恥ずかしくないのかと彼女に聞いたら、

「え、なんで？ 弓月くんしかいないじゃない」

と言われた。

佐伯さんの中にある相関図の上では、どうやら僕はかなり彼女に近い位置にいるようだ。

「あ、弓月くん。今日は先に出てくれる？ わたしはこれ干してから行くから」

さて、どうしたものかと立ち尽くしていると、佐伯さんが先に口を開いた。

学校へは別々に行くことになっている。たいてい彼女が先で、僕

が後という順番だが、そこまで強く拘る決まりでもない。

「では、そうしましょうか」

僕はブレザーに腕を通した。

「はい、いつてらっしゃーい」

「いつてきます」

そうして後のことは佐伯さんに任せて、僕は先に家を出た。

マンションの前の道を通って大きな通りに出る。それに沿って歩道を歩き、学園都市の駅と水の森高校を結ぶ道に合流。

その交差点で信号に引つかかった。

僕が待っている間、片側二車線の道路を挟んだ対岸では青になっている横断歩道を渡って、水の森の生徒が左から右へと流れていく。数は多くない。予鈴までには時間があるので、登校のピークはもう少し後だろう。

一様に学校を目指す流れの中で、男子生徒がひとり立ち止まった。誰かと思えば滝沢だった。僕を見つけて、待っていてくれるようだ。互いに手を上げて挨拶を交わす。

「おはようございます」

信号が青になるのを待ってから滝沢と合流した。

「さすがクラスの副委員、早いですね」

「クラス委員は関係ないよ。単なる性分だな」

彼は苦笑混じりに返してきた。

僕らは並んで歩き出す。

「お前の方は、今日は佐伯君と一緒にじゃないのか」

「滝沢……」

僕はため息混じりの発音をした。

以前、滝沢は妙な誤解をしていたようだったが、それに関しては、佐伯さんとは家が近くて会う機会が多いだけで、そんな関係ではないとして、きちんと説明しておいた。それで納得してくれたはずなのだが。

「わかってるよ。冗談だ」

「あまり面白くない種類の冗談です」

ところが、この直後、さらに冗談ではない事態が起こってしまった。

「おはようございます。滝沢さん、弓月くん」

透き通るような、涼やかな声。

その声の主が後ろから駆けてきて、声をかけるなり僕の横に並んだのだ。言うまでもなく佐伯さんだ。

「噂をすれば何とやら、だな。……おはよう、佐伯君」

滝沢は上級生らしい余裕のある態度で応じた。が、僕の方は少々気が動転していた。

あれほど外では声をかけないよう言って、佐伯さんもそれなりに守ってくれていたのに。なぜそれを今になって翻してきたのだろうか。しかも、こんな堂々と。

「どうした、弓月。挨拶くらいしたらどうだ」

「……おはようございます」

何が悲しくて同じ挨拶を二度もしなくてはいけないのだろうか。

「はい！ おはようございます！」

佐伯さんは僕の方に顔を向け、改めて返してきた。

嬉しそうな、元気のいい響きだった。きれいな髪の毛の美少女に相應しい。家で莫迦なことを言ったりやったりしている姿は微塵も見られない。まるで別人だ。

「……佐伯さん」

僕は落ち着かない気分になっているのを自覚しながら、彼女を呼んだ。

「前にも言いましたが、僕に近づかない方がいいです。僕はあまり評判のよくない人間ですから」

「知ってます。でも、わたし、そうじゃないって信じてますから」
彼女は気持ちよく言い切った。

信じてるも何も、本当のことを知ってるはずなのだが。

「滝沢さんもそう思いませんか？」

「うん？」

僕を飛び越え、滝沢へと話が振られる。

「滝沢さん、去年も弓月くんと同じクラスだったんですね？ 弓月くんって、そこまでひどい噂が立つような人じゃないと思うんです、わたし」

「そうだな。確かに俺もそう思ってるよ。あの頃、弓月が触れて欲しくなさそうだったから、こっちもあえて首を突っ込まなかったが……どうなんだ、弓月」

そして、一周回って僕のところに戻ってきた。

「……火のないところに煙は立たぬ、と言います」

「それは答えじゃないな」

「大丈夫、わたし、信じてますから」

再び佐伯さんが、反対側から天真爛漫な笑顔を見せながら言った。そんな彼女に、僕は睨むようにして目を向ける。

「どうなっても知りませんよ」

いったいどういう意図があつてこんなことをしているのかは知らないが、悪評のある僕のそばにいて嫌な思いをするのは、きっと彼女だ。

しかし、佐伯さんは滝沢には見えないように、意地の悪そうな顔で舌を出して見せた。

それが答えらしい。

1(2) . 「君はいつたい何を考えてるんですか」

登校時に佐伯さんの襲撃を受けたものの、早めの時間で目撃者も少なかったせい、大きな影響はなかったようだった。

弓月恭嗣が宝籠美ゆきを振ったあの日からだいぶ時間が経っているので、当時のことはもう忘れられつつあるのかもしれない。

とは言え、僕は評判の悪い人間なので、気をつけるにこしたことはないだろう。何かあったときに嫌な思いをするのは佐伯さんなのだから。

ところが、

「弓月君、ちょっといい？」

放課後、終礼が終わって帰り支度をしていると、雀さんが声をかけてきた。あまり友好的ではない調子だ。尤も、ここ最近、友好的だったことなどないのだが。

「今日の朝、一年生のあの佐伯さんと一緒だったって聞いたけど、それ本当なの？」

あの佐伯さん。

入学試験をトップで通り、入学式では新入生総代を務め、帰国子女で、誰もが認める美少女。ひかえめだが華やかさがあり、校内でもすぐに有名になった、あの佐伯さんだ。……僕が知る佐伯さんとはかなり違うのだが。

「本当ですね」

「どういってもりよ」

僕が言い終わるか終わらないかのうちに、雀さんは言葉を重ねてきた。

「と言いますと？」

「まさか宝籠さんの次は佐伯さんだか思ってるんじゃないでしょうね!？」

「それこそまさかですよ」

「じゃあ、朝、一緒にいたのはどういうこと!？」
机を叩かんばかりの勢いで問い詰めてくる。

その点については僕も知りたいので、ぜひとも佐伯さん本人に訊いてもらいたいところだ。

「それにしても、僕にだって女の子とつき合う権利くらい」

「ありません！ 少なくとも不誠実な人間には、そんな権利はありません！」

「……」

あいかわらず雀さんは僕に厳しい。

とは言え、耳が痛い部分もある。宝龍さんのわがままにつき合うかたちで交際をはじめたことは確かなのだから。

「滝沢じゃないですか？」

「滝沢さん？」

僕が友人の名前を出すと、雀さんはきよとんとした顔になった。

「朝、滝沢もいましたから、佐伯さんは彼が目当てだったのかもしれません」

「うーん……」

雀さんは腕を組みつつ、拳を顎に当てて考え込む。あり得る話だと思っっているのだろう。実際、僕なんかより、整った顔の優等生である滝沢が目当てだったと考える方が納得できる。

「なんだ、珍しい組み合わせだな」

そこにやってきたのは、その滝沢だった。すでに帰り支度をすませ、鞆を提げている。

「別に弓月君と話したくて話してるわけじゃありません」

雀さんはむっとして言い返した。

「今朝、弓月君が佐伯さんと一緒にいたっていうから、注意してただけです」

「それが何か問題でも？」

「大あります。こんな不誠実な人が佐伯さんに手を出したらどうするんですかっ」

「それは大変だな」

滝沢は雀さんの剣幕に苦笑しながら答えた。

「ただ、弓月と佐伯君は家が近いらしい。それで他より仲がいいんじゃないのかな」

「そうなんですか？」

「だろう？」

「まあ、そうですね」

滝沢が僕に振り、僕はそれにひとまず同意した。

雀さんはまたも先ほどと同じ構造で、うーん、と考え込んだ。納得できかねるといった様子だ。

「ところで雀さん、今日はクラス委員の会議なんだが」

「あ、そうでしたね。すぐに用意してきますっ」

彼女は慌てて身を翻し、自分の席へと戻っていった。なるほど。それで滝沢はすでに荷物をまとめていたのか。

ふたりはクラス委員だ。雀さんが委員長で、滝沢が副委員長。性格的に融通の利かない委員長に対して、副委員長の方は柔軟な思考ができる。そのため、雀さんがクラスメイトに注意して口論になり、滝沢が割って入って妥協案を見出すといった場面が、この一ヶ月でたびたび見られた。

そんな雀さんだから、会議のことを忘れていたのは珍しい。それほど僕にひと言言ってきたかったということなのだろう。

僕と滝沢は無言で顔を見合い、苦笑した。

「さて、僕は返ります、ナツコさんのことはお願いします」

「ナツコ言わないっ」

教室の向こうの方から間髪入れず、雀さんのそんな声が飛んできた。地獄耳だな、雀さん。彼女の常日頃からの希望にこたえて、漢字表記はひかえておくことにしよう。

「じゃあ」

「ああ」

そうして滝沢と短い挨拶を交わして、僕は教室を出た。

下駄箱から革靴を取り出して履き替え、昇降口を出ると、そこで最も会いたくない人物と会ってしまった。

「あ、弓月さん」

その声をかけてきたのは一年生で佐伯さんのクラスメイトの桜井さんだが、その横に当の佐伯さんがいた。僕が会いたくなかったのはこっちの方だ。

こうして改めて見ると、桜井さんのちょっと癖毛の淡い茶色もきれいだが、佐伯さんの天然の濃淡のついた不思議な茶髪が、際立った魅力を持っていることがよくわかる。

「弓月さん、一緒に帰りませんか？」

桜井さんが僕の真正面に立ち、見上げながら訊いてくる。癖なのか、彼女はやけに近い距離で話す。今も背中まで手が回せてしまいうさだ。

ここで首を縦に振ればもれなく佐伯さんがついてくるのだろうか、かと言って断るための説得力ある理由も見つからなかった。

「途中までになりますか」

「はい。それでもぜんぜんかまいませんっ」

弾んだ声を上げる桜井さん。

ふと佐伯さんの方に目をやると、彼女は口笛でも吹きそうなお澄ました顔でそっぽを向いた。まさか待ち伏せしていたわけじゃないだろうな。

歩き出すと、自然と僕が佐伯さんと桜井さんに挟まれるかたちになった。こういうフォーメーションが嬉しいか嬉しくないかは人それぞれなので、この際おいておこう。それよりも周りがちらちらとこちらを見ているのが気になるな。視線が痛い。

校門を出て、幅の広い歩道を歩く。

「弓月さん、キリカと家が近いんですね」

「そうみたいです。お互いの家の場所を知ってるわけではありませんせんが」

「休みの日なんかはよく会うよね」

桜井さんとは反対側から、佐伯さんがつけ加えてくる。

「いいなあ、キリカ。変わってえ」

「何を変われと!？」

女の子たちは元気だ。三人どころか、ふたりだけでも十分に賑やかだ。

「弓月君、今度ごはん作りについてあげようか？」

「……遠慮しておきます」

食事関係をほぼ100%佐伯さんに依存している僕の言う台詞ではないが。

「そのときはわたしも呼んでくださいね」

そして、話の流れを完全に無視する桜井さん。

そうやっていくつかの雑談をしているうちに、僕らが曲がる交差点に辿り着いた。

「じゃあ、お京。またね」

「うわぁん、キリカ、変わってよぉ」

「まだ言うかつ」

別れるときまで楽しげなのは、女の子の特徴だろうか。僕や滝沢、矢神などは非常に地味なのだ。尤も、それには僕たちが平均よりもテンションが低いこともあるが。

僕と佐伯さんは、青になった横断歩道を渡った。向こう側に着いてから振り返ると、桜井さんが手を振ってきた。それに応えてから、再度歩き出す。

桜井さんが抜け、僕たちだけになった。

同じ方向に行く生徒はいない。車道にも時々思い出したように車が走り抜けていくだけ。しばらく歩いてから、僕は口を開く。

「君はいつたい何を考えてるんですか」

「さあ？」

「ということは、何か企んでるわけですね？」

「考えてるよぉ」

そう言いながら彼女は笑った。

「ま、いいじゃない。弓月くんだって、わたしと歩いてて悪い気はしないでしょ？」

「……」

その自信はどこからくるのやら。

「僕にだって選ぶ権利はあると思いますが」

「うわ。何それ？ ちょっと傷つくんですけど。……でも、悪くないと思うんだけどなあ、わたし」

「僕としてはもっとおとなしい、おしとやかな女の子がいいです」

「おしとやか……」

佐伯さんは僕の言葉をワンフレーズだけ復唱した。

それから少しの間、沈黙考していたが、やおら駆け出し、僕の前を回り込んだ。こちらを真っ直ぐ見つめ、手は胸の前で祈るように組み合わされている。

僕らは立ち止まって向かい合った。

「弓月先輩、実はわたし、前から……」

「なんですか、それ」

僕は思わず噴き出した。

「うん。こういうのがいいのかなあって」

佐伯さんはくりと前へと向き直る。

「やっぱりダメかあ。弓月くんの好みに合わせるのって難しい」「再び歩き出し、僕もそれに続いた。」

まあ、ダメというほどではないだろうな。

彼女の仕草や雰囲気にとりとしたことは確かだが、でも、やはりそれは佐伯さんらしくないと思った。

2・「怖いと言わないでください」

完全に日常化してしまった佐伯さんに起こされる朝模様からはじまり、彼女の手作りの朝食を経て 自室で登校の準備を整えてリビングに戻ってきてみると、そこに佐伯さんの姿はなかった。

「佐伯さん？」

と、声をかけてみるが、返事はなし。まあ、もとよりリビングダイニングに隠られるような場所はないので、ここにいないことは一見して明らかだ。ただ、彼女の部屋に続くドアの向こうに人の気配がする。たぶんまだ登校の用意をしている最中なのだろう。

僕は素早く決断し、ドア越しに声をかけた。

「佐伯さん。今日は僕が先に行きますので」

「うん。わかった」
とのこと。

なので僕は、後のことは佐伯さんに任せて、先に家を出ることにした。

回れ右をしてリビングを出、短い廊下を歩いて玄関に至る。

「待つて待つて。わたしも一緒に行くー」

学校指定の革靴に足を突っ込んだところで佐伯さんが飛び出してきた。

有名デザイナーがデザインしたとは言え、あくまでも制服の域を出ないはずのブレザーや赤いチェックのスカートを上手に着こなし、ちゃんと制靴も持っている。

「用意ができてたなら言うてください。先に行ってもらったのに」
一度履いた靴を脱ぐのは面倒だ……というか、佐伯さんの狙いはまさにそこで、僕が出ようというタイミングを見計らっていたのではなかるつか。こうなったら彼女には後5分ほど待つてもらうことにしよう。

「一緒に行こ、弓月くん」

「何を言ってるんですか。冗談じゃない」

先日は一緒に登校してしまっただおかげで……いや、まあ、特に何もなかったが。

「いいじゃない。わたしだって、ほら、もう用意できちゃってるし」「なら君が先に行ってください」

僕は再び玄関を上がろうとした。が、そこには行く手を阻むように佐伯さんが仁王立ちしている。所詮は2LDKのマンション。玄関はそう広くない。

「どいてください」

「ここを通りたかったら、わたしにしろいことをしていけ」

「何をわけのわからぬことを」

そんな台詞、初めて聞いたわ。

僕は嘆息ひとつ。

「わかりました。一緒に行きましょう」

「……そっちを選ばれると、それはそれでショックなんですけど」「佐伯さんが半眼で睨み、つぶやく。いったいどうして欲しいんだ

……とは、さすがに聞けない。恐ろしくて。

「ほら、おいていきますよ。用意してください」

「はぁーい」

ひとまず僕が先にドアを出て、程なくして佐伯さんが靴を履いて出てきた。彼女の鍵で施錠し、ふたり縦に連なって階段を下りる。

「弓月さんと一緒に行くの初めて」

「そうですね」

普段、この付近のこの時間帯に水の森の生徒を見かけたことはないのだが、今日に限って会うのではないかとひやひやする。マンションから一緒に出てくるところを見られでもしたら、いったい何を思われるやら。

幸いにしてそういうことはなく、僕らは並んで歩き出した。

どうにも落ちつかない気分だ。今歩いているこの道は、春からこちらら毎日のように通っている。佐伯さんと肩を並べて歩くことは、

ほとんど休日のたびにやっていることだ。どちらも別段変わった行動ではない。にも拘らず、僕はまったく知らない道を歩いている気分だった。

「こんなところ人に見られたくないですね」

「そう?」

僕の複雑な胸のうちは露ほども知らない様子で、佐伯さんは首を傾げる。

「でも、学校前の道まで行ったら、嫌でも見られると思う」

「まあ、そうですね」

このまま進み、大きな道路に出たところで左に折れる。そうすればやがて水の森高校と学園都市駅の間にある交差点に出る。そこまでいけば僕らはどうあっても水の森の生徒に見られることになるだろう。

「どうなっても知りませんよ」

「それ、前にも聞いた。大丈夫、そのときは……」

と、そこで彼女は一拍おく。

「どうにもならないかも」

「……」

どうにかなる、とでも言っのかと思えば、すでに諦めているらしい。潔いことだ。

すぐに大きな道路に出て、そこに沿って幅の広い歩道を歩く。程なく正面に交差点が見えてきた。直行する道は左に行けば学園都市の駅に、右に行けば水の森高校に通じている。

交差点の信号に引っかかり、青になるのを待つ僕らの前を、左から右に水の森の生徒が流れている。その多くが僕と佐伯さんをちらちら見つつ、通り過ぎていった。さてさて、何を思っているのだろうか。

と、そのとき、

「あ」

佐伯さんが何やら声を上げた。

「矢神さん」

そして、前方の生徒の流れに手を振る。

見れば確かに矢神の姿があった。周りにいる生徒は何ごとか佐伯さんを見、続けて矢神へと視線を移す。かわいそうに。思いがけず注目を浴びることになった彼は、困ったような顔をしていた。

信号が変わるのを待つて向こう側に渡り、矢神と合流する。

「おはようございます、矢神さん」

「お、おはよう」

気弱な矢神は、元気な下級生の勢いに圧倒されつつ応える。僕の方は、何となく挨拶のタイミングを逃してしまっていた。

ひとり増えて、3人で歩き出す。

「あ、そうだ。矢神さんに謝ろうと思ってたんです」

唐突に佐伯さんが切り出した。当然のように猫かぶりモードだ。

「クラブ勧誘会とき、文芸部のところに寄ったのに入部しなかったから、結局ひやかしたただけになっちゃって……」

「あ、いや、いいんだ。もともとそういうイベントだしね」

矢神は佐伯さんに謝られる前に、先回りして言った。彼の言う通りクラブ勧誘会は、要するにマッチングのイベントなのだから、いちいち気にすることはない。それでも謝ろうとする辺りは、彼女の性格のよさの表れなのだろう。

「それにちゃんと新入部員も入ってきたんだ」

「そうなんですか。よかったです。矢神さんとしても一安心ですね」

「そうだね」

面白いものだ。矢神はその性格のせい、決してよく話す方ではない。コミュニケーション能力に問題があるわけではないが、話すときはいつも遠慮がちになる。特に異性に対してはその傾向が顕著だ。その彼が佐伯さん相手だと、ごく普通に会話をしている。これも佐伯さんに備わった能力なのかもしれない。

「滝沢君から聞いたんだけど、弓月君と佐伯さんって家が近いって本当？」

「本当ですね」

答えたのは僕。

「ああ、だからだったんだ」

矢神はひとり納得したようにうなずいた。

「何がですか？」

「僕、ゴールデンウィークに弓月君と佐伯さんが一緒にいるのを見かけたんだ。一ノ宮で」

「……」

ちよつと待てと言いたい。いったいどこで見かけたというのだ？

一ノ宮なのはわかつている。問題はそのどこか、だ。ただ歩いてるだけの場面ならいい。一緒に昼食を食べているところもよしとしよう。しかし、僕は人に見られたらあらぬ誤解をされそうな場所に踏み入っている。

「あ、じゃあ、あれってやつぱり矢神さんだったんですね」

迂闊に聞き返せば墓穴を掘りそうで躊躇っていると、佐伯さんがそんなことを言った。

「佐伯さん、知ってたんですか？」

「て言っても、遠目だったし、もしかしたら？程度でしたから」

猫かぶりのまま彼女は僕に告げる。……できればそのときに言うて欲しかった。

「まあ、いい機会だったので、彼女を案内してたんですよ」

気を取り直し、矢神に説明する。彼がどの場面を目撃したか、もう聞くのはやめておこう。

そうこうしているうちに学校へと到着した。

「じゃあ、失礼します」

1年と2年では下駄箱の位置が離れているので、昇降口の入り口で佐伯さんとは別れる。僕と矢神は自分の下駄箱へと向かった。

「弓月君と佐伯さんって、こっそりつき合ってるのかと思ってた」「怖いこと言わないでください」

なるほど、これで疑問は氷解した。

ゴールデンウィーク真っ只中の平日、今日のように登校途中で会った矢神は、そわそわした様子で僕から逃げていった。たぶん見えない場面を見てしまった、僕の秘密を知ってしまったと思っ
て、戸惑っていたのだろう。

上靴を取り出し、履き替える。

「僕はお似合いだと思っけどな」

「……だから怖いことを言わないでくださいって」

とは言え、何が怖いのか自分でもよくわかっていないのだが。

3・「いてもいいと思いますよ」

それを目撃したのは昼休み。

「あの、困りますっ」

僕が目を向けるきつかけとなったのは、そんな声だった。

弁当を食べ終え、学生食堂に飲みものでも買いに行こうと廊下を歩いて、ちょうど階段に差し掛かったとき、先のような声が上がって聞こえてきたのだ。見上げてみれば、踊り場からやや下辺りにふたりの生徒がいた。男子と女子、ひとりずつ。男子生徒が上段に立ち、女子生徒の前に立ちはだかっている構図だ。

そして、こちらに背を向けている女子生徒は、グラデーシヨンのような天然の濃淡のついた茶髪　佐伯さんだった。

僕は立ち止まり、気配を殺して様子を窺う。

「俺さ、クラス替えて仲のいいやつと離れちゃって寂しいんだよね。よかったら友達になってよ？」

男子生徒とは軽い口調で佐伯さんに話しかける。

大丈夫だ。わざわざ他学年の佐伯さんを狙って声をかけるアグレッシブなやつが、友達がいはいはさすがない。だいたいもう5月だぞ。「あれ？　もしかしてケータイ、黒？　もっと女の子らしい方が似合うのに」

佐伯さんは今、どうやら手に携帯電話を持っていたらしい。男子生徒とはそれを見てとったのだろう。

これにむっとしたのは佐伯さんだ。

「ほっといてください。わたしの好みですから」

「ま、それもそうか。ちょうどいいや。ケータイのアドレス交換しなない？」

「少し考えさせてください」

勿論、それは言葉通りの意味ではなく、丁重なお断りだ。

言つと同時に佐伯さんは、足を踏み出した。上階に行きたいのだ

ろう、男子生徒の横をすり抜けようとする。だが、相手は体を横にスライドさせ、その行く手を阻んだ。継いで、にっと笑う。

僕の方からは佐伯さんの表情は見えなかったが、彼女の困った顔が目に見えようだった。

やれやれ と、ため息ひとつ。

「佐伯さん、どうしたんですか？」

僕が白々しく声をかけると、ふたりが同時にこちらを向いた。男子生徒の方は邪魔をされたせいか、あからさまに不機嫌そうな顔だった。

「あ、弓月くん」

佐伯さんは僕を認めると、そのまま階段を駆け下りて、寄ってきた。

「何をやってたんですか？」

「うつん。なんでもない。行こ。……それじゃあ、失礼します」

最後の言葉は例の男子生徒に向けられたものだ。僕らは並んで歩き出す。去り際、彼が舌打ちしたのが聞こえた。

「ごめん、弓月くん。助かっちゃった。あの人、しつこくってさー

……」

佐伯さんは頬を膨らませる。

「別に僕はただ、君がいたから声をかけただけですよ」

「嘘ばかり」

「……」

もとより信じてもらえとは思っていないが、だいたい学校では声をかけるなど言い出した僕から声をかけているのだから、この上ない矛盾だ。にしても、その約束もここ最近、特に加速度をつけて崩壊に向かいつつあるようだ。

僕らは並んで廊下に行く。

昼休みなので行き交う生徒や教室の前で喋っている生徒も多い。

そのほとんどが一度は佐伯さんに目を向けた。ここは2年生の教室が集まる階だ。噂の新入生の話を耳にはしていても、実際に目にし

たことはない生徒も多いのだろう。

そして、一緒に歩く僕も、やはり見られる。あまり居心地はよろしくない。

「佐伯さん、教室に戻るんじゃないんですか？」

僕は耐えかねて、そう彼女に尋ねた。

「うん、そうなんだけどね。せつかく会ったんだし、どこか案内してよ。誰も知らない穴場とかないの？」

「知りませんよ、そんなところ」

「だいたいなぜ僕が？」

「連れて行つてくれないと、授業中に居眠りしたとき、弓月くんの名前を出しながら誤解されそうな寝言を言うぞ」

「寝言がコントロールできるならやってみなさい」

「甘いなあ。そんなの寝言っぽく言えばいいだけじゃない。『ああん、弓月くんが……』」

「とりあえず中庭でも行きますか」

僕は佐伯さんの言葉を遮って提案した。まったくもって洒落になつていない。

「中庭に何かあるの？」

「いえ、何もありません。ただ他に思い浮かばなかっただけです。

……やめておきますか？」

「ううん。そこでいい。行こ」

佐伯さんの足取りが弾むようなものに変わった。

僕は昇降口まで下り、そこで靴を履き替えてから中庭に回った。

中庭はふたつの校舎に挟まれたスペースだ。真ん中を舗装された小道が貫き、左右はきれいに手入れされた芝生に覆われている。その芝生の上にはいくつかのベンチやテーブルが置かれていて、天気の良い日にはここで弁当を食べる生徒も多い。が、今日は生憎の曇天。五月晴れはどこへやら。人の姿はあまりない。

ふたつの校舎を結ぶ連絡通路に設置された自動販売機でミルクティを買い、僕は空いているベンチに腰を下ろした。木製のやさし

いデザインのベンチだが、背もたれがないのが難点だ。

「弓月さんとわたしって、こうやってたらつき合ってるように見えるかな？」

ミルクティに口をつけ、人心地ついてから佐伯さんがそんなことを言い出す。

「観測する側によります。何をすればそう見えるという条件がありませんから」

「……面白くない答え」
言葉通り不満げに漏らす。

だが、一拍おき、

「でも、弓月くんらしい答え」
今度は少しだけ笑いながら言った。

「……僕らしいですか？」

「うん」
「……」

なんと、まあ、あっさりと言ってくれる。僕と最もつき合いの長い僕ですら、何が僕らしいのか把握していないというのに。

何となく空を見上げた。

今にも降り出しそうというわけではないが、厚い雲に覆われて太陽は遠い。

「これで天気さえよければ最高なのですが」
午後の穏やかな陽射しの下でのティータイムは、きつと贅沢な時間

間に違いない。

「天気さえ？」
隣で佐伯さんが問うてくる。

「そうですね」
「じゃ、そこにわたしもいていい？」

それが彼女の真の問いらしい。

確かに僕は、この状況を差して「天気さえ」と言った。天気のみ唯一の不満を持ち、佐伯さんが横にいることには触れていない。

想像してみる。

彼女のいる風景と、彼女のいない風景。

彼女と一緒に過ごす時間と、ひとりで過ごす時間。

「……まあ、」

と、僕はタイミングをはかるように発音した。

「いてもいいと思いますよ」

「そっか」

対する佐伯さんの答えは短く、それだけだった。

そう言えばこの頃、急にひとりになりたくなることが少なくなっ
たな、と思った。

4・「そろそろおしえてください」

「モーニンッ」

という元気な声を、意識の遠いところで聞いた。

佐伯さんの声だ。

続けて、ギシ、とベッドのスプリングが軋む音。彼女がベッドに手を突いて、僕の顔を覗き込んでいるのだろう。目を開ければとびきりの美少女の顔が、かなり近い距離で見られるに違いない。が、今の僕はそうできるほど意識も体も覚醒していなかった。

「早く起きないと朝ごはん抜きの上、わたしの朝ごはんが弓月くんになります」

そんな冗談にも反応できず、やがていつもと違う僕の様子に、佐伯さんが「むー？」とうなりはじめた頃、僕はようやく口を動かすことができるようになった。

「……あと10分だけ寝かせてください」

「わ、珍しい。弓月くんもそんなかわいいこと言うんだ」

何がかわいいのかわからないが、それくらい言うこともある。

「いいよ。その代わり10分で起きなかつたら、ベッドにもぐり込むから」

当然、このあと僕は10分とかからず起きた。

「どうしたの？ 珍しく寝起きが悪かったみたいだけど」

向かい合って朝食を食べながら、佐伯さんが僕に尋ねた。

「少し遅くまで勉強を」

「中間テスト、近いもんね」

互いにトーストを片手に、サニーサイドアップを箸でつつきながら言葉を交わす。僕はまだ完全には眠気が取れていなかった。

「ね。今度一緒に勉強しようか。いろいろおしえてよ」

「何を言うんですか。凡人の僕が、入試をトップで通った人におし

えることなど何もありませんよ」

むしろ一学期の今なら、僕の方が佐伯さんにおそわることがありそうだと。

それからしばらく佐伯さんは何やら考えている様子だった。眠かった僕はむりに会話をつなごうという気力もなく、何か考えているなど、彼女の顔を見ながら思うだけだった。

と。

「きらーん。次のデートが決まりました」

「はい？」

何を言い出すのだろうか。

「ずばり。まったりデートで」

「……」

わからなかった。

「リビングで一緒に勉強して、たまに休憩して、終わったら買い物に行つて晩ごはん。夜は借りてきたDVD見たり。そんなデート」

「リビングでの勉強以外は普段とあまり変わりませんね」

「いいの。デートだと思えばデートになるんだから」

拘りがあるのかなのか、さっぱりわからない理屈だ。

だいたいその場合、はじまりと終わりはどうするつもりだろうか。一緒に住んでいるのに。「今からはじめます」「これにて解散」とでもやるのだろうか。何とも間抜けな話だ。

「あ、確かにそうだね」

その辺りの疑問をぶつけてみたところ、そんな答えだった。あまり深くは考えていないようだ。

「わかった。日曜までに考えとく」

「……」

でも、どうやら計画の実行自体は決定事項のようだった。

食後、リビングでコーヒーを傍らに新聞を読んでいると、自室から佐伯さんが出てきた。黒いストッキングの上に赤いチエックのス

カート。白いブラウスにはリボンをつけ、ブレザーも羽織っている。登校の準備は万端のようだ。

「弓月くん、もう出る?」

「いえ。君さえよければ先に出てください」

出ようと思えばすぐにも出られるが、ぱっと見て佐伯さんの方が早そうだ。

「ん。わかった。先に行くから、戸締りお願い」

「わかりました」

佐伯さんは髪とスカートをなびかせて、リビングを横切っていく。彼女は動きが軽やかで快活なので、見ていて気持ちがいい。

佐伯さんが出て行ってから、僕は新聞を閉じた。努めて何も考えないようにして、意識的に無駄な時間を過ごした。女の子と一緒に暮らすような特殊な環境にいてもこういうことができる僕は鈍感なのか、それともただ単に慣れてしまっただけなのだろうか。

それから10分ほどしてから部屋でブレザーを着込み、制靴を持って家を出た。

「おはよーございますっ」

そこになぜか佐伯さんがいた。

「……」

「……」

「……そこで何をやっているんですか、君は」

「かわいい下級生モードでご挨拶っ」

かわいいと自分で言うか。

「そうじゃなくて、君は先に行ったはずではと聞いているんです」

「うん。それがちょっと忘れものをね」

自分の失敗を告白して舌を出す姿は、確かにかわいくはある。

「そーゆーわけで、一緒に行こー」

「嫌です」

「ダメ。そこで待ってて」

僕が間髪入れず答えても、佐伯さんがトーンを落とした声でさっ

くりと却下した。僕と入れ替わるようにして家の中に入っていく。閉じたドアを見ながら、とつと逃げてしまおうかと考えるが、すぐにドアが開き、佐伯さんがひょっこり顔を出した。

「逃げたらひどい目に遭わせるから」

ひとこと言っつて、また消える。

とりあえず逃げる気は失せた。

さほど待たされることなく佐伯さんが戻ってきて、結局、玄関の鍵は彼女がかけた。

「いったい何を忘れたんですか？」

「体操服とジャージ。今日は体育があるのにな」

荷物にサブバッグがひとつ増えている。忘れものしたのは確かだよ。問題は、果たしてそれが本当にうっかりして忘れたのか、故意に忘れたのか、だ。まあ、追求しても仕方のないことだろう。

さて、彼女と一緒に登校するのは何回目だろうかと、佐伯さんと並んで歩きながら思う。

「どうしたの？ 考えごと？」

ほとんどひとりで話していた佐伯さんが、隣から聞いてくる。僕がかんまりいいかげんな相づちを打っていたせいで、見抜かれてしまったらしい。

「まあ、少し」

「女の子のこと？」

「残念ながら僕には、離れているときまで気にするような女の子の知り合いはいませんよ」

言っつていて少々悲しくなるが。かつて宝龍さんときき合っていたときですら、そんなことはなかった。

「わたしは？」

「今ここにいるじゃないですか」

「じゃあ、いないとき」

「極力考えないようにしています」

「ひつどーい」

ふざけ半分に肩からぶつかつてくる佐伯さん。

「わたしは弓月くんのこと考えるな。授業中、今なにやってるんだろっ、とか」

「君が授業中なら僕も授業中ですよ」

「ロマンがないあ。……それで、なに考えてたの？」

「いつもと一緒にですよ。こんなところあまり人に見られたくないな、と」

僕が何に不安を感じているかは言わずもがな。

学園都市の駅と水の森高校との中間にある交差点まで来た。僕らが信号待ちをしている間、同じ制服を着た生徒たちが、時折こちらに目をやりながら対岸を通っていった。

「僕が心配しても君は、なるようになるとか、どうにもならないと言っんでしょっね」

「ま、そんなところかな」

佐伯さんは笑い、僕はため息をひとつ。

やがて信号が変わり、僕らは横断歩道を渡って水の森へ向かう生徒の流れに合流した。

佐伯さんづいていてる日というのはとことんまで縁があるようで、この日、僕は昼休みにまで彼女と会った。ただでさえ家で朝晩顔を合わせているのだから、学校でまで会わなくていいと思うのだが。

彼女と鉢合わせしたのは体育教員室の前だった。僕は別の場所です事をすませてそこを通りかかったところ、佐伯さんが中から出てきたのだ。

彼女の、半袖の体操服にトレパン姿を見て、朝、今日は体育があると言っていたのを思い出した。どうやら5時間目がそろらしい。

「こんなところで弓月くんとか会うなんて……運命？」

「偶然でしょう」

この程度で運命を持ち出すとは、運命も安くなったものだ。佐伯

さんは「ロマンがない」と、僕の答えに不服そうだった。どこかでロマンが流行しているのだろうか。

「あ、そうだ。おしえて欲しいんだけど。トレーニングルームってどこにあるのかな？」

「トレーニングルームですか？」

聞き返す僕。

「うん。今日の授業は正しい筋力トレーニングのやり方なんだって。女の子に何おしえるんだか」

聞くからにつまらつまらなさそうな授業に、佐伯さんはやる前からうんざりしている様子だった。

おそらく正しい筋トレ云々はカリキュラムとして組み込まれているのだろう。去年の今ごろ、僕も授業でやった覚えがある。確か雨の日だった。

「トレーニングルームはどちらかというと運動部のためのものから、クラブハウスのそばにありますよ」

「クラブハウス？」

佐伯さんは首を傾げる。ピンとこないのだろう。それもそのはず、クラブハウスはあまり目立たない場所にあるから、利用しない生徒には所在がわかりにくいのだ。

で、結局。

「案内」

「はいはい」

こうなる。

僕としても口だけで説明し切る自信はなかったので、一緒に行く方が手っ取り早いとは思っていた。

ひとまず昇降口へ向かう。

「ところで」

並んで歩きながら、佐伯さんが次の話題を切り出す。

「わたしの体操服姿、どう？」

「どう、とは？」

「や、弓月くん的にぐつときたりするかなって。ほら、わたし、成長期をアメリカ的な食生活で過ごしたせいか、胸はある方だし。スタイルも悪くはないと思ってるんだけど」

「……」
確かに制服のときより胸の起伏はよくわかった。

「でも、君、家じゃもつと薄着のときもあるでしょう」

それこそむしろ裸に近いようなときもある。今でも時々うっかり着替えを持たずに風呂に入ってしまうので、バスタオルを巻いただけの姿でリビングを通っていく。僕の心臓に負荷をかけて殺すつもりなのではなかるうか。

「それでリアクション少ないから聞いてるんじゃない。実はコスチユームとかユニフォームのほうが好みなのかなって」

「君はどういう目で僕を見てるんですか……」

リアクションをしないのは、いちいちつき合っているとキリがないからだ。

「もうひとつ聞いていい？」

「くだらないことなら却下します」

「……」

黙った。

口を閉ざして沈黙した。

いったい何を聞くつもりだったのやら。

そんなことをしている間に昇降口に辿り着き、僕らはそれぞれの下駄箱で靴を履き替えた。

「どっち？」

「こっちです」

向かうのはグラウンドの方向。

「弓月くん、今日一緒に帰れる？」

「帰れるかと訊かれたら、帰れます。でも、僕としては嫌です。できればそうしたくありません」

「言っと思った」

佐伯さんは苦笑気味。予想していたのなら聞かなければいいと思うのだが。

「でも、待ってるから。嫌なら無視して。一緒に帰ってくれるなら声かけてよ」

「……」

なんとも質が悪い。

普段強引なくせに、時々一步引いて試すようなことをする。

「あ。あれがそう？」

佐伯さんが前方を指さす。行く手に長屋のような建物が見えていた。

「え、ええ、そうです」

「だったらもう大丈夫。後は自分で行くから。ここでいいよ」

「そうですか」

「うん。ありがとう、弓月くん。じゃあね」

先にきていたクラスメイトでも見つけたのか、佐伯さんは小走りに駆け出す。途中、一度振り返って僕に手を振ってくれた。

一緒に帰る帰らないの話題は、再び口にすることはなかった。もう一度話題にしてくれたら、どうにかして有耶無耶にすることもできたのに。

そして、問題の放課後になる。

「学校が終わって気が重そうにしているやつを、初めて見たぞ」

僕がゆっくり帰り支度をしていると、滝沢が声をかけてきた。今日はもう帰るらしい。次期生徒会副会長の座を狙って、今からこつこつと下準備をしている彼にしては珍しいことだ。

「いろいろありまして。……そうだ、滝沢。昇降口のところで佐伯さんが待っているので、誘って一緒に帰ってあげてください」

「俺を待っているわけじゃないだろう」

「まあ、そうなんですけどね」

そこで滝沢はしばし考える。

「なんだ、弓月、彼女に帰りに待ってると言われたのか？」

「……」

頭の回転の速いことで。

滝沢が佐伯さんを連れ去ってくれたら、僕は考える必要がなくなると思ったのだが。

「そういうことなら野暮ことはせず、俺は先に帰るとしよう」

そして、彼は嫌味にならない程度の薄笑いを浮かべ、教室を出ていった。こうなったら毒をもって毒を制す。宝龍さんでも誘っていかか。毒が2倍になるだけのよう気もする。下手をすれば2乗だ。諦めの気持ちで、ため息をひとつ。

僕は腹をくくり、教室を出た。廊下を歩き、階段を降り、また廊下に行く。そうして着いた昇降口で靴を履き替えて外に出てみれば、昼休みに言った通り佐伯さんがそこで待っていた。

彼女は後から出てきたクラスメイトと手を振り合っている最中だった。それが終わるのを待って、僕は声をかける。

「お待たせしました」

「うっん。たいして待ってないから大丈夫」

嬉しそうにこつと笑う彼女。

「じゃ、行こっか」

僕がここに来たことについては、ひと言も触れなかった。何か心を見透かされているようで、落ち着かない気持ちになる。

確かに僕には選択の余地が与えられていた。その中でこの選択肢をとった心情を説明するのはやめておこうと思う。とりあえず、佐伯さんに聞きたいこともあったので、とだけ言っておこう。

「そろそろおしえてください」

校門を出てしばらくは他愛もない話をしていた。主に今日あったことなど。それからいつもの交差点で横断歩道を渡り、下校する生徒の流れから離れたところで、僕はそれを切り出した。

「何を？」

「君が何を考えているか、です」

「そういえば、そんなことも言ったような？」

佐伯さんとはぼけるようにして、疑問形で首を傾げた。

「前にも言ったはずですよ。学校では僕に近づかないで」

「でも、」

と、僕の言葉は遮られた。

「何もなかったんじゃない？」

「……」

「わたしも別に何もなかったよ。誰も何も言わないし。……弓月くんは？」

「いえ、まあ……」

何かあったかと問われたら、何もないと言う他はない。

「でしょ？」

僕は去年の宝龍さんの一件で悪評のついて回る人間になった。そんな僕と交友をもてば佐伯さんが陰口を叩かれたりするのではないかと不安だった。

でも、それも僕の心配のしすぎだったのだろう。

もしかすると僕が思っているほど、周りはもう気にしていないのかもしれない。それこそ人の噂も75日というやつだ。

僕らは無言で歩を進めた。

「ああ」

と、唐突に僕は思い至る。

「なるほど」

「なに？」

「いえ、たいしたことじゃありませんよ」

考えてみれば、少し前から佐伯さんは言っていたではないか。どうにもならないよ、と。

これが彼女が示した証明と解答。

要するにそういうことだったのだろう。

5(1)。「いつの間に僕はこんな色男になったのだろうか」

「ゆーみーづーきーくん。ガッ」行ーこーお」

「君は小学生ですか」

朝、朝食を終え、自室で登校の準備をしていると、佐伯さんがひよっこり顔を出した。

「いいじゃない。それより学校」

「行けばいいのでは？」

「一緒に」

「いやです」

「なんで!？」

効果音をつけるなら「がーん」といったところか。佐伯さんはオバーに驚いた。

「いえ、とりあえず反射的に言っただけです」

我ながらそれもどうかと思う。よけいな反射運動が身についてしまったらしい。

「じゃ、いい？」

「そうなりますね」

「なんか中途半端な態度」

彼女は眉間にしわを寄せた。

「意思表示ははっきりと。『一緒に学校に行きたいです。ついでにえろいことも』」

「君ひとりで行ったらどうですか？」

「ごめんなさい。一緒に行きたいのはわたしでした。……じゃ、待つてるから」

彼女は言うだけ言って、ドアの向こうに消えた。

「まったく……」

なぜこんなにも一緒に行くことに拘泥するのか。理解不能だ。と思っていたら、再びドアが開いた。

「えろいことをしたいのもわたしです」

何か投げつけてやろうと、思わずベッドの上の枕を手に取った。が、それを振りかぶったときには、すでに彼女の姿はなかった。

学校までのいつものルートを佐伯さんと一緒に歩く。

弓月恭嗣の一挙手一投足が注目されているなどというのは単なる自意識過剰だとわかったのだが、それでも彼女と一緒に歩くのは慣れない。学校がらみだと特に。

「弓月くん、今夜のおかず何がいい？」

「別に何でもいいですよ」

佐伯さんはいつも通りだ。人には言えない生活が透けて見える会話をするくらいいつも通りなものかどうかと思うが。というか、迂闊にそういう会話を持ち出すのはやめて欲しい。

交差点で信号に引っかけかり、僕らは立ち止まった。

「やはり見られているような気がするのですが、これも気のせいでしょうか」

対岸に行く水の森の生徒の何人かは明らかにこちらに目をやっていた。

「例えばさ」

佐伯さんはそんなことに気にした様子もなく、正面に顔を向けたまま言う。

「弓月くんが歩いていて、少し離れたところに水の森の制服が見えたら、やっぱり見るんじゃない？」

「ああ」

なるほど。言われてみれば自然な運動だ。きっと僕だってそうするだろう。そちらに目をやって、知った顔なら声をかけるし、知らない人間なら10歩も歩けば忘れていくだろう。

「確かに僕もかわいい女の子がいれば、そちらに目が……ぐっ」

途中で佐伯さんの肘打ちが脇腹に突き刺さり、僕の言葉は最後まで続かなかった。かなり遠慮なく入ったようで、僕はあまりの痛み

にうづくまりそうになった。

「君が怒ることはないでしょう」

「しらないっ」

痛む脇腹を押さえながら正面を見れば、先ほどよりも多くの視線がこちらに向けられていた。それもじろじろと。

これも気のせい……ではないのだろうか。

ひとつ目の事件は昼休みに起きた。

屋上にきて

昼休みも半分が過ぎた頃、昼食を食べ終えて矢神と話をしていた僕のもとに、宝龍美ゆきからそんなメールが届いたのだ。

教室内を見してみる。さっきまで女子のグループの中にいたはずの彼女の姿はいつの間になくなっていて、たまたま目が合った雀さんに「ふん」と鼻を鳴らしてそっぽを向かれてしまった。

「どうしたの？」

突然何かを探すように辺りに目をやった僕に、矢神が尋ねる。

「宝龍さんから呼び出しを喰らいました。もし僕が帰ってこなかったら、彼女が犯人だと思ってください」

「え……？」

「冗談ですよ」

僕がそう言うと、矢神はばつが悪そうに苦笑いをした。こんな冗談を真に受けるとは、言った僕に問題があるのか、それとも彼には宝龍さんがそういう人に見えているのか。

「そう言えば最近、宝龍さんは文芸部に顔を出してるんですか？」

まだ机の上に出しっぱなしだった弁当箱を鞆に突っ込みながら聞く。別は大慌てで屋上に行かなくても怒られはしないだろう。

「うん。うちは週に3回活動があるんだけど、そのほとんどにきてる感じかな」

「そうですか」

「最初は本を読んでるだけだったけど、今は小説を書いているみたい」

なるほど。順調に文学少女になりつつあるらしい。年上の女性をつかまえて少女というのも失礼だが。

「なんでも身の回りに面白い話があるとかで、それを題材に書いてみたい」

「意外ですね。あの人は淡々と毎日を過ごしてる印象がありますが」「それはいいんだけど」

矢神は顔を曇らせた。

「何かあると必ず僕に訊くから」

「いいじゃないですか、クラスメイトなんですから。あの人も矢神を頼りにしてるんでしょう」

「この前は帰りに一ノ宮の大型書店につき合わされたんだ」

瞬間、僕は吹き出していた。

あのクールビューティの宝龍さんと気の弱そうな矢神の組み合わせというのも、これはこれでいいような気がする。まさか荷物を持たされたりはしてないだろうな。

「ひどいよ、笑うなんて。こっちは大変なのに」

「すみません。悪気はないんです」

確かに矢神では宝龍さんの相手は荷が重そうだ。

「さて、僕はその宝龍さんのところに行ってきます」

机の上の片づけを終えた僕は、席を立って教室を出た。

階段を上がって、まず3階へ行く。僕ら2年生がいるのが2階。

では3階は3年生かとかというところ、実はあるのは1年生の教室だ。

どういう理由か、水の森は学年が上がるごとに教室の配置される階が下がっていくのだ。順調にいけば来年の僕は1階で授業を受けているはずだ。

3階。

ここは1年生、つまり佐伯さんがいる階だ。僕は特にこれといった意味もなく、廊下から佐伯さんのいるであろう教室がある方向に目をやった。普段の10分の休み時間よりも出歩く生徒が多く、騒がしい昼休みの風景。そこに佐伯さんの姿はない。ここであつたり

会うほどタイミング良く（悪く？）はないらしい。

「おっと、弓月くん発見」

と思ったら、背後から聞き慣れた声。振り返ればそこに佐伯さんが立っていた。

「……なぜ君は人の裏をかいて後ろから現れますか」

「悪いことしてるみたいに言わないでよ」

彼女は心外だとばかりに頬を膨らませた。

「もしかしてわたしに何か用？」

今度は一転、なぜか期待に満ちた目で僕を見る。

「いえ、別に君に用というわけではないのですが」

「なーんだ」

さて、ここをどう切り抜けたものか。正直に屋上へ行くことを話すのは論外のような気がする。ここは下手にその場しのぎのことを言うよりは、引き返した方が無難だろう。

と。

「屋上？」

「え？」

不意打ちで凶星を突かれたせいで反応ができなかった。

「ふうん。屋上に行くんだ」

佐伯さんは屋上へと続く階段に目をやる。僕はというと、今から否定しても無駄だろうと、もうすでに諦めていた。

「宝龍さんが待ってるんだ？」

「ええ、まあ……」

歯切れ悪く答えると、佐伯さんは僕を観察するようにしげしげと眺めた。

「ふうん……」

「……」

「……」

「……」

「わたしも行こう」と

不意に彼女はくるりと体の向きを変え、階段へと向かう。

「え、ちよつと佐伯さんっ」

僕もすぐに後に続いた。短いスカートを押さえながら階段を登る彼女を追う。

「いったい何しに行くつもりですか」

「いいじゃない。前から一度、屋上に出てみたかったんだから」

所詮移動距離は一階分。すぐに階段を登りきった。

止める間もなく佐伯さんは屋上へと出る鉄扉を押し開けた。普段は施錠されている所も、今は非公式の鍵の持ち主が外に出ている最中なのですんなりと開いた。

青空の下に出ると、グラウンドとは反対側のフェンス際に宝龍さんがいた。

鉄扉の開閉音で振り返った彼女は、まず最初に佐伯さんの姿を見つけ、それから怪訝そうな顔をこちらに向けた。僕は黙って肩をすくめる。

「へえ、こんななんだ、屋上って。あまりきれいじゃないね」

「雨ざらしですから」

そもそも利用することを考慮していない、単なる屋根の上なのだ。隅には何やらよくわからないガラクタが放置されている。広い物置くらいにしか思われていないのかもしれない。

「あなたもきたのね」

近寄ってきた宝龍さんは、特に感情を含めずフラットな声で言った。

「ええ、一度きてみたかったものですから」

対する佐伯さんは、宝龍さんには興味はないとばかりに相對することもせず、彼女の横をすり抜けていった。てっきり宝龍さんに突っかかっていくものだと思っていたので、僕は少々拍子抜けした。

宝龍さんは僕を見る。

「運悪く下で捕まってしまったんですよ。……佐伯さん、グラウンド側には行かないようにしてください。見つかってしまいますから」

「わかったー」

僕と宝龍さんもフェンスの方に寄った。屋上の淵、フェンスの土台となつてゐる部分に並んで腰を下ろす。少し離れた場所では佐伯さんが学園都市の街並みに目を向けていた。

「こんなところに呼び出して、何の用ですか？」

「特に用はないわ」

「……」

僕は用もないのに呼び出されて、副次的なものとは言え佐伯さんと宝龍さんが顔を合わせるという心臓に悪い場面に立ち会わされたのか。

「強いて言うなら、呼び出すこと自体が目的ね。今私がきてと言つたらきてくれるのかしらと思つたの」

「そんなことでしたか。でも、たぶん僕は断る理由がない限り、ひとまずは呼び出しに応じると思ひますよ」

「確かにそうね。恭嗣、誰が相手でもこのこ出て行きそう。これじゃ判断基準にならないわね」

いや、まあ、相手が雀さん辺りなら少しは考えるかもしれない。

行つたら竹刀持って待つていそつな内容と場所なら断るだろう。

「どうなの最近、カノジョとは」

「なんですかね、その特別な意味がありそつな質問は。……順調ですよ。うまくやっています。ルームメイトとしてね」

「ほーんと、そこだけ順調。もう少し進展があつてもいいと思うんですけれど」

ぎよつとして振り返れば、いつの間にか佐伯さんがそばにいて、宝龍さんの横に立っていた。座つてゐる彼女を見下ろす。

宝龍さんは佐伯さんを見上げて一瞥しただけで、すぐに顔を正面に戻した。

「そう。まだ何もないのね。少し安心したわ」

短く、それだけ。

不機嫌顔で宝龍さんを見下ろす佐伯さんと、その視線にも動じず

涼しい顔で無視する宝龍さん。つくづくこのふたりの間にいなくてよかったと思う。そんなところにいたら、みっともなく右に左にきよるきよるしていたことだろう。

「わたし」

と、佐伯さんが切り出す。

「前にあなたと弓月くんの間は何があったか、弓月くんから聞きました」

「……そう」

「許せません。思いつきで弓月くんとき合いはじめたことも、弓月くんが事実とは違う非難に晒されているのを知って黙っていたことも」

「佐伯さん、それは僕も承知の上でのことです」

「わかってる」

彼女は相変わらず宝龍さんを見下ろしたまま、僕の言葉に答えた。

「それでもわたしはあなたを許せません。本当は学校中に弓月くんはそんな人じゃないって言いたいけど、でも、そんなことは弓月くんも望んでいないだろうからやりません」

そこでひと息。

そして、

「あなたの弓月くんへの気持ちの前とは違ってるのかもしれないが、あなたにそんな資格があるとは思わないでください」

それが最後の発言だった。

佐伯さんは踵を返し、僕にすら何も言わず、鉄扉を開けて校舎の中に消えていった。

残された僕らの間に言葉はない。

遙か下、グラウンドの方からは生徒の声が遠く聞こえる。5時間目に体育をやるクラスの生徒が早く出てきて遊んでいるのだろう。

「佐伯さんの言ったこと、気にしないでください」

先に口を開いたのは僕だった。

「でも、あの子の言う通りだわ。きっとあの子が学校でも恭嗣と一

緒にいたがるのも、昔の噂を払拭するためね」

「さて、どうでしょうね。そこまで深く考えていないかもしれませんよ」

というのは軽口で、宝龍さんに言われるまでもなく先の佐伯さんの言葉を聞いているうちに、今までのことはそういうアピールの意図があつたのだろうとの推測に至っていた。

「私も今のままではあの子と同じ土俵に立つ資格はないわね」
それを聞いて僕は深いため息を吐いた。

「どうしたの？」

「いえ、いつの間に僕はこんな色男になつたのだろう、とね」

少なくとも水の森に入学したときは平々凡々な一介の高校生だったし、そのまま卒業するつもりでいた。こんなことになるとは誰が想像できただろうか。

「恭嗣は前からそうだったわ。恭嗣なら私の横に立つても釣り合ふと思つて選んだし、私を庇つて進んで悪ものになつていたときもそう感じていたわ」

「それは初耳です」

今まで気がつかなかつた新しい自分を発見した気分だ。

僕はもう一度ため息を吐いた。

5(2)・「身勝手な人だと思わないであげてください」

バン

と机を叩かれたのは5時間目の授業が終わった後の休み時間、僕がさっきまでやっていた数学演習の教科書を片づけているときだった。

机の上に置かれた掌から腕を辿って見上げてみると、そこに雀さんの顔があった。左の耳の上辺りにヘアピンが刺さっているだけの短い髪には、校則違反になるような隙は一分もない。そして、性格なのかクラス委員だからなのか、いつも険しい表情をしている顔は、今は明らかに怒りを溜め込んでいた。

「雀さん、ヘアピン変えましたか？」

尋ねると一転、彼女は嬉しそうに笑顔を見せた。

「あ、わかる？ 昨日、帰りに一ノ宮の高架下で見つけて……って、そうじゃなくて！」

再度、机を叩く。今度は両手だ。

休み時間に入り、授業から解放されて教室内が騒がしかったこともあって、その音はさほど周囲には響かなかつた。それでも近くにいたクラスメイトが数人、何ごとかとこちらに目をやった、

「何か？」

「最近またいつそうあの佐伯さんと仲がよくなったそうね」

雀さんは呆れと怒りを混ぜたような複雑な表情をした。

「そうですか？」

「今日も一緒に登校してきたらしいじゃない」

「それに関しては客観的事実ですね」

ただ、過去数回は強引な佐伯さんに根負けしての妥協の結果で、別にいいかという気持ちになったのは今日が初めてなのだが、そんなことは言っても仕方ないだろう。

「昼休み、宝龍さんと一緒だったみたいだけど、どこに行ってたの

「？」

「話が飛びましたよ」

「飛んでませんっ」

「間髪入れず言い返された。」

「いったいどういふつもり？ 未だに宝龍さんと仲がいいことだけでも許しがたいのに、佐伯さんにまで手を出すってどういふことよ。二股かける気！？」

「まさか」

「誰がそんな恐ろしいことをしようと思うか。僕は命がけでチキンレースをするほど酔狂ではない。」

「しかし、雀さん」

「何よ？」

「一緒に登校することもクラスメイトと話をすることも、通常の生徒間交流の範囲内だと思いませんか」

「僕自身、前者などは少々本意な部分もあるが、かと言って指弾されるほどの行為だとも思わない。」

「確かにそうです。でも、弓月君の場合それを足がかりに、次に何をするかわかったものじゃありませんから」

「僕はいったいどれだけ悪人なんだ……」

「去年」

「僕の言葉にかぶせるようにして雀さんが発音する。」

「あなたがどれだけ不誠実なことをしたか、忘れたわけじゃないでしょうね」

「……」

「例の僕にまつわる噂や悪評もいかげん忘れ去られつつあるのだと思えば直しはじめていたのだが、雀さんだけは相変わらずのようだよ。恨み骨髄というやつか。」

「弓月君、あなたはね」

「ナツコ」

「先ほど雀さんが僕にしたようにして、今度は彼女の言葉が別の声」

に遮られた。

「宝龍さん……」

見れば宝龍美ゆきが厳しい表情で立っていた。怒っているのはまた違う、どちらかと言うと緊張の面持ちだった。

「ちよつときて」

「でも、宝龍さん」

「いいからきなさい」

彼女は雀さんの手首を掴むと、かまわず歩き出した。手を引つ張り、教室の外へ出て行く。完全に置いてけぼりの僕だったが、彼女たちの後姿を見てなにやら嫌な予感を感じていた。

それが兆候。

そして、本日ふたつ目の事件は放課後に起きた。

「相変わらず眠そうな顔をしてるわね」

終礼終了後、席を立とうとした僕に声をかけてきたのは、またしても雀さんだった。

「この顔のつくりは生まれつきですよ」

やる気のない眠そうな半眼に、擬態するように隠れた目つきの悪い黒目は弓月恭嗣のトレードマークみたいなものだ。生まれつきかどうかは別にして。

「ちよつと話があるんだけど」

「何ですか？ もう帰るつもりなので、手短にお願いします」

「歩きながらいいわ」

「……」

えっと、滝沢は……もういないか。今逃げるようにして教室を出て行った背中では矢神だろうか。意外に素早いな。

「なにきよろきよろしてるのよ」

「いえ、別に……」

矢神と宝龍さんは文芸部の部活、滝沢は個人的に生徒会に顔を出しに行くのだろう。どうやら助けは現れないらしい。

「わかりました。でも僕、駅までは行きませんよ」
「いいわ」

仕方がない。覚悟を決めよう。僕は席を立った。

教室を出て昇降口へ。靴を履き替え、校門を出る。間、雀さんは話をするのを躊躇うかのように、ずっと押し黙ったままだった。時間は有限。言いたいことがあるのなら早くして欲しいのだが。

「宝龍さんから何を聞いたんですか？」

「え？」

直後、雀さんは小さく体を振るわせた。

「どうしてそれを……」

「だいたい予想がつかまず」

そして、何を聞いたかも。

「……」

「……」

「去年、何があったか聞きました」

下校する生徒の流れに乗って少し歩いてから、雀さんは委員長の口調で切り出した。

「どうして何も言わなかったの？」

「もとより誰にも言うつもりはありませんでした」

「あれだけ非難されていたのに？」

確かに当時はずいぶんと白い目で見られた。水の森で随一の美貌を誇る宝龍美ゆきと交際する榮譽を授かりながら、3ヶ月足らずで振った男。宝龍さんの人気が高い分、僕への非難は厳しかった。

「あたしなんか、ついさつきまで弓月君を責めてたし」

「そうですね」

雀さんは特に熱心な信奉者だから仕方がないことだろう。

「……だから、その、ごめんなさい……」

雀さんは気落ちした調子で、謝罪の言葉を口にした。

「まあ、終わったことですから、気にしないでください」

「やっぱり宝龍さんの評価を守るためだったの？ そうじゃないか

って宝龍さんが言ってたわ」

「……」

よけいな推測まで言ってくれたものだ。

「世間の評価や評判なんてプラスもマイナスもない僕が、多少悪く言われたところでたいした実害はないとは思いましたよ」

「やっぱり宝龍さんをかばってたんじゃない」

「……」

日本語は柔軟性が高いな。

それにしても、なぜ今になって宝龍さんは本当のことを話したのか。それには昼休みの佐伯さんの一件が影響しているだろうことは容易に想像できる。

「雀さん、宝龍さんのことを身勝手な人だと思わないであげてください」

いちおうフォローは入れておかないと。

「弓月君ってお人好しね」

雀さんは笑う。

「あたし思うんだけど、宝龍さんも辛かったんじゃないかな」

「あの人も？」

「だって自分のせいで人が辛い思いをしてるのに、それを見ても平気な人なんてそうそういないでしょ」

「そうですね」

この分だと雀さんの宝龍さんへの評価が180度変わったということとはなさそうだ。

「ねえ、もう一度つき合ってみたらどうかかな？」

「は？」

ほっと安心していたところに不意打ちがきた。

「もしもし、雀さん？ つい昨日までと主張が真逆になってますよ」

「そ、それくらいあたしも自覚してますっ」

雀さんは恥ずかしそうに、そして、不貞腐れたように言う。

「でも実際、弓月君くらいしかいないと思うの。宝龍さんって頭が

よすぎて独特の思考を持つてるでしょ？ だから弓月君みたいな少し変わった人の方がうまくいきそうな気がする」

「人を変な人間みたいに言わないでください」

「あなた、自分が平凡な人間だと思ってるの？」

横目でじろりと睨まれた。そこまで言われると自信がなくなってくる。

やがて交差点が近づいてきた。

「僕、次で曲がりますから」

「あ、そうなの？」

「そうなんです。なので変な期待を押しつけられないうちに帰ろうと思います」

信号はちょうど青だった。

「そういう言動が変だって言われるんです。……じゃあね、弓月君」

「では、また明日。ナツコさん」

「ナツコ言わないっ」

僕はその声を背中で聞きながら、逃げるように駆け足で横断歩道を渡った。

どうやらこれで雀さんにかまれることはなくなりそうだ。まあ、それはそれで寂しくはあるのだが。

6・「人聞きの悪いことを言わないでください」

5月下旬に中間テストがあり、それが終わると同時に6月になった。

「じゃーん、夏服ー」

朝、自室で登校の準備を終えた佐伯さんは、リビングに出てくるなり叫んだ。

水の森高校は6月1日の今日から衣替えだ。例え週の途中であるうと暦が6月に変われば、問答無用で夏服となる。

僕は座椅子に座ったまま佐伯さんを見上げた。彼女はブレザーなしの白いブラウス姿。濃い赤のチェック柄スカートは、見た目は同じでも夏ものになっているはずだ。僕も夏もののスラックスに半袖のカッターシャツ。ネクタイから解放されてずいぶんと楽になった。そもそも高温多湿の日本の夏にネクタイは不向きなのだ。

「ナマ足」

どうだとばかりに半歩踏み出し、モデル立ちでポーズを決める佐伯さん。

「そのようですね」

確かに短く詰めたスカートの下に伸びる足には、いつもの黒いストッキングはなかった。

「？ もしかしてストッキングのほうがよかった？」

「僕に聞いてどうしますか」

「じゃあ、ニーソックス。それでダメならガーターのおまけつき。」

「ミニスカニーソにガーター。弓月くんってばマニアック」

「いったい何の話ですかっ」

「弓月くんの好み」

佐伯さんはきっぱりと言う。前にもそんなことを言っていたような気がするな。

「まだそんなことを言ってたんですか」

「いったい弓月くんのストライクはどこなのかと」

「そんなのどこでもいいです。だいたい制服にガーターなんて過激な格好をして行ってもいいんですか？」

3年生でもそんな刺激的なスタイルの生徒は見たことがない。

「さあ？ 単なる靴下吊りだと思えば許されないかな？」

「知りませんよ、そんなこと」

区分としてはそうなのかもしれないが、そうだと割り切るのは難しそうだ。因みに、ガーターベルトの原型は、エッフェル塔で有名な建築家ギュスターヴ・エッフェルの考案である。

「ここで残念なお知らせです。実はわたし、ガーターを持ってません」

「それは吉報ですね。莫迦なことを言っていないで、そろそろ行きましょう」

僕は座椅子から立ち上がった。

「はあーい、ふあー……」

「何ですか、その返事からあくびへの見事なスライドは」

「ん。ちよつと寝不足」

リビングから廊下を通り、玄関へと移動する。

「テストは終わったんですから、そんなに遅くまで起きている理由もないでしょうに」

「むしろテストが終わったから、はしゃいでお京と長電話」

何をやっているのだから。

「まあ、その気持ちもわからなくはないですけどね」

僕も昨夜は滝沢と宝龍さんと電話で話をしていた。どちらも相手からかかってきたものだが。

玄関で革靴に足を突っ込んでいると、後ろでまたもかわいらしいあくびが聞こえてきた。そうとう眠いらしい。大丈夫だろうか。

昼休みに妙なメールが届いた。

今日は先に帰ります

佐伯さんからだった。

確かに何度か一緒に帰っているが、かと言ってそう約束しているわけでもない。なぜこのようなメールを寄越したのだろうか。

と、首をひねっていると、

「弓月、お前にお客さんー」

僕を呼ぶクラスメイトの声。携帯電話をたたんで顔を上げてみると、教室の入り口にちよつと癖毛のショートヘアをした女の子が立っていた。佐伯さんと同じクラスの桜井さんだ。

「弓月さんー」

彼女は僕と目が合うと嬉しそうに手を振った。

その声に、今まで彼女に気がついていなかったクラスメイトも何ごとかと振り返り、一度桜井さんを見た後、僕へと目をやった。

クラス中の視線を集めながら僕は、ひとまず桜井さんの背中を押して廊下へ出た。

「今日は桜井さんひとりですか？」

思わず佐伯さんの姿を探してしまう。特に死角。わつと驚かされてはたまったものではない。

ところが返事は予想外のものだった。

「実はキリカ、2時間目に倒れて、今は保健室なんです」

「え？」

「あ。と言つても、床に倒れたわけじゃなくて。机に突っ伏したまま動かなくなつたんです。それで保健室に連れて行ったら、たぶん疲労と睡眠不足だらうって」

「……」

朝に寝不足だとは言っていたが、試験勉強の疲労もあったのか。入試トップ合格の秀才も努力あつてのものということだろうか。倒れたと聞いたときはぎよつとしたが、たいしたことはないようであった。体から力が抜ける。

「それでキリカ、さっきまで寝てたんですけど、今日は大事をとって早引けです」

ああ、なるほど。それでさっきのメールか。

「それをわざわざ言いにごこへ？」

「えっと、できたら……帰ってからキリカの様子を見にいつてあげてくれませんか？」

桜井さんは心配顔で僕に頼む。

「わかりました。夜にでも行ってみます」

宝龍さんという例外を除いて、対外的に僕と佐伯さんは近所に住んでいることになっている。彼女が僕にそれを頼むのは、当然といえば当然だろう。

「ああ、そう言えば佐伯さんは、桜井さんと遅くまで電話をしていたと言っていました。桜井さんも寝不足なんじゃないですか？」

「わたしの場合、キリカの後も他の友達と朝まで話してましたから睡眠不足じゃなくて睡眠欠落。だから大丈夫です」

なぜか右腕で、むん、と勇ましくガッツポーズ。

「……」

果たしてその理屈は成り立っていいものだろうか。まあ、きっと人より丈夫にできているのだろう。

「佐伯さんはまだ保健室ですか？」

「はい。でも、今わたしが鞆を届けましたから、そろそろ帰ると思いますよ」

「そうですね。じゃあ、ちょっと行ってみます。わざわざありがとうございます」

僕は体を保健室のほうへ向けた。

「ああん、もう、弓月さんったら。キリカのことになると急にフットワークが軽くなるんだからっ」

「……」

聞こえない振り聞こえない振り。

保健室は1階の、グラウンドに近い場所に位置している。外からの怪我人を最短距離で運び入れるため、廊下の出入り口以外にも外から直接搬入できるようになっている。

僕は大股で歩き、保健室を目指した。なんとなく走ったら負けのような気がする。

「失礼します」

ノックしてドアをスライドさせる。

中には、パンツスーツに白衣の養護教諭・藤咲先生と、佐伯さんがいた。それぞれデスクの椅子と丸椅子に、さながら診察室の医者と患者のような構図で座っていた。

「何か用、弓月君」

「あ、弓月くんだ」

ふたりが僕を認め、同時に口を開いた。藤咲先生には去年、何度かお世話になったことがあるので、顔も名前も覚えられてしまっているようだ。

「佐伯さんが倒れたと聞いたもので……大丈夫ですか、佐伯さん」

「あ、うん。もう大丈夫。午前中いっぱい寝てたから。でも、今日はもう帰りなさいって、先生が」

「そうですか。ひとりで帰れますか。なんなら僕も一緒に」

「はい、ストップ。どうしてそこで弓月君が口を出してくるのかしら？」

と、訝しむ藤咲先生。確かにそうだ。

「その、僕と佐伯さんは家が近いもので、それで送っていくべきかと……」

「そう。なるほど、そういうわけね」

どうにか誤魔化そうと言い訳じみた言葉を口にする僕を見て、藤咲先生は納得したようにうなずいた。

「年中眠そうなあなたが珍しく目をぱっちり開いて飛んできたと思ったら、そういうことだったのね」

「……」

なにやら誤解の上での納得だった。

「ふうん。飛んできたんだ」

「……飛びませんよ。僕はスーパーマンじゃないんですから」

そして、佐伯さんまでもが含み笑いで顔を覗き込んでくる。完全にアウエーだ。

「どうやら特に心配はないようですね。失礼します」

「ああ、待って待って。わたしも帰るから。……それじゃ先生、失礼します」

ちょうど僕が保健室を出るところで佐伯さんが追いついてきた。ふたりに廊下へと出る。

「とりあえず君は帰って休んでおくように」
「はあーい」

午前中いっぱい寝ていたらしいのもう問題はないだろうが、藤咲先生の帰宅命令が出ている以上それに従うべきだろう。

賑やかな昼休みの廊下を佐伯さんと歩く。

すれ違ふ生徒の多くが佐伯さんを見るのは、彼女が目を引く容姿だということもあるが、こんな時間に帰宅しようとしている生徒へのもの珍しさもあるのだろう。

階段まで来たところで僕は体の向きを変えた。

「あれ、校門まで見送ってくれないの？」

「何を甘えたことを」

僕もそこまで暇ではない。

「じゃあ、せめて早く帰ってきてよ」

「何も予定が入らなかつたらそうしますよ」

「もう」

佐伯さんに背を向け、階段を上がる。が、その足がすぐに止まった。背中に視線を感じたからだ。振り返ると佐伯さんが腰に手をあて、頬を膨らませながらこちらを見上げていた。

「まあ」

と、僕は頭を掻く。

「気をつけて帰ってください」

途端、彼女はぱっと明るい笑顔を見せた。

終礼が終わると、真っ先に声をかけてきたのは雀さんだった。

「みんなでカラオケ行こうと思うんだけど、弓月君もどう？」

「カラオケですか」

久しぶりに雀さんのギリギリ越える感じの『天城越え』を聴きたい気もするが、残念ながら今はそれよりも優先順位の高いものがあった。

「あたしが誘ってるのに断るうっていう気？」

「それ酔っぱらいのからみ方ですよ。雀さん、麻雀だけじゃなくお酒もやるんですか？」

「呑みませんし、麻雀もやりません。ていうか、あたしの前で麻雀の話はしないでっ」

両手で机を叩く雀さん。いろいろと禁句の多い人だ。

「宝龍さんも誘ってあるから」

と、こちらに顔を寄せ、なぜか小声で言う。

「それにどういう意図があるのか知りませんが、今日は用があるんですよ」

「そう……」

本ものの酔っぱらいではない雀さんは、渋々ながら納得してくれた。

「また今度誘ってください。それじゃあ」

僕は荷物を手早くまとめて立ち上がった。

歩き慣れた廊下と通学路を通り、真っ直ぐ家へと帰る。何の用事があつて、何をそんなに急いでいるのかと問われると答えに困るが、ひとまず僕は寄り道もせずに帰宅した。

玄関ドアには鍵がかかっていた。佐伯さんが出かけたとは思えないので、中から施錠して休んでいるのだろう。僕は自分の鍵でドアを開けた。

短い廊下を進み、ただいまの声もかけずにリビングへと這入る。と、

そこに自分の座椅子に座り、テーブルに突っ伏している佐伯さん

がいた。

「……………」

一瞬どきつとしたが、すぐに背中が規則正しくかすかに上下しているのがわかった。単に居眠りをしているだけのようだ。

「まったく」

そばに寄って見下ろしてみると、小さな寝息が聞こえてきた。力尽きるようにして眠ったのか、左腕を枕にして、髪が少しテーブルの上に広がっていた。

「……………」

気持ちとしては、やるなら今しかない、というところか。

僕は息を殺しながら、彼女の横に片膝をついた。深呼吸をひとつ。それから手を伸ばし、乱れた髪をそつとすくい取った。

前から触れてみたいと思っていた佐伯さんの不思議な色の髪。

それはあまりにも繊細で滑らかで、手の中から逃げていくのではないかと思った。その髪を梳るようにして背のほうに流してやる。

「う……………」

壊れものを扱うようにしてもう一度髪を撫でたところで、佐伯さんが小さな声をもらした。僕は立ち上がって一歩離れる。魅惑の髪の毛の主は寝ぼけ眼で回りを見回し、ようやく僕を見つけた。

「あ、弓月くん。おかえりー」

「そんなところで寝てると風邪を引きますよ。また倒れたいんですか」

誤魔化すように苦笑する佐伯さん。

「はっ。わたし寝てる間にイタズラされたっ!？」

「してませんよ。人聞きの悪いことを言わないでください」

我ながらどの口でそんなことを言うのだろうと思った。内心ではバレていないか冷や冷やしているというのに。

「さ、弓月くんも帰ってきたし、晚ごはんの支度を……………って、あれ? まだこんな時間？」

佐伯さんは壁掛け時計を見て、はたと気づく。まだ終礼終了から

30分と経っていないような時間だ。当然、夕食にはまだ早い。

「もしかして本当に早く帰ってきてくれた？」

「……あいにく誰もどこにも誘ってくれなかったんですよ」

間違えてはいけません。そう言い加えて僕は自分の部屋へと戻った。逃げるように去るのはやましいところがある証拠、と言われそうだが。

ドアの向こうから佐伯さんの聞こえよがしな声が聞こえてきた。

「さあて、なんだかんだ言っつて優しい弓月くんのために、張り切つて晩ごはん作らないと」

「……」

まあ、佐伯さんの調子も戻ったようだし、肝心なところがバレていないようなのでよしとおこつが。

7・「詮索しないほうがいいこともあります」

ここのところひとり登校することがぐつと減ったものの、それでも週に一、二回はひとりで家を出ることがある。今日もそんな日のひとつだ。

学校に向かって歩く。

気温も湿度も春より確実に高く、間近に迫った夏の到来をまさに肌で感じるといったところだ。

学園都市の駅と水の森高校とを結ぶ道に合流しても今日は知った顔に出会うことなく、そのまま学校に辿り着く。

と、

昇降口の下駄箱の前に宝籠美ゆきがいた。

ローファーから上靴に履き替えている最中だ。僕に背を向ける構図なので、僕はまだ彼女に見つかっていない。夏服のスカートから伸びる足がまぶしい　　と　　思　　っ　　て　　い　　た　　わ　　け　　で　　は　　な　　い　　が、僕は少し手前で止まっていた。

人の気配を感じたのか視界の隅に姿を認めたのか、宝籠さんは靴を下駄箱に片づける段になって、ようやく僕に気がついた。

「あら、恭嗣。おはよう」

温度の低い声だ。

「おはようございます」

「そんなところで立ち止まって、どうかしたの？」

「いえ、特に理由はありませんよ」

僕は止まっていた足を前に進めた。

「そこで目を光らせていても見えないわよ。いつも気をつけているもの」

「何のことかわかりませんが、違いますよ」

僕も自分の下駄箱から上靴を取り出し、床に落とす。靴を履き替える間、宝籠さんはずっと横で待っていた。

「学校にきて最初に会ったのが宝龍さんというのはどうなのかな、と」

「運がいいと思いなさい」

彼女は当たり前のように言う。

「お待たせしました」

上靴に足を突っ込んだ僕は、宝龍さんと一緒に歩き出した。

「中間テストをはさんだせいで聞き忘れていましたが　雀さんに言っただんですね、昔のこと」

「ええ」

答える彼女の返事は短い。

「なぜ今になつて？」

そこにはおそらくあの日の屋上での佐伯さんの言葉が影響しているだろうことは想像できるが、実際に彼女がどういう考えをもってそうしたのは不明だ。

僕らは昇降口からいちばん近い階段を上る。

「過去の罪の清算、かしら」

途中まで上がったところで、宝龍さんはようやく次の言葉を発した。

「大袈裟な言葉を選びましたね」

「でも、本当のことだわ。私は恭嗣が悪ものにされているのを知りながら、あれが見栄からはじまった恋愛ごっこだなんて言い出せなくて黙っていたのよ。何のメリットもなくかばってくれた恭嗣に甘えていたの」

「……」

その罪の告白、か。

「本当ならあの子の言う通り全校生徒に知ってもらうべきなのかもしれないけど、そうしたところで今さら蒸し返すだけの結果にしかないでしょうね」

「だからせめて雀さんに、ですか？」

「ええ」

言っつうなずいた。

階段を上り切り、2階の廊下に行く。登校ラッシュもそろそろピークを迎える頃なので、廊下には生徒の姿も多い。僕らが歩くとぶつかりそうでもないのに、皆道をあけるように脇に退くのは宝龍さんがいるからだ。人目を引く容姿も留年しているという事実も、人を遠ざけるのだろう。

しかし、そんなことは気にしたふうもなく、彼女は続ける。

「ナツコは未だに恭嗣を責めてたわ」

「そうですね」

雀さんは宝龍さんを尊敬し慕っていたから、その分よけいに僕を許せなかったのだろう。

「ナツコ、もう何も言わなくなったでしょう？」

「まあ、静かすぎて少しもの足りないですけどね」

あれだけ目の敵にして突っかかってきていたのが、今ではすっかりおとなしくなってしまった。

「……恭嗣。あなた、そういう種類の人間だったの？」

「違いますよ」

僕はマゾか。

「今はまた別のことでうるさくなってきましたけどね」

どうも雀さんは僕と宝龍さんを再度くっつけたいようだ。そういう話題が好きなところは、クラス委員長と言えども女の子ということなのだろう。

「雀さんはうるさいくらいなのほづがいいです」

「そう。やっぱりそうなのね」

「……」

やたらと墓穴を掘る己を呪う僕の前に教室が見えてきた。

朝佐伯さんと一緒ではなかったからといって、一日中彼女と顔を合わせないなどということはなく。一緒に暮らしているから朝晩は別としても、今日みたいな日こそ佐伯さんは遠慮なく人の生活圏に

侵略してくる。

昼休み。

「弓月！。佐伯さんきてるぞー」

クラスメイトにそう呼ばれたとき、僕は弁当を食べ終えて、前の席の矢神と無駄話をしている最中だった。もとより非アクティブな人間なので、昼休みはいつもこんな感じなのだ。

「なんでこう毎日のように、お前のところに1年の女の子が訪ねてくんだよ」

席を立った僕とすれ違いざま、彼はそんなことを言う。確かにテスト明けには桜井さんがきていたな。

「知りませんよ。何かの祟りじゃないですか」
それが取り憑かれてるか。

教室の入り口に立っている佐伯さんを連れて廊下に出ようとする
と、それよりも先に彼女が口を開いた。

「宝龍さんは？」

「ん？ いませんか？」

振り返るとクラスメイト（主に男子）の攻撃的な視線が多数あった。が、あえてそれは無視し、教室内を見回してみる。

「いませんね」

彼女も弁当組なので、さっきまで女の子たちと一緒に食べていた
と思ったのだが。

「どこかに行ったようですね」

「ふうん」

何をか考えている様子の佐伯さん。

はたしてここに宝龍さんがいたらどうするつもりだったのだろう。
あまり目立つ場所で宝龍さんに突っかかるのはやめて欲しいものだ。

「ほら、ここにいると邪魔になりますから」

佐伯さんを押しして廊下に出る。

「今日は何しにきたんですか」

「あ、そうそう」

窓際まで寄ってから佐伯さんは振り返った。

「お弁当、美味しかった？」

「何かと思えば、そんなことを聞きにわざわざきたんですか？」

「そんなことってゆるいな。今日は新しいことに挑戦したんだから、気になって当然でしょ」

彼女は口を尖らせる。

そうだったのか。いつもと同じような気がしたのだが。今度からはただ食べるだけでなく、もう少しいろんなことに気をつけながら食べることにしよう。

「日々進化を続ける愛妻弁当を舐めるなど言いたい」

「君と結婚した覚えはありませんよ。だいたいまいちだと答えたらどうするつもりですか」

帰ってから聞けばすむことだろうと思うのだが。

「えっと、お詫びに脱ぎます？」

「脱がなくていいです」

なんだその疑問形は。あいかわらず奇抜な思考だ。

「まあ、兎に角、美味しかったですよ」

「そっか。よかった」

佐伯さんは嬉しそうに笑顔を見せた。

「これで弓月くんの好みもだいぶ把握できたかな？ 晩ごはんも張り切るから、楽しみにしてて。……じゃあね」

そうして佐伯さんは帰っていった。

長居しようとする素振りがまったくなかつた辺り、本当に弁当の出来栄を聞きにきただけのようだ。作った本人としては感想は気になるものなのだろうな。

僕は教室に入り、自分の席に戻った。

「佐伯さん、なんだったの？」

「通りがかりに顔を出しただけのようです。たいした話じゃありませんでした」

無駄話再開。

そのままいつものように昼休みを過ごすつもりでいると、宝龍さんが戻ってきた。教室内の壁掛け時計を見るが、時間感覚に自信がもてなかった。佐伯さんが帰ってからどれくらいが経つのだろう。タイミング的にふたりは接触したのだろうか。

宝龍さんはふと僕に目をやり、思いついたようにこちらに向かってきた。

「矢神君。悪いんだけど、恭嗣と話があるの。彼とその席を貸してくれないかしら？」

丁寧ながら有無を言わさぬ口調だ。これなら理事長室の理事長に頼んでも席を譲ってもらえそうだ。

「あ、うん。……じゃあ僕、トイレでも行つところかな」
彼を弱いと責めるのは酷というものだろう。

矢神が席を立ち、代わって宝龍さんがそこに座った。

「何ですか、話って」

「特にないわ」

「……」

かわいそうに、矢神。

「ただ、お互い自分のことを話したことがなかったと思ったの」

「別に知りたいと思うようなこともないでしょう。僕だって語って聞かせて面白いエピソードを持ち合わせてませんし」

「あら。恭嗣は私のスリーサイズとか知りたくないの？」

「聞けばおしえてくれるんですか？」

「かまわないわよ。減るものでもなし。上から、はちじゅう」

「すみません。特に知りたくないの、言わなくていいです。言わないでください」

危うくおそろしい個人情報入手するところだった。

「なら私が留年した理由は？」

「……」

返答に困る僕。

確かに気になる点ではある。圧倒的絶対的に成績優秀だった宝龍

美ゆきが、なぜ定期考査をすっぱかしてまで留年したのか。それについては今でも様々な憶測が飛び交っているが、そうと確信できるほどの説は出ていないし、彼女も依然語ろうとしない。

今なら聞けば答えてくれるのかもしれない。

「……」

「……」

「いえ、やめときましょう。詮索しないほうがいいこともありますから」

「……そう。確かにそうね。こんな話、恭嗣が聞いても困るでしょうしね」

彼女は薄く笑った。

「じゃあ、ひとつだけ」

と切り出し、宝龍さんは問うてくる。

「恭嗣、私がつき合ってたって言ったときのこと覚えてる？」

「あの日、ですか？」

僕は記憶の糸を手繰り寄せた。

あの日は現代社会の授業で翌日までに日本国憲法の前文を丸暗記するという、意味の見いだせない課題が出されていた。ところが僕は学校の机の中に教科書を置き忘れてしまい、取りに戻ったそこに宝龍さんが待っていたのだった。夕陽の差し込む教室で、窓を背に佇む姿は今なお鮮明に覚えている。

ただ、今でも不思議に思っていることがある。

「あのとき僕が戻ってこなかったらどうするつもりだったんですか？ 待ち惚けだったでしょうに」

「戻ってこないはずがないわ。だって教科書を隠したの、私だから」

「……」

何やらとんでもないことを、さらりと言われた気がする。衝撃の事実だ。

「恭嗣が席を離れている間に取り出して、帰ってから戻しておいたのよ」

なるほど。それなら仕組まれた必然だ。家に帰るまで気がつかない可能性もあるが、当時の僕の無駄に長い通学時間を知っていれば、電車の中で教科書を開くだろうことは容易に想像がつく。実際、僕は電車を待つプラットホームでそれに気がついたのだから。

昼休みの終了を告げる予鈴が鳴った。

宝龍さんが席を立つ。

「時効だと思って許しなさい。その代わりいいことをおしえてあげるわ」

そうして彼女は僕に顔を近づけ、囁く。

その口が紡いだのは3つの数字。

……。

……。

……。

しばらくの硬直の後、僕は机に肘を突き、深いため息を吐いた。

これほど知って困る個人情報もないな。

そう思ったときには、宝龍さんは自分の席に戻っていた。

8(1)・「他の誰でもなく」

「おはよう、恭嗣」

その声をかけられたのは、朝の昇降口でのこと。今から上靴に履き替えようというときだった。

僕を名前で呼ぶのは、この学校ではひとりしかいない。振り返ればそこには、冷たい美貌をした宝龍美ゆきが立っていた。

「ああ、おはようございます」

挨拶を返しながら、先日はこれとは逆で僕が後からくるパターンだったな、と思った。僕が黙っていたせいで、声を発したのは彼女のほうが先だったか。

「今きたところ？」

「ええ」

「そう。だったら私の少し先を歩いていたのね。前をよく見ておくんだったわ」

いや、僕としてはむしろ、そうならなくてよかったと思っている。

革靴から上靴へ履き替えた。

下駄箱が立ち並び、すのこが敷かれた昇降口から、校舎の廊下へと踏み入ると、そこに佐伯さんが待っていた。

彼女は宝龍さんの姿を見て一瞬驚いたようだったが、すぐに顔から表情を消した。

「おはようございます、宝龍さん」

「ええ、おはよう」

挑むような調子の佐伯さんと、それを受けて立つ宝龍さん。僕は未だかつてこれほど剣呑な朝の挨拶を見たことがない。

「あなたも一緒だったのね」

そうだ。今日も僕は、いつものように佐伯さんと一緒だった。だから通学途中で宝龍さんに見つからなくてよかったと思っていたのだ。尤も、それも早いか遅いかの違いでしかなかったが。

「そういう環境ですから」

「やはりよく周りを見ておくんだったわ」
僕はいやですけどね。

道連れをひとり増やし（宝龍さんが増えたとも言えるし、佐伯さんが増えたとも言える）、3人で歩き出す。

話を振ったのは僕だった。

「そう言えば宝龍さん、文芸部で小説を書いているそうですね。どうですか？」

「それなりに、というところかしら」

昇降口からいちばん近い階段を上る。

「小説作法も頭に入れた。話の作り方も理解した。なのに自分で納得いくものが書けないわ。エンターテイメント性とでもいうのかしら。それが欠けているのね。その点、矢神君は上手いわ」

「彼はあれでプロですから」

いかに宝龍さんといえども何でもできるわけではないだろうし、定期的にSF系の文芸雑誌に短編や中編を掲載している矢神先生と比べるべきではないだろう。

中間地点の踊り場で180度向きを変え、階段を上り切る。2階。僕と宝龍さんの教室はこの階で、佐伯さんはもうひとつ上だ。

「じゃあ、佐伯さん」

当然、ここで別れることになる。

だが、彼女はぴたりと立ち止まっていた。

「どうしました？」

僕も教室に向けていた足を止め、問う。そのとき僕が見た彼女は、思いつめているような、拗ねているような表情をしていた。

そして、思いついたように、

「あ、そうだ、弓月くん。今日、一緒にお弁当食べようか」

「いやですよ、そんなの」

だいたい大きさは違えど、おそろいの弁当箱なのだ。人に見られたら突っ込まれるに決まっている。

「ちえつ、残念。……じゃあね、弓月くん」

しかし、たいしてそれに拘泥するわけでもなく、すんなり引き下がり、佐伯さんは階段を上がっていった。

「何ですかね、あれ」

「『さあ』……って言ったほうがいいのかしら、私は」

「……」

わかっていますよ。ただ、わからない振りをしたいただけですから。

本当に一緒に弁当を食べようと思ったわけではないだろうが、昼休み、佐伯さんはやってきた。

そのときの僕はというと、教室のいちばん前の机に軽く尻を乗せるようにして立ち、黒板に書き並べられていく数式を見ていた。

書いているのは宝龍さん。

昼食を終えた後、彼女に数学のわからない箇所を尋ねたところ、今こうして解法を実践してくれているのだ。カツカツとチョークが音を鳴らすたびに、数式が書き綴られていく。その淀みのなさは、本当に計算しているのかと疑ってしまうほどだ。

が、ふいに彼女のその手が止まった。

何ごとかと宝龍さんを見てみれば、彼女は教室の入り口に目を向けていた。僕もそちらをしてみる。その視線の先には佐伯さんと、彼女のクラスメイトである桜井さんがいた。遊びにきたらしい。

僕が片手を上げて応えてやると、それを合図にふたりは遠慮がちに中に入った。

「残念ながら、只今取り込み中ですよ」

「あ、そうなんだ」

そうして彼女は宝龍さんに向き直った。

「今日は教室にいるんですね」

「ええ。また何か話でも？ だったら後にしてくれるかしら」

それとなく割って入るべきかと思案していると、僕の制服を誰かが引っ張った。桜井さんだ。

「あの人、すごい美人さんですね」

思っていた以上に近い距離で聞こえた声にぎよっとした。小声で囁くつもりもあったのだろうが、どうも彼女は話すときに必要以上に接近する癖があるようなのだ。

「キリカとはまたちよっと違った感じですけど」

「……」

そして、のん気だった。

チヨークが再び黒板を叩きはじめる。

「いい、恭嗣。恭嗣が間違ったのはここじゃないかしら。ここで間違えても案外きれいな答えが出るから気づきにくいの」

数式のある部分をチヨークで示しながら、解説が加えられる。なるほど、そこか。

「難しいことをやってるんですね」

空気を読めない感じに口をはさむ桜井さん。あいかわらず僕のカッターシャツをしっかりと指でつまみ、寄り添うようにして斜め後ろに立っている。

「ええ、難しいことをしているの。だから邪魔はしないでね。それと恭嗣から離れなさい」

「はぁーい」

さすがに初対面の桜井さんには宝龍さんも遠慮があったのだろうか、もの言いが少々やわらかい。だが、中途半端な笑みが逆に怖くもある。桜井さんは首をすくめながら返事をし、そして、すっと僕から一歩離れた。

そこですかさず腕を掴んだのが佐伯さんだ。

「行く、お京。邪魔なんだってさ。ふん、だ」

「え、ちよっと、キリカ。……あぁーん、弓月さーん」

ずんずん歩く佐伯さんに連行されていく桜井さん。やがて下級生ふたり組は教室の出入り口から出て行き、見えなくなってしまうた。

「ほっといいいの、恭嗣」

「そう言われても、僕は彼女の保護者ではありませんから」

「あら、そうだったの?」

「……」

少なくともそのつもりで今までやってきましたが。

放課後。

終礼が終わった後、僕は鞆ではなくモップを持っていた。

掃除当番だ。

担当は教室の前の廊下。とりあえずひと通りモップで水拭きをすればいいことになっているので、比較的楽な場所ではある。

「あ、弓月くん、今日は当番なんだ」

そんな声に僕は振り返る。

「ああ、佐伯さん」

彼女はそこに鞆を持って立っていた。時間的に考えて、クラスの終礼が終わって真っ直ぐここに来たのだろう。いつもなら一緒に帰るにしても、昇降口で待っているというのに。

「見てのとおりですよ」

僕はモップの柄で肩を叩いた。

「じゃあ、待ってるね」

「悪いんですが、この後もう少し残らないといけないですよ。授業で出された課題について話し合うことがあります」

英語の授業での課題で、五人ひと組になって英語で会話をしてみせろというのだ。会話から創作する必要があるので、さっそくそれについて話し合うことになっている。

僕が簡単に説明すると、佐伯さんは落胆したようだった。

「そういうわけなので先に帰ってもらえますか」

「わかった……」

返事にも力がない。

「恭嗣、教室のほうが終わったらはじめるわ」

と、そこに割って入ってくるガラスのように冷たく透きとおった声。背後からだったが、振り向かなくても誰かわかる。

はつと顔を上げる佐伯さん。

僕は思わず手で顔を覆いたくなつた。なんともタイミングが悪い……。

「わかりました。こっちがすんだらすぐに行きますから」

宝龍さんに応え、

「終わつたら真つ直ぐ家に帰りますよ」

佐伯さんの肩を軽く叩いて言い聞かせる。それに一日にそう何度もふたりに衝突されてはたまらない。幸いにして佐伯さんは素直にうなずき、帰ってくれた。僕はほつと胸を撫で下ろした。

さて、件の課題を出された際に組んだ5人というのが、

滝沢、矢神、宝龍さん、雀さん

そこに僕を加えた、お馴染みのメンバーだった。

話し合いをするために放課後の教室に残つた僕たち。そこで僕が最初にやったのは、滝沢とのアームリングだった。これはよくやっていることで、彼とひとつの机に向かい合つて座るとたいていひと勝負している。

結果は接戦の末、僕の負けだった。

「腕が落ちたんじゃないか？ 前は互角だったのに」

「高校に入ってから体を鍛えることもなくなりましたから」

とは言え、それは滝沢も同じはずなのだが。滝沢が格闘技で、僕が単なるスポーツだから、その違いだろうか。

「それに腕相撲では僕が負けっぱなしですよ」

「じゃあ、何が互角なんですか？」

問うのは隣の列の席を借りて座っている雀さんだ。彼女は敬意の表れなのか、滝沢と宝龍さんが相手になると敬語になる。

「実は去年、弓月と本気で殴り合つて決着がつかなかったことがある」

「は？」

雀さんが素つ頓狂な声を上げる。無理もない。

「俺がルールのない喧嘩で勝てなかったのはお前が初めてだよ」

「むしろルールがないからですよ。ルールがあればとっくに判定負けです」

「……楽しげな雰囲気わりに内容が怖いんですけど」

せつかなので、もうひとつ追加しておこうか。

「因みに、こんな僕と滝沢がふたりがかりでも勝てなかったのが矢神です。彼は空手の有段者ですから」

つまり彼は文武両道の体現者なのだ。

「ええっ!?!」

「……それは意外ね」

これには宝龍さんも驚いたようだ。

女性陣ふたりがそろって矢神を見る。が、彼は恥ずかしそうにつむいたままだった。

「いったいあなたたち3人に何があったのか気になるわ……」

「ま、それは語る予定のないエピソードです」

「そ、それより、課題について話し合ったほうがいいんじゃないかな?」

話を逸らす、というか、本筋に戻そうとしたのは、話題の中心人物、矢神だ。

「ああ、それなんですけど、いきなり英語での会話シーンを創作するのは難度が高いので、ひとまず矢神に日本語で考えてもらうのはどうでしょう」

「ぼ、僕!?!」

再び自分の名前が挙がって驚く矢神。

「それをみんなで英語に直したほうが早いと思います」

「確かにそうね」

賛同したのは宝龍さんだ。

「短い会話でいいんです。そういうのは得意でしょう、矢神」

「ま、まあ……」

「決まりですね」

僕は鞆を掴み、立ち上がった。

「なんだ、何か用があったのか？」

「ちよつと人と約束が」

終われば真つ直ぐに帰る、と言ったのは明らかに約束だろう。僕はまだ帰る気にすらなっていない4人を残し、教室を出た。

玄関を上がり、短い廊下を進んで、つきあたりのリビングに這入る。

「ただいま」

「おかえりー」

即座に返ってくる元気な返事。

「じゃーん。裸エプロンー」

「ぶっ」

思わず噴いた。

僕の前に現れた佐伯さんは、まさに言葉通りの格好……

「って、嘘だけど」

と思つたら、タンクトップにホットパンツといういつもの部屋着の上にエプロンをつけているだけだった。くるりと回ってみせる。わざとそう見えるように隠していたようだ。

「驚いた？」

してやつたりと笑って訊いてくる。

僕は深いため息を吐いた

「君、冗談をやるんだつたら、もう少し健全なものにしてください」

「もしかして期待した？ それだつたらわたしもがんばってもいいんだけどなあ」

「勝手にしてください……なんて言つたら恐ろしいことになりそうですね。絶対にやめてください」

強く釘を刺しておいてから、僕は自室に入った。

鞆を置き、制服からラフな普段着に着替える。そうしてから部屋を出て、再びリビングに戻った。佐伯さんはキッチンで夕食の支度

をしているようだ。

僕は座椅子に腰を下ろし、テーブルの上にあった新聞の夕刊に目を通す。一面は凶悪事件の続報。今日の国会で生活に直結するような重要な法案が通ったらしいが、そっちは社会面に追いやられている。日本の新聞の特徴だな。

「弓月くん」

「はい？」

佐伯さんの呼び声に、一旦新聞から目を離した。

次の瞬間、

「えいつ」

彼女が僕の膝の上に乗ってきた。

「何をするんですか!？」

だが佐伯さんは、少し上になった目線で慌てる僕を見下ろして、楽しそうに笑うだけだった。

彼女はエプロンを脱いだらしく、今は先ほどちらっと見た健康的過ぎる格好だった。薄着なので豊かな起伏をもつ体のラインがはっきりと出ている。もしかして着ているのはタンクトップだけだろうかという恐ろしい予想が頭をよぎった。

「悪ふざけはやめて、早くどいてください」

「いいじゃない。弓月くんだって悪い気はしないでしょ？」

「それにはノーコメントです」

決して正直には答えられない質問だ。

「最近スキンシップが足りてないと思います」

「そうですか。ていうか、それ以前に足りてる足りてないという関係じゃないでしょう」

しかし、僕がそう言うと、佐伯さんは何やら不満げに口を尖らせた。どいてくれそうにない。こうなったら彼女の気のすむようにするか? いや、それは完全にアウト。悪魔の誘惑だ。

「……………」

「……………」

まったく。何でこうなったのやら。

「……佐伯さん」

顔を見て話すのも気恥ずかしいのだが、かと言って目を逸らすとあまり至近距離で見ると不快でない彼女の肢体が目に入ってしまう。結局、僕は顔を見ながら語りかけた。

「学校であまり一緒にいられないのは仕方ないと思います」

直後、彼女の顔から表情が消えた。

「それに学年も違うから、どうしても共有できない話題も多くなり
ます」

「……」

特に今日は運悪くそういう小さなことが重なってしまった。その反動が帰ってからの彼女の行動なのだろう。

佐伯さんはうつむいてしまった。

「それでもやっぱり、僕が一日でいちばん多く一緒に時間を過ごしているのは、他の誰でもなく、間違いなく君ですよ」

「ほんと？」

顔を上げ、問い返してくる。すぐのような表情だ。

「君だつて僕と同じ生活をしてるんですから、聞かなくなつてわかるでしょう」

「そ、そうだよねっ」

佐伯さんはぎこちなく笑った。

世話の焼ける人だ。

「じゃあさ、弓月くんとかこういうことができるのも、わたしの特権
?」

「違いますよ。……ほら、さっさとどいてください」

「はぁーい」

彼女はようやく僕の膝の上から腰を上げた。

「夕飯、もうすぐできるから」

そうしてキッチンへと向かっていく。

それにしても拗ねたりするにしても、もう少しおとなしくという

か、おしとやかにというか、そうできないものだろうか　と思っ
たが、それはそれでこっちが調子を崩しそうなので、佐伯さんはや
っぱり今のままのほうがいいのだろう。

8(2)・「悪い人ではないのですけどね」

朝、

登校の準備を整えてリビングに出ると、そこには誰もおらず、我がルームメイトであるところの佐伯さんはまだ部屋にいるようだった。

「佐伯さん、早くしないと先に行きますよ」

「あ、待って待って。もう用意できてるからっ」

ドア越しに声をかけると、すぐに佐伯さんが慌てた様子で姿を現した。が、その姿たるや……彼女は制靴を脇にはさみ、あいた手でスカートのファスナを上げながら出てきたのだった。目を覆いたくなるというか、頭を抱えたくないというか。

「……君、それを用意ができてると言うには無理があります」

「大丈夫。これを上げたらもう終わりだから。……はい、完了っ」と……」

いや、まあ、別にいいのだが。少々なら待つので、次からはそんなはしたない格好で出てくるのはやめてもらいたい。

それでも準備ができたのは確かなので、リビングを出て玄関へと向かう。

「あんなところで手間取るなんて、少し太ったんじゃないですか」

「失礼な。夏に水着を着るつもりで、ちゃんと気をつけてるんだから。疑うなら触って確かめてみると」

「遠慮しておきます」

学校指定の革靴を足に引っ掛け、先に外へ出る。爪先で床を蹴って乱暴な履き方をしていると、一旦閉まったドアがすぐにまた開き、佐伯さんが出てきた。

「と言っても、キャミソールトップに、ボトムもホットパンツだから、そこまで神経質にならなくてもいいんだけどね」

「……」

そんな話をされても受け答えに困るので、僕は玄関の鍵を鍵穴に差し込みながら黙って聞いていた。まあ、ゴールデンウィークには過激なことを言っていたが、意外に大人しいデザインのものを選んだようで、少し安心したが。

「と、油断させておいて、実はそれとは別に対弓月くん用を用意していたり？」

「!？」

思わず動揺のあまり鍵をへし折りそうになった。

「念のため聞きますが……冗談ですよな？」

「さあ？ それは夏のお楽しみ」

僕が鍵をかけて佐伯さんへと振り返ると、彼女もまた同じようにして体の向きを変え、マンションの階段を下りていった。僕も彼女の不思議な色合いの髪を見ながら、後をついていく。

それきり佐伯さんはこの話題を二度と口にしなかったので、結局、それが彼女流の冗談なのかわからずじまいだった。

通い慣れた道を通って学校へ行き、昇降口のところで佐伯さんと別れる。そうと決めているわけではないが、お互い靴を履き替えてからまた合流するのがいつもの流れだ。

上靴を履き、立ち並ぶ下駄箱の列から抜け出て佐伯さんを待つ。程なく少し離れた下駄箱の陰から姿を現した彼女は、クラスメイトらしき人物と一緒にだった。

「……」

男子生徒だ。身長はさほど高くなく、佐伯さんよりもわずかに高いくらい。かわいらしいとまではいかないが、線の細い中性的な顔立ちをしている。

「お友達ですか？」

「うん。同じクラスの浜中くんです。……で、こっちが弓月くんね。すぐ近くに住んでるから、朝はよく一緒になるの」

佐伯さんは僕と彼 浜中くんに、それぞれを紹介した。

「どうも」

「浜中です。よろしくお願ひします。弓月先輩」

言葉少ない僕に、彼は男子にしては十分に丁寧といえる挨拶を返した。

「じゃあね、弓月くん」

「あ、はい。では、また」

と、僕。

失礼します、の言葉を残し、浜中君も佐伯さんとともに去っていった。

「……………」

しばし佐伯さんの背中を見つめてからようやく、今日はいつもと違ってここで別れるのだと理解した。

「あら、珍しいわね」

そこに不意打ちじみた声。横に立った声の主は宝龍美ゆきだった。

「ああ、宝龍さん。おはようございます」

「おはよう。あの子が恭嗣以外の男と一緒になんて、初めて見るわね」

「そうですね？」

僕は宝龍さんから、というよりは、この話題から逃げるようにして足を踏み出した。しかし、当然彼女もついてくる。

確かに佐伯さんが男子生徒と一緒にいるところを見るのは初めてかもしれない。前に変なのにとわりつかれていたことはあったが、

「でも、まあ、そういうことだってあるんじゃないですか」

「気になる？」

「まさか。相手はただのクラスメイトでしょう？」

佐伯さんたちが上がっていったであろう手前の階段は通り過ぎ、

今日はもうひとつの階段を使うことにする。こちらのルートでも距離に大きな変わりはない。

「自分のほうがまだ優位に立ってるとでも言いたげね」

「……………」

「……………」

「僕も僕で単なるルームメイトだから気にする理由はない、という意味ですよ」

誤解のないように　と僕は付け足した。

「浮かない顔してるけど、どうかした？」

昼休み、部室に行くと言って席を立つた矢神と入れ違いにやってきたのは、我らが雀さんだった。

「ああ、実はこの前、麻雀の点棒のかたちをしたヘアピンを見つけたのですが、雀さんに買ってきてあげようかと……」

「いりません！」

即答で断られた。

「それは残念です」

尤も、欲しいと言われても困るのだが。

「それはそうと、そんな顔してますか？」

「してるわよ。何か悩み？」

雀さんは僕に問いかけながら、矢神の席に座った。

「特に何もありませんよ。まあ、一方で慢性的な悩みを抱えているとも言えますが」

「どつちよ!？」

「いえ、やっぱりないことにしておいてください」

少なくともつい最近　特に今日の朝に、何か悩みが発生したということはないはずだ。

「でも、気になることはあるのよね、恭嗣は」

宝龍さんだった。彼女は隣の席の机に軽く腰かけるようにして立つ。

「あ、やっぱりあるんだ」

「ありませんよ、そんなもの」

思わずむっつとして言い返した。雀さんは宝龍さんの言うことなら、何でも正しいと思うから困る。

「そんなことよりも、今日もまた放課後、残るんですよ。例の英

語の課題で」

「そうね。ナツコと滝沢君が忙しいみたいだから、機会は逃さないほうがいいわ」

「そうですか」

僕はしばし考え　そして、立ち上がった。

「ちょっと出かけてきます」

「そう。じゃあ、私もついていくわ」

「……」

なぜ？

「じゅっくりー」

雀さんは雀さんで、笑顔で手を振ったりしている。どうも僕の周りには、僕の欲しないところを施してくれる女の子ばかりいるようだ。

教室を出て、昼休みの騒がしい廊下を歩く。

「僕がどこに行くか、わかってるんですか？」

「あの子のところでしょう？」

あっさりと、考える素振りもなく言われた。

あいかわらず宝龍さんの見えない力は凄まじいもので、彼女を見ると皆、廊下の端まで寄って必要以上に道をあけてしまう。友達同士ぶざけてはしゃいでいた男子生徒なんか、すぐ近くまで宝龍さんがきているのに気づくや、慌てて飛び退いていた。

近くの階段を使って3階を目指す。

「ついてくるのはかまいませんが、佐伯さんの前には出てこないでください」

「あら、どうして？　彼女のため？」

「僕の精神的安寧のためです」

すかさず訂正。

「あの子、私と恭嗣が一緒のところを見ると、冷静ではいられないみたいだね」

「そして、それは巡り巡って僕の悩みの種になる。つまりはそっい

うことです」

階段を上りきった。

「この際だからはっきり言っておきます。あまり佐伯さんを挑発しないでください」

「……」

宝龍さんに返事はなく、押し黙ったままだった。

そうこうしているうちに佐伯さんのクラスに辿り着き、そこで運がいいのか悪いのか、今朝見た顔に出会ってしまった。どうやらどこかに行くところだったらしい。

「えっと、確か浜中君でしたよね？」

「ああ、先輩か。何の用です？」

しかし、彼は今朝方とは違い、まるで厄介ものと接するかのようにはぶつきらぼうな態度だった。僕はわずかに面喰らいながらも続けた。

「佐伯さんがいたら呼んでほしいのですが」

「……」

彼は何やら面倒くさそうな目で僕を見　程なく、

「……ちよつと待っていてください」

そして、言葉の前にはかすかな舌打ち。彼は転進して教室の中に戻っていった。

「マズいですね。彼、なかなかユーモアのある性格のようですよ」

「そうみたいね」

宝龍さんも朝の彼を多少なりとも知っていたらしく、啞然としているようだった。

「それはそうと、そろそろ離れてもらえますか」

僕がそう言うと宝龍さんは黙って肩をすくめ、踵を返した。彼女が階段のところまで戻って陰に隠れたのを確認してから振り返ると、ちよつと佐伯さんが出てきたところだった。

「弓月くんがきてるって、浜中君が」

だが、その彼女はなぜか口を尖らせ、不機嫌顔だった。

「しかも、女づれで」

「……」

浜中君め。そんなことまで言ったのか。ますますもって楽しい性格をしている。

「……宝龍さん？」

「彼女もこの辺りまでくる用事があったので、一緒にきたんですよ。もう行ってしまいました」

「ふうん」

果たしてそれで納得したのかはわからないが、それ以上は追求してこなかった。

「で、どうしたの？ 弓月くんがこっちにくるなんて珍しい」

「ああ、そうでした。……今日もまた放課後、例の課題で残りますので」

「……」

「……」

「それだけ？」

妙な間があつてから、彼女は聞き返す。

「そうですが？ でも、言っておかないと君、またこっちまでくるでしょう？」

「うん。まあ、そうなんだけど……メールでもよかつたんじゃないかなって」

「……」

「……」

「……」

ああ、言われてみれば確かにそうだ。

「たぶんあれですね……あ、いや、何でもありません。どうも頭の回転が悪いようです」

君の顔が見たかつたんですよ。本当はそう言おうとしたのだが、口にするのはやめておいた。それは冗談や誤魔化しではなく、たぶん本当のことだったからだ。

そうして放課後、今日も先日と同じようにいつもの5人が集まっていた。矢神と僕が出席番号の関係で席が前後に並んでいるため、自然とここが中心になる。僕の後ろの席に滝沢が座り、隣の列に宝龍さんと雀さんだ。

今日は僕たちだけではなく、他に2グループほどいるようだ。

「はい」

雀さんが挙手。

「どうせならみんなで弓月君の家に行きたいです」

出し抜けに妙なことを言い出した。

「近いんでしょう?」

「近いのは近いですけどね」

徒歩10分。だからと言って、人を招くことができるかは別問題だ。むしろ絶対に人の侵入を許してはいけない家と言える。

「さては人に見せられないものがあるのね。不潔だわ。これだから男のひとり暮らしは」

「あ、あのですね……」

すぐに返事をしない僕を見て、雀さんは何やら愉快的な誤解をしてくれたようだ。僕は身の潔白を説明する言葉を探しつつも、目は助けを求めるように宝龍さんのほうを向いていた。

彼女はかすかに笑ってから、

「じゃあ、ナツコ。今からナツコの部屋にみんなで行っていい?」

「え? いや、それは……。準備も片付けもできてないし……」

「そういうことよ。いきなり押しかけても恭嗣だって困るわ」

「そ、そうですね。……ごめん、弓月君」

ようやく納得の雀さん。

「またの機会に……」

というのは、もちろん社交辞令だが。

「ま、恭嗣も男だから、隠したいもののひとつやふたつ、あるかもしれないわね」

「……」

またよけいなひとを。……ありますよ、大きな秘密が。知ってるくせに。

ところで、さっきから滝沢と矢神が黙っているのは、やはりばつちりを喰らいたくないからだろうか。

「それよりも時間が惜しいので、やるべきことをやりませんか」

「それもそうね」

賛同したのはさっきまで騒いでいた雀さんだ。

「例の英語の課題、矢神のおかげで会話文自体はできてるわけですが、さて、そこで提案です。この英訳は滝沢と宝龍さんにお任せするのはどうでしょうか？ 学年でもトップの成績のふたりなら、これくらい簡単でしょう」

「ほう、なるほど。適材適所の役割分担だな。……それで、お前は何をやるんだ」

「……」

「……」

「やはりダメですか。ま、凡人の僕としては楽をしたくて試しに言ってみただけなんですがね。因みに、楽ができるのは僕だけでなく、雀さんもです」

「ちよつとお、私まで巻き込まないでよ！」

そんなこんなで結局、まずは会話の中での役を割り振り、それぞれが自分の台詞を英訳した後、みんなで答え合わせをすることになった。

「はい、じゃあ、後はそれぞれ自分の台詞を暗記してくることに。近いうちに通して練習しましょ」

そうして今日の作業が終わったのは、1時間ほどが過ぎたころだった。

「俺は生徒会室に寄ってから帰るよ」

「あ、私も行きます。聞きたいことがあるので」

真つ先に滝沢が立ち上がり、それに雀さんが続いた。クラス委員のふたりが出て行った後、僕と矢神と宝龍さんも自然とかたまって一緒に廊下へ出る。

と、そこに佐伯さんがいた。

まずは僕を認め、それから宝龍さんを真剣な顔でじつと見つめた。宝龍さんも視線を返す。胃が痛くなるようなシチュエーションだ。しばらく見合った後、宝龍さんは深いため息をひとつ。

「矢神君、部室によるわ。つき合って」

「え？ あ、はい」

矢神は飛び上がりばかりに驚き、返事をした。

「そういうわけだから、恭嗣、また明日ね」

そう言って宝龍さん（と矢神）は、この場を離れようとする。

「なんですか、それ。余裕ですか？」

しかし、それを佐伯さんが呼び止め、むっとしながら問うた。

「別にそんなのじゃないわ。でも、そうね。余裕というなら、あなたのほうは少し余裕がないんじゃない？」

「……」

佐伯さんはぐつと言葉を詰まらせる。そして、宝龍さんは彼女の口からもう反論は出てこないと見切ると、改めて足を踏み出し、去っていった。

「先に帰ってればよかったのに」

宝龍さんと矢神が十分に離れてから僕は口を開いた。佐伯さんの登場以来、初めての発言だ。

「余裕ないから」

「……」

それを僕に言われても困るのだが。

「まあ、今さら言っても仕方ないです。帰りましょうか」

僕が歩き出すと、佐伯さんも黙ってついてきた。

さすがに終礼終了から1時間以上も経っているだけあって、廊下にはほとんど誰もいなかった。まれに僕たちみたいに教室に残って

いる生徒もいるようで、開いたドアから姿が見えたり、閉め切られたすりガラスの向こうから声が聞こえたりする。

「わたし、やっぱりあの人のこと好きになれないかも」

僕の横で佐伯さんが不貞腐れたように言う。

「そうですか。悪い人ではないのですけどね」

確かに頭の回転が速いから、独特の考えをすることはある。それに観察力があるようで、少々人の心に踏み入り過ぎることもある。だからと言って、悪気があるわけではないのだ。

「弓月くん、あの人の味方するんだ」

「別に誰の味方だ誰の敵だというわけではありませんよ。ただ単にそう思ってるだけです。去年一年同じクラスでしたし、かたちだけとは言えつき合っていたこともありました。知り合ってからけっこう経ちます」

「ふうん」

返事はそれだけだった。

歩きながら隣を見ると、彼女は思いつめたような顔をしていた。

果たして何を考えているのだろうか。少なくとも僕の言ったことを納得してはいないようだった。

仲良くしてほしいとまでは思わない。それはそれで恐ろしい事態のような気がする。だが、もう少しどうにかならないものだろうか。誰かと誰かの仲を取り持つために東奔西走するというのも得意ではないし。頭の痛い状況だな……。

9 (1) 「忘れるわけがないでしょう」

それは長い一日のはじまり。

「もうすぐ7月で、7月に入ったらすぐに期末テストじゃない？」

朝、テーブルをはさんで向かいに座る佐伯さんが、ベーコンエッグを箸でつつきながら言った。

「そうですね」

確かに授業の中でも「ここは重要」「ここはテストに出す」「『牛車』と書いて『ぎっしや』と読む」などの言葉をよく耳にし、否が応でもテストを意識させられている。

「そんなわけで今度の日曜は一ノ宮に行くー」

「何か買いますか？」

「デートです。デ、エ、ト！」

鈍いなあ、もう 佐伯さんは口を尖らせた。

「まあ、僕も買いたいものというか探したものがありますから、つき合ってもいいですが」

レタスとトマトの生ハムサラダにドレッシングをかける。トマトは苦手だ。

実際に何を買うかは決まっていらないが、7月の某日までに用意しておきたいものがある。再来週だとテスト前最後の日曜になるし、一ノ宮まで足を伸ばすなら今度の日曜だろう。

「買いますか？」

「たいしたものじゃありませんけどね」

「あ、わかった。わたしの誕生日プレゼントだ」

「……」

彼女は鋭い。誰かと違って。

そう。7月7日は佐伯さんの誕生日なのだ。

「……違いますよ」

僕はひとまずそのフレーズだけを絞り出した。

体勢を立て直そう。

「しかし、言われてみれば、そんなイベントもありましたね。何か欲しいものがあるなら考えますよ」

「言っていいの？」

「どうぞ。でも、買えるかどうかは、まあ、ものによるでしょうが」
ブランド物の服とかだと、まず無理だろう。

「ふっふっふっ。じゃあね」

「やっぱりやめておきます」

佐伯さんの不敵な笑みに、嫌な予感を感じた。

「ひっどーい。ちゃんとお返しも考えてあるのに」

「何か出るんですか？」

「現物支給」

「……さて、ごちそうさまでした」

僕は立ち上がった。佐伯さんが頬を膨らませて何やら不満げにこちらを見ているが、無視だ。食器を重ねてシンクへと運ぶ。それからマグカップに2杯目のコーヒーを注いだ。

「あ、そうだ。日曜のデートは？」

「僕に何の予定も入らなければ、ですね」

そう言っ僕は逃げるようにリビングへ立ち去った。

「おっと」

「きゃっ」

休み時間、教室の出入り口で危うくぶつかりかけた相手は宝龍美ゆきだった。僕が外から戻ってきたところで、彼女が教室を出る夕イミングだった。

「ぶつかって倒れた拍子にキスってできると思う？」

「奇跡的な確率でしょうね。それでも壁抜けを期待して一万回壁に体当たりを試みるよりは、可能性は高いかもしれません」

量子力学的にはあり得るらしいが、果たして成功例はあるのだろうか。

「恭嗣、ちよつといい?」

「何ですか?」

僕たちは廊下に出て、窓のほうに寄った。

休み時間の廊下は昼休みほどではないが、そこそこに生徒の姿が見られる。トイレに行ったり、教室移動だったり。あとは僕らのような立ち話。一時的な開放感ではしゃぐのは昼休みのようだ。

「普段、日曜は何をしてるの?」

「……」

「どうかした?」

「いえ、何でもありません」

朝も佐伯さんと日曜の話をしたばかりなのだが。今日はそういう日なのだろうか。

「その質問の意図は何です?」

「ひとつは純粹な興味よ。今までそんな話、ほとんどしたことなかったでしょう?」

確かに。仮面恋人にはそんなものは必要なかった。

「それと今の恭嗣がどうなのかを知りたいのよ」

「ま、ごく普通の高校生ですよ、僕」

去年は家が遠かったとはいえ、遊びに行くのに学校まで出ないといけないわけでもなく、程よい距離の繁華街で滝沢や矢神と遊び歩いていた。

「今は?」

「今も普通ですよ。平日にたまった日常の雑事を片づけて、勉強。

夕方は買い物ものです」

「なんとも高校生らしい。

「買いたのは彼女と一緒に? どちらかというところ新婚生活ね」

「……」

下宿生らしいと言ってほしいものだ。

宝龍さんはそれきり黙った。僕は窓にもたれて立ち、彼女は逆に窓のほうを向いて外を見ている。

「話はそのアンケート調査だけですか？」

「ああ、そうね。急に腹が立ってきて、肝心なことを忘れていたわ」
「また怖い冗談を」

どうも彼女の声の調子を聞いていたら本気のようにも思えるが、
ここは冗談としてとっておこう。

「結局、日曜はたいして忙しくないと思っただけかしら？」

「いいですね」

自室の掃除などの雑多な用事があるとは言え、去年ほど遊び回っていないのは確かだ。

「そう。じゃあ、今度の日曜、私につき合いなさい」

「男手でも必要ですか？」

「いわゆるデートよ。鈍いわね」

「……」

僕は天井を仰ぎ見た。

佐伯さんのときもそうだが、何となくそうではないかと予想はしていたのだ。ただ、そうでなければいいという希望や期待が邪魔をするだけで。

「どうなの？」

「少し考える時間をください」

「25秒から35秒」

短いな。

さて、次の日曜か。確か予定はまだ何もなかったはずだ。期末考査にはいちおうまだ余裕がある。断る理由は特には見当たらない。

「まあ、いいんじゃないでしょうか」

「22秒。思考は訓練次第で速く遠くに届かせることができるわ。

恭嗣は頭の回転が速いんだから、もっと意識しなさい」

「努力しますよ」

あまり買いかぶられると困るのだがな。ひとまず模範解答的な返事で答えておく。

「去年、恭嗣とは学校の帰りに何度か寄り道をしたけど、これが初

めでのデートになるのね」

そこで宝龍さんは一度僕に向き直り、笑顔を見せた。

「楽しみにしてるわ」

そして、僕の目の前を横切り、教室ではなく廊下の向こうへ去っていった。

僕はというと、果して彼女は休み時間が終わるまでに戻ってくるだろうか、と考えていた。

今までと同じ考えや行動を繰り返して、異なる結果を期待するのは狂気の沙汰である。

そう言ったのは、確かアインシュタインだったと記憶している。

だからと言うわけではないが、今日は普段は飲まない自販機の缶コーヒーを買ってみた。考えたいことがあって、味覚への刺激が同時に思考への刺激になるかと思ったのだ。

昼休みの学生食堂前。

校舎の1階の端にある学食は、だいたい教室3つ分くらいをぶち抜いた程度の広さがある。そこに設置された自販機で缶コーヒーを買った僕は、学食を出て廊下の窓にもたれて立っていた。学食側の窓はすべて開け放たれていて、中がよく見える。皆賑やかに昼食をとっていた。

缶コーヒーのプルタブを開け、ひと口飲んだところで、学食から出てきた4人ほどの一団の中に知った顔を見つけた。

今まで一緒に食事をしてきたのだろう、男子生徒2人、女子生徒2人のグループ。僕が唯一知る彼は背が高いほうではなく、隣に並ぶ女子生徒と同じくらいだった。

容姿も人畜無害そうな、今風に言えば草食系とでも表現するのだろうか。そんな中性的な雰囲気。

浜中君だった。

彼も僕に気がついた。

「やあ」

無視するのมどうかと思ひ、といひか、面白そうなので声をかけてみる。

「あ、こんにちは、先輩。最近よく会いますね」

浜中君は足を止め、にこやかに応じてくれた。嫌そうな顔ひとつせず。なかなかよく訓練されている。

「誰？ 知つてる先輩？」

「ちよつとね。悪いけど先に行つてて」

「おっけー」

彼の友人たちは快くうなずき、浜中君を置いて再び歩き出した。残つたのは僕と彼。

一対一。

「ほんと、よく会いますね」

今度は先ほどとは違つて迷惑そうな顔で、そして、それを隠そうともせずにつひ。

「すみません。あまり行動範囲が広くないもので」

「だったらこつちの教室までこないでほしいですね」

「気をつけますよ」

先日のは僕にとつてもイレギュラな行動だった。

コーヒーをひと口飲む。

いい機会だと思つたのか、浜中君は続けて質問を投げかけてきた。

「先輩つて、佐伯さんの何なんですか？」

「さあ、何でしょうね。近所の住人、彼女がここにきて初めてできた友人、同じ学校に通う生徒……。そういつた諸々のことが重なつて懐かれてしまつたようですね」

「桜井さんとも、よく先輩のこと話してますよ」

「……」

それは恐るべき事実だ。何を話しているのだろうか。ひどく不安を煽る。

浜中君は改めて僕を見、そして、鼻で笑つた。

「こんなのどこがいいんだか」

「ああ、それは僕も知りたいですね」

「冗談ではなく、本気で。」

すると、彼は僕を睨みながら言った。

「先輩ってすごいムカつきますよね。誰にでも敬語で、いかにも裏がありそうなところとか」

「人間、誰にだって二面性はありますよ。君だって表裏がはっきりしている」

尤も、それだけはつきりしていれば、人によっては逆に好感を持つかもしれない。少なくとも僕なんかよりはマシだろう。

浜中君は黙ってさらに強く僕を睨みつけてくる。肩をすくめたい気持ちだったが、僕は素知らぬふりでまたコーヒーに口をつけた。ただならぬ僕らの様子に、学食帰りのグループがちらちらと横目で見ながら通り過ぎていった。

「あ、そうそう。部活の先輩から聞きましたよ」

そう言った彼の顔には、見下すような笑みが薄く貼りついていた。「先輩ってけっこう有名人だったんですね。去年、いろいろやらかしたそうじゃないですか」

「終わった話ですよ。……ああ、因みにそのことは佐伯さんも知ってますので」

「……」

かすかに舌打ち。なるほどね。悪しからず。

「先輩みたいなのより僕のほうが女の子に受けると思っんですけど。そう思いませんか？」

「同感ですね」

「でしょう？ 佐伯さんも見る目がないうな。彼女も案外たいしたことないのかも。僕も見る目が曇ったかな」

「……」

アウト。

次の瞬間、僕はあいてた手で、浜中君の喉を掴んでいた。それからお互いの立っている位置を入れ替えるようにして、彼の背を窓に

押しつけた。

「が……っ。な、何を……」

足を出されると困るので、手に力を込めて辛うじて爪先が床につき程度まで吊り上げる。喉が絞まり、彼の言葉が途中で途切れた。

「あまり調子に乗るなよ、新入生。こっちだっていつまでも黙ってるわけじゃない」

さすがに今度は通りかかった生徒も足を止めたようだ。周りからギャラリイのざわめきが耳に入ってきた。

僕はかまわず続ける。

「それと彼女に」

「恭嗣！」

が、横から飛び込んできた声に、僕の言葉は阻まれた。クールダウン。

僕が手を離すと、浜中君は喉を押さえながら蒸せた。

「ひとつ言っておきますよ。陰でこそそそ言ったりやったりするのはよくないです。男を下げます」

「……ふん」

彼は僕を睨むようにして一瞥すると、鼻を鳴らして去っていった。代わりに現れたのが宝龍さんだ。

彼女は、まずは何も言わずギャラリイに目を向けた。何ごとかと集まっていた生徒が、三々五々散っていく。いつもながら見事な眼光だ。

「何があつたか知らないけど、恭嗣にしては珍しいわね、頭に血が上るなんて」

「頭に血が？ いたって冷静ですよ、僕は」

ちゃんと窓が割れないように注意もしていたし。

コーヒーを飲む。ついでに言つと、こちらも一滴とこぼれてはいない。

「僕に何か用ですか？」

問うと宝龍さんは呆れたようにため息を吐いた。まだ言いたいこ

とがあるが無駄だろうからやめた、といったところか。

「図書室に行くわ。つき合って」

「図書室？ まあ、いいですが」

僕は残っていた缶コーヒを一気に飲み干し、空き缶を学食に入
つてすぐのところにあるゴミ箱に放り込んだ。

宝龍さんと一緒に廊下を歩く。

「矢神君お薦めの本があるらしいの。わざわざ買わなくてすむから
つて、おしえてくれたわ」
「なるほど」

矢神も真面目な文芸部員と化した彼女の面倒をよく見ているよう
だ。

僕はひとまず教室に戻ってきたが、中には入らず素通りした。

「ところで、最近あの子の様子はどう？」

宝龍さんが問うてくる。

「佐伯さんですか？ いつも通りおかしいですよ」

「羨ましいわね」

「そうですね？」

宝龍さんからすれば、あれだけ羽目を外せる佐伯さんが羨ましく
見えるのだろうか。

「恭嗣は私のことをそんなふうには言わないでしょう？」

「言いませんね」

というか、言えません。恐ろしくて。

「それだけ恭嗣があの子を近くに置いていたということよ」

「……」

続いて階段に差し掛かったが、ここも素通りする。図書室は特別
教室の集まる校舎の3階にあるが、まずは渡り廊下でそちらに移っ
てから階段を上がることにしよう。

「……別にそこまで深く考えての発言じゃないですけどね」

教室をいくつか越えたところで、渡り廊下がぼっかりと口を開け
て待っていた。そこを直角に折れると、その先には窓から陽の光が

差し込むひとときわ明るい連絡通路が延びていた。

「佐伯さんは」

「わたしが何？」

不意打ち気味に背後からの声。

僕と宝龍さんが驚いて振り返れば、そこには目を据わらせたときりの美少女が立っていた。

「なぜ君がここにいますか？」

「べつにいい。ただ階段から降りてきたら、ちょうどふたりが仲良く歩いてたから追いかけてきただけ」

それから彼女は宝龍さんに視線を移した。

「それで、そちらはわたしの陰口ですか？」

これには宝龍さんもむっとしたようだ。

「そんなんじゃないわ。でも、そうね。次の日曜の、デートの打ち合わせくらいはしていたかもしれないわね」

ぎよっとする僕。何を言い出しますか。

佐伯さんは、今度は弾かれたような勢いで僕を見た。

「何それ。次の日曜はわたしとデートするって言ったじゃない」

「言いました。でも、決まったわけじゃないでしょう？ 確か何の予定も入らなければ、と言ったはずです」

「そ、そうだけど……」

佐伯さんが口ごもる。それを見て僕は後悔した。こんなときは正論で言い返すものではない。

そして、

「もういいっ」

彼女は身を翻し、駆けていった。

ただ黙って見送る僕と宝龍さん。何人かの生徒が、佐伯さんが走り出てきたのを見て何かあったのかと、向こうからこちら側を覗き込んでいた。

「何であんなことを言っただんですか」

程なく僕が先に口を開いた。

「つい、ね」

こんなことがしたかったわけじゃないんだけど　と彼女は独り言のようにつけ加えた。

「まったく。よくそれで人のことを、頭に血が上ってるなどと言えましたね」

「反省してるわ」

そうして悔恨のため息を漏らす。

「それよりも恭嗣。あなた、あの子と約束してたの？　まさかそれを忘れていたわけじゃないでしょうね」

「忘れるわけがないでしょう。僕が、佐伯さんのことを」

直後、宝龍さんが僕を見た。横顔に感じる視線でそれがわかったが、ここはあえて無視をした。

「聞いていたでしょう？　話がありましたよ。ただ、決定はしませんでした」

いちおう僕なりに考えてはいたのだがな。

長い一日は、まだ半分を過ぎたところだった。

9 (2) . 「いったいどこの誰ですか?」

「起立、礼」

クラス委員である雀さんの号令の後に、クラスメイトたちのやる気のない「さよなら」の声が続いた。

終礼終了。

放課後だ。

そして、帰り支度をする僕に声をかけてきたのは、その雀さんだった。

「弓月君、この後ヒマ?」

「……」

直後、頭にいくつかの考えが巡り、そのことが僕を無言にさせた。

「ちよつとお、聞こえています?」

「あ? ああ、聞こえています。……えっと、それはもしかしてデートのお誘いでしょうか?」

「ち、違いますっ」

雀さんは顔を赤くしながら、間髪入れず否定した。

「でしよつね」

少し考えればそんなはずはないとわかりそうなものだが、今朝からのことがあって、どうにも考え方がおかしくなっているようだ。

「で、どうなの?」

雀さんが改めて問う。

この後か。さてどうだろう。予定なんてものは往々にしていきなり飛び込んでくるものだからな。特に僕の場合。

と、

「あら、ナツコ。恭嗣をデートに誘ってるの? でも、悪いけど恭

嗣は私のよ」

そこに現れた宝龍さんが、僕が言葉を発するよりも先に横から口を挟んできた。

「宝龍さんまでそんなこと言っんですか。そんなんじゃないやありません」
雀さんとしてはそう思われるのは至極心外だったらしく、頬を膨らませるようにして言い返した。

「そうよね。ナツコのお目当ては恭嗣じゃないものね。もしかして恭嗣経由で攻める気？」

「な……っ」

今度はさらに言葉も出なくなったようで、口をぱくぱくさせている。ああ、そうだったのか。

やがて彼女は二、三度深呼吸をしてから、

「わ、私はみんなでこの後どこかに行こうかと思って、最初に弓月くんを捕まえにきただけです」

「そう。でも、恭嗣は私と先約があるのよ」

「何かありましたか？」

はて と僕。

「図書室」

「ああ」

そうだった。昼休みの図書室の件は、佐伯さんの登場で時間切れとなってしまったのだった。どうやら今から行くからついてこいというこららしい。

「それなら仕方ないですね。いつの間にか滝沢さんも矢神君もいなくなってるし」

矢神は、宝龍さんが現れた辺りで、気配を殺しながら教室を出ていくところを横目で見ていた。滝沢はどうせ生徒会室にでも顔を出しにいったのだろう。

「また今度にします」

「悪いわね」

「いいええ。そういうことなら喜んで」

雀さんは計画が頓挫したというのに、嬉しそうに帰っていった。だいたい何を考えているか想像がつくが。

「私たちも行きましょうか」

「どうにも先ほどから、僕の意見というか意志というか、そういうものが軽視されている気がしますね」

とか言いつつも、歩き出した宝龍さんの後を、僕もついていく。どういふ選択肢をとるにしても、教室を出ないことにははじまらない。

「何か予定があった？」

「というか、佐伯さんが待っていると思うんですよ」

「そうなの？……あら、本当ね」

廊下へと出るとそこには、佐伯さんが窓にもたれて立っていた。制靴の持ち手を両手で握りしめている。

彼女は僕を見、それから宝龍さんへと視線を移した。むっとした顔。宝龍さんも見つめ返す。

「そういうわけなので、宝龍さん、図書室はまた今度」

「私たち、今から図書室に行くけど、あなたも一緒にこない？」

僕の言葉を遮って、宝龍さんが佐伯さんに尋ねた。予想していなかったその提案に、僕も思わず宝龍さんを見た。

「なんでわたしまで行かなくちゃいけないんですか？」

「図書室に行ったことは？」

「え？ な、ないですけど……？」

抗議めいた返答にもかまわず質問を重ねてくる宝龍さんに、佐伯さんはわずかに動揺を見せた。

「いい機会だわ。ついてらっしゃい」

そうして宝龍さんは、佐伯さんの返事も聞かず歩き出した。

佐伯さんが何か聞きたげに僕を見る。そんなふうに見られても困る。宝龍さんの意図が読めないのは僕も同じなのだから。

結局、佐伯さんはおとなしくついていくことにしたようだ。

一日で最も騒がしい放課後の廊下、宝龍さんが先頭を切り、彼女があけた道を僕と佐伯さんが歩く。何とも人目を引く行軍だが、それも渡り廊下を渡って特別教室の集まる校舎に移ってしまえば、見る生徒そのものがぐっと減る。

「ねえ、図書室って3階だったっけ？」

佐伯さんは後からついていくのにも飽きたのか、宝龍さんを追い抜かして前へ出た。階段のところで振り返って聞いてくる。

「そうですよ」

僕が答えると、階段をのぼりはじめた。

今度は僕と宝龍さんが並んだ。

僕の目線よりも高い位置を、佐伯さんがスカートも押さえずに上がっていく。それを特に何か思うわけでもなく何となく眺めていると、

「痛っ」

横から宝龍さんの肘打ちが脇腹めがけて飛んできた。

「あなたも少しは気をつけなさい。バカな男子が喜ぶだけよ」

「別にいいじゃないですか。今は弓月くんしかいないんだし。一緒に暮らしてたら、もっといろんな格好を見られてますから。わたしは平気ですよ」

そこで佐伯さんは踊り場に到達した。階段は踊り場で180度向きを変える構造なので、僕たちの視界から彼女の姿が消える。

「あなたたち、どういう生活してるわけ？」

「彼女の誇張表現を真に受けなくてください」

遅れて僕たちも方向転換をすると、佐伯さんはすでに階段をのぼり切っていて、こちらを見下ろしながら待っていた。

「それとも宝龍さんは、弓月くんに見られたら恥ずかしいんですか？」

「そういう問題じゃないわ。女としての恥じらいと慎みを持ちなさいと言ってるの」

ため息混じりの宝龍さん。

そして、僕たちもあと数段というところで

「……エラそうに言うんですね」

佐伯さんのその吐き捨てるような言い方に、僕はどきっとして我知らず足を止めていた。

対して宝龍さんは、そのまま階段をのぼり、佐伯さんと向き合っ
た。

「……………」

が、何も言わない。

階段の最上段での対峙。

「当然ですよ。弓月くんは宝龍さんのほうを選んだんですから」

「それについては謝るわ。あなたとそういう話になっているとは知
らなかったの」

謝ると言いつつ生まれ持った貫禄のせいでどうにも謝っているよ
うには見えない、など茶々を入れるのは心の中だけにしておくか。
「佐伯さん、僕はね」

階段の手すりに軽くもたれる。

「君とはいつも一緒にいるし、遊びに出かけるのだっていつでもで
きると思っただんですよ。それに比べて宝龍さんとはあまりそういう
機会はありません。ただそれだけのことです」

「嘘っ。わたしより宝龍さんのほうが大事なんですよ。つき合い長
いもんね」

「……………」

つき合いが長い。。

それは確か前に僕が言った台詞だ。

そういうことか。ずいぶんと、まあ、僕は……………。

「あなた、恭嗣の言ったことが信じられないの？」

何も言えないでいる僕に代わって、宝龍さんが口を開いた。いつ
もならどことなく冷ややかに聞こえる彼女の声が、このときは珍し
く悲しげで、心配げに響いた。

「そ、そうじゃないけど、でも……………」

「少し前から気になっていたのよ。あなたがあまりにも余裕がない
ように見えたから」

「当たり前じゃない！ 美人で、大人で、わたしの知らない弓月く
んを知っていて、そんな人がいたら余裕なんてなくなるに決まっ

るじゃない。あなたが普通に、ただ弓月くんと一緒にいるだけで不安になるの。一度もう終わったんでしょ！？ だったら今さら出てこないですよ！」

佐伯さんは堰を切ったように、溜め込んでいたものを一気に吐き出した。

そして、程なくこの件は、唐突に終わりを迎えることになる。

宝龍さんが深いため息を吐いた。

「隣の薔薇は赤く見えるとはよく言ったものね。……そう、わかったわ。でも、まずは落ち着いたほうがいいわね」

佐伯さんに歩み寄り、手を差し出す。

が、

「いやっ。寄らないで！」

彼女はその手を拒絶した。

優しく触れようとした宝龍さんの手を払い、詰められた距離の分だけ後ろに下がる。

2歩目。

その足が階段を踏み外した。

ひとつ下の段に落ちた足首が不自然に曲がり、バランスを崩した佐伯さんの体が宙に投げ出される。

「えっ？」

と、何が起きたのかわからない様子の彼女の顔。

「佐伯さん！」

ほぼ同時、僕は叫び、もたせかけていた背を離して駆け出していた。

手を伸ばす。

辛うじて間に合ったが、片手だけでは重力に囚われた人ひとりを支えることはできなかった。床を蹴る。僕自身も宙に身を躍らせた。

浮遊感。

もろともに、落ちる。

せて。

僕は咄嗟に佐伯さんの頭を胸に抱え込んだ。

まずは背中を強打。

それから頭への鈍い衝撃。

「恭嗣！」

遠く宝龍さんの声が聞こえた気がしたが、

そこで僕の意識は途切れた。

……。

……。

……。

文章はそこで終わっていた。

僕は持っていた紙の束を机の上に置く。A4サイズ用の紙数枚。

それは宝龍さんが今書いているという小説をプリントアウトしたものだ。

「で、この後どうなるんですか？」

気になる先の展開を、僕は作者殿に尋ねた。

放課後の教室。

僕は宝龍さんから感想を聞かせてほしいと渡された小説の原稿を読み終わったところだった。僕たちの他にはおしゃべりをしている女の子のグループや、携帯ゲーム機で遊んでいる男子数人がいる。

「どうしようかしら？ 今考えてる最中よ」

と宝龍さん。

「記憶喪失になるとか、今までののがぜんぶ夢で目が覚めるとか。このまま死んでしまうのもいいわね」

「人の名前を使っておいて、やりたい放題ですね」

そして、けっこうベタだ。いい名前が浮かばないからと、ひとまずの仮名らしいが、同じ名前の僕としてはたまったものではない。

というか、明らかにモデルは僕だろう。

「それで、感想はどんなのかしら？」

「そうですね。僕は文芸関係はさっぱりですが、初めて書いたにしてはまずまずじゃないでしょうか」

「そう。恭嗣にそう言ってもらえたら自信が持てるわ」

宝龍さんはわずかに笑みを見せた。

「ただ、ある程度先の見通しを立ててから書かないと、いずれは行き詰まるみたいですよ」

ま、普段の矢神を横で見ているだけの素人の意見ですが　と、つけ加えておく。

「それはそうと、この中に出てくる佐伯さんというのは、いったいどこの誰ですか？」

彼女だけモデル不在だ。

「あら、お気に召さなかった？　恭嗣、案外こういう女の子も好きかと思つて」

「僕はもつとおとなしい、おしとやかな子が好みですね」
つて、いったい何の話をしているのだから。

「そうだったわね。覚えておくわ。私もおしとやかとは言えないものね」

彼女は苦笑しつつ原稿のプリントアウトを手にとると、クリアファイルに入れてから鞆の中にした。席から立ち上がる。

「じゃあ、そろそろ部室に行くわ。つき合わせて悪かったわね」

「いいえ、かまいませんよ。どうせついからですから。いい暇つぶしになりました」

そんな僕の返事に宝龍さんは、言葉ではなく笑顔で応えた。

9 (3) . 「君か、僕か」

「じゃあ、そろそろ部室に行くわ。つき合わせて悪かったわね」

「いいえ、かまいませんよ。どうせついですからね。いい暇つぶしになりました」

そんな僕の返事に宝龍さんは、言葉ではなく笑顔で応えた。

が、踏み出しかけた彼女の足が、ふと止まる。

「恭嗣、噂をすれば影が差すというやつかしら？　彼女がお迎えよ」

「ん？　ああ」

教室の入り口を見て、すぐに理解した。そこにおそろおそろ中を覗き込んでいる女の子がひとり。不思議な色合いをした髪の毛、とびきりの美少女。

佐伯貴理華。

宝龍さんが書いた小説ではなく、現実の佐伯さんだ。

……。

「どうしたの？　毎日見てる顔でしょ。今さら見惚れてるの？」

「……え？　あ、いや、そんなんじゃないありませんよ」

僕は慌てて取り繕い、軽く片手を上げて佐伯さんに応えてやった。すると彼女は安心したように、そして、嬉しそうに笑顔を見せる。

「じゃあね、恭嗣。また明日」

そう言うつと宝龍さんはひと足先に教室を出て行った。

僕も机の横に置いていた鞆を拾い上げ、ドアのほうへ向かう。間、佐伯さんと宝龍さんは、二言三言、言葉を交わし、最後に宝龍さんが佐伯さんの肩を叩いて離れていった。佐伯さんは丁寧にお辞儀。遅れて僕も出ていく。

と、

「ご、ごめんなさい。委員会が長引いちゃって……」

僕が何か言うよりも先に、佐伯さんが発音した。

……。
まただ。

「……」

「あの、怒ってます？ 待たせちゃったから」

彼女は申し訳なさそうに訊いてくる。宝龍さんが書いた小説に出てくる佐伯さんとは似ても似つかないな。

「あ、いや、気にしないでください。それに待っている間、特に暇だったわけでもありませんから。……帰りましょうか」

「はいっ」

弾むような返事が返ってきた。

ふたりで歩き出す。

だが、それは並んでいるというよりは、佐伯さんが僕よりも一歩遅れて斜め後ろをついてきているような構図だった。

放課後とは言え、終礼終了から一時間ちよつとも経っていれば、廊下に生徒の姿はほとんどない。たまにうちのクラスみたいは何人か残っていたりもするが、すでに戸締りもされて人の気配のしない教室のほうが多い。

慣れ親しんだ放課後の風景だ。

……。

慣れ親しんだ……？

ふいに後ろに引つ張られる感覚が僕をはっとさせた。

立ち止まって振り返ってみれば、カッターシャツの裾を佐伯さんが指でつまんでいた。

「……歩くの、速いです」

ややうつむき加減の顔には不貞腐れたような表情。

「すみません。ちょっと考えごとをしていたもので」「考えごと?」

今度は心配そうに見上げてくる。瞬きとともに長い睫毛が揺れた。「ええ、ちよっと……」

……。

あれ? 今、僕は何を考えていたんだっけ……?

「まあ、たいしたことじゃありませんよ。もう大丈夫です。ちゃんとゆっくり歩きますから」

気の回らない自分を反省し、歩幅も小さく歩き出す。が、さつきほどではないものの、まだ引つ張られる感じがあった。佐伯さんが指を離していないのだ。

「えっと、佐伯さん?」

「も、もうちよっと握っていたいかなって……」

彼女は照れて赤くなった顔をうつむかせたまま、小さくつぶやいた。

「……」

僕は天井を仰ぎ見る。まさかこの年になって電車ごっこをする羽目になるとはな。まあ、人目がないのが救いか。

とは言え、これも続いたのは昇降口までで、靴を履き替えるときには手を離さざるを得ない。佐伯さんは拗ねた子どものように、渋々自分の下駄箱のほうへ向かった。

校門を出て、いつもの道に行く。

交わされるのは他愛もない日常会話。

「もうすぐ期末考査ですが、まあ、頭のいい君ならきつと余裕でしょうね」

「そんなことないですよ。わたしだってテスト前は必死だし、テストなんてなければいいと思ってます」

むっ、と佐伯さんは頬を膨らます。

「やっぱり君も勉強はしますか。それが終わればようやく夏休み。休み中、海かプールでも行きますか？」

「え？」

小さな驚きの声を発し、彼女の足が止まる。

しかし、それも一瞬のことで、すぐにわたたと駆けて、ひらいた距離を詰めた。

「えっと、その、そういうこともあるかなと思って用意はしてるんですけど……、あまり派手なのとか大胆なのは、期待しないでほしい、かな……」

佐伯さんの声が、恥ずかしそうに尻すばみに消えていく。

「あ、いや、僕もそういう気持ちで誘ったんじゃない、ただ単に夏ならプールか海だろう程度の単純な……」

そんな反応をされるとは予想外で、今度はこっちが焦る番だった。僕たちの間にぎこちない沈黙が生まれた。

無言のまま歩を進める。

ふと、

予想外？

僕は今、何をもって予想外だと思った……？

気がつけば交差点まできていた。

ちよつど信号が青だったので横断歩道を渡る。そのまま歩き続けたところで、僕はついに足を止めた。

「どうかしたんですか？」

佐伯さんも遅れて立ち止まり、振り返った。

街路樹の立ち並ぶ広い歩道で、僕らは向かい合う。

普段から交通量の少ない車道に車の影はないが、それを別にしても今は奇妙な静けさがあった。

「ちよつとした疑問です」

「疑問？」

「ええ。これはどちらの夢なのだろう、と」

静謐の中で僕は問う。風が通り抜けていった。

「君か、僕か」

僕が追い詰めてしまった佐伯さんの夢なのか、

佐伯さんがもう少しおしとやかであってくれたら、などと莫迦なことを思った僕の夢なのか。

それとも今までが夢で、これこそが現実なのか。

「まあ、おかげで何度も思ったはずのことを思い出しましたよ。佐伯さんの個性にはよく呆れたりしましたが、その度に僕は結論していたはずなんです。……それでも彼女は今のままがいいと」

「……」

「……」

「……さよならね」

夢の終わりは唐突にやってきた。

意識が現実に引き戻される。

そんな夢と現実の境界線上で僕は見た。ついさっきまで佐伯さんだった女の子が、初めて見るようなどこかで逢ったような、大人にも少女にも見える女性へと変貌するのを。彼女は真つ黒な、所謂ゴシックロリータの衣装を身にまとい、僕に妖しく艶やかに微笑むのだった。

「……」

なんとも、まあ、夢というのはいつもいつもよくわからないものを見せてくれる。

目が覚めたとき、僕は保健室のベッドの上にいる。

9(4)・「約束します」

スプリングのあまり利いていない固いベッド。周りはクリーム色の薄いカーテンで仕切られていて、狭く切り取られた天井が見えた。

ああ、保健室か……。

ようやく理解した。

だが、状況が把握できても、なぜ僕が今ここにいるかがわからない。何があっただったか。

上体を起こそうとして、

「う……」

体が悲鳴を上げた。

背中と頭。

「弓月くん？」

佐伯さんの声だった。

どうやら彼女はずっとベッドのそばにいたらしい。先の僕のうめき声で、僕が目を覚ましたことに気づいたのだろう。

そして僕は、彼女の声を聞いて欠落した記憶を取り戻していた。階段の最上段からダイブとは、何とも無謀なことをしたものだ。

「大丈夫なの？」

「とは言い難いですね」

ゆっくりと体を起こす。佐伯さんはそんな僕に手を貸そうと思っただのだろう、座っていたパイプ椅子から腰を浮かせ、躊躇いがちに手を差し伸べてくる。でも、結局、僕は最後まで自力で上半身を起こした。

座ったままでベッドの上端まで後退。そこに枕を立てかけて、背をもたせかけた。

「君は大丈夫でしたか？」

「あ、うん……」

「それならよかったです」

心底ほつとする。

「ところで、あの後どうなったんでしょか？ 誰が僕をここに？」
「えっと、宝龍さんがケータイで滝沢さん呼んで、滝沢さんがあちこち連絡してくれて。弓月くんは滝沢さんと男の先生でここに……」
「なるほど」

果たして学校にはタンカに類するものがあるのだろうか。それとも、そんなものなしで体と足を持って運んだのだろうか。まあ、どっちでもいいことではあるが。

ふと見ると、佐伯さんが頂垂れるようにして顔を下に向けていた。
「元気がありませんね」

「だって、わたしのせいで弓月くんが……」
やはり言葉に力はない。

「それについては謝るのは僕のほうでしょうね。もとはと言えば僕が自分の考えを君にちゃんと言わなかったり、曖昧にしていたことが原因なんですから」

僕は落ち込んでいる佐伯さんから目を離し、腹の辺りで組んだ自分の指に視線を落とした。

「そういう僕の態度が君を追い詰めてしまったんでしょね。だから君もあまり気に」
「そこで僕の言葉は途切れた。」

顔を上げた僕の目の前に、佐伯さんの顔があったからだ。彼女はパイプ椅子から腰を上げ、身を乗り出すようにして顔を近づけてきていた。

そして、

「弓月くんはわたしが好き！」

「はい？」

呆氣にとられる僕。

「言ったじゃない。態度をはっきりさせなかったのが悪かったって。つまり、はつきりさせたら、弓月くんはわたしが好き」

「言ってますん」

エンコーダの壊れっぷりが凄まじいな。

こういうときの佐伯さんは、非常に動きが素早い。彼女は履いていた上靴を蹴散らかすように脱ぎ捨てると、あっという間にベッドの上に上がり、僕の足をまたいで座った。

「ほんとに？」

向かい合ったまま佐伯さんが訊いてくる。

「君、ここ保健室ですよ」

「大丈夫。藤咲先生、職員会議があるって出て行ったから」

「……」

助けはなし、か。

「ねえってば」

佐伯さんは体を揺すって何をか催促する。

さっきまで落ち込んでいたと思ったら、今はもうこれだ。よくも、まあ、これだけこころごとく目まぐるしく変わるものだ。しかし、変な夢のおかげで己の振る舞いを反省した今なら、これも多少は微笑ましいと思える。

「君は見ていて飽きませんね」

僕は佐伯さんの髪を、後ろに流すようにして撫でた。あいかわらず細くて滑らかで、指の間から逃げていきそうな手触り。不思議な色の茶髪は、動きに合わせて輝くように色合いを変える。

「あ、ん……」

佐伯さんの口からくすぐったそうな、妙に艶めかしい声が漏れた。

「なんて声を出してるんですか」

「だって……けっこ感じるから……」

言いながら彼女は顔を赤くする。僕は慌てて手を引っ込めた。

「怖いことを……」

「あ、因みに、耳も弱いから。前にお京に噛まれて腰が砕けたー。

お返しに首筋、吸いついてやったけど」

「……」

何をやってるんだろつな。

「そんなわけで、髪と耳です。覚えておくと将来きつと役に立ちます。というか、すぐにでも役に立ててください」

「知りませんよ、そんなこと」

残念だが佐伯さんの髪に触れるのはこれきりにしておこう。

「兎に角」

僕は改めて言う。

「これからは君を不安にさせないよう努力しますよ」

「ほんと？」

「約束します」

僕が重ねて言うと、彼女は嬉しそうに笑った。

その屈託のない笑顔が僕を惹きつけてやまず、しばしの間、僕と佐伯さんはお互いの存在を確かめ合うようにして見つめ合った。

と、

「あー、そろそろいいかな」

わざとらしい咳払いの後に、第三者の声。

音速の勢いでそちらを向くと、

「た、滝沢っ」

ベッドを仕切るカーテンを少し開けて、彼が立っていた。その横には宝龍美ゆきの姿もある。彼女は今にもため息を吐きそうに呆れた表情をしていた。

「いつからそこに……？」

「『約束します』の辺りかな」

「……」

言うなよ、わざわざ。

「安心しろ、ずっと見ていたわけじゃないから。お前のそんな表情が見れたからそれでよしとしたいところだが、これはどういうことか説明してもらいたいな」

「これはですね……」

頭をフル回転させて言い訳を考える。だが、佐伯さんが膝の上に

乗っていて、彼女と向かい合っている状態では何を言っても説得力はないだろう。

この気まずい状況を打破しようと言葉を探す僕よりも先に、佐伯さんが口を開いた。

「つまりはこういう関係、かな？」

そのひと言でもう何もかもが手遅れだった。

9 (5) . 「君は時々鈍くなりますよね」

その後、滝沢や宝龍さんだけでなく職員会議から戻ってきた養護教諭の藤咲先生にまで見つかってしまい、少なからず怒られることとなってしまった。

「これからは君がいるときは保健室を離れられないわね」

保健室を出る間際にも、先生はため息混じりにそんなことを言う。デスクのイスに座る藤咲先生と、それに向かい合って立つ僕。僕の周りには佐伯さんたちもいる。

「それ以前に、もうここにお世話になることのないようにしたいです」

「ええ、そうしてちょうだい。君がくるときは決まって一大事だもの。最初は殴り合いのケンカをしたって、滝沢君と一緒にひどい有様でここにきたわね」

「そうでしたっけ？」

少しばかりとぼけてみる。

「その次もやっぱり滝沢君とふたり、ポロポロだったわ。いったい何回ケンカをしたら気がすむのかしら。確かそのときは矢神君が付き添いで一緒にきたわ」

「……」

いえ、先生、それは違います。その付き添いの矢神が僕たちをポロポロにした張本人です。

僕と滝沢は顔を見合わせ、苦笑いをした。

「その次は」

「先生、できればその辺りにしてほしいのですが」

放っておいたら僕の保健室の利用履歴をかたっぱしから語りそう
だ。

「そうね。……兎に角、今日のところは帰って安静にしていること。さっきの続きで彼女と暴れたりしないように」

「……しませんよ」

それが教師の台詞か。

「夜になって異状が出たら、救急車でも何でも呼んで病院に行きなさい。頭を打ってるから今は大丈夫でも、後で症状が出ることも珍しくはないわ」

「覚えておきます。……お世話になりました。失礼します」

頭を下げ、藤咲先生にお礼を言う。

踵を返せば宝龍さんと滝沢はもうドアへ向かって歩き出していた。僕も待つていた佐伯さんと並んで保健室を出る。

途中、

「暴れたらダメだって」

「……わかってますよ」

何を莫迦なことを。

廊下に出ると、ひとまず円陣のようなフォーメーションになる。

雑談モードだ。

「すみません、滝沢。迷惑をかけてしまったみたいで」

「いいさ。気にするな」

彼は嫌味なく笑う。

「お前は問題を抱えても、いつもいつの間にか自分ひとりで解決してるからな。時々友人だと思われてないんじゃないかと心配になる」

「決してそういうわけではないんですけどね」

「そうか。それを聞いて安心したよ。……じゃあ、俺はまだ残ってやることがあるから」

改めて見れば、滝沢は手ぶらだった。荷物はどこか別の場所に置いてあるのだろう。

「そうですか。じゃあ、これで」

「ああ、また明日」

僕が拳を差し向けると、彼も同じようにして拳を突き合せてきた。別にそれが僕たちの間で決められた挨拶というわけではなく、単に思いつきでやったら滝沢も同じノリで返してくれたというだけのこ

とだ。

そうして間違いなく僕の友人であるところの滝沢は、昇降口とは反対の方へ歩いていった。

「では、僕らは帰るとしますか」

腕時計を見ると、針はもう5時半近くを指していた。1時間くらい寝ていた計算になるのか。

「っと、宝龍さん、図書室は……」

「今日はもういいわ。また今度にする」

と、苦笑気味に言う。

それをきっかけに僕は足を踏み出した。

僕と佐伯さんと宝龍さん。縦にも横にも並ばず、そして、言葉もなく無言で歩く。

保健室から昇降口に間に教室はないが、人の気配のなさを見るに、校舎の中にほとんど生徒は残っていないのだろう。終礼が終わって2時間が経とうとしているのだから当然か。グラウンドからの部活動の声だけが遠く聞こえる。

すぐに昇降口に着き、僕と宝龍さん、佐伯さんでそれぞれの下駄箱へと別れた。

上靴から学校指定の革靴に履き替える。

ふと見ると宝龍さんは未だ上靴のまま、下駄箱にもたれていた。

「どうしたんですか？」

「ええ、ちよっとね」

と、彼女は曖昧に笑ってから、

「まさか恭嗣があそこまで躊躇いもなく飛び降りるとはね」

「あまり蒸し返さないでもらえると嬉しいです」
格好のいい話でもないのだから。

「もしあれが私だったら、あなた、同じことをした？」

「さて、どうでしょう？ そのときになってみないとわかりませんね」

まあ、そんなにぼんぼんみんなで落ちられても困るので、そんな

ときはこないに限る。

「いいえ、たぶんしないわ」

彼女は「たぶん」を使いながらも、断定の口調だった。

「今の恭嗣にあそこまでさせられるのは、きつとあの子だけね。今日のあるを見て思ったわ。ああ、私じゃないんだって」

「……」

僕は何も言い返せなかった。

反論も異論もなく、否定も否認もできず、ただ黙る。そうなのは宝龍さんの言ったことを、僕自身認めてしまっていたからだろう。

「……すみません」

だから僕は謝った。

「いいわよ、別に。最初からそんな気はしてたから。ただ単に私の往生際が悪かっただけ」

そう言って浮かべた微笑は、宝龍美ゆきにしては珍しくやわらかいものだった。

「宝龍さん、僕は」

「ねえ、何やってるの？　ずっと外で待ってたんですけどー」

僕の言葉は佐伯さんによって遮られた。振り返れば昇降口の出入り口のところに、待ちぼうけを喰わされた佐伯さんが口を尖らせて立っていた。

「だそですよ」

「私、やっぱり図書室に寄っていくことにするわ。あなたたちは先に帰ってて」

宝龍さんは、僕ではなく佐伯さんに向けて声を投げ返した。

「じゃあね、恭嗣」

そして、彼女は僕の肩を軽く叩く。

「わかりました。また明日」

「帰ってから暴れないようにね」

「しませんって」

よけいなお世話というものだ。

ひとり減りふたり減りして、結局、校門を出るときには僕と佐伯さんだけになってしまった。

夏がすぐ近くまでやってきているとは言え、午後5時半を回れば外は薄暗い。外観を重視してデザインされた学園都市の街並みは、夕闇にもよく映えた。

「弓月くん、本当に大丈夫？」

歩きながら佐伯さんが心配そうに訊いてくる。

「まだ少し背中が痛いのと、多少頭が重たい感じは残っていますが、もう平気です」

もちろん“今は”の話で、藤咲先生が言ったように、後で影響が出ることも考えられるが、それを今から心配しても仕方がない。樂觀的なことを言えば、このまま何もないだろうと予想している。自分の体のことは自分がいちばんよくわかっていているものだ。

「そうそう。ずっとそばにいてくれた君にもお礼を言っておかなければいけませんね。僕は呑気に夢を見ていたというのに」

「夢？　どんな？」

佐伯さんは僕のほうに顔を向けるようにして首を傾げた。

「たいした夢じゃありませんよ」

僕は笑って誤魔化す。あまり人に言えた内容でもないし、ほとんどの夢がそうであるように、もう記憶が薄れて細部が曖昧になりつつある。

と、そのとき、スラックスのポケットの中で携帯電話が振るえた。着信メロディはなし。まだマナーモードにしたままだったようだ。ポケットから取り出し、サブディスプレイを見てみれば、そこには妹のゆーみの名前が表示されていた。

「ちよつとすみません」

佐伯さんにひと言断り、

「もしもし？」

『いい夢は見た、兄さん？』

「!?!」

驚きのあまり思わず足が止まる。

そして、衝撃は幻痛となつて頭を襲った。

「……ゆーみ、なぜそれを……?」

『1時間ほど前に電話したら出なかつたので、兄さんのことだから昼寝でもぶつこいてたのかと予想』

こちらの驚きとは正反対に、ゆーみは平坦に言つてのけた。

「あ、ああ、そういうことですか」

『因みに、寝ると言つても、「俺、あの子と寝たぜ」とか「奥さん、私あの人と寝ました」の“寝る”ではない』

「わかつてますよ」

ベタだな。僕の妹は普段どんなドラマを見ているのだろうか。少し頭が痛い。

「ところで、何の用ですか?」

『兄さんお気に入りのいつもの店から電話あり。いい豆が入つたら、よかつたらまた寄つてくれとのこと。オーバー?』

「なるほど。わかりました」

いつもの店というのは、僕がよく足を運んでいるコーヒーショップだ。顔馴染みなので、何かよいものが入荷されるとわざわざ電話をくれる。家に帰っていないのだから当然だけど、学園都市にきて以来ぜんぜん顔を出していないな。

「ゆーみ、後でお金を払いますから、買ってこちらに送って」

『やだ』

僕の言葉を最後まで聞くことなく、ゆーみは即答した。

『欲しければ自分で買いに行け、この放蕩兄貴』

「……」

『では、確かに伝えたので。……なお、通話が終わり次第、兄の携帯電話は証拠隠滅のため自爆します』

「してたまりますか」

だが、そのときには通話は切れていた。

端末を折りたたむ。その際、ついでに着信履歴を見てみると、確かに5時少し前にゆーみから電話が入っていた。

「ゆーみさん？　どうかしたの？」

「僕がよく行っている実家近くのコーヒーストップにいい豆が入ったそうです。それとたまには家に帰ってこい、と。夏休みに入ったら、一度くらい帰っておいたほうがいいかもしれません」

「あー、うちは両親がアメリカから帰ってくるだろうなあ」

ゆーみと話している間にけっこう距離を稼いでいたようで、気がつけばいつもの交差点までできていた。

信号は赤。

横断歩道の前にして立ち止まる。

そして、

その対岸に、彼女はいた。

初めて見るようなどこかで逢ったような、大人にも少女にも見える彼女が、真っ黒なゴシックロリータの衣装を身にまとい、正面に立っていた。

黒い、アリス。

彼女は僕を見て妖しく艶やかに微笑む。

「……」

頭が混乱をきたしかける。

が、丁度そのとき、側面にコンビニエンスストアのロゴをつけたトラックが走ってきた。僕の視界を覆い、彼女の姿を見えなくする。時間がひどく緩慢に流れ、そのトラックがゆっくりと通り過ぎていく。

そして、ようやく視界がひらけたときには、彼女は忽然と消えていた。

「……」

瞬き数回。

気のせい　だったのか？

と、

「ちょっとお、弓月くん、聞いてるー？」

佐伯さんの声が僕をさらに現実に戻す。

「すみません、聞いてませんでした」

「もういいっ」

信号が青に変わり、彼女は歩き出した。

それを追いかけて僕を考える。

頭を打って現実から滑り落ちるといふ、普通の睡眠とは違う意識の失い方が、夢と現実の境を曖昧にしているのだろうか。妙な夢を見たり、夢で見たものが現実でも見えたような気がするのはいかもしれない。

ふと気がつくと、佐伯さんが僕より2、3歩遅れていた。

「歩くの速いですか？」

「あ、や、そーゆーわけじゃないんだけど……」

歯切れの悪い返事だった。

佐伯さんの言う通りだと自分でも思う。普段から歩くときは彼女に合わせているし、多少考えごとをしていてもそこに気が回らなくなることはないつもりだ。

ということとは、

「君、足を痛めてます？」

僕たちは立ち止まった。

「あ、うん。ちょっと、階段から落ちるときに足を捻ったみたいで

……」

佐伯さんは言いにくそうに肯定する。

「藤咲先生には診てもらったんですか？」

「うん。捻挫したりはしてないみたいだから、すぐに治るだろうって。いちおー湿布はしてもらってる」

「そうですか。それなら心配はないですね」

再び足を踏み出す。

「ねえ、おぶつてくれるとかないわけ？」

「ありませんよ。ここまで歩いてきたでしょう」

とは言え、さつきよりはゆっくり歩くことにする。

「お姫様だっこ」

「もつとありませんね。でも、まあ、荷物くらいは持ちましよう」
言って僕は佐伯さんの手から鞆を取り上げた。これで少しは歩きやすくなったことだろう。それでも彼女は不満そうではあったが。

「話は戻りますが、そう言えば夢に女の子が出てきました」
話題を変える。

「うわ、何それ。やらしー」

「別にやましいところはありませんよ」
「いやらしいって何だ。」

「ねえ、どんな子だった？　かわいい？」

「そうですね。僕が今まで見た中でいちばんかわいい女の子でした」
「むー」

佐伯さんの口から不貞腐れたようなうなり声がもれる。なんだから笑えてきた。

「なに？」

「いいえ。ただ、君は時々鈍くなりますよね」

「？」

僕の言ったことの意味がわからず、佐伯さんは首を傾げた。

「こうなったら弓月くんの夢に出られるように頑張るしかないかな」
「あ」

「何をどうやったらそんなことができるか知りたいところですね。
ただでさえ朝から晩まで一緒なのに、夢にまで出てきてどうしよう
っていうんですか」

そんなことをされたら僕の毎日が本気で佐伯さん一色になってしま
う。

「だってー」

「その代わり、って何の代わりかよくわかりませんが　次の日曜
はふたりで遊びに行きましょう」

「ほんとー!？」

佐伯さんが前に出てこちらを振り返った。僕と向き合い、後ろ向きで歩く。

「本当です」

「やったあ！」

そして、踊るようにくりりと反転。弾んだ足取りで僕の前を行く。

「足、気をつけてくださいよ」

「わかってるー」

そんな佐伯さんの姿を見て、僕の頬は自然と緩んでくる。

なんとも、まあ、今でも充分、呆れるほど佐伯さん一色だな、僕の生活は。朝も晩も、平日も休日も、いつも僕のそばには彼女がある。

これがいつまで続くかはわからないけど、それまでは存分に楽しむことにしようと思う。

／#3 了

日曜日の朝、平日よりもかなり遅い朝食を食べながら、わたしは言った。

「今日はデートです」

「はい？」

向かいで同じく食事中の弓月くんが問い返してくる。手には食パン。昼との間隔が短いので、朝食は軽めだ。

「言ったじゃない、日曜日はデートだって」

「ああ、忘れてました」

うそつけ、とわたしは心の中で思う。

たぶん弓月くんは忘れていない。忘れたいと思ったり、言ったわたしが忘れていたらいいなと思っても、忘れてはいないと思う。

「でも、この前も言ったけど、今回はまったりデートだから」

「来週も半ばからテストが始まるというのに、アクティブに遊び回るほど無謀じゃありませんよ、僕は」

「ごもつとも。今日はテスト前最後の日曜日で、そんな日に出かけるほどわたしも自分を過信していない。

「前にその話を聞いたときにも思いましたが」

「口の中のものを飲み込んでから、弓月くんが言う。」

「いったい具体的に何をするつもりなんですか？」

「えつと……リビングで一緒に勉強して、夕方には買いものに行つて晩ご飯を食べて。その後は借りてきたDVD鑑賞？」

「なんとものんびりまったりしたデートだ。」

「普段とたいして変わらないように思いますが？」

「う……まあ……」

確かに。

「でも、ほら、一緒に勉強つてところが、ね。それでももしかしたらドッキドキな展開にっ」

「なりませんよ」

にべもない。

「じゃあ、この前買ってきた水着を夏に先駆けて先行公開」

「勉強じゃなかったんですか」

「だってえ……」

弓月くんめ、わたしの水着姿は見たくないと言うか。でも、ちょっと慌てたみたいだから許す。とは言え、わたしも部屋でそんな格好をするのはどうかと思うので（弓月くんの反応は見たいけど）、脱線すぎた話を軌道修正したい、のだけど　デートに理由をつけるのは案外難しい。

むー、とうなっていると、

「まあ、たまにはそういうのもいいのかもしれないね」

わたしは弓月くんを見る。

彼は、努めてわたしを見ないようにしながら、そ知らぬふりでパんにバターを塗っていた。

どうやら今日のデートはオツケーらしい。

午前中は家事に追われた。

朝食の片づけをして、洗濯と掃除。それが終わった頃には昼が近かったので、お昼ごはんの準備に取りかかった。高校生になると同時に主婦になった気分だ。

それはそれでちよつと素敵。高校生夫婦なんて憧れる。

と、まあ、それは兎も角。

「弓月くん、準備できたよ」

昼食を食べた後に部屋に戻ってしまった弓月くんを呼ぶ。ノックをしてからドアを開け、覗き込みながら声をかけた。準備といつてもリビングのテーブルの上にあった新聞雑誌を片づけ、きれいに拭いたくらい。それとあとは個人的な準備。

真面目な弓月くんは、机に向かって勉強をしていたらしい。その手を止め、ため息を吐いた。

「仕方ないですね。決めたことですから」

キヤスタつきのイスに座ったままこちらに体を向ける。
と、そこで気づく。

「着替えたんですか？」

「うん」

朝起きてからずっとタンクトップにホットパンツの部屋着だったけど、それもさつき着替えた。モノトーンの、ノースリーブのミニ丈ワンピース。部屋着以上外出着未満の普段着といったところ。

対する弓月くんは、デニムと、Tシャツに薄手のカッターシャツを羽織っただけの姿。やつぱり普段着だ。

「なんとなく区切りのつもりで」

ただでさえ普段と変わり映えのしないことをしようというのに、着替えるくらいしないとよけいにらしくなくなってしまう。

「じゃ、待つてるから」

そう言い残して弓月くんの部屋を後にする。

リビングに戻って自分の座椅子に座って待っていると、程なく彼が出てきた。が、脇に抱えた勉強道具をテーブルに置いただけで、腰は下ろさずキッチンに向かった。

「コーヒーでも入れますよ」
だそうだ。

わたしは弓月くんが持ってきた教科書に目をやった。

「現国？」

「ですね」

キッチンから彼の声。

「弓月くんって理系だっけ？」

「どうも僕は記憶力を中心にした勉強が苦手のように、古文の活用形や歴史の年号を覚えるよりは、数式を組み立てているほうが好きですね」

「理数系でも公式を覚えるから似たようなものだと思います？」

「それでも応用ができれば、覚えるのは最小限ですみます」

声とともにコーヒーの香りが漂ってきた。

「垂直投げ上げだろうが水平投射だろうが、結局はニュートンの運動方程式ですから」

そんなことを言われても、まだ物理をやっていないわたしにはさっぱりだ。

やがて弓月くんが両手にマグカップを持って戻ってきた。

「どうぞ」

そのひとつをわたしの前に置く。ミルクと砂糖入り。弓月くんのほうはたぶん砂糖なしのミルクのみだろう。

彼も自分の座椅子に腰を下ろすと、すぐに教科書とノートを開きはじめた。さっそくお勉強に突入らしい。もう少し他愛もない話につき合ってくれてもいいと思うのだけど。

つられるようにわたしも用意をする。数学の教科書を開き、シャープペンシルを持ったところで、ふと顔を上げた。

弓月くんは頭の切り換えが早いのか集中力があるのか、もう勉強に没頭しているようだった。いつもは眠そうな半眼も、今はそれなりに真剣な眼差し。学年もクラスも違うから、彼のこういう姿は初めて見る。

時々考える。彼はわたしのことをどう思っているのだろう。と。こっちはけっこう自覚するところがあって、いろいろアピールしているというのに。弓月くんは肝心なところでひらりとかわして、ついでに自分の気持ちも隠してしまう。そんなにわたしは魅力がないのだろうか。

「君も勉強したらどうですか」

いきなり弓月くんに顔も上げないまま言われて、びっくりした。

「や、ほら、弓月くんって字がきれいだなと思って」

慌てて取り繕うわたし。実際、彼の書く字はきれいだ。反対向きのごちらからでも何が書いてあるか読むことができる。

弓月くんは手を止め、顔を上げた。

「うちの親が、男で字が汚いのと泳げないのはみっともないからと、

小学校の頃に硬筆とスイミングスクールに通わされたんですよ」

「あ、どうりで」

わたしとしては、字が汚いのは「男の子だから」で許せるけど、きれいだと評価アップ。泳げない男の子は、ちよつと残念かもしれない。

「じゃあさ、泳げるんなら夏は海かプールに行こう」

「お断りします」

身を乗り出すわたしと、反対に座椅子の背もたれに体を預けて距離を離す弓月くん。

「わたしにせっかく買った水着をムダにしると」

「友達と行けばいいでしょう」

なぜそこで自分を除外するのだろうか、弓月くんは。

「こうなったらむりやり見せるぞ」

つついっついて出してしまうセクハラ発言。

他の男の子、特に学校の階段の下で何気ない振りを装って不自然全開でたむろしているような男子には、こんなことを言う気には絶対になれないけど、弓月くんにはなぜか言いたくなる。反応が面白いから？ わたしはサドか。

「そのまま膝の上に乗ってやるから」

「おそろしいことを言わないでくださいっ」

さすがにこれには弓月くんも慌てた様子で声を荒らげる。

「まあ、気が向いたらつき合いますよ」

勝った 思わず心の中でガッツポーズ。

「だからそろそろ莫迦なことを言うのはやめて勉強しましょう」

「はぁーい」

確かにそのほうがよさそう。わたしも想像したらドキドキしてきた。これ以上やるとおかしくなりそうだ。弓月くんばりに頭を切り換えて、勉強に専念することにする。

「僕にわかることだったからおしえますよ。君には必要ないかもしれませんが」

「うっん、頼りにしてる」

テーブルをはさんで向かいにいる初めて見る姿の弓月くんは気になるけど、そろそろ真面目に勉強に励もう。

教科書の今からやるべき箇所に目を通しながら、コーヒーをひと口飲む。美味しい。カフェインを取り込んで程よく頭が冴えてきたところで、さっそく問題を解きはじめる。

そして、

……。

……。

……。

「ああ、もうこんな時間ですね」

「ふに？」

ふいに聞こえてきた弓月くんの声にわたしは顔を上げ、時計を見る。と、時間は4時を過ぎたところだった。

「……」

「ばたり。」

思わず机に突っ伏す。

「時間を忘れて勉強してしまった……」

自分の集中力が憎い。

「いいじゃないですか、テスト前なんですから」

「むー」

何かこう、和気藹々としたものがあってもよかったんじゃない……。

別にドツキドキな展開じゃなくてもいいから。

「嘘でも何かおしえてもらえばよかった……」

「いやですよ、そんなの」

「よし、買い物に行こうっ」

過ぎた時間は戻らない。悔やんでいても仕方がないので、わたしはむくりと顔を起こした。スケジュールを次に進めるのだ。

「晩ごはんは何がいい？」

学校へ行くときにも通る大きな道路沿いの歩道を歩きながら、弓月くんに訊く。

わたしは部屋で着ていたワンピースにローファーを履いただけの格好。弓月くんもそのままだ。普段着で買い物というところがい

い。「あまり手のかからないものでいいですよ」

「なんで？ 日曜日だから気合い入れて作るのに」

「それなんです」

と弓月くんは切り出す。

「雑事を君に任せて僕だけ勉強というのもどうかと。特に今はテスト前で、同じ学生なんですから」

「そんなこと気にしないでいいのに」
いつもながら律儀な人だ。

確かに今日なんかテスト前最後の日曜だというのに、午前中が家事でつぶれてしまった。かと言って、弓月くんがいなければその分勉強できたかというところ、そうはならなかったと思う。彼がいなくても、やっぱり家事はやらなくてはいけない。

「わたしが好きでやってることだから」
勿論、やってあげたいと思う相手と思わない相手がいる。
要するに、

「好きだからやってあげようって気になるんだと思う」
ということだ。

「そうですね。そんなに家事が好きでしたか」

「……………」
「こんにやろう。今のは絶対わかって知らない振りをしたな。」

ショッピングセンターの2階にあるレンタルビデオ店に行く。弓月くんには「なんでわざわざテスト前に見ないといけないんですか」とぼやかれたけど、デートのスケジュールに変更や遅延は許されないので。

「弓月くん、あれあれ」

興味あるのかないのかわからない様子でテキストに目についたDVDを手にとっていた彼の服を引つ張る。わたしが視線で示した先にはパーティションで区切られたスペースがあり、その小さな入り口には『for ADULT』の暖簾がかかっていた。

「君はいつから18才になったんですか」

「先週誕生日を迎えて」

「それは初耳です。僕より年上だったんですね」

「すぐ投げやりな弓月くんの声。」

「どう?」

「見られない年の人間に聞いても仕方ないでしょう」

相手にしたくなさそうに、ミステリものの棚を見ながら答える。

「実は前に、お京と一緒に入ったことあるんだ」

「何やってるんですか、君たちは」

「なんか笑いが止まらなかった」

あの異様な充実っぷりが実にツボだった。

「弓月くん、水着モノなんてどう?」

「君、今日はずっとそんなことを言ってますね」

「夏が近いからかな?」

あ、もしかしたら趣味とか好みの問題なのかも。ゴールデンウィークのデートのときもそんなことを言っていた気がするし。

無難に災害パニックものを借りて、そのあと1階にあるスーパーで買いものをしてから帰路につく。時間は5時半だけど、まだ外は明るい。これからの季節、どんどん日が長くなっていくのだろう。

「あ、そうだ。弓月くんって誕生日いつ?」

道すがら訊いてみる。さっき誕生日をネタにしたときから気になっていたことだ。

「僕は9月です。9月の13日」

「よかった。過ぎてなくて」

弓月くんのことだから「実は4月でしたが、わざわざ言うこともないと思って黙っていました」などと平気で言いそうだ。

「因みに、宝龍さんも同じ日です。勿論、年は違いますが」

「……」

なんかすごく悔しい。

「佐伯さんは？」

今度は弓月くんが訊いてくる。

「わたしは7月7日。七夕でーっす」

「……聞くんじゃなかったな」

「なんで!？」

それこそ過ぎていればよかったとでも言いたげだ。

「何かプレゼントしてくれる？」

「そうですね。いいものがあれば買いましょう」

と言ってくれたものの、ちよつと不安な気分。意外とセンスのいいものをプレゼントしてくれそうな気もするし、微妙なものを選びそうな気もする。冗談グッズでウケを狙って盛大に滑るなんてこともありそうだ。

話も途切れて、しばらく黙って歩く。

ちよつど陽が沈みかけているのか、ショッピングセンターを出たときよりも暗くなっているように感じた。帰ったら夕飯の支度をして、弓月くんと一緒に食べて、それからDVD鑑賞だ。

「あーあ」

思わずそんな声を出してしまう。

「どうしたんですか？」

「うん。結局まったりデートっていても、普段とあまり変わらなかったなあって」

「だから僕が最初から言ってたでしょう」

やっぱりデートはぱーっと遊びに行ったほうがいいのかもしいい。い。

「まあ、それならそれで毎日がそうだと思えばいいんじゃないでし

よるか」

などと言つ弓月くんは、ちよつとびっくり。

珍しくポジティブシンキング。

「でもなあ……」

「ま、どんな時間を貴重だと思つかは人それぞれですから」

「……」

確かにそうなのかも。

わたしは念願叶つてというわけではないけど、お父さんの都合で舞い込んできたひとり暮らしを、それなりに楽しみにしていた。親のいない気楽さと、何でもひとりでもやらないといけない大変さの混じった生活に期待を抱いていた。でも、それよりも思いがけず手に入れた弓月くんと同居のほうはずつと楽しいと自信をもって言える。

だったら弓月くんの言う通り、わたしは毎日かけがえのない時間を過ごしているのだらう。

「弓月くんはやっぱりひとり暮らしのほうがよかった？」

ふとわいた疑問が口をついて出る。

「今の生活も悪くはないと思ってますよ」

「曖昧」

「……」

「……」

少しの間。

そして、

「ひとり暮らしを経験していない以上くらべることはできませんが、君と知り合えてよかったとは思っています」

意外にストレートな言葉だった。

「そ、そっか……」

おかげでわたしはそれだけしか言えなかった。

てつきり弓月くんはこれでこの話を終わらせるものだと思っていた。だけど、わたしの予想を裏切り、続ける。

「こんなことでもない限り、学校ですれ違っても君は僕のことなど気にも留めなかったでしょうからね」

「……」

そんなことはない　そう思った。水の森に入ってから学校の活の中で、わたしはきつと弓月くんを見つけ出したはずだと信じている。　でも、今はそれを言うのはやめておいた。

「弓月くん、買い物もの袋ひとつ貸して。持つから」

「大丈夫ですよ、これくらい」

「いいから」

強引に引っ手繰る。

「だって、そうじゃないと手がつなげないから」

そして、彼の手を握った。それぞれ買い物もの袋をひとつ持って、あいた手と手をつなぐ。

彼は手を振り解かなかった。

でも、もうわたしたちの家は目の前だけだ。

その日、わたしは弓月くんのクラスを訪れた。

入り口近くにいる人を捕まえて、彼を呼んでもらう。

「今日、宝龍さんは？」

「ん？ いませんか？」

出てきた弓月くんの肩越しに教室を覗き込めば、彼も同じように中に目を向けた。

「いませんね。どこかに行ったようですね」

「ふうん」

どこかに……。

ほら、ここにいると邪魔になりますから と、弓月くに背中を押されて廊下の窓際へ寄る。

「今日は何しにきたんですか」

「あ、そうそう。お弁当、美味しかった？」

いちおう聞いておかないと。

「何かと思えば、そんなことを聞きにわざわざきたんですか？」

「そんなことってゆーな。今日は新しいことに挑戦したんだから、気になって当然でしょ」

あいかわらずの弓月くん。その様子だと今まで家でも出したことのない創作おかず（実験品）が入っていたことも気づいていないのだろう。

「日々進化を続ける愛妻弁当を舐めるなど言いたい」

「君と結婚した覚えはありませんよ」

わたしも今のところない。

「だいたいいまいちだと答えたらどうするつもりですか」

「えっと、お詫びに脱ぎます？」

「脱がなくていいです」

弓月くんの返事はあっさりしたものだ。本日もつつがなく平

常運転。

「まあ、兎に角、美味しかったですよ」

「そっか。よかった。これで弓月くんの好みもだいぶ把握できたかな？ 晩ごはんも張り切るから、楽しみにしてて。……じゃあね」

わたしは別れを告げてこの場を後にした。きつと後ろでは弓月くんがいったい何をしにきたのだろうと首を傾げているに違いない。

さて、と。

あの人は教室にはいなかった。だとしたら屋上だろうか。

わたしはその足で3階に上がり、目立たないように気をつけながら、さらに屋上への階段を上がった。

立ちふさがる鉄扉。

ノブを掴んで回すと、それはすんなりと動いた。……当たり前らしい。

鉄扉を押し開けて屋上へ出る。

と、案の定あの人 宝龍美ゆきさんがいた。

思わず目が釘づけになってしまっしうな伶俐な美貌に加えて天才型の成績優秀者。にも拘わらず、留年という異色の経歴を持つ人。それが彼女だ。

少し離れたフェンスのそば、彼女は鉄扉が開く音が聞こえたらしく、すでにその目でわたしを捉えていた。……弓月くんではなくてお生憎さま。

「こんにちは、宝龍さん」

「ええ、こんにちは」

近寄り、和やかでない雰囲気で挨拶を交わす。

「私にまた何か用？」

そう言えば、前にここで彼女に言いたいことを言って非難したのだった。別に反省はしていないけど。

用？ もちろんある。

「……弓月くんがわたしに言ったんです」

わたしは脈絡なく話しはじめ。

「こんなことでもなければ君と出会うことはなかっただろう。学校で普通にすれ違っただけじゃ見向きもされなかっただろうって」「こんなこと」というのは不動産屋のミスで二重契約が起きたことだ。弓月くんはあれがわたしたちを出会わせたのだと思っている。あれだけがわたしたちの出会う唯一のきっかけだったと思っている。でも。

「でも、確信してるんです。わたしはたくさんいる水の森の生徒の中からきつと弓月くんを見つけ出したって。あの人を選んで声をかけたって」

「それは、運命？」

宝龍さんは聞いてくる。

運命。

便利な言葉だ。偶然も必然もひっくりかえりてしまえるのだから。

「ずっと、気になってるんです。弓月くんの目が」

「目？」

彼女はその単語に反応を示した。驚き、だろうか。

「初めて会ったとき『あれ？』って思ったんですけど、そのときはそれだけでした。それから一緒にいるようになって、時々弓月くんが何を見ているのかわからないような、何も見ていないような目をするところがあるのに気がついたんです」

そこにあるものを目に映しながら、もっと別のものを見ているような目。

わたしと同じものを見ていないような目。

わたしを、見ていないような目。

「だから、わたしは弓月くんと知り合っていないなくても、あの目を見つけたらと思ったっています」

気になって仕方がないのだ。どうして彼がそんな目をするようになったのか。

でも、ようやくわかった。

その目の理由は、

「そう。私と同じだわ」

「え？」

宝龍さんのその言葉に、わたしは小さな声を上げた。発しかけていた台詞を飲み込む。

「あなたも同じものを見つけていたのね」

「……」

「……」

「頭の回転が速いわね。……ええ、そうよ」

彼女は出来のいい教え子を褒めるような笑みを見せた。

わたしの頭の回転が速いというなら、こちらの考えていることを先回りした彼女はなんだというのだろうか。

「あなたは恭嗣がああいう目をするようになった原因が私にあると思っただけだ」

その通りだ。弓月くんから去年の宝龍さんとの一件を聞いて確信していた。そのときのことが彼を変えたのだと。

「私が初めて会ったときには、恭嗣はもうあだったわ」

「そんな……。じゃあ、どうして……」

もつと以前に何かあったということ？

「さあ？」

彼女は首を横に振った。

「知らないわ。私もずっと前から知りたいたいと思ってるけど」

その目には寂しげな光。

「ただ、それもほんのわずかのこと。次の瞬間には消えて、彼女らしいクールな笑みを浮かべて、挑発的にわたしを見る。」

「そういうわけだから　残念だったわね。私のせいじゃないわ。さ、わかったのならもう行きなさい。私ももうすぐ中に入るわよ」

「ここの鉄扉の鍵を持っているのは宝龍さんだけ。わたしがここにいると、彼女も中に入れない。案外わたしを置き去りにした上、鍵まで閉めるかもしれないけど。」

「言われなくてもそうします」

ふんと鼻を鳴らして踵を返す。

そうして鉄扉のノブを握ったとき、宝龍さんが背中に声を投げかけてきた。

「私には怖くて聞けなかったことだけど、あなたならそこに触れられるかもしれないわね」

「……もちろん、そのつもりです」

今はまだ宝龍さんよりも知っていることは少ないけれど、これからもっと弓月くんのことを知って、どんな秘密も受け止めるつもりだ。

わたしはそう宣言して、屋上を後にした。

かくして、

わたしは彼の秘密のひとつを知ることになるのだけど、それはもつと先の話だ。

1(1)・「今から可能性をせばめるのは感心しませんね」

日曜日。

「モーニンツ」

僕こと弓月恭嗣の一日は、同居人^{ルームメイト}である佐伯貴理華に起こされる
ところからはじまる。

佐伯さんの声に導かれて覚醒へ向かう意識の中、ギシ、とベッド
が軋むのを感じた。佐伯さんが手をつけて体重をかけたのだ。
ゆっくり目をあける　と、いつも通り彼女の顔があった。

佐伯さんが笑顔を浮かべる。

「おはよう」

「おはようございます」

朝の挨拶。

「いつも思いますが、君は遠慮なく部屋に入ってきてますね。痛い目
に遭っても文句は言えませんかよ」

「うわ。格好いい台詞。もしかしてわたし押し倒される？」

「されませんよ」

なぜそんなに期待に満ちた声で言うのだろう。

「朝から元気ですね。今日は特に」

「わたし、朝型だから。それに」

そこで彼女はまたもや満面の笑みを見せた。

「今日はデートじゃない」

「ああ」

そうだったな。

6月最後の日曜である今日は、佐伯さんと一緒に遊びに出かける
予定になっていた。

来週だとすでに期末考査3日前なので、テスト前に遊んでおくな
らこれが最後の機会だ。

「佐伯さん、用意できましたか？」

午前9時半過ぎ、部屋で出かける準備をしてリビングに出ると、そこにはまだ佐伯さんの姿はなし、僕はドア越しに声を投げかけた。女の子は支度に時間がかかるだろうと、これでもゆっくりしていたほうなのだが。

「今すぐ出るからー」

「急がなくていいですよ。前みたいに中途半端な格好で出てこないように」

「……」

「……」

「……もうちよっとかかるかもー」

「……」

出てくるつもりだったのか。慌てると案外周りが見えなくなる夕イブだな。

程なく。

「じゃーん。お待たせー」

現れた佐伯さんは、ゆったりとしたピンク色の長袖シャツに、ピンクと黒のツートンカラーの膝丈スカートといったスタイルだった。さらに下にいけば黒いハイソックス。背負った小さなリュックは、肩紐が長いので腰の辺りにある。

「かわいい？」

「いいと思いますよ」

「『かわ』はどこ行った、『かわ』は」

ジト目の佐伯さん。

「さあ？ 逃げたんじゃないですか？ それにしても君は衣装持ちですね。その服、初めて見ますよ」

佐伯さんと暮らしはじめて3ヶ月になるが、未だに遊びに行くたびに新しい服を見ている気がする。よくも次から次へと出てくるものだ。

「持ってきたのも多いんだけど、こっちにきてから買ったものもけ

「こつあるから」

そう言いながら彼女は戸締りやガスの元栓などを見て回る。僕がすでに見た後だが、これは僕を信用していないのではなく、こついったものはふたりの目で確認したほうがいいということを決まったやり方だった。

ひと通り確認が終わり、玄関に向かう。

「着道楽ですね。お金が大変でしょう」

「うん。そこが問題」

狭い廊下、僕の後ろで佐伯さんが苦笑する。

「でも、この性格も主戦場がベッドの上に移ったときに大活躍だと思つのですが如何か」

「知りませんよ、そんなこと」

僕に聞かれても困る。

スニーカーに足を突っ込み、先に玄関を出る。開けたドアを手で支えながら振り返れば、彼女も今日はスニーカーらしい。膝を曲げ、踵の辺りに指を差し込んで靴を履いている。着道楽な彼女は、当然のように靴も多い。スニーカーのほか、ブーツにローファー等々。

玄関に鍵をかけてから階段を下り、表に出た。

6月の下旬。今日は気温も湿度も高くはなく、過ごしやすい一日になりそうだ。きつとこれから加速度をつけて高温多湿な日本の夏へと近づいていくのだろう。

ひとまず駅に向かう。

中途半端な時間で人気のない住宅地を、佐伯さんと並んで歩く。

「服を買つって、駅前のショッピングセンターですか？ あそこ、そんなに店ありますか？」

学園都市のショッピングセンターには女の子受けしそうな服や雑貨の店もあるにはあるが、それほど多くはなかったと記憶している。「それもあるけど、時々学校の帰りにお京と一ノ宮まで行ったりするよ。ほら、高架下とか」

「ああ」

納得した。あそこは個人経営の店や小規模店舗がいくらでもあるし、昨日と今日でがらりと品揃えが変わっていることも珍しくない。「そのわりには君、遅く帰ってきたことありませんよね」

「うん。だって、弓月くんの晩ごはん作らなきゃだし。主婦はツライぜ」

「いったいいつから主婦になったんです？」

「4月からかな？ 気分的に」

まあ、確かにあれだけ家事をこなしていたら、十分に主婦だろうとは思う。

「ダンナ様っ」

いきなり佐伯さんが僕の腕に自分の腕をからませてきた。体を寄せてしなだれかかってくる。

「誰がですか。離してください」

「ちえ」

僕が慌てて腕を引き抜くと、佐伯さんは不満げに口を尖らせた。住宅地を出て、大きな道路に出た。それに沿って歩道を歩く。車道にはそれなりに車が通っていて、ようやく人のいる街の風景らしくなってきた。

「ところで、やっぱり今日も一ノ宮？」

「それが無難かと思っていますが、ダメですか？」

あそこはデパートも多ければ、衣と食の店の立ち並ぶストリートもあるのです、一日遊び回ることができる。

「うーん。最近ちよくちよく行ってるから、今日は別のところに行ってみたいかなあ」

「そうですね。なら、もう少し遠出してみますか」

僕は去年、水の森まで2時間近い時間をかけて通っていた。乗り継ぐ電車は3本。それぞれ大きなターミナル駅で乗り換えていたのだ、繁華街を渡り歩くようなかたちだった。なので多少なりとも馴染みのある繁華街がもうひとつある。まあ、一ノ宮とあまり変わらないような気もするが。

話はまとまって、駅へと辿り着いた。

「そうだ。今度いつか日曜日にも、朝ここに食べにきましようか」
僕は駅の改札口近くにあるパン屋を見、思いついて言ってみた。

この駅は小さな駅ビルになっていて、クリニックなどが入っている。このパン屋もそのひとつで、表からよく見える吹き抜けのところを構えている。2階に喫茶店のようなテーブル席があり、買ったパンを店内で食べられるようになっていたのだ。

「別にいいけど、どうして？」

「いえ、毎日朝食を作ってくれている主婦の方に、たまには楽をしてもらおうかと思ひまして」

「そんなの気にしなくていいのに」

佐伯さんはまんざらでもなさそうに苦笑してから、

「さすがわたしのダンナ様っ」

また腕にしがみついてきた。

「所有格をつけないでください」

「わたしの未来予想図はそうなっていますか？」

「今から可能性をせばめるのは感心しませんね」

つかまれた腕を引き抜く。

「弓月くんにも同じものが見えてくる見えてくる」

「……切符買ってきますので、待っていてください」

これ以上佐伯さんのペースに飲み込まれると形勢が不利になりそうなので、一旦離れることにしよう。

自動券売機で切符を2枚買い、改札口を通る。

学園都市を貫く電車は高架の上を走っているの、プラットホームも高い位置にある。僕はエスカレーターを使ってホーム上がった。上りと下りの線路が並んで走り、それをプラットホームが挟み込むかたち。当然、ホームは吹きさらしではなく、風除けがあつて、ドーム状の屋根がついているので、駅の外観はかまぼこのようだ。

一時間当たりの電車の数は日曜でもそれなりにあるが、まだくる様子はなかった。出たばかりなのかもしれない。

ややあつて先に向かいのホームに下りの電車が入ってきた。乗客を吐き出し、そして、また新しく乗せて出発する。と、

その電車が去った後のホームに、ひとり立ち止まっている人影があった。僕たちの真正面。さっきの電車から降りた人は皆階段へと向かっているし、では、乗り遅れた人だろうかと思つたが、すぐにそれが制服姿の宝龍美ゆきだと気がついた。きっと電車の中から僕たちのことが見えたのだろう。

彼女は親指を立てたまま、まっすぐこちらに人差し指を向けてきた。

それはピストル。

そして、

BANG!

微笑ひとつ残し、踵を返した。階段を下りて、その姿が見えなくなる。

「撃たれた……？」

「撃たれましたね」

「うん……」

呆然とする僕と佐伯さん。

程なくこちらのホームにも電車が入ってきた。

一度一ノ宮まで出て、別の私鉄へ。そこから特急で30分ほど揺られて、その駅へと着いた。

一ノ宮も大きな駅だが、こちらはさらに大きい。なにせ隣県に伸びる路線がいくつもあるのだ。ホームが10以上あるのだ。必ずどこかのホームに電車が止まっていて、ひっきりなしに何かしらのアナウンスが流れている。日曜日の今日は特に人が多く、旅行者、行楽客、家族連れ、スーツ姿の人　行き交う人も様々だ。

「これからどこに行くの？」

「そうですね……」

と考えつつも、改札口を出て正面にある下りのエスカレーターに乗る。下は待ち合わせのメッカ、巨大スクリーン前。どこに行くにしても、とりあえずここで間違いはない。

階下に着くと、僕は時間を確認した。11時を過ぎている。

「昼食には早いですね」

「でも、兄さん、店が混まないうちにすませておくのもひとつの手かと思われ」

「！？」

いきなり背後から聞こえてきた僕たち以外の声に驚き、僕と佐伯さんは勢いよく振り返る。

そこには表情の乏しい顔で、我が妹ゆーみが立っていた。

真っ黒なゴシッククロリータの衣装を身にまとい、長い黒髪を首筋をさらすようにしてアップにしている。結い上げた部分は爆発気味。少々パンクが入っているようだ。

「ゆーみがどうしてここにいるんですか」

「いつまでたっても前に進まない兄の背を押すため、何処でも何処でも現れるのが私の役目……」

ぼそつとゆーみ。

「は？」

「まあ、今のは冗談として、実際のところ家からここまで電車一本でこれるのだから、私がここにいて何人にナンパされるか実験しているのも不思議はないかと」

「十分不思議ですよ……」

前からつかみどころのない妹だと思っていたが、最近はそのことをしているのか。頭が痛くなってくるな。横では佐伯さんも、困ったような愛想笑いを浮かべている。

「じゃあ、行きましようか、兄さん」

「どこへですか？」

「オススメの美味しいランチの店」

ゆーみはさっそくスタスタと歩き出す。

「……」

話の展開についていけず、僕と佐伯さんが黙ってその背中を見つめていると、ゆーみは数歩歩いてからぴたりと足を止め、振り返った。目にはどこかしら非難の色。

「兄さんたちも行くの」

「……」

たぶんそうだろうとは思っていたが。

どつやらここにきてひとり増えてしまったようだ。

1(2)。「ここは無難に2番ですね」

佐伯さんとふたりで出かけたはずが、なぜか途中で妹のゆーみに捕まり、昼食をとろうと辿り着いた先は地下街のファーストフード店だった。

勿論、ゆーみオススメの美味しいランチの店がここだったわけではない。

「まさか5000円のコース料理の店に連れて行かれるとは思いませんでしたよ」

僕の妹はいつからそんなにセレブになったんだ？　うちは由緒ある庶民の家だったはずだ。

「ひとりでぜんぶ払おうと思うから無理なのであって、割り勘なら入れたのではないかと」

「僕は妹と割り勘するつもりはありません」
入った店で妹の分まで払えなくて何が兄か。

食事だけで終わりなら清水の舞台から飛び降りるつもりで3人分払っても別にかまわないのだが、この後にも予定はあるのだ。それを考えた上で全員分の食事代をもとうと思えばどうしてもランクダウンせざるを得ず、そうしたらゆーみはファーストフードでいいと言い出したのだ。何もここまで手軽にしなくてもいいと思うのだが、そんなわけで僕らは今、テーブル席でハンバーガを食べていた。

佐伯さんとゆーみは女の子らしく小さめのハンバーガのセットを。僕は中程度の大きさのセットに、もうひとつバーガーを追加してある。それでも食事の進行は僕のほうが早そうだった。

「わたしも自分で出すから、さっきのお店でもよかったのに」
横から佐伯さん。

「君も同じです。こんなときくらい僕がもちますよ」

「普段は？　毎日の食費も兄さんが出してるの？」

今度はまたゆーみだ。

「いいえ。買い物ものときはその場の雰囲気どちらかが。きつちり計算しているわけではありませんが、それほど偏ってもないと思いますよ」

と、そこまで話したとき、佐伯さんが啞然とした顔でこちらを見ているのに気がついた。

「どうかしましたか？」

「う、ううん。なんでもない」

彼女は両の掌をばたばたと振り、それから、ぎぎぎぎ……、とゆーみへと向き直った。

「……兄さん、わりと抜けてるから」

何も聞かれていないのに、ゆーみが答える。

えらく失礼なことを言われているな。まあ、自分でも時々うつかりしているとはあるが。かと言って、今そんなことを言われるほどのことをしただろうか。

程なく僕はあらかた食べ終わってしまった。残っているのはドリンクだけだ。

何となくまだもの足りない思いがあって、ゆーみのトレイの上にあるフライドポテトに手を伸ばした。

瞬間

、

かり

と小さな音。

「……」

「……」

「……ゆーみ」

僕が名を呼ぶと、彼女は光の薄い黒目だけを動かしてこちらを見た。

「離してください」

そして、獲物を噛んだままでうなずき、ようやく口を離した。

「間違えた」

「君はトレイに乗っているポテトを食べるとき、顔のほうを近づけるんですか」

間違えたというわりには、なかなか口を離してくれなかったな。あ、小指の下辺りに小さな歯型がついている。

ゆーみは、今度は僕の手ではなくハンバーガにかぶりついた。

「兄さんの手のほうが美味しい」

そんなわけあるか。

「あ、そうなんだ」

「佐伯さんも、僕の手を見るのはやめてください」

肉食動物に囲まれている気分だな。これが噂の肉食系というやつだろうか。

「じゃあ、私はこれで」

店を出るとゆーみが平坦な声で言った。

「もう帰るんですか？」

「うん。邪魔したら悪いから」

と、そこで一旦切り、

「もともと兄さんにおごらせて、一食分浮かせるのが目的だったから」

「君は兄を何だと思ってるんですか……」

しかし、呆れる僕を無視し、妹は佐伯さんのほうへ顔を向けた。

「後はよろしく」

「わかった」

「それから、こここの15番出口から出るとホテル街。日曜の夜はどの部屋も一律料金のサービスやっているとところもあるから、探してみるのもいいかも」

「ゆーみっ」

何を言い出すんだ。というか、なぜそんな情報を知っている？

兄として不安になるな。

「それもわかった」

「君も本気にしないように」

なんだろうな、このふたり。一緒にいるととてつもなくハードだと、ため息を吐いていると、またゆーみがこちらを見ているのに気がついた。

「何ですか？」

「兄さんはもつと家に帰ってくるべき」

その口調はどことなく拗ねているようにも聞こえた。

「わかりました。夏休みに入れば一度帰りますよ」

「……」

ゆーみは疑いの目でじつと僕を見る。

それからすつと一歩近寄ってきた。僕を見ていた視線は伏せられ、まるで彼女の黒髪が差し出されているような構図。そこでようやくゆーみが何を求めているかに思い至った。

「ちゃんと帰りますから」

僕はその頭を撫でてやった。

ゆーみはそれで満足したのか、さっきの巻き戻しみたいに一歩下がって、顔を上げた。

「……帰る」

その声はやつぱり平坦だった。

「気をつけて帰ってください」

「じゃあね」

僕の横で佐伯さんも小さく胸の前で手を振る。

ゆーみはこくりとうなずいてから踵を返し、駅の改札口方面へ歩いていった。僕と佐伯さんはその背中を見送る。

「いいなあ。わたしも撫でてほしいなあ」

「嫌ですよ。そんなことしたら君、妙なことになるでしょう」

「うん。弓月くんに髪さわってもらったら気持ちよくなる」

そのストリートなものの言いは何とかならないものか。

「そんなことより、これからどこか行きたいところがありますか？」

「んー？ そうだなあ……」

佐伯さんは辺りを見回す。

この辺は地下街でも駅の改札に近いところで、周りにはコンビニやブックストア、今まで僕らが入っていたファーストフード店などしかない。

「15番出口ってあつちかな？」

「だぶんそうだと思いますが、行きませんよ」

「残念」

まったく。ゆーみがよけいなことを言うから。

「ね、弓月くんはないの？ 行きたいところとか、オススメのスポットとか」

「そうですね……」

今度は僕が考え込む。

行きたい場所というのは特にないのだが、やりたいことは決まっている。だけど困ったことに、そのためにどこへ行けばいいかわからないのだ。

「君、何かほしいものはありますか？」

結局、僕は降参し、佐伯さんに尋ねた。

「ん？」

「誕生日ですよ。まだ少し先ですけど。ほしいものがあれば買いますよ」

こういうのはこっそり用意して、当日に渡すのがいいのだろうか、何を買えばいいのかどうにも思い浮かばない。

「ほんと？ いいの？ じゃあね……」

と、彼女はしばし思案顔。

「安くてもいいから指輪がいいな。それでついでに将来のダンナ様になることを約束してくれたら言うことなし」

「その辺の洋菓子屋でケーキでも買って帰りますか。君がぜんぶ食べればいいですよ」

「16の乙女の夢を無視するなっ」

直後、僕は佐伯さんから体当たりを喰らった。

その後、駅周辺のデパートを3件渡り歩いて、ようやく佐伯さんお気に入りのブランドの店舗を見つけ、その小物のコーナーで小さなペンダントを買った。

「こんなものでよかったですか？」

とは言っても、値段は四捨五入すれば1万円だ。それでも男の僕としては、あんなシンプルなデザインのもものが、そうしてこんな値段になるのか理解できない。ブランド名による付加価値だろうか。

「うん。夏になると薄着になって、首もとが寂しくなるから。こういうのがひとつほしかったんだ」

「そういうものですか」

僕としては懐に優しく何よりだが。店舗内に並ぶブラウスやスカートを指さされたらどうしようかとひやひやしたものだ。なにせ文字通り桁が違うのだから。

「それに、世の中、何をもらったかより誰にももらったかが重要なプレゼントってのがあるの」

まあ、喜んでもらえているならよしとしよう。

そのフロアのエスカレータまできたときだった。くるりと佐伯さんが僕のほうへと振り返る。

「ね、つけてよ」

ケースに入れてきれいに包装までされたそれを、両手で僕に差し出してきた。

「今ですか？」

「そう」

うなずき、自ら包装を外しはじめる。

包装紙とケースはひとまずエスカレータ横のベンチに置き、ペンダントを僕に手渡した。そうしてから佐伯さんは背を向け、あいた両手で髪をかき上げた。かたちのよい耳や、普段は隠れているほっそりとした首筋が妙に艶めかしくて、僕はどきりとした。

「耳、美味しそうだからって、ここじゃダメだからね」

「なにを莫迦なことを」

いいところをついてくる。僕は内心の動揺を隠しながら、佐伯さんの首にペンダントをかけた。

「似合う?」

彼女は髪を整え、こちらに向き直った。

「それじゃ見えませんよ」

ペンダントヘッドが服の中に隠れているので、見えるはずもない。辛うじて何かアクセサリをつけていることはわかるが。

「あ、そっか。じゃあ、これなら……」

「見せなくていいです」

シャツに指を引っかけて胸元を広げ、中を見せるようにして前屈みになるうとするから、僕は掌で額を叩いてやった。

時計を見れば、もう3時を回っていた。ここにくるまでに思った以上に時間を消費していたらしい。

「この後は? 弓月くん、何か考えてる?」

「いちおうは」

そして、わりと自信を持ってエスコートできる場所でもある。

「ひとつは、ここを出たビジネス街にあるカフェ。コーヒーが美味しいです。日曜だからすいてるでしょうね。もうひとつは、近くのビルの最上階に展望ラウンジがあるんです」

「あ、はいはい。展望ラウンジ? そこがいいです」

佐伯さんは即断即決だった。

展望ラウンジは、僕自身行ったことがないので、味のほうは保証できないが、まあ、そこは景色が補ってくれることだろう。

僕と佐伯さんはその展望ラウンジでティーブレイクをしてから、そのまま屋上の空中庭園へと上がった。

改めて景色を眺める。

高いところから見下しても、周りは高層ビルと、その合間を縫うようにして走る道路ばかり。典型的な都会の駅周辺の景観だ。もっ

と遅い時間なら夜景として楽しめたのだろうか。

「やー、遊んだ遊んだ」

隣にいた佐伯さんが両手を上げて体を伸ばす。

「もう終わったような言い方ですね」

「だって、家に帰るのにけっこう時間がかかるじゃない？」

確かに。電車に揺られるだけで、合わせて1時間近く。それに乗り換えと前後の徒歩の時間も加えれば、帰る頃には暗くなっているだろう。

「じゃあ、次は弓月くんが決める番。三択です。1番、夕飯もこのまま外食。2番、君の手料理が食べたい。3番、むしろ君が」

「ここは無難に2番ですね」

「人の話は最後まで聞きましょうって学校でおそわらなかった？」

佐伯さんは僕を睨む。

「聞く必要のある話はちゃんと聞きますよ」

人の話を遮って自分が喋ろうとするのは、日本人の会話によく見られる特徴なのだそうだ。

「ていうか、弓月くんとしては2番が無難なんだ」

「まあ、ね。今日のお返しに腕を振るってほしい、というところですよ」

「そこまで言うんなら仕方ないなあ。いつも弓月くんのためにがんばってるけど、今日はもつと特別」

言うてから、僕らは自然に笑顔で見つめ合った。

そうして、

「帰ろっか」

「そうですね」

人工物ばかりの街の景色に背を向けた。

佐伯さんが僕の腕に自分の腕をからませてくる。

「何ですか、これ」

「家に帰るまでがデートです」

「そんなの初めて聞きましたよ」

僕はその腕を振りほどかず、そのまま歩き出した。

2・「喜んでもらえて何よりです」

7月7日。

七夕。

それ以外にも何か特別な日だったようにも思っが、面倒なので思
い出さないことにする。やるべきことは前倒しでやってあるのだし。
それはおいておくとして。

7月に入ってはしまった期末考査も、残すところ今日と明日の2
日となった。

「弓月くん、七夕は何かお願いする？」

学校に向かいながら、佐伯さんはそんなことを訊いてくる。テス
ト期間中だというのに余裕だな。尤も、テストを話題にしようとし
ても、学年が違うから話が合わないのだが。

「いえ。特に何も」

「ロマンがないなあ」

呆れられてしまった。

別段リアリストでもないつもりだが、高校生になってまで「星に
願いを」もないだろう。

「まあ、年に一度のことですからね。せっかくなので『かわいい女
の子と出会えますように』とでもお願いしておきましょうか」

「それはそれでムカつくんですけど」

彼女は歩きながら僕を睨んでくる。

「そういう君は何かあるんですか？」

「あつたけど変更。『どこかの誰かさんがわたしの魅力に気がつき
ますように』って書くのが先みたいっ」

そう言つと佐伯さんはローファアを踏み鳴らし、乱暴な足取りで
先に行ってしまった。僕も歩調を速め、後を追いかける。

次に並んだのは、横断歩道の手前だった。

ちょうど信号が青だったので、佐伯さんと肩を並べて渡る。ここ

からは学園都市の駅と学校を結ぶ道。周りには水の森の生徒ばかりなので、迂闊な話ではできなくなる。最近では弓月恭嗣と佐伯貴理華の仲がいいという話も浸透してきてしまったので、そういう意味でも注意が必要だ。

人に聞かれても支障のない会話をしつつ学校に着き、昇降口でそれぞれの下駄箱に別れた。僕は取り出した上靴を床に落とし、足を突っ込む。

そして、革靴を拾い上げようと屈んだときだった。

「弓月さーんっ」

そんな声とともに誰かが背中にのしかかってきた。この声は佐伯さんのクラスメイト、桜井さんだろう。

「こっそりキリカと仲良くなつてたなんて、許せなーい」

「別にこそこそしていたつもりはないですけどね。……それより降りてください」

靴を拾おうと腰を曲げた状態のところ、背中に覆いかぶさるようになして乗られているので、起きるに起きられない。別におかまひなしに起き上がってもいいのだが、落ちたりしないか心配だ。あと、背中にやわらかい感触があつて非常に困る。案外こつこつというのは指摘しにくいものだ。

「ダメです。キリカとつき合ってるのか白状するまで降りません。

どうなんですか？」

「さて、どうなんでしょうね……」

と、曖昧に答えを返す。

その返答では納得いかないのか、桜井さんは「うー」と不満げにうなり声をこぼした。それはいいから早く降りてほしいものだ。

と思っていたら、そこによくやく助けが現れた。

「おー京ー」

この地の底から聞こえてくるような声は佐伯さんだ。

雰囲気から察するに、ずんずんとこちらに歩み寄ってきて、桜井さんに飛びかかった模様。横へ滑り落ちるようにして、僕の背から

重みが消えた。

上体を起こすと、佐伯さんが桜井さんのちよつと癖つ毛の茶髪を抱え込むようにヘッドロックしていた。

「お京はっ、どうしてっ、いつもっ、弓月くんにつ！」

「きゃー。ちょ、キリカツ。やめ……」

「許さーん」

結局、そのままの状態、ふたりして走って廊下の先に消えてしまった。元気だな、というか、運動能力高いな。

僕は革靴を下駄箱に片づけ、校舎の廊下部分に踏み入った。

「ところで、そこで見つからないように気配を消して通り過ぎようとしているのは浜中君ではありませんか？」

「うぐっ」

僕が声をかけると、彼はびくつと体を跳ねさせた。

少し背の低い中性的な容姿の男子生徒は、これまた佐伯さんのクラスメイトの浜中君だった。

「な、なんだよ。何か用かよ……」

「ただの朝の挨拶ですよ。それにしても『うぐっ』とは愉快的な返事ですね」

「……ふん」

浜中君は鼻を鳴らして、そっぽを向いてしまった。

「何か怯えてるみたいに見えますが、どうかしたんですか？」

「う、うるさいな。誰のせいだよ」

「あれ、もしかして僕のせいですか？ ……ああ」

と、今思い出した振りをする。

先日の子生食堂の前での一件だ。少々看過できない態度があったものだから、こちらも少しキレさせてもらったのだった。

「あれは、ほら、あのとき直前に君と二面性の話をしていただけでしょう？ だから、僕もその実践を試みたんですよ」

「なあんだ、そうだったんですか」

あっはっはっ、と笑う浜中君。

せつかなので僕も一緒に笑ってやった。

「って、それじゃ別に演技でも何でもなくて、ただのマジギレじゃんかよ！」

さすがにすぐに気づいたらしい。うつすら涙目だ。

「……もうやだ、この先パイ」

そうして彼は疲れたようにがっくり頂垂れ、重い足取りで去っていった。面白い子だ。

と、まあ、そんな七夕の朝の風景だった。

本日のテストは2科目。

どの程度できたかとか自信とかはさておき。

ふたつの試験が終わり、テスト期間中で特に連絡事項のない終礼を終えても、時間は10時45分。

僕は教室を見回し、雀さんを捜した。

皆それぞれに教室を出ていく中、彼女だけはまだ帰る支度をしている最中だった。真面目なのだ。普通の生徒が終礼で先生の話聞きながら帰り支度をしているのに対し、雀さんは手を止めて手帳まで用意して聞いている。だからいつも周りより遅くなってしまう。

「雀さん」

「……なに？」

彼女に近づき声をかけると、なぜか低い声の返事とともに睨まれてしまった。

「僕、雀さんを怒らせるようなことしましたかね？」

「してないわよ、私には。でも、宝龍さんを振ったでしょ」

「まだというか、またというか、その件で責められるわけですね。僕はため息を吐いた。」

どうやら宝龍さんが雀さんに言ったらしいのだ、『恭嗣に振られた』と。雀さんは何かと気にかけてくれたというか、単に自分の希望を押しつけていただけのようにも思うが。なので、ことの結末を報せておくのは当然なのだろう。しかし、何かいろいろと

語弊があるような気がしてならない。

「不誠実な態度を取り続けるよりはましでしょう?」

「それはそうだけど……」

何よりも誠実さを尊ぶ彼女は、しぶしぶうなずく。

「じゃあ、宝龍さんはどうするのよ? 弓月君くらいしか釣り合い
そんな人いないじゃない」

「滝沢なんてどうですか?」

彼なら学力優秀だし、宝龍美ゆきに比肩し得る容姿をしている。

美男美女のカップルのでき上がりだ。

「ダ、ダメよ、滝沢さんはっ」

が、しかし、僕の提案は間髪入れず却下された。

「滝沢さんはクラス委員で忙しいし、それに、ほら、本人にその気
がないとっ」

僕の意思をまったく聞かず、宝龍さんとくつつけようとしていた
人の台詞とは思えない。

「そ、それより私に何か用なの?」

話を逸らすようにして雀さんは話題を変えた。

「ああ、そうでした。もしよかったら僕と一緒にケーキでも食べに
行きませんか?」

「……」

目が点になる雀さん。

それからおもむろに、深々とため息を吐いて脱力した。

「弓月君はもう少し誠実な人だと思ってたのだけど。期待した私が
間違ってたみたい」

そして、疲れたような足取りで去っていく。

彼女が教室を出ていく辺りになってようやく、今のは言葉の選択
を誤ったなと思った。

「なあに、もうかわいい彼女から乗り換えるの?」

雀さんと入れ違いに現れたのは宝龍さんだった。

「ナツコはやめておきなさい。あの子の性格じゃ恭嗣の息が詰まる

わ。乗り換えるなら私にしておきなさい」

「違いますって」

よくも、まあ、そんなことを自信満々に言えるものだ。

「それで、何を話してたの？」

彼女は問う。こうなったら白状するしかないだろう。

「実は今日、佐伯さんの誕生日なんですよ。なのでケーキでも買って帰ろうかと思っっているのですが、さすがに男ひとりでは行きにくいので……」

「それなら最初から私に言いなさい」

呆れた様子の宝龍さん。

確かにそうなのだが、どうやら僕は彼女を振ったらしいので、その手の頼みごとはしにくかったのだ。

「いいわ。つき合っただけあげるわ」

「そうですか。助かります」

選ぶときに一緒にいてくれるだけでいいです、と言おうとしたのだが、

「気にしないでいいわよ。その代わりにケーキセット奢ってもらおうから」

「……ま、そんなことだろうと思ってましたよ」

本当に学園都市の駅前の喫茶店で宝龍さんにケーキセットを奢らされ、家に帰ってきたのは12時ジャスト。

「ただいま」

と、リビングに這入る。

「あ、弓月くん、おかえりー」

昼食の準備をしていたらしく、その声はキッチンの側から聞こえてきた。

現れた佐伯さんは、デニム地のショートパンツにタンクトップという、すでに夏の出でたち。頭にはヘアバンドが巻かれていて、髪が少々パンクだ。

「君、その前のホックくらい止めたらどうですか？」

体にフィットしたショートパンツの前のホックが外されていて、どきつとする。実際、何やら白い布地が見えていて、目に毒だ。

「ああ、これ？ これだったら見られても大丈夫」

「そういう種類のものですか？」

世の中、開放的なファッションのための、見せたり見られたりを前提にしたものもあるらしい。きつとその類のものなのだろう。

「今日はちゃんと大人っぽいのだから、見られても恥ずかしくありませんっ」

「……」

ぜんぜん大丈夫じゃなかった。

なぜかぐつと拳を握り締めている佐伯さん。何をもって恥ずかしいとするかは人それぞれのようだ。

「それより、遅かったね」

「ちよつと寄り道をしていたもので」

僕がそう言うと、佐伯さんは「ん？」と首をかしげた。しばし考え、

「……宝龍さん？」

「なんでわかるんですかっ」

「あ、や、ちよつとカマかけてみただけなんだけどね」

見事に大当たりだったせいか、彼女は苦笑する。

「宝龍さんにはこれを買うのにつき合ってもらっていただけです」

僕は紙製の白い小さな箱を示した。中にはショートケーキがふたつと保冷剤が入っている。

「これは後で食べるとして、先にお昼にしましょう」

「うん。今日はスパゲッティのミートソースだよ」

まだまだ期末考査中なので、食後は勉強。ケーキはこれが一段落した3時過ぎに食べることになった。

僕がキッチンでコーヒーを入れ、間、佐伯さんはリビングでケー

キを皿に移す。深いグラスにアイスコーヒーをふたつ入れてリビングに帰ってくると、ケーキを用意し終えた佐伯さんが待ち切れない様子で座っていた。

ケーキはシンプルなショートケーキ。上にイチゴとキウイが乗っていて、小さな三角形のチョコも刺さっている。

いただきます、と、それぞれフォークを突き刺し、切ったケーキを口に運ぶ。

「おお、美味しい」

「喜んでもらえて何よりです」

宝龍さんにケーキセットを奢らされた甲斐があつたというものだ。素朴な味を堪能しながら食べていると、佐伯さんがじっと僕の手元を見ているのに気がついた。

「弓月くんの、美味しそう」

「同じものですが？」

あつちも食べたいこつちも食べたいとなっても困るので、同じものをふたつ買ってきたのだ。

「ひと口ちょうだい。あーん……」

口を開いて身を乗り出してくる佐伯さん。

「君、さてはこれがやりたいだけですな」

「いいの。……あーん」

再度、口を開ける。

やれやれ、面倒な子だ。僕は仕方なくケーキをフォークで切り取り、彼女の口に運ぶ。

ふと、

「雛にエサをあげている親鳥の気分ですね」

「……美味しいと一部で絶賛の弓月くんの手、本当にかじるぞ」
半眼ジト目で睨む佐伯さん。

改めて彼女にケーキを食べさせてやった。

「うん。美味しいし、恋人っぽい」

「……それは何よりです」

大満足の佐伯さんに対し、なんとなく投げやりな気持ちの僕だった。

「そう言えば、まだ言ってませんでしたね」
「なに？」

「誕生日おめでとついでいます」

「うん。ありがとう」

彼女は嬉しそうに笑った。

考えてみれば、しばらくは同い年なんだな。

まあ、だから何だというわけでもなく、たいした意味はないのだが ふと、そう思っただけ。

3・「責任!？」

1学期の期末考査が終わった。

学校によつては翌日から休みになつて、後は終業式の日成績表を受け取るだけのところもあるようだが、私立水の森高校では残念ながらそんなことはない。ちゃんと授業が行われる。

答案が返つてきて解説もしてもらえるのはありがたいのだが、夏休みが目の前に迫つた授業というのはどうにも身が入らない。

そう思つて先生の話テキストに聞き流してしまいたくなるが、それは大きな間違いだ。テストが終わつたその瞬間から、次のテストのはじまりなのだから。今やっている授業は、すでに次のテスト範囲なのだ。

「だから君も、この時期の授業を疎かにしてはいけませんよ。浜中君」

「……なんで先輩にそんなこと言われなくちゃいけないんだよ」
かわいい後輩、浜中君は心底嫌そうに言ってくれた。

今朝、珍しく佐伯さんと別々に登校したところ、昇降口でばつたり彼と会い、今こうして並んで歩いている。

「先輩だからですよ。忠告です」

「はいはい。ありがたく聞いておきますよ。……で、それつて実体験ですか？」

「よくわかりましたね」

1年生の1学期はあまり深く考えず、テストが終わつてひと安心していたのと、間もなく訪れる夏休みに思いを馳せていた。2学期は1学期の失敗もすっかり忘れて、冬休みに入るまでの間、授業を受ける振りをしながら原付の免許を取るための勉強をしていた。どちらも休み明けにえらい目に遭つたものだ。

「……それ。人に言う前に、自分に戒めたらどうですか？」

確かにそうだ。

おもむろに浜中君が盛大にため息を吐いた。

「最近やたら先輩と遭遇してる気がするんですけど、ストーカか何かですか？」

あまり関わり合いたくないんですけど、僕 と、浜中君はつけ加える。嫌われたものだ。

「気のせいじゃないですか」

それか単に登校時間が近いだけか。僕はここ最近、毎朝似たような時間に家を出るし、電車通学の彼も毎日同じ電車に乗っているのだらう。だから遭遇率もおのずと高くなる。

「おや、あそこにいるのは佐伯さん」

「!?!」

「と思つたら見間違いでした」

「張つ倒すぞっ！」

浜中君は声を抑えながら怒鳴るといふ器用な技を披露してくれた。

「怖いですね。慕われる先輩になろうと努力しているのに」

「……明らかに真逆を突き進んでますから、早く気づいてください」
そこで階段に差しかかった。僕はいつもこの階段を使う。彼も教室は上の階だが、きつとこれ以上一緒にいたくないだらうから、向こうの階段で上がることだらう。ここで別れるのが無難か。

「では、お互い今日も勉学に励むことにしましょう」

「……ふん」

彼は鼻を鳴らしてそっぽを向き、そのまま廊下を真っ直ぐ進んでいった。

浜中君に言った通り、今日も学生の本分たる勉強に勤しむ。

ただ、この時期の授業はちゃんと聞いていない生徒も多いと理解している先生もいて、これまでの復習や雑談に費やされることもある。そういう授業は受けるほうとしても気が楽だ。

そして、放課後。

本日の滝沢は珍しく何の用事もないらしく、一緒に駅前をぶらぶ

らしようということに決まっていた。矢神と宝龍さんは例によって文芸部の部活らしい。

帰り支度を整え、滝沢の席に向かう。

と、そこには先客、雀さんがいた。たぶん一緒に帰ろうと声をかけていたのだろう。彼女のことだから、クラス委員がどうか決めておくことがこうとか、そういう名目を持ち出したに違いない。

これは弱ったな、と頭を掻きつつもゆっくり足を前に進めていると、滝沢がこちらに気がついた。

「帰るか。こっちはもう出られる」

そう言う彼の後ろでは雀さんが目を吊り上げて睨んでいた。邪魔ものを見る目だ。

「彼女も一緒なんだが、いいか？」

「え、ええ……」

雀さんがものすごく何か言いたげな目でこちらを見ていたが、すみません、咄嗟に断る理由を思いつきませんでした。

男子2、女子1の構成で昇降口を出る。外は少しばかり怪しい空模様だった。

「降りそうね……」

「カラ梅雨で油断していましたが、もしかしたら夕立がくるかもしれませんね」

今年は梅雨らしくない梅雨だったように思う。その分の帳尻合わせが今になってきたのだろうか。

そこで僕は閃く。

「滝沢、悪いですが、今日は真っ直ぐ帰ることにしますよ。傘も持ってきていないので、降られると厄介です」

これなら雀さんも怒りをおさめてくれることだろう。尤も、僕が何か悪いことをしたわけではないが。

「そうか。なら仕方ないな。またの機会にしよう」

滝沢も特に気を悪くした様子はなく、そして、僕は彼の見えないところで雀さんに尻を叩かれていた。たぶん、よくやったと褒めて

くれているのだろうが、尻を叩くのはやめてほしい。

校門をくぐり、学校の敷地を出る。

「そうだ、弓月。昨日お前の妹から電話があったぞ」

よりにもよってそんな話題をチョイスしますか、滝沢は。彼を挟んだ僕の反対側では、雀さんがわずかによるめいていた。

「すみません、ご迷惑をおかけしています。……それで、何の話でした？」

「夏休みにどこか遊びに連れていけだ」と

苦笑する滝沢。雀さんの足が思わず止まる。しかし、僕らが3歩歩く間に持ち直し、すぐに追いついてきた。

「ゆ、弓月君の妹さんってかわいいんですか？」

「そうでもないですよ」

敬語だったので滝沢に問いかけたものだろうが、ここは身内として口を挟ませてもらう。

「そうか？」

しかし、滝沢はそれに異を唱えた。

「お前は兄妹だからそうは思わないのかもしれないが、俺は悪くないと思うぞ？ 周りの男がほつとかないんじゃないか」

「そうですね？ でも、突飛なファッションしてますよ」

「突飛って？」

と、向こう側から雀さん。

「まあ、いわゆるゴシッククローターってやつですよ」

しかも、わざわざ制服のない高校を選んでまで学校に着てくのだから、無類のゴスロリ少女である。

雀さんは何やら考えている様子。性格が真面目だから、ああいう奇抜に見えるファッションを着る人間の心理をはかりかねているのだろう。少なくとも、自分も挑戦してみようかと考えているわけではないだろう。

「そ、それで、滝沢さんはなんて返事をしたんですか？」

話が本筋に戻される。

「うん？ 当然、別にかまわないと言っておいた。今でも月に一回くらいつき合わされているんでね」

直後、ぎん、と僕を睨む雀さん。こちらに文句を言われても困るのだが。

思い返せば、きつかけは去年、滝沢を家に招いたとき。そこでゆーみは滝沢を気に入ったようだ。以来、僕の知らないところでちよくちよく会っているらしい。失礼なことを言ったりやったりしていなければいいが。

交差点に差しかかった。

「滝沢、僕はここで」

「そうか。じゃあ、また明日」

「ええ。……雀さんも、後はがんばってください」

「な、何をよっ」

彼女は顔を真っ赤にして、声を荒らげた。さて、何をだろうな。

滝沢はなかなかの難物のようなので、はたして雀さんの頑張りが報われるかどうか。

僕は横断歩道を渡り、ふたりと別れた。

家に着く頃には、空模様がいよいよ怪しくなってきた。今にも降り出しそうだ。

佐伯さんはまだ帰ってきていないらしく、僕は自分の鍵を使って玄関を開ける。

リビングは曇り空のせいで暗い。照明を点けてから自室に入ると、直後、ついに降り出した。地面を叩く雨音が一気に最大ボリュームになる。かなり強い雨足。典型的な夕立だ。佐伯さんは傘を持っているだろうか。

それから約10分後、僕がリビングで新聞の夕刊に目を通していると、玄関の方でドアの開く音が聞こえた。

「ただいまー」

聞き慣れた佐伯さんの声。

「弓月くん、弓月くん」

ところが、一向に入ってくる様子はなく、代わりに僕を呼ぶばかり。仕方なく腰を上げ、玄関に行ってみた。

「妖怪濡れ女」

そこには全身ずぶ濡れで、前髪をべつとり顔に貼りつかせた佐伯さんが立っていた。やはり傘は持っていいなかったらしい。

「なに莫迦なことをしているんです」

「でも、さすがにこれじゃ入れないし」

確かにそうだ。家の中が水浸しになる。

「待っていてください。タオルを持ってきます」

僕はそばにある洗面所からタオルを一枚取ってきて、投げて渡した。彼女はすぐに顔と髪を拭きはじめる。

「すごい雨だよ。見て、ブラまでスケスケ」

「いちいち言わなくていいです」

確かにブラウスが体に貼りついていて、胸の豊かなふくらみと、凝ったレースの意匠が透けて見えている。今日は薄いブルーらしい。

「ガスを点けますから、そのまま風呂に入ってください。体も冷えてるでしょう」

「わかった。そうする」

僕はこれ以上佐伯さんを見ないようにして、リビングへと戻った。

それからたつぷり30分は経った頃、佐伯さんが風呂から上がった。来た。

「やー、あつたまつたー」

「それはよか」

言いかけた僕の言葉が途切れる。

佐伯さんはバスタオル一枚を体に巻いただけの姿だった。くつきりと浮き出た体のラインや乾き切っていない髪、湯上りの上気した肌が艶めかしい。

「またそんな格好で。あれほど着替えを」

「すぐに入れてって言ったのは弓月くんだったと思うけどなー？」

彼女は勝ち誇ったような顔でにんまり笑う。確かにそうだ。

「どう？ 色つばい？ えろい？」

「知りませんよ、そんなこと」

わざわざ佐伯さんが胸を腕で押し上げて強調し、前屈みにポーズをとるものだから、僕は体ごとテレビに向き直った。

「もうっ」

佐伯さんが足を踏み鳴らす。

「照れる弓月くんを見るのも面白いけど、少しくらい見てくれないと寂しいんですけど」

きつと彼女は頬を膨らませていることだろう。

しかし、そんなことを言われてもこちらだって困る。僕は佐伯さんの玩具ではないし、そんな姿でそばに立たれて冷静に観察できるほど神経図太くもない。

そのときだった。

「あ」

佐伯さんの小さな声。

思わず僕がそちらを向いたとき、
するり

と、彼女の体からバスタオルが滑る、まさしくその瞬間だった。

直後の佐伯さんの動きは、驚嘆に値する速さだった。バスタオルが滑り落ちてしまうよりも早くそれを掴み、再び体を隠す。おかげであられない姿を晒すことは間一髪避けられた。

が、

それでも僕は一瞬だけ露になった、たぶん同い年の女の子よりも幾分か豊かかたちのよい、彼女の胸を見てしまっていた。

「……」

「……」

時間が止まったかのような沈黙がリビングを支配する。

テレビから聞こえてくるニュース番組の音声だけが音らしい音だ

った。夕立はいつの間にかやんでいたようだ。

佐伯さんは顔を赤らめて視線を外した。

いつもと違う反応に戸惑う。いつもみたいにけるっとしていくれたら、僕も気が楽だったのだが。……いや、当然か。さすがにこの重大さが違う。

「う、ごめん……」

言ったのは佐伯さんだった。あろうことが謝られてしまった。

「き、着替えてくるねっ」

そして、裸足の足をぱたぱた鳴らしながら、部屋へ入っていった。リビングに僕ひとりが残された。

佐伯さんの姿が完全に消え、数拍おいてから、脱力したように座椅子の背もたれに体重を預けた。

まいった。

なんてことだ。

思わず天井を仰ぎ見る。

予想外のハプニング。

対処不能。

この後どうすればいいんだ？　どんな顔をして佐伯さんを見ればいい？

まったく解答が浮かばないまま堂々巡りみたいな思考をどれくらい続けていたのだろう、不意に聞こえたドアの開く小さな音で僕ははっと我に返った。

佐伯さんが様子を伺うようにして、そろりと部屋から出てきた。

タンクトップにショートパンツと、いつもの部屋着に着替えている。目が合うと彼女は恥ずかしそうに顔を逸らした。こちらもあまりにもばつが悪く、再びテレビに向き直った。

ところが、だ。

佐伯さんはテーブルを迂回して、僕のそばまでやってきたのだ。

「どうかした」

その言葉が終わらないうちに、彼女は僕の足の上に腰を下ろした。

「ちょ、なんでこんなときに……！」

「大事な話があります」

大事な話があるよこの体勢になるのか。知らなかったな。

「……なんでしよう？」

「……見た？」

直球、だった。

「……」

「……」

再度沈黙。

ここで見てませんと言つても、説得力は皆無だろうな。だったらあのとときの気まずい空気はなんだったんだ、という話になる。

「……見ました」

結局、正直に言うほかなかった。

「いや、でも、一瞬だったから、あまりよく見えていませんよ。たぶんすぐに忘れるんじゃないかと……」

よく言う。しっかり目に焼きついているくせに。

「……でも、見た」

「う……、ま、まあ……」

ふくれっ面で睨んでくる佐伯さんに圧倒され、僕は言葉を詰まらせる。

「責任とって」

「せ、責任!？」

責任ときたか。

しかし、よくよく考えれば、僕が積極的に何かしたわけではなく、むしろ佐伯さんが勝手に自爆しただけのよう思う。とは言え、それを言ってしまうはおしまいだ。男らしいとは言えない。

「えっと、どうすればいいですか……」

「こうする」

次の瞬間、彼女の顔が近寄ってきて、唇と唇が触れ合った。

重ねるだけの、悪ふざけみたいなキス。

それでも十分に衝撃的だ。

「しっちゃた」

唇を離すと彼女は、はにかみながらそんなことを言った。

「今日はこれで許してあげる」

「い、いや、許すも何も……」

しかし、僕の反論は甘い衝撃に酔ったように、まったくかたちに
ならなかった。

4 (1) . 「いえ、彼と」

もう初夏と呼ぶような時期も過ぎ、1学期の終業式へのカウントダウンもはじまった7月の中旬。

朝。

ドアを叩くりズミカルなノックの音は、半ば眠りの淵にいる僕の意識をもノックした。ベッドの上でタオルケット1枚にくるまったまま、それを聞いた。

続けてドアが開けられ、佐伯さんが入ってきた。

「モーニンツ。朝だよ、弓月くん。起きて」

ぎし、とスプリングが軋んだのは、彼女がベッドの上に手をついたからだ。上から顔を覗き込まれている。

僕はなかなか意識がはつきりせず、逃げるようにして壁に向かって寝返りを打った。

「むー……」

僕が起きないせいか、佐伯さんは不満そうになった。

そして、

「起きないやつには、こうだっ」

頬にやわらかいものが触れた。

「~~~~っ!?!?」

無論、僕は飛び起きた。

「なんて起こし方をするんですか、君は」

眠気など一瞬で吹き飛び、起床した後は朝食。登校の用意をすませて家を出て 道々説教する。

「起きないほうが悪いと思う」

「僕は君ほど朝からテンション高くないんです」

ハイテンションというよりはハイパーテンションか。いや、寝起きのよさと血圧は関係ないという話だったな。

「じゃあ、君は起きない人間全員にそんなことをするつもりですか」
「まさか」

佐伯さんは即答する。

「でしよう?」

「弓月くんだけに決まってるじゃない」

「……」

そんなにはつきり言われると、こちらとしても困る。

「別にいいと思うけどなあ。もう一度しちゃったんだし」

「……」

そして、ますます反応に困る。何より、あのと看見た決定的瞬間の佐伯さんの姿を思い出してしまつてマズい。

「どうせなら、ここでもう一回する?」

そう言つと彼女は僕の前に回り込み、目を閉じて尖らせた口を突き出してきた。

僕も思わず立ち止まつてしまふ。

「……」

「……」

何が嫌かつて、考えてしまつた自分がいちばん嫌だ。

僕は一度、辺りを見た。

まだ住宅地を抜けておらず、中途半端な時間ともあつて人気はない。
い。

それを確認すると、両手を佐伯さんの肩に置いた。左手は制鞆の取っ手を持っているので、少し添える程度。

そうしてから、

「何を莫迦なことを言つてるんですか」

くるりと彼女の体の向きを変えてやる。

「ほら、行きますよ」

「はあーい」

その背を押し、進むよう促した。

昼休み、

持ってきた弁当を食べ終えてそのまま席で話をしていた僕と矢神の間に、音もなく2本の缶コーヒーが置かれた。

「あげるわ」

器用に片手で2本持っていたその長くしなやかな指と、やや硬質な声の主は宝龍美ゆきだった。

「あ、ありがとう……」

素直に礼を言う矢神。こういうものは裏に何かあるかを疑うべきだと思っただけがな。

「で、何をお望みで？」

「恭嗣は私につき合って」

「なるほど」

要するにこれは、つき合わせる僕と僕を借りていく矢神への、それぞれに対する迷惑料というわけか。

「返品した上でお断りは？」

「効くと思って？ 私は3本も飲めないわ」

見れば彼女も自分の分の缶コーヒーを持っていた。選択の余地なしとは、なんとも詐欺くさい。

「仕方ありませんね。矢神、ちょっと行ってきます」

僕はそう断って、宝龍さんとともに教室を出た。

空調が効いているのは教室中だけなので、一步外に出るとむっとした空気が体を撫でてくる。それでも廊下を行き交う生徒は多く、昼休み特有の喧騒が満ちていた。

「いつもの場所ですか？」

「ええ」

つまり屋上だ。廊下がこの調子だと、屋上はさぞかし暑いことだろう。いや、風があつて意外と涼しいのかもしれないな。

「何か話でも？」

「別に。ただ恭嗣と並んでコーヒーが飲みたかっただけよ」

宝龍さんはあっさりとそう言った。たったそれだけの理由で人を

連れ出せるのは、校内広しと言えども彼女くらいなものだろう。

僕たちは階段を上がり、3階を目指す。

「それで、どうなの？　彼女とは少しは進んだの？」

「……何ですか、やぶからぼうに」

不意の問いにどきっとしてしまった。

「そう？　恭嗣は私ではなくあの子を選んだ。その後どうなったか気になるのは当然じゃないかしら？」

「僕は別に誰かを選んだつもりはありませんけどね」

「あと」

宝龍さんは僕の言葉を遮るようにして続けた。

「最初の問いに対する反応が遅かったわ。これは本当に何かあったってことかしらね」

「……ただ単に唐突な質問に面喰らっただけですよ」

また遅れたが、あまり気にしすぎると泥沼にはまりそうだ。

3階に着く。佐伯さんたち1年生のクラスがある階だ。と言っても、今はここに用はなく、さらにもうひとつ上へと向かう。

「あ、弓月さん」

一段目に足をかけたところで、名前を呼ばれた。ちょっと癖っ毛な茶髪の女の子は佐伯さんのクラスメイト、桜井さんだ。こちらにちょこちょこ走ってくる、僕のすぐそばに立った。相変わらず距離が近い。背中に手が回せそうだ。

「こんにちは」

「こんにちは。今日は桜井さんひとりですか？」

校内ではたいい佐伯さんとふたりでワンセットなので、彼女ひとりだと違和感を感じる。前に桜井さんだけだったときは、佐伯さんが保健室に行ったときだったな　　思い出して、わずかに不安を覚えた。

「それが、浜中君が大事な話があるからって、キリ力を連れていっちゃったんですね」

「……」

不安は的中、か？ いや、彼は基本的に人畜無害な男だ。危険はないはずだ。

「どこに行ったかわかりますか？」

「えっと、実は……」

僕を見上げていた桜井さんの視線が、さらに上へ向かう。それは僕の背後であり、つまり

「この上、ですか？」

「はい」

僕は振り返り、階段を見上げた。この上は屋上。だが、鍵がかかっ
つていて出ることにはできない。行き止まりではあるが、密談にはも
つてこいと言える。きつと話は階段の途中でしているのだろう。

さてさて、いったいどんな話をしているのだろうな。気になりは
しても、立ち聞きするつもりはない。僕は宝龍さんを見た。

「そうね。場所を変えましょうか」

彼女はこちらが何か言うよりも先にそう言った。

そうしてきた道を戻ろうとしたときだった。

「あ、あのさ」

上から声が聞こえてきた。聞き覚えがある。浜中君のものだ。あ
まり上のほうまでは行っていなかったらしい。踊り場を超えたすぐ
くらいのところだろうか。

それをきっかけに、こちらの3人の動きが止まった。

「僕、今まで女の子にこういうこと言おうと思ったことはないんだ
けど」

声の色は初めて会ったときの、かわいい後輩としてのもの。勇気
を振り絞って、といった調子で話を切り出そうとする。どんなふう
に続くか、だいたい予想がつかない。と思っていいたら、佐伯さんが
それを遮った。

「そう。じゃあ、言わなくてもいいんじゃない？ わたしも聞くつ
もりはないし」

その声は僕が聞いたことのない、冷たいものだった。

「浜中君って、話していると時々弓月くんの悪口混ぜてくるわよね」
「え？」

「弓月くんが前に誰とつき合っていて振って別れたとか、今でも仲がよくてふたまたかけそうとか」

「そんなことを言っていたのか。」

「キレたら案外すぐに暴力を振るうタイプだとか」

「……そんなことを言っていたのか。」

「さり気なく吹き込もうとしてるのかしら？」

「い、いや、誤解だって。それは……」

「先に言っておくわね。そういう姑息なことをする人って、わたし、好きになれないの。じゃあね」

佐伯さんはばっさり斬って捨てた。浜中君の話とやらは本当に聞く気がないらしく、もう下りてくるようだ。僕たちは逃げるようにして、見つからない位置まで2階への階段を下りた。

足音が上から降りてきて、そして、遠ざかっていった。

3人階段の手すりに背を貼りつかせるようにして立ち　無言。

間の抜けた構図だ。たまたま通りかかった生徒が、こちらをちらちら見ながら行き過ぎていった。

「……少し話をしてきます」

しばらくしてその沈黙をやぶったのは僕。

「彼女と？」

「いえ、彼と」

確かまだ浜中君は降りてきていないはずだ。

「すみません、宝龍さん。コーヒーはまた今度つき合いますよ」

僕は屋上へ続く階段を上がった。

そこで僕と浜中君の間に交わされた会話については省略することにする。語り部の『語らない権利』とでもしておこうか。ミステリ小説ではないのだから、フェアアンフェアの論争になることはあるまい。

いちおう言っておくと、わりと大事な話だ。

「先輩ってやっぱり嫌なやつですよね」

僕の話が終わった後、彼はそんな感想をもらした。

「わざわざ僕にとどめを刺しにくるなんて」

「人聞きの悪いことを言いますね。ただ単に自分でも言っておかないと格好がつかないと思っただけですよ」

女の子にけりをつけてもらうというのも情けない話だ。

「そういうわけですので」

「はいはい。言われなくても、もう佐伯さんには手は出しませんよ。僕の株も大暴落してたみたいだし、割って入る隙もないしさ」

「潔くて助かります。君にはこれを上げましょう。もらいものですが」

持っていた缶コーヒーを彼に手渡す。勿論、まだプルタブは空けていない。……話は終わり。僕は踵を返して階段を下りた。

学校が終わり、帰宅。

マンションの1階にある集合ポストを開けると、新聞の夕刊とともに一通の封筒が出てきた。通常のものとは違う大きさで、赤と青のストライプの縁取りがされている。エメールだ。

ということは、佐伯さん宛だろうか。

階段を上がりながら表書きを見ると、やはり『佐伯貴理華』の名前があつた。それさえわかれば十分だ。これ以上僕が詳しく見る必要はない。きつとアメリカにいるご両親からなのだろう。

家の鍵が開いていたので、佐伯さんが先に帰ってきているようだ。さてはポストを見なかったな。

「ただいま」

「あ、おかえりー、弓月くん」

佐伯さんはキッチンで夕食の準備中だった。

「エメールがきてましたよ」

「エアメール？ 長崎から？」

「長崎は日本ですよ」

なぜ長崎なのだろう。セリヌンティウスでも待っているのだろうか。

件のエアメールを佐伯さんに手渡す。

「お父さんからだ。何だろ」

「開けてみたらどうですか」

「そだね。でも、後にする」

結局、彼女はその手紙を今は読まず、「ぼーい」とわざわざ口で言いながら部屋に放り込んだ。

夕食後、

期末考査が終わって後は終業式を待つだけの高校生なんてのん気なもので、即座に勉強に向かうようなこともなく、僕と佐伯さんはリビングで食休みを兼ねてお茶を飲んでいた。僕は読みかけの小説を読みながら、彼女は何か考えごとでもあるのか宙に目を向けながら。

「今日さー」

その佐伯さんがぼんやりした調子で切り出した。

「なんですか」

「昼休みにね」

「……」

昼休みと言えば、思い出されるのは浜中君との一件だ。その話だろうか。

だが、彼女の口からなかなか次の言葉が継がれない。湯飲みを両手で包むようにして持った構造のまま、何やら考え込んでいる様子だった。

「やめた。やっぱりいい」

「……そうですか」

なんとなくほっとしてしまふ。知っていることを知らない振りし

ながら聞くのは面倒そうだし、今ここでその話をされても反応に困っただろう。

言葉がなくなった。

特に何か見たい番組があるわけでもなく点けていたテレビが、ふたりの間にある沈黙を埋める。

「ねえ」

しばらくしてまた唐突に、何か思いついたように佐伯さんが発音した。

「キスしようか」

「急にわけのわからないことを言わないでください。脈絡がなさ過ぎますよ」

「いいじゃない」

彼女は腰を浮かすと、膝で歩きながらテーブルを迂回してこちら側までやってきた。意外に素早い動きで、あっという間に僕の膝の上に乗る。

「理由なんてしたいからで十分だと思わない？」

「思いませんよ」

「ねえ……」

ねだるように甘えた声を出す佐伯さん。僕の首に両手を回し、顔を近づけてくる。この強引さは今日の昼休みのことが多少なりとも影響しているのだろうか。などのんびり考えている場合じゃなさそうだ。ここまで努めて冷静に対応してきたが、いよいよ不味い。「いいかげんに悪ふざけはやめてください」

「ん……」

しかし、おかまいなしに顔を寄せてくる。ダメだ、ぜんぜん聞いていない。

「ちょ、佐伯さん、本当にやめ　うわっ」

「きゃっ」

なんとか必死に距離をとろうと首を引いて抵抗していたら、重心を後ろにかけ過ぎたようで、最後には座椅子ごと後ろに倒れてしま

った。僕と佐伯さんは、もろともにひっくり返る。

「あー、びっくりしたあ」

「それはこっちの台詞です」

仰向けに倒れている僕と、僕の頭の左右に両手を突いて覆いかぶさっている佐伯さん。

「ふっふっふ。でも、もう逃げられないよね」

「いいかげんに」

と、言いかけたそのときだった。

玄関のほうから何か物音が聞こえた気がした。

僕と佐伯さんは動きを止め、上と下で顔を見合わせる。どうやら彼女にも聞こえたようで、気のせいではないようだ。そう言えば、玄関の鍵は閉めていただろうか。

そして、今度はリビングのドアが開いた。

そこに立っていたのは、見たことのない大人の男の人。後ろに撫でつけた髪には耳の上あたりに白いものが混じっているが、若々しくエネルギーッシュな印象を受ける。

「何だこれは！」

男の人が驚きの声を発する。

誰だ？

という僕の疑問は、次の佐伯さんの言葉で氷解した。

「お父さん!？」

4(2)。「もう会えないわけじゃないんですから」

4月から住むことになったこのマンションの一室は、現在、諸般の事情により僕と佐伯さんがルームシェアをしている。

だが、今ここに僕たち以外の第3の人物がいた。

遙か年上の、大人の男性。スラックスにサマーセーターとラフな格好ではあるが、折り目正しい几帳面な性格が垣間見えた。後ろに撫でつけた髪には耳の上辺りに白いものが混じっているが、それでも若々しくエネルギーッシュな印象を受ける。体格がいいのもあるかもしれない。

佐伯さんのお父さんだった。

僕と佐伯さんはいつも通りに向かい合って座り、上座におじさんがいる構図。

おじさんには僕の座椅子を使ってもらっている。僕はフローリングの床の上に座布団を敷いて、そこに正座。そして、佐伯さんとはいうと、彼女が使っているいつもの座椅子に、不貞腐れたようにもたれている。

重苦しい空気が漂っていた。

テーブルの上には3人分のコーヒーが置かれていたが、それに口をつけたのは唯一佐伯さんだけだった。

「どういふことか説明してもらおうか」

2人目としておじさんがひと口飲み、それをきっかけにして問いを發した。

「その前にお父さんが先よ。どうして手紙と一緒に帰ってきたのか、どうしていきなりここにきたのか。それをおしえて」

しかし、それに反發したかのように、不機嫌全開で佐伯さんが要求した。

「そうだな。それは順番というものかもしれないな」

おじさんがうなづく。

怒っていないわけではないのだろうが、冷静でもあるのだろう。

一方的に問い詰めるだけでは話が進まないことも理解しているのだ。大人の態度というもののか。

「手紙は読んだか？ この夏にロス勤務が終わって日本に帰る予定だったが、もう少し延びそうだということが書いてあったと思うが」
「読んだわ」

佐伯さんがそっぽを向きながら答える、僕にとっては初耳だった。佐伯さんのお父さんは現在アメリカでの勤務で、この春までは一家でそちらに住んでいたらしい。が、それも近々終わることになり、高校に上がる佐伯さんだけがひと足先に帰国した。それが僕の知る既存の情報だ。

「あの手紙を送った後にいくらかまとまった休みが取れたので、それでこうして帰ってきたんだ。どうやら結果として、手紙と一緒に帰国するかたちになってしまったようだな」

「そんなのメールすればいいじゃない。ここにくることもそう。メールも送れない年寄りじゃあるまいし」

「もちろんそうだ。だが、私は肉筆で書く手紙も趣があつていいものだと思つている。異国からの便りなら特にそうだ」

その気持ちは僕にも何となくわかる。便利さと速さこそが常に至上のものではないということなのだろう。

「急に帰れるようになったのに連絡もしなかったのは、お前を驚かせようと思つたからだ。バカなことを考える親だと笑ってくれてもいい」

それに対し佐伯さんは、言われた通りに鼻で笑つた。面白くなさそうではあつたが。

「さて、じゃあ、次はお前の番だ。どんな生活をしているのかと思つてきてみれば、まさか男と一緒にいるとは思わなかつた。これはどういうことか、きちんと説明しなさい」

「……」

言われ、今度はわずかに言葉を詰まらせる。しかし、それこそそ

れが順番というもので、話さないわけにはいかなかった。

佐伯さんは不動産屋のミスからはじまって、僕たちがルームシェアするに至った経緯を細大もらさず、簡潔に説明する。それをおじさんは、テーブルに両肘を突き、組んだ指を口に当てた構造のまま、目を閉じて黙って聞いていた。

さして長くもない佐伯さんの説明が終わると、彼はまずコーヒ―に口をつけた。

「話はわかった」

それから僕を見る。

「弓月君といったね」

「はい」

「契約上のミスがわかったとき、君は身を引くべきではなかったのかな」

「お父さん！」

佐伯さんが声を荒らげ、割って入る。

「聞いてなかったの！？一緒に住めばいいって言い出したのはわたしよ。弓月くんは悪くないわ」

「もちろん聞いていたよ。まず見知らぬ男女が会ったその日から同居するという時点で言語道断だな。それは、貴理華、お前にも言えることだ」

確かにその通りだ。僕も彼女からその提案を受けたときは面喰ったものだ。

「だからって、必ずしも弓月くんが譲らないといけないわけではないわ。条件ならわたしも同じよ」

「お前はここ以外にどこに行くつもりだ」

おじさんは呆れたように言う。

「その点、彼は多少遠いようだが、実家がある。一旦そちらに引き上げればいいことだ。それに」

「そうですね。男の僕が譲るべきでした」

その言葉を僕が引き継ぐと、おじさんは少しだけ驚いた顔を見せ

た。

「……その通りだ」

「何それ」

理解できない様子の佐伯さん。

「こういうときは男が譲るものなんです」

「意味わかんない」

やっぱり納得いかないようだ。

伯父さんは話を進める。

「仮にやむを得ない措置として一時的にルームシェアするにしても、その後新しい部屋を探すなりして、どうにでもできたらうに。どうしてそうしなかったのかね」

問われているのは僕だ。

どうしてそうしなかったのか？ その理由は、ある。だが、今の場で言うようなものでもない。

「……申し訳ありません」

結局、ただ謝った。

「お父さん、弓月くんばかり責めないでっ」

「なら、お前にも訊こうか。どうしてこういう事態になっている」とを、私や母さんに黙っていたんだ」

「そ、それは……」

佐伯さんは一瞬言い淀む。

「言い忘れたのよ」

「4ヶ月近くもか？」

「……そうよ」

ずいぶん苦しい釈明だ。

おじさんはそれ以上そこに言葉を重ねなかった。かと言って、佐伯さんのあれで納得したわけでもないだろうが。

彼が黙り込んだことで、場全体が沈黙した。

僕はここで初めてコーヒーに口をつけた。すっかり冷めて、温くなってしまう。

程なく、またおじさんが口を開いた。

「本当は言いたくなかったんじゃないのか」

話の流れからして、それは佐伯さんに向かって発せられたものだ。だが、その言葉は僕をも貫く。どきりとした。ただ単に僕にも言えること、というだけではないのだろうな、やはり。

「……………どういう意味？」

僕の内心と同様、狼狽の色を見え隠れさせながら、佐伯さんが問い返した。

「お前たちはどういう関係なんだ」

「……………」

おじさんは問いに問いを重ね、一方の佐伯さんは押し黙ってしまった。

「私が入ってきたとき、お前たちは何をしていた」

「あ、あれはちよつと悪ふざけしてただけ」

「小学生がやるのとはわけが違うだろう」

おじさんはぴしゃりと言った。

荒い語気だ。

それから自分を落ち着かせるためか、コーヒーを煽った。

「年頃の娘をもつ親としては想像したくない話だが　つまりはそういうことなんじゃないのか？」

彼は直接的な表現は避けたが、要するに僕たちが男女の関係として同棲していたのではないか。そう言いたいのだ。

「違うわ。わたしたちはそんなんじゃない」

「それならそれで問題だな」

ため息混じりの声。

「ああ言えばこう言うって！　どういう答えがお望みなのか」

「どちらにしろ当然あるべき倫理観が希薄だと言っているんだ」

そう言われれば、佐伯さんも口をつぐむしかなかった。

実際、親としては頭を抱えたいくなる事態なのだろうな。高校に上がったばかりの娘が男と同棲していたなんて。そこに男女としての

関係がなかったとしても、それはそれでやはり問題だ。

佐伯さんは絞り出すように発音した。

「わたしたちはお父さんが考えているような関係じゃない。彼は誠実な人よ。そういうことを一切しようとしなかったわ」

自分の非があることを承知しながらの反抗なのだろう。

「……そうか」

おじさんは重い調子でうなずき、それから僕を見た。

「かと言って、これ以上娘と一緒にしておくわけにもいかない。…

…出ていってくれるね？」

「……はい」

「お父さん!？」

僕と佐伯さんの声が重なる。

彼女は掌でテーブルを叩くようにして腰を浮かせた。

「わたしが出て行けばいいことでしょうか!？」

「だから、お前には行くところがないだろうが」

「弓月くんもっ。弓月くんが出ていくことなんてないっ」

「さっきも言ったでしょう? こういう場合は男が譲るものなんです」

僕は佐伯さんに笑ってみせてから、体ごとおじさんに向き直った。

「このたびは僕の考えの浅い判断でご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした」

言ってから深く頭を下げる。

「いや、それについては貴理華も同じだ。君にだけ強くは言えんよ」

「制服や学校のものがありますので、また朝に寄らせてもらいます。

荷物は終業式が終わってから引き上げようと思います」

そう告げてから、僕は立ち上がった。入れ替わりに佐伯さんが、脱力したようにすんと腰を下ろしたのが見えたが、かまわず部屋に入った。

自室で外出着に着替え、とりあえず今いりそうなものを鞆に放り込む。

再びリビングに戻ると、佐伯さんとおじさんは先ほどと変わらぬ位置にいた。おじさんは佐伯さんの話を聞いていたときと似たような構造。ただ、組んだ指は額に当てられていて、思い悩んでいるようにも見えた。

軽く頭を下げてから廊下へ抜ける。

と、

「ま、待って！」

ぱたぱたと佐伯さんが追ってきた。僕は靴を履いたところで振り返る。

「どうするの、こんな時間に出て行って」

「どうしましょうか」

苦笑がもれる。

「気がつけばもうけっこう遅い時間ですからね。下手に家に帰ろうとすると、途中で電車がなくなってしまうかもしれません。まあ、どこかでデキトーに朝まで時間を潰しますよ」

見れば佐伯さんが今にも泣きそうな顔をしていた。

「そんな顔をしないでください」

「だって……」

「もう会えないわけじゃないんですから。明日もまたここに寄りますし、これからも変わらず同じ学校の生徒ですよ」

会おうと思えばいつでも会える。

「わたし、もつと弓月くんと一緒にいたかった」

彼女はうつむき加減に、つぶやくように零す。

「僕ですよ」

言っただけが肩に手を乗せると、彼女はゆっくりと顔を上げた。

僕らはしばし見詰め合う。

佐伯さんの長い睫毛が揺れ、その下の大粒の瞳も薄く涙に濡れていた。

そんな彼女を見る僕は、彼女の目にはどう映っているのだろう。みっともない顔でなければいいと思う。

「じゃあ、また明日」

「うん……」

そうして僕は踵を返し、佐伯さんと暮らしたこの部屋を後にした。

4(3) 「それは普段は言えない言葉です」

佐伯さんに背を向け部屋を後にした僕は、階段を下り、表へと出た。

そこで気まぐれにマンションを見上げる。

「……」

いい場所だったと思う。駅にも学校にもほどほどに近かったし、大きな道路から少し離れているので静かでもあった。

そして、何よりも彼女がいた。

まあ、それは借りるときの条件に入っていなかったが。

先ほど、おじさんに問われた。なぜ後からでも、新しい部屋を探さずにして、問題を解決しなかったのか、と。打ち明ければ、答えはまさしくそれだ。要するに居心地がよくて、解決しなくなかったのだ。

しかし、もうあの部屋に自分の家として戻ることがないのだ。そう思うとやはり寂しいものがある。

さて、いつまでもこうして見上げていても、ただの不審人物だ。

行くこうか。

僕は歩き出す。

外は夜ということもあってか、思っていたよりも涼しかった。どうやらこの学園都市は山を開いてつくられたらしく、高い位置にあるようだ。まだ実家から水の森に通っていた去年の夏、家の周りより2度ほど気温が低いのだと実感した覚えがある。

これからどうするか。

街灯の光が暴く、人気の絶えた住宅地を歩きながら考える。一ノ宮まで出れば24時間営業の店もあるし、そこで何か飲みながら本でも読んで朝まで時間を潰すのが無難か。読みかけの本も鞆に放り込んできたことだし。

そんなことを考えながら住宅地を抜け、大きな道路に出る。だけ

ど、車通りはほとんどなく、時々思い出したように走っている程度だ。中央分離帯に等間隔で立つ街灯が道路を照らしている分、明るくはあるのだが、寂しさは変わらない。

と、不意にズボンのポケットから振動とくぐもったメロディが伝わってきた。携帯電話の着信。見れば佐伯さんからの電話だった。通話ボタンを押し、出る。

「もしもし」

『……わたし』

少し沈んだ彼女の声。電話だからそう聞こえる、というわけではないのだろうな。

「どうかしましたか？」

聞きながら僕は、道路に沿って歩道を歩く。

『弓月くんの声が聞きたくて』

「さっき別れたばかりですよ」

『……じゃあ、切る？』

そこに車が一台、後ろから前へ。僕はそれが通り過ぎるまで待ち

「……切りませんよ」

『そっか、よかった』

佐伯さんが微笑んだのが、電話越しにわかった。

『今どうしてるの？』

「ひとまず駅に向かって歩いてます。佐伯さんは？」

『わたしは、部屋。お父さんと顔合わせても腹が立つし』

今度は苦笑。

親の心子知らずだな。

『ね、そう言えば、こうして電話で話すのって初めてだよ？』

「そうなりますか」

僕は歩きながら空を見上げる。星は見えなかった。この辺りは空気が比較的澄んでいると思うのだが、それでも星の光は届かないらしい。どこなら見えるのだろうか。

「今までずっと一緒にいましたからね」

『うん。ずっと一緒にいた』

佐伯さんがリピートする。

『それにずっと一緒だと思ってた』

「僕はそこまでは思いませんでしたが、あまり想像しなかったのも事実ですね」

佐伯さんのご両親が帰国したらこの生活も終わりだろうとは思っていたし、終わり方ももう少し穏やかなものになると予想していた。それがまさかこんなかたちになるとは。

『お父さんじゃないけど』

と、佐伯さん。

『わたしが一緒に住もうって言い出したとき、弓月くん、嫌だとかそっちが出ていけとか言わなかったよね。どうして?』

「まあ、あの時点で僕も入居の準備ができていましたからね。交渉の結果、負けたら敗戦処理が大変です。それならまだルームシェアのほうがマシと言えます」

それに佐伯さんの勢いに圧倒されたというのもあるが。

交差点に差しかかる。ここを右に行けば学校、左に行けば学園都市の駅だ。ちょうど信号が青だった横断歩道を渡り、左に折れる。

『じゃあさ、このこと家族の人に話した?』

「言ってますね」

この筋に入ると一気に車の交通量が増える。駅の目の前を通る道路だからだろう。流れるヘッドライトの中にはタクシーのものもある。

走る車のエンジン音が電話の邪魔になりはじめた。

『どうして?』

「君、おじさんの質問をなぞってますね」

『うん。でも、これは弓月くんには聞かなかったから』

確かにそうだ。おじさんは僕の家族のことには触れなかった。僕が素直に出ていけば、そこにまで口を出すつもりはなかったのだら

う。

『どうして?』

再度、佐伯さんが問う。

「君と同じですよ、黙っていた理由は」

僕はただそれだけを言った。

『……』

『……』

沈黙。

そして、

『そっか。おんなじか』

その声には笑みが含まれていた。

たぶん僕が何を言いたかったか、彼女はちゃんとわかったのだらう。

『ねえ、これからどうするの?』

問われているのは『今』ではなく、『今後』だ。

「夏休みに入ったら、新しい部屋を探しますよ」

『近くだといいね』

「そうですね」

気がつけば僕は、ショッピングセンターなどが立ち並ぶ敷地に足を踏み入れていた。もう駅前と呼べる場所だ。駅のほうから流れてくる人影も目立ちはじめた。僕だけがその流れに逆らっている。

『また一緒に買い物ものに行けるかな?』

「君、それくらいひとりで行きなさいね」

荷物持ちをさせる気だろうか。

『いいじゃない。わたし、弓月さんと買い物もの行くの、好きなんだから』

「まあ、それについては僕もですよ。悪くはありませんでした」

話しながらすでに閉じたショッピングセンターの前を抜け、駅舎との間にある駅前広場まで来た。適度にライトアップされている。

地面はタイル敷きで、端にはイベント時に客席になる場所もあった。

僕はその最前列に鞆を放り出し、腰を下ろした。

前を見ればバスやタクシーの乗り場もあるロータリー。けど、もう本数も少なくなっているのか、乗り場にバスの姿はない。その分、待っている人も少ないが。帰宅ラッシュを過ぎた駅の周辺なんて寂しいものだ。

『学校はどうか？ 一緒に行ける？』

「さて、どうでしょう。新しい部屋の場所にもよりますね」

終電までにはまだ十分に時間がある。今の佐伯さんの電話を切つてまで、慌てて飛び乗ることもないだろう。こうやって新しい生活について想像するのも悪くはない。

「じゃあ、朝は待ち合わせしますか」

『うわ』

電話の向こうから小さな感嘆の声。

「なんですか？」

『珍しい。弓月くんがそんなこと言うなんて』

「そうですかね」

言いつつも、自分でも少なからずそう感じる部分はある。確かに僕にしては珍しいかもしれない。それだけ素直に話せているということか。

『ねえ。電話だと普段言えないことが言えると思わない？』

「それは携帯電話を肯定するときの常套句ですね」

まさしくその通りだが。

『だからね』

と、彼女が言ったとき、何か予感めいたものを感じ、僕の心は身構えた。

『わたし、弓月くんのが好き』

「……………」

ああ、やっぱり と心のどこかで思い、それにも拘らず僕には応える言葉が見つからなかった。

『……………』

「……………」

かくして、無言。

だが、先に口を開いたのは、佐伯さんだった。

『知ってたよね？』

と。

そこにいたずらっぽい笑みを含ませて。

「そりゃあ、まあ……………」

自然、苦笑いがもれる。

あれでわからなかったら常軌を逸したレベルの鈍感さだ。

『弓月くんは？』

「僕は……………」

思考とも戸惑いともつかない　ひと呼吸。

「ええ、好きですよ、君が」

僕は初めての言葉を口にする。

電話越しの告白。

なんとも、まあ、携帯電話も莫迦にできないものだ。

『……………そっか』

照れたような佐伯さんの声。

『うん。でも、知ってたけど』

「そうですか。知ってましたか。僕もまだまだですね」

とっくに見透かされていたらしい。尤も、自分でも薄々そうだろうとは思っていたが。

と、そのとき、遠く、救急車のサイレンが聞こえてきた。そして、すぐに奇妙なことに気づく。音がわずかにずれて二重に聞こえるのだ。

ひとつは、夜気を切り裂いて空気を伝わってくるもの。

もうひとつは、電話の向こうから。

それが何を意味するか理解し、はっとする。

僕は弾かれたように辺りを見回す　までもなかった。

正面。

そこに佐伯さんがいた。
携帯電話を耳に当て、立っている。

「……………」

彼女は真っ直ぐにこちらを見、そして、僕も携帯電話を握ったまま、その視線を受けて、返す。

彼女の後ろ、ロータリーの向こうの道路を救急車が走っていく。

「佐伯さん……………」

僕がようやくその言葉を絞り出したのは、それが通り過ぎた後の、サイレンの残響の中だった。

同時、佐伯さんはタイルの床面を蹴って駆け出し、僕は立ち上がる。

体当たりみたいにして抱きついてきた彼女を、体で受け止めた。

「家にいたんじゃないじゃなかったんですか」

「そんなわけないじゃない。弓月くんが出ていっちゃったのに」

彼女は僕の胸に額を押しつけながら言った。

僕は片手を彼女の背に回し、もう片手でお役御免になった携帯電話の通話を切る。妙に冷静だな。

「おじさんが心配しますよ」

「そんなの知らない」

佐伯さんが顔を上げる。

「ね、さっきの続き」

それから少しだけ体を離れた。それでも両手は僕の腰の辺りにかかったままだ。そんな体勢で僕らは向かい合う。

「わたしのこと、いつから好きだった？」

またいろんな意味で答えにくい質問を。

「そんなことはつきりとわかりませんよ」

「そう？ わたしはわかるよ、いつから弓月くんのが好きだったか」

「いつからですか？」

「もちろん最初から」

佐伯さんはきつぱりと言い切った。

「初めて会ったときから好きだった」

「そう、ですか……」

そこまではつきり言われると……。いや、佐伯さんらしいと言えば佐伯さんらしいのだろう。

「もう一回好きって言ってくれる？」

「残念ですね。それは僕にとって普段は言えない言葉です」
「けち」

彼女はひと言短く言って、口を尖らせた。

なら言えない代わりに、せめて行動で示すことにしよう。

僕は見下ろすようなかたちで、真っ直ぐに佐伯さんを見つめた。
以心伝心。

そうして彼女は目を閉じ、僕はそれを待ってから唇を重ねる。

僕らはひかえめにライトアップされた駅前広場で口づけを交わす。先日のいたずらみたいなのよりも長い口づけ。

程なく、どちらからともなく唇を離れた。

「またしちゃったね」

「いいんですよ。そんなことをいちいち言わなくても」

でも、おかげで照れくさいような気まずさは埋められた。

そして、僕は決意をひとつする。

「さて、そろそろ行きますか」

「……やっぱり、行くの？」

佐伯さんの眉尻が悲しげに下がる。

「いえ、そうじゃなくて」

正確には、戻る、か。

「君のお父さんをお願いにしようと思ひまして。もう少し君と一緒にいさせてくださいと」

瞬間、彼女は驚いたように目を見開く。

そして、再び僕の腕の中に飛び込んできた。

「うん、そうしよう。わたしももっと月くんと一緒にいたい……」
佐伯さんはかすれ、震える声で、そう言った。

継章 「わたししか見えてないくせに」

終業式。

つまり、明日から夏休みという日。

蒸し暑い体育館での終業式を終え、教室で成績表を受け取って

一学期最後の日を終えた僕は、馴染みの顔とともに教室を出た
馴染みの顔とは即ち、滝沢、矢神、宝龍さんに雀さん、だ。

いつも忙しそうにしている滝沢も、この日はかりは特に用はなかつた模様。運動部なら今日も部活があつたりするのだろうが、文化系はのん気なもので、文芸部のふたりもいる。

「見事なものですね」

僕は宝龍さんの成績表を見ながら廊下を歩く。

惜しげもなく見せてくれた宝龍美ゆきの成績表には、とんでもない数字がずらりと並んでいた。この中どこるか学年でも1位、おそらく夏休み明けの全国模試ですらそうなることだろう。

これでなぜ留年したか不思議で仕方ないが、原因が成績とは関係ないところにあるのだから、それとこれとは別なのだろう。

「この感じだと、きっと僕がいちばん下ですね」

同じように滝沢からも成績表を見せてもらい、矢神と雀さんに探りを入れた結果、僕はそう予想する。たぶん上から順に、宝龍さん、滝沢、矢神と雀さん。そして僕、だろう。

滝沢は宝龍さんの前では霞むが、苦もなく上位に入る秀才タイプの人間だ。矢神と雀さんはどちらも真面目なので、こつこつ勉強して、その努力に見合った結果を残している。

「大丈夫だ。お前はそんな成績とは別の場所で、十分に頭のいい人間だよ」

と、後ろから滝沢。

「そうね。それは勉強では伸ばせない部分よ。自信もちなさい」

それに同調したように、宝龍さんまでもが言う。こちらはグルー

プの先頭を切って、堂々と歩いている。隣には雀さん。

そんなふうに褒められたところで、結局のところ、学生の価値をはかるのは学業の成績なのだ。格好の悪い点数を取るわけにはいかない。

「宝龍さんも滝沢さんも、弓月君のことを高く買ってるんですね」
不満げに雀さんが口をはさむ。

「おや、ナツコさんは僕が評価されるのは気に入りませんか？」

「ナツコ言わないっ」

「前々から聞こうと思っていたんですが、雀さんのお父さんって麻雀好きですか？」

「っていうほどじゃないけど、研究者のくせに一時期麻雀にハマってたみたい。それがちょうど私が生まれる頃。姉が陽子と量子で、私がナツコってどうなのよ……って、そんなことはどうでもいいんですっ」

最近わかった。雀さんは真面目な性格が災いして、ノリツツコミ体質なのだ。

「許してあげなさい。褒められて照れてるのよ、恭嗣は」

「あ、そうなんですか」

「いやいやいや。何か誤解があるような。」

「ほう、そうなのか」

「いや、ですから……」

「そうよ。つき合ってた私が保証するわ」

「……」

好き勝手言ってくる。

しかし、気がつけば昇降口。反論しようにも皆それぞれに靴を履き替えはじめ、その機会も逸してしまった。

何か非常にもやもやした気持ちを抱えたまま僕も革靴に足を突っ込み、表へ出る。

「あ、やっと出てきた。おーい、弓月さん」

手を振るのは桜井さんだ。その横には当然のように佐伯さんもい

る。この夏の暑い中、待つていたらしい。

自然、僕と佐伯さんの目が合い　彼女がやわらかく微笑んだ。僕の口から嘆息がもれる。何となく嫌な予感がするな。

「仕方ない。君も一緒に帰りますか」

僕はそう言いながら手を伸ばし、気配を殺して脇を通り抜けようとしていた浜中君の襟首を掴んで、引き寄せた。

「なんで毎度毎度、僕を巻き込むんだよっ!？」

「いいじゃないですか、一学期最後の日くらい。嫌ですか？」

「嫌に決まってるだろっ」

涙目の浜中君。嫌われたものだ。

しかし、「なんだ、そつちの先輩と帰るのか?」「じゃあね、浜中くん」「また電話するからな」「先輩、失礼しまーす」と、彼と同じグループライい男女の生徒らは理解を示し、先に行ってしまった。

浜中君も連れて佐伯さん、桜井さんに合流。にわか大所帯となった。

「夏休みに入るとしばらく会えませんから、ご一緒していいですか?」

「いいと思いますよ。大勢のほうが賑やかですから」

僕は隣にいる佐伯さんに目を移す。

「じゃあ、我々も駅まで行って、買いものをすませますか」

「そうだね。それがいいと思う」

どうせ今日はもとから買い物ものに出る予定だったのだ。なら、このままみんなと一緒に駅まで行ってすませてしまえば手っ取り早い。

「あいかわらず仲のいいことだな」

滝沢に含み笑いでからかわれながら、かたまって校門を出る。

「ま、近所のよしみというやつですよ」

「とか言ってますけどね、わたしたち、ちゃんとき合うことになったんです」

瞬間、僕はひっくり返りそうになった。

雀さんがぎょつとしてこちらを見、ついで桜井さんが詰め寄ってきた。

「やーっぱりそうなんじゃないですかあ。いくら聞いてもキリ力にはぐらかすし、弓月さんは否定するし」

「つい最近の話です。桜井さんが僕を問い詰めていた頃は、まだそうじゃなかったんですよ」

よって、騙していたわけではない。

「弓月くん、うちの父にも会ったんですよ」

「っ!？」

これまたよけいな爆弾を投下する佐伯さん。波紋のように動揺が広がる。いちばん動揺したのは当事者であるはずの僕だが。

「驚いたわね。恭嗣がそこまで話を進めてたなんて」

冷静に、しかし、かすかに驚きを含めて言ったのは宝龍さんだ。

ある程度の事情を知っている彼女でも、これは意外だったらしい。

「事実だけ見れば、確かにそうなんですけどね。でも、彼女のお父さんと会ったのは、たまたまです。偶然ですよ」

「あ、お嬢さんをください、とかじゃないんだ……」

「矢神……」

いったいみんな何を想像しているのだろうか。尤も、それに近い説得はあったのだが。

そこで口を開いたのは今まで、そして、今も不機嫌顔ながら、それでも素直についてきている浜中君だ。

「あ、でも、先輩ならけっこうあり得るんじゃないですかね。前に僕、丁寧語で脅されましたから。佐伯さんには近づかないようにって」

「君まで暴露しますか……」

ここぞとばかりに反撃にくるとは。しかも、微妙に自爆テロだ。

「そうなの？」

驚いて問う佐伯さん。

「嬉しそうにしないでください。……えっと、まあ、それに近いこ

とはあつたかもしれませぬ……」

僕の口から力のない、乾いた笑いがもれる。

それから浜中君へと顔を向けた。

「君、後で覚えておくように」

「後っていつですか？ もうしばらく会わないと思いますけどね」

彼はこちらへ睨み上げるようにしながら、ふてぶてしい態度を見せる。なるほど、退路を確保した上での反撃だったか。

「あなたたちもいつの間にか仲良くなったのね。せっかくだからふたりそろって文芸部に入りなさい。今なら夏の合宿に参加できるわ」

「だそつです。どうですか、一緒に合宿とやらに参加して、朝まで語り合いますか」

「考えなしに目の前のエサにつられてんじゃねえよ。興味もないクラブに入る気かよ。まあ、別に止めませんけど。僕は遠慮しておきます」

確かに一理あるな。

にしても浜中君、もうここでは猫をかぶる気はさらさらないようだ。

「あ、あの、宝龍さん。合宿って……？」

矢神がおそろおそろ問いかける。

「どうせ秋の文化祭には部誌を出すのでしょうか？ だったら、そのとっかかりとして合宿をやってもいいと思うの。計画をまとめて、近々提出するわ」

「うち幽霊部員が多いんですけど……」

「最悪、私と矢神君のふたりね」

「……」

哀れ、矢神……って、顔面蒼白、すぐるような目で僕を見ないでもらいたい。

大部分で話題の中心にいながらやけにアウエーな気分させられる話を展開しているうちに、道程は終点に辿り着こうとしていた。学園都市の駅だ。

「それじゃあ、僕らはここまでです」

改札口まで一緒に行き、そこで別れる。

「またね、ふたりとも」

「弓月、また連絡する」

「じゃっねー、キリカ。弓月さんも。休み中キリカと会おうと思いますから、そのときはまた一緒に」

口々に言っつて改札を抜けていく。浜中君はなぜか桜井さんに尻を蹴られていた。僕と佐伯さんは、そんな彼らがエスカレーターでプラットホームに上がり、姿が見えなくなるまで見送った。

これから夏休みに入るが、僕らは遊び盛りの高校生だ。何かつけて連絡を取り合い、会うことだろう。名残り惜しさはない。

「まったく、君は。なんであんなことを言っただんですか」

きた道を戻るかたちで、シヨツピングセンターへと足を向けた。

「どうせ黙ってたっつていつかはわかることなんだから。今のうちに知っておいてもらったらいいじゃない」

それに と、佐伯さん。

「本当のことだしね」

「まあ、ね」

いや、もう、あの日は大変だった。あれから佐伯さんと一緒に家に帰り、おじさんをお願いしたのだ。多弁になっても言葉が薄っぺらくなる気がして、的確に要点だけを述べ、頭を下げて頼み込んだ。勿論、そこに僕の気持みたいなものも含めないわけにはいかず、それこそ矢神が言ったのに近いものがあつた。今思い出しても恥ずかしく思う。

対するおじさんは僕以上に口数が少なく、こちらのお願いに2時間近く腕を組んだまま黙っていた。佐伯さんなんかいくら待っても答えが返ってこないものだから、ついには舟を漕ぎ出したほどだ。

そうして答えが出たのは、時計の針が3周目に突入。午前3時を回ろつかという頃だった。

「未だによくおじさんがオーケーしたものだと思いますよ」

「あれでお父さん、弓月くんのことけっこう気に入ってるんだと思う」

「そうですね」

「覚えのない僕は首をひねるばかりだ。」

「うん。誠実で男らしいところがあるって褒めてたし」

「買いかぶりすぎですよ」

「誰も彼も。僕を過大に評価しすぎだ。」

「まあ、おかげで君ともまだ一緒にいられるわけですが」

「“大切にお預かりします”？」

佐伯さんが意地の悪い笑みを見せる。それは僕がおじさんに言った台詞だ。

「いちいち言わなくていいんですよ。ほら、早く買いものをすませて帰りましょう」

「でも、その前にアイス食べていこう。暑いし」

佐伯さんが指さす先には、ショッピングセンター外周部のアイスクリーム屋があった。

「太っても知りませんよ」

「失礼な。これでも毎日努力してるんだから。女の子を舐めるなど言いたい」

彼女は頬をふくらます。

「それに大丈夫。少しくらい太っても、弓月くんは好きでいてくれるから」

「いいんですか、そんなに信用して」

「弓月くんこそ、わたししか見えてないくせに」

「……」

返す言葉を失くす僕に、佐伯さんは勝ち誇ったような微笑みをひとつ。

それからアイスクリーム屋に駆けていく。

「I-I-I have Sherbet! (シャーベットくださいー!)」

よく通る涼やかな声が、僕の耳にまで届いた。

「……」

ああ、凶星なんだろうな。

僕はそんな彼女と一緒に暮らしているわけだ。それもとびきりの美少女。そして、彼女もまた僕に、心で、体で、好意を示してくれるのだろう。果たしてこれからの毎日、理性を保つことができるのだろうか。案外、早まったことをしたのかもしれない。

佐伯さんがこちらを振り返った。

「弓月くんはなんにするー？」

「今いきますよ」

僕は走らず、歩いて彼女のもとへ向かう。

哀れな虜囚のせめてもの　無駄な　抵抗として。

4 了

継章 「わたししか見えてないくせに」(後書き)

これにて1学期編終了です。

サイドストーリーとして夏休みSSをはさんだ後、2学期編に入ります。

それは夏休みに入っただけの、ある日のことだった。

夜、僕がリビングでひとり文庫本の小説を読んでいると、佐伯さんが自室から顔を出した。手には携帯電話を握りしめている。

「あ、弓月くん、あのね。もう少ししたらケータイに、お京からかかってくると思うから」

「桜井さんから、ですか？」

つまり佐伯さんが僕の番号を彼女におしえたということか。その点に関してはとやかく言うつもりはない。顔も名前も知らないようなクラスメイトにおしえたのなら兎も角、相手は僕もよく知っている桜井さんだ。十分に許容範囲だろう。佐伯さんもそうだと思ったからおしえたのだろうし。

「僕に何か用でしょうか」

「そうみたい」

言いながら、彼女は自分の座イスに腰を下ろした。

「どんな話が聞いてますか？」

「さあ？」

そして、笑う。……その顔は聞いているな。予備知識を仕入れておきたかったのだが、しかし、佐伯さんを問い質そうとした矢先、テーブルの上に置いてあった僕の携帯電話が着信を知らせるメロディを奏で出した。

サブディスプレイを見ると、そこには知らない番号が。きっと桜井さんだろう。

「……はい」

『あ、弓月さんのケータイですか？ わたしです。桜井です』

電話を通して聞いているせいか、普段聞いている桜井さんの声とはちょっと違った感じに聞こえた。が、話し方や勢いは間違いなく彼女のものだ。

『キリカから聞いてますか……ていうか、あ、もしかして今、キリカと一緒にでした？』

声がニヤけた感じのものに変わった。

『一緒ならその場で僕に代わってますよ』

『あ、それもそうか』

こういうときは慌てず騒がず、さらりと嘘を吐く。桜井さんはあつさりとな得した。

『それで、僕に何か用ですか？』

『あ、そうそう、そうなんです。えっと、ですね。いきなりですが明日、一緒にプールに行きませんか？』

『プール？』

疑問形でその単語を復唱する。

ちらと横目で佐伯さんを見てみれば、彼女はテーブルに両肘を突き、掌で顎を支えた構造で、笑みを浮かべていた。やはり知っていたのだろうな。

『明日とは、確かにいきなりですね』

もしかしたら佐伯さんは、考える時間を与えないために、予備知識をつけさせなかったのではないだろうか。

『ダメですか？』

『ダメというわけではありませんが……』

時間は自分でつくるもの。少々時間稼ぎを試みる。

と、そこで桜井さんが声のトーンを落として、

『キリカの水着姿、見たくないですか？』

『……』

『実はキリカ、すごいスタイルよくて、胸も大きいんですよ』

それは知っています。とは、さすがに言えるはずはなく。

どうにも話にくいカテゴリの話題になりつつあるな。こっちは横にその佐伯さんがいるというのに。

『じゃあ、ポロリもつけます。わたしの責任においてっ』

『……』

何をやる気だ。この子は。

電話の向こうでぐっと拳を握り締めている桜井さんが目に見えるようだ。

「因みに、どんなメンバーですか？」

『弓月さんがオツケーしてくれたら、滝沢さん辺りにも声をかけてみようと思ってます。大勢のほうが楽しいですから』

「それなら、まあ、いいんじゃないでしょうか」

旅は道連れ。心臓に悪い状況に、わざわざ自分ひとりで飛び込む趣味はない。

『決まりですね。じゃあ、明日、楽しみにしてくださいね』

そう言って桜井さんは電話を切った。

僕も自分の端末を折りたたみ、さて、と佐伯さんに向き直った。

「君、知ってましたね？」

「うん。でも、お京が自分で誘うって言うたから、わたしが口をはさむのは筋違いかなって」

それはそうだが。

「祝・弓月さんとプール」

「他の人もいるようですよ」

「一度行ってしまえば、次はふたりで行けるかなあ、とか？」

へらっと笑う佐伯さん。

そううまくいくだろうか。少なくとも僕は、そのつもりはないわけだが。

そうして翌日。

場所は埠頭近くに建設された、この地方最大を謳う室内プール。

そこに現地集合。

とは言っても、電車の乗り継ぎの関係で現地集合になったのは僕と佐伯さんだけで、他のみんなは一度どこかで集まっているみたいだ。

そして、現地、入場ゲート入り口で待ち受けていたのは、桜井さ

んは当然として、

遠目に見たところ、僕の側の友人に、滝沢と矢神、それに宝龍さん。

佐伯さんの側として、浜中君がいた。

果たして、桜井さんはこの全員に電話をかけて回ったのだろうか。それとも芋づる式に釣れたのだろうか。疑問である。

「……………」

僕は挨拶代わりに軽く片手を上げて近寄りながら、誰に最初に話しかけるべきか考えていた。

「浜中君もきてたんですね」

困ったときの浜中君。

「なんで真っ先に僕に話しかけるんだよっ」

なぜか怒られてしまった。どうでもいいが、どういうわけか僕は彼を見て、じりじり後退しつつきゃんきゃん吠える仔犬を連想した。

「他に相手がいるだろ」

「そうですね？」

他のメンバーを見やり 宝龍さんと目が合った。

「今日は雀さんは不参加ですか？」

「…………… 恭嗣。いい度胸ね。私に話しかけながら、私より先に他の女の名前を口にするなんて」

「……………」

彼女に冷ややかな目を向けられ、僕は軽いため息を吐いた。

「不調なんですよ」

「珍しいわね。いつもマイペースなのに」

「そうでもないつもりだが。」

「気が重いですよ、今日のこのイベントは」

「あら。女の子の水着が見れるんだから、嬉しいんじゃない？」

「普通はそうなんでしょうけどね。ハイレベルすぎる人がいると、こっちとしては身構えてしまっんですよ。…………… そう思いませんか、

矢神？」

「僕に振らないでよ。気持ちわかるけど」

矢神は苦笑する。

そんな男ふたりの複雑な心理を理解できないらしく、宝龍さんは怪訝そうな顔をしていた。

「じゃあ、みんなそろったことだし、さっそく入りましょー！」

佐伯さんと再会の挨拶はひとしきりすんだらしく、桜井さんが元気よく号令をかけた。

そこから男女それぞれの更衣室に行くわけだが、その前に僕が足を運んだのが水着売り場だった。なにせ僕は水着というものを持っていなかったの。

「それくらい用意したらどうですか」

頼んでもいないのについてきて、後ろから嫌味を投げかけてくるのは浜中君だ。なんだろうなこの、こっちが無関心だと自分からわざわざ寄ってきてきゃんきゃん吠える仔犬は。

「仕方ないでしょう。この夏は今のところそういう予定がなかったんですから」

それに今回の話だっぴいきなりだったのだ。

「さすがに君はちゃんと用意してたみたいですね」

「夏休み入る前からクラスのやつらと約束してたからね」

さらりと当然ことのように言う。

「いいことです、若いうちに遊んでおくことは」

「あんだ年寄りか」

呆れる浜中君。

「まあ、それでも今日は、年寄りには年寄りなりに遊ぶつもりですよ」とりあえず無難にアロハみたいな柄の、バスケットボールのユニフォーム様のトランクスを選んだ。

男の着替えなんて簡単なもので、そんなよけいな行程を挟んで尚、女性陣よりも早かった。

更衣室を出てプールの入り口で待つ男4人は皆、柄は違えど同じトランクスタイプの水着だった。

僕は中学の3年間スポーツをやっていて、それなりに体もできていたが、高校に入ってからはずっと帰宅部なので、すっかり筋肉も落ちてしまった。滝沢も似たようなものだが、やっていたのが格闘技ということもあって鍛え方が違う。衰えてもまだ均整のとれた体をしていた。未だに軽いトレーニングを続けているのかもしれない。浜中君もたぶん何か運動をやっていたのだろう。高校受験を経てもその名残りが見て取れる。

そして、筋肉も贅肉もないのがやはり矢神なのだが、実戦という意味において最も強いのが彼だと、誰が想像できるだろうか。

待たせるのは女性の特権。暇を持って余し、プールに目をやる。

広さを売りものにしていているだけあって、様々な種類のプールがあるようだ。手前には幼児用の浅いプール。真ん中からは定期的に水が噴水のように吹き出す仕掛けになっているらしい。他にも流れるプールや波の打ち寄せるプール、ウォータースライダーまである。きつとここから見えないところにも、趣向を凝らしたものがあるのだろう。

今日は平日ではあるが夏休みに入っているので、なかなかの混み具合だ。家族連れよりは友達同士やカップルできている学生が多い感じか。

と。

「おっ待たせー！」

桜井さんの声。

どきつとしたのは、果たして僕だけだろうか。

プールのほうを向いていた僕は、ゆっくりと振り返った。

「とっつ」

「おっと」

いきなりカラフルなビーチボールが飛んできて、反射的にキャッチする。

まず目に入ったのは、青と白のボーダー柄のビキニを着た桜井さんだった。元気よく先頭を切っている。

その後ろには、黒いビキニ姿に、腰にはパレオを巻いた宝龍さん。なんとサングラスをかけていた。どこのモデルだ。そして、それに肩を並べるようにしているのが、タンキニ姿の佐伯さんだ。実際には、ボトムはショートパンツのような形状をしているが。

三者三様のスタイル。

「なかなか目の保養だな」

「余裕ですね、滝沢。僕はむしろ気後れしてますよ」

これだからあまり乗り気にならなかったのだ。

それにしても、と僕は佐伯さんを見る。タンキニとは予想外に無難なチョイスだ。僕としては残念なような、ほっとしたような気分だが。

ふと、その彼女と目が合う。

一瞬の間、佐伯さんはばつが悪そうに視線を逸らしてしまっ

た。

「……………」
「恥ずかしがっているのだろうか。普段は無駄にアピールしてくるくせに？」

「よし！ これで準備万端ですね。では、出陣ー！」
号令をかけたのは、またしても桜井さんだった。

考えたらこのメンバーでテンションを上げられるのは彼女と佐伯さんくらいだろうし、そういう意味ではリーダーに適任なのかもしれない。

で、すぐにバテるのが年寄り。

いくつかプールを回った後、みんなと流れるプールでビーチボールの打ち合いをしていたのだが、僕はほどほどのところでギブアップし、ひと足先に休憩することにした。

プールサイドに腰を下ろし、足を投げ出す。

疲れている上に、さっきまでであった浮力もなくなり、体が重く感じる。まさか矢神より先にリタイヤしてしまうとは、いよいよ年寄りだな。

と。

「弓月さん」

唄うように僕の名前を呼んだのは、いつの間にかそばにきていた桜井さんだった。僕は見上げるようにして彼女を見た。ちょっと癖っ毛の茶髪でいつも小動物っぽいのに、今は青と白のボーダー柄のビキニを着ていて、はつらつとして見える。

「楽しんでますか？」

「もちろんです」

「でも、先が上がっちゃいました」

彼女はむっとした顔で、すんと腰を下ろした。左右の膝頭を合わせるようして、いわゆる女の子座り。さっきまで水の中にいたため、体から雫が滴っている。

「年寄りですから」

「年寄り？」

「いえ、こちらの話です。ちょっと疲れただけです。ひと休みしたら、また戻りますよ」

しかし、桜井さんはそれを聞いても、むー、とまだ口を尖らせている。

そして、おもむろに、

「実はこの水着、ちょっと小さいかなって思っんですけど……どう思います?」

何を思ったのか、胸の谷間を見せつけるように四つん這いのポーズを取る。何のアピールだ。

「……さあ?」

僕はぎこちなく目を逸らした。

尚、事実だけを言うと、特にサイズが合っていないということはなく、彼女自身のスタイルも非常に平均値だろう。後のふたりが天に二物も三物も与えられたモンスターというだけで。

「ちゃんと見てくださいよお」

「けっこうです。遠慮しておきます」

彼女のにやにやした声の調子で僕をからかっているのだとわかるが、かと言って見る事ができるかということ、それはまた別問題だ。そこで不意に僕らの上に影が差し、人の気配を感じた。

「おー京ー……」

続く、地獄の底から響いてくるような声。

桜井さんの後ろに佐伯さんが立っていた。

背後をとられた桜井さんも身に危険が迫っていることを感じたのだろうが、しかし、彼女が動くよりも早く佐伯さんが組みついた。

「お京はっ、どうしてっ、いつもっ、弓月くんにつ!」

「きゃあっ! ちょっ、キリカ、やめ……」

いきなりはじまった女子プロレス。

ところが、である。いつの間にもやら立場が逆転して、桜井さんが佐伯さんの後ろをとるかたちになってしまった。

拳句、

「こうだっ」

「ちょ……あ、ん……」

耳を噛んだ。

途端、佐伯さんは支えを失ったように、桜井さんにのしかかられたまま崩れ落ちた。女の子が水着姿で折り重なっているというのをも、

なかなか凄まじい光景だ。

「じゃ、わたしはこれで」

桜井さんは立ち上がると、にこやかに敬礼をする。

「キリカは置いていきますので、好きにしちゃってください。もし暴れるようだったら、耳を噛んでやればおとなしくなりますから」

そして、そう言い残し、彼女は走り去っていった。

「おい、はつまなっかくーん」

ついでにたまたまプールサイドを歩いていた浜中君を見つけるや、その背中に飛び蹴りを喰らわせ、プールに突き落としていく。

僕は目を下に向けた。

佐伯さんが力なく倒れている。

「ゆ……」

と、その口から小さな声がもれた。

「ゆ？」

「……弓くんもやって」

「いやですよ」

このままもう少しのたれ死んでおいてもらおう。

「むー。ひどい目に遭った。おのれ、お京め」

程なく佐伯さんが復活して、僕の横に並んで座った。

ふたりして同じ方を向き、プールサイドでひと休み。横目で佐伯さんを見ると、彼女の不思議な色の髪は水に濡れ、夏の陽射しを模した強い照明を受けてキラキラと光っていた。

「こうしていると、夏って感じだよね」

「そうですね」

ここに限って言えば、室内プールなので季節は関係ないのだが。

「後で一緒にウォーターライダー、行ってみない？」

「あれですか？」

僕は視線を上げた。

階段で登った先にある高いスタート台から、ブルーのチューブ状

の滑り台がとぐるを巻くようにして、うねりながら下のプールへと伸びている。なかなかスリルがありそうだ。

「もしかして怖い？ だったら一緒に滑ってあげる。……こうやって」

「いりませんよ。だいたいそういうのは危ないから禁止されているのでは？」

僕は彼女を押し返しながら言う。水着で抱きついてくるんじゃない。

「まあ、ここの目玉ですからね。一度は行っておくべきでしょう」「やたっ」

喜ぶ佐伯さん。

「らぶらぶカップルがいちゃついているところに、桜井さん颯爽と登場！」

そこにまた桜井さんが舞い戻ってきた。今日はずっとテンション上がりっぱなしだな。

「また出たな、お京」

「そう言わないの」

言いながら桜井さんは、僕から見て佐伯さんの向こうに腰を下ろした。

「そうそう、弓月さん。キリカの水着、ちょっとガードが固いと思いません？ スタイルいいのに、もったいない」

「ほっとしてよ」

思うところがあるのか、佐伯さんが口を尖らせる。

「どう思います？」

「さて、僕には何とも」

確かに桜井さんと同じことを思ったが、ではどうしてほしいかということになる、その辺りは複雑なのでわざわざ語るつもりはない。

「というわけで、せめて弓月さんにだけでもサービスしなさいっ」桜井さんが佐伯さんに襲いかかり、再びはじまる女子プロレス。

「水着と言えばポロリよっ」

「やだ、やめてっつてば。そんなの聞いたことないっつて」

背後から組みつく桜井さんと、必死に抵抗する佐伯さん。

「これも弓月さんとの約束よっ」

「えっ」

「ぶっ」

桜井さんのトンデモ発言に驚く佐伯さんと僕。そんな約束してねえよ。誤解を招くような発言はやめてくれ。

そして、その一瞬の隙を突いて桜井さんが、佐伯さんの水着のトップスを下から上へと捲り上げた。

「！？」

あらわになつたのは、胸のふくらみの下半分。その見るからにやわらかそうな白さに、僕は息を飲む。佐伯さんが慌てて水着の裾を下ろし、もとに戻した。

「お、お京ーっ！」

「わははー。じゃ、確かに約束は果たしましたのでっ」

だから、そんな約束はしてないというに。

桜井さんは怒りに震える佐伯さんから離れると、笑いながらまた走り去っていった。

「おーい、はつまなっかくーん。……必殺、暗黒流れ星！」

そして、のこのこ歩いていた浜中君を見つけると体当たりみたいにして抱きつき、そのままもるともにプールへとダイブした。……それはまだJRが国鉄だったころの必殺技ではないだろうか。

「……お京、後で殺す……」

穏やかならざる言葉が聞こえてきてそちらを見てみれば、佐伯さんが乱れたトップスを整えているところだった。

その彼女と目が合い、

お互い顔を赤くしながら、慌てて視線を外した。

「み、見えた？ ていうか、約束って……？」

「見えてませんし、何の約束もしてませんよ。彼女が勝手に言っ

るだけです」

僕は最初にここにひとりで座っていたときのようになり、プールのほうに目を向けながら答えた。

程なく、トップスを着直した佐伯さんも僕と同じ方向を向いて、まるで体を隠すように自分の膝を抱えた。そろえた両膝に顎を乗せる。

「……」

「……」

しばし気まずい無言を経て、

「弓月くんも」

佐伯さんが先に口を開いた。

「もっと色っぽい水着のほうがよかったって思う？」

「どうでしょうね。正直、見たいとは思いますが、それを僕以外の人も見ると思うと、やっぱり複雑ですね」

「そっか」

笑いを含んだ佐伯さんの声。

「わたしも、弓月くんだけならもっと、こう、大人っぽいやつとかも着れるんだけど、他の人がいると思うとちょっと、ね」

彼女は恥ずかしそうに苦笑した。それから顔だけをこちらに向けてる。

「そんなわけで、弓月くん用にすごいのを買ってありますが、どうですか？」

「いえ、それは丁重にお断りさせていただきます」

「えー、すごいのにー」

そんな不満げに言われても困るのだが。だいたいどこまで本気なのやら。

「はい！ 突然ですが、わたしの夢を聞いてください」

今度は座り方を女の子座りに変えながら、体ごと僕へと向き直った。両手を突いて、身を乗り出してくる。

「本当に突然ですね。……なんですか？」

「キッチンで水着エプロン、耳から責められるのが夢です」

「そんな夢、その流れるプールにでも流してしまいなさい」

ああ、流れるプールだと一周回って帰ってくるかもしれないから、ウォーターライダーがいいな。

佐伯さんと約束した通りウォータースライダーへ行くと、丁度そこで他のみんなと一緒にになり、はからずも再集合となった。

「あら、恭嗣たちもきたのね」

と、宝龍さん。ハイレベルなプロポーションを黒のビキニが際立たせている。

「僕としては、もう少しプールサイドでゆっくりしていたかったんですけどね」

「まるで年寄りね」

「……自覚はしてますよ」

宝龍さんにまで言われるとは思わなかったが。

僕らは、列がゆっくり進むようにして、その流れに乗ってスタート台への階段を上っていく。

「ところで恭嗣、私を見て未だにひと言もないわね」

僕よりいくつか上の段に立つ彼女は、少し怒ったような表情で見下ろしてくる。こちらからは見上げるかたちになっているので、なかなかの迫力だ。いろんな意味で。

つまり褒めろというわけだ。

しかし、完全無欠の宝龍美ゆきを褒め出したらきりがないと思うのだが。

「そうは言いますが、僕だけですか、ひと言もないのは」

僕が思わずそう言い返すと、彼女は何か気づいたように男連中の顔を見回した。

そして、ため息混じりに、

「ダメね、うちの男たちは」

「……」

皆、少なからずぐさつときた。

「矢神君だけだわ、褒めてくれたの」

何だと!?

みんながいつせいに矢神を見る。

「い、いや、僕は見たままを……」

気弱なクラスメイトは、周囲の視線を一身に浴び、しどろもどろになりながらようやくそれだけを答えた。

「ふん。やるな、矢神」

「……」

滝沢の言葉に、ついには無言。

「時に浜中君、さつきから僕のほうをちらちら見てますが、どうかしましたか?」

「……あんたが僕の真後ろに並んできると、嫌な予感がするんだよ」

「そうですか? 気のせいでしょう」

話しているうちに、僕らはスタート台の上まで来た。

順にチューブ状の滑り台を滑っていく。

「いいか、それ以上近づくなよっ」

自分の番が回ってきた浜中君は、滑り台に足をかけるようにして座りながら、上半身だけを僕のほうに向けて、しきりにそう連呼する。信用がないな。

当然、僕は、

「心配しなくても押したりはしません……よっ、と」

蹴落とした。

期待には応えないと。

「x ー!ー!ー!ー!」

尾を引くようにして遠ざかっていく浜中君の絶叫。

ぐずぐずしているからだ。まあ、滑る体勢はほとんどできていたから、問題はないだろう。

それからもしばらく遊び回っていたが、さすがに疲れてきて、この辺りで一度みんなで休憩しようとう流れになった。

空いていたパラソル付きの丸テーブルに陣取る。4脚あるイスに

は僕と滝沢、浜中君が座っている。佐伯さんと桜井さんはふたりで飲みものを買いにいった。

「矢神と宝龍さんは？」

「もう一度ウォーターライダーに行ってるよ。言い出したのは宝龍美ゆきで、つき合わされてるのが矢神だな」

「タフですね」

と言ったものの、果たしてタフなのはどちらだろう。言い出した宝龍さんか、それにつき合う矢神か。

向こうから佐伯さんと桜井さんが戻ってくるのが見えた。

ふたりが買いにいったのは7人分の飲みもの。それぞれお店で借りたのであるうトレイに、大きな紙のカップを乗せている。

何の話をしているのか、笑いながら歩いていた。実は佐伯さんのああいう友達同士とする屈託のない笑顔というのは、僕はあまり目にする機会がなく、それを見てるとやはり彼女はとびきりの美少女なんだなと改めて思う。

「自分のカノジョは誰よりもかわいいと思っっている顔だな」
「……………」

いえ、僕の友人は誰よりも嫌なやつだと思っている顔です。隣で浜中君が、ふん、と投げやりに鼻を鳴らした。

そのときだった。

佐伯さんと桜井さんに、大学生くらいの男ふたりが声をかけてきた。ナンパか？ 僕たち3人はこちらから、無言でじっと成り行きを見守る。

彼女たちは言葉ではっきりと断ったようで、男たちの脇を抜けた。まだついてくる男ふたり。佐伯さんたちは顔を合わせないようにして、無視。それでも懸命に話しかけながら追いかけてくる。しつこいやつらだ。ジューズの数を見ればグループできていることくらいわかるだろうに。

「滝沢、ちよつといつてきます」

僕は腰を浮かした。

と、そのとき、男たちがそれぞれ佐伯さんと桜井さんの腕を掴んだ。トレイとジュースが散らばる。

「滝沢っ」

言うまでもなく滝沢はすでに立ち上がっていた。

「僕も行くっ」

「危ないから君はここにいなさい」

ついてこようとした浜中君を制しつつ、僕たちは駆け出した。

「すみません。彼女たちから手を離してもらえませんか」

自然、語調は強くなる。

僕が佐伯さんを、滝沢が桜井さんを庇うようにして立った。間に割って入って気づいたが、男たちの呼気に酒の匂いが混じっている。ここではビールも売っているのか？ それとも自分たちで持ち込んだのか？ にしても、酒の勢いでナンパとは。

「ああ？ なに、お前ら？ 邪魔してんじゃねえよっ」

次の瞬間、顔に衝撃があった。

「弓月くんっ!?!」

佐伯さんの悲鳴。

体が地面を転がり ようやくそこで、自分が殴られたことに気がついた。口の中に血の味が広がる。まさかいきなりキレられるとは思わなかった。これだから酔っぱらいは。

どうやら滝沢の前にいた相手も手を出してきたようだが、僕と違って彼は繰り出された拳を辛くも防いだらしい。

さて、どうする？ まずは佐伯さんたちを遠ざけるのが最優先か。

そう考えながら立ち上がるうとしたとき まるで僕を飛び越えるようにして、そこに誰かが飛び込んできた。

矢神だった。

後の出来事は一瞬。

ひとり目を問答無用で腹に一撃入れて沈め、殴りかかってきたもうひとりの拳を避けて、その顎にアッパーカットのように掌底を叩き込んだ。ふたりとも倒れ それで終わり。あっという間だった。

ひとりは胎児のような格好で腹を抱えながら息も絶え絶えに喘ぎ、もうひとりは顎を押さえて痛みに転げ回っている。一方の矢神は、演武を終えた達人のように深く息を吐いていた。

「……」
僕は呆気に取られ、滝沢は感心したように口笛を鳴らした。
相変わらず鬼神の如き強さだな。

結局、そのまま再度盛り上がるような雰囲気にはなれず、水を差されるかたちでお開きとなってしまった。

別れる間際まで、桜井さんは泣きそうな顔で何度も僕に謝っていた。今日のイベントの発起人も彼女なら、ナンパされたのも彼女なので、僕が怪我をしたのも自分が原因だと思いついてるようだ。

僕は気にしないでくださいとしか言いようがなく（実際、彼女が悪いわけでもないのだから）、後は宝龍さんに任せて別れた。

そして今、僕と佐伯さんは、ふたりで電車に揺られていた。車内はそれなりに混んでいて、当分は開かない側のドアに並んでもたれている。

「大丈夫？」

佐伯さんが心配そうに聞いてくる。

「大丈夫ですよ、体はね」

いきなり一発殴られたが、顔が軽く腫れ、口の中を少々切った程度だ。

「体は？」

「体は」

僕は問い返してきた佐伯さんのその言葉をリピートする。

「でも、精神的に、ね。ちょっとへこんでいます」

なんとというか、

「格好の悪いところを見せたなあと。威勢よく出てきたわりには、逆にやられてしまいましたから。格好のつかないことこの上ない」
僕は少し顎を上げて天井を仰ぎ、そこにため息を吐きかけた。

「別にいいんじゃないかな。カッコ悪くても」

佐伯さんも僕と同じようにして、斜め上に目を向ける。

「そうですか？」

「うん。それに、カッコイイ人がいいんだったら、きつと弓月くん以外の人を選んできてると思うし？」

「……」

彼女は僕に追い討ちをかけたのだろうか。いや、まあ、自分が格好いいと思ったことは一度もないのだが。

「それでもわたしは信じられるけどなあ。弓月くんはわたしのピンチに、絶対駆けつけてきてくれるって。今日でわかった」

彼女は笑顔で続ける。

「それでね、自分がボロボロになっても、わたしだけは無事で、こう聞いてくるの。大丈夫でしたかって」

「……」

ひどいストーリーだな。

「買いかぶりすぎですよ。いいんですか、そんなふうに僕を信じて僕だって我が身かわいさに、佐伯さんを見捨てることだってあるかもしれないよ」

「大丈夫。弓月くんはそんなことできないから。だって、そんなことしたらわたし、弓月くんのこと嫌いになるもの」

そう言っって顔を覗き込んでくる彼女は、目だけで「どう?」「と聞いてきていたが、僕は視線を返すことができなかった。

「……」

ため息をもうひとつ。

ああ、確かに。

そういうことなら、僕にそんなことできるはずがないな。

夏休みSS-2 「僕だって男ですから」と彼は言った

「そう。うん、わかった。一度彼に頼んでみるわ。それじゃあ」
わたしは用件だけのようなお父さんからの電話を切り、ケータイを折りたたんだ。

因みに、端末の色は黒。女の子らしくない、黒。

なぜこれを選んだかというところ、弓月くんとおそろいだからだ。彼と同じものを持っていたくて、わたしはこれを選んだ。……おかげで、ふたりともがりビングのテーブルにケータイを放り出しているところ、ストラップでしか見分けがつかないけど。

さて、部屋を出る。

と、その弓月くんがりビングでうたた寝をしていた。座イスの背もたれを何段階か後ろに倒し、横になるようにして体を預けている。

弓月くんは、この家の同居人にして、わたしの彼氏だ。

1学期の終わりにわたしたちは念願叶って、恋人同士になった。出会って3ヶ月だけど、わたしに言わせれば、『3ヶ月もかかった』だ。まったく、弓月くんめ。知り合っただけに好きになっただけに。世話のかかる。

その彼が寝ている。

目を閉じて（当然だけど）、穏やかな寝顔を見せている。起きているときにからかうとかわいいけど、こうしていると黙っていてもかわいい。どんな夢を見ているのだろう。

わたしも自分の座イスに腰を下ろした。

「……」

少しの間、彼の顔を見つめる。

あの日、保健室で彼は、もうわたしを不安にさせないと言ってくれた。その後には好きだとも言ってくれたし、勿論どちらの言葉も疑っていない。

それでも不安に思うことがひとつある。

……。
……。
……。

わたしって、魅力ない？

こつちから少し強引にねだればキスくらいはしてくれるけど、彼から求められたことはないし、それ以上のことなんて素振りもない。まるで世の中にはそういう行為が存在しないみたい。今着ている部屋着だってタンクトップにショートパンツで、夏になって生地も薄くなっただし、けっこうすごい格好だと思っただけ。こつちののを見ても、なんとも思わないのだろうか。

「むー」

と、ちょっと恨めしげに口を尖らせていると、弓月くんが身じろぎした。人の気配を感じたのだろうか、程なく目を覚ます。

「おはよ、弓月くん」

朝じゃないけど。

「……ああ、佐伯さんですか。寝ても覚めても佐伯さんとは……」

「へ？」

「いえ、何でもありません」

誤魔化すように言う彼。それから座イスの背もたれをもとに戻し、寝ている間に固まった体をほぐすため、肩を回した。……もしかして寝起きで口を滑らせたのだろうか。慣用句も微妙に間違っているし。

「どんな夢、見てたの？」

弓月くんが座り直したところで、わたしは尋ねてみる。

「たいした夢じゃありませんよ」

「わたしが出てきた？」

「……ノーコメントです」

素直じゃないなあ。

「夢の中のわたし、どんなだった？」

「君が出てきたとはひと言も言っていないのに、勝手に話を進めない

「ようじ」

「……」

こうなったら実力行使。

わたしはすつくと立ち上がると、テーブルを迂回して弓月くんのもとに行き、彼と向かい合うようにして、その膝の上に座った。

「またこんなことを……」

弓月くんは呆れ顔だけど、わたしはけっこうこれが好きだったりする。密着してお互いを感じられるし、顔が近くて、その気になつたらキスもできる。そして、何より、ちょっとえろい。ドキドキする。最初は思いつきでやつただけなのに、意外な発見もあるものだ。「そう言えば、まだ弓月くんに見せる用の水着を見せてないと思つた」

「遠慮しておきますよ、それは」

「む……」

あ、マズい。

またちよつと不安になってきた。少しくらい興味を示してくれてもいいのに。

「ね、キスしていい？」

「ダメです、今は。……ほら、もう降りてください」

『今は』ってなんだろう？

そう思ったけど、わたしはいつになく強情になっていた。

「するまで降りないって言ったら？」

「……」

「……」

わたしたちは強い意志を目に込めながら見つめ合った。視線で無言の勝負。弓月くんは膝の上に乗っているから、わたしの目線のほうが少しだけ上にある。

折れたのは弓月くんだった。彼はため息をひとつ。

「どうなつても知りませんよ」

「うわ、なんだか期待してしまう台詞」

思わずにやけてしまう。

やがてどちらからともなく顔を近づけていく。そう言えば、この体勢のいいところとして、わたしのほうがかなり優位に迫れるというのもある。

「ん……」

目を閉じ、唇を重ねる。

瞬間、わたしの剥き出しの肩に添えられていた彼の手に力がこもり、それが痛いくらいで少しびびくりした。どうしたんだろう？

でも、すぐに力が抜け、片手だけが離れ……、

え？

その手がわたしの胸に触れた。

え？ ええっ！？ ゆ、弓月くんが、わたしの……触っ……。ど、どうしよう。今、ブラしてない。

軽くパニック。

ところが今度は、わたしに文句を言わせまいとするみたいにして、彼が強く唇を求めてきた。

「んっ」

わたしも頭では動揺してくせに、それが本能なのか、求められるままにに応じて、それどころか逆にこちらからも彼の唇を奪いに行った。

間、彼の手はおそろおそろといった様子で、まるで重さを確かめるようにわたしの胸を少しだけ押し上げ、まるでやわらかさを確かめるように少しだけ指に力を入れて　それだけだった。

彼の手が離れるのをきっかけに、わたしたちは唇も離れた。

「あ、あの、あのね……。弓月くんの……。手、が……」
やっぱり頭はパニックのまま。

顔は自分でもわかるくらい真っ赤になっていて、口から出る言葉は言葉にならず、弓月くんの顔もまともに見れない。目は完全に泳いでしまっていた。

なのに、

「すみません……」

見れば、彼も赤くなつて顔を伏せていた。

ああ

それを見て、わたしは落ち着きを取り戻す。あんなことをしておきながら、顔を赤くして謝っている弓月くんが急にかわいく思えて

……。

「もっつ」

「痛っ」

思えて、でも、ちよつと腹が立って頭突きを一発。

「なんで謝るの!? それじゃ悪いことしたみたいじゃない!?

わたしが怒るみたいじゃない!?

「怒るでしよう、普通」

彼は鼻っ柱を押さえながら言う。わたしもおでこが痛い、

「怒るわけないじゃない。それに、いつかはわたしのぜんぶに触れるんでしょっ」

「え? いや、いや、まだそうとは……」

「そうじゃないって言うほうが怒りますけどもー」

だったら今のはなんだ。つまみ喰いか!?

「いや、まあ、君の言う通り、かもしれませぬ……」

「ならいいじゃない」

「そうもいきませぬよ。考えてもみてください。僕たちは一緒に暮らしているんです。その辺りのたがが外れたら、後々大変ですよ」

「……」

「……」

「ま、まいにちやりたいほうだいですか?!?」

それは確かにたいへんかもしれない。

「その表現もどうかと思いますが。それに僕が君と一緒にいられるのは、君のお父さんが僕のことを信頼してくれているからです。その信頼を裏切らないよう、高校生のうちはそれ相応のつき合い方を心がけるべきです」

弓月くんの考え方は至極当然。一分の隙もない。……でも、やっぱりちよつとだけ不満だ。

わたしは彼の首の後ろに両手を回した。

「もしかして弓月くん、本当はいつもわたしに触れたいと思ってた？」

「え？」

小さく短く戸惑いの発音。そして、ほんのわずか、どう誤魔化そうか考えていたみただけだ。諦めたよう。

「それは、まあ、思うこともありますよ。僕だって男ですから。いつもではありませんけどね」

「そっか」

わたしは笑う。

安心した。わたしに魅力がないわけでもないし、弓月くんもそういう気持ちがあつたらしい。

「でも、えろいことをした責任はとってもらおうと思います」

「またですか？ まあ、仕方ありませんが」

弓月くんは必要のない反省をしている模様。

責任といつても、勿論この前みたいなキスではない。

「9月に入ったら、お父さんとお母さんがロスから帰ってくるんだつて。3週目の日曜日」

「そうなんですか。もつと先だと思っていました」

「うん。ちよつと早まつたみたい」

延びたり早まつたり、なんとも流動的な予定だ。

「それでね、帰ってきた日にいろいろ手伝つて欲しいんだつて」

もともと1、2年くらいと決まっていた海外勤務だったので、家財道具なんかはほとんど置いていって、家の管理は近くの親戚に任せていた。なので、帰国したところで引っ越しというほど大袈裟なものにはならないと思う。ただ、それでも向こうで増えたものも多
く、その辺りの整理が大変そうなのだ。特にお父さんの仕事周り。

「僕にですか？」

「そう。お父さん直々のご指名です。弓月くん、信頼されてるから
「そうですか。わかりました。そういうことなら喜んでいかせても
らいましよう」

点数稼ぎはしておかないと と、弓月くん。

「ついでにお母さんにも挨拶しとく？」

「挨拶はしますよ。初めて顔を合わせるんですからね。でも、君が
思っているような挨拶ではありませんが」

「ちえ」

残念。

でも、ま、いつか。今日はいろいろと弓月くんのことをまた知っ
たし。

「ほら、いいかげん降りてください」

「あ、そだね」

そういえば、まだ彼の膝の上に乗ったままだった。降りる前にも
う一度キスをしようかと思ったけど、今日のところはもうやめてお
くことにした。

1. 「僕にとってはね」

9月1日、

夏休みの終わりを告げる朝の第一声は、呆れるほどにいつも通りだった。

「モーニンッ」

佐伯さんの元気な声。

半覚醒の状態ですでに瞼の向こうに朝の光を感じていた僕は、その声で完全に目を覚ます。

目を開ければ、とびきりの美少女が僕を真っ直ぐ見下ろしていた。「……おはようございます。もうそんな時間ですか」

「うん、おはよう。朝ごはんできてるよ」

僕が上体を起こすと、それに連動して覆いかぶさるようにしていた佐伯さんが退く。

「君は朝から元気ですね。今日は特に、夏休みが終わったというのに」

「でも、そこはそれ、頭を切り替えないとだから」

彼女はベッドの端に座った。

「それに9月はイベントが目白押しです」

「何かありましたっけ？」

「弓月くんの誕生日でしょ。うちの両親が帰ってくるでしょ。それに、学園祭」

ああ、そんなのもあったな。というか、学校がらみのイベントのほうが少ないか？ ついでに僕も、さっそく明日イベントがあることを思い出した。

「だから、学校は学校で楽しみがあると思うしね」

「まあ、僕も学校は嫌いではありませんが。でも、一般的な感覚として、やっぱり家でダラダラしているほうがいいです」

「家にはわたしがいるし？」

彼女はいたずらっぽい笑みで問うてくる。

「さて、頭を切り替えましょう。ほら、出て行ってください。着替えますから」

「もっつ」

彼女は足を踏み鳴らすようにして立ち上がると、頬を膨らませながら部屋から出て行った。

「……」

佐伯さんの姿が消えたドアを見つめる僕。

まあ、確かに、夏休みは一日中一緒にいたことが多かったな。去年には考えもしなかったことだ。

佐伯さんと一緒に朝食を取り、それぞれ自室で登校の準備を整える。当然のことながら、リビングに出ていったのは僕が先だった。

スラックスに半袖のカッターシャツ。制服に身を包むのも久しぶりだな、と思っていたら、佐伯さんの私室のドアが開き、彼女が姿を現した。丈を詰めた赤いチェックのスカートに、半袖のブラウス。

「お待たせー。……どう？」

と、佐伯さん。

「どう、とは？」

「久しぶりの制服です。超ミニにナマ足。……ぐつとくる？」

「きませんよ。何せ僕は君より一年早く水の森に通ってるんですから。制服なんて見慣れてます」

「むー」

その返事がお気に召さなかったのか、彼女は、

「突然ですが、わたしの夢を聞いてください」

「嫌です」

僕はきつぱりと断る。ついこの間、同じパターンで呆れる夢を聞かされたばかりだ。

「学校の図書室で制服プレ」

「だから、いらないう言ってるでしょうが」

僕は佐伯さんの言葉に、自分の発音を重ねる。断ったはずなのだが。

「おかげで朝起きてからベッドの上で、枕に顔を埋めてバタバタしちゃった」

「……」

今朝見た夢の話かよ。

「どうしてこんな見たんだろ？ 久しぶりの学校だから？」

「……知りませんよ」

いくら学校が楽しみでも、普通はそんな夢を見たりはしない。

いつまでも莫迦な話につき合っていられないので、僕は登校すべく玄関へ足を向けた。佐伯さんも後をついてくる。

順に靴を履いて玄関を出た。

マンシヨンの外に出ると、一気に体感温度が上がった。僕の横では佐伯さんも、体を撫でる熱気に「うわ」と小さな声をもらす。盆前後に比べたら朝晩の気温が少しはマシになったが、それでもまだまだ暑い。夏の勢いはもうしばらく続くようだ。

制服と同じく、この時間に家を出るのは久しぶりだ。

住宅地を抜ける。

間、僕らに会話がなかったのは、この暑さに辟易していたせいだろうか。大きな道路に出ると街路樹が多くあるため、今まで聞こえていたセミの音が、いつそう大きくなった。

「あーあ、やっぱり家のほうがよかったかも」

道路に沿って歩道を歩きはじめたところで、ようやく佐伯さんが口を開いた。

「どうしました？ 暑さが堪えますか」

家を出てここまで3、4分といったところだが、僕も背中が少し汗ばんできている。今日は始業式とホームルームだけでも、明日のイベントを経て、明後日からはさっそく通常授業。体育があればもっと暑い時間でもグラウンドに出なくてはいけない。それを思うと嫌になるのも当然だ。

「や、夏休みつて新婚生活の予行演習みたいでよかつたなと思って
「ほう。そんな予定がありましたか。相手はいつたいどのどなた
……でっ!？」

その言葉が終わるのを待たずして、佐伯さんの肘が僕の脇腹に突
き刺さった。

「わたし、あんなことしたのもこんなことされたのも、みーんな弓
月くんが初めてなんですけどもー」

「……」

反省の余地がおおいにあるな。

僕たちの前に、学園都市の駅と水の森高校を結ぶ道路が見えてき
た。さて、人に聞かせられない話はこの辺りにしておこう。

蒸し風呂のような体育館で始業式をこなした後は、教室でホーム
ルーム。

「夏休み前にも言ったが、2年生と3年生は、明日は実力テストだ
我らが担任、加茂先生が告げる。

その言葉通り、夏休み前からわかっていたことだが、それでも文
句が口をついて出るのが人の心情というもの。「えー」「やだー」
「いらねー」などなど、教室のあちこちから声上がる。

さらに明日の流れについての説明が続く。

「矢神、勉強してますか？」

僕は体を前傾させ、前の席に座る友人に聞いた。

「ひと通りは」

矢神は逆に、体を反らすようにして答える。

「弓月君は？」

「もちろん、してますよ」

慌てない程度には。

実力テストは勉強などせず、そのときの実力で受けるものだ、な
どという莫迦な発想もないわけではないが、そんなものは勉強をし
たくないものの言い分で、予めわかっているなら備えておくのが高

校生の正しいあり方だろう。

僕も夏休みのうちからこつこつと明日のために勉強してきたが、だからと言って、前日に何もしなくていいわけではなく。学校から帰って佐伯さんと昼食を食べた後、自室で軽く流すようにして最後のまとめをはじめた。

しかし、教科が多い。何せ明日一日で5科目ほどをやってしまうのだ。勉強は夕食をはさんで夜まで続き、

「どうしたの。帰ってから籠りつきりだけど」

午後9時、今日何度目のコーヒーを取りに部屋を出ると、リビングにいた佐伯さんに問われた。座イスに腰を下ろしている彼女は、僕を見上げる。

「籠りつきりというわけではないのですが」

区切り区切りでリビングに出てきて休憩をしたりしているのだが、ちょうどそのタイミングで彼女が自分の部屋に入っているのだ。おかげで昼食と夕食のときしか顔を合わせていない気がする。

僕がマグカップを持ってキッチンへ向かうと、佐伯さんも座イスの回転機能を使って追いかけるように体の向きを変えた。

「明日、2、3年生は実力テストなんですよ」

「あ、そう言えば、そんなこと言ってたような？ 休み時間が15分になって、予鈴が鳴るとか」

その辺りの変則的な時間割りは、テストがない1年生にも影響する。

保温ポットからマグカップへコーヒーを注ぐ。ちょうど1杯分で空になった。これが本日の最後の1杯のようだ。

「まだするの？」

「そのつもりです」

「そっか。……あ、ポット、わたしが洗っとくからおいといて」

佐伯さんが立ち上がり、こちらに小走りに寄ってきた。僕だってコーヒーメーカーの保温ポットを洗うくらいのはするのだが、

今日のところは厚意に甘えておくことにしよう。お願いします、と彼女にポットを手渡す。

「他に何かすることある？ 夜食とか」

「大丈夫です。今日はそこまでするつもりはありませんので」

そのためにこつこつやってきたのだから。

「そう。でも、必要なら言っ。わたしもまだ起きてるし。鍋焼きうどんでも何でもするから」

「この夏のさなかに何の嫌がらせですか」

受験生じゃあるまいし。というか、冬の受験生でもそんなベタはしないのではなからうか。

「気持ちだけ受け取っておきますよ」

とは言え、僕のために何かしてくれようとする気持ちは本当なのだろう。ありがたい話だ。僕は微笑む佐伯さんに見送られ、マグカップを持って部屋に戻った。

次に僕が部屋から出てきたのが午後11時前。

するとリビングのテーブルで、自分の腕を枕に突っ伏して眠っている佐伯さんがいた。本当に僕がいつ何を言ってきたもいのように起きていたのだろう。実際にはこうして力尽きてしまっ。はいるが。

「佐伯さん、そんなところで寝ていると風邪をひきますよ」

ひと声かけてから僕は一旦キッチンへ向かった。シンクにマグカップを置いてから振り返る。

「……………」

と、彼女はまださっきと同じ構造のままだった。寝入ってしまったという。ということなのだろう。

「これはつまり、僕に部屋まで運べということでしょうか」

わざわざ発音してみる。ほんのわずか、彼女が反応を示したような気がしないでもない。

ふむ。

次に僕は、佐伯さんの不思議な色の髪をすくい、後ろに流すよう

にして梳いてみた。

「ん……」

彼女の口からかすかな声がもれる。

あいかわらず繊細で滑らかな手触りだ。いつまでも触れていたい
が、そうもいかない。今、僕の前には、髪を何度か梳いて露になっ
た、かたちのよい彼女の耳があつた。

それを軽くつまんでみる。

「ひゃっ」

今度ははつきりと悲鳴を上げ、佐伯さんが飛び上がるようにして
起きた。

「むりっ。耳はむりだつてば」

「やっぱり起きてましたね」

そんなことだろうと思つた。

「うーん、バレてたか。弓月くんがベッドに運んでくれるんだと思
つたら、顔がにやけるのが我慢できなかったからなあ」

彼女は自分の頬をさすりながら、ばつが悪そうに笑う。

「もう。髪と耳は弱いのに」

「わかつてますよ。だからやつたんです」

「弓月くんも、いい感じにえろくなつてきた？」

意地悪そうな笑顔の佐伯さん。期待がこもっているように聞こえ
るのは気のせいかな。

「そんなつもりはありませんけどね」

「というか、耳が痛い言葉だ。夏休み中、自制心が利かず、魔がさ
したからな。」

「君、僕につき合つて今まで起きていたんでしょう？ すいません。
僕はこれでシャワーを浴びて寝るつもりですから、佐伯さんももう
寝てください」

「ん、わかつた。そうする」

答えて佐伯さんが腰を浮かし、僕は着替えを取りに部屋へ足を向
ける。

と、

「ねえ」

呼ばれて振り返れば、そこにずっと佐伯さんが距離を詰めてきた。ほとんど零距离で相対し、彼女は真下から僕を見上げてくる。

どこか、誘うような視線。

「いい点が取れるおまじない、してあげようか？」

「……」

僕とてここで、それはどんなのですか、と問うほど鈍くはないつもりだ。

でも、

「せつかくですが遠慮しておきます。覚えたことをぜんぶ忘れそうですから」

「あ、そんなに威力あるんだ」

少しびっくりしたように、佐伯さんは目を丸くする。

「僕にとってはね」

「そっか じゃあ、やめとく」

再び僕らの距離がひらく。

まるで何ごともなかったかのように。

「おやすみ、弓月くん」

「おやすみなさい」

彼女はやわらかい笑みをひとつ残して、ドアの向こうに消えていった。

「……」

僕は安堵のため息を吐く。

ひとまず今日の僕には合格点をあげてもいいだろうか。

2. 「……してませんよ、そんな顔」

「弓月さんのクラス、学園祭で何やるか決まった？」

ある日の朝、向かいに座る佐伯さんが、そう聞いてくる。

ダイニングキッチンで二人用の小さなテーブルで、向かい合って朝食を食べるのは毎日の風景だ。2学期がはじまって1週間以上が経っているが、それは4月からずっと変わらない。尚、今日はフレンチトーストにトマトサラダが食卓に並んでいる。

「いえ、まだですね」

僕はフレンチトーストを飲み込んでから、そう答える。

9月の最終週の土日は水の森高校の学園祭がある。あと2週間ほどか。

「とは言え、いいかげん決めるんじゃないでしょうか。佐伯さんのクラスは？」

「なんかね、メイド喫茶なんて話が出てるみたい」

「それはまた、ある意味ベタですね……。でも、さすがに学校側の許可が下りないんじゃないでしょうか」

「わたしもそう思う」

言って佐伯さんは苦笑いする。彼女もさすがにむりがあると思っ
ていたようだ。

一時期はブームになってテレビ番組でもたびたび取り上げられていたが、果たして、その知名度に対してあれが健全なものであると思っ
ている人間はどれほどいるだろうか。どうにもいかがわしさが先に立って、学校は許可しないに違いない。僕にとっても理解の範
囲外だ。

「メイド服だけならちよつと着てみたいとは思っけど」

思っのか。佐伯さんらしいと言えば佐伯さんらしいが。

「弓月くん、見たい？」

「きつと似合うだろうなとは思いますが」

基本的に何を着ても似合うのだが、彼女の場合、むしろこういう方面にこそ本領を発揮するような気がする。コスプレというか。

「だからといって、正直に見たいと言つと、君は家で着るとか何とか言いそうですからね」

「家で……」

すると、そつつぶやいた佐伯さんは、箸の先を口に当て、何やら考えはじめた。もしかしたら何かコミュニケーションしているのかもしれない。

そして、

「家で着ても面白くないと思わない？」

「……」

ああ、そうですか。

てつきり佐伯さんのことだから、そういう発想になると思ったのだが。……わからない。彼女は予想以上に深遠らしい。

話を戻そう。

「しばらくはこの学園都市も賑やかになりますよ」

「そうなの？」

「9月の下旬から10月にかけて、毎週末、必ずどこかの高校が学園祭をやってますからね」

なにせ学園都市は教育機関が集積された街だ。小中学校、高校、大学が数多くある。聞いた話によると、学園祭の開催日が偏らないよう毎年話し合いで決めているらしい。この期間自体が学園都市のイベントなのだ。

「11月になると今度は大学の学園祭ラッシュがはじまります。一週間続けて開催する大学もありますからね。さらに賑やかですよ。去年は僕も、滝沢たちと一緒にその高校を見にいきました」

「因みに、どこへ？」

「……茜台と看護学校です」

少々言いにくい答えを口にする、佐伯さんはむっとしたような顔になった。

「それってどーゆーチョイス？」

茜台高校はお嬢様学校として有名な女子高。看護学校は、近年男子生徒も増えてきたとは言え、生徒の9割は女の子だ。佐伯さんがむっとするのもむりはない……のだろうか。

「滝沢ですよ。行こうと言いだしたのも彼なら、チケットを調達してきたのも彼です」

「あ、そうなんだ。意外」

と、佐伯さんは感想をもらしているが、案外そうでもなかったりする。彼はクールで落ち着いているが、ああ見えて女の子に対して年相応には興味をもっている。去年は僕に宝龍美ゆきの話題を振ってきたし、今年は佐伯さんの話だった。

「よその学校のことはおいといてさ　ね、うちも2日あるじゃない？」

「ありますね」

土曜と日曜。

そして、翌月曜は振り替え休日となる。

「どっちか一緒に回らない？　学祭デート」

「いいんじゃないでしょうか。お互いクラスの出しものも決まっています、うまく合わせて同じ日に体があくようにしましょう」

「うん、わかった」

続く会話も終始話題は学園祭のこと。

このときの僕は、これを特におかしいとは思わなかった。

学校に着き　教室に入って荷物を自分の席に置き、イスに座ったところで声をかけられた。

「おはよう、恭嗣」

僕を名前で呼ぶのは、この学校でひとりしかない。宝龍さんだ。僕が挨拶を返そうとすると、彼女はさらに続けた。

「そして、おめでとう」

「おめでとう？」

思わず鸚鵡返しにする。

「誕生日でしょう、今日は」

「ああ」

そう言えばそうだった。

9月の13日。

「それを言ったら、あなたもそうでしょう。なにせ同じ日なんですから。……おいくつになれました？」

「女に年を聞くものじゃないわ」

すかさずデコピンが飛んできた。しなやかな長い指から繰り出されるそれは、思いのほか痛い。

「まあ、僕よりひとつ上なのはわかっているから、わざわざ聞くまでもないわけですが」

「そのわざわざ聞くまでもないことを聞いて、痛い目に遭うのは何か特殊な趣味なのかしら？」

「……」

僕としてはあくまでも冗談であって、物理的反撃を喰らうとは思っていないかったわけ。

「それよりも」

と、宝龍さんは僕の前の席、まだ登校してきていない矢神の席に腰を下ろした。

「今思い出したようなその口振り。あの子とそういう話はなかったの？」

「佐伯さんですか？　ありませんでしたね」

「おかしいわね」

彼女は首を傾げる。

「忘れてるんじゃないですか？」

「自分の誕生日を忘れる男はいても、好きな男の誕生日を忘れる女はいないわ」

断言した。そんなものだろうか。

「じゃあ、佐伯さんにとって僕の占める位置がその程度だったとい

うだけの……痛っ」

「再びのデコピン。」

「口に気をつけなさい、恭嗣。あなた今、愛想を尽かされても文句の言えないことを口走ったわよ」

「……以後、気をつけます」

もしかしたら今、彼女の中でデコピンがブームなのかもしれない。後で矢神にでも聞いてみよう。

「しかし、そんな話が出なかったのも事実ではありますが」

「変ね。あの子、この手のイベントは好きそうなのに」

彼女はかたちのいい顎を、二発のデコピンを繰り返した指でつまみ、視線を床に落として考え込む。

確かに佐伯さんはイベント好きだ。それを考えると、宝龍さんの言う通りおかしい気がする。ただ、今朝に限って言えばもっと大きなイベント、学園祭の話題があった。単にそれに埋もれてしまっただけのことではないだろうか。

ふと、宝龍さんが動きを止めた。もともと動いていなかったのに、思考が止まったというべきか。

彼女はゆっくりと僕を見、そして、おもむろに立ち上がった。

「宝龍さん？」

「……考えてたらバカらしくなってきたわ」

「ばっさりひと言。」

「それだけを言い残して、宝龍さんは立ち去った。」

「……」

それはそうだろう。佐伯さんが僕の誕生日を忘れていないかなんて、宝龍さんには関係ない。莫迦らしくもなる。

去った宝龍さんと入れ違いに、矢神が姿を現した。

「どうしたの？ 浮かない顔してるみたいけど」

いきなり訊かれる。

「浮かない？ 特にそういう自覚はないのだけど。」

「何でもありませんよ。ところで矢神、最近の宝龍さんってデコピ

ンがブームだったりしますか？」

「デコピン？」

きよとんとする矢神。

「いえ、気にしないでください。こつちの話です」

宝龍さんの言葉が妙に後を引き、授業中もずっと同じことを考えていた。

佐伯さんは僕の誕生日を忘れているのか

そして僕は、呪いのようにそれに囚われて、学校から帰って夕食がすすんでも、未だリビングで考え込んでいる。座イスの背もたれに体を預け、垂れ流しのバラエティ番組を見るともなしに見る。

結局、先の夕食のときもそんな話はなく、佐伯さんは自室に入ってしまった。このまま今日が終わるかもしれない。

さて、どうしたものか。

それとなく思い出すよう仕向けるか。それとも「今日は何の日か知ってますか？」とわかりやすくネタを振るか。もういつそのこと聞き直つて「今日は僕の誕生日なんです」と言ってしまうのもいいかもしれない。なんなら「何かください」もつけるか。そこまでいけば十分に冗談として成立するだろう。

と、そこで佐伯さんの部屋のドアが開いた。

「うわ、弓月くん、まだここにいたんだ」

出てきた部屋の主は、驚きの声を上げた。

まあ と答える僕。確かに今日はあまり部屋に入らず、リビングに居座っているな。

佐伯さんを見る。白いショートパンツに、肩紐の細い、ピンクのノースリーブのトップス。体のラインがはっきりと出ている。いつもの部屋着姿だ。そして、相変わらず僕の誕生日など忘れてしまっている様子。

「？ わたしのことじつと見つめて、どうかした？」

佐伯さんは首を傾げる。よけいなことを気にしていたせいで、無

遠慮に見てしまっていたらしい。

「さては、ようやくこの格好の魅力に気づいたか。弓月くん、胸フエチだから」

「誰がですか」

「だから、弓月くんが。理由も言ったほうがいい？」

「……いえ、けっこうです」

過去の過ちを何度も蒸し返されてはたまったものではない。

「ねえ」

一度はテレビに向き直った僕だったが、呼ばれて再度彼女を振り返る。

佐伯さんはわずかに視線を外し、何やら言いくそうにしていた。何なのだろうか。

「どうしたんですか？」

「う、うん……」

少しだけ赤くなる頬。

「実は、夏休みのあれがちょっとよかったから、またあんなふうにしてほしいなって……」

「……」

「……」

「……さて、と」

僕は聞かなかったことにして、立ち上がった。

「部屋に戻るとしますよ」

冗談のネタにされてもたまらないが、本気の話で持ち出されても困る。

その佐伯さんというと、

「はいはい」

と、笑いながら手をひらひら振っている。やはりからかっていたようだ。こっちは海より深く反省しているのに。

逃げるように部屋へ入り ふと気づく。

どうにも、らしくないことを考えているな、と。

佐伯さんが僕の誕生日を忘れているからといって、それがどうしたというのか。別に祝われたいわけでもないだろうに。

ベッドに体を投げ出し、これまでの自分を振り返ってため息を吐く。

ドアをノックする音が聞こえた。

「はい」

体を起こす。と同時にドアが開き、佐伯さんが顔を覗かせた。

「弓月くん、ちょっと出てきてくれる？」

「どうかしたんですか？」

言っただけ言っただけドアの向こうに消えた彼女を追って、僕も部屋を出る。

「ほら」

と、どこか自慢げに指し示されたのはダイニングキッチンのテーブル。

そこにあつたのは、宙に浮くようなかたちに固定されたプラスチックと漏斗。そして、それを下から熱するためのアルコールランプ。それは熱物理学的イベントを目の当たりにしながらコーヒーを抽出できる器具一式で、いわゆるガラス風船型のコーヒーサイフォンだった。

「これは……」

僕は佐伯さんを見る。

「うん、誕生日プレゼント。弓月くん、こういうの好きそうだから彼女は笑って言う。」

その通りだ。コーヒーマーカーと違って抽出の工程がよくわかるので、実家近くのコーヒーショップでもいつもカウンタから眺めさせてもらっていた。いつか自分でもやってみたいとは思っていたが、美味しく淹れるには技術と経験がものをいうとのことで、今まで挑戦を避けていた。

「もっと早く出したかったのに、ずっとリビングいるんだから」

それは申し訳ないことをした。

「でも、おかしかったあ。弓月くん、わたしが誕生日のこと忘れてないか心配そうに、こつちをちらちら見るんだもん」

「……してませんよ、そんな顔」

「してました」

佐伯さんは何やら思い出したらしく、笑いながら言い返す

「ちょっとかわいかったな」

「……」

もう反論を試みるのはやめよう。あまりにも不利だ。そして、心当たりがありすぎる。

「ね、やってみてよ」

「そうですね。わかりました」

さっそく説明書を手取る。

眺めていても意味はない。コーヒーサイフォンは持っていて楽しいコレクションではなく、熱物理学を利用した、その工程こそ素晴らしいのだから。

さて、

サイフォンを使った初めてのコーヒーは、残念ながらお世辞にも上手く淹れられたとは言えなかった。それが佐伯さんからのプレゼントで、彼女と一緒に飲んだという点を加味しても。

研究の必要ありだな。

3(1)。「よければ今度、ゆっくり案内してください」

日曜日、

学校がある普段より1時間以上も遅い、8時くらいに起きたのはいつも通り。だが、今日は出かけなくてはいけない用事があり、僕も佐伯さんも朝食後、協力して雑事を簡単にすませ、それぞれ身支度をはじめた。

「おまたせー」

佐伯さんのほうが時間がかかるのは、これまたいつものこと。

部屋から出てきた彼女は、ブルーのデニムのロングパンツに、黒のプリントシャツという格好だった。

「今日はまた、ずいぶんとシンプルですね」

そのくせファッション雑誌から抜け出てきたかと思うほど様になっているのは、佐伯貴理華という素材がいいからだろう。シンプル故に着ているもので誤魔化しが利かないというか。スタイルのよさも際立っている。

「その辺、お父さんがうるさいから。はしたない格好をするな、とか」

「なるほど。だったら、それくらい無難なほうがいいですね」

ふたりとも準備が整ったところで、戸締りを確認して家を出る。

なぜ佐伯さんのお父さんの目を気にするのかというと、今日は彼女の両親が帰国する日で、まさにそのお父さんと今から会うのである。僕までついていくのは、持って帰ってきた荷物の整理や、家の片づけに駆り出されるからだ。これは佐伯さんのお父さん 佐伯トオル氏直々のご指名なので、拒否するわけにはいかない。尤も、拒否する理由もないが。

学園都市の駅に向かって歩く。

長い髪を揺らし、弾むように歩を進める佐伯さんの姿がきれいだ。9月も中旬に入り、もう残暑と呼ぶべき時期に入っているはずな

のだが、相変わらずの猛暑が続いていた。ただ、今日に限っては何の気まぐれか、それも鳴りを潜め、過ごしやすい気温になっている。「おしえてもらった感じだと、ここから1時間半ってところでしょうか。君の実家は」

「そうなのかな？」

と、首を傾げる佐伯さん。

自分でもわかっていないのは、彼女が家と学園都市を行き来したことがないからだ。昨冬、両親よりひと足早く帰国した彼女は、親戚の家に世話になりつつ、入学試験や面接などはそこら行ったのだそうだ。

「これからは気をつけたほうがいいよお、弓月くん」

佐伯さんは強気な口調で告げる、

「何がですか？」

「わたしを怒らせると、伝家の宝刀『実家に帰らせてもらいます』が出るから」

「勝手に帰ればいいでしょうに」

1時間半といえば、僕の家よりも近い。とは言え、毎日通つには少し辛い距離だろう。僕は去年、片道2時間かけて水の森に通っていたが、さすがに音を上げた。

「そんなこと言って、わたしが出ていっただら寂しいくせに」

「……まあ、部屋が広く感じるのには確かでしょうね」

物理的にも、気持ち的にも。

「ほーら、わたしがいないとダメなんだから」

勝ち誇ったように言う。

「何を言ってるんですか。それはお互い様でしょう」

「うん、そう。お互い様」

そして、笑った。

そういうことを抵抗もなく言えるのは羨ましくもあるな。気がつけばもう学園都市の駅が見えてきていた。

学園都市から一旦、一ノ宮へ出る。

そこからJRに乗り換え、方角的には以前に佐伯さんと出かけた繁華街、ひいては僕の家とは反対方向へと向かうことになる。新快速でしばらく行ってから、普通電車へ乗り換えだ。

車内は比較的空いていて、僕らはボックス席に向かい合わせに座った。

進行方向に向いて座る佐伯さんは、家が近づくにつれて懐かしい風景が増えてきたのか、よく窓の外に目を向けている。僕にとっては車窓を流れていく景色は初めて見るものばかりだ。

「ところで、佐伯さんのお母さんってどんな方ですか？」

佐伯さんのお父さんとは以前一度だけだが会っていて、だいたいの人柄は掴んでいる。真面目な方だ。だが、お母さんのほうは今日初めて会う。初対面にあたって予備知識がほしいところ。

「えっと……、わたしのお母さんです」

佐伯さんは車窓から僕へと向き直り、そう答えた。

「そんなことはわかってますよ。どんな感じの人かおしえてほしいんです」

「うん。だから、わたしのお母さん」

「……」

再度繰り返したその言葉の意味を、僕は考える。

つまり、佐伯さんを生んだ母親であり、佐伯さんを形成する遺伝子の半分を提供した人物、ということなのだろう。

「……それは怖いですね」

「どーゆー意味!？」

言うまでもなく、そのままの意味だ。佐伯さんと同系統、下手をすると彼女をパワーアップさせたような人が出てくるかもしれないのだ。怖いに決まっている。

「それより、ちゃんと練習してきた？」

彼女は不意に話題を変える。

「何をですか？」

「『お嬢さんを僕に』」

「するわけないでしょう」

今日はそんな目的で行くわけではない。

「ものは試し。言ってみたら？ 案外すんなりいくかもよ？」

「……」

思わず真面目に考えてしまった。

「おー、懐かしい」

目的の駅に降り立つ。

所要時間は予想の通り1時間半ほど。各駅停車の普通電車しか止まらない駅なので小さいところかと思っていたが、小ぢんまりとした感じはなかった。

佐伯さんのここにきての第一声は、先のようなもの。

「そう言えば、君は帰国してからこっち、家には帰ってないですよね？」

片道1時間半なら行き来できない距離でもないだろうに。

「うん。まあ、そうなんだけど。でも、帰ったところで何もなし。家族のいない家なんて、寂しいだけだから」

確かに。

「それに未来のダンナ様の世話もあるし？」

「言ってなさい」

僕は改めて辺りを見る。

駅の規模としては学園都市の駅と同じくらいだろうか。どちらもそんなに大きい駅ではないが、駅周辺の空間を大きくとっているのが共通している。それにここ何年かのうちに増改築したのだろう、非常にきれいだ。ただ、駅前にこれといった施設はないようで、少々閑散としている。ロータリーには運悪く一台のバスの姿もなく、タクシーが数台とまっただけだった。

ここが佐伯さんの住んでいた街か。

そう思えば不思議と興味はわく。

「どうかした？」

周囲を見回す僕に、佐伯さんが問うてくる。

「よければ今度、ゆっくり案内してください」

「？ 別にいいけど？」

彼女はうなずきつつ怪訝そうな顔をした。もしかしたらここで生まれ育った佐伯さんにとっては何でもない街で、興味を示すことが不思議なのかもしれない。僕だって彼女が関わっていなければ、単に寂しい駅だと思っただけで終わっていただろうと思う。

「じゃあさ、さっそくアイス食べてく？　すぐそこにいいお店があるんだ」

「家に行かなくていいんですか？」

「早く帰っても手伝わされるだけだと思っけどなあ」

確かにそうかもしれないが、とは言え、その片づけるものの中には佐伯さんの荷物だつてあるのだ。自分のものは自分でやらないと、いつまで経っても終わらないだろうに。単におじさんの手伝いである僕はそれでもいいが。

でも、まあ、それくらいの寄り道はかまわないだろう。たいして時間をとるわけでもなし。佐伯さんお気に入りの店というのも興味がある。

と、思っていたら、

「貴理華！　弓月君！」

よく通る渋い声。

「こっちだ」

見ればロータリーのバスやタクシートの邪魔にならない場所に一台の車が止まっていて、その脇に立つ人物が手を上げてこちらに合図を送っていた。

おじさんだった。

「……うわ、迎えにきてるし」

佐伯さんがげんなりしたように零す。

それから僕らは顔を見合わせて苦笑した。どうやらアイスクリー

△はお預けのようだ。

3(2) . 「信頼を裏切るようなことはしていないつもりです」

「迎えにきてもらおうことになってたんですか？」

「ううん」

佐伯さんは首を横に振った。

「でも、だいたいこれくらいの間に行くって連絡はしておいたから、当たりをつけて待ってたんじゃない？」

僕はロータリイで待つおじさんのもとへと足を向ける。

佐伯さんのお父さん 佐伯トオル氏は、後ろに撫でつけた髪の毛の上辺りに白いものが混じっているものの、十分に若々しい印象を受ける人だ。実際、そこまで年はいっていないのだろうと思う。今日はスラックスにTシャツ、その上にカッターシャツを羽織ったラフな格好。基本的に日本人は肩幅が狭くスーツの似合わない種族なのだが、その点、体格のいいおじさんは様になるだろうと容易に想像できる。

どうでもいい話だが、前に矢神とスーツの似合う東洋人について話したとき、僕はハンマー投げの某選手を挙げ、矢神はブルース・リーを挙げた。

たぶん矢神の中で、尊敬する人物としてブルース・リーがあるのだと思う。めったに見ることのない彼のファイティングスタイルの中に、的確な打撃で素早く敵を斃す截拳道の教えが垣間見えるのだ。

「やあ、弓月君、2ヶ月ぶりになるかな」

「お久しぶりです」

にこやかに迎えてくれたおじさんに、僕は頭を下げて応じる。

「今日はすまないな。君がきてくれると助かると思って言ったことなんだが、貴理華がむりに決めたのでなければいいが」

「いえ、そんなことは……」

微妙に脅されたような気がしないでもない。……尤も、僕が悪いのだが。

「もう、お父さんったら。本当に弓月くんが気に入ってるのね。娘のわたしより先に声をかけて」

隣では佐伯さんが、呆れるのと不貞腐れるのが入り混じったような顔をしていた。

「そういうわけではないんだがな。それにお前とはいつでも話せるだろう」

「そう言っただけで後回しにされるのって、けっこう嫌なものなんですけど?」

「……」

それは間接的に僕を責めているのだろうか。前に同じ理由で、宝龍さんを優先したからな。

「子どもじゃないんだ、くだらないことで拗ねるんじゃない。……さあ、ふたりとも乗りなさい。こんな屋根もない日向で立ち話をしているも暑いだけだ」

そう言っただけで、おじさんは運転席へと乗り込む。メタリックシルバーのボディをしたクーペだ。

続けて僕らも乗ると、さっそく車は発進した。小さなロータリーをぐるりと回り、駅を後にする。近くの高級スーパーの前を通ると、すぐに市街地へと入った。住宅地に囲まれた、商業機能の乏しい駅だったようだ。窓の外に見える家屋はどれも立派なものばかりで、歴史は古そうだ。

「え、なに? お父さん、学園祭にくるつもりなの?」

「当たり前だ。娘の通っている学校くらい、一度は見えておかないとな」

前では親娘の会話が交わされていた。

僕と佐伯さんが内緒でルームシェアをしているのが発覚した夏休み前の一件。あのときの陰湿な雰囲気の影響が強いせいで、親娘の仲が悪いのではないかと思っていたが、特にそういうことはない

ようだ。今も佐伯さんは助手席に乗っているし、会話もスムーズに進んでいる。

「それに少しばかり会社のからみもあってな。まあ、今ここで言うことではないが」

「ふうん」

これ以上は人前でする話ではないということなのだろう。僕は外の景色に目を向けたまま、それを聞き流す。

それから車は15分ほど走り、佐伯邸へと到着した。

低い塀に囲まれた敷地は広いが、それに対して家のほうはやや小さめか。敷地の半分もないように見える。大きいだけの古い不便な家を取り壊し、建て直したのかもしれない。実際、周りに比べたら淡い色合いのモダンな造りで、洒落た出窓なんかも見える。面白いのは、車をしまつためのガレージがなくて、広く確保した前庭の一角に駐車スペースがあることだ。

車は開いていた門から敷地内へと入り、玄関に横付けして僕らを降ろした。

「入って」

レバー状の取っ手を回して玄関に入る佐伯さんに促されて、僕も彼女の後に続く。

「ただいまー。お母さん？」

「はい」

すぐに返事が返ってきた。……さてさて、ついにご対面だ。いったいどんな人が出てくることやら。

「おかえりなさい。ようやく帰ってきたわね、この放蕩娘は」

玄関を入っていちばん近くにあったドアから、佐伯さんのお母さんらしき人が姿を現した。そちらがリビングとダイニングキッチンになっているようだ。

おばさんは少しタレ気味の目が特徴的な、とても上品で、愛らしい方だった。エプロンをしているところを見るに、掃除か片づけの最中だったのだろう。そのせいか今はパーマがかかって波打った髪

をくくり、ポニーテールのようにしていた。さすがに佐伯さんのお姉さんというには苦しいが、それでも若く見えるし美人だ。

「誰が放蕩娘よ。帰るべきときにちゃんと帰ってきてるじゃない」

「そちらが弓月さんね？」

娘の抗議はさておき、おばさんは僕へと顔を向ける。

「はい、弓月恭嗣といます」

「何でも貴理華の学校の先輩で、家もすぐ近くだそう。貴理華がお世話になっております」

深々と頭を下げた。

そうなのだ。おばさんに対しては、僕と佐伯さんはたまたま近所に住んでいる先輩後輩ということになっている。同居の事実はおじさんのところで止まっているのだ。

それにしても、おばさんはごく普通の人だな。この母親と真面目な性格の父親の間に佐伯さんが生まれたわけだ。いったい彼女のあの性格を形成する遺伝子はどこからきたんだ？ オリジナルか？ 尤も、そろって美貌の持ち主だという点では、母娘なのは疑う余地もない。

「前には主人とも会ったと聞いてるわ。それなのにたった一度だけあつた子にこんな手伝いを頼むなんて、困ったものね」

「いえ、これくらいいたしたことありませんから」

「そう？ そう言ってもらえると助かるわ」

おばさんは、目尻をさらに下げて微笑んだ。

こつちはとつくに手伝う気になっているので、変に恐縮されるよりは素直に喜んでもらうほうが嬉しい。

「なんだ、まだこんなところで立ち話をしているのか」

そこにそのおじさんが入ってきた。

「せつかくきてくれたんだ、お茶くらい出してあげなさい」

「そうは言いますが、まだぜんぜん片づいてないんですよ？ お

買いものも行っていないから、何もありませんし」

「……む。それもそうか」

おじさん、意外と奥さんには弱そうだな。

事前に聞いていた話では、佐伯夫妻は今朝の便で帰国したようだ。荷物の類もすでに着いているらしく、この玄関から見える廊下にもいくつかの箱が置いてあった。通常の引越しほどではないが、それでも持って帰ってきたものは多く、そう簡単に片づけられるものはなさそうだな。

おばさんの担当はキッチン回りというところか。食器類は置いていっただろうが、まさか2年放置したそれをすぐに使うわけにもいくまい。

「なら、先にできることをやりませんか？」

「そうだな。彼の言う通りだ」

僕は玄関を上がった。おばさんが出してくれたスリッパに足を突っ込む。

「じゃ、弓月くんはわたしの部屋に」

「何を言っているんだ。彼には私の手伝いのためにきてもらったんだろうが。だいたい男の彼にお前の部屋の何を手伝わせる気だ。…

…弓月君、すまないがこっちだ」

「はい」

僕はおじさんに招かれ、正面の廊下を進む。

「あらあら、弓月さん、引っ張りだこね」

「もっつ」

後ろではそんな声が聞こえてきたが、聞こえない振り。佐伯さんのふくれっ面が目に見えるようだ。

つれてこられたそこは書斎のような部屋だった。木製のデスクがあり、扉つき本棚が並んでいる。ここが佐伯トオル氏の私室であり、仕事を家に持ち帰ったときの仕事場なのだろう。

その部屋の隅に段ボール箱が4つ5つ置いてあった。

「それが持って帰ってきた荷物なんだ」

僕がそれを見ているのに気づき、おじさんが言う。

「向こうに2年もいれば、けっこう増えるものでね」

「でしようね」

その後、何をどのようにして片づけていくかの説明があった。

実際に箱を開けてみると中は書類の類が多かったが、それを収めた封筒にどのような種類のものかがきちんと書かれていたので、非常にわかりやすかった。トオル氏の几帳面な性格が窺える。僕はそれらを取り出し、ざっと分別して床に並べていった。そして、おじさんはそれをデスクや戸棚に納めたり、会社に持っていくものとしてさらに分けていく。

ところで、多くの封筒には『F・E・トレーディング』なる名称とロゴが印刷されていた。それがおじさんの勤める会社の社名なのだろう。

「ときに、弓月君」

淡々と作業を進める中で、おじさんが切り出してきた。

「貴理華とはどうなのかね」

「……」

なんともアバウトな質問だ。

「おじさんの信頼を裏切るようなことはしていないつもりです」
問いにはそう答える。……その言葉の中に少々後ろめたい部分がないわけでもない。僕は一度手を止めておじさんへと顔を向けて言ったのだが、おじさんのほうは作業を続けながら短く「そうか」と返しただけだった。

「それならいいんだ。高校生の間は分相応のつき合い方をしてほしい。本来、学生の本業は勉学で、君もそのために高校に進んだのだと思う」

「その通りです」

「だが、高校を出るころには人間としては一人前だ。後は貴理華と……君の好きなようにすればいい。そこまでは私も干渉するつもりはないよ」

「……」

それにどう答えて言いかわからない僕は、ただ黙って聞いていた。おじさんだっけはつきりした答えが返ってくるとは思っていなかったのだらう、それ以上は特に何も言わず、言葉を求めてくることもなかった。

再び沈黙の中で作業を進める。

箱から中身を取り出し、分別、並べていく。またひとつ箱を空にした僕は、ガムテープを外し、畳んだ。そして、次の箱へと取りかかる。

と、

「妻は」

仕事の手を止めず、またおじさんが口を開いた。

「ああ見えて由緒ある家の生まれだね」

「そうでしたか。でも、わかる気がします」

ああ見えて、などと言っているが、十分にその雰囲気はあると思う。

「だけど、そのおかげで政略結婚のようなものに利用されそうになって　結局、それを断ち切るために少々思い切ったことをしなければならなかったんだ」

「……」

「親の都合を子に押しつけるような真似はしたくないものだな」

想像するに、おばさんは家を飛び出すという手段を選んだのではないだらうか。つまりおじさんは、おばさんの経験を分かち合っている。きっとそのことが娘である佐伯さんが必要以上に縛りつけないという思いにつながっているのだらうな。

3(3)。「君の話は続けたくない種類のものが多いんですよ」

片づけが一段落ついたところで、遅い昼食を取るようになった。

リビングで大量のサンドイッチの乗った大皿を4人で囲む。さすがにこんなバタバタしている日には、このくらい手軽なものしかできないだろう。と思つたら、BLTサンドやらパンに軽く火を通したアメリカンクラブハウスサンドやらもあった。いつの間にか買いたものに行っていたことといい、この品揃えといい、おばさんは意外に要領がいい人ようだ。

「弓月君のおかげで早く片づきそうだよ」

おじさんはひとつだけある一人掛けのソファに座り、嬉しそうにそんなことを言う。

僕と佐伯さんは、詰めれば3人は座れるだろうソファにふたりで腰かけ、おばさんは床に座っていた。

「お役に立てて何よりです」

僕は素直にそう返す。

飲みものはアイスレモンティ。体を動かした後なので、爽やかな味が心地よい。

「あなた、よつぼど弓月さんが気に入ったのね」

笑いながら言うのは、僕らの向かいにいるおばさんだ。僕の横では佐伯さんが、「ほんと」と呆れ声。上機嫌なおじさんを見れば、おばさんでなくともそう言いたくなるかもしれない。

「別にそういうわけでは」

おじさんは言いかけて、

「いや、そうだな。私は彼を気に入っている。確かだ。認めよう。誠実だし、男らしいところもある。彼になら貴理華を任せてもいい。言っておじさんは、自分を納得させるようにならずいた。」

何を言い出すんだ、この人は。

佐伯さんが口許を手で隠すようにしながら「ほら」と囁いてきた

が、僕は無視した。

「あなたが気に入るのもわかりませんが、そこまで希望を押しつけるのはよくないんじゃないですか？」

「私はただ……、貴理華だってまんざらでもないだろうし」「
「だいたい、」

まだ言葉を続けようとしたおじさんを、おばさんが遮る。

「弓月さんだってこれから先、貴理華よりももっといい女の子と出会つかもしれないじゃないですか。……ねえ？」

最後のは僕に向けたものだ。

「さあ、どうでしょうか。僕としてはあまり期待はできないと思っていますが」

「まあ」

おばさんは嬉しそうに、上品に笑う。

「う、うむ。まあ、そうだな」

一方のおじさんは、どんどん失速していつていた。きっと反省しているのだろう。ついさっき、親の都合を押しつけたくはないと言ったばかりなのだから。それにしてもこんな話、普通は冗談半分だろうに。真面目な人だ。

「それに貴理華がわたしみたいになっただらどうするんですか」

「え、なに、お母さんみたいって？」

佐伯さんが喰いつく。

どうやらその辺りのことは、佐伯さんは聞いていないらしい。

「いいんだ、そんなことは。いちいち言わなくてよろしい」

おばさんが言っただけで、おじさんが精いっぱい威嚇を込めた制止の言葉を止める。そりゃあ聞かせたくはないだろう。家を飛び出したなんて話。

「そんなにたいした話じゃないわよ」

おばさんは、おじさんが精いっぱい威嚇を込めた制止の言葉を、あっさり無視した。

「お母さんはね、親が決めたことに反発して、高校を卒業すると同

時にお父さんのアパートに転がり込んだのよ」

「ぶふっ」

危うくレモンティを嘔き出しかけた。なんだ、それは。親子の縁を切ったとか、そういう話じゃなかったのか。

僕はおじさんを見る。

おじさんはばつが悪いのか、むすつとした顔でサンドイッチを口に運んでいた。そりゃあ聞かせたくなかっただろう。こんな話。

「お母さんって、そんな思い切ったことしたんだ」

「ええ、そうよ」

感心する佐伯さんと、どこか自慢げなおばさん。このふたり、確実に親子だ。

ふと、佐伯さんが再度僕のほうへ身を寄せ、やはり口許を隠して囁いた。

「勝った？」

「……」

僕はそれを無視　はできないので、軽く彼女の頭を叩いておいた。そんなところで張り合っでどうするつもりだ。

「お母さんが唯一躊躇ったのは、お父さんの名前が『佐伯』だったことね」

「ああ、お母さん今、『佐伯冴子』だものね」

そう言っで笑い合う。

それだけの行動力があっても、そんな瑣末なことで躊躇するのか。よくわからん……。

昼食が終わると、また片づけの続き。

作業はふたりがかりでやっている分効率よく進み、程なく終わったのだが、「実はまだあるんだ」と、書籍の入った箱を示されたときには、少しばかり閉口した。

廊下にあった箱を部屋に運び込む。

開けると中は、和書と洋書が半々といったところか。きつと海の

向こうで買ったものなのだろう。

「読みたいものがあれば、持っていくといい」

おじさんはそう言うが、経営学や貿易関係、ビジネス英語の本は、さすがに僕には早すぎる。洋書に至っては問題外。

「そろそろ休憩にしませんか」

夕方、おばさんがそう言いに来てきた。

「はい、弓月さんにはこれね。弓月さんと貴理華の分。あの子のところを持って行ってあげて」

渡された盆には、オレンジジュースのグラスとロールケーキがひと切れ乗った小さな皿が、各ふたつずつ。

「なんだ、貴理華に下りてこさせればいいじゃないか」

「何でもかんでも家族と一緒にじゃ、貴理華だって息が詰まりますよ。それに親の前じゃ思い切って話ができないでしょうし」

つくづく子のことをよく考えている人だと思う。子どもは親の前では、遠慮なく友達同士の会話ができないことを知っているのだ。

「佐伯さんの部屋は2階でしょうか？」

「ええ、そう。上がってひとつめの部屋よ。ドアを見ればわかるわ。階段、気をつけてね」

「わかりました」

僕はさっそく2階へ行ってみることにする。

階段は玄関を入ってすぐ脇にあったのを覚えていた。2階に上がってひとつめ。ここか。ドアには『きりか』と書かれたプレートがかけられている。確かにわかりやすい。

僕は今まで両手で持っていた盆を片手で支え、あいた手でノックした。

「はい」

「僕です。おばさんが休憩にしてはどうかと」

「あ、そうなんだ。鍵かけてないし、入って」
深呼吸をひとつして、ドアを開ける。

中は和室で言えば8畳ほどの広さで、全体に女の子らしい淡い色

彩に統一されていた。勉強机にベッド、本棚、スチールラック。クローゼットはビルトインのようだ。その他には、男の部屋にはまぶらないであろう化粧台に、大きな姿見があった。

床はフローリング。中央に小さなカーペットが敷かれていて、その上にテーブルが置かれている。

中でも目を引いたのは、座イスとソファの混血児みたいな家具だった。立派な座イスというか、下半分をぶった切ったソファというか。ほぼ床と同じ高さに座るのだが、ソファ並みにしっかりした背もたれと肘掛けがついていて、余裕でふたりは座れる幅がある。

僕が中に入ったとき、佐伯さんは布団も枕もないマットレスだけのベッドに座っていた。どうやら寝転がって本を読んでいたらしい。片づけは終わったようだ。

「ありがとー。そこに置いてくれる？」

僕の持っているものを認めた佐伯さんが、テーブルを指し示した。言われた通りにそこに盆を置くと、彼女は膝で歩いてテーブルに寄り、さっそくグラスを手を取った。そのまま座らず、またベッドに戻る。

「ここ、座らせてもらいますよ」

僕もグラスを取り、座ソファに腰を下ろす。予想通り、尻の下の感触は座イスで、もたれたときに体を包む感覚はソファのものだった。

座ソファはベッドと反対の位置にあるので、僕らはテーブルをはさんで向かい合うかたちになる。視線は彼女のほうが少し高い。足をそろえて座るその姿勢がきれいだった。

「こっちに座ればいいのに」

佐伯さんが自分の横を掌で叩く。そこはベッドだ。

「遠慮しておきますよ」

「下に親がいると思うと燃えませんかっ」

「何を考えているんですか、君は」

どうしてそんな危ない発想が出てくるんだろうな。

「なんてね。すでにひとつお母さんに隠しごとしてるから、さすがにそんなことはできないけどね」

しかし、ジュースをひと口飲んだ後はけろりとしてそう言い、彼女は苦笑した。確かに僕らが同居していることは、まだおばさんに内緒にしている。どこかのタイミングでちゃんと言っておくべきかもしれない。

「お母さんと言えさ　びっくりしたよねえ。そんなことがあったなんて」

驚いているというよりは、どこか嬉しそうな佐伯さん。

「お母さんのそういう話とか実家のこととか、初めて聞いたかも」「君から尋ねたことはないんですか？」

「自分で言うのもなんだけど、聡い子どもだったから、小さいときに一度聞いてお母さんが話しくそうなのを見て、もう聞かないほうがいいのかなんて思ってた。だから、お母さんのほうのおじいちゃんやおばちゃんとも会ったことがないし」

ということは、家を飛び出したおばさんが、今は親とも絶縁状態なのは確かかなようだ。

「なら、きつとこれからは少しずつ話してくれますよ」

「ん、そだね」

佐伯さんは笑う。

喉も潤った僕らは、改めてテーブルに向かい、おばさんが用意してくれたロールケーキを食べはじめた。

その後、佐伯邸はひと通り片づき、夕食をご馳走になった後、僕らは午後9時前には学園都市の駅に戻ってくる事ができた。

ありがたいことに、おじさんがこちらの駅まで車で送ってくれた。所要時間は1時間弱というところか。

なぜ家ではなく駅までなのかというと、「娘が男と一緒に暮らしているのを見ると、やはり複雑な気持ちになるよ」なのだそうだ。

そんなわけで今、僕たちは学園都市の駅から家へと向かって、街

灯が照らす夜道を歩いていた。

「それにしても何やらいつぱい持って帰ってきましたね」

僕の肩には佐伯さんのものであるスポーツバッグがかかっている。彼女が家から持ち出してきたものが入っているのだが、けっこうな大きさがあるので僕が持つことにしたのだ。

「これから季節が変わるから、秋冬ものをちよつとね」

ちよつと？　これがちよつとという量だろうか。最初見たとき、海外旅行でも行くのかと思っただが。

「でも、改めて見ると、案外着れないものが多くて」

「太りましたか？」

「失礼な。実はいろいろ成長して……って言いたいところだけど」と、佐伯さんは一度言葉を切る。

「彼氏がいるのにフルヒップの下着とか、ありえないと思わない？ さあこれからってときに引かれたら目も当てられないし」

「そう言えば君、今日は家にいなくていいんですか？　久しぶりに家族全員が顔を合わせたのに」

「……弓月くんて時々人の話を聞かずに話題を変えるよね」半眼、横目で僕を睨む。

「君の話は続けたくない種類のものが多いんですよ」
「だいたいなんでいつも臨戦体勢なんだ。」

「まー、確かに家族がそろつのは久しぶりで、お母さんとは半年ぶりだけど……明日だって学校じゃない？　家に泊まると明日が大変だから」

それもそうか。ただでさえ遠いのに、学校に行く前にこつちの家に寄らないといけない。仮におじさんに車で送ってもらったとしても、向こうを朝の7時には出ることになるだろう。

「それに」

と、佐伯さん。

「今のわたしの家はこつちだから」
「なるほど」

納得する。

気づけば僕と佐伯さんの家は、もう目の前だった。

4・「自転車がなぜ倒れないか知っていますか？」

学園祭も今週末に迫ったある日のこと。

普段よりやや遅めに学校から帰ってくると、マンションの前で佐伯さんが自転車を眺めていた。サドルに触れてみたり、ハンドルを握ってみたり。

自転車？

僕も佐伯さんも自転車など持っていないのに？

「あ、弓月くんだ。おかえりー」

「只今帰りました。……その自転車、どこから盗ってきたんですか？」

「せめて買ったと言え。ぴかぴかなのに」

佐伯さんのジト目。

確かに自転車はまっさらで、新品にしか見えない。

「買ったんですか？」

「うん。懸賞で当たったの」

自慢げにサドルを叩く。

それはオーソドックスな自転車で、変速もなければ当然電動アシストなどでもない。ただ、その分軽そうで、前籠が籐の編み籠になっているのが洒落ていた。

「懸賞とは運がいいですね」

「うん。わたし、弓月くんと出会って一生分の運を使い果たしたと思ってた」

えらく高く買われたものだな。

「ま、せっかく当たったんですから、大事に使ってあげてください」
今の生活だと駅前に買いものに行くときに使うくらいか。でも、多少買いきすぎても自転車に乗せられるなら、帰りも楽だろう。通学には確か申請が必要だったか。

などと思ってマンションの中に入ろうとしたら、

「待つて」

佐伯さんがカッターシャツの裾を掴んで、僕を呼び止めた。振り返る。

「実は乗れないの」

彼女は指を離さず、

「は？」

「だから 乗れないの、自転車」

さらにちよつと怒ったふうに重ねた。

「それでよく自転車が景品の懸賞に応募しようと思いましたね」

「当たったときは、これを機に練習しようかと思って」

なるほど。プロバビリティの殺人並みに消極的な前向きさだ。

「というわけで、練習につき合つて。……今から」

「今から？」

「そう。思い立つたが吉日っていうし？」

確かに、やる気になったときにはじめるのがいちばんではある。

「まあ、別にいいですけどね」

特に何かやるべきことがあるわけでもなし。夕食も僕と佐伯さんのふたりだけなのだ。多少遅くなったところで、迷惑をかける相手もない。

「じゃあ、さつそく」

「待ちなさい」

自転車のスタンドを上げて今にも出発しようとする佐伯さんを、今度は僕が呼び止める。

「そんな格好で自転車に乗るつもりですか。着替えてからにしない」

彼女は自分の姿を検める。

まだ制服のまま、例の如くスカートはかなり丈を詰めている。

「おおつ。これで立ち漕ぎしたら、素敵なことになってしまつかも」
今日練習をはじめて、立ち漕ぎまでするつもりとはなかなかの自信だな。

「違います。転んだときに怪我をしないようにですよ」

ついでに言うと、制服を汚すと後々大変だ。その点は去年2度ほどやった大喧嘩で懲りた。

「僕も着替えて、靴も置きたいですからね」

一旦、家へ戻ることにする。

「言つとくけど、わたし、運動オンチで乗れないわけじゃないからね。今まで自転車に縁がなかっただけで」

マンションの階段を上がりながら、後ろを歩く彼女が言う。

珍しい人生を送ってきたものだ。幼少期の自転車なんて遊び道具のひとつだろうに。

「運動神経はいいほう、かな？ 因みに特技のひとつは、立った状態からブリッジして、また立ち上がること。……やってみせようか？」

「いいませんよ」

少なくとも制服のままではやってほしくない。

「もうひとつは、口の中でさくらんぼを結ぶことです。舌が器用な女の子って萌えませんか？」

「運動神経とはぜんぜん関係ない特技ですね」

かまうと調子に乗るので、無視することにした。

各自、自室で着替えをすませる。

少し涼しくなってきたこともあって、佐伯さんはデニムのロングパンツに、黒のロングTシャツ。相変わらずこういうシンプルな格好をさせるとプロポーションのよさが際立つ。

僕のほうは、半袖Tシャツに、私服のカッターシャツを羽織っただけだ。

「せっかくだから一度、ふたり乗りしてみたいな」

再び外に出ると、佐伯さんがちよつと甘えたようにそんなことを言ってきた。

「変なことをしたがる人ですね。まあ、それくらいならかまいません

んが」

彼女は軽いし。

僕はスタンドを上げ、サドルにまたがる。続けて佐伯さんが後ろに乗り、そして、僕は降りた。

嫌な予感がして振り返れば案の定。彼女はリアキャリア（荷台部分）にまたがって乗り、さっきまでそこにあっただはずの僕の背中に抱きつこうとしていた。

「君、女の子らしく横座りしたらどうですか？」

「スカートじゃないんだから、そんなこと気にする必要ないじゃない」

そう言っつて佐伯さんは頬を膨らませる。

「君の場合、悪意ある意図を感じるんですよ」

「抱きついたら何かつぶれるかもしれないけど、気にしない気にならない」

「気にしますよ」

そんなにふたり乗りしたまま道路に飛び出したいのか。

「いいから横座りするか、それとも、そのままなら荷台を握っていただきますい」

「むー、仕方ない。……これでいい？」

佐伯さんは不満げにしながらも、足の間のリアキャリアを両手で掴んだ。

それを確認してから僕は再度サドルにまたがり、ペダルを漕ぎ出した。初速ゼロから次第に加速し、ある程度スピードが出ると、姿勢も安定してくる。

「さて、どこに行きましょうか？」

「さあ？」

考えていなかったのか。まあ、考えなしに発進した僕も人のことを言えた義理ではないが。

というか、自転車の練習をどこでやるか、だ。

車がくる可能性のある住宅地ではあまりしたくない。広い場所な

ら駅前広場がすぐに思い浮かぶが、あそこは若い母親がよく小さな子どもを遊ばせているしな。

「となると、あとは学校でしょうね。練習はグラウンドの端を使わせてもらいましょう」

この時間にグラウンドに残っているのは運動部だろうし、それなら2、3人轢いても問題はない。

ふたり乗りの自転車は住宅地を抜け、すぐに大きい道路に出た。左右を確認しつつ、曲がる際にあまり道路に飛び出さないように注意して、路側帯にコースをとる。

自転車は軽車両に分類されるため、道路交通法の定めるところにより路側帯を走らなくてはいけない。しかし、日本は明らかに道路整備の方針を誤ったと言える。前述のように定めておきながら、自転車専用レーンは勿論のこと、十分な路側帯を確保している道路は少ない。果たしてこんな道路事情で自転車に乗りはじめた3才の子どもに「路側帯を走るんだよ」とおしえられるだろうか？ 少なくとも僕は怖くてむりだ。

しかも、近年は自転車が歩道で事故を起こしても過失相殺は認めないそうだ。やれやれ、なんとも横暴な話だ。

その点、この学園都市は道が広く、路側帯も十分に幅がとられていて安心できる。珍しいものとしては、原付の二段階右折のための停止スペースまで描かれているのだ。

そうこうしているうちに水の森高校が見えてきた。やはり自転車だと早い。

それはいいのだが、
「それはそうと君、なんで抱きついてるんですか？」

いつの間にか佐伯さんが僕の体に腕を回し、しがみついていた。おかげでそれこそ何かやわらかい感触が背中当たっている。

「や、何となく安定が悪くて。それに後ろに乗せてもらってるからサービス？」

「いいませんよ、そんなの。……揺れますよ、気をつけてください」

「え？ きゃっ。……あんっ」

段差を越えて歩道に上がった瞬間、佐伯さんの口から妙に艶めかしい声がこぼれた。

「なんて声を出してるんですか」

「だって、胸がうんぎゅってなっただもん……」

「莫迦なことをしてるからですよ」

まったく。

そのまま僕らは水の森の敷地に進入した。

自転車にふたり乗りしたまま校門をくぐり、今から下校らしい数人の生徒とすれ違いながらグラウンドへと抜ける。……よく考えたら、けっこう傍若無人なことをしているな。

全国的にも有名な進学校であり、あまり運動部には力を入れていないとは言え、それでもそれなりに部活動はやっている。ふたり乗りで乗り入れてきた僕らに気づいた運動部員たちが、何だ何だと振り返った。ひとりが佐伯貴理華ということもあってかなり気になる様子だったが、部活動中なのでのんびり野次馬するわけにもいかなかったようだ。こちらとしても都合がいい。

グラウンドの隅の邪魔にならないところで自転車を降りる。

「ところで、自転車がなぜ倒れないか知っていますか？」

「えっと……気合い？」

「多少はあるでしょうね」

非科学的な力だが、影響していないとは言いきれない。

「簡単に説明すると　キャスタ角によってハンドルの回転軸とタイヤの接地点がずれているため、走行中の自転車は前進性が保たれているわけです。ハンドルを切った際にはジャイロ効果はたらき、タイヤの傾きに連動して　」

「……それ、知ってる必要ある？」

「特には」

当然こんな知識などなくても自転車には乗れる。

関係ないが、力学を学びはじめたころ、坂道で自転車を押しているだけで、押す力や自転車の質量、重力などのベクトルを描いた図が頭に思い浮かんだものだ。

「とりあえず、乗ってみましょうか」

「え？ 何かおしえてくれることないの!？」

「ありませんよ。補助輪を外したばかりの子どもじゃあるまいし。君だって自転車の乗り方くらい、だいたいの想像はつくでしょう。

……まあ、倒れないように支えるくらいはやってあげますよ」

実際のところ、いかに彼女が軽かろうが人ひとり乗ったまま傾きはじめてたら、僕の腕力では支え切れないだろう。そのときは佐伯さんが怪我しないようにだけはするつもりだ。

僕がリアキャリアを掴んで自転車を支え、佐伯さんがおそるおそるサドルにまたがる。

「で、でわっ」

緊張した声音で言い、ゆっくりとペダルを漕ぎはじめた。僕もふらつく車体を手で支えながら後についていく。なかなかいい走り出

が、

「佐伯さん、速いです」

「いや、だって、ゆっくりだと倒れそうだし」

確かにスピードがあったほうが安定はするが……とか言っているうちに、ついていけなくなつた僕はスペースシャトルのブースタのようにパージされ、彼女の乗る自転車がひとり先に行ってしまう。

「佐伯さん、ブレーキ、ブレーキ！」

「え、ブレーキ!? あ、そ、そっか！」

次の瞬間、自転車はキキッと急停止した。たぶん左右両方のブレーキを力いっぱい握つたのだろう。後輪を浮かせるようにしていきなり止まつた自転車は、バランスを失つて転倒。だが、佐伯さんはその前に脱出して、数歩たたらを踏むだけにとどまつた。運動神経がいいのは確かなようだ。

「おー、乗れたっ」

「……気のせいです」

乗れば直進爆走で、止まるたびに乗り捨てるつもりか。

「よ、よし、もう一度っ」

倒れた自転車を起こす佐伯さん。

まあ、こういうのはコツを掴むまで反復練習しかないだろう。

「ほら、弓月くん、支えて支えて」

「はいはい」

ばんばん、と佐伯さんが叩くりアキアキを持ち、再び車体を固定させる。

初めてで転ばずに乗れたのだ。後は低速でもバランスを保つことさえできれば、そう遠くないうちに乗りこなせるようになるだろう。

と、思っていたのだが

なぜか彼女はそこからいつこくに成長しなかった。

「佐伯さん、スピード落としてっ」

「む、むり！ そんなことしたら倒れちゃう！」

走り出したら暴走特急。

「ブレーキをかけなさい、ブレーキを」

「ブ、ブレーキ！ ブレーキどこー!?」

余裕なんてないものだから、すぐにブレーキの存在を忘れる。

「きゃあ！」

そして、最後にはカースタントもびっくりな乗り捨て脱出。

派手に倒れた自転車は、カラカラと虚しく車輪を回す。自転車もまさか初日からこんなひどい扱いを受けるとは思わなかったことだろう。

「まだまだっ」

そのくせ不屈の精神だけはあるときた。

「ほらー、行くよー。弓月くん」

「ま、待つてください。少し、休みましょう……」

にしても、こっちの身にもなつてほしい。彼女が乗るたびに走って追いかけているのだから。10本も20本もダッシュして、いたいどこの部の練習だ。

「もう、だらしがないなあ。女の子より先に果てるなんて」

……何の話だ。

「いい。次はひとりで行くから。そろそろ乗れそうな気がするし」
「……」

一歩も前進してないくせに、どの口でそんなことを言うか。

尤も、これだけやって無傷なのだから、乗れるようになるかは兎も角として、少なくとも怪我をする心配だけはなさそうだ。僕はひと休みさせてもらうことにしよう。

飽くなきチャレンジ精神で走り出す佐伯さん。とりあえずひとりで漕ぎはじめることはできるようになったようだ。

僕も昔はこうやって練習したものだ。乗れるようになった後、ゆーみとふたり乗りで近所を走っていたら、下り坂で盛大に転んでしまった。ゆーみはどこに行ったと辺りを見れば、坂の遥か下を転がっていて、驚いた犬に吼えられていた。そりゃあモノトーンの布の塊が転がってきたら、犬だってびっくりするだろう。

「きゃーっ」

ここ1時間ほどですっかり聞き慣れた悲鳴で、僕は我に返る。

「どいてどいてー」

「!?!」

見れば佐伯さんの自転車は昇降口付近までオーバーランし、見事なコース取りでもってそこを歩いてきた男子生徒に突っ込んでいくところだった。

キキーツ

幸い騒々しい反復練習のおかげでブレーキをかけることはできたようで、男子生徒が受け止めるようなかたちで停車した。見知らぬ彼に車体を支えられ、佐伯さんは両足を地につける。

ほつと胸を撫で下ろした後、僕はそちらに歩み寄った。

間、佐伯さんは自転車から降りて何度も頭を下げ、男子生徒のほうは笑顔で応じていた。

近づくにつれ、男子生徒はノンフレームの眼鏡をかけていて、その雰囲気からどうやら3年生らしいことがわかった。理知的な面立ちだが、その笑顔や時折混じる眼鏡のブリッジを押し上げる仕種が少々キザに映る。

やがてふたりのやり取りは、3年の先輩が何かを話し、佐伯さんが少し困ったような顔でうなづくものにならなくなっていった。何だ？ いったい何を話している？

「佐伯さん」

声が届くところまでくると、僕は彼女を呼んだ。

男子生徒がちらりとこちらを見る。

「じゃあ」

「あ、はい。それじゃあ……」

辛うじてそれだけが聞こえた。僕がその場に辿り着く前に、彼は最後にもう一度眼鏡のブリッジを押し上げ、立ち去った。

「お知り合いですか？」

僕が問うと、彼女は静かに首を横に振った。

「今日が初めて」

そう言っただけで伏せた彼女の顔は、少し浮かないものに見えた。いったいさっきの男と何を話したのだろうか？ 品のない言葉でナンパでもされたか？

「佐伯さ」

「さ、続き続きっ」

僕らの発音が重なった。

彼女はたぶん僕が何かを言いかけたことに気づいていたはずだ。その上で聞こえない振りをしたのだろう。勢いよく顔を上げ、明るい声を発した。

「絶対今日中に乗れるようになるんだから」

「大口を叩きましたね。こうなったら気がすむまでやりなさい。どこまでできるか見てあげますよ」

今はこれ以上の詮索はやめておこう。言いたくないのなら仕方がないし、そうする必要があれば話してくれるだろう。そもそもそれ以前に、何かあったように見えているのは僕の気のせいなのかもしれないのだから。

結論から言うと、佐伯さんはまったく進歩しなかった。

相変わらずスピードを出さないと倒れてしまうし、転ぶのを怖がっていて余裕がない。何度も倒された自転車がよく壊れなかったものだと感心するが、きつと軽さと丈夫さが売りなのだろう。とは言え、このままでは唯一のチャームポイントである籐の編み籠がどうにかなくなってしまいかもしれない。

僕たちは今、成果の上がらなかった練習を終え、家路についていた。自転車は僕が押し、ふたりで歩道を歩く。

「おつかしいなあ」

「よっぽど相性が悪いみたいです」

運動神経は悪くないとなれば、後はもう相性という他はない。

「まあ、ひたすら練習あるのみ、でしょう」

「むー」

思うようにいかなかったせい、佐伯さんはかなり不満げだ。

「ひとりで乗れるようになるまで、君は僕の後ろに乗っていればいいんですよ」

「うわ。そんなこと言われたら、わたし、もう乗れなくてもいいかも。ねえ、その自転車あげるから、ずっとそうしようか？」

それは勘弁してほしい。

いきなり、彼女はひよいとリアキャリアに横座りした。

「じゃあ、さっそくこのまま買いいものに行こー」

「そうですね。せっかくここまで出てきたんですから、それくらいはすませて帰ることにしましょうか」

僕もサドルにまたがり、ペダルにかけた足に力を込める。

安全運転の自転車は、のんびりした調子で走り出した。

まあ、こうやってどこに行くのも佐伯さんとふたり乗りというのが悪くはないのかもしれない。

5・「学園祭の準備のためですよ」

その日の放課後、僕は雀さんと並んで学校から駅までの道を歩いていった。

と言つても、ふたりで仲良く下校しているわけではなく、そして、仲悪く険悪なわけでもない。

「悪いわね、つき合わせて」

「かまいませんよ、これくらい。僕もクラスの一員として、学園祭には喜んで協力させてもらいますよ」

僕がそう言うと、雀さんには「弓月君って、どうにも白々しいのよね」とため息混じりに言われてしまった。日頃の行いが悪いせいだろうか。

僕たちは今、今週末に迫った学園祭のための買いものに向かつている。

準備のそのまた準備のための買いものなので、たいしたものはない。せいぜい試作品をつくる程度のものだ。それでも誰かが家まで持って帰って、明日また学校に持ってこなくてはいけない。その役に抜擢されたのが、家の近い僕というわけだ。他にもアドバイザーという役割もあるが。

「それにしても、『本格コーヒーの店』を謳い文句にした喫茶店ってどうなんでしょうね？」

「あたしに言わないでくれますか？ 言い出したのは滝沢さんなんですから」

「それに諸手を上げて賛成したのは雀さんでしょうに」

そうなのだ。我がクラスの出しものは、本格コーヒーを売りにした喫茶店と決まったのだ。

言い出したのは滝沢。「そう言えば弓月がコーヒーを淹れるのが得意なんじゃなかったか？」と。そのひと言のおかげである程度の方向性が定まってしまった。彼はこのたび、めでたく生徒会の副会

長に就任し、そのため学園祭当日は実行委員と一緒に運営側として奔走することになる。だから、せめて準備の段階でクラスに貢献しようとしたのだろう。彼に悪気はない。

因みに、ここにいる雀さんは2学期以降もクラス委員を続投となり、準備から当日までずっと陣頭指揮をとる予定になっている。また、宝龍さんと矢神は、クラスと文芸部の掛け持ちだ。

「いいじゃない。弓月君、コーヒー淹れるの好きなんですよ？」

「あのですね、僕を一日中コーヒーを淹れてたら幸せみたいな人間だと思つてませんか？」

僕が好きなのはコーヒーを飲むことであつて、淹れることではない。単に美味しいコーヒーを飲む過程において、多少の拘りがあるだけだ。好きな豆や濃さ、などなど。だいたいそれにしたつて極力手間をかけないという前提があつて、所詮はコーヒーメーカー任せだ。本当に手間暇を惜しまない人なら、コーヒーケトルを使つてじっくり淹れるだろう。

「でも、コーヒーサイフォンつていつの？　そういうのも使つて本格的なものもできるんですよ？」

「まあ。つい最近からですけどね」

研究と試行錯誤のおかげで、たいぶ満足のいくものを淹れられるようにはなつた。

「運営には4つほどリースしてもらつるように頼んでるから。もし拘りがあるなら、自分のも持つてきてくれていいわよ？」

「それは謹んで辞退させていただきます」

学園祭でテンション上がっている連中の前に差し出して、無事に返ってくる保証はない。そして、そうなつた場合、僕も連中を無事に帰す保証はできない。

それにしても　と僕は思う。

当日、喫茶店をやるクラスは多く、それをわかつた上で他とは差別化を図ろうという意図には賛同する。でも、いかんせんやることが中途半端だ。当日お客に出すコーヒーは紙コップだし、コーヒー

豆も今から行く駅前のスーパーで買おうというのだから。いちおう紙コップには取っ手のついたホルダーをつけるし、豆も高いものを選ぶらしいのだが。……まあ、所詮は高校生の学園祭か。

「ま、やれるだけやってみましょう」

豆はそこそこのものでも、淹れ方次第でけっこういい味が出せるものだ。

「アドバイザーもするし、土曜はフルで働きますよ。でも、その代わり日曜はフリーにしてくださいよ?」

「何か予定があるの?」

「ちよつと、ね」

学園祭2日目である日曜は、佐伯さんとふたりで校内を見て回る予定になっている。

さて、言ってる間に駅前のショッピングセンターに到着だ。さつさと買うものを買ってしまおう。

駅前のショッピングセンター1階に入っているスーパーを、雀さんと回る。

「ねえ、テキストに高いのをいくつか買っていけばいい?」

「コーヒーの粉が並ぶ棚を見ながら訊いてきた。」

僕としては、せめてコーヒーショップで豆を買って、コーヒーマシで挽くくらいのはしてほしいと思うのだが。

「多少気取りたいのなら、大雑把にコーヒーなどと一緒くたにしないで、モカやキリマンジャロといった銘柄をちゃんとメニューに書き並べるといいでしょうね」

「あ、なるほど。それがいいわね」

納得しながら雀さんはコーヒーの粉をいくつかピックアップし、僕が持っていた買ったものカゴに放り込んだ。

「後は、と……」

「コーヒーシュガーやミルクでしょうね。……こっちはです」

春からこの学園都市に住みはじめて、買いものと言えばここのの

ですつかり商品の並びは覚えてしまった。僕が先行し、雀さんを案内する。

陳列棚がつくる縦の通路から、それと直交する広い横の通路に出たときだった。

「あれ、弓月くん？」

よく通る澄んだ声に振り返れば、そこには僕と同じように買いものカゴを持った佐伯さんがいた。

彼女の顔がぱつと笑顔になる。

「どうしたの？ 何か買いもの？」

跳ねるように寄ってきて、腕に腕をからめてくる。

「それだったらわざわざ自分で買いにこなくても、わたしに言ってくれたらよかったのに」

「ちよつと、佐伯さん」

しかし、僕の制止の声は無視。彼女は腕をからめたまま、僕を振り回すようにしてくるりと一回転する。

「あ、そうだ。今日の晩ごはん何がいい？ まだ買ってないから、今ならいくらでも修正可能です。食べたいものがあったら言って。

それとも、わたし」

「佐伯さん」

僕は語気を強めて、彼女の言葉を遮る。というか、最後いつたい何を言おうとした。

それから顎で指し示して、あつちを見るように促す。

佐伯さんはおそろおそろそちらに目を向け、そして、そこに啞然として立っている雀さんを見つけた。

「きゃっ」

小さな悲鳴を上げて、僕の腕から離れる。

「「えつと、これは……」」

不味いところを見せてしまった佐伯さんと、見てしまった雀さん、それぞれがそれぞれの気まずさを抱えて言葉を発する。弁解と問いかけ、同じ文章でも別の意味なのが面白いな。

ここはひとり冷静な僕がフォローするしかないだろう。

「前にも言いましたが、僕と佐伯さんは家が近いんですよ。それで時々夕食をご馳走になってるわけです。食費も節約できますから」
これで説明し切れているとも思えないのだが。

「そ、そうなんです」

「そ、そうなんだ」

あはははー、と乾いた笑いが続く。
と、

「ちよつとちよつと、弓月くん」

佐伯さんが僕の腕を引き、雀さんから離れる。

「なんで弓月くんがあの人と一緒に買い物してるの。まさか晩ごはん」

「そんなわけじゃないでしょう。学園祭の準備のためですよ」

「あ、なるほど」

コーヒーばかりが放り込まれた買い物ものカゴを見て、すぐに納得したようだった。

短い内輪話を終えて戻ってくると、なぜか雀さんはまだ気まずそうにそわそわしていた。まだ何かあるのだろうか。そう訝しんでいると、

「ゆ、弓月君っ」

意を決したように雀さんが声を上げた。

「あれ取ってきて、あれ」

あれ？

「あ、あれよ、あれ。えつと……そう、紙コップ！」

「それは買い出し組に任せるはずでは」

「明日の分がいるでしょ。いいから取ってきて！」

明日の試作品の分は、雀さんが家から持ってくることになっていたはずだ。何をそんなに必死に……ああ、そういうことか。ようやく理解した。

「いいですよ。ちよつとってきます」

「あ、じゃあ、わたしも」

「佐伯さんはここにいてください。すぐに戻ってきますので」

ついでこようとする佐伯さんを振り切り、僕はその場を離れた。すぐに戻ってくると言いつつも、実際にはゆっくりと売り場を回って、テキストに10個セットの紙コップをひとつ手に取った。

戻ってくると、通路で立ち話をするふたりは、ちようど僕に背を向けるかたちで、

「その、ごめんなさいね」

話はこれからのようだった。意外に思い切りが悪いな、雀さん。

「前にあなたに向かつて、弓月君がひどいやつだみたいなこと言っちゃって。あたし、ずっとわかってなかったの」

「いえ、いいんです。もう終わったことだし、わかってくれたなら」と、佐伯さん。

雀さんが言っているのは、一学期、廊下で会った佐伯さんに雀さんが、忠告なんだか僕の悪口なんだかよくわからないようなことを言った件だ。その後、去年の僕と宝龍さんの事の顛末を知り、彼女はさぞかし気に病んだことだろう。

「でも、もつと最初からわかるうとしてあげてもよかったと思います。だって、去年も同じクラスのクラスメイトだったんですよね？」

「…………う。まあ、そこも反省してる…………」

雀さんはそれだけしか言えない。

当然だろう。当時の出来事について、誰が振った誰が振られたの犯人探しをすれば、僕か宝龍さんのどちらかを疑わなくてはいけない。そうなるとう宝龍さんの熱心なファンである雀さんが、宝龍さんを悪ものに設定することはあり得ない。

何も言えない代わりに雀さんは、

「あたしね、弓月君のことけっこう好きなの」

「えっ？」

え？

危うく声を出しそうになった。何を言い出すんだ。

「あ、違うの。そういう意味じゃなくてね。あくまで友達とかクラスメイトとか、そういう意味でってこと。弓月君ってよくくだらないこと言ってるからかかってくるけど、あまり嫌味がなくてね。そんなだからあたしにとってはいちばん話しやすい男子なの」

ダメだ。さすがにこれ以上聞き続けるわけにはいかない。完全に盗み聞きの領域だ。僕は再びその場を静かに離れた。

近くの陳列棚を数列分ぐるりと回り、彼女たちの正面に出てくる。

「あー、やっと見つかった。戻ってくる途中で迷ってしまいました。我ながら白々しいことをやっていると思う。」

「もしかして移動しました？」

「してないわよ。しっかりしてよね、もう」

雀さんは呆れたように言った。……まったく、こちらの気遣いも知らないで。

僕はちらと佐伯さんを見る。

と、目が合い、

ぷい、とそっぽを向かれてしまった。

「……」

怒られるようなことは何もしていないと思うのだが。少なくとも、好意を抱かれることは不可抗力のはずだ。

買ったものを買って、雀さんとはショッピングセンターの入口で別れた。

今は佐伯さんと帰路についている。

比較的軽い我がクラスへの買いものが入った袋を佐伯さんが持ち、けっこうな量になったうちへの買いもの袋を僕が持っている。

「すみません。そんなものを持たせてしまって」

「うっん。その代わりに重いほうを持ってもらってるから」

ふたりで夕暮れの歩道を歩く。大きな道路に沿った、真ん中には街路樹が等間隔に並んでいる幅の広い歩道だ。車道も広いが、相変わらず交通量は少ない。

「弓月くんのクラスはコーヒーショップだっけ？」

佐伯さんが買ひもの袋に目をやりながら問うてくる。

「そのようなものですね」

正確にはカフェなのだが、果たしてどれほどのことができるのやら。いや、むしろ中途半端なほうが高校生の学園祭らしくていいのかもしれないな。

「時間があつたら遊びにいくから」

「それはかまいませんが、僕は裏方ですよ」

キッチン担当。下手をすると一日中コーヒーを淹れていることになりそうだ。

「残念。弓月くんのウェイター姿、見たかったな」

「仮にホールスタッフだとしても、そこまで本格的な衣装は用意してませんよ。……佐伯さんのクラスも確か喫茶店ですよね？」

「うん。因みに、わたしはウェイトレス」

「ま、適材適所でしょうね」
きつと人が集まるだろうな、と考え　少し複雑な気持ちになつた。

「僕もうまく時間をつくつて、見にいかせてもらいますよ」

いちおう様子を見にいつておこう。いろいろ心配だし。それくらいの休憩はもらえるだろう。

何となく話はそこで途切れ、僕らはしばらく黙って歩いた。

思い出したように一対のヘッドライトが、前から後ろへ流れていった。それをきっかけにしたように、佐伯さんが口を開く。

「そっか。もう学園祭なんだ」

妙に寂しげに、そうこぼした。

まあ、お祭りなんて準備しているときがいちばん楽しかったりするものだ。当日が近づいてくると、祭りの終わりが見えてきたように寂しく感じるのかもしれない。

「ねえ」

と、切り出してくる。

「わたしが、日曜日は他の男の人と見て回るっていったら、弓月くん、どうする？」

「おや、そんな予定があるんですか？　そうですね、そうだったら僕は一日のんびりできていいですね。万々歳です」

直後、佐伯さんがぴたりと足を止めた。僕も遅れて立ち止まり、振り返る。

彼女はじつと僕の顔を見ていた。

「佐伯さん？」

呼びかけても、しかし、何も言わず。

やがて足を踏み出した彼女は、僕の横を通り抜ける際、ぽつりと一言。

「……バカ」

「……」

僕は思わず呆然と立ち尽くす。

思ってもみなかった反応。

おかげで我に返るのに、しばしの時間を要してしまった。

「さ、佐伯さん……？」

「もういい。知らないっ」

慌てて後を追うが、彼女はぜんぜん待ってはくれなかった。しまったな。少し悪ふざけが過ぎたか……。

6(1)。「……ひとりで帰ってください」

9月最終週の週末、私立水の森高校はついに学園祭の当日を迎えた。

空は快晴。

これなら今日、明日の二日とも天気の心配はなさそうだ。

佐伯さんとは、それぞれの都合もあって別々に登校した。

僕が学校に着いたのは、開催30分前の朝8時半。もうすでにかなりの生徒がきているようで、校庭の野外特設ステージではマイクの最終調整をやっているようだった。ここではエントリーした素人バンドたちによる演奏などのイベントが行われる予定だ。

また、外でのメインイベントのひとつに、明日のテニスの試合がある。これは学園都市の他校を招いて行われる親善試合で、両校のエースが華麗な戦いを繰り広げるのでなかなかの見ものだという話だ。

校舎の中へと入る。なお、この学園祭の期間中に限っては土足でも可なので、上靴に履き替える必要がなくて楽だ。

どの教室も各々の出しものための飾りつけがされていて、廊下の窓には宣伝のポスターがこれでもかというほど貼られている。生徒の興奮と熱気もあって、もう校舎内は完全に普段とは違う空間だ。自分の教室に着いてみれば我がクラスも似たようなもので、朝早くから登校していた飾りつけ班により内装は見事にカフェと化しつつあった。時間になれば教室は3分の1ほどのところでカーテンで仕切られることになり、その裏の狭いほうがキッチンだ。ホールのほうには、机を合わせてクロスをかぶせただけの即席のテーブルが、大小10ほど並べられていた。

そのテーブルのひとつを使って、クラスメイトの山南さんが作業をしていた。

「おはようございます、山南さん」

髪につけた大判のリボンが特徴的な背中に声をかける。

と、次の瞬間、彼女は持っていたチヨークを投げ出し、一気に2メートルほどの距離をとった。……そこまで驚かしたつもりはなかったのだが、この山南さんはいつもこんな感じだ。

「それが入り口に立ってる看板ですか？」

僕の問いかけに彼女はこくこくとうなずいてリボンを揺らしてから、半歩ずつ戻ってくる。

山南さんが今やっているのはチヨークアート　よくレストランや喫茶店の入り口にメニューボードとして置いてあるあれだ。本来なら専用のボードとパステルカラーの特殊な塗料を使うのだが、今は手ごろなサイズの黒板とただのチヨークだ。それでも彼女の趣味を遺憾なく発揮し、看板兼メニューボードを描いてくれている。

「え、えつと……、ゆ、弓月君からは何か、ちゅ、注文はありますか……？」

半分ほど戻ってきた辺りで、山南さんが自分の爪先に目を落としながら聞いてくる。

「僕ですか？」

思わず反問すると、彼女はうなずき、

「う、うちのコーヒーはぜんぶ、ゆ、弓月君が淹れるから、もう弓月君の、お、お店みたいなものだって……」

なるほど。それで店長たる僕にデザインの注文はないか聞いたというわけだ。誰だ、山南さんにそんなこと吹き込んだのは。

「いえ、僕のほうからは何も。山南さんにお任せしますよ」

「う、うん。じゃあ……」

消え入りそうな声で答え。彼女は　下を見ていて気づいたのだろう、足もとに転がっているチヨークを拾うために身を屈めた。

「あ、そうだ」

ひとつ思い出した。

が、僕の発声に驚き、山南さんはまだチヨークを放り投げて、一気に飛び退いた。もう話は終わったものと安心していたせいかな、今

度の記録は3メートル。祈るみたいにして胸の前で両の握り拳を合わせ、こちらに対して半身になる。

「な、何……？ と、目だけで訊いてくる。」

入り口のボードはお客さんが最初に目にするもので、お店に入るかどうかを決める重要な要素だから、と言おうとしたのだが、彼女のこの様子を見るによけいなプレッシャはかけないほうがよさそうだな。

「いえ、何でもありません。いいものを期待してますよ」

「う、うん……」

山南さんは首を縦に振り、頭のリボンを揺らした。

これ以上ここにおいても邪魔になるだけだろう（こっちはそのつもりはないが）。僕は彼女に背を向け、本日の職場となるキッチンのはづへと寄る。

と、

「さすが店長。のんびりしたご出勤ね」

そこに雀さんが仁王立ちで待っていた。どうやら僕と山南さんのやり取りをずっと見ていたようだ。言葉に棘が見え隠れしているのは、忙しさもここに極まって苛々しているからだろうか。

「誰が店長ですか」

「うちのコーヒーは弓月君が淹れるんだから、弓月君が店長みたいなものでしょ」「……」

山南さんに変なことを吹き込んだのは雀さんか。まったく。

「まあ、今日の僕の仕事は、9時を回ってからですからね。これくらいは勘弁してください」

「別にいいけど。……しっかりと働いてもらいますからね。成功するかどうかは弓月君の腕にかかっているのよ」

そんなに僕に頼りつきりで大丈夫なのだろうか。明日は僕はいないんだから、味が落ちたと言われても責任は持てないぞ。

『9時になりました。只今より第9回水の森高校学園祭を開催いたします』

校内放送が流れた。

実行委員による開催宣言だ。外では開幕の花火が上がったようで、遠く破裂音が聞こえてきた。クラスメイトたちのテンションも頂点に達し、教室内に歓声と拍手が巻き起こった。

「ほらほら、みんな、はじまったわよ。準備がまだのところは急いで！」

我らがクラス委員長、雀さんが声を張り上げる。

「弓月君も。ちゃんと一つお客さんがきてもいいようにしておいてよ」

「わかってますよ」

とは言え、そんなにすぐにくるとは思えないが。

そうして学園祭の幕が開けて1時間ほどが経った、午前10時。

「こないわね……」

「そうですね」

我がクラスのカフェには、まだひとりの客もきていなかった。

「でも、まあ、こんなものじゃないですか」

狭いキッチン側のスペースで言葉を交わす僕と雀さん。

雀さんはカーテンの少し開けて、心配そうにホールを見ている。

僕はテキトーな台に軽く尻を乗せて、体重を預けるようにして立っていた。

ホールでは誰か宣伝にいけないの、タダ券を配ろうのだのと、皆で案を出し合っているのが聞こえる。その声は実に楽しそうで、きつとこの状況に深刻に悩んでいるのは雀さんだけだろう。

「だいたい街の有名洋菓子店じゃあるまいし、開店と同時に客がきたりはしませんよ。ひと通り回って、疲れてきたころ休憩として寄ってもらうのがベストでしょうね。まずは昼前くらいじゃないですか」

となると、ここが2階なのが地理的に不利だな。それに比べ同じ喫茶店をやっている佐伯さんのクラスなどは本来なら3階なのだが、外に店を出すクラスの空いた教室に詰めるかたちで、期間中は1階を使っている。非常にラッキーと言えるだろう。

なお、そうやって下へ下へ詰めているので、どの校舎も3階は立ち入り禁止区域になっている。

「ま、ゆっくり待ちましょう。まだはじまったばかりですよ」

僕はホルダー付きの紙コップにコーヒーを注ぎ、口に運んだ。

「ちよつとお、あんまりがぶがぶ飲まないでくれますか？ それ、売りものなんですから」

「いいじゃないですか、これくらい。それにそろそろ冷めてきて、ホットでは出せそうにないんですよ」

因みに、これはいつでもすぐ出せるように、最初に作ったブレンド。つまりは僕好みだということでもある。役得だ。しばらくは客がこない状況を見越して、今のところこれ以外は作っていない。

「雀さんも飲みますか？」

「まあ、そういうことなら」

不承々々うなづく雀さん。

僕は紙コップに取っ手付きのホルダーをセットして、コーヒーを注ぐ。

「砂糖とミルクはご自分で。……それと彼女にも飲むか聞いてもらえますか」

僕が視線で示した先には、大判のリボンが目立つ背中があった。

この時間のキッチンスタッフのひとりである山南さんだ。窓から中庭を見下ろしている。

「そうね。……山南さん」

雀さんが呼びかけると、山南さんは目で見ても明らかほど飛び跳ねた。ついでにリボンまでもが飛び上がるように天井を向いたのは気のせいだろうか。

そうしてから彼女は、例の胸の前で握り拳を合わせる構造で、お

そるおそる振り向いた。

「山南さんもコーヒードキム？」

「コ、コーヒード？」

「そ。弓月店長特製ブレンドコーヒード」

雀さんが答え、僕がサイフォンのフラスコを掲げて見せる。

山南さんは僕とフラスコを交互に見てから、

「い、いただきます」

と、うなずいた。

同性の雀さんにもあの調子なのか。一日驚いてばかりだろうな。

予想通り11時付近からお客が入りはじめた。

「ブレンド2つにモカひとつ、クッキーセットも3人分ね」

「はい」

「こつちも了解です。それと2番テーブルのコーヒードできてます」

エプロンをつけたホールスタッフの女子もカーテンの向こうとこつちを、忙しく行き来する。

「なあ、このホルダー、やっぱ洗いにいかないとダメかな」

「ダメにきまつてるでしょ。衛生面で不精しない！」

ひと昔前に世間を騒がせた数々の食品衛生問題を思い出しなさい、と雀さんの怒声も混じる。

そんな状況の中、ふいに廊下へと続くドアが開いた。表には『関係者以外立ち入り禁止』と書かれているそこから入ってきたのは滝沢だった。丁度そばにいた山南さんが、持っていた紙コップホルダーを放り投げて飛び退いた。

「おっと」

宙を舞うそれを滝沢がキャッチ。

「どつだ。何も問題はないか？」

「今のところは特に」

どつやら彼は運営側として巡回しているらしい。二の腕には生徒会と書かれた腕章をつけている。

「盛況そうだな」

「スタートダッシュは遅かったですけどね」

手があいたので滝沢とふたりで、カーテンの隙間からホールの様子を窺ってみる。テーブルは6割ほどが埋まっているようだ。

「滝沢さんもちょっと手伝っていきませんか？」

僕らの後ろから雀さんも一緒に顔を覗かせる。

「そうしたいのはやまやまだけど、今日は生徒会の仕事にかかりつきりだね。明日なら少しは手伝えると思う」

「滝沢さんがホールに立てば、お客さんも倍増間違いなしだと思っただのに」

それはさすがにナツコさんフィルターかかりすぎだろう。しかし、明日には宝龍さんもこちらを手伝うというし、我がクラスが誇る美男女がそろえば、それはそれでいい宣伝材料になるのではないだろうか。

因みに、カフェというのはホールに男性がギャルソン（英国風ならボーイ）として立つのが普通なのだが、やっぱり女の子のほうが華やかでいいだろうということ、ここでは女子がメインでホールスタッフをやっている。明治時代、日本最初のカフェ、『カフェ・ブランタン』も女給だったのでそれに倣ったとも言えるが、誰もそんな歴史は知らないだろう。

そのままホールを見ていると、見知った顔の中年夫婦が入ってきた。

耳の上辺りに白いものが混じった髪を後ろに撫でつけている精悍な男性と、パーマのかかった髪をポニーテールのようにした少しタレ気味の目が愛らしい女性。

「ちょっといつてきます」

「なんだ、知り合いか」

「佐伯さんのご両親ですよ」

僕は応対に出ようとした女給役の女子を手で制して進み出た。

「いらっしやませ」

「おお」

「あら」

テーブルについたトオル氏と冴子さんは、僕を見上げて楽しそうに笑みを見せる。

「何も考えずに入ったのだが、ここは君のクラスだったか」

「ええ。しかも、噂によると僕が店長らしいです。どうぞゆっくりしていつってください」

「オススメはあるの？」

おばさんが問うてくる。

「ブレンドですね。何せ店長の自信作ですから。佐伯さんも気に入ってくれてます」

「そうか。なら、それをふたつもらおうか」

「わかりました。少しお待ちください」

僕は一礼してキッチンに下がり、コーヒーをふたつ用意する。加えて、ミルクの入ったミルクピッチャーとスティックのコーヒーシユガーを数本。サービスでクッキーセットもつけておこう。

「お待たせしました」

フロアに戻り、おばさんのほうから順にコーヒーを置いていく。

最後にテーブルの中央にクッキーの盛られた紙皿。

「これは僕からのサービスです」

「まあ、嬉しい」

「佐伯さんのほうへはもう？」

「いや、この後にいこうと思ってる。客としていくと嫌がるかもしれないから、少し声をかけるだけにするつもりだよ。少しばかり話しておきたいこともあることだしな」

おじさんはミルクピッチャーからミルクを少量たらししてから、コーヒーを口に運んだ。

「これは美味しいな」

「ええ、本当に」

どうやらふたりの舌を満足させることができたようだ。

「ありがとうございます。では、ごゆっくりと。この学園祭も楽しんでもらえれば、水の森の生徒として嬉しく思います」

「弓月さんもがんばってね」

「ありがとうございます」

僕はもう一度お礼を言い、その場を辞去した。

正午過ぎてもまだ忙しさは続いていた。

その最中のこと。

「弓月君、佐伯さんきてるわよ」

カーテンから顔を覗かせ、ホールスタッフの女子が僕を呼ぶ。

「わかりました。後で顔を出すと伝えてください」

「それが弓月君をご指名なのよ」

「おいおいおいおい、いつからここは執事喫茶になったんだ」

「……」

少なくとも看板をかけた替えた覚えは、僕にはないな。

仕方がない、行ってくるか。いちおう用意しておいた男子のホー

ルスタッフ用のギャルソンベストに袖を通し、エプロンを腰に巻く。

ご指名とあればそれなりの格好をしていくべきだろう。

ホールへと出る。

テーブルのひとつに制服姿の佐伯さんと、その向かいに桜井さんが座っていた。ふたりは僕に気づくと手を振ってきた。

「いらっしやい、ふたりとも」

「いらっしやいましたー」

と、元気な桜井さん。

「おー、弓月くんがギャルソン。似合ってるう」

「そんなわけないでしょう」

今着たばかりで、着慣れた感じが無いのが自分でもわかる。

「そっちはどうですか？」

「キリカのおかげで大繁盛。いつまでもキリがないから、むりやり

1時間休みをもぎ取ってこっちにきちやいました」

言って桜井さんはかわいらしく舌を出した。

盛況なのはいいが、少し心配な気がしないでもない。特に期間中は一般の人も入ってくるし、変な人間が寄ってこなければいいが。後で滝沢にひと言言って、警戒してもらおうことにしよう。

「そう言えば、佐伯さん。先ほどおじさんとおばさんに会いましたよ。そちらにもこられましたか?」

「うん、ちょっと話した、かな。……あ、そうだ。ね、このブレンドって、弓月くんのいつものやつ?」

ふいに佐伯さんは、テーブルの上に置いてあるラミネート加工を施した手書きのメニューを手に取り、訊いてきた。

「そうなりますね」

「じゃ、わたしはこれで」

「え、なにに? いつものやつって?」

今度は桜井さん。

「まあ、言ってみれば僕のオリジナルブレンドコーヒーというところですよ」

「はいはい。わたしもそれをお願いします」

「わかりました。少し待っていてください」

オーダーを受けた僕はギャルソンとして軽く一礼し、キッチンへと体を向ける。

と、その背中に桜井さんが声を投げかけてくる。

「あ、弓月さん。弓月さんも後でこっちに遊びにきてくださいね。」

絶対に損はさせませんから」

「そうですね。時間を見つけて覗きにいきますよ」

僕は振り返り、そう答える。まあ、佐伯さんとも約束していたことだしな。

このコーヒー専門店には食べるものといえばクッキーのようなお茶菓子程度しかないのに、ありがたいことに2時近くまでお客は途切れることなく続いた。ようやくひと息ついて休憩をもらえること

になり、僕は約束通り佐伯さんのクラスに足を運んだ。

因みに、休憩の許可をくれたのは雀さん。僕が店長なら、彼女はオーナーだろうか。

「よかつたら寄っていたださーい」

廊下にまで飾りつけがされた教室の前では、男子生徒が熱心に呼び込みをやっていた。このクラスで唯一僕が知る男子生徒、浜中君ではなかった。彼がここに立てば、少なからず売り上げに貢献するのではないだろうか。

「客でなくて悪いのですが、佐伯さんいますか？」

「佐伯さん？ …… ああ。すぐに呼んできます」

彼は僕の顔を見て「ああ」と納得したように言った。それはどういう「ああ」なのだろうか。あまり深くは考えたくないな。

程なく姿を現したのは、まずは桜井さんだった。

「ずっきゅーん！」

文字通り飛び出してきて、右目の前で両手でハートマークを作る。妙にハイテンションだ。夏休み中プールに行ったときもそうだったが、こういうお祭りや人が多い場所だとテンションがうなぎ登りになるようだ。

桜井さんに続いて佐伯さんが出てくる。

ふたりは共通してひらひらした感じの服を着ていた。スカート丈は長く、見方によっては所謂メイド服に見えなくもない。きっとこの喫茶店のユニフォームなのだろう。

堂々とメイド喫茶と名乗ってしまうと運営や学校の審査に引っかかってしまいそうだから、ユニフォームもこの程度のギリギリのラインに抑えたのだろう。案外、今日まで隠しておくくらいの小技を使ったのかもしれない。

「出てきて大丈夫でしたか？」

教室のドアのほう目を向けてみれば、見える範囲のテーブルはほぼ埋まっているようだった。うちよりも遥かに盛況だ。

「うん。少しくらいなら」

「ちょうど休憩がほしいと思っていたところですから。……それより、これ、かわいいと思いませんか？」

桜井さんは僕に見せ付けるようにして、スカートを指でつまんで広げてみせた。

「どうやらユニフォームは手作りか、既存の服に手を加えて作ったようだ。どちらにしても手間がかかっている。それに比べてうちは男女のエプロンを用意しただけ。1年生はエネルギーギッシュだ。」

「ほら。キリカなんて凶悪ですよ。お客の大半はこれが目当てできてるようなものですから」

その客の気持ちはわからなくもない。確かによく似合っている。きつと服と呼べるたいていのものなら、彼女は着こなしてしまうのだろうか。

そうやって僕が改めて佐伯さんも見ていると、ちょうど目が合っ
てしまい 彼女は少しだけ恥ずかしそうに目を逸らした。

「キリカ、よかったらその服、持って帰る？」

「こ、こんなかさばるの、持って帰ってどうしろってのよ!？」

「ご主人様とメイドごっこ、とか？」

「するかっ」

それには同意見だ。

そうして桜井さんは、今度は僕のほうに寄ってくると、口許を手で隠しながら囁いた。

「弓月さん弓月さん、極秘情報です。着替えるときに見たんですけどね、今日のキリカったらセクシー且つキュートと言いましょうか、えろかわいと言いましょうか。なので、ご主人様とメイドごっこで、そのまま引剥いて……ぎゃあー!」

桜井さんの首に佐伯さんのチョークスリーパーが決まる。

「よ・け・い・な・こ・と・言・わ・な・い・のっ」

「ぐおおおおお」

ぎしぎし締め上げてくる佐伯さんの腕を、桜井さんがばしばしとタップする。

「言つとくけど、そつちが見てるってことは、こつちも見てるんだからね」

まるでニーチェの言葉だな。

しかし、桜井さんは佐伯さんの腕を掴んで発声するだけの余裕を確保すると、思いもよらない逆襲に出た。

「甘いわね、キリカ。そんなの自分から言っちゃえばいいだけよ。

今日の桜井、上も下も青と白のボーダー柄です」

「……」

何を言い出すのだろうな。

「ほら、あれですよー。夏休みに見た水着と同じだと思えば、恥ずかしくないモン？」

時々特殊な理屈を持ち出してくるな、この娘は。

「うむむ。こうなると果たして何が両者を分けるのかという形而上学的に深い疑問が」

あるか、そんなもの。

と、矢継ぎ早に撃ち出されるアレな発言に、僕も佐伯さんも軽い頭痛とともに啞然としていて、その隙を突いて桜井さんがチョークスリーパーから抜け出した。

「とつっ」

素早く佐伯さんの後ろに回り、両手でその背中を押す。

「きゃっ」

「おっと」

突き飛ばされた彼女のその先には 僕。

メイド服姿の佐伯さんが抱きつくようなかたちで、ぼすんと僕の腕の中におさまった。

「……」

「……」

僕はしばしそのまま固まり、

それから佐伯さんがゆっくりと顔を上げて、僕にだけ聞こえるボリウムで言う。

「この服、持って帰ったほうがいい？」

「いいません」

何に使うつもりだ。

「じゃあ、わたしは？ 持って帰る？」

「……ひとりで帰ってください」

ここはあえて惚けておくことにする。勿論、佐伯さんは「……面白くない冗談」と頬を膨らませていたが。

そんな学園祭らしいドタバタがあり、一日目は無事に終わりに近づいていった。

6(2)・「そのはずだったんですけどね」

学園祭2日目。

朝はいつも通り佐伯さんに起こされ、一緒に朝食を食べたものの、その後、彼女は用意ができ次第慌ただしく家を出てしまい 結局、昨日と同様登校は別々となった。

僕が学校の校門をくぐったのは、今日も8時半。

やはりすでに多くの生徒がきている。その顔には多少の疲労の色が窺えるが、今日も目いっぱい楽しもうという意気込みは褪せてはいないようだった。

教室に入ればこちらもほとんどのクラスメイトがそろっていて、その中には昨日いなかった面々 即ち、滝沢、矢神、宝龍さんらもいた。

「さすが滝沢さん、よく似合ってます！」

滝沢はホールスタッフをやるらしく、ギャルソンスタイルに着替えていて、居心地悪そうに襟元に指を指し込んだりしていた。それを手放しで褒めているのが雀さんだ。

「確かによく似合ってますよ、滝沢」

「弓月か」

僕に気づき、彼は笑みを見せた。

「お前だって昨日着たらしいじゃないか。けっこう似合ってたんじゃないのか」

「まさか」

「意外に様になってましたよ」

僕と雀さんの発音が重なる。

思わぬ発言にびっくりして、僕は彼女を見た。

「……」

「……」

「……なによ」

「……いえ、別に」

何せ自分ではまったく似合っていると思えなかったし、それを雀さんにそんなふうと言われるとは予想だにしていなかった。

「ま、まあ、滝沢さんには負けますけど。それに顔がねえ。もうちよつとしゃきつとしてくれたら……」

「ほつといてください」

顔はどうしようもない。というか、文部科学省のガイドラインに従えば、そういう人の身体的特徴についての発言はアウトなのではないだろうか。

「ねえ、ナツコ。本当に私もやるの？」

今度は宝龍さんだ。

彼女もホールスタッフなのだが、こっちはまだ畳まれたエプロンを手で持っているだけで、準備はしていない。どうにもこの役割分担当が不満らしい。

「大丈夫です。宝龍さんならばうちりです」

すでに何でもかんでも褒め倒すブランドショップの店員状態の雀さん。

「私、愛想笑いなんかできないわよ」

「それはそれで需要があるんじゃないですか」

僕も付け足す。校内でも有名なクールビューティだ。むしろそちらのほうが望まれているかもしれない。

「ふたりで好きなこと言ってくれるわね」

宝龍さんは諦めたようにため息を吐いた。

「ほらほら、時間も迫ってきましたから。準備お願いします。……弓月君も。教室を離れる前にやることはやってもらいますからね」

「了解です。じゃあ、矢神」

僕は、本日はキッチンスタッフである矢神を呼ぶ。

やることはコーヒーマシーンの淹れ方についての講義。すでに一度レクチャーしていて今日は単なるおさらいなのだが、以前おしえた以上によく理解しているように感じた。

聞いてみれば、

「家で勉強したから」

とのこと。

熱心なことだ。感心する。

『9時になりました。只今より第9回水の森高校学園祭2日目を開催いたします』

程なく校内放送が流れた。

2日目の今日は日曜日ということもあって、一般来場客は昨日よりも明らかに多かった。そのためかコーヒー専門店の看板を掲げた我がクラスのカフェに興味をもってくれる人も多く、開始30分ほどから客が入りはじめた。

ある程度軌道に乗ったのを見届けてから、佐伯さんのクラスに向かったのが10時前。

今日はお互いフリーにして、一緒に見て回る予定なのだが、考えてみれば詳しいことをぜんぜん決めていなかった。最初はどうしても自分のクラスにいないといけないが、その後いつどこで合流するかなど、今朝も何となくバタバタしていてその話をするのをすっかり忘れていた。

まあ、僕から迎えにいけばそれですむだろう。

と、思っていたのだが。

「キリカ？　それが朝はいたんですけど、気がついたらいなくなってます……」

佐伯さんのクラスを訪れて、対応してくれたのは桜井さん。彼女は今日はシフトに入っていないのか、昨日とは違って制服姿だった。「そうですか。もし戻ってきたら僕が探してたと伝えてください」「わかりました。……まったく、どこ行ってるんでしょうね、弓月さんほったらかしにして」

頬を膨らます桜井さんに、僕は苦笑を返すしかできなかった。

詳しいことを決めていなかった以上、どちらがどちらをほったらかしにしたとも言えないのではないだろうか。見方によっては僕が今まで佐伯さんを放り出していたともとれる。むしろこちらか。

「お願いしました」

僕は桜井さんに背を向け、少し歩いたところでポケットから携帯電話を取り出した。

メモリーから佐伯さんのアドレスを呼び出し、電話をかけてみる。やけに不安を煽る長いコールの後、ようやく出たと思ったら、それは音声ガイダンスだった。

『只今電話に出ることができません。ご用の方は』
留守番電話に切り替わる。

何かメッセージを残しておくべきか　　と思ったとき。

『間もなく10時より校庭、テニスコートにて水の森高校テニス部と藤代学園高等部テニス部による親善試合を行います。皆様お誘い合わせの上、ぜひご観戦におこしく下さい』

校内放送。

まさかこれに重ねてメッセージを入れるわけにはいかないだろう。結局、何となくタイミングを逸して、そのままひとまず通話を切った。

活気溢れる廊下を通り、階段を上がる。

2階に足を踏み入れたところで、僕は再度のアプローチを試みた。今度はすぐにつながったのだが、
、
思わず立ち止まっていた。

『おかけになった電話は、只今電源が切れているか、電波の届かないところにあるため』

電波が届かない？

さっきは曲がりなりにもつながったのに？

なら　電源を切られた……？

どういうことだ？

首を傾げながらも歩を進め、自分の教室に辿り着く。『関係者以外立ち入り禁止』と書かれたそのドアを開ければ、そこはカフェのキッチン。

「ああ、弓月君、丁度よかった。手が空いてたら手伝ってくれない？」

入るなり焦ったふうの雀さんの声が耳に飛び込んできた。

見ればかなり忙しそうなお状況だった。オーダーを受けたホールスタッフはひっきりなしにキッチンを出入りし、キッチンスタッフはそれに対して追いついていないようだった。

盛況で何よりだ、などとのん気なことは言っていられないようだ。「8割方うちの生徒ってどういうことよ!? まったく、いったい何が目当てできてるんだか」

怒りのナツコさん。

どうやら我がクラスが誇る美男美女を立たせたことは、予想以上に効果覿面だったようだ。

「仕方ないですね」

どうせ改めて佐伯さんのところに行くにしても、時間を置いてからになるだろうし。それまでは特にするもない。いい時間潰しだ。いちおういつ電話がかかってきてもわかるように、注意だけはしておこう。

そうして再び僕が佐伯さんのクラスを訪れたのは、時計が11時半を回ったときだった。

教室の前にいた1年生をつかまえ、佐伯さんか桜井さんはいるかと問うと、程なく出てきたのは桜井さんのほうだった。その時点である程度の状況は察することができる。

「キリカ、ですよな? え、えつと、どうしちゃったんだろ……? 結局あれから見てないっかな? あはははー……」

出てくるときから少々挙動不審だった彼女は、ここにきて白々しい乾いた笑いまで発した。

と、横から割り込む声。

「桜井さん、ちゃんと行ってあげたら？ 佐伯さんは一度戻ってきたけど、僕たちの知らない男とまた出て行きましたよって」

「浜中君っ」

そこにあからさまに不機嫌そうな顔をした浜中君が立っていた。

驚いて桜井さんが振り返る。

「それは本当ですか？」

「さあてね」

彼はそれだけを言って、歩調も荒く教室の中に戻っていった。

僕は桜井さんへと向き直る。

「すいません。キリカが帰ってきたときにちゃんと伝えたんですけど、キリカだったら『あ、うん……』って生返事するだけで、そのまま出て行っちゃって……」

「そうですね」

彼女はそれを僕に言いたくなかったらしい。

「キリカと約束してたんですよね？」

「そのはずでしたけど、最近はその話もあまりしなかったし、いつの間にか有耶無耶になっていたのかもしれないね」

言っておいて気づく。確かにそうだ。最初は学祭デートだ何だと浮かれていたわりには、いつからかその話はしなくなっていた。学園祭の話題は出ても、今日のこの日のことについては触れなかったように思う。

「あ、あの、キリカが戻ったら、今度はちゃんとつかまえておきますからっ」

そう言ってくれた桜井さんに対し、僕はお願いしますとももういいですとも言えず、力なく笑って「ありがとうございます」とだけ返した。

三度、教室へ戻る。

「あ、帰ってきた。何度も悪いんだけど、また手伝って。ぜんぜん

お客が途切れないの」

「こちらはいつ戻ってきてても熱烈歓迎だな。

「またですか。……でも、すみません。そんな気分じゃないので」

「あ、ああ、そう？ まあ、もともと今日はそういう予定じゃなかったから、別にいいけど」

「少しだけ怪訝そうな顔をする雀さん。

そして、どうやらたまたまキッチンに入ってきていた宝龍さんがこれを見ていたようだ。

「恭嗣、何かあったの？」

「別に。何もありませんよ」

確かに何もなかったな。

しかし、宝龍さんは雀さん以上に怪訝な表情、というよりは、探るようにじつと僕の顔を見つめてくる。

拳げ句。

「恭嗣、ちよつとつき合いなさい」

「は？ どこへですか？」

「どこだっていいわ。私も慣れないことをやって辟易していたところなの。……ナツコ、ちよつと出てくるわ。もう戻らないかもしれないけど」

「え？ ええっ!？」

慌てふためく雀さんにはおかまいなしに宝龍さんはエプロンを外し、その辺に放り出した。

「行くわよ、恭嗣」

僕は彼女に腕を掴まれ、引きずられるようにして廊下に連れ出された。

宝龍さんと廊下を歩く。

もう腕は掴まれていなかったが、かと言って他に行くあてがあるわけでもなく、黙って彼女の横に並んでいた。いつもの見慣れた制服の生徒だけでなく、私服の老若男女であふれた廊下というのは実

に奇妙な光景だった。

「いったい何があったの？」

「……」

宝龍さんはもう一度同じことを聞いてくるが、僕は黙っていた。

「今日はその子と一緒に見て回るんじゃないかったの？」

「そのこと宝龍さんに言いましたっけ？」

「聞いてないけど、それくらいわかるわ。昨日ずっとクラスにかかりっきりで、今日は丸々フリーにしてたんでしょ？」

たったそれだけで予想されるのか。そんなに僕の行動は佐伯さんに支配されているように見えるのだろうか。

「あの子とケンカでもした？」

「してませんよ。それ以前の問題です。佐伯さんとは会えませんでしたから」

「約束してたんじゃないの？」

宝龍さんは不思議そうに問いを重ねた。

「そのはずだったんですけどね」

苦笑が漏れる。

あまり多くは語りたくなかった。しかし、相手は聡明極まる宝龍美ゆき。一を聞いただけで十を推測してしまう。今も黙り込んで、何があつたか大方のことはもう想像がついているようだった。

「あつちの校舎でもいろいろやってるんですよね。少し行ってみましょうか」

渡り廊下に差しかかり、僕は提案する。本当に見にいきたかったわけではなく、ただ単に話題を変えたかっただけだ。

特別教室がある校舎は主に文化部が使っている。化学実験や料理など、部に困んだパフォーマンスをやっているところもあれば、まったく関係ない店をやっているところもあるようだ。

渡り廊下を往く。

窓から外に目をやれば下には中庭が広がっていて、屋台が軒を連ねていた。少し離れたところには、校庭のものよりひと回り小さい

ステージが組まれている。その前の空間にユニフォームを着たチアリーディング部が集まっていたが、今は演技を披露する時間ではないようだ。

僕は目を再び手前の屋台通りへと戻し　そして、そこで見つけてしまった。

多くの人が行き来するその中に、佐伯さんがいた。

そして、その横には見慣れぬ男子生徒の姿も。

ただ、桜井さんや浜中君は知らなくても、僕はその理知的な面立ちとノンフレイムの眼鏡に見覚えがあった。先日、佐伯さんの自転車の練習をしたときに会った3年生だ。

ふたりは、一緒に歩いているというよりは、佐伯さんが彼についていつている感じに見えた。

眼鏡の先輩のほうは、こういう場所だからか、以前に見たキザっぼさは薄れ、学園祭を楽しむようにやわらかい笑顔を見せていた。その横を佐伯さんがややうつむき加減に歩いている。

……なぜ？

そう思っても答えは出ない。彼とはあのとき初めて会ったと言っていないかったか。それがなぜ一緒に歩いている？

「どうかしたの？」

僕は我知らず足を止めていたらしく、宝龍さんが5歩ほど先で振り返り、問うてくる。

「いえ、別に何でもありません」

言いかけた言葉が途切れる。

遅かった。窓の外的一点を凝視する宝龍さんは、すでに僕と同じものを見つけてしまったようだ。

彼女はゆっくりと僕を見た。

何か言いたげな視線。

「今日のところは何も見なかったことにしておいてください」

「……」

「……」

「……わかったわ。恭嗣がそう言うならそうする」

宝龍さんは深くため息を吐いた。納得はしていないようだ。

僕は再び窓の外を見る。

「……」

ここで窓を開けて恥も外聞もなく彼女の名前を呼ぶくらいのことをすればよかったのかもしれないが、こんなときにもよけいな理性がはたらき、ただ見ていることしかできなかった。

ふたりの姿がこの渡り廊下の下の死角に消える。

僕はもう、彼女の姿をもう一度見つけようという気にはならなかった。

そのまま何ごともなく学園祭は進行し、幕が下りると同時に僕は学校を出て、家に帰ってきた。片づけは明日の振り替え休日にやるようだが、多くのクラスメイトは今もまだ教室に残って打ち上げと称してに飲み食いしているはずだ。

当然のことながら、家に佐伯さんの姿はなかった。

部屋で着替えてから、キッチンでコーヒーを淹れる。使うのは昨日と今日で見飽きたサイフォンではなく、コーヒーメーカーだ。

コーヒーが抽出される間、僕は立ったままじっとコーヒーメーカーを見下ろしていた。サイフォンのように目に見える変化があるわけでもないのに、何も考えず、ただ、見つめる。

不意に玄関のほうでドアの開閉する音が聞こえた。

やがてリビングに入ってきた佐伯さんは、僕を見てぴたりと足を止めた。

「おかえりなさい」

先に僕が言葉を発した。

「……た、ただいま。ゆ、弓月くん帰ってたんだ……」

玄関の鍵が開いていた時点でそれはわかっていたはずだが、きっと僕がキッチンにいるとは思っていなかったのだろう。いきなり顔を合わせて、咄嗟に口をついて出たのがそんな言葉だったのだ。

「あ、あのっ」

「はい？」

「今日は……ごめん……」

彼女は視線を落しながら、つぶやくように言う。

「どうしたんですか、いったい」

「その、同じ中学にいた友だちがきてて、それで懐かしくてつい…

…」

「……」

まずその言葉を信じた。そして、眼鏡の先輩が本当に佐伯さんと同じ中学出身で、そのときからの知り合いだと仮定して やっぱりダメだった。辻褄が合わない。設定は破綻する。

なぜか彼女を見ていられなくなって、僕は視線をコーヒーマーカ―に戻した。

「……そうでしたか。なら仕方ないですね」

「う、うん。ごめん……」

力のない言葉が紡がれる。

しばしの無言。

部屋にはコーヒーマーカ―がコーヒ―を抽出する、あまり情緒的とはいえない音だけがあった。

「それでね」

やがて意を決したように、彼女は切り出してきた。

「急に家に帰らないといけなくなったの……」

「……今日、ですか？」

本当に急な話だ。

「うん。今晚は向こうに泊まることになると思う」

「そ、そうですね」

僕は動揺しているのかもしれない。口から出たのは、ただそれだけだった。

「ごめんね……」

ここに帰ってきてから何度目かの「ごめん」。

「すぐに出るつもりなんだけど、コーヒー淹れてもらっていいかな？ それ飲んでから行きたいなって思ってた」

「ええ、いいですよ。丁度もうすぐできるところですから。先に着替えてくるといいです」

「うん。ありがとう」

ようやく見られた彼女の笑顔は、やはりどこか弱々しいものだった。

佐伯さんはぱたぱたと自室へと入っていく。

そうして、

15分ほど後には、僕らは一緒にコーヒーを飲んでいた。

キッチンにある二人用の小さなテーブルに向かい合って座り、淹れたてのコーヒーの入ったマグカップを口に運ぶ。

会話はほとんどなかった。

互いに視線を合わせないようにしつつ、ただ黙ってコーヒーを味わう。

「ごちそうさま。うん、美味しかった」

やがて佐伯さんがカップを置いて立ち上がった。

「駅まで送りますでしょうか？」

「ううん、大丈夫。まだ明るいから」

首を横に振る彼女。

「そうですね。じゃあ、気をつけて」

うん　そう頷いてから、佐伯さんは出ていった。

玄関で彼女を見送ってからキッチンへ戻り、

僕は保温ポットの中にある淹れたばかりのコーヒーを、すべて捨てた。

翌、月曜日は振り替え休日。

教室の片づけ作業は片づけ班のメンバー以外は自由参加で、僕は

その自由参加のほうだった。が、歩いてすぐの距離に住んでいることでもあるし、手伝いにいくことにした。

何より家にいるとよけいなことを考えそうで、やることがあるのはありがたかった。

このとき僕は根拠もなく思っていた。

昨日のことについては佐伯さんなりの何か事情があつて、彼女はその『事情』を整理するために家に帰るのだと。そして、またここに戻ってくるのだと。

しかし、僕が学校から戻ってきてても彼女はいつこうに帰ってくる気配がなく、また、その連絡もなかった。

夕方になって、ようやく一本の電話が入った。

そこで彼女は僕にこう告げた。

「しばらく家から学校に通おうと思うの。ごめんね……」

昨日何度も聞いた「ごめん」だった。

佐伯さんは最初からこうするつもりで、昨日ここを出たのだろうか。

7(1)・「それくらい飲んでいきませんか？」

朝。

学園祭が終わって、明けて月曜日の振り替え休日も過ぎ、今日からさっそく通常の授業だ。

眠りが浅かったせいで、目覚まし時計をセットした時間よりも先に起きてしまった。時刻を確認してからアラームを解除する。以前、佐伯さんが寝坊をしたときからいちおう毎日アラームをかけるようにはしているのだが、未だにこいつは一度も仕事をしたことがない。

「……」

そうか。今日から佐伯さんはいないのか。

実際には昨日からすでにいなかったのだが、そのときはまだ彼女はすぐに帰ってくると思っていた。

だから、実質的に今日が初めての『佐伯さんのいない朝』だ。

「……考えていても仕方がない、か」

僕はベッドを降りた。

やることはいくらでもある。朝食を作って、その後片づけ。洗濯くらいはしてから学校に行きたいところだ。簡単に掃除までしていた佐伯さんの手際によさには、今さらながら頭が下がるな。

ラフな部屋着に着替え、自室を出ようとして ドアノブを握ったところで動きが止まる。

ドアの向こうで物音がした。そして、人の気配も。

僕は部屋から飛び出す。

「!?!」

そこに 佐伯さんが、いた……。

制服姿でキッチンに立ち、朝食を作っている。まるでいつもと同じ朝の風景だ。僕は一瞬、彼女が出ていったのは何かの勘違いだったのだからかと混乱した。

「あ、起きたんだ……」

部屋から転がるようにして出てきた僕を見て、彼女は言う。

だが、その声の調子はどこかばつが悪そうで、僕には彼女が焦っているようにも見えた。

「帰ってきてたんですか!？」

「う、うん。でも、荷物取りに寄っただけだから。教科書とか制服の冬服とか、ね」

そう言われて見れば、リビングの入口にいつぞやの大きなスポーツバッグがあった。そこにまとめた荷物が入っているのだろう。

つまり、まだしばらく帰ってくるつもりはない、ということか。

さらに佐伯さんは、まるで逃げるように僕に背を向け、料理を再開しながら続ける。

「ほら、来週から衣替えだから。弓月くんも忘れないようにね。夏服のまま行ったら格好悪いよ」

が、しかし、むりに明るく振る舞おうとして笑みを含ませた声は、まるで誤魔化し笑いのようだった。

「昨日ちゃんと掃除した？」

「しましたよ。簡単にですが」

当り障りのない会話は、逆にどこか空々しい。

「洗いのものは？ 洗った食器がまだ水切りカゴに残ってたよ。もう棚に戻したけど」

「あ、ありがとうございます」

そういえば、夜には何もする気がなくなつて、そのままほつたらかしにしていたな。

「……」

「……」

少し間があいた後、

「はい、できた」

佐伯さんは最後の一品を作り終え、その皿をテーブルの上に置いた。いつも僕が座っている、リビングに近い側の席だ。

「ついでだから朝ごはんも作っておいたから。後で食べて。……じ

「やあ、わたし、行くね」

「え？」

彼女の放った最後のひと言に対し、僕は間抜けな声を上げる。佐伯さんは僕の横を抜け（僕はそれを目で追いながら振り返り）、そして、スポーツバッグを拾い上げてから、僕へと向き直った。

そこはリビングの入口。

ドアの向こうは玄関へ続く廊下。

僕はどうにか声を絞り出す。

「君と一緒に食べないんですか？」

「うん。家で食べてきたから」

弱々しい微笑つきの、やわらかい拒絶。

「じゃあ、すぐにコーヒを淹れますよ。それくらい飲んでいきませんか？」

「ううん。いい」

彼女の声はあくまでも優しく。

「兎に角、すぐに僕も食べますから、一緒に学校に行きましょう」

「……」

しかし、それにも黙って首を横に振るだけ。

長居をする気はないということらしい。

「……そう、ですか」

「うん。……じゃあね、弓月くん」

「ええ」

最後にもう一度、力のない笑みを見せ、佐伯さんはリビングを出ていった。

僕はもうこの前のように玄関まで見送りはしなかった。

その場に立ち尽くし、ようやく動けるようになったのは、玄関のドアが開いて閉じ、その音の余韻すらも完全に消え去ってからだった。

振り返り、彼女の作ってくれた朝食を見て、ふと気づく。

ホワイトオムレツに生ハムサラダ。後は食パンを焼いてコーヒーでも添えるだけの、多少冷めても十分に食べられるメニュー。もしかしたら佐伯さんは、僕に気づかれないうちに用だけすませて出ていくつもりだったのかもしれない。だから僕を起こしもしなかったのだらう。

……どうしてなのだらうか。

なぜ彼女は僕から離れ、僕を避けるのか。

そして、あの日。

僕との約束を破り、あの先輩と時間をともにして、帰ってきてからも本当のことは言ってくれなかった。

いったい、なぜ。

「……」

いくら考えても思いつかない。

きつと何か事情があるのだらう。それは佐伯さんがこちらに帰ってきて、その口から話してくれるのを待てばいいと思っていたがやはり一度ちゃんと聞いたほうがいいのかもしれない。

ため息をひとつ。

僕はひとまず考えるのをやめた。

せっかく佐伯さんが作ってくれた朝食だ。まずはこれをいただくとしよう。そう思ってコーヒーメーカーへと向き直り　そこで胸に息苦しさを覚えた。

思い出すのは、佐伯さんと飲んだ最後のコーヒー。

……。

……。

「……しばらくコーヒー断ちだな」

僕はコーヒーメーカーをセットするのをやめた。

7(2) . 「それは本気で言ってるんですか？」

チャイムが鳴って授業が終わる。先生が教室の出入り口に体を向けると同時に、僕は携帯電話を開いた。

メールの受信なし。

今まで授業だったから、当然、音声通話の着信もなし。

僕はため息を吐く。

あれから一週間ほどが経ち、暦は10月。制服は冬服へと変わって、学園祭の余韻もとうに消え去った。生徒の気持ちは次にくる中間考査へと向いているようだが、一方の僕はというとまるで何もかもが停滞してしまっただけだった。

「最近よくケータイを見てるわね。どうかしたの？」

端末を閉じて見上げてみれば、そこに宝龍さんが立っていた。

「……ちよつと、ね」

わざわざ人に言うようなことでもない。

「少し廊下に出ない？」

「……」

廊下は人に聞かれたくない話をするのにはうってつけの場所だ。人が多くて騒がしいので、よほど大きな声で話さない限り周りに聞かれる心配はないし、近くで耳を敬てているやつがいればすぐにかかるとか。

つまり宝龍さんは僕に話があるということか。

「いいですよ」

僕は席を立ち、ふたりで廊下へと出た。

まだ休み時間がはじまっただばかりで行き来する生徒の姿はそれほどでもないが、どの教室からも喧騒が聞こえてくる。授業を延長するような空気の読めない先生はいなかったようだ。

僕らは廊下の窓にもたれるようにして立った。

「単刀直入に聞くけど、あの子とのこと、今どうなってるの？」

宝龍さんは遠慮は無用とばかりに、ずばり斬り込んできた。

「学園祭のあの日からあなたたち、様子がおかしいわよ。一緒にいるところも見なくなつたし、恭弔もずいぶんと口数が減つたように感じる」

「……」

そうだった。宝龍さんもおの場面を見たんだつたな。そして、彼女は僕と佐伯さんが一緒に暮らしていることを知っている数少ない人物でもある。

「実はね、佐伯さんが出ていってしまったんですよ」

「……どういうこと？」

宝龍さんはその意味を理解しようと僕の言葉を咀嚼していたようだったが、結局飲み込み切れず、聞き返してきた。

「どうもこうも、そのままの意味ですよ。しばらく実家から通うと言つて、学園祭のあの日に出ていきました」

奥さんに逃げられた男みたいだな。思わず自嘲的な笑いがもれる。

宝龍さんは瞬きを数回。

「いったい何があつたの？」

「さあ？ 僕にも何がなんだか。それを聞きたいと思つて連絡をとつているのですが、目下のところ返事待ちの状態です」

僕だつて何があつたか、どういふ事情があるのか知りたいと思つている。だから、こちらから連絡をとつてみたのだが、今のところ電話もメールも応答はない。初期に一度だけ彼女のほうから電話がかかつてきたことがあつたが、着信メモデイが一瞬鳴っただけですぐに切れてしまった。今は懐かしいワン切りのようだ。すぐに折り返しかけてみたのだが、やはり出てはくれなかった。以後も定期的にコンタクトを試みているが、結果はこの有様。おかげ様でファントムバイブレーションシンдрームにまでかかりつつある。

佐伯さんの自宅にかけてみるという手も考えたのだが、残念ながらまだ電話番号は聞いていなかった。後は彼女のお父さん トオル氏だが（こちらは本人からおしえてもらつていた）、今のところ

おじさんまで巻き込むつもりはなく、最終に近い手段として残している。

「ま、そろそろ次の手を打つつもりですよ」

それにしても、佐伯さんの声を聞かなくなつて久しい気がするな。

明けて翌日の昼休み、僕は佐伯さんの教室を訪ねてみることにした。

学校に行けばすぐ上の階に彼女はいる。それをわかりつつ今まで携帯電話というツールにこだわっていたのは、話しにくい事情もこれなら話してもらえるかと思つたからだ。

上階へと続く階段を上がる。

考えてみれば、前と変わらず同じ学校で過ごしているにも拘わらず、めつきり佐伯さんと会わなくなつた。意図的に避けられているのか、それとも広い校内で特定の人間と会う確率自体そもそもこんなものだったのか。

教室の前でそのクラスの生徒らしき1年生をつかまえ、佐伯さんと呼んでもらつた。

待っている間、浜中君が教室から出てきたが、僕を見るなりふんと鼻を鳴らすだけで、さつさと行つてしまった。この前の学園祭のときもそうだったが、なぜだかこのところ取りつく島もないくらい怒っているようだ。

浜中君の後、程なくして佐伯さんが姿を現した。

重い足取りで出てきた彼女は、ややうつむきかげん。

「佐伯さん」

僕が呼ぶとびくりと体を跳ねさせ、それからおそろおそろ顔を上げた。

こちらを見て弱々しく笑みを見せる　　が、しかし、それはむりに笑おうとして失敗したような、どこか不自然なものだった。今まで避けてきたけど、ついに会ってしまったところだろうか。僕の前に立ち、視線を足もとに落とす佐伯さん。

「こんにちは。久しぶりですね」

「う、うん……」

彼女を見ればもう少し気持ちが乱れるかと思ったが、意外とそうでもなかった自分に少し驚いた。

「少し話せますか？」

「……うん。じゃあ、あつちで……」

そう言われて場所を移した先は、さらに上へ続く階段の踊り場だった。この上には立ち入り禁止の屋上しかないため、あまり生徒は寄りつかない。

僕らはそこで、昼休みの喧騒をどこか遠くのものに聞きながら、再び向き合った。

改めて佐伯さんを見る。

不思議な明暗のついたブラウンの髪をした、とびきりの美少女。しかし、彼女からは、本来不可欠だったはずの笑顔と元気が消えていた。そして何より、僕の知る佐伯さんはこんなふうに関を伏せたりはしていなかったはずだ。

「そろそろ話してくれませんか」

僕は静かに口を開く。

「どうして出ていったんですか？ 何か事情があるんですよね？」

学園祭で見たものには触れなかった。あの男が誰だか聞きたい気持ちは勿論ある。だが、それを突きつければ、彼女を追い詰めてしまいそうな気がしてならなかった。

「それは……」

口ごもる佐伯さん。

それでも話してくれない彼女を見て、僕の心の中で自虐的な感情が鎌首をもたげる。

「男として情けないことを言うようですが 僕のことを嫌いになりましたか？」

「違うのッ。そんなんじゃない！」

佐伯さんは顔を上げ、切羽詰った様子で訴えるように僕を見つめ

てくる。

だが、それもわずかのことで、やがて項垂れるように目を伏せた。

「だったらどうしてなんですか」

「それは……言えない。言いたくない……」

「……」

「……」

ふたり黙り込む。

僕は深いため息を吐いた。そこにあるのは諦めか、それともここまで言っただけなら仕方がないという納得か。

「そうですね。わかりました」

確かに事情はあるのだろう。それも言いにくい種類のものが。それがわかっただけでも十分か。

そう思い、佐伯さんに背を向けようとしたそのときだった。

「あ、あの……」

初めて彼女から切り出してきた。

「あの、ね　しばらく、話しかけないでほしいの……」

彼女がうつむいたまま発した言葉は、その発音の勢いとは裏腹に僕の心臓を強く、まるで直接叩いたかのように、打った。

一瞬息が詰まる。

呼吸を再開しても、浅い息を繰り返しているみたいに息苦しかった。

「そ

ようやく発した言葉はまともな声にならず、僕は一度言葉を飲み

込む。

再試行。

「それは本気で言ってるんですか？」

「……」

佐伯さんは下を向き、黙って唇を噛む。まるで発してしまった言葉を後悔するかのようじ。

でも。

それでも否定も肯定もしない。

「う、ごめんね……」

そして、ついには駆け出し、僕の横を抜けていった。

僕は慌てて振り返り、彼女をつかまえようとしたが、しかし、伸ばした手は佐伯貴理華という少女に触れることすらできなかつた。すり抜けていく。

階段を見下ろせば、駆け下りた彼女が廊下に消えていくところだった。

呆然と立ち尽くす。

やがて、崩れそうになる体を支えるように、踊り場の壁を拳の底で殴りつける。

「くそ、なんでだよ……」

僕の口から久々に、実に僕らしい乱暴な言葉がもれた……。

7(3)。「お手上げじゃないか……」

秋も深まり、10月下旬の中間考査が迫ってきている。

佐伯さんが出て行って、僕の生活スタイルもかなり変わった。

彼女がやってくれていた、というか、やらせてくれなかった炊事、洗濯、掃除は当然、自分でやらないといけない。

料理のスキルに関しては、ひとり暮らしを決めたときに自炊するのに困らない程度には習得していた。当時はいざその生活になったら新しい料理にも挑戦しようと考えていたものだが、今はまったくそんな気にはならない。

掃除と洗濯は、手間さえ惜しまなければ誰にだってできる。

結局のところ、佐伯さんが出ていっても生活に困るようなことは何もなかった。のだが、それでも唯一どうしようもないことがある。

それは家の広さだ。

2LDK。

最初はひとつを勉強部屋に、もうひとつを寝室にして、それぞれゆったりと使うつもりだった。そんな計画の上で借りたはずなのに、改めて見ればずいぶんと広く感じるものだ。

とは言え、僕の生活空間は相変わらず自室とリビング、キッチンなどで、物理的な環境の更新はない。

ならば、なぜ以前より広く感じるのか？

つまりは心理的な問題ということになる。

笑えてくるな。要するに、とっくの昔に彼女といる生活が当たり前になっていたわけだ。あの明るくて、いつも楽しげに笑っている佐伯さんがいないこの家は、決定的なものが欠けていて、あまりにも静かだ。

おかげで僕は時折、この静かさに呆然としてしまうことがある。

ああ、そうか。

これが寂しいという感覚が……。

さて、単なるエネルギー補給みたいな食事なら朝からでも作るが、さすがに弁当までは作れないので、基本的には昼食は学生食堂ですませている。が、近頃はそれにも飽きてしまい、今日は駅前でパンでも買ってから登校しようかと思いついた。

去年、滝沢には家を出たら学食生活だと言っておきながら、結局気が変わったからと毎日弁当を作ってきて、ここにきてさらにまた方針転換で一緒に学食へ行くようになったくせに、それも早々に飽きたとぬかしているわけだ。彼の目にはさぞかしわけのわからないやつに映ることだろう。

普段より早めに家を出て、駅へと向かう。

道程は水の森高校へのルートと一部重なり、そこを逆行していると、早い時間ながらも時々同じ制服を着た生徒とすれ違った。

目指すパン屋は、小さな駅ビルみだいになっている駅舎の中にある。なかなか洒落た店で、2階には買ったパンをその場で食べられるテーブル席があり、いつか一緒に食べるにこようと佐伯さんと言っていたのだが、結局、僕がフライングして、ひとりでくることになってしまったな。

駅が近づいてくると、ちょうど電車がきたところだったらしく、まとまった数の人が駅舎から吐き出されるのが見えた。着ている服も様々なら、向かう先も様々。当然、水の森の生徒はこちらへと向かってくる。

かくして僕は、
、
その中に佐伯さんの姿を見つけ、

そして、さらに彼女と一緒に歩くあの眼鏡の先輩の姿も見つけてしまった。

「……」

一瞬、何を見たのか理解が遅れた。

佐伯さんがあの男と一緒にいる……？

不意に思い出したのは、あの日、階段の踊り場で彼女に言われた言葉。

『しばらく、話しかけないでほしいの……』

それと目の前の光景が嫌な結びつき方をする。　　つまりはこういうことなのか？

「……ッ」

遅れて、見えない何かが僕の胸を圧迫し、息苦しさを覚えた。

ふたりは一緒の電車に乗ってきたらしい。

偶然？

それとも、そうする程度には仲がいいということか？

僕の心はまるで泥濘の中。

それでも体は足を動かせば前に進み、彼女たちとの距離が縮まってくる。

並んで歩くふたりの姿は、知的な印象の先輩とおとなしめの後輩、といったところか。佐伯さんはうつむきかげんに、ひかえめな感じで横につき添い、歩いていた。

胸が、痛い。

やがて彼女も僕に気づき、そして、気まずそうに顔を伏せた。

話でも途切れたのだろうか、隣を歩く先輩は何ごとかと一度佐伯さんを見てから、正面に目を向け　　僕を見つけた。

目が合う。

だが、それもわずかのこと。僕は視線を外し、知らぬ振りを決め込んだ。

ふたつの動点の軌跡が最短になる。

すれ違う瞬間、横目でふたりの様子を見てみれば、先輩のほうもこちらを窺っていて、なぜだか彼はノンフレームの眼鏡をかけたその顔に、怪訝そうな表情を浮かべて僕を見ていた。

佐伯さんはずっと顔を伏せたまま。

僕らは初めて互いの存在を無視した。

教室に入ると、クラスメイトはまだ半分も登校していなかった。自分の机に制靴を放り出し、崩れるようにしてイスに腰を落とす。肺の中が空になりそうなほど、長い息を吐く。おおよそ朝一番の姿ではないかと、我ながら思った。

「おはよう、恭嗣。……どうしたの、顔色悪いわよ」
宝龍美ゆきだった。

教室に入ったときからいるのはわかっていたが、今はわざわざ自分から人に話しかけるのも億劫だったのでアプローチはしなかった。「朝からいろいろありましてね」

「そう。理由はあるのね。ろくに食べてないとかじゃなくてよかつたわ」

彼女はそんなふうに変化しはしても、具体的なことまでは聞いてこない。無論、僕としてはそのほうが助かるわけだが。

「何か話でも？」

「ええ。学園祭のとき、あの子と一緒にいた男の子のことなんだけど」

男の子？ ひとつ上の学年の先輩をつまえて？ と思ったが、考えてみれば宝龍さんは留年しているから、もともとは同じ学年なのか。

「あの人なら今朝、佐伯さんといえるのを見かけましたよ。一緒に電車に乗ってきたようです」

「そう。それでってわけね」

彼女は納得し、同時にやりきれない様子でため息を吐いた。

「兎に角、彼のこと。いちおう恭嗣にもおしえておこうと思って」
「聞きましょう」

知っておくにごしたことはないだろう。

「名前は桑島聖」

「桑島、聖……」

僕はその名前を復唱する。

「言つまでもないけど、3年生。1年のころはまだ私も同学年で、

クラスは別だったけど何度か話したことがあったかしらね。確かそのときは眼鏡をしてなかったと記憶してるわ」

だから顔を見てもすぐに思い出せなかったのね　と、宝龍さん
「いろいろと恵まれてるみたいよ」

「と言いますと？」

「成績優秀でスポーツ万能……かどうかはわからないけど、テニス部に所属していて、この水の森の、所謂エースというやつね。この前の学園祭のときの親善試合も、彼の試合がメインイベントだったらしいわ」

「……」

親善試合、か。

その単語に何か引っかかるものがあつた。

「でも、そういうのを鼻にかけない性格で、周りの評判もなかなかね」

「そうは見えませんがね」

僕にはあの眼鏡をかけた顔が妙にインテリっぽく映り、ブリッジを押し上げる仕種がキザっぽく見えたものだが。

「恭嗣が誰かを否定するなんて珍しいわね。あの子がからんでるか？？」

宝龍さんは可笑しそうに小さく笑う。

「ここまでは彼の才能といったところかしら」

「他に何かあるんですか？」

「家柄、というほどじゃないけど、家庭環境も立派なものよ。親が大企業の社長だと聞いたことがあるわ。桑島君はその御曹司ね」

その言い方だと、おそらく伝聞で入手した情報なのだろう。ということは、彼自らそれを自慢げに言いふらしたりはしていないということか。なかなかどうして、人格者だな。

それにしても、恵まれている人間というのはとことん恵まれるものらしい。

「なんて会社だったかしら。ええ、確か　『F・E・トレーディ

ング』」

「……」

続く彼女の言葉に、僕は凍りついた。

「どうかして？」

宝龍さんは、僕の内面の異変を鋭く察知して問いかけてくる。

「……ああ、そういうことか」

僕はうめくようにこぼした。

「その『F・E・トレーディング』はね、佐伯さんのお父さんが勤める会社なんですよ」

佐伯家の片づけを手伝った際、トオル氏の私室で散々その社名を目にしている。そして、これは僕の個人的な印象だが、おじさんは年相応以上の地位にいるようだった。なら、社長とつき合いがあってもおかしくない。互いに同年代の子どもがいて、しかも、同じ学校に通っている……。

「まさか」

宝龍さんにも僕が考えていることがわかったようだ。

「……つまり、親同士が決めた仲」

自然、そういう結論が出てくる。

思い返してみればおじさんは、学園祭にくる理由には会社のからみがあると言っていたし、当日には佐伯さんにも話しておきたいことがあるとも言っていた。それぞれ、社長の息子への挨拶と自分の娘への何らかの念押し、といったところか。あの日、僕がおじさんと会ったかと聞いたときの佐伯さんも、それには触れて欲しくない様子で不自然に話を変えていた。

ふたりの関係は学園祭の辺りからはじまったのだろう。彼女はきつと桑島先輩の試合も観戦なり応援なりにいったに違いない。

「お手上げじゃないか……」

僕のような子どもが口をはさむ余地などない。

このところ会えばいつも顔を伏せていた佐伯さんを思い出す。あれは今の僕と同じような気持ちを抱えていたからか、それとも後ろ

めたさと申し訳なさの表れだったのだろうか。

7(4) ・「彼女に手を上げるとは僕が許さない」(前書き)

本日は2話同時アップです。

7(3)と、7(4)。

これと、このひとつ前です。

ご注意を。

ただ、2話同時の予約掲載なので、トラブルがなければいいなあ、と。

7(4) ・「彼女に手を上げることは僕が許さない」

そして、その日の昼休みのこと。

僕の携帯電話にメールが届いた。差出人は、宝龍さん。

『今屋上』

普段からデコレーションのない簡潔な文章でメールを送ってくる彼女だが、これはさすがにそういうレベルを超えている。

「どうした？」

学食帰りで隣を歩いていたら滝沢が、首を傾げる僕を見て問うてる。

「宝龍さんから呼び出し、だと思えます」

自信はないが。

「ちよつと行つてきます」

「そうか」

もう教室が見えるところまでできていたが、僕は体の向きを変え、遠ざかる運動へと切り替えた。特に急ぐわけでもなく、今までと同じ調子で歩く。速さは変わらず、速度のみの変化。

階段で3階へ上がったところで、一旦足を止めた。

この廊下を行けば佐伯さんのいる教室がある。彼女は今まで通りそこで一日の多くを過ごしているはずであり、今この瞬間もそこにいるかもしれない。

行けば会つてくれるだろうか。

会つてはくれるだろうが、一緒にいたころとは決定的に違う態度を見せられるのだろう。そんな姿を見るくらいなら、会いになんていかないほうがいい。今はそう思ってしまう。

相変わらず近くににいるのに、ずいぶんと遠い関係になってしまったものだな……。

僕は再び歩を進め、さらに上へと上がる。

踊り場を過ぎた辺りから一気に埃っぽくなっていく階段を上がり、

その先にある鉄扉のノブを掴み　回す。かくして屋上へと続く扉は開かれ、つまりそれはこの向こうに宝龍さんがいることを示していた。

思えばここにくるのは久しぶりで、それと同時に、久しぶりにここでひとりになりたい気分でもあった。宝龍さんが何か話があるのなら、それが終わったらしばらくここに残ってみるのもいいかもしれない。

そんなことを思いながら屋上へと踏み入る。

宝龍さんはグラウンドとは反対になる左手のフェンスにもたれていた。学園都市の街並みを眺めるのではなく、体をこちらに向けていた辺り、どうやら僕を待っていたらしい。

そこで人の気配を感じた。

僕のすぐ隣。

そこに目をやり、はっとする。

「佐伯さん……」

「弓月くん……」

彼女が、いた。

階段部屋の外壁にでももたれていたのか、僕が現れて驚いているようだった。

「きたわね」

そこにつかつかと歩み寄ってくる宝龍さん。

佐伯さんは弾かれるようにして彼女へと体を向けた。

「あなたが弓月くんを呼んだのね!？」

「ええ。言っておくけど、ひとりになりたいと言ったあなたにこの場所は提供したけど、恭嗣を呼ばないとは言っていないわ」

しれっと言っただけの宝龍さんを、佐伯さんが睨みつける。

なるほど。状況は把握した。悪いがこれは佐伯さんが迂闊だったと言える。たぶん宝龍さんなら干渉せず放っておいてくれると踏んだのだろうが、しかし、宝龍美ゆきは彼女が思っているほど中立ではないのだ。

そして、佐伯さんの目を盗むようにして送ってきたのが、先のメ
ールだったというわけだ。

「聞きたいことがあるそうよ、恭嗣が」

「……」

場のセツティングだけしておいて、人に振るのか。

佐伯さんはゆっくりとこちらへ向き直り、僕の顔をちらりと見た。
すぐに逃げるように顔を伏せてしまったのは、今朝の件を思い出し
たからだろうか。 お互いの姿を認めておきながら、黙ってすれ
違った今朝のことを。

僕の前で佐伯さんが、まるで悪いことをして叱られている子ども
のように、じつと下を向いている。

「……」

「……」

確かに聞きたいことはあった。だが、そんな彼女を見てみると、
何から聞いていいのか言葉が出てこない。

「そう。じゃあ、私から聞くことにするわ」

僕が切り出せないと見るや、すぐに宝龍さんが口をはさんできた。

「桑島君のことよ」

瞬間、佐伯さんが小さく体を跳ねさせた。触れられたくない話題
だったということか。

「あなたと桑島君はどういう関係？」

「……別に、何でもありません」

佐伯さんはか細い声で答える。

「彼は『F・E・トレーディング』の社長の息子で、あなたのお父
さんもそこに勤めてる。そうよね？」

「どうしてそれを……」

「桑島君のほうはわりと知られた事実よ。あなたのほうは恭嗣だけ
ら知ることができた、というところね」

宝龍さんはさらに斬り込んでいく。

「最近あなたがよく桑島君と一緒にいるのは、それと関係があるの

「？」

「関係……なくはないけど、わたしが聖さんと会ってるのは、わたしの意志でやってることです」

聖さん、ね。

それはいいとして　僕は彼女の言葉に少なからず衝撃を受けた。佐伯さんが自ら進んでやってることだって？　いったいどういうことだ。わけがわからなくなって、僕はようやく佐伯さんに言葉を投げかけた。

「待ってください。僕は親同士で何らかの約束が交わされたのだと思っただのですが、そうじゃないんですか？」

その問いに対して佐伯さんは首肯する。

「じゃあ、何なんですか？」

「それは、言いたくない……」

前もそんなことを言われたな。このところ話してくれないことばかりだ。

「埒があかないわ」

宝龍さんが苛立たしげな調子で言い放つ。

「親に強制されたわけではないけど、自分の意志でやってるその理由も言いたくない。……話にならないわね」

「……」

それでも佐伯さんの口からは何の言葉も出てこない。

「いいかげんにしなさい。わかっているの？　あなたのそういう態度が恭嗣を苦しめてるのよ」

一方、彼女を責める口調はさらに増していく。……ここまで声を荒らげるのは宝龍美ゆきにしては珍しいことだ。

佐伯さんは一度耐えるようにぐっと唇を噛み、そして、ついに感情を吐き出した。

まるで堰を切ったように。

「わかっている！　わかっているけど、それでも言いたくないことだ。……であるの！　口にしたくないことだ。……であるの！」

「！このっ」

宝龍さんが手を振り上げる。

しかし、僕は咄嗟にその手首を掴んで、次に行くであろう動作を阻止した。

「恭嗣！ かばうの、この子を！」

「当たり前でしょう。どんな理由があろうと、彼女に手を上げることは僕が許さない」

直後、僕の後ろで息を飲むような音が聞こえたと思ったら、佐伯さんが駆け出していた。鉄扉を開けて、階段部屋の中へと消えていく。

「佐伯さん！」

呼び止める が、しかし、彼女が立ち止まることはなく、重い音を立てて閉まった鉄扉が僕たちの間を隔てた。

「……恭嗣」

サビだらけのそれを呆然と見つめていると、宝龍さんが僕の名を呼んだ。

「痛いわ。離して」

「あ、ああ、すいません」

未だ彼女の手首を掴んだままだったことを思い出し、すぐに手を離した。

「もしかしたらさっきの恭嗣の行動が、今のあの子にはいちばん堪えたかもしれないわね」

「……」

そんなつもりはなかったのだがな。

とは言え、僕は見ていた。重い鉄扉を開けるために彼女が足を止めたとき、そこで見えた横顔は……泣いていた？

僕のせいだろうか。

ため息をひとつ。

せつかくこうしてまた話す機会を得たというのに、結局、何もわからなかった。わからないことだらけだ。

ただ、感じたことはある。

彼女は追い詰められている。ふらりとこんなところに来てきてしまうほど追い詰められ、わからなくなっている。果たして、そんなふうにしたのは誰なのだろう。おじさんか、僕や桑島先輩か。

「……………」

それとも、彼女自身、か……………。

8(1)・「少し目が覚めた気がします」

「大丈夫か？」

そう聞いてきたのは、テーブルの向かいに座る滝沢。

翌日の、これまた昼休みのことだった。

僕ははっと我に返り、ここが学食だったことを思い出す。今は昼食の最中。食べているのは僕も滝沢もカレーだった。直後、学食内の喧騒が、オーディオのボリュームを上げたみたいにして耳に流れ込んできた。

「は？」

そして、問いかけの意味がわからず、間の抜けた返事を返す。

「ぼうつとしてるぞ」

「ああ、すいません」

今までの自分の姿を振り返ってみれば、スプーンを持った右手は動きが止まっていて、左手で頬杖をついていたようだ。行儀が悪いな。

「佐伯君とのことか？」

「……」

隠しても無駄、なのだろうな。このところ僕と佐伯さんの関係がおかしいことは、とっくに気がついていいるだろうし。

「まあ、そうなりますね」

「相談があれば言えよ」

「ありがとうございます。でも、多忙な生徒会副会長の手を煩わせるつもりはありませんよ。自分で何とかしてみせます」

それでも粘り強さと我慢強さは持ち合わせているつもりだ。部活をやっていた中学のときも、試合では球を拾って拾って拾いまくって好機を待ったものだ。

「だといいいんだがな」

滝沢は苦笑気味に鼻で笑う。

「気づいてるか、弓月。最近ずっと昼は俺と同じものばかり食べてるぞ」

「……」

確かにそんな気がするな。「滝沢、なに食べます?」「じゃあ、僕もそれで」がお決まりの台詞。自分で考えるのを放棄しているのか、栄養さえ摂取すればメニューは何でもいいと思っっているのか。……やれやれ。どちらにしても投げやりだな。僕は自分自身に呆れてため息を吐き、食事を再開した。

そうしてカレーを平らげ、本日の2度目のエネルギー補給が間もなく終わろうとしたとき、少し離れたところでひと足先に立ち上がったグループがあった。男女混成のグループ。僕がそこに目を向けたのは、その中に浜中君がいたからだ。彼がそこにいることはここに座ったときから気がついていたし、なぜか時々こちらを睨んでいるのも見えていた。

浜中君は立ち上がると、本来自分でするはずの食器類の返却を友達に任せただろう、仲間から離れてひとりこちらに向かってきた。ひとまず知らぬ振りをして横目で様子を窺っていたが、特にひねりもなく僕のもとにやってきて、バン、と叩きつけるようにして掌をテーブルに置いた。

「相変わらず寝ぼけた顔をしていますね」

中性的な顔を嫌悪に歪ませて、嫌味満点に言い放つ。

「すいぶんな挨拶ですね、君は」

「話があるんだけど」

こちらの抗議は聞かず、さらに言葉を重ねた。

「いいですよ。ここじゃないほうがよさそうですね。……滝沢。すみませんが、これをお願いします」

「了解だ」

僕は自分の目の前にあるトレイを滝沢のほうに押しやり、立ち上がった。浜中君が先に歩くかたちで、学食の出入り口へと向かう。

「浜中君、何か飲みますか。奢りますよ」

その出入り口のすぐ脇にある自販機コーナーの前を通りかかったとき、僕は声をかけた。

彼は振り返り、面倒くさそうな顔で少し考えた後、

「……いちばん大きくて高いやつ」

「お茶みたいですよ？ いいんですか？」

「……いい。別に飲みたいわけじゃないし」

僕は硬貨の投入口に140円を放り込み、そのペットボトルのお茶を買った。浜中君に渡す。続けて僕も購入。缶のホットミルクテイだ。

「コーヒーじゃないのかよ。好きなんだろう？」

「好きですよ」

「学祭でもわりと評判だったし、僕も飲みに行った。まあまあ、美味しかった」

彼は不貞腐れたようにそう言うてくれた。なんだ、きたのなら呼んでくれたよかったのに。そのときには僕がギャルソンとして喜んで接客してあげたのだが。

「普段から外では飲まないというのもあるのですが、今は家でも飲んでません。しばらくコーヒー断ちです」

僕がそうつけ足すと、不意に彼は小馬鹿にしたように鼻で笑った。

「なにそれ、願掛けのつもりかよ。格好悪いったらねーよな」

そう吐き捨て、ひとり先に学食を出て行ってしまった。いつにもまして口が悪い今日の彼は、何やらずいぶんと怒っているようだ。

何に？ もちろん、僕にだろう。不甲斐ない僕に、か？

学食から廊下に出たところで浜中君は足を止め、窓側の壁にもたれた。ここで話をするようだ。学食前の廊下は、その場所柄、多くの生徒が行き来しているが、男ふたりの立ち話を気にするものなどほとんどいない。

僕はミルクティのプルタブをあけながら、ちよつとした世間話のつもりで投げかける、

「佐伯さん、どうしてます？」

昨日の屋上の一件以降、どんな様子なのか気になっていた。

「知るかよ、そんなの」

だが、返ってきた彼の答えがこれだった。

「その足で教室まで行ってみたらいいだろ。すぐにわかるから」

「……」

浜中君の言うことももつともなのだが、そう簡単にいかないのが現実だ。行ってみることは容易い。だが、またあんな姿を見せられると思うと、どうしても足は遠のく。

僕はやりきれない思いでミルクティの缶を煽った。

「勝手なことを言いました。……それで、話とは？」

「その佐伯さんのことだよ」

その話は終わったものだと思っていたので、改めて彼の口からその名前が飛び出し、僕はどきつとした。

「とられたらしいじゃん。学祭のときの、桑島とかいう先輩にさ。

何やってんだよ、情けない」

「知ってたんですか、あの先輩のことを」

「調べた。敵になりそうなやつがいたら、とりあえず調べることにしてるんだよ」

相変わらず愉快的な生き方をしているようで何よりだ。

「にしても、とられたというのは……」

「いつまで寝ぼけてんだよ。学祭からこっち、佐伯さんがどうしてたかおしえてやるうか？ 最初のころはよく昼休みになるとあっちのクラスに行ってたし、今も時々放課後、向こうから迎えにきたときなんかは一緒に帰っていくよ。朝も一緒のことが多いみたいだしな」

浜中君は一気にまくし立てる。

朝のは昨日、僕も目撃したな。

「それから一度だけ、日曜はドコソコで待ち合わせ、なんて言うてるのも聞いたよ」

「……」

なんとも、まあ……だな。

「……なあ」

と、訴えるように彼は発音する。

「あんた、何やってんだよ。願掛けして待つなんて眠たいことやってる場合かよ。カノジヨなんだろ。ちゃんと捕まえとけよ。取られたら取り返しにいけよ。情けない」

『何やってんだよ』『情けない』は、どちらも本日2度目。ずっと言いたかったんだろうな。もしかしたら学園祭のあの日から。

「あんたにできることは溺れてるやつを叩くことだけか？」

僕は浜中君を見る。

「だってそうだろ。佐伯さんに相手にされなかった僕には喜々としてどめを刺しにきたくせに、強そうなやつには向かっていかないってんなら、そう言われても仕方ないんじゃないのかよ」

「……」

ずいぶんと勝手なことを言ってくれる。

とは言え、確かにそうだ。球を撃ち返して耐えているだけではないつまでたつても勝てない。勝つためにはどこかで前に出ないと。

僕はじつと浜中君の顔を見た。

「んだよ」

彼は不機嫌そうに睨み返してくる。

「少し目が覚めた気がします」

「『少し』で、しかも『気がする』かよつ。あんた、どんだけ眠たいやつなんだ！ だいたい顔がまだ寝てんだよ！」

「ほつといてください。こういう顔なんですよ」

人にはこういうとき、生まれつきだと言うことに決めている。

「でも、まあ、ありがとうございます」

「礼を言われるようことをやった覚えはねーよ。……い、言つとくけどな、僕はあんたや佐伯さんのために言つてやつてんじゃないぞ。自然消滅みたいな中途半端だと面白くないから言つたんだからな。わかつたらとつと惨敗してこいよ。そしたら指さして笑つてやる

から」

そう言い放つと浜中君は、どすどすと歩調も荒く遠ざかっていく。なんと、面白い子だ。

と、思っていたら不意にまたこちらを振り返って、指を突きつけてくる。

「それと、二度と僕の前に腑抜けたツラを見せるな！ いいな！」

「……」

いや、本当に、面白い子だ。

僕は浜中君の背中が小さくなっていくのを見ながら、ミルクティを喉に流し込んだ。

さて、そろそろ腹を括るか。

学校が終わり、帰宅する。

出迎える人もいない家に上がり、照明の点いていないリビングに這入ったところで、ちょうど携帯電話が鳴った。

ポケットから端末を取り出し、サブディスプレイを見て 目に飛び込んできた『佐伯』の文字にぎよっとする。だが、よく見てみればそれは『佐伯トオル』、佐伯さんのお父さんだった。

考えてみればおじさんも、今の状況を解決するためにはいずれ連絡を取ってみたいといけない人物のひとりではあるな。

僕は座イスに制靴を放り出し、照明を点けながら反対の手で電話に出た。

「もしもし」

『どうなっているんだね、いったい！？』

それがおじさんの第一声だった。

8(2)。「それはこっちの台詞ですよ」

『どうなっているんだね、いったい!?!』

それがおじさんの第一声だった。

僕のほうこそおじさんに聞きたいことがいくつもあったのだが、こんなふうには先制攻撃を喰らうとは思わなかった。しかも、何を問いただされているのかわからない。

『どういうことでしょうか?』

『まだ若いし喧嘩くらいはするだろうと、貴理華がこっちに帰ってきたときも何も聞かずにいたのだがね』

おじさんは己の頭をクールダウンさせるように、そこで一拍おいた。

『今日、学校を休んだよ』

「え?」

学校を、休んだ?

『部屋に閉じこもったまま出てこないんだ。病気ではないようなんだが』

不意に僕は、今日の浜中君の言葉を思い出した。佐伯さんの様子を聞いたときのことだ。

『その足で教室まで行ってみたらいいだろ。すぐにわかるから』

あれはこのことを言っていたのか。

原因は、やはり昨日の屋上で的一件だろうか?

「すみません。先にいくつか聞いていいでしょうか?」

確認しておかなくてはならない。

『何かね?』

「桑島聖という生徒のことです」

おじさんが勤める会社『F・E・トレーディング』の社長の息子であるという桑島聖。

『なんだ、君の知り合いだったのか』

「いえ、そういうわけでは」

『知っているかもしれないが、うちの社長の息子さんでな。それを知ったのは帰国が決まったときなんだ。まさか娘を入れた学校に、社長のご息がおられるとは思わなかったよ。狭いものだな、世の中は』

そう愉快そうに語るトオル氏。

「それで、ふたりを交際させることにしたんですか？」

『……なに？』

だが、その雰囲気も次の瞬間には凍りついた。

「親同士、そういう約束が交わされたんじゃないんですか？」

『……』

そして、無言。

『つまり君は、私が娘を政略結婚に使ったと？』

「違いますか？」

長い沈黙の後、おじさんは深いため息を吐いた。

『残念だよ。君には前に妻の話をして、そのときに理解してくれたものだと思っていたが』

「あ……」

思い出す。

佐伯さんのお母さんは、良家の娘ゆえに政略結婚に利用されそうになったのだと。そして、その話を聞かせてくれたとき、おじさんは僕に言ったはずだった。

そのときの言葉と重なるように、電話の向こうのおじさんは言う。

『私は娘に自分の都合を押しついたりはいしないし、ましてや出世の道具にしたりは断じてせんよ』

そうだ。

佐伯トオルという人は、そういう人物だった

「すみません。僕のほうに大きな勘違いがあったようです」

『いや、いいんだ。とは言え、社長には同じ学校に通う年が近いもの同士、仲良くしてやってほしいと言われたのも確かだね、貴理華

にもそう伝えたよ』

「そうでしたか」

でも、その程度なら普通だろう。社交辞令としても普通だろうし、年の近い子を持つ親同士の会話としても普通だ。

そうになると、親に何かを強制されたわけではない、という佐伯さんの言葉は本当だったわけだ。

では、どうしてこんな事態になっているんだ？ 桑島先輩が自分の立場を利用して、彼女に無理強いしている、とかか？

『話は戻るが、いったいどうなっているんだね』

「それは……」

何をどう説明したものか迷う。

「佐伯さんが学校を休んだのは昨日あったことに原因があると思いますが、今はまだそれ以上は話すことができません」

僕自身まだ何も把握できていないしな。

「少し時間をいただけないでしょうか。必ず解決しますので」
「……」

おじさんはどうするべきか考えているらしく、少しの間沈黙が続いた。

『わかった。君のほうがどうかすると男親の私よりも貴理華のことを理解してるかもしれないからな。任せよう』

「ありがとうございます。それでは失礼します」

僕は電話を切り、端末を折りたたんだ。

ため息をひとつ。

さて、さっそく明日、桑島先輩に会いにいつてみるとうかがうか。

翌日。

こういつとときに限って思い通りにことは進行しない。

昼休みになつたら桑島先輩のクラスに乗り込もうと考えていたのだが、その直前となる4時間目の終了間際、授業の5分延長が宣言されたのだ。先生としてもキリのいいところまで説明してしまいた

かったのだろうか、ただでさえ集中力がどん底まで落ちる時間帯、ロスタイム中の生徒は完全にやる気ゼロだった。

かくして、長い5分間が終わる。果たして延長分の内容を覚えている生徒がどれほどいるだろうか。

授業終了の礼が終わると同時、皆それぞれの昼食タイムへと突入する。弁当を取り出して友達のところに行くもの、先生よりも早く教室を飛び出していくもの……。

そして。

出ていった先生と入れ替わるようにして、教室に入ってきた人物がいた。学食組のクラスメイトのひとりが戻ってきたわけではない。ノンフレームの眼鏡をかけた、嫌味なほど知的な印象の面立ち。

桑島聖だった。

彼は入ってすぐのところまで教室内を見渡し　僕にフォーカスした。

再び歩を進め、未だ席に座ったままの僕の脇に立つ。いきなり入ってきた普段縁のない上級生に目を向けたクラスメイトも少なからずいたが、多くはようやくくはじまった昼休みでそれどころではなく、あまり気にしていないようだった。

桑島先輩は眼鏡のブリッジを押し上げながら切り出してくる。

「……話がある」

「いいですよ。僕もちょうど先輩に話がありましたので」

「こちらも、見下ろしてくる視線を正面から受け止め、応じた。

「そうか。なら、ついてこい」

桑島先輩は廊下のほうを顎で示し、背を向ける。教室を出ていくその後ろ姿を僕も追った。

昼休みの廊下を黙って歩く。

途中、僕のところに行く前に買ったらしい缶コーヒーの2本のうち1本をこちらに差し出してきた。

「やるよ。昼メシ後回しでつき合わせてるしな」

「……どうも」

僕は受け取った缶に目をやる。……コーヒー、ね。
会話はそれだけだった。

着いた先は特別教室が集まる校舎へと続く渡り廊下。何の因果か、学園祭2日目のあの日、佐伯さんと桑島先輩が一緒にいるのを目撃した場所だった。

渡り廊下は思いのほか人気ひびがなかった。昼休みがはじまったばかりのこんな時間に、向こうの校舎に行く生徒などいないからだろう。放課後なら特別教室を部室として使っている文化部もあるが、昼休みまで自由に使えるわけではない。

渡り廊下で僕らは窓に寄り添いながら対峙する。

「さっそくだが」

と、先に桑島先輩が口を開く。

「お前ら、いったいどうなってるんだ？」

「は？」

昨日も違う人の口から聞いた台詞だ。

「お前ら、とは……？」

僕は念のために聞いてみる。あるいは無意味な質問。

「お前とキリちゃんだよ。決まってるだろ」

「……」

佐伯さんは彼を『聖さん』と呼んで、桑島先輩は彼女のことを『キリちゃん』と呼んでいるのか。胸に重たいものがのしかかっただよような気分だ。

「仲がいいのは見ててわかるよ。ただの友達じゃないんだろうなつてな」

僕の気持ちなど知る由もなく、彼は缶コーヒーのプルタブを引き上げた。小気味のよい音が響く。

「有名だぞ？ 変人弓月が宝龍美ゆきに続いて、今度は佐伯貴理華を捕まえたって」

「へ、変人……」

なんだ、その失礼な人物評は。

「お前、まさか自分がそうじゃないなんて言うつもりじゃないだらうな？ 自覚しろよ、変人」

「……………」
「そう言えば、前には雀さんにも言われたな。変わった人だと。」

思わず目だけで天井を仰ぎ見ていると、桑島先輩はコーヒーの缶を渡り廊下の窓のところに置いた。眼鏡を外して、ポケットから取り出したクロスでレンズを拭きはじめる。眼鏡が取り去られた素顔は思っていた以上に柔和。どうやら眼鏡が変な方向に似合い過ぎていたようだ。これですいぶんと損をしている気がする。

「そつちこそ、佐伯さんとはどういう関係なんですか？」

桑島先輩が佐伯さんに何か無理を強いているという推測は、ひとまず心の中にとどめておいた。

「俺か？ 残念ながら俺は、お前と違って単なる友達だよ。お互いの親に多少縁があるけどな」

「知っています。彼女のお父さんが先輩のお父さんの経営する会社に勤めているとか」

「らしいな」

彼から返ってきたのはそれだけ。親同士の関係など興味がないふうだった。拭いた眼鏡のレンズを窓から差し込む光に透かしてみても、汚れがないことを確認してから再び装着する。

「後は、意外と家が近いな」

言いながら最後にブリッジを指で押し上げて、位置を微調整。嫌味なほど知的な顔の完成だ。

「でもな、キリちゃんと話してお前の話題がぜんぜん出ないんだよ」

「……………」

「たまにこつちから聞いてみたりもするんだけどな。曖昧な返事でお茶を濁していたころはまだよかったが、今じゃあからさまに話を逸らすよ。なんかおかしくないか？」

桑島先輩は置いていたコーヒーの缶を手に取り、喉にひと口流し

込んだ。

「お前もお前だ」

いきなり矛先が僕に向く。

「一昨日の朝、キリちゃんとすれ違ったのに無視しただろ。お前から
いったいどうなってるんだ？」

「それは……」

どうにか誤魔化そうとして やめた。無駄だな。

僕はため息をひとつ。

「それはこっちの台詞ですよ」

「なに？」

桑島先輩は眉をひそめた。

「佐伯さんは未だに僕に何も言ってくれません。黙って離れていきました。それで僕は、てっきり彼女は先輩とつき合うことになったのかと」

「『ことになった』、ね」

そう言っただけ苦笑した桑島先輩は、そこに含まれる意味を正しく読み取ったようだ。

「ないな、それは。キリちゃんの態度でわかる。それに佐伯さん
彼女の親父さんのほうだが、あの人の差し金でもないだろうな。
俺に擦り寄ってくるタイプに見えなかった」

「おじさんと会ったことあるんですか？」

「ああ。親父が呼んだんだろう。一度うちに来たことがあるよ。気
に入っただけ気が合ったのか知らないが、せつかくの
休日にそんなことをしたら佐伯さんも迷惑だろうに」

再度苦笑。

話は続く。

「親父の会社について、俺のことを坊ちゃん坊ちゃん言う人も多いんだが」

そういうのに辟易しているのか、彼はわずかに顔を歪める。

「でも、あの人はそんな感じじゃなかった。学園祭を見に来たから

って、俺のところはまだ挨拶にくる妙なママさはあるけどな」

桑島先輩が言うには、日曜日は用があって例のテニスの親善試合を見にこられないからと、わざわざ土曜日うちに激励の言葉をかけにきたのだそうだ。

「そのママさのうちなんでしょうね、おじさんは佐伯さんに、社長から仲良くしてやってほしいと言われたことも伝えたそうですよ」

「……………」

そこで桑島先輩は急に黙り込んだ。

「コーヒーをひと口飲む。」

そのわずかな時間で思考は一気に遠くまで到達したらしい。

「……………」

「え？」

一方の僕は、その速度にまったく追いつけていなかった。

「たぶんキリちゃんは、その言葉に過剰に反応してしまったんじゃないか？ 父親の面子や立場を考えて」

「……………」

そして、その期待に応えようとした？

「やっぱり佐伯さんはおじさんのために先輩と」

「それはない」

先輩は僕の言葉が終わらぬうちに否定する。

「キリちゃんは近づき過ぎないように俺と常に一定の距離を保ってたし、ちゃんと適当なところでタイミングを見計らってその距離を広げようともしていたよ。……………」お前がいるからだろうな」

「じゃあ、なんで今こんなことに」

「それは……………」

一拍。

「さあな」

そして、短いひと言。

「……………」

いや、この人は何らかの答えを思いついたはずだ。正解かどうか

は兎も角として。だが、どういう理由かそれを飲み込んだのだ。わからない振りをした。

「それを聞いてやるのはお前の役目だろう。……弓月」

未だことの真相の見当もつかず戸惑っている僕を、先輩が呼ぶ。

「キリちゃんを本来いるべき場所に戻すぞ」

「は？」

本来いるべき場所？

「『は？』じゃないだろ。キリちゃんをお前のところに帰すと言ってるんだ」

「いいんですか？」

「いいも悪いもあるか。お前のカノジョだろうが。そりゃあ、あんなかわいい子と一緒にいられるのは嬉しいけど、でも、なんか違うだろ、今のこの状況は。最初はそうでもなかったけど、このごろはほとんど笑わないしな」

僕は会ったびにいつも目を伏せていた佐伯さんの姿を思い出す。確かに違う。

あんなのは佐伯さんではない。

「まあ、そうするのは半分くらいは俺自身のためでもあるけどな。……また連絡するよ」

桑島先輩は残っていたコーヒを飲み干し、言った。話は終わったとばかりに踵を返し、校舎のほうへ戻っていく。

「……桑島先輩」

僕がその背に声を投げかけると、彼は足を止め、振り返った。

「先輩、眼鏡ないほうがいいんじゃないですか？」

「知ってるよ。これじゃ格好よすぎると思ってかけはじめたんだからな」

「……」

「……おい、なんだその自信。」

「冗談だよ」

そう笑って言い、肩越しに手を振りながら去っていく。

僕はその後ろ姿に軽く頭を下げた。

9・「目覚ましが壊れました」

その日の夜、さっそく桑島先輩から連絡があった。

携帯電話が鳴り、僕は身が入っているとは言いがたい勉強の手を止め、電話に出た。互いのアドレスは、放課後に再度の訪問を受け、そのときに交換していたものだ。

「俺だ。桑島だ」の声を聞いた瞬間、僕の頭には眼鏡のブリッジを押し上げながら、端末を耳に当てている彼の姿が思い浮かんだ。

『キリちゃんをそっちに帰らせたんだが』

「え？」

帰らせた？

『どうだ？ もう着いてるかわかるか？』

「いや、まだこちらには……」

『返事が早いな、おい。近いとは聞いてたけど、いったいどういう位置関係なんだ』

桑島先輩が苦笑した。

しまった。確かに即答してはいけない質問だった。

『まあ、いい。……いや、なに、キリちゃんが学校近くに部屋を借りてるのは知っていたんだが、事情があっただけでしばらく家から通ってるって言うから、それ以上は詮索しなかったんだ』

「そうだったんですか」

『だけど、実際それもおかしな話だしな。弓月が待ってるからと、どうにか説得してそっちに戻らせたんだ』

「こんな時間に、ですか？」

もう夜だぞ。

『いや、俺も途中まではつき添ったよ。だけど、一ノ宮で後はひとりで帰れるって言ったからな。電車に乗るのを見届けて別れたんだ』

「それ何時ごろですか？」

『正確ではないが8時くらいだな』

僕は部屋の壁掛け時計を見た。もう9時を回っている。

一ノ宮から学園都市まで30分弱。どんなにゆっくり歩いても、とつくにここに着いていないとおかしい。いや、今の彼女の精神状態を考えれば、素直にこの家のドアを開けて帰ってくるとは考えにくい。

「もう一度彼女の部屋の様子を見て、必要であれば駅まで行ってみます」

『すまない』

「いえ」

そうして電話を切ろうと思ったとき、桑島先輩が僕を呼んだ。

『弓月。結果的に無責任なことになってしまったが、やっぱり俺にできることはここまでだと思う』

「どういうことですか？」

『キリちゃんはお前が迎えてやらないと、ちゃんと帰れない』

その桑島先輩の言葉にはいろんな意味が含まれている。僕が迎え入れてやらないと佐伯さんはこの部屋には帰ってこられないだろうし、僕のところにも戻ってこられない。これは僕の役目だ。

「ありがとうございます」

僕は礼を言つて電話を切った。

さっそく外出着に着替え、薄手のブルゾンを羽織る。簡単に戸締りを確かめてから、外へと飛び出した。

10月も下旬に差しかかるうとしていたが、この夏の酷暑の影響か、夜でもあまり寒いとは感じなかった。

マンションの前で一度辺りを見回した。どこかで佐伯さんが家に入れず足踏みをしているかと思ったのだが、ここにはいないようだ。だとすると、駅か。

僕は歩き出す。

駅までの道程、佐伯さんとすれ違うことはなく、念のため道路を挟んだ対岸の歩道にも注意を払っていたのだが、やはりそちらにもいなかった。

そのまま駅前へと辿り着く。

乗り直して帰ったりしてなければいいが……。

そう思いつつ駅舎を目指していて 見つけた。佐伯さんだ。

駅前広場の観客席の最前列に、ぽつり制服姿の彼女が座っていた。知ってか知らずか、そこは以前、僕がああマンションを出ると決めたときに、座って電話で佐伯さんと話した場所だった。

佐伯さんは膝の上で重ねた手に視線を落とし、じっと見つめていた。

「佐伯さん」

僕が歩み寄って声をかけると、目で見てわかるほどびくつと体を跳ねさせる。

「ゆ、弓月くん……」

ゆっくりを上げた顔は今にも泣き出しそうな表情。

「さて、帰りましょうか」

「で、でも……」

と、佐伯さん。

「どうしよう、わたし、ずっと弓月くんにひどいことしてた」

「……」

彼女はまた顔を伏せてしまう。その言葉に対して僕は、「そうですね」とも「そんなことありませんよ」とも答えられなかった。どちらも適切ではない気がする。

「おじさんに頼まれたんですよね？」

うつむいたままの彼女の首が、小さく縦に振れた。

昼間、桑島先輩が言っていたな。それを聞いてやるのがお前の役目だ、と。

「その話は歩きながらしましょう」

僕が促すように佐伯さんの肩に触れると、彼女は緩慢な動きながら驚くほど素直に立ち上がった。たぶん今は自分の意志がないのだろう。

僕たちは並んで歩き出した。

ライトアップされたタイル張りの駅前広場を横切り、中途半端に明るいショッピングセンターの前を通る。確かここは飲食店だけ夜10時まで開いていたはずだ。

横断歩道を渡り、もう駅前とは呼べない場所まで出たところで、僕は切り出した。

「確かおじさんに、社長の息子さんだから桑島先輩と仲良くするよと言われたんですよね？」

「うん……」

僕の隣で佐伯さんが小さくうなずき、その横顔を車のヘッドライトが照らした。駅前を通る道路は行き交う車も多く、ヘッドライトの河の横を歩きながら、僕らは言葉を交わす。

「最初はね、お父さんの頼みはかたちだけ聞いて、ほどほどのところで距離をおくつもりだった。そんなの深い意味じゃないのはわかってたから」

おじさんの立場を考えると、いきなり嫌と言うわけにはいかなかったのだろうな。

「でも、そんなこと弓月くんには言いたくなかった。かと言って、他にいい説明も思い浮かばなくて……。ずっとなんて言おうか考えてたら時間だけが経って、どんどん弓月くんに会いづらくなってた」

だから電話にも出なかつたし、メールの返事もなかつたのか。一度あったワン切りは、思い切って電話を試してみたものの……というところだろうな。

「弓月くんにはわたしが聖さんと一緒にいるところを見せたくなかったの。相変わらず何も説明できないのもあって、気がついたら話しかけないでなんて言ってた。そんなことぜんぜん思っていないのに……」

そこで佐伯さんは声を詰まらせ、ついに泣き出してしまった。

「わ、わた、し、だんだん、自分が、何してるか、わからなくなっ
て……」

立ち止まり、しゃくり上げながら目の周りをぐしぐしと手の甲や

掌でこする。

「泣かないでください。もう終わったことですよ」

僕が背中に触れると、彼女はうなずき、もう一度目もとを手で拭いてから足を踏み出した。

どうやら彼女自身わからなくなっていると感じた僕の感覚は正しかったようだ。

「でも、それならそうと最初から言ってくれたらよかったんですよ。結局そこにつきる。」

事情さえ把握できていたなら、こんなややこしいことにはならなかったはずだ。

「……かった」

「え？」

「そんなこと絶対に言いたくなかった。理由があつて他の男の子と仲良くするなんて、そんなこと絶対に言いたくなかったの……」

「……」

何とも佐伯さんらしい発想だ。僕の気持ちを考えてというのもあるのだろうが、それ以上にきっと彼女自身がそういう種類の台詞を口にしたくなかったのだろうと思う。

しかし、結果として佐伯さんは妙な板ばさみに陥り、追い詰められてしまったわけだ。自爆もいいところだが、それはそれで彼女の一途さの表れなのだろう。僕としては責める気にはなれない。そんな気もないが。

道は交差点に差しかかり、横断歩道を渡って右に折れた。片側2車線で道幅も広いが、こっちは例の如く交通量は少ない。車通りが一気に減った通りの歩道を、僕らは街頭の灯りから灯りへと渡って歩く。

「正直言えば、もっと僕のことも考えてほしかったと思いますね。あまりにも何も言ってくれないから不安になりました」

「不安？」

佐伯さんが不思議そうにその単語を繰り返す。

「当たり前でしょう。もう君が戻ってこないんじゃないかと、どれだけ不安だったことが」

勿論、僕は怒っているつもりなどなく、軽く笑いを含ませながら言う。

「ごめん、なさい……」

しかし、つぶやくように小さな彼女の声は、力なく足もとに落ちていった。

これ以上話しても彼女を責めているみたいになるだけと思い、もう何も言わないことにした。それこそ終わったことだ。佐伯さんも今は自分から話すことはせず、僕は黙って歩いた。

横目で彼女を見ると、相変わらず顔を伏せていた。顔を上げてくれるのはもう少し先だろうか。

程なくマンションに戻ってきた。

狭い階段を上がり、鍵は僕が開ける。ドアを開けて脇へ退き、中に入るように促すと、佐伯さんは戸惑ったように僕を見た。

「入って、いい……?」

「あまり莫迦なことを聞いてると怒りますよ」

「う、うん……」

彼女はおずおずと玄関を上がると、僕が電気をつけたままにしておいた廊下を真っ直ぐ進み、真っ暗なりビングへと這入る。照明は後を続く僕が点けた。

佐伯さんはリビングを見回す。

「何も変わっていませんよ」

女の子も入れていないし　と冗談を言おうと思ったが、やめておいた。

「君の部屋はそっちで、こっちが僕」

「大丈夫。わかってる」

彼女は弱々しいながらも笑みを見せる。

僕が着替えに部屋に戻ろうとすると、佐伯さんが声をかけてきた。

「弓月くん」

振り返る。

「その……ごめん、ね……」

「終わったことです」

そう返すと佐伯さんは、申し訳なさそうにうなずいてから自分の部屋へと入っていった。それを見送ってから僕も自室に戻る。

時計を見ると、もう間もなく10時になるつかという時間。

ブルゾンを脱ぎ、ラフな部屋着へと着替える。再びリビングへ出れば、佐伯さんはまだ部屋に入ったままのようだ。出てくる気配もない。気持ちの整理みたいなものもあるのかもしれない。今は帰ってきただけでよしとするか。

僕は中途半端になっている勉強の続きを再開することにした。

しばらくして部屋のドアがノックされた。

「どうぞ」

イスを回転させて振り返ると同時、佐伯さんが顔を覗かせた。

「あの、お風呂入れたんだけど、弓月くん、どうする？」

「僕はまだ少し勉強がありますから、佐伯さん先にどうぞ」

「じゃあ、そうする」

小さく笑って彼女の顔はドアの向こうに消えた。

今まで何度となく繰り返したやり取り。でも、どこかぎこちなさがある。

今回の件で僕らの間に溝ができたとは思わない。佐伯さんが戻ってきたことでもう終わりだ。だが、彼女の中には罪の意識が残っているのかもしれない。

時間だろうか。解決するのは。

またいくらか時間が経ち、そろそろ佐伯さんは上がっただろうかと思っていた丁度そのとき、再びひかえめなノックの音が聞こえた。「弓月くん、入っていい？」

「どござ」

と応えるが、佐伯さんは入ってこない。そのことに僕は特に疑問を持たず、何の気なしに自らの手でドアを開けた。

かくして、そこに佐伯さんがいた。

当然だ。

それはいい。

だが、問題はその格好だ。

風呂上りでまだ乾ききっていない髪の彼女は、シルクの白いパジャマを着て　ボトムは穿いていなかった。すらりとした素足が艶かしい。豊かに隆起した胸の部分は、下に何も身につけていないことがすぐにわかった。

あまりにも扇情的な姿。

「なっ、なんて格好をしてるんですか、君は……！」

しかし、僕の焦りをよそに、彼女はこちらに抱きついてきた。

反射的に逃げようとするがそれでもつかまってしまい、数歩たたらを踏んだ後、僕は佐伯さんとともに背中からベットに倒れ込んだ。

「何をするんですかっ」

「……」

返事はない。

彼女は僕の鼓動を聞くみたいにして、胸の上に顔を寄せている。

「佐伯さん？」

様子のおかしい彼女に呼びかける。

「……ずっと、ごめん……」

「それはもう聞きました」

佐伯さんにしてみれば謝り足りないのかもしれないが。しかし、これはないだろう。

「わたしのこと、好きにしていよいよ……」

「な、何を……」

「弓月くん、不安だったって言ってた。だから好きにしていよいよ。弓月くんが安心できるまで」

「……………」

本気、なのだろうか。

途端、僕は密着している彼女の体を意識した。薄いパジャマ越しに体の輪郭までもが手に取るようにわかる。

だけど。

彼女は『だから』と言った。「『だから』好きにしてい」と。

そこにあるのは贖罪の気持ちだ。

「ダメです。今の君にそんなことはできません」

「で、でもっ。だったらわたし、どうしたら……………」

佐伯さんが顔を上げ、切羽詰ったように僕を見る。熱っぽく潤んだ目。でも、その奥にはやはり申し訳なさや罪の意識が垣間見えた。

これは、違う。

「……………」

どうしたら、か。

僕はベッドの宮に目をやり、そこにあった目覚まし時計に手を伸ばした。掴んで、床に落とす。むやみに大きいだけの、耳障りな音が部屋中に響いた。

「えっ。な、なに……………」

佐伯さんは慌てたように床と僕を交互に見る。

「目覚ましは壊れました」

さて、どうだろう。過去に2度ほどどうっかかり落としたことがあるが、そのときも壊れたりはしなかった。たぶん今回も衝撃で電池が飛び出したくらいじゃないだろうか。

「だから明日はちゃんと起こしてください」

「えっ？」

「今までと同じように。それで僕は安心できます」

しばらくきょとんとしていた佐伯さんだったが、やがてゆっくりと再び僕の胸に顔を戻した。

「うん、わかった……………」

そっと、そうつぶやく。

僕も心の中では安堵の吐息をこぼしていた。
明日の朝は佐伯さんがいる。
久しぶりだな。

#5 了

1・「一緒に飲みませんか？」

朝。

中途半端に覚醒した意識の中で、僕はドアがノックされる音を聞いた。

ノック？

そういえば、ここしばらく聞いていなかったな。

……。

……。

……。

……そうか、そうだった。

なぜその音が立てられたのか、遅巻きながらようやく理解した。前に聞いていたのよりずいぶんとひかえめなノックの後、ドアがゆっくりと開いた。

「弓月くん、起きてる……？」

おそるおそる伺うような彼女の声。

そうだ。昨日、佐伯さんが戻ってきたのだった。部屋のドアがノックされるのも、こうやって朝起こされるのも本当に久しぶりだ。

「……今、起きます」

僕は手の甲を目の辺りに当て、長い息を吐いた。意識も体も本格的に目覚めさせる。

ベッドの上で上体を起こした。

「おはようございます、佐伯さん」

「うん。おはよ……」

部屋の入り口で、ドアのノブを後ろ手に持つような格好で立っている佐伯さん。

「……」

「……」

会話はそこで途切れた。

「じゃ、じゃあ、朝ごはんできてるから」

「佐伯さん」

逃げるように出ていこうとする彼女を、僕は呼び止める。

「少しは落ち着きましたか？」

昨夜の佐伯さんは冷静さを欠いていたようだった。ひと晩たって落ち着いただろうか。

その問いに彼女は、申し訳なさそうに小さくうなずいてから。

「その、」

「そうですね。ならよかったです」

僕はあえて発音をかぶせて、彼女の言葉を遮った。何を言おうとしていたのかだいたい予想がつくし、そんなのはもう聞きたくなかった。欲しいのはそんなのじゃない。

と。

「あ……」

佐伯さんが急に小さく声を上げた。

「どうしたんですか？」

「昨日の夜のこと、思い出しちゃった……」

そして、顔を赤くしてうつむく。

「……いいんですよ、そんなことわざわざ口に出して言わなくてもこっちだつてとくに思い出している。懸命に考えないようになっているのに、そんなことを言われたらよけいに意識してしまう。僕は立てた片足の、その膝頭に額を乗せた。」

「ほら、着替えますから出ていってください」

彼女の顔も見ず、そのままの構造で追い払うように手を振る。

ガチャリ、とドアノブの音。

「あ、あのね、弓月くん……」

そこで動きを止めたらしい佐伯さんが遠慮がちに口を開く。顔を上げれば、彼女はドアのほうを向いたまま、僕に背を向けて喋っていた。

「昨日の夜のこと、だけど……」

「わかってますよ。あのときの君はどうかしてたって言っんでしょ
う?。」

「……」

黙り込む佐伯さん。

そして、

「……ばか」

ひと言言い置いて部屋を出ていった。

「……」

どうやら正しく選択肢を誤ったらしい。……まあ、時にはあえて
間違いを選ばなくてはいけないこともある、ということだ。

着替えてリビングへ出る。

キッチンテーブルにはすでにふたり分の朝食が並べられていた。
今日は焼き魚定食といった感じが。それはいいのだが。

「なんかいやに豪華ですね」

メニューはシンプルなのだが妙に立派で、旅館やホテルの朝食然
としていた。品数も多く、二人用でそう広くないテーブルいっぱい
いっぱい展開されている。

「うん。久しぶりだから、ちょっと張り切ったかも。……さ、食べ
よ?。」

「そうですね」

洗面所で顔を洗って戻ってくると、ご飯と味噌汁が増えていた。

これで完成形だろう。

イスを引いて席に着こうとしたとき、佐伯さんが不思議そうな顔
をしているのに気がついた。

「どうかしましたか?」

「え? ううん。なんでもない」

問うてみるが、彼女は手と首を振って慌てて否定した。多少気にな
るところはあるが、今は置いておくことにして、僕は改めてイス
に腰を下ろした。

「では、いただきます」

「うん、どうぞ。……いただきます」

テーブルに向かい合って座り、手を合わせてから食べはじめる。

「どう、かな？」

「美味しいですよ」

ちよつと量が多い気もするが。……思うに張り切ったというよりは、ある種の空回りなのだろうな。

「そっか。よかった」

言つて彼女は、弱々しいながらも笑顔を見せてくれた。

佐伯さんは僕の顔を見られない様子で、少し視線を落とし気味に食事をしていたが、それでも長く口を閉ざしてしまふこともなかった。

「弓月くんはちゃんと食べてた？ その、わたしが、いない、間……」

「食べてましたよ」

果たしてあれがちゃんとしているかは疑問の余地があるが。回数だけは一日3食を守っていたが、内容はかなりいいかげんなものだった。特に朝は前の日に買っておいたパンを、牛乳かオレンジジュース辺りで流し込むだけのことが多かったように思う。

まるで何かの隙間を埋めるように僕らはぼつぼつと言葉を交わし、時には小さく笑い、どこかきこちなくもゆっくりと他愛もない話をした。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま」

やがてどちらかがタイミングを合わせたわけでもなく、ほぼ同時に食事が終わった。

自分の茶碗や皿を重ねてシンクへと運ぶ。いつものように後片づけは佐伯さんに任せて、僕はリビングで新聞に目を通すでしょうか。

「あ、あのっ」

と、その僕の背に佐伯さんの声。

「はい？」

「えっと、コーヒー飲まないのかなって……」

そう言って彼女はなぜか気まずそうに顔を伏せた。

「ああ」

確かにそうだな。佐伯さんが出ていってからこつち、ずっとコーヒーを断っていたのだが、それを知らない彼女が不思議に思っただけだ。振り返ってみれば、さっき僕が席につこうとしたときに見せた顔もこれについてのことだったのだろう。いつもなら朝食を食べる前にコーヒーメーカーをセットしていたのだから。

「そうですね」

もう飲まない理由はないはずだ。

さっそく久しく使っていなかったコーヒーメーカーをセットする。紙製のフィルタを取りつけ、コーヒーの粉と水はマグカップ2杯分です。

その作業しながら僕は告白した。

「実はずっとコーヒーをやめてたんですよ」

「え？」

彼女の反応は予想外に大きかった。

「ど、どうして……？」

「別に。特に理由なんてありませんよ」

僕は努めてなにげない調子を装う。

もちろん嘘だ。

浜中君はこれを、佐伯さんが帰ってくるまでの願掛けなんて言っていたが、本当はもつと情けない理由によるものだ。ここで一緒に飲んだのを最後に佐伯さんが出ていったようなものだから、僕の中でコーヒーは嫌な思い出を想起させる鍵となってしまったのだ。こうしてコーヒーメーカーに向かっていている今だって、あのときのことを思い出して息が詰まるような感覚を覚える。トラウマというやつだろうか。

さて、準備完了。

今ふたりに飲み切ってしまう量しか作っていないので、出来上がりまで5分もかからないだろう。実際、僕がリビングで立ったまま新聞に目を通していている間に終わってしまった。

「佐伯さん、できましたよ」

「あ、置いといてくれる？　これが終わったらもらうから」

そう返事をした彼女はシンクで洗いものの最中だった。

「あ、いや、よかったら一緒に飲みませんか？」

「え？　うん、じゃあ、これだけ」

洗っていた皿を水切りカゴに置き、タオルで手を拭き拭きテーブルにつく佐伯さん。彼女の前に置いているのは温めに作ったカフェオレだ。

「あ……」

不意に彼女が小さく発音した。

「どうかしましたか？」

「ううん。なんでもない」

ちよつと前に同じやり取りをした気がする。ただ、今の彼女はほんの少しだけ笑っていたように見えた。

それから佐伯さんは、両手でマグカップを包み込むようにして持ち、最初のひと口を飲む。

「わたしもね、家でコーヒー飲まなかった」

「そうなんですか？」

僕もカップに口をつけ、

「それはまた、どうして？」

「別に。特に意味なんて」

佐伯さんは今度こそ本当に、少し照れたような感じで笑いながら言った。

「……」

まるで先の僕の台詞をなぞるように。

ならば。

ならば、きつと『僕と同じ』なのだろう。

「あ。弓月くんの淹れてくれたコーヒーが好きってのもあるかな」
「それは光栄ですね」

いつの間にかずいぶんと気に入られていたものだな。

「じゃあ、これからもできるだけこつやって一緒に飲まないといけませんね」

僕がそう言つと、佐伯さんは少し驚いたようにこちらを見　それから隠すように顔を伏せて、小さくうなずいた。

その奥の泣き笑いのような口もと。

何かが光る目もと。

でも僕は、それを見なかったことにした。

大丈夫だ。僕たちの目にはお互いの姿が映っている。

だから大丈夫。

コーヒーの意味だって、そう遠くない先に書き換えられることだろう。

2・「唐突ですが 僕は君のことが好きです」

5時間目が終わった後の休み時間。

なんとなく教室のいちばん後ろに行つて窓から外を見てみると、そこには一面の曇り空が広がっていた。

「ひと雨くるかな」

天気予報はどうだっただろう？ よく覚えていないな。

こつこつはつきりしない天気は、どこことなく今の佐伯さんに似ている。

佐伯さんが帰ってきた日からもう間もなく一週間が経とうとしていて、彼女の調子も次第に戻りつつある。よく話すし、笑いもするのだが、僕にはまだどこかあのときのことを引きずっているように見えて、心配でならない。……特に何かある、あったというわけではないのだが。

ふと思いついて、佐伯さんにメールを送ってみる。

今日一緒に帰りませんか？

お互い部活に所属していない身なので、こんな申し合わせをしながらも半々くらいの確率で昇降口で一緒になつたりするのだが。

メールが送信されたことを確認してから画面を待ち受けに戻し、端末を閉じる と、それをポケットにしまふ暇もなく、着信を知らせる振動があつた。誰からだろうと思つてサブディスプレイを見れば、それは佐伯さんからのメールだった。……さっきの返信か、それとも偶然にも同じタイミングでメールを打っていたか。

おっけー！

そんな短い文章の後に、指を使ったOKサインの絵文字が添えら

れていた。

本当に返信だった。速いな。小学生の間だと3分ルールとか5分ルールがあるらしいが、それ以上だ。

「……」

しばし考え込む。

『語り得ぬものについては沈黙しなくてはならない』。 ルード
ヴィヒ・ワイトゲンシュタイン。

少し思いついたことがあるが、今は置いておくことにしよう。

さて、何か返したほうがいいだろうかと考えていると、再度端末が振動。またも佐伯さんだった。

どこで待ち合わせる？ 昇降口？ それとも教室にいったほうがいい？

返信なんて一回ですませればいいものを、と苦笑してしまう。

昇降口で。

おっけー！

話はまとまった。これ以上返信をしても無意味に話が長引くだけだろうと思い、僕は端末を閉じた。

こんなふうなメールでのやり取りはごく自然。

勿論、面と向かって話をしても、だ。

ならば、僕の心配も単なる杞憂ということだろうか。それならそれでかまわないのだが。

端末をポケットに突っ込みながら顔を上げると、そこに山南さんがいた。因みに、フルネームは山南月やまなみ・るなという。髪につけた大判のりボンが特徴的な彼女は、びくっと飛び跳ね、胸の前で左右の握り拳をくつつけるようにして身を小さくした。どうやら何か用があつてこちらに近寄ってきていたが、僕が急に顔を上げたから驚いたよう

だ。

「何か？」

「あ、うん。えっと……」

半歩ずつ近づいてくる彼女。

「これ、食べます、か？」

か細い声でそう言いながら手を開いて見せたのは、銀色の包み紙に包まれた小さな四角いもの。

「何ですか？」

「ぶつちよです。コーラ味の」

「ああ」

ソフトキャンディにグミの粒を突っ込んだ、あのお菓子か。

「いいんですか？」

僕が問うと、山南さんは小さくうなずいた。当然いいから持ってきたのだらうけど。

「じゃあ、せっかくなのでもらいます」

ここで断ってしまうと彼女が困るだらうし。僕が手を差し出すと、山南さんはそこにぽとりとその小さなお菓子を落とした。さっそく包み紙を開いて口の中に放り込んだ。ひと噛みすると舌の上にコーラの味が広がった。

「ありがとうございます。美味しいです」

僕の言葉に彼女は嬉しそうに笑顔で応える。

食べながら僕は山南さんが口を開くのを待った。何か話があるからこうして声をかけてきたのだらう。

「さ、佐伯さんと、仲直り、したんですね……」

程なく彼女が言いにくそうに切り出してきた話題は、しかし、少々意外なものだった。まさか彼女の口から佐伯さんの名前が出るとは思わなかった。

「よくご存知ですね」

「昨日の朝、ふたり一緒に歩いているの、見たから……」

「なるほど」

確かに佐伯さんが帰ってきてからこつち、学園祭以前と同じように一緒に家を出て登校している。ひとつの判断基準にはなるな。

「このところ少しゴタゴタがありました。どうにか仲直りというか、まあ、もと通りになりました」

根拠薄弱な懸念はあるが。

「やっぱりそうなんだ。よかったです」

「心配させていたようです。すみません」

山南さんはうつむき気味に、ふるふると首を横に振った。リボンも揺れる。

と、そこでチャイムが鳴った。休み時間終了。本日最後の授業、6時間目のはじまりだ。

「これ、ありがとうございます」

僕は指で挟んだ包み紙を見せながらそう言い、席に戻った。

そして、放課後。

靴を履き替えて昇降口を出ると、そこにはすでに佐伯さんの姿があった。笑顔とともに小さく手を振ってくる。

「早いですね」

こつちだつて終礼が終わって、真つ直ぐここにきたというのに。

「うん。待たせたら悪いと思って。いちばんに教室を出て、走ってきたから」

道理で早いわけだ。

「桜井さんは？ いつも一緒なのに置いてきたんですか？」

「わたし、弓月くんが最優先だから」

屈託のない笑みを見せる佐伯さん。

「それは光栄ですね。でも、友達は大事にしないといけませんよ」
「うん。2番目くらいには。それにお京にはちゃんとひと言言って

きたから大丈夫。……さ、帰る」

彼女に誘われるようにして足を踏み出し、さっそく校門を出た。

学園都市の広い歩道を並んで歩く。終礼が終わってまだいくらかも

たつていない時間で、こんなに早く学校を出る生徒はあまりいなかった。同じ制服を着た姿は疎らだ。

「弓月くん、晩ごはん何がいい？」

佐伯さんが隣から問うてくる。

「僕は何でも」

「そう？　じゃあ、このまま買いいものに行こっか？　回ってる間に食べたいもの思いついたら言っつて。わたし何でも作るから」

別にそこまでしなくても　と、僕。

「弓月くんの好きなもの作るよ？」

なおも食い下がる佐伯さんに、僕は一度空を見る。

「……今日は寄り道せずに帰りましょう」

「でも……」

不満そうな、どこか不安げな声。

ちらと横目で彼女を見てみれば、心配そうな目でこちらを窺っていた。

「……」

何もそんなに焦らなくてもよかるうに、と僕は心の中のため息を吐く。いや、佐伯さんにしてみればそれも無理からぬことなのか。

とは言え。

「『でも』じゃなくて　ほら」

空を指さしてみせる。

教室から見た一面の曇天はさらにその雲を厚くして、すでに雨雲と呼べるものへと変わっていた。空は灰色。空気も雨が降る前の独特の匂いがする。

「今にも降り出しそうですから」

今日は折り畳み傘も持ってきていないから、降られると面倒だ。

「家に何も無いわけじゃないでしょうし、あるもので作ればいいじゃないですか」

「うん……」

「別に僕だって投げやりな気持ちで何でもいいと言ってるわけじゃ

ないんですよ。まあ、言ってみれば『君が作るものなら何だって美味しい』といったところですか」

なんとも齒の浮く台詞だ。

「ほんと？」

「本当です。嘘は言いません」

「ま、こんなときくらいサービスは必要か。」

「わかった。じゃあ、あり合せのものですっごいの作ってみせるから」

「期待してますよ」

僕はちよつど青だった横断歩道を渡って左に折れた。

駅ではなく我が家へと。

家に帰り着くのと同時くらいに降り出した雨は、夕食後には激しい雷雨へと変わった。

横殴りの雨はベランダの全面窓を叩くほどで、その音に混じって風と、風が揺らす木々の音が聞こえてくる。季節外れの台風でもきているのだろうか。

「すごいね、外」

食休みにふたりしてリビングで熱茶を飲んでいると、佐伯さんの口から堪らず感嘆の言葉がこぼれた。

と、そのとき、窓の外が一瞬光り、体の芯に響くような重く大きな音が耳を叩いた。どこかに雷が落ちたようだ。

「おおー」

感嘆再度。

「君、雷は怖くないんですか？」

「うっん。平気」

「そうですか。うちのゆーみは、あれで雷が怖いんですよ」

口では怖くないと言って、表情も変わらないが、雷が鳴り出すと少しずつ近寄ってくるのだ。そして、気がついたらぴたりと真横にいたりする。それでもなお怖くないと言い張るのだからたいしたもの

のだと思う。

思い出したら笑いがこみ上げてきた。

「あ、もしかして弓月くん、雷で怖がる女の子のほうがかかった？
うん？」

「そういう子のほうがかわいいと思う？」

見れば両手で包むようにして湯飲みを持ち、上目遣いに聞いてくる佐伯さんがいた。悪戯っぽい笑みを浮かべて人の好みを聞き出すとしていたが、でも、その奥には……。

「そうですね……」

僕は少しばかり言葉を探す。

「確かにそういう様子を目の当たりにしたらかわいいと思うかもしれませんが、でも、それはその女の子を評価するものではありません」

ましてや　と僕は言い加える。

「それを判断基準にしてそれ以上の何かを決めることはないです。

……僕はそういう人間ですよ」

「え？」

一瞬びつくりしたような顔をする佐伯さん。

「あ、うん……」

そして、うなずきながら湯飲みに視線を落とした。……果たしてこれで伝わるだろうか。

「さて、そろそろ部屋に戻って勉強しないと」

僕は湯飲みに残っていたお茶を飲み干し、立ち上がった。佐伯さんが顔を上げる。

「中間テストもう目の前だしね」

「実はついこの間までろくに勉強が手につきませんでした」

「あ、わたしも」

そう言っただけで彼女は苦笑する。お互いなせそうだったかは言わずもがなだ。

「それ、下げとくから置いといて」

「そうですね。じゃあ、お願いします」
僕は佐伯さんの言葉に甘え、湯飲みをそのままにして部屋に戻った。

自室で机に向かう。中間考査は来週後半からだ。
外は相変わらず風雨の音が激しい。

そう言えばさっきまで点けていたテレビのニュース番組の最中、暴風か何かの警報が出ていたように思う。この調子で朝まで続けば学校が休みになるだろうか、などと少々期待しなくもない。

そして、ついに。
ひととき大きな落雷の音が響き、部屋の照明が消えた。停電か？
勉強机から顔を上げ、意味もなく天井を見上げる。
と。

「うきやーっ」
耳を劈く佐伯さんの悲鳴。僕は落雷よりもむしろこちらに驚き、思わず立ち上がった。

直後、バタン、ドドド、ダン、ドド、バタン　と、かくも賑やかな音が聞こえ、

「ゆ、弓月くん！」
ノックもせずに佐伯さんが飛び込んできた。
そのまま真っ直ぐ躊躇いもなく僕の腕にしがみついてくる。

「ててて、停電！　真っ暗！」
「わかってますよ」

あまりの彼女の慌てぶりに、逆にこっちはおそろしく冷静になった。どうやら佐伯さんは雷は大丈夫でも、停電がダメだったらしい。「ど、どうしようっ！？」

「佐伯さん、ここに引越してきたときに懐中電灯を用意した覚えは？」

「……ない」
僕もない。

「非常用の蠟燭は？」

気配だけで彼女が首を横に振るのがわかった。勿論、僕もそんなものを用意した覚えはない。ついでに言えば、仮にあったとしても火をつける道具がないことに気がついた。しまったな。こんなことなら煙草を吸う習慣を身につけておくんだった。

「とりあえず離れませんか？」

さつきから佐伯さんが僕の腕を抱えるようにしてしがみついているせいで、同年代の女の子と比べて幾分か豊かである胸が押しつけられているのだ。

「む、むりに決まってるじゃない、真っ暗なのに！ 弓月くんはいじわるっ」

「……」

もうしばらくこのままらしい。

それにしてもよく自分の部屋からここまでこられたな。月は厚い雨雲に覆われていて、窓から差し込む天然の灯りはほんのわずか。真の暗闇ではないにしても、目が慣れていない状態で躓いたりしなかったのだろうか。リビングの真ん中にはテーブルもあるのに。特殊な才能か何かだろうか。

なお、先ほどの音を解説するなら、ドアを開ける、走る、テーブルを飛び越える、走る、ドアを開ける、だろうと思われる。

「仕方ないですね。よっぽど深刻な停電でもない限り、すぐに復旧するでしょうし。何もできないなら話でもしましょうか」

「話？」

「ええ、まあ」

ひとまず曖昧に答えておいて、僕はベッドに腰かけた。相変わらず佐伯さんは僕の腕を抱えたままだ。

「唐突ですが、僕は君のことが好きです」

「え？ え、あ、あの……」

いきなり飛び出した今の場面には似つかわしくない言葉に、佐伯さんが慌てふためく。彼女にしては珍しいことだ。顔を赤くしてい

たりするのだろうか。顔が見えない今だから言おうと思ったのだが、これなら明るい場所で言ってもよかったかもしれない。

「このところいろいろありました、それは今も変わっていません」

「あ……」

僕の言わんとしているところを理解したらしい佐伯さんは、小さく声を上げる。

「気づいてたんだ」

「漠然とですが」

ピンときたのは学校で5分返信ルールを思い出したときだ。佐伯さんはなぜあんなにも早くメールを返してきたのか。

他にもある。

大急ぎで待ち合わせ場所にきたり。

僕の好きな料理を作ることに妙に拘ったり。

女の子の好みを気にしてみたり。

「ちょっと前からね、急に不安になったの。弓月くん、もうわたしのこと好きじゃなくなってるかもって」

あんなことしちゃったから、と佐伯さん。

「僕の気持ちは今言った通りですよ。だいたい君にしては弱気なんじゃないですか」

「弱気？」

彼女は僕の言葉を鸚鵡返しにしなから見上げてくる。少し目も慣れてきた闇の中で、僕らはお互いの顔を見合った。

「僕が離れていったのなら力尽くでも連れ戻すのがいつもの君でしように。まだまだ一緒にいるんですから、君は君らしくいてもらわないと困りますよ」

「だって……」

佐伯さんはむくれる　が、程なく。

「でも、確かに弓月くんの言う通りかもしれない。ちょっと弱気になっただけ」

「少しは元気が出ましたか？」

尤も、図らずもこの停電のおかげで、ずいぶんと佐伯さんらしさが戻っている気もするが。

「うん、もう大丈夫。弓月くんがそばにいてくれてるってわかったから」

顔は見えないが、彼女が笑みを浮かべていることは声を聞くだけでわかった。

「じゃあ、そろそろ離れてください」

「それとこれとは別！」

ぎゅっ、と再び力をこめてしがみついてくる佐伯さん。

「……」

僕はまたも無意味に天井を仰ぎ見た。

やっぱりまだこのままらしい。いいかげん腕も痺れてきたのだが、早く直らないだろうか、停電。

3(1)。「今さらそんな心配はしてませんよ」

中間テストも終わった11月のある日の昼休み、弁当を食べ終えて、矢神と駄弁っていた僕のところへ桑島先輩がやってきた。

ノンフレームの眼鏡の似合う、その嫌味なほど知的な顔が教室に入ってきたとき、不幸にも山南さんが入り口付近にいて、驚きのあまり飛び退いていた。聞いた話、彼女はいいところのお嬢様らしいが、いったいどんな育てられ方をしたらあんなふうになるのだろうか。

桑島先輩はそれを異様なまでに冷めた目で一瞥してから、僕の席までやってきた。まずは机の上に缶コーヒーを置く。

「ちよつといいか？」

そうして眼鏡のブリッジを指で押し上げながら、そう切り出してきた。

半月ほど前にもこんな場面があったが、僕にも先輩にもあのときのようなピリピリした雰囲気はない。ただ、桑島先輩に限って言えば、その眼鏡はやめたほうがいいように思う。素顔は柔和な面立ちをしているのだから、コンタクトレンズにでも変えてみてはどうだろうか。

「何かお話ですか？」

「まあな。たいした話じゃないが、いいからつき合え」

僕は視線を机の上に落としたりした。先輩が持ってきてくれた缶コーヒーがある。こうして手土産も頂いたわけだし、断る理由もないか。それに機会があればまた話したいと思っていたところでもある。

「わかりました。……矢神、ちよつと行ってきます」

僕は今まで一緒に無駄話をしてきたクラスメイトにそう告げ、缶を手にして立ち上がった。

教室を出ると桑島先輩は、また先日のように渡り廊下へ行くのか

と思いきや、そのまま教室前の廊下の窓にもたれた。昼休み真っ只中ということもあって行き交う生徒は多いが、今日はここでいいらしい。僕も彼と肩を並べて、窓に背をつけた。

「キリちゃんとはうまくやれてるようだな」

さっそく缶コーヒートのプルタブを引き上げたところで、桑島先輩が先に口を開いた。

「ええ、おかげさまで」

「そうか。それならよかった」

言って先輩も自分のコーヒーを開け、それを僕のほうへ掲げてきた。こちらもそれに倣い 互いの缶を軽くぶつけて、乾杯。

まずはコーヒーをひと口飲み、喉を潤す。

振り返ってみれば、僕と佐伯さんが日常を取り戻せたのも、桑島先輩が僕のところに戻れなくなっている彼女を説得してくれたおかげだ。果たして、僕はあの件について何をやったのだろうか。

「佐伯さんのこと、今になって勿体ないことをしたと思ってるんじゃないですか？」

思わず自嘲してしまいそうになるのを発音で誤魔化する。

「うん？ まあ、正直そういう思いがないわけでもないな。キリちゃんはかわいいし」

「でしようね」

「だけど」

と、そこで彼の言葉が止まった。

どうしたのだろうか、と横目で見てみれば、桑島先輩は視界の端に何かを見つけた様子。次いで視線の行方を辿ると、そこには教室の中から顔だけを出してこちらを窺っている山南さんがいた。あんなのが視界に映れば話も止まって当然だな。……いったい何をやってるんだ、彼女は。

しかし、桑島先輩は無視を決め込むことにしたようだ。

「悪いが、俺は親が決めた仲なんてまっぴら御免なのさ」

ぴしゃりと、予想外に強い口調。

おかげでちょうど通りかかっていた生徒が何人かこちらに目を向け、山南さんも驚いて教室の中に引っ込んでしまった。

こつも語気を荒らげるのは、親に何かを押しつけられた経験があるからなのだろうか。大企業の社長の息子に生まれても、それはそれで相応の悩みがあるのだろう。

一拍。

「だいたい 男なんて単純な生きものだから、かわいいというだけで女の子を好きになれるところがあるが、女の子のほうはそれじゃかわいそうだよ」

口調は先ほどよりも少し砕けた調子になったが、言っていることは真理だ。

「それにな、俺には致命的に不味い点があるんだ」

「致命的に？」

「僕は聞き返す。」

「ああ。実はどうも男にしか興味がもてないらしい」

「は？」

「待て。なんだそのいきなりのカミングアウトは。」

「そういう点では、俺はキリちゃんよりもむしろお前のほうを気に入ってるよ」

「……」

「えっと……」。

僕の背中に嫌な汗が流れる沈黙の中、桑島先輩はコーヒーを煽ってたつぷりと間を持たせてから次句を継いだ。

「冗談に決まってるだろう。本気にするなよ」

「……」

思わず膝から崩れ落ちそうになった。

勘弁してくれ。前のもそうだったけど、先輩の冗談はどうにも冗談に聞こえないのだ。一年生にちょうど手ごろなのがいるから、それを生贄に紹介して逃げようかとかかなり本気で考えてしまった。

「さて、本題だ」

と、桑島先輩は閑話休題。さすがにこんな趣味の悪い冗談を言いにきたわけではないらしい。

「お前、キリちゃんを誘って大学の学園祭に行つてこい」

「唐突ですね」

「ま、埋め合わせだよ」

桑島先輩曰く、先月の学園祭の埋め合わせ、とのこと。

確かに先輩が横から入ってきたことによつて、学園祭二日目の僕と佐伯さんの予定は崩れてしまった。とは言え、当時はまだ佐伯さんの様子にも特におかしいところは見られず、先輩と一緒に見て回らないかと誘えば彼女もそれを受け、僕との約束があつたのではないかと念のために問えばないと答えるので、桑島先輩もその言葉を疑わなかつたらしい。

「学園都市にもいくつか大学があるが、その中に俺の先輩が行つてるところがあるんだ。よかつたらそこに行つてみないか」

「そうですね」

学園都市ではこの11月は、大学の学園祭シーズンだ。あの日のやり直しをするにはちょうどいいかもしれない。

「わかりました。後で佐伯さんを誘つてみます」

「そうか。なら、俺からその先輩に、うちの後輩が行くことを伝えておくよ」

何から何までよくしてくれて、申し訳ないな。

「おっと、言ってるそばから彼女の登場だ」

言われて廊下の先を見れば、不思議な濃淡のついたハニーブラウンの髪を揺らしながら歩いてくる佐伯さんの姿があつた。すぐに彼女も僕を見つける。

「あ、弓月く」

言いかけた言葉が途切れ、彼女の口が『あ』の発音のかたちになった。僕の隣に桑島先輩の姿を見つけたからだろう。

「やあ、キリちゃん」

歩調を鈍くして歩いてきた佐伯さんに、桑島先輩が先に声をかけ

る。

「……あ、ひ、聖さん、あのときはいろいろご迷惑をおかけして、その、すみませんでした……」

「うん？ ああ、あれか。なに、もう終わったことだ」

小さく頭を下げる佐伯さんに、先輩は苦笑しながら返す。

「これから同じ学校の生徒、友人としてよろしく頼むよ」

「あ、はい。こちらこそ……」

佐伯さんはもう一度丁寧に頭を下げた。当時のことの顛末を知る相手として、恥ずかしいやら申し訳ないやら、複雑な思いがあるのだろう。

そう言えば、と僕は思い出す。前に桑島先輩は、僕と佐伯さんの問題を解決するのは自分のためでもある、といったニュアンスのことを言っていた。たぶん彼は、佐伯さんと親同士の立場や思惑のからまない関係を改めて築きたかったのだろう。

それはそうとして

「……」

胸が、軋む。

佐伯さんと桑島先輩が一緒にいるところを見ると、どうにも息が詰まるような胸の苦しさを覚える。きつとこれは佐伯さんが 彼女の本意ではなかったにせよ、僕ではなく桑島先輩を選んでいたあの半月間のせいなのだろう。……トラウマか。情けないな。

「じゃあな、弓月。詳しいことはまた連絡するよ」

「え？ ああ、はい。わかりました」

少しばかり自分の内側に入り込んでいた僕は、桑島先輩に名前を呼ばれて我に返った。慌てて返事をする。

「キリちゃんも」

「はい、また」

佐伯さんと入れ違いに去っていく桑島先輩を、僕と彼女は見送る。「なに、詳しいことって？」

しかし、それもそこそこに、佐伯さんは僕の横顔に視線を向けた。

「帰ったら話しますよ」

「ふうん」

そのままじっと僕を見つめる。

「なんですか？」

「うん。あの、ね……」

ほんのわずか言い淀み、

「わたしがこんなこと言うのもどうかと思うんだけど　もうどこにもいかないから。わたしもちゃんと弓月くんのそばにいるから」
「……」

驚いて佐伯さんを見つめ返せば、彼女は少し恥ずかしそうに笑みを浮かべた。……やれやれ、すっかり見抜かれていたということかなわらないな。

「今さらそんな心配はしてませんよ。さて、少し歩きましょうか」

「あ、うん」

返事も聞かず歩き出した僕を追いかけようにして、佐伯さんも足を踏み出す。

ちよつと校内の散歩に出かけるとしようか。そうしながらさっそく学園祭を見に行く話を持ちかけてみよう。喜んでくれるといいが。

3(2) . 「ちょっとお礼をと思ひまして」

さて、ここで少しばかり蛇足なエピソードに触れるとしよう。

ある日の放課後、僕にはひとつの約束があった。

終礼が終わった後、入口付近の席に座る山南月やまなみ・るなさんに「じゃあ、

お先に」と声をかけて教室を出 向かった先は学生食堂。

出入り口から中を見渡せば、当然のように生徒の姿はまばら。営業していないわけではないし、利用もないではないのだが、だからと言って時間の経過とともに生徒が増えてくるということもないだろう。学食の役目は昼休みで終わったようなものだ。

その少ない生徒の中に、僕の待ち合わせの相手はいた。

ノンフレイムの眼鏡が似合いすぎて、嫌味なほど知的な 桑島くわしま

聖先輩ひじりだ。

向こうも僕の姿を見つけ、軽く手を上げて合図を寄越してきた。

僕は会釈で応えてから、まずはそばにある自販機コーナーに体を向けた。

最初を買ったのは微糖のコーヒー。過去に2度、桑島先輩と缶コーヒーを飲み交わしたが、そのどちらも彼は同じ銘柄のを飲んでいった。たぶんこれが好きなのだろう。

次に自分のためにミルクティを購入。

最後に少し考えてから、カフェオレを買った。

「よう」

桑島先輩の座るテーブルへ行くと、彼は不敵な笑みで僕を迎えてくれた。

「お呼びたてしてすみません」

「別にそれはいいが……どうしたんだ、今日は」

「まあ、ちよつとお礼をと思ひまして」

別名、よけいなお節介とも言うが。

僕は桑島先輩の斜め前に座りながら、まずは缶コーヒーを差し出した。自分の前にはミルクティを置き、カフェオレはいったん脇によける。

「悪いな。……なんだ、お前は紅茶か」

「外ではコーヒーよりこっちなんです」

「言っとけよ」

桑島先輩は苦笑した。2度もそんな機会があるとは思っていないかつたし、そもそも奢ってもらおう立場で自分お好みを言うほど僕は図太くできていない。

僕は先輩がプルタブを引き開け、ひと口飲むのを待ってから切り出した。

「さっそくですが　先輩はうちのクラスの山南さんをご存知ですよね？」

「……」

彼は特に動じた様子もなく、実に落ち着いたものだった。

「それは質問じゃなくて単なる確認なんだろうな。どうせもう調べてあるんだろう？」

「簡単には」

幸い、僕には佐伯トオル氏というコネがあったので。

『F・E・トレーディング』。

その歴史を紐解けば、桑島先輩と山南さん、それぞれの祖父が二人で興した貿易会社だとわかる。当時はまだもつと古臭い社名で、今の『F・E・トレーディング』に名を変えたのはわりと最近のことだ。

数年前、その創設者にして初代社長の桑島氏が他界したとき、次は当然山南氏が会社を背負って立つのだと思われた。だが、後を継いで若社長となったのは桑島氏の息子、先輩のお父さんだった。

その交代劇において特にひと悶着あったわけではなく、山南氏はむしろ若い先短い自分が社長になってもすぐに引退することになるだろうし、度々トップが代わってその都度バタバタするくらいなら、

自分は永遠のナンバー2でいいと身を引いたのだ。

それだけの関係を築き上げた桑島家と山南家。

ゆえに　ふたりの祖父がまだ健在のとき、それぞれの孫を結婚させようと約束したのは、当時としては案外普通のことだったのかもしれない。

「そのことについて先輩自身はどう考えているのかと思ひまして」

「お前には関係ない話だ」

突き放すように言い、コーヒーを煽る桑島先輩。勿論、僕だって他所様の家庭の事情に首を突っ込んでいるという自覚はある。

僕はそこで一度、学食の出入り口に目をやり

「でも、彼女には関係があります」

そう告げた。

その言葉にはっとして周りを見る桑島先輩は、すぐに彼女　頭につけた大判のリボンが特徴的な山南さんの姿を認めた。

「こ、こんにちは、聖さん……」

「……」

挨拶をする山南さんに、しかし、桑島先輩は無言をもって応えた。

「座ってください。よかつたらこれも」

僕は山南さんに桑島先輩の正面の席を勧め、ついでにさつき買ったカフェオレも差し出した。彼女はそれをすぐに飲もうとはせず、缶を両手で包むようにして持っただけだった。

「改めてお聞きしますが、先輩は彼女とのことをどう思っていますか？」

「弓月」

と、桑島先輩は僕を見た。

「生憎だが、それについてはルナちゃんに散々言っている。はつきりと。俺は親たちが決めたものを押しつけられる気はない。そんなのはまっぴらごめんだ」

それと似たような台詞を、先日教室前の廊下でも聞いた。思えばあれはそばにいた山南さんに投げかけた言葉だったのだろう。

僕の隣で山南さんがしゅんと頂垂れた。

「それならそれで家族にそう伝えて、その上で家の思惑のからまない関係を彼女と築けばいいはずです。事実、先輩は佐伯さんとはそういうとしています。なぜ山南さんにだけ……」

どうしてそこまで冷たく突き放すのか。それが不思議でならなかった。

「キリちゃんは強い。親の思惑に惑わされないだけの意志がある」その辺りは僕も同意見だ。尤も、先日の件では見事に失敗しているが、それでもよけいな要素　主に僕、がからまなければ、佐伯さんは親の顔を立てつつ桑島先輩とも一定の距離を取って……と、計画通りにことを進めていただろう。

「それに比べて　本人を前にしてこう言うのも何だが、ルナちゃんは弱い。親抜きの関係だ何だと言っても、最後にはきつと家庭の事情に引きずられる。だったら、そんなものは最初からないほうがいい」

きつぱりと言い切った先輩は乱暴にコーヒーを煽った。

なるほど。そもそも僕が桑島先輩と山南さんの間に何かあるのではないかと思つたのも、先輩の彼女に対する態度が妙に冷たく見えただからなのだが……そういう理由だったのか。先日は「女の子のほうはそれじゃかわいそうだ」と言っていた。確かにそうだ。いずれ山南さんが親の思惑に引きずられるという先輩の予想はきつと正しいだろうし、「そんなものは最初からないほうがいい」というのも一理ある。

だが、問題は山南さんがそれで納得するか、だ。

さて、ここから次をどう切り出したものか　と、僕が思索していたときだった。

「わ、わたしはっ」

山南さんが顔を上げ、意を決したように口を開いた。

「わたしは聖さんが思っているほど弱くないです。……こ、こんなですけど……」

勢いがよかったのは最初だけ。発音は尻すぼみになり、彼女は両手で握ったコーヒーの缶に再び視線を落とした。

そして、そのまま。

「そ、それにわたしはずっと、聖さんのことが好きでした。親に連れられて、初めて会ったときから……」

その告白は桑島先輩にとって寝耳に水だったらしく、目を丸くして山南さんを無言で見つめていた。

少しして、今度は僕を見る。

「……弓月、知ってたのか？」

「何となく」

そんな気はしていた。

隣では山南さんが顔を赤くし、それを隠すようにさらに顔を伏せてしまっている。

「さて、どうしますか、先輩。男としては彼女の気持ちに何らかのかたちで応えなくてはいけないと思えますが？」

「わかってるよ。それに　ここで振ったりできるかよ」

桑島先輩は諦めたようにそう言い、その向かいでは山南さんが弾かれたように顔を上げ、明るい表情を浮かべていた。

その視線に居心地の悪いものを感じたのか、先輩は再び僕を見た。
「恨むからな」

「どうぞご勝手に」

山南さんにとってはよい決着となったのだ。先輩に恨まれるくらいどうってことはない。

そして、夜、我が家のリビング。

「聖さんもさ」

夕食後のお茶を飲みながら、僕の話聞いた佐伯さんは何かを思いついたようだった。

「その山南さんって人のこと、最初から好きだったんじゃないかな」
「ん？」

僕はしばしば彼女の言葉の意味を考え、

「ああ」

納得した。

言われてみたら確かにそうかもしれない。桑島先輩は「男なんて単純な生きものだから、かわいいというだけで女の子を好きになれる」とも言っていた。あれは自分のことだったのだろうか。

だとしたら。

何が恨むだ。そんな筋合いなどないではないか。

「それにしてもあのふたり、けっこうつき合いは長いんですね」

「そうなの？」

「みたいですよ」

幼馴染というやつだろうか。

何せあの後に聞いた会話が「お兄ちゃん」「その呼び方はもうやめてくれ」だったのだから。

4(1)・「僕が迂闊なばかりに」

日曜日。

今日は佐伯さんと出かける予定なのだが、かと言って早く起きるわけもなく、いつも通り平日よりも1時間ほど遅く起床して、ふたりで一緒に朝食をとっている。

向かいに座る佐伯さんは近頃少しずつ気温が低くなってきたこともあって、ゆったりとしたトレーナーを着ていた。それでもボトムはショートパンツで、席を立てばすらりとした足を見ることができ。長い髪は先ほどまで料理をしていたため、ポニーテールのようにまとめられていた。

今朝のメニューは、トーストにデミグラスソースのオムレツ、生ハムサラダ。それにコーヒード。

「弓月くん、今日いく大学って、どんなところか知ってる？」

「多少は」

佐伯さんの問いに僕は短く答える。

そう。今日は彼女と一緒に、学園都市のとある大学に学園祭を見に行く予定になっているのだ。

ここ学園都市では、11月は大学の学園祭ラッシュで、毎週末必ずどこかの大学が学園祭をやっている。学生の父兄や友人は勿論のこと、果ては学校とは無関係だがステージイベントのために呼ばれた有名人目当てのファンまでやってきたりで、街全体が非常に賑やかだ。

「たぶんここではいちばん大きな学校でしょうね」

「そうなの？」

学園都市は教育施設や研究機関の集積を目的とした比較的新しい街だ。新しいが故に大学に関しては、情報大学や芸術大学といった新興の単科大学や、どこかの総合大学の薬学部だけ理工学部だけというところが多い。だが、そんな中で桑島先輩に勧められたところ

は、総合大学が丸々移転してきた稀有な例だった。確実に学園都市で最も大きな学校だろう。

「確かキリスト教系の学校で、敷地の中に教会があったはずですよ」「おおー、教会」

何やら感激している様子の佐伯さん。

「ところで、わたしよく知らないんだけど、その学校って遠い？」「少し」

そこが残念なところだ。さすがに学園都市一の広大な敷地を駅前にはいかなかったようで、わりと駅から遠い場所にある。

「とは言え、歩けない距離でもないです。駅から15分から20分というところでしょうね。歩いてる学生も多いと聞きます。……どうします？ バスカ、それとも歩いていくか」

バスは市外の各方面に向かう市営バスのほか、学園都市の中の一定のルートを巡回するバスがある。後者は運賃が100円であることから、100円バスなどと呼ばれている。確かこの100円バスでも行くことができたはずだ。

「うーん……」

佐伯さんは箸の先を下唇に当てながら考える。

「歩きたい気分、かな？」

「どうしました？ 急に運動の必要でも出てきましたか？」

「しつれーな。ちゃんといつ見られても、触られてもいいように気をつけてますー」

言いながら彼女は頬をふくらませた。

「……その不断の努力の成果も、見せる機会がなかなかやってきませんけども」

「まだとうぶんこないんじゃないですか」

さらりと流すと、佐伯さんは何か言いたげな半眼を向けてきた。見ていない振り、気がつかない振りで食事を続ける。

僕は生ハムを一枚、レタスとからめて食べ、結論する。

「じゃあ、ぶらぶらと歩いていくことにしましょうか」

もう11月も中旬ではあるが、天気予報では今日は学園祭日和の快晴。外を歩いてても寒くてたまらないということはなさそうだ。むしろそれだけ歩けば、かなり温まりそうだ。

「何時くらいに出かける？」

「そんなに早く出なくてもいいでしょう」

遊園地じゃあるまいし開会と同時に雪崩れ込むこともあるまい。

桑島先輩が調達してくれた学園祭のプログラムによると、メインとなるステージイベントは昼過ぎからのようだ。

「話は変わるけど 水の森の学園祭のときって、弓月くんのお父さんやお母さんは見に来たの？」

佐伯さんがトーストを手にしたまま聞いてくる。

彼女の口から親の話題が出て、僕は少しばかり驚いた。動揺したと言っているかもしれない。今までその部分には触れられず、おかげで僕も親について語らずにすんでいたのだが。急にどうしたのだろう？ この夏くらいから僕が佐伯さんのご両親と親交をもつようになったからだろうか。

内心の動揺を悟られぬよう気をつけ、言葉を発する。

「いえ。なにせ呼びませんでしたから」

「あ、そ、そうなんだ」

目をぱちくりさせる佐伯さん。

どうやら素っ気なくらいに平坦な口調になってしまったようだ。失敗したな、と思いつつ自らフォォーを入れる。

「まあ、男なんてそんなものですよ。学校行事に親がきても恥ずかしいだけですから」

「あはは。確かにそうかも」

が、結局、それ以上会話は続かなかった。

そのまま朝食を食へ終える。

「ごちそうさまでした」

そう告げてから僕は先に席を立った。食器を重ねてシンクに下げ、半分ほどコーヒーが残っているマグカップを持ってリビングへと移

る。その間、佐伯さんはずっと僕の動きを、気遣わしげな目で追っていた。

どうやらよけいな心配の種を植えつけてしまったらしい。

リビングで朝刊に目を通してから部屋に戻る。

出かける前に簡単にでも家のことをやっておかないといけなさそう。とは言っても、僕がするのは自分の部屋の掃除くらいだが。

一方で佐伯さんは、朝食の後片づけから洗濯、この部屋以外の掃除までやってしまうのだから頭の下がる思いだ。

部屋の掃除も終わり、そろそろ出かける準備をしようかというとき、勉強机の上に放り出してあった携帯電話が鳴った。電話だ。サブディスプレイを見れば、ゆーみと表示されていた。

「もしもし？」

『公園のブランコで首を吊った人は首がぶらーん』

「……………」

いきなり気色の悪い冗談が飛んできた。もとより妹は表情に乏しく、声も抑揚に欠けるため、よけいに気味が悪い。

「…………… いったい何の用ですか？」

『兄さんがどうしてるかと思って。今日は、佐伯さんは？』

「彼女なら…………… 家にいるんじゃないですか」

危つく部屋にいますよと言いつうになつて言葉を飲み込む。僕が佐伯さんと同居していることは、いずれ言わなくてはいけないと思いつつ未だに話せていない。せめて佐伯さんと面識のある妹にだけはおしえておくべきだろうか。

『ぶっん』

何か含むところのありそうなゆーみの納得。

「なんですか？」

『てつきりいつかみたいに泊まっていつて、仲良くモーニングコーヒーかと』

「…………… いつもいつもというわけではありませんよ」

我ながら言っていて嫌になるな。自分で自分を貶めている気分だ。咄嗟とは言え、あのときももう少しましな嘘を吐くのだった。

『いちおうこれでもなかなか家に帰ってこない兄を心配してるつもりで、ここにも心配してるのがひとり。……代わる』

「え？」

待て、と言おうとしたが遅かった。声を発する間もなく電話の向こうのゆーみの気配が消えた。

『恭嗣？』

そして、少しの間があつた後に、代わって出てきたのは母だった。医学系雑誌の出版社に勤める、古い言葉で言うならキャリアウーマンである母の理知的な顔が頭に浮かび、僕は複雑な気持ちになる。

「何か？」

自分の声の温度が下がつたのがわかつた。

『何って、母さん心配してるのよ？ 恭嗣、ぜんぜん帰ってこないじゃない』

「月に一度は帰ってるつもりですが」

週末のたびにはいかないが。この夏にはちゃんと盆にも帰っている。

『本当に顔を見せる程度じゃない。もう少しゆっくりできないの？』

「忙しいんですよ」

母の言葉の終わりに僕は自分の発音をかぶせる。

「もともと学業に専念するためにはじめたひとり暮らしですから」

『それはそうだけど……』

心配げな声が返ってきた。

いわゆる自立した女性であるところの母は、僕のひとり暮らしにも賛成してくれた。だが、それをきっかけに息子が家に寄りつかなくなつたとなれば心配して当たり前だろう。ただでさえわからないところの多い、一時は問題児だった僕のこと、さらにわからなくなつたに違いない。

『それとさっきゆーちゃんが話してたのを聞いたんだけど……恭嗣、

おつき合いしてる女の子がいるの？」

「……」

聞かれていたか。まあ、ゆーみに電話をさせてから代わってもらうという方法をとっている以上、そばにひかえていて当然だ。ゆーみもあの人がいるところでそんな話をしなくてもいいだろうに。

「いますよ」

おそらく何かの間違いであって欲しいと思いつながら発したであろう母の問いに、僕は無情に肯定の返事を返した。

『そ、そう……』

そして、ならば家に泊まるということが何を意味しているかも理解したはずだ。

『あのね恭嗣、あなたはまだ高校生なんだから』

「冗談です」

僕は母の言葉を遮った。

「冗談ですよ。ゆーみが言っていた佐伯さんというのは男友達です。仲がいいからよく遊びにきて、週末はそのまま泊まっていたりするんです」

『そ、そうなの。もう、あまり驚かさないで』

苦笑する母は、電話越しでもわかるくらい、安堵に胸を撫で下ろしていた。

自己嫌悪を覚える。

何かの当てつけのように悪い息子を演じようとしても、結局は僕はそれになりきれず、そんなことをしようとした自分が嫌になる。

「すみません。品のない冗談を言いました。それと年末年始は家で過ごそうと思っています」

『わかったわ。いつ帰るか決まったらおしえてちょうだい？ 母さん、恭嗣の好きなもの作って待ってるから』

「じゃあ、これから出かける用事がありますので」

ともすれば冷たくなりそうな発音を努めて平均値に近づけてそう言い、僕は通話を切った。

今、母は切れた電話を前にして何を思っているのだろう。年末には帰ると言ったことに喜んでいるのだろうか。それとも相変わらず自分を避けているふうの息子に落胆しているのだろうか。

「……」
ため息を吐く。

歪んでいるな、僕は。血のつながった実の母親に対してなんて態度だ。

着替えて部屋を出る。

と、リビングには佐伯さんの姿はなく、まだ自分の部屋にいるようだった。こちらはよけいな電話で時間をとられたから、彼女のほうが早く支度がすすんでいると思ったのだが。

「佐伯さん、出かけますよ」

先の母とのことが尾を引いていたのだろうか。このとき僕は普段では絶対にしないことをした。

つまり。

いきなりドアを開けてしまったのだ。

「用意はでき」

言葉が途中で途切れる。

中にいた佐伯さんは着替えの真っ最中だった。

というよりも、むしろ佳境。

今まさにタンクトップを脱ごうかという瞬間で、彼女の豊かな胸が露になっていた。ボトムは穿いていたショーツパンツをすでに脱いでいて、白い下着一枚だけ。男の僕にはその刺激的、かつ、扇情的なデザインの下着にどういう名称が与えられているか、さっぱり見当もつかなかった。

「……」
「……」

互いに何が起こったか理解ができず

時間が止まったみたいなの

沈黙。

程なく。

「ゆっ……!」

佐伯さんの顔が一瞬で真っ赤になり、引き攣ったような半笑いのような表情になった。

遅れて僕も我に返る。

「す、すみませんっ!」

慌ててドアを閉める。

回れ右をして　そのままドアを背に、僕はずるずると崩れ落ちた。

「やってしまった……!」

頭を抱えるしかない。

約10分後。

着替え終えて部屋から出てきた佐伯さんは、リビングのテーブルに突っ伏していた。

「ま、また、ナマを見られた……!」

その構造のままですつと愚痴らしきものをこぼしている。そうとうシヨックだったようだ。本当に悪いことをしたと思う。

「しかも、今日はパンツルックって決めてたから、下はスーパードイレグ……って、別にそこは問題ないけど……!」

「……!」

ああ、あれはそういう名前なのか……などと感心している場合ではないな。

「すみません。僕が迂闊なばかりに」

「……いい」

と、額をテーブルにつけたままの佐伯さん。

「……別にいい。わたしもいつ見られてもいいとか言ってたし……。言ったけど。言ったけど、でも、事故は……。事故だどこっちも心の準備が……!」

何やらおそろしく複雑な心境らしい。

不意に佐伯さんが顔を上げた。

と言つても、顎をテーブルに乗せていて、そのまま僕を見つめてくる。まだ顔が赤く、不貞腐れたような表情だ。

「何かあった？」

「え？ どうしてですか？」

「なんか弓月くんらしくない失敗だったから」

羞恥心の入り混じったばつの悪そうな顔をしながらも、その眼差しはどこか心を見透かすよう。

「……たいしたことじゃありませんよ」

僕は短く、そうとだけ答える。

「ふうん」

佐伯さんの返事もまた短い。鋭い彼女のことだから、何かしら気づいていることはあるだろう。しかし、見抜かれたところで、それは僕の気持ちの問題だ。そんなことは放っておいて、それよりもそろそろ出かけた方がいいのだが。

のだが。

「はあ」

しかし、佐伯さんはまた突っ伏して、ため息を吐く。それどころではないようだ。この様子ではまだしばらくは出かけられそうにないな。

4(2)。「親にはずいぶんと迷惑をかけましたからね」

学園祭用のアーチで飾られた校門をくぐると、まず正面に真っ直ぐ幅の広い通りが伸びている。学園通りと名づけられたこの通りの左右には、図書館やメディアセンター、学生食堂、学生課や教務課などの入った事務棟が並んでいる。

ここを真っ直ぐ行くと、今度は広場通りと呼ばれる通りと直交。その向こうには噴水を中央に備えた長方形の大きな広場。教会広場があり、そこを囲むように1号館から3号館までの教室棟と、教会広場の名の由来になったチャペルが配置されている。

以上がこの大学の大雑把な構造。

敷地内は森を切り拓いたみたいになんか多く、ここの学生はゆっくりとした時間の流れの中でキャンパスライフを楽しんでいるのだろう。でも、それも普段の話。学園祭開催中の今はどこを見てもお祭り騒ぎだ。学園通りにはクラスやサークル、ゼミ単位の出店がずらりと並び、その分だけ狭くなった通りは人で溢れ返っている。学生に一般の来場客、付近の出店の呼び込みもいれば教室棟内で行っているらしいホラーハウスの宣伝のミイラ男まで。この学校は芸術関連の学科もあるのか、ミイラ男も妙にリアルで気合いが入っている。ただし、とても陽気だが。

「メインステージは教会広場にあるみたいですね」

僕は入り口でもらったプログラムを見ながら確認する。

そのメインステージ以外にも、グラウンドや体育館、1号館の中庭などで様々なプログラムが組まれているようだ。

「弓月くん、こっちこっち」

しかし、僕の言葉などまったく聞かず、というか、とつくに聞こえないくらい先に行ってしまった佐伯さん。人のことを呼んでおきながら、まったく待つ素振りもなくまたすぐに次へ行こうとする。ずいぶんとはしゃいでいるな。

「お、あの子かわいくね？ お前声かけてこいよ」

「俺がいくのかよ。あ、でも、マジかわいい」

不意に耳に飛び込んできた声のほうを見ると、そこには僕と同じくらいの高校生らしき三人組が。勿論、その視線が向かう先は佐伯さんだ。……むつときた。

「佐伯さん」

わざとその三人組に聞こえるように呼び、僕は彼女を追いかけた。「あまりさきさき行かないでください。人が多いんですから。見失ってしまいます」

「え？ あ、うん」

睨むようにして三人組の様子を窺えば、もう遠ざかっていくところだった。見つけたかわいい女の子が男連れだとわかって興味をなくしたのだろう。我ながら大人げないことをしているな。そんな自分に少し驚く。

「弓月くん、手……」

そこでようやく僕は佐伯さんの手を握っていることに気がついた。無意識に掴んで引き寄せていたらしい。

「っと、すいません」

慌てて離れる。

「別になだままでもいいのに」

「君が遠くへ行かなければすむ話です」

小さく笑う彼女に、僕は慥然とした表情を作っ て言い返す。

改めて佐伯さんを見た。

デニムのロングパンツにボートネックのトレーナー姿。11月も折り返し地点に差ししかかろうというこの時期にしては首周りが寒そうだが、今日の気温を考えればそうでもないか。その首にかかっているのは僕が誕生日に買ったペンダントだ。全体的に飾り気の少ない、どちらかというとシンプルで活動的に見えるスタイルだが、素材がいいのでこれでも十分に決まっている。

やはりかわいい、と思ってしまう。

そのとき、佐伯さんがはっとしたような顔をした後、ややうつむき加減のままとこと僕のほうへ寄ってきた。

「あ、あまり見られると……ほら、朝あんなことがあったし」

「う……」

思い出した、というか、目の前の佐伯さんとダブってしまった。

直で見ってしまった彼女の豊かな胸と、急な角度で大胆なカットの下着。

「もう。だから想像しないでって」

なぜか見透かされ 恥ずかしいのか怒っているのか、佐伯さんは僕の胸板に額をぶつけてきた。……そんなこと言われてもな。それに思い出してしまうようなことをわざわざ先に言ったのはそっちではないか。

「……」

「……」

僕たちの間に気まずい空気が流れる。
と。

「はい、そのかわいい彼女！」

一瞬こんなときにまたナンパかと思っただが、しかし、その声は女性のものであった。見てみればそこにはこの学生らしき女の人が立っていた。……のはいいのだが、なぜかチアリーディングのユニフォーム姿。長身で、それだけにスコートの中から伸びる足もすらりと長い。なかなか整った容姿だが、それ以上に自信ありげな堂々とした表情が印象的だ。

「と、かつこいい彼氏？」

「……」

取ってつけたように、それも疑問形で。

「うちんとこのクラス、喫茶店やってんのよね。3号館。で、これほんのちよつとだけど割引券。よかつたら寄っていったって」

「わ、ほんとだ。割引券」

「はい」と気前よく手渡される2枚のチケット。僕の手許を覗き込

んだ佐伯さんが小さな歓声を上げた。どうやらこの人は自分のところの出しものの呼び込みをやっているらしい。

「喫茶店、ですか」

僕は緑色の割引券と彼女を交互に見る。割引券のほうはパソコンが何かで急造して、カラーの紙に印刷したような感じだ。だけど、それと彼女の姿が結びつかなかった。

「ん？ 少年、もしかしてこういうユニフォームの喫茶店だと思っ
た？」

「いえ、さすがにそこまでは……」

と答えつつも、その人がスコートの片端を持って扇状に広げて見せるものだからドキツとした。

「うむ、健全でよろしい」

……思っていないと言っているのだが。

「残念だけど喫茶店は普通だよ。これはチア部の衣装。部の合間にクラスのほうを手伝ってんのさ。こういうのが好きなら、彼女に頼んで着てもらいなさい。きっと似合うから」

「変なこと言わないでください」

そんな趣味はない。……が、しかし、すぐ横では佐伯さんが僕の様子を窺うように、こちらをじっと見ていた。こっちはそんな趣味があるのかもしれない。

「因みに、チアのパフォーマンズなら1号館の中庭で定期的にやっているから。よかったらこっちも見に来て。……じゃあね」

言いたいことを言って、渡すものも渡して、その人は去っていく。僕たちが黙って見送っていると、さっそく次のターゲットを見つけ、声をかけていた。

「ああいうのもけっこういいかも。いわゆるコスチュームプレイ？」

「……やめてください」

さつきは恥ずかしくがっていたくせに、こっちはいいのか。

「それ、どうするの？」

「そうですね。後で寄ってみましょうか」

せつかくもらったのだし、ありがたく使わせてもらおう。

そうして、その“後”。

学園通りをゆっくり見て歩き、そのまま教会広場から3号館へ。

チケットに印刷された店の名前と所在地を頼りに、そこへと辿り着いた。中教室を丸々喫茶店に改装したようだ。

「あ、やっぱり普通にエプロンなんだ」

「あの人もそう言っていたじゃないですか」

当然のようにチアリーダーディングのユニフォームで出迎えられるようなことはなく、皆私服におそろいのエプロン姿だった。

「ああいうのって個人で買えるものなのかな？」

「……君、何を本気になつて考えてるんですか」

しかし、おそろしいことに「帰ってから調べてみよう」とか言い出す始末。なんでそんなに興味津津なんだ。

テーブルに着き、割引券が有効なコーヒーとケーキのセットを注文してみれば、驚いたことに出してきたのは手作りのマーブルケーキだった。大学生ともなれば本格的なお菓子作りを趣味にしている人もいるのだろう。主にお中元やお歳暮のあまりもののクッキーを持ち寄つて出していた僕らとは大違いだ。

しかも、ここではちゃんとコーヒーカップにソーサーを使っていた。勿論、皿も。僕たちは割ってしまうのを恐れて紙コップに紙皿だった。リースしたコーヒーサイフォンも雀さんが「気をつけて使いなさいよ。壊したらダメだからね。絶対に壊したらダメだからね。だからなに壊す真似してるのよっ。気をつけなさいっつってんでしようが！」と何度も念押ししていたものだ。

「コーヒーもなかなかですね」

「そう？」

ひと口飲んでコーヒーの味に満足していた僕とは反対に、佐伯さんは少し微妙な顔をしていた。そういう感想だから、声のトーンをやや落としながら言う。

「わたしは弓月くんが淹れてくれたやつのほうが好きだけだな」

それは個人的な好みでの優劣ではないだろうか。このコーヒーは明らかに味に拘るコーヒー好きが淹れたもので、これを不味いという人はいないだろう。ただ単に佐伯さんが僕のコーヒーのほうが好みだったというだけのことだ。

「弓月くんって、いつからそんなにコーヒーが好きになったの？」
テーブルの向かいでカップを手にしたまま、佐伯さんが聞いてきた。

「さあ、いつからでしょうね」

僕はマーブルケーキにフォークを刺し込みながら、曖昧な答えを返す。

これは誤魔化しているわけでも何でもなく、本当に覚えていないのだ。たぶん、何かきっかけがあったと思うのだが、果たして何だっただろうか？ 記憶の糸を手繰りながら、マーブルケーキを口にする。甘さひかえめのさっぱりした味で美味しい。が、しかし、僕の記憶を刺激するほどではなかった。

しかし、佐伯さんはそんな僕の返事を気にした様子はなく。

「やっぱり弓月くんのコーヒーのほうがいいな」

やはり感想は揺らがないようだ。

「せっかくだから将来、喫茶店とかカフェとかやってみたらどうかな？ わたしも手伝えるように頑張るし」

「それはまた夢のある話ですね。でも、そんな資金がどこにありますか」

僕は無情にも現実を突きつける。

「それにそういう冒険的なことをして、父を心配させたくありません」

父はただのサラリーマンではあるがそれなりに高給取りで、僕にもゆーみにも私立高校という選択肢を与えてくれた。僕に至ってはこうしてひとり暮らしもさせてくれている。金のかかる長男だ。父には感謝している。

「まあ、普通に国公立の大学に進んで就職、でしょうね」
「うわ。現実的」

「その昔、親にはずいぶんと迷惑をかけましたからね」
尤も、それは今でもかもしれないが。

「何かあったの？」

「こつ見えて実は、中学3年の一時期、荒れていたんですよ」

「嘘お!？」

「本当です」

目を丸くする佐伯さんに、僕はきつぱりと返す。

当時は授業に出てもらうくに話は聞かず、先生の注意も無視。やり場のない感情を抱えていたからやたらと喧嘩っ早くて、素行の悪い筋金入りの不良生徒とよく衝突していた。おかげで毎日生傷が絶えなかったものだ。

「……でも、それも一ヶ月と続きませんでしたけどね」

ある日、先生から父がわざわざ学校に「しばらくそつとしておいてやって欲しい」と頼みにきたことを聞かされ、それを機にバカなことはやめることにした。もともと親に迷惑をかけていることは自覚していたし、頭の隅ですつと気にもしていた。結局、僕はそういうのに不向きな人間だったようだ。

「そついうところは弓月くんらしいよね」

「そうですね」

今でも喧嘩っ早い性分の名残はあるが。

因みに、それを境に今の僕の個性が決定したのだが……いや、それを言うなら今も迷走中か。

佐伯さんは僕の昔のことを聞いて、驚き、笑いはするが、その原因までは尋ねようとしなかった。きつと話したくなさそうな空気を察したのだろう。よくわかってくれている。

「そつか。じゃあ、喫茶店の夢は諦めて、ひとまず堅実、且つ、幸せな家庭、かな? あ、でも、わたしも大学にはいくつもりだから、学生のうちに結婚はしておきたいな。学生結婚は憧れのひとつだし」

「そんな先の話をしていないで、食べ終えたのならそろそろ出ましよう」

「……人の話を聞け、コノヤロウ」

コーヒーもマーブルケーキもなくなったのを見て立ち上がると、佐伯さんに睨まれてしまった。……これでもちやんと聞いているとは思っのだが。「先に相手を見つけてみましょう」などと言わない程度には。

4(3)・「自分が変なことくらい自覚しています」

コーヒを飲み終え、3号館から教会広場へと出ると、いきなり声をかけられた。

「その髪の毛のきれいな彼女」

またナンパだろうか。それにしても横に男がいるのにおかまいなしとはいいい度胸だ。

振り返れば、明らかに僕らより年上の男が。ここの学生だろうか。髪も服装も最新のファッションで固めたようなスタイルだが、ところどころ自分なりにアレンジした部分がある感じだ。ただ単に流行に乗るだけのモード系よりは好感が持てる。人間としてもそこまで悪くはなさそうだが。

「行きましよう、佐伯さん」

それとこれとは話が別だ。ナンパにかまってやる理由はない。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。話だけでも聞いてくれないか」

しかし、それでも彼は食い下がる。

「実は3時からメインステージでヘアメイクコンテストがあつて、それに協力して欲しいんだ」

「ヘアメイク、ですか？」

佐伯さんがその珍しい単語に反応し、踏み出しかけた足を止めた。彼が説明するには、この教会広場のメインステージで組まれているイベントとして、今言ったヘアメイクコンテストがあるらしい。ただし、ウィッグを使うのではなく、当日、つまり今日の来場者の中からモデルを見つけるのがルール。彼はそのモデルを探していて佐伯さんを見つけたというわけだ。

なお、彼はこの大学の学生ではなく、ここと経営母体が同じの理容美容の専門学校生徒なのだそう。このコンテストは姉妹校ならではの毎年の恒例行事とのこと。

話はわかった。

「悪いけど他を当たってもらえますか」

でも、そんな面倒なものに協力してやるほど暇ではない。僕は今度こそ彼を振り切って、この場を後にしようとした。

「あ、でも、わたしちよつと興味あるな」

ところが、佐伯さんの反応は僕と違っていた。

「佐伯さん」

「いいじゃない、それくらい協力しても」

よくない　と、危うく言いかけて言葉を飲み込む。彼女を差し置いて僕が決めることではない。

「まあ、この後特に何か用があるわけでもありませんが」

明確な了承の言葉を口にせず、不承々々そう言うのが精一杯だった。

「じゃあ、そんなわけで　いいですよ、わたしでよければ。あ、

でも、ハサミはNGでお願いしますね」

「わかった。その約束は守るよ」

横で聞いていた僕は、密かに胸を撫で下ろす。美容師の卵なのかもしれないが本職でもない人間に佐伯さんの髪を触らせた上、カットまでさせるなんて冗談じゃないと思っていたのだ。

「それじゃ、行こうか。あ、よかったら彼氏も一緒に。控え室は参加者全員共同だからふたりだけになることはないんだけど、心配なら横で見えてくれてもかまわない」

彼はそう告げると、僕たちを案内するように先を歩き出した。言われなくてもそのつもりだ。僕は佐伯さんと並んで後ろをついていく。

「心配だった？」

隣から小声で聞いてくる佐伯さん。

「……別に」

「嘘ばかり」

笑われてしまった。

「……」

冷静に自己分析をするに、実際、心配していたわけではないだろう。そう、これはもっと別の感情だ。

ヘアメイクコンテストの控え室は、メインステージのほぼ真後ろになる2号館の中にあつた。彼が言っていたように大部屋で、各参加者があちこちで自分が選んだモデルの髪をセットしていた。特殊な技術の必要なコンテストだけに、参加しているのは十名足らずというところのようだ。

例の彼もさつそく様々な種類の櫛を器用に操りながら、試行錯誤しつつ佐伯さんの髪をセットしていく。間、ふたりは楽しそうに言葉を交わしていた。その辺りの話術も将来の美容師には必須のスキルなのだろうな。

僕はそれを少し離れたところで見ていた。ひどい顔をしていそうだな、と我ながらに思う。

30分以上もかかって作業が終わつた。

彼女の長い髪は結び上げられ、完成形は左右非対称。アシメトリー先鋭的、且

つ、前衛的なものができ上がるかと思つたのだが、なかなか実用的だ。

これをセットした彼は佐伯さんのもとを離れていった。イベントの進行に関して運営側からの説明があるようで、他の参加者とともに部屋の一ヶ所に集まっている。僕は佐伯さんに寄つていった。

「あ、弓月くん、これどうかな？」

彼女はイスに座つたままこちらに向き直り、見上げてくる。

「そうですね　ひと言で言うなら、外人が考えた外人モデルの芸者ガールというところでしょうか」

「うわ、ひど」

確かにひどいな。素直に褒めればいいものを。

「じゃあ、僕はそろそろ外に出ます。ステージはちゃんと客席から見えていますので」

「うん」

頑張れ、という応援がこの場合適切なのかどうか悩ましいところ。僕は出入り口に向かおうとして、その足を止めた。

「ああ、そうそう。その髪、よく似合ってますよ」

佐伯さんは嬉しそうに笑ってくれた。

「では、まずはお名前からお願ひします」

「佐伯貴理華です」

佐伯さんは司会の学生からマイクを向けられ、落ち着いて答えた。

へアメイクコンテストはほぼ予定通りの時間にはじまった。

先にモデルが登場し、インタビュー。その後そのモデルを手がけた若き美容師の卵に質問、という流れだ。佐伯さんたちの出番は4番目。当然のように彼女が出てくると会場が沸いた。盛り上げ役を自任したようなお調子ものが口笛を吹いたりもした。

ステージの前に用意された客席の数はおまけ程度のもので、僕は多くの観客とともに立ち見をしている。

「学校はこの近くですが、どこかは内緒にさせてください」

「そうですね。そうしておきましょう。男どもが押しかけたら学校に迷惑ですから」

佐伯さんの冗談めかせた受け答えと司会者の返しに笑いが起こる。

「では、どういった経緯でここに？」

「はい。彼と一緒に遊びにきていたら、間宮さんに声をかけられたんです」

間宮というのは、佐伯さんの髪をセットした彼のことだ。

「おっと、彼氏とききましたか。その彼氏は今どこに？」

「勿論、見てくれています」

瞬間、僕はどきつとした。そこにいますとか言っ指を差したりするんじゃないだろうな。

「でも、それも内緒です。注目されるのは苦手な人ですから」

しかし、すぐに佐伯さんはそうつけ加え、僕は安心した。

「わあかりました。そうしましょう。個人的には！ 個人的には見つけ出して吊るし上げたくて仕方ありませんが！」

また客席に笑いが巻き起こった。司会者が私情を挟むなよと思うが、これも場を沸かせるためのテクニクのようなのだ。

「では、次に彼女を手がけた間宮君に出てきてもらって、話を聞きたいと思います。間宮君、どうぞ」

その後、一転して真面目にイベントを進行させる。そうやってうまく使い分けて、イベント自体を盛り上げていくのだろう。

しかし、僕は司会者の意図とは裏腹に、あまり盛り上がっていなかった。

帰り道。

時計の針はもう5時を回っていた。

日中はこの時期にしては破格に暖かったものの、気温と日没は関係ない。11月の中旬という曆に相応しく、辺りはもう薄暗くなりはじめていた。

「まさか優勝するとはねー」

隣を歩く佐伯さんは上機嫌。彼女の言葉通り、ヘアメイクコンテストは間宮・佐伯組の優勝で幕を閉じたのである。気に入ったのか、彼女の髪はまだそのままだ。

「別に君が何かしたわけでもないでしょうに」

一方の僕は、相も変わらず愉快的気分とは言い難かった。

「それくらいわかってるよ、もう」

苦笑する佐伯さん。

「間宮さん、上手だから。ああいう人が将来、カリスマ美容師なんて呼ばれる人になるのかもね」

「さて、どうでしょうね」

僕はまたも言い返す。ああ言えばこう言う状態。

「今日優勝したのだから、モデルがよかったからかもしれませんよ。会場も佐伯さんのときがいちばん盛り上がっていましたから」

「えー。そう言ってくれるのは嬉しいけど、審査員の人はそういう個人的な好き嫌いははさまないと思うけどなあ。……ていうか、弓月くん、さっきと言ってること反対になってるよ?」

「……」

確かにそうらしい。

「今日の弓月くん、ちょっとヘン」

そんな僕を見て、彼女は指摘する。

「……わかってますよ」

「え?」

「自分が変なことくらい自覚しています」

思えば今日はずっとおかしかった。さすがにここまできたら認めざるを得ない。

「正直に言います。僕は今の佐伯さんの髪形が好きではありません。勿論、似合っているとは思いますが。でも、僕が好きなのは君の長い髪が光りながら揺れているところなんです」

だから、例えそれが未来のカリスマ美容師の手によるものだとしても、例えそれがよく似合っているとしても、僕はそれが気に喰わない。

急に、佐伯さんがぴたりと立ち止まった。

「どうしたんですか?」

遅れて足を止めて問う僕の前で、佐伯さんは自分の頭に手を伸ばし、そこからヘアピンを一本引き抜いた。

途端、結い上げていた髪が流れ落ちる。まるで重力を感じさせない、ゆっくりとした動き。

佐伯さんは、今度は両手で髪をかき上げ、再度自然に落とした。後は軽く首を振って揺らせば、それだけでもと通りだ。「……ふう」と解放感を含んだため息をひとつ。

あの髪がヘアピン一本で保たれていたことも驚きだが、今の一連の動作だけきれいにいつものかたちに戻ってしまう佐伯さんの髪にも驚きだ。きつと丁寧に手入れしているのだろう。

「確信した」

と、佐伯さん。

「弓月くんって髪フェチ」

「……」

また人聞きの悪いことを。誰のでもいいというわけではない。

「いや、それよりも……いいんですか？」

「いい。弓月くんが好きじゃないなら意味がないから。……まあ、ちよつともつたいたない気持ちもあるけどね。もう一回自分でやれつて言われても、うまくできそうにないし」

そう苦笑して佐伯さんは再び歩き出した。僕も足を踏み出し、その横に並ぶ。

「仕方ないから、弓月くんには帰ったら好きなだけ触らせてあげる」

「そこまではけっこうです」

あまりにも魅力的な申し出ではあるが。

「それに僕が変なのはもつと別の理由ですよ」

佐伯さんの隣で、僕は訥々と言葉を紡ぐ。

「僕は佐伯さんが好きです」

「え？　そ、それは前にも聞いた、かな」

彼女の困ったような、照れたような声。

「そうですね。僕にも覚えがあります。でも　今は、君を誰にも取られたくないと思う。どこにも行かないでほしいと思う。そういう気持ちがあるにも抑え切れないんですよ」

話しているうちによりやく気がついた。これは独占欲だ。

ナンパ男に腹を立てたり。

間宮という美容師志望の学生に不機嫌になったり。

要は単なる独占欲。こんな子もつぽい僕を佐伯さんはどう思うのだろうか。

意外なことに彼女はすぐには何も言わず、しばらく歩いてからよりやく口を開いた。

「わたしもね、そんなときがあった。もしかしたら今でもそうかも

しれない。だからその気持ち、よくわかるな」

「そう、ですか」

「うん。だからさ」

不意に佐伯さんは小走りに駆け出し、行く手を遮るように僕の前に立った。

「ん」

目を閉じ、顎を上げて口を突き出してくる。

は？

今ここで、か？

「んっ」

いきなりのことに戸惑っていると、佐伯さんは催促するよつに一度踵を上げて、下ろした。

思わず周囲を確認する。道程はすでに住宅街の中に入っていて、周りに人はいない。話しているうちにすっかり日も暮れて、辺りはもう暗くなっていた。

状況は許す、らしい。

僕の中の独占欲が僕自身を突き動かす。

僕は佐伯さんの前に立ち、その肩にそっと手を置き　そして、唇を重ねた。

やわらかい感触。

それをもつと感じたくて、僕はさらに彼女を要求する。彼女もそれに応じ、逆に求めてもきた。

「ん、や、はあっ」

途中、彼女が苦しそうに喘いだ。しかし、すぐに僕はその唇をまたふさいだ。

気がつけば僕らは指をからませて、手を握り合っていた。

……。

……。

……。

そして、

「長っ！」

佐伯さんが僕を突き飛ばすようにして飛び退いた。のだが。
直後。

彼女の動きが止まり、一拍おいてから体が傾きはじめた。僕は咄嗟に地を蹴り、それを受け止め支える。力なく僕にもたれかかってくる佐伯さん。

「ふにゃあ」

何やらその口から妙な音がもれた。

「ど、どうしたんですか？」

「のぼせた……」

「……」

僕が悪い、のだろうな。

「歩けますか？」

「あ、うん。たぶん大丈夫」

どうにか自分の足で立って歩き出す佐伯さん。顔が火照っているのか、手でパタパタと扇いでいる。彼女は空冷式らしい。

「ほんとに今日の弓月くんヘン。いつもはこんなにしらないのに」

「ちゃんと反省してますよ」

自分でも少々驚いている。隣では「……別にいいけど」などと佐伯さん。

「ね、帰ったら続きやろうか？」

「自重と自戒のためにも、それは遠慮しておきます」
まあ。

兎にも角にも、やり直し学祭デートはこれで終わりだな。

「えー。わたし、してほしいことがあるのにい」

「……」

選択肢ひとつ誤ったら延長戦に突入しそつではあるが。

5 (1) . 「父です」

月曜日の朝。

「おはよう、弓月くん」

佐伯さんの呼ぶ声に目を覚ませば、すでに彼女の顔が目の前にあった。ノックの音や、彼女が入ってきた音にまったく気がつかなかったようだ。そんなギリギリまでよく眠っていたものだ。

「……おはようございます」

「うん、おはよう」

太陽のように笑う佐伯さん。

それから彼女はベッドを離れ、カーテンを開けた。差し込んでくる早朝の陽射しが目にまぶしい。

「朝ごはんできてるよ」

「……わかりました」

僕は体の上の布団を押しわけ、上体を起こした。少し寒い。12月ももう目の前なのだから当然か。佐伯さんの部屋着も季節に合わせて長袖のフード付きパーカーになっているが、ボトムのはうはなぜか相変わらずショートパンツだ。脚のラインがきれいで目の保養ではあるが、今は見るからに寒い。

「あれ？」

と、佐伯さんが何かを見つけたように声を発した。

「これ止まってない？」

それはベッドの宮に置いてある目覚まし時計だった。アナログの文字盤のオーソドックスなもの。その笑ってしまうほど古典的なデザインが気に入って買ったのだ。しかし、現在針はストライキ状態で、はたらくことを拒否している。

「電池切れ？」

「いえ……」

そんな一時的なものではない。

「前に落としたときに壊れてしまったようです」

僕の口調は自然と早口になる。

佐伯さんは「前？」と首を傾げていたが、程なくしてその顔が赤くなった。

「あ、あー、そうなんだ……」

それがいつのことか思い当たつたらしい。お互いいろんな意味であまり思い出したいくない出来事だ。

「じゃ、じゃあさ、新しいの買いに行こうか、今日」

気を取り直すように言いながら、彼女は僕の勉強机のイスを引っ張り出し、背もたれを抱きかかえるようにして座った。

「新しいの、ですか？」

しかも、今日ときたか。

目覚ましが壊れたからといって、特に困ることもないのだが。文字通りの目覚ましとしては使ったことがないし、時間の確認なら首を巡らせれば壁掛け時計がある。

「そうですね。また君が寝坊するかもしれないからね」

「もう。春からもうしてないでしょー」

佐伯さんは頬をふくらませるが、勿論そんなのは振りだけのことです、すぐに笑顔に戻る。

「どんなのがいい？ 最近は録音できるのもあるらしいし、わたしが色っぽい吹き込んであげよっか？」

「やめてください。一日のはじまりにそんなのを聞いたら、体の調子がおかしくなります」

その手のは前にさんざんゆーみに玩具にされて、ひどい目に遭ったことがある。爆発音とか蚊の飛ぶ音とか。ゆーみ自身の声で「……兄さん、兄さん」というのもあったが、あれがいちばん堪えたというのはどういふことだろうか。その辺の怪談より怖い。

「今ここで決めることもないでしょう。店で考えますよ」

「ん、わかった。じゃあ、帰りに駅のショッピングセンターでね。

……さ、ごはん食べよ」

と、本日の予定がさっそく決まっご機嫌の佐伯さんは、弾むよ
うな足取りで部屋を出ていった。

いつもより早めに登校すると、下駄箱から少し行ったところにあ
る保健室の前で、養護教諭の藤咲先生と出くわした。

「あら」

僕と佐伯さんに気づく。

スーツに薄手のコートというスタイルで、今まさに保健室の鍵を
あけようとしているところを見るに、出勤してきたばかりか。

「おはようございます」

「おはよう」

藤咲先生は手を止め、こちらに向き直って僕らを見た。

「今日もふたり仲良く一緒に登校ね」

先生には前に僕と佐伯さんの家が近いと言ってあるが、単にそれ
だけでなく僕らがどうい関係に至ったか知っているのだろう。保
健室に多くの生徒が出入りするのもあるが、生徒にとって話しやす
い先生だという理由も大きい。藤咲先生のもとにはいろんな情報が
集まってくるのだ。

「不思議なものね。こう言っちゃ何だけど、弓月君がここまでモテ
る子だと思わなかったわ」

「正直、僕にも不思議ですけどね。でも、佐伯さんに関して言えば、
ある種のインプリンティングだと考えれば、ひとまず納得できるの
ではないでしょうか」

「なるほど」

と藤咲先生は納得しているが、

「人をひよこみたいにゆーなっ」

「痛っ」

佐伯さんには脇腹をつねられてしまった。

「ああ、でも、大丈夫ね。これはこれでお似合いよ」

「……」

笑いながら言われても説得力に欠けるのだが。

「ここからは保健体育の先生としてだけど　何か相談ごとがあればいつでもきなさいね」

「は？」

「困ったこと」という意味だけじゃなくて、わからないことや真面目な質問にもちゃんと答えるから。いちばんいけないのは行為そのものよりも、知識がないことや間違っていることよ」

先生としては、中高校生あたりがいちばん注意すべき年頃なのだろうけど、しかし、これは……と、返答に窮してしまつた。

と、そこで答えたのは佐伯さん。

「大丈夫です。弓月くん、がっかりするほどそんな素振りはありませんから」

「……優等生なのに大胆なことを言うわね……」

藤咲先生も引き気味である。

「まあ、ないのならないで、そのほうが高校生らしくていいわ。学生の本分は勉強よ」

「そうですね」

「それじゃ失礼します」

僕と佐伯さんはそれぞれ頭を下げ、保健室前を後にした。少し歩いて、

「優等生だつて」

佐伯さんが可笑しそうに笑う。

「いったい誰がでしょうね」

「大丈夫。学校ではちゃんと優等生だから」

まあ、そこは認めるところではある。ひかえめながら明るくて華やかな美少女。それが佐伯貴理華だ。

「学校では、ね。それが家では……」

「ちよつとえろいのです」

「……」

まったく呆れるばかりだな。

「昨日の弓月くんはステキでしたー」

「君、学校で変なことを口走らないように」

周りに誰もいないからいいようなものの。

そして、何より問題なのはそれが冗談でも何でもなく、本当のことだという点だろう。詳しくは省くが、昨日家に帰ってからまたいろいろあったのだ。それもこれも帰り道、僕が彼女を焚きつけてしまったせいなのだろうけど。

だんだん自分の自制心に自信がなくなってきたな。

尤も、改めて思えば、そんなもの最初から持ち合わせていなかったのかもしれない。僕は苛立ちまぎれに暴れていたような人間なのだから。

昼休みになって僕のところに来てきたのは雀さんだった。その後ろには「やれやれ」といった様子の宝龍さんがいる。あまり乗り気でない彼女を、雀さんが牽引してきたのだろう。

そのとき僕は、僕にとってメインの話し相手である矢神もおらず、借りたばかりの漫画に見るともなしに目を通して最中だったが、彼女が近づいてくることには気がついていていた。

「ふっふっふっ……って、何それ？ 漫画？」

何やら勝ち誇ったように笑いながらやってきた雀さんは、僕が読んでいるものを見て声を上げた。

「借りものですよ」

「なんだっていいんです。そんなもの読んでないで勉強しなさい、勉強を」

委員長口調の雀さん。

「昼休みくらい好きにさせてください。教科書や文学全集を読んでもらうほうが偉いわじゃないでしょうに」

因みに、これは滝沢が貸してくれたものなのだが、それを知ったら雀さんはどんな顔をするだろうか。

滝沢はあれでけっこう漫画好きだ。本屋に入って気になる本があ

ると、すぐにそのままレジに持って行ってしまふのだ。面白かったら翌日頼みもしないのに貸してくれる。何も言わなかったら、それはハズレだったということだ。

「だいたい、僕が小説を読んでいたって、それはそれで何か疑うんじゃないですか」

「……弓月君ならいやらしい小説でも、カバーをつけて堂々と読んでいそうね」

「……」

彼女の中の僕とは、いったいどんな人間なのだろうな。

雀さんの後ろでは、宝龍さんがこのやり取りを聞いてくすくす笑っている。

「それで、何か用ですか？ さっき九蓮宝燈をテンパったみたいな何やら気持ち悪い笑い方をしていました。うっかりアガって死んでも知りませんよ」

「……九蓮宝燈はよけいよ」
「気持ち悪いほうはいいのか。」

「それはそうと 昨日、佐伯さんとデートに行ったでしょう？」

「そりゃあ彼女とは曲がりなりにもつき合っていますからね、それくらいはしますよ」

「しかも、大学の学園祭で」

ん？ ああ、なるほど。そういうことか。
「情報源はいつたいどちらで？」

「それは内緒です」

ふふん、雀さんは鼻で笑う。どうも人の弱みを握って強気になっているようだ。……別に弱みでもなんでもないが。

「相変わらずおアツいことね。彼女がステージに上がって鼻高々だったんでしょ？」

ずいぶんと詳しいな。よほど確かな情報源を持っていると見える。ふと僕は昨日のことを思い出した。

ステージの上にいる佐伯さん。髪は未来のカリスマ美容師の手で

きれいにセットされ、司会者のインタビューに少し照れながらも、しかし、物怖じせずには答えていた。皆、彼女に注目していた。

果たしてあのときの僕は、彼女を誇らしいと思っていただろうか。

「……別に」

僕の発音は、自分でも意外なほど硬質なものになっていた。

「え？ ああ、そう？」

雀さんが目をぱちくりさせている。しかも、宝龍さんのほうはそれ以上の何かに気づいたようだ。

失敗したな。

僕は雰囲気をもとに戻すべく次句を継いだ。

「わざわざやつかみにきたわけじゃないんでしょう？ 用件は何ですか、ナツコさん」

「あ、ごめん。そうだったわ」

彼女は『やつかみ』にも『ナツコさん』にも触れず、本題に移ろうとする。僕の態度がずいぶんと雀さんの調子を乱してしまったようだ。

「今日の放課後んだけど、みんなで遊びにいかないかなと思って一ノ宮のほう。弓月君は遠回りっていうか、わざわざ足を運ぶことになるけど」

「ああ、いいですね」

たぶんみんなというのはここにいる僕を含めた3人と、後は滝沢と矢神だ。いつものメンバー。きつとうまく都合がつきそうなのだろう。

「でしょ？ まだ具体的にどこに行くかは決まっていんだけど。テキストにぶらぶらと」

「残念ですが、僕はパスです。今日は佐伯さんと約束がありますから」

「なに、まだデートし足りないの？」

言葉を遮るようにして即断即決で断った僕に、雀さんのヤブ睨みが飛ぶ。

「ほつといてください。それにただ一緒に目覚ましを買いにいくだけですよ。部屋の目覚ましが壊れてるのを彼女に見られましてね」「なんでそんなことをあの子に知られるのよ」

「何やら戦慄する雀さん。だいたい何を考えたか想像はつくが。」

「そりゃあ高校生らしいつき合い方をしてるからでしょう」

「不潔だわっ」

「おや、僕は『高校生らしい』と言っただけですよ。雀さんの『高校生らしい』はなかなかオトナですね」

「すぐに彼女は引っ掛けられたことに気づき、怒りのあまりみるみるうちに顔を赤くした。落ち着いて考えれば、僕だってオトナだっししか言っていないのだ。」

「行きましよう、宝龍さん。弓月君なんて金輪際誘うことありませんよ」

しかし、冷静さを欠いた雀さんにはそう言い放ち、歩調も荒く帰っていった。ちよつとからかいすぎたか。委員長体質で真面目だからな。ほとぼりが冷めたところに謝っておこう。

問題はこつちだ。

雀さんが去った後も残っているお方がひとり。宝龍さんだ。

「恭嗣、何かあったの?」

「何かと言いますと?」

「らしくない態度があったわよ」

言いながら彼女はひとつ前の席　今は部室に行つて不在の矢神の席に腰を下ろした。やはり見抜かれていたか。

「その言葉のままですよ。どうにもらしくないコンディションのようです、今の僕は」

僕は確認するように気持ちを吐露していく。

「どうやら僕は自分で思っていた以上に欲張りな人間だったみたいです。争わず欲しがらず　『無欲の勝利』が僕の座右の銘だったはずなんですけどね」

「立て続けに私とあの子とつき合つた恭嗣が言つと、無欲の勝利も」

なかなか説得力があるわね」

「……」

……いや、冗談だったのだけどな。

それは兎も角。

「昨日、雀さんが言ったように佐伯さんはちょっとしたイベントでステージが上がったんですよ。そのときの僕が鼻高々だったかというと、ぜんぜんそうじゃなかった。内心では、そんなところにいなくて僕に近くにいる欲しい、誰にも渡したくないと思っていましたよ」

「それって独占欲？」

「でしょうね」

そこはもう自覚している。9月から10月にかけてのあの件の反動が、ワンテンポ遅れて今ごろになってやってきたのだろうか。

宝龍さんは小さく笑ってから、

「恭嗣もようやくあの子に追いついたっていうことかしらね」

「……」

知らなかったな、僕は今まで佐伯さんに後れをとっていたのか。

まあ確かに、子どもっぽい独占欲が未熟さの表れであるとは一概に言えないのかもしれない。少なくとも愛情をろくに表現しない男よりは上位か。

「それで、今日は本当にパス？ ナツコ、怒って行ってしまったわよ？」

「申し訳ありませんが、もうしばらくは佐伯さん優先になりそうですよ」

「そう。仕方ないわね」

呆れ気味に言って、宝龍さんは立ち上がった。

そして、

「自覚してる？ あなた、ずっと前からあの子が最優先よ？」

……それは、初耳だな。

そのまま無事に放課後を迎え、先にきて待っていた佐伯さんと昇降口で合流した。

彼女は朝と変わらぬ生き生きとした笑顔を見せてくれる。一方の僕はというと、きつと6時間の授業を終えて疲れ切った顔をしているのだろうな。

「ついでだから晩ごはんの買い物もしていこっか」

「そうですね」

道々話しながら、ごく間近の予定が決められていく。

「弓月くん、何かいいことあった？」

「え？ いえ、別に。どうしてですか？」

「なんか楽しそうだから」

「……」

これはまた重症だな。

と、そのとき、スラックスのポケットの中で携帯電話が振動し、着信があったことを告げた。取り出してサブディスプレイを見てみる。音声通話だ。相手は、

弓月篤嗣

父だった。

「誰から？」

僕が変な顔でもしていたのか、横から佐伯さんが聞いてきた。

「父です。妙な時間にかけてくるものだと思います。……もしもし」

通話ボタンを押して電話に出る。

『ああ、恭嗣か？ すまないな、こんな時間に』

「いえ。こちらはもう学校は終わっていますから。父さんこそいいんですか。まだ仕事中でしょう？」

歪んでいる僕は、母に対してはあんな態度でも、父とは普通に話す。

父、弓月篤嗣は別段ユーモアがあったり話し上手だったりはしないが、真面目な性格で子どもともちゃんと向き合って話をしてくれ

る人だ。こんな僕をここまで育ててくれ、一時期荒れていたときも見限るようなこともしなかった。僕は父を尊敬し、感謝している。

そんな真面目な父の就業時間中の私用の電話を珍しいと思いい、同時にこっさりやっているのかと思うと少しおかしかった。

『それなんだがな、』

父は声を硬くして、こう告げた。

『悪いが今から言う病院にすぐにきてくれないか。詳しいことは後で話す』

5(2)。「……僕はもうここにはこない」

「病院？」

父からの電話を切った後、簡単に今の話を説明すると、佐伯さんはそう聞き返してきた。

「とりあえず言われた通りにしようと思います」

「わたしも一緒に行つたほうがいい？」

心配そうに尋ねてくる。

僕は彼女がそう言い出した意図をすぐに理解した。きっと何かあったための。例えば身内の不幸が待っていた場合に、僕のそばにいてくれようとしているのだらう。

「たぶん大丈夫です」

彼女の気遣いに僕は笑って答える。

父はそういう人ではない。あの人は隠しても無駄なことを、わずかな時間稼ぎのために黙っているようなことはしない。仮に家族に何かあったとしても、現時点でわかっていることをちゃんとおしえてくれるはずだ。

ありそうな事態としては、父に末期ガンが見つかって、それについて電話ではなく面と向かって話したかった、というものだらう。それはそれである人らしいと言える。

「何かあつたら電話してね？」

「わかりました」

歩きながら話しているうちに交差点に差しかけた。

「悪いのですが、鞆を持って帰ってもらえますか？」

「あ、うん。サイフはちゃんと持ってる？」

サイフならいつもポケットに入れているのだが、改めてスラックスの上からそれに触れて「ちゃんと持っています」と返した。

そうしてから鞆を預け、その交差点で彼女と別れた。

僕は真っ直ぐ駅へ。佐伯さんは左に折れて家へ。

佐伯さんは僕が駅のほうへ歩いていくのを見送ってから、横断歩道を渡ったようだった。

父から指定された病院は少々遠かった。

学園都市から30分ほどかかる一ノ宮に出て、そこからさらに電車をふたつほど乗り継いだ大学病院。

そして、そこは同時に我が家からも遠く、家族が利用するには不自然だった。そのことから父は勿論のこと、ゆーみや母に何かあったとは考えにくかった。だからこそなぜ僕がそんなところに呼ばれたのかがわからなくもあるのだが。

夕方のラッシュ前のまだ空いている電車の中、シートの端に座りながらふと父のことを考える。

（ああ、そう言えばひとつだけ例外があったな）

そうだ、まだおしえてもらっていないことがある。僕はもう知っている、そして、父も僕がすでに知ってしまったことに気づいているであろう事実。父はどうするつもりなのだろう。いずれ僕に話すつもりなのか。それともこのまま黙っているつもりなのか。

（きつと父さんも困っているのだろうか……）

大学病院に着いたころにはすっかり日も暮れていた。

途中で一度父から病院のロビーで待っているとのメールがあり、僕からはだいたいの到着時間を計算して返信しておいた。

ロビーを見回してみる。

2階まで吹き抜けの構造になっていて、清潔感と洒落た雰囲気があった。初診・再診の受付や計算などの窓口を構えたカウンタに、自動清算の機械が並んでいるが、見ようによってはホテルのロビーのようでもある。しかし、もう時間が時間だけに人の姿は疎らだった。

「恭嗣」

すぐに僕を見つけ、父が寄ってきた。会社から直接ここに足を運

んだらしくスーツ姿だった。

父の印象は、残念ながら特にこれといった特徴のない人、というのが正直なところだろう。若いころから文学の研究者のような老成した雰囲気があり、最近になってようやく年のほうがそれに追いついてきた。しかし、この人をこの人たらしめているのは、その人柄にあると僕は思っている。多弁ではないがちゃんと向き合って話してくれる誠実さと、ずっとひとつの企業に勤めてきた忠誠心と勤勉さを持ち、健全な家庭を作ろうと努力してきた人だ。これらは口で言うほど簡単なことではないだろう。

僕は父のようになりたいと、いや、息子として誰よりも父に似たいと、ずっと思い続けている。

「すまないな。急に呼び出したりして」

「それはかまいませんが、いったいどうしたんですか？」

「まあ、とりあえずついてきてくれ」

父は言いにくそうにそれだけ言って、先導するように歩き出した。珍しくそんな態度だったもので、僕も黙って後をついていく。次に父が口を開いたのは、乗り込んだエレベータの扉が閉まったときだった。行き先として押したのは5階のボタン。上昇をはじめると体に軽い圧力がかかった。

「お前に会ってほしい人がいるんだ」

「僕に、ですか？」

「いまいち事態が飲み込めず、僕は聞き返す。」

「ゆーみは？」

「いや、お前だけでいい」

「じゃあ……」

と言い淀んでいると、父が次にくる単語を予想して答えてくれた。「母さんも呼んでいない。それとこのことは母さんには言わないでくれ」

「……」

僕だけが呼ばれ、このことは内緒だと言う。いよいよ意図が読め

なかった。

エレベーターが止まった。降りると目の前にはナースステーション。階の数からして行き先は病棟だろうと予想していたが、ここが内科病棟なのか外科病棟なのか、はたまた眼科病棟なのか。それを判断するわかりやすい材料は見当たらなかった。

父がそうしたのを真似て、僕はナースステーションに詰めている看護師たちに軽く会釈をしてその前を通り過ぎた。面会者の記帳のようなものはいらないらしい。

少し歩いたところにある病室が終着点だった。4人部屋で、ネームプレートには僕の知らない名前ばかりが書いてあった。

「顔を見せてあげるだけでいい」

そう言った父と一緒に病室へ入る。

「左の窓側だ」

手前の廊下側にいる入院患者に軽く頭を下げながら奥へ進む。間敷居代わりのカーテンが少し引かれていて、ブラインドの下りた窓のそばまで行ってやっとベッドを見渡すことができた。

ベッド周りのサイドボードや戸棚にはタオル類や替えの寝巻き、ブックカバーのついた読みかけの本などの雑多なものが置かれていて、入院生活の長さが窺える。

ベッドにはひとりの男性が眠っていた。

父よりいくらか若いくらいの人。しかし、ずいぶんと痩せている。いや、やつれていると言うべきか。そして、何より 死の匂いがした。

初めて見る人だ。

だけど、僕にはこれが誰かわかった。

わかってしまった。

「父さん、この人は……」

「私の友人だよ」

「……」

何を言っているんだ、父さんは。

「よく恭嗣の話をしていたら、彼がお前に会いたいと言ってくれな」

そうじゃなくて　　と言おうとしたとき、ベッドの男性が薄く目を開いた。力のない、焦点も合っていないような目で父と僕を見、そして、少しだけ笑った。

「ああ、きてくれたんだね。……ありがとう」

消え入りそうな声でそう言い、改めて僕を眺めて満足げに二度三度うなずくと　　静かにまた目を閉じた。

「父さん！」

僕は慌てて隣の父に目をやった。

「大丈夫だ。眠っているだけだ」

見れば体を覆う掛け布団の胸の辺りが弱々しい寝息に合わせて、かすかに上下していた。ほっと胸を撫で下ろす。

「見ての通りだ。今ではもうすっかり体力も落ちてしまつて、眠っている時間のほうが多いくらいだ」

「……」

「さあ、出ようか」

父に促されて、僕は病室を出た。

再びロビーへと場所を移す。

ロビーからはさらに人気がなくなっていた。役目を終えた窓口から順々に閉められていて、10機ほど並んでいる自動清算機も2機を残して電源が切られている。照明もいくらか落とされたようで、きたときよりも暗くなっていた。

僕らはその薄暗いロビーで、並んでイスに座っていた。父の手には缶コーヒーが握られていて、僕の手の中にはミルクティ。自販機で買ったものだ。

「父さん、あの人とはいつから……」

僕は言葉を絞り出すようにして問いかけた。

「ずっと前からだ。友人としてつき合っていた」

「どうしてですか。理解できません。あの人はあの人と一緒に父さんを裏切った人です」

頭が混乱していて、言っていることが滅茶苦茶になっている。ひとつめの『あの人』は今さつき会った男の人。そして、ふたつめは母のことだ。僕はあるときから母のことを『あの人』としか呼べなくなっている。

「やはり知っていたんだな」

父は確認するように聞き返してきた。

「はい」

「中学3年の、あのときか？」

「……はい」

もう一度うなづく。

僕がその事実を知ったのは中三のときだ。真夜中に偶然、父とあの人。母の話を聞いてしまったのだ。口論ではなかった。どうやらそれについてはとうの昔に解決しているらしく、すべてを知った上で許し、受け入れた父に母は感謝しているというふうの、少し特殊ではあるが落ち着いた夫婦の会話だった。

それでも僕にとって大きなショックであったことには変わりなく、自分ことや母のことなど、僕はやり場のない苛立ちを抱えてしばらく荒れていた。

「そうだろうと思っていたよ。お前が変わったのもそれがきっかけなんだろうな。誰とでも他人行儀に話し、時々世の中を遠くから見ているような目をお前はするようになった」

しかし、そういうのは僕には不向きだったようで、荒んだ態度も一ヶ月ほどしか続かなかった。

そして、そのときに僕は歪んでしまった。血のつながった母を許せず、そうでない父に対してはそれまでと変わらず尊敬の念を抱き、それまで以上に父として慕うようになっていたのだ。歪な逆転現象。以来、僕は父と母への接し方と適切な距離がわからなくなり、今のような自分になってしまった。

「それにしても、お前は私に似ず聡いな。私が恭嗣の半分でも周りに気を配っていれば、母さんのことに気づいてあげられただろうに」
「あの人の裏切りにですか？」

「気持ちにだよ」

「……」

そこは自分を責めるところじゃないはずだ。

「父さん。父さんはどうしてあの人と？」

「さあ、どうしてだろうな」

父の声に苦笑が混じる。

「かわいそうだと思ったのかもしれないし、私にも責任があると思つたのかもしれない。当時の私は仕事にばかりかまけていたからな」
「……」

父のことだ、きつと結婚したばかりで、いずれは子どもも作るつもりで、家庭のために仕事に打ち込んだのだろう。

「だから、3人で話し合つて結論を出した後も、彼とは友人としてつき合っていたんだ。お前の姿を見せてやったりもしていたよ」

振り返れば父は僕を誘つて出かけることが多かったように思う。

そのうちのいくつかは、あの人と時間や場所を決めた上でのことだつたのかもしれない。

でも、だ。

「僕は父さんの誠実で真面目な人柄を尊敬しています。でも、こればかりはお人好しだと言わざるを得ません」

百歩譲つて母を許したことは理解できても、これに関してはいくら話しても僕と父は相容れないだろう。

僕は残っていたミルクティを喉に流しこみ、立ち上がった。

「わかってくれ、恭嗣。彼はもう長くない」

「関係ありません」

冷たく、言い切る。

「帰ります。……僕はもうここにはこない」

そうして父に背を向け、病院を後にした。もう二度とここに足を

運ぶことはないだろうと強いて。

6・「誤魔化そうとしても無駄なんですよね」

あれから一週間と少しが過ぎ、暦は12月へと移った。

あの日、夜遅く家に帰つてくると、当然のように佐伯さんに何があつたのかを聞かれ、僕は父の知り合いが入院していたとだけおしえた。嘘ではないが十分とも言えない報告だ。

正直なところを言つと、僕はもうあの人のことは忘れようと思つている。

僕とは関係のない人。

会うべきではなかった人。

だからもう忘れて、僕は僕の日常へと帰ろう　そう毎日自分に言い聞かせている。

「知ってる？　駅のショッピングセンターがね、クリスマスモードになつてるの」

そうして学生の本分として今日も学校へ通う僕の隣で、佐伯さんが話題を振ってくる。

「ええ、知っています。12月の日からみたいです。駅前広場にも大きなツリーが立っていました。まあ、ずいぶんのん気だと言わざるを得ませんが」

先日、電車を乗り換えるときに通った一ノ宮はとくにクリスマス一色だった。どうやら学園都市ではその手の飾りつけは毎年12月に入ってからするようだ。去年も同じタイミングだったと記憶している。

「もうクリスマスかあ」

「その前に期末考査ですけどね」

「むう、嫌なことを」

佐伯さんは不満げに口を尖らせた。

僕はその姿を横目で見て頬を緩める。それから少し視線を上げて、

冬の空に目をやった。

12月に入って一気に寒くなった。11月の下旬はまだちよくちよく 例えば大学の学園祭に行ったあの日のように、暖かい日もあったのだが、それが嘘のようだ。

おかげで僕たちは制服の上に学校指定のコートを羽織っている。僕は黒のロングコート、佐伯さんは赤いハーフコートだ。いちおう華美なものでなければ学校指定のものでなくてもいいのだが、佐伯さん所有のコートは少々ファッショナブルで、学校に着ていくには不向きだった。

因みに、学校指定のものは、これはこれでなかなかデザインのセンスがよく、僕はこれをプライベートなシーンでも着ることが多い。面倒くさがりには便利なアイテムだ。

「あ、そうだ、弓月くん、年末年始はどうするの？」

「ん？」

遠くの空をぼんやり見ていた僕は、佐伯さんの声で我に返る。

「年末年始、ですか？ 実は帰ると言ってしまったんですね、母親に」

母の不安げな様子と、顔見せ程度にしか帰っていない自責の念に負けてそう言ってしまったのだが、今となっては後悔している。あのようなことがあった後なので、あまり帰りたくないというのが正直なところだ。

「あ、わたしもわたしも。お父さんとお母さんに代わる代わる帰ってきなさいって言われた」

苦笑気味に言う佐伯さん。

まあ、それが健全な家族のあり方というものだろう。

「弓月くんはどれくらいの予定？」

「そうですね。大晦日に帰って、正月3日くらいにはこちらに戻ってこようかと」

「じゃあ、わたしもそうしようつと」

僕と同じで帰ることだけ決めて、詳しい日程までは未定だったよ

うだ。

そこで僕はふと考える。安直に大晦日と正月三が日だろうと考えることだったのだが、今あの家に足かけ4日もいるのは少しばかり苦痛かもしれない。

とすれば、

「ああ、もしかしたらもう少し早く、2日の夜にでも帰ってくるかもしれないせん」

「じゃあ、わたしも」

「……」

「……」

「やっぱり元旦に帰ってきます」

「じゃ、それで」

なぜ合わせる？

「……佐伯さん」

「ふに？」

妙な返事が返ってきた。

「自分の考えはないんですか？」

「だってしょうがないでしょー。弓月さんと早く会いたいし、弓月くんがいないところに帰ってきてても寂しいだけだし。だから弓月くんと同じ日に出て、弓月くんと同じ日に帰ってこようと思って」

「……」

すごいな。一回の台詞の中に僕の名前が4回も出てきたぞ。

「まあ、日程を合わせるくらい別にかまいませんけどね。それはまた改めて決めましょう」

「そだね。ていうか、その前にもっと大きなイベントがあると思うんですけどー」

「何かありましたか？ ああ、期末考査ですね」

「だーかーらー」

地団駄を踏む勢いで怒る佐伯さん。

大きなイベントというのは、きつと24日あたりにあるあれのこと

となのдарう。勿論それくらいわかっているのだが、早くから気合を入れて予定を決めるのもどうかという思いがあるのだ。

交差点に差しかかった。

「その話はここまでにしましょう」

「もう」

恨めしそうな視線を向けてくるが、ここは気づかぬ振りをしておこう。

この交差点を渡れば学園都市の駅から学校へ向かうコースに合流する。早くも遅くもないこの時間は少なくない水の森の生徒が歩いていた。人に聞かせられない話はここまでだ。

信号が青になっていているのを見て横断歩道に踏み出すと、その向こうに立ち止まって僕らを待っている生徒の姿が見えた。

「あ、お京だ」

佐伯さんのクラスメイト、少し癖つ毛のショートヘアが特徴の桜井さんだった。

「おはよう、お京」

「おはよー、キリカ。弓月さんもおはようございます」

佐伯さんと手をばちばち合わせながら、桜井さんはこちらにも挨拶をしてくる。

「おはようございます」

ひとり増えて3人で学校へ向かって歩き出す。僕の左隣に佐伯さん、その向こうに桜井さんの並びだ。

「キリカ、教室に着いたら英語のノート見せて〜」

「またかつ。またなのかつ!？」

「いいじゃない。やってるでしょ？ わたしが当たるってことは、キリカも当たるってことなんだからね」

想像するに主席番号順に答えさせる先生なのだろう。

「言っておきますけど、わたしは当たる当たらないに拘らず、毎回ちゃんと予習してます」

「えらい！ さすがわたしのキリカ。その真面目さを少しでいいか

らわけて。……できればわかりやすいかたちで」

朝から元気に、やいのやいのと楽しげに言い合うふたり。見ていて癒されるというか。今は黙ってギャラリイに回っていたい気分だった。

が、

「弓月さん、何かあったんですか？」

佐伯さんの向こうから桜井さんが顔を覗かせる。

「どうしてですか？」

「うーん、ちょっと元気がなさそうに見える、かな？」

「そうですか？ 別にそんなことはありませんよ」

なかなか鋭いな。

「ふっふーん。せっかくだからいいことおしえてあげちゃいますよ」

そう言いながら彼女は、後ろを回って僕の右隣にやってくる。

「キリカと一緒に考えたんですけどね。コスチュームプレイに欠か

せない3条件という」

「こらーっ」

言い終える前に佐伯さんの発音がそれを遮った。普段ふたりでいたい何の話をしているのだろうか。少し頭が痛くなってくる。

「よけいなことを言うんじゃないの！」

今度は佐伯さんが僕の後ろを通り、桜井さんの背中を押す。

「ちよっ、キリカ、押さないでっ」

「ほらほら、早く教室に入ってノート写すんでしょ。きりきり歩きなさいっ」

まるで僕から桜井さんを引き離すかのように、ぐいぐいすんずんと先に進んでいく。

「わかった、わかったから。きりきり歩くから。きりきり……きりきりキリカ、なんちゃって……って、え、なんで加速！？ ああーん、弓月さん」

そして、ついには走り出し 賑やかな下級生たちの謎の電車ごっこは登校する水の森の生徒の間を抜け、そのままその先に見えて

きていた校門へと雪崩れ込んで姿を消した。

「……………」

元気なことだ。

僕としてはいつも通りのつもりだったのだが……。ふたりの様子から逆算するに、やっぱりおかしいのだろうな。

そうして放課後になって、とうとう佐伯さんからも改めて尋ねられた。

「やっぱり病院に行った日に何かあったの？」

矢神と宝龍さん、桜井さんと一緒に下校し、あの交差点で別れた後のことだった。

「いえ」

「”別に”とか”特には”とかはなしで

……………」

すっかり釘を刺されてしまった。

「ねえ、何かあったのならおしえて？ わたし、弓月くんのカノジ

ヨだよ？」

佐伯さんは心配そうに問うてくる。

僕はしばし考えてから、

「きつと誤魔化そうとしても無駄なんでしょうね」

「うん。弓月くんのカノジヨだもの」

僕が話しそうな素振りを見せたからか、彼女は先ほどと同じ言葉を返しながら明るい笑みを浮かべた。

ひと呼吸おいてから僕は口を開く。

「あの日、僕が病院で入院中の父の知り合いに会ったことは話しましたよね？」

「うん、聞いた」

「その人はもう長くないんだそうです」

「え……………」

小さな驚きの声。

僕もあの人の姿を思い出す。父よりも若いはずなのにひどくやつれた顔で、弱々しい笑顔を僕に投げかけてきた。

「僕は今まで身内や親戚の不幸に立ち会ったことがなくて、こういうのは初めてなんです。だから少し感傷的になっていいるのでしょね」

「そうなんだ」

それきり僕たちはしばらく黙って歩いた。

もう12月だ。放課後すぐの空はまだ明るいけれど、夕闇の気配がすぐそこまできている。きつと気がついたら真っ暗になっていたりするのだろう。

「辛いね、そういうのって」

ぼつりと、佐伯さんがつぶやく。

「そうですね。でも、君には関係のない話ですから、あまり気にしないでください」

そして、僕にも関係のない話だ。

「嫌な話を聞かせただけになってしまいましたね」

「ううん」

佐伯さんは少しうつむき加減のまま首を横に振った。

「それよりも、先のことを決めておきましょうか」

「年末年始のこと？」

今度は顔を上げ、首を傾げるようにして僕を見る。

「君、朝に自分で言ったことも忘れたんですか？ その前に大きなイベントがあるんでしょう？」

「あ……」

瞬間、佐伯さんの顔がぱっと明るくなった。そうだな。わざわざ僕の個人的な事情を話して、この顔を曇らせることもないだろう。

この後、残りの帰り道も帰った後も、クリスマスにはああしたいこつしたいと話は尽きなかった。

どうやらそうすぐには決まりそうにないようだ。

「弓月くん、ミニスカサンの衣装
いいですね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0860u/>

I'll have Sherbet!

2011年10月28日19時54分発行